

広島大学文書館オーラル・ヒストリー事業
「日常の中の被爆」プロジェクト 第4集

新井俊一郎オーラル・ヒストリー

ヒロシマで
被爆全滅を免れた
中学校1年生だった私は
当日入市被爆者です



広島大学文書館・75年史編纂室

表紙

[題字] 新井俊一郎

[写真] 被爆後の広島文理科大学付近

菊池俊吉・昭和20年10月頃撮影

(田子はるみ提供)

はじめに

単なるアーカイブスではなく、文書館という極めて学術的であり世間でも珍重がられるであろう組織が、広島大学に正規の組織として生まれようとしていた時期に、ふとしたご縁から、その開設準備室のスタッフと出会い、近く発足する見込みの文書館なる存在の意義と実務に少しずつ関わって行くうち、これは凄い組織の集団に出会って知遇を戴いて居るのだ、という実感を得て仰天したことを記憶しています。

未来永劫、ここ広島とヒロシマに関わる総てを研究対象とすべく、関わる総ての事象を調査し保存して行くとの、言うならば途方もないほど遠大な学術計画を持つ研究施設が産まれるというので興奮を覚えたものでした。

私に声がかかって来て困惑しました。著名な多くの方々が名を連ねているのに、少しも予想しておりませんでしたし、文書館には又もや仰天させられたなあ、という思いが溢れ驚いております。またそれが、兒玉光雄さんを第一号としてスタートしたプロジェクトであり、私が彼ら先達の後を引き継ぐ者に選ばれるなど、これまた思いもかけぬ光栄であります。

がしかし、はてさて私にその資格ありや、となるといささかの疑念あり、です。確かに被爆当日、爆心地から20キロ地点で閃光と猛煙の立ち昇るを見て、中学1年生だった私は徒歩で広島を目指し、当日の午後、東大橋から入市したうえ、大正橋からの場近くの段原大畑町を抜けて出汐町の自宅に辿り着きました。その夜は屋根の抜けた自宅で野宿し、翌7日は、これまた何も知らずに昭和町から富士見橋を経て、爆心地から1,420メートルと言われる東千田町の広島文理科大学玄関に到着。学徒動員令に基づく伝令の任務を果たして帰宅。翌日から数日の間、発熱と倦怠感で寝込みました。そうした私の行動に伴い、どうやら私は、考えもしていなかった量の残留放射線や二次放射線を浴びてしまったらしく、後年になってガンが多発しました。放射線とガンの専門医、広島大学の鎌田七男名誉教授によれば、2019年の染色体検査の結

果、当時の私は多量の放射線量を浴びていたと推定され、その結果として重複ガン、多発性ガンの発症に至ったものと診断されました。

1984年の右腎ガン全摘に始まり、左腎ガン部分切除、大腸ガン、前立腺肥大症の手術で切除組織からガン細胞を発見、左副腎の晩発性転移ガン、その術後検査で、僅かに残されている左腎臓に、またもや6番目と数えられるガンが発見され今日に至っております。

私が被爆時に所属していた旧制、広島高等師範学校附属中学校は、広島市内で開始された建物疎開作業の危険性を逸早く察知し、途中で私たち生徒を広島市郊外へと脱出させるべく、農業支援による食糧増産を目的とした農村動員出動に踏み切り、そのため、原爆により殆どの中学校、女学校が被爆全滅したにもかかわらず、附属中学校は残留組30人の犠牲を出したのみで、被爆全滅の運命を免れて生き残ることが出来たのです。

その中で私と4人の仲間だけは当日、伝令として広島市へ向かっていました。千田町の母校本部に、動員出動中の活動ぶりを報告する文書を届けるためでした。ところが八本松駅で列車到着を待つ間に8時15分を迎えます。猛烈な閃光に眼が眩み、遙か広島方面に火山噴火の如き猛煙が吹き上がったのです。やがて来た列車は次の瀬野駅で運行停止。全員下車させられて私たち5人は、燃え盛る広島へと徒歩で向かったのです。

かくて人類史上初の核兵器の猛威の前に広島は壊滅し、8月15日、敗戦の日を迎えました。かくて入学したばかりの私たちの学年は、特殊な国策学級を伴っていたことも手伝って、殆ど崩壊に近い状態に陥り、帰って学べき校舎も失い、ボロボロになった学校自体が東広島市地区を2年に亘って彷徨い、懐かしの母校跡へ帰還・復帰したのは昭和22年1月になっておりました。

この膨大な記録と証言は、かかる稀有な体験を身を以て受け止めて生きた、当時の12歳から13歳の中学1年生たちを代弁する、半世紀にわたる入市被爆者たちの苦闘記とご理解ください。

当の私たちは、被爆敗戦の直後から始まった生きるための必死の戦いの真っ最中でした。長じて大学へと進みながらも、学ぶことと喰うことが同価値と思えるような学生生活を送り、不景気風吹きまくる中を社会へと投げ出されました。それが昭和30年、1955年です。

それからが、目覚ましいと表現できるほどの日本の復興発展期の始まりです。そのど真ん中で、自分がヒバクシャである、などと考える暇もない人生いろいろの戦いでした。特別に自分が被爆者であるなどと認識したり再確認したりするようなことは皆無でした。私が入市被爆者として認定されていることは承知しておりましたが、冷戦が激しくなって、ヒバクシャという言葉が繁々ニュースなどに登場するようになって、それは未だ、自分とは関係のない外の世界のこと、としか受け取って居りませんでした。私とは関係ないし、私自身が被爆者なんだ、などと言う自覚が無かったと言えましょう。

重篤なガン患者が、又はその家族が、テレビのドラマか何かで、登場人物の誰かにガンの疑いが出て家族や両親が心配し悲しむ、というような場面が出て来る番組を見たいと思うのでしょうか。私は絶対に見ません。これだけ何度もガンを患って助かった私でも、積極的にガン特集の番組を見よ



私たち夫婦と長女純子一家

うとすることなんてありませんからね。

そんな状況のなかでも必要なのが、核兵器を無くせと世界に訴える運動です。そのためには核兵器というものが、どれほど人間にとって酷い殺戮兵器なのかを知って貰わないと、核兵器を無くせと叫ぶ理由が世界中に分かって貰えない筈です。

そいつの酷さを、とことん、見せて聞かせて知らせなければ分かって貰えない、という自己矛盾が存在します。ヒバクシャにはですね。それを突き抜けるには、並大抵の努力ではダメでしょう。証言しているヒバクシャは、その、並大抵では越えられない辛くて苦しい想いを、自分から進んで突き抜けて語り伝えているという事実を分かって欲しいのです。

こうして証言者は夫々のやり方で、堅いチャックを開いて語り始めています。それを受け継いで語り始めたのが、広島市認定の、被爆体験伝承者の人たち150人です。被爆者が激減しつつある現在、その実体験と思いとを引き継いで語り継いでくださる人々の組織が「被爆体験伝承者」です。

私を語り継いでくれるのは、老若男女12人の優れたグループです。いまや既に、伝承者たちの時代になったと言えます。彼ら彼女らの存在と活動が、いま最も期待されている時だと思えます。この組織と人材とを、大事に育て維持し継続して欲しいものです。

あの日、13歳の中学1年生だった私も、間もなく「卒寿」を迎えます。シッカと、あの日のヒロシマを証言してきた被爆者が毎年、毎年、その姿を少しずつ、しかし確実に消しております。

ある小学校の子供が上げた叫びに、私は背を押されるようにして、証言を続けています。

その少年の前に、私が姿を現した瞬間。

「ああっ、本物だ、本物のヒバクシャが来た」

まだ本物の被爆者と、あの日を語る本物の被爆者、と呼んでくれる人が居る限り、伝承者と共に、語り続け訴え続けたいと願っている私です。

令和3（2021）年8月

新井 俊一郎

目 次

はじめに	i	第4章 放送と出会った高校時代	84
目次	iii	・新制高等学校へ進学、放送班の創設	
新井俊一郎略歴	v	・ラジオドラマを放送	
凡例	vii	・台本や舞台装置は手作り	
掲載図版出典一覧	viii	・好評だった「芋虫カーリー物語」	
		・田辺昌美先生の思い出	
第1章 生い立ち～8月6日まで	1	第5章 演劇に打ち込んだ大学時代	95
・生い立ちについて		・広島大学政経学部に進学	
・広島への引っ越し		・演劇に打ち込む	
・戦時下の生活		・「夕鶴」を上演する	
・広島師範学校男子部附属国民学校での教育体験		・舞台監督など何でも屋	
・空襲への備え		・アマチュア放送劇団「あまがえる」から「ラジオ中国放送劇団」の創設へ	
・附属中学校への進学経緯		・NHK からの出演依頼	
・当時の附属中学校の状況		・ラジオ中国の誕生	
・入学直後の学校生活、授業		・ラジオ中国への出演	
・建物疎開作業への学徒動員			
・賀茂郡原村への動員疎開の経緯		第6章 ラジオ中国への入社	119
・原村での動員疎開生活		・ラジオ中国への入社	
		・ラジオ中国入社直後の仕事	
第2章 原爆被災	36	・「児童合唱団」を引き継ぐ	
・8月6日の体験（原村を出発）		・「新井幼稚園の創設」～児童劇団～	
・8月6日の体験（八本松駅）		・「広島ジュニアオーケストラ」	
・8月6日の体験（東大橋）		・番組～ウラおもて	
・8月6日の体験（広島市内）		・ラジオ番組の作り方	
・8月6日の体験（出汐町の自宅へ帰着）		・資料保存に失敗	
・8月6日の状況（補足質問）		・「ラジオ版、立体コント番組」	
・8月7日の体験（附属中学校への報告）		・ラジオドラマ「広島事件録」の思い出	
・附属中学校の被爆状況（大学南門の悲劇）			
		第7章 テレビ放送の開始と番組制作	150
第3章 敗戦後の体験	59	・テレビ放送の開始と東京での速成研修	
・8月15日前後の状況		・草創期の放送施設	
・秩父への一時避難		・放射線とガンを初めてテレビで告発	
・9～11月の附属中学校の状況		・テレビ開局サービス放送も実習材料	
・原村旧南部廠舎（兵舎）での学校生活		・公開オールナマ放送の番組で苦闘	
・昭和21年の状況		・失敗続きだった宮島からの中継放送	
・西条町吉土実小学校での学校生活		・なぜか電波が届かない?!	
・千田町への学校復帰		・電波が落ちた!	
・新学制への切り替え			

- ・海面の干満の差が事故の原因？
- ・初のテレビドキュメンタリー番組を
- ・テレビ専用スタジオの完成
- ・番組制作に必要な知識・技術
- ・テレビ・ファンタジー「夢女」
- ・テレビ「お母さん」シリーズに挑戦
- ・テレビドラマを狙え
- ・「ある勇気の記録」
- ・カラー放送初期の苦心談
- ・カラー観光編13本
- ・共同制作「見たい、知りたい」シリーズの思い出
- ・瀬野・八本松間の蒸気機関車を撮影
- ・多元生中継テレビショウ「ワイドサタデー」
- ・第61回「海は冷たかったか」～戦艦陸奥～
- ・第57回「お、神様」～出雲大社から～
- ・サーロー・節子氏との出会い
- ・スポンサー、視聴者との関係

第8章 管理職への異動～定年退職…………… 220

- ・報道部長に就任
- ・新藤兼人監督との共同企画 ～「ドキュメント 8・6」～
- ・映画「原爆の子」
- ・経理部長への異動
- ・定年退職後の仕事

第9章 アカシア会（広島大学附属中・高等学校同窓会）とのかかわり…………… 234

- ・アカシア会の歩みと長谷川乙彦主事の教育理念
- ・戦後のアカシア会
- ・月例アカシア懇談会
- ・アカシア会への参加、藤居平一氏との出会い
- ・70周年記念行事を企画・運営
- ・80周年、85周年記念行事も担当
- ・90周年行事での募金集め
- ・旧校歌か、新校歌か
- ・アカシア会組織の運営

- ・会長の仕事、アカシア会での藤居平一氏

第10章 同期の仲間「アカシア41期会」…………… 256

- ・私たちの戦争体験
- ・意識の変化
- ・『昭和二十年の記録』を出版
- ・仲間の消息調査と謝恩碑
- ・「謝恩碑」の建立経緯
- ・母校に慰霊碑を建立
- ・第1回慰霊式典を開催
- ・故新久和俊君の令兄からの電話
- ・同期生同士の交流
- ・最後の「原村詣で企画」

第11章 被爆体験証言活動の開始、続発するガン…………… 288

- ・被爆体験証言活動の開始
- ・次女の急逝
- ・被爆体験証言と核兵器・原子力
- ・私が浴びた放射線量とガン
- ・「運が良かった」は禁句
- ・被爆体験伝承者養成事業へ協力
- ・入院騒ぎからガンへ
- ・特別被爆者に認定
- ・追補：インタビュー後の病歴
- ・追補：入院中のNHK ネット炎上騒動

第12章 証言を残す思い、証言を託す思い…………… 323

- ・証言を残す思い
- ・消えた旧友たち、中澤克彦君との劇的な再会
- ・証言活動への反響
- ・級友、沓木明君のこと
- ・級友、新久和俊君のこと
- ・級友、正木義虎君のこと
- ・証言に託す思い

新井俊一郎 略歴

昭和6年11月18日 (1931)	父の赴任先である山形県西村山郡谷地町で長男として出生。父は新井嘉之作、母は新井つる。
昭和13年4月	大分市金池小学校に入学。
昭和14年11月	埼玉県秩父郡日野沢小学校へ転校。
昭和15年11月	広島県師範学校附属小学校へ転校。
昭和20年4月	広島高等師範学校附属中学校に入学。
昭和20年8月	動員出動先の賀茂郡原村から伝令として帰省し、入市被爆。
昭和23年4月	広島高等師範学校附属高等学校に入学。
昭和26年4月	広島大学政経学部政経学科経済学専攻に入学。
昭和30年3月	株式会社ラジオ中国（現 RCC 中国放送）に入社。 ラジオ制作課に勤務。
昭和34年4月	テレビ放送開始にともないテレビ制作課とラジオ制作課を兼務。
昭和38年11月	テレビ演出課長
昭和46年11月	テレビ制作部長
昭和48年7月	ラジオ制作部長
昭和51年8月	報道部長
昭和55年8月	経理部長、および関連会社監査役を兼務。
昭和56年8月	被爆全滅から命を救われた母校へ「謝恩碑」を建立。
昭和59年8月	経理局次長、兼経理部長。
昭和61年8月	総合企画室次長
平成3年11月 (1991)	RCC 中国放送を定年退職
平成4年1月	CCV 中国ケーブルビジョンのディレクターに就任 (～平成8年)。
平成8年3月	東広島ケーブルメディア顧問に就任 (～同年末、非常勤顧問となる)。
平成12年7月	被爆から救って戴いた原村に「感謝の碑」を建立。
平成18年4月	広島平和文化センターの「被爆体験証言ビデオ」に応募。
平成22年4月	平和文化センターから被爆体験証言者を委嘱される。
平成24年4月	広島市から委嘱され、被爆体験伝承者養成事業の講師に就任。

非常勤講師等

広島大学教育学部東雲分校の非常勤講師を兼任（昭和45年4月～昭和51年9月、テレビで多忙となり辞任）、鶴学園附属情報専門学校講師（昭和63年10月～平成6年3月）、広島修道大学非常勤講師（平成3年4月～平成13年12月、発病に付き辞任）、広島比治山大学非常勤講師（平成6年4月～平成13年11月、発病に付き辞任）。

社会活動

広島大学附属中・高校同窓会「アカシア会」常任幹事～事務局長～顧問、広島大学附属中・高校同窓会「アカシア会」同期会「アカシア41期会」世話人～事務局長、邇保姫神社神徒会会長、広島市南区東雲本町三丁目長寿部会副会長

凡 例

1. 本報告書は、広島大学文書館（以下、文書館と略）および広島大学75年史編纂室（以下、75年史編纂室と略）が、令和2年4月22日から令和2年5月29日までに共同で合計8回行ったインタビュー記録をもとに作成したものである。
2. 本報告書に収録したインタビュー記録の中には、国籍・職業・身体・性別等による差別的表現・記述や、プライバシーを侵害する可能性のある記述がある。しかし、歴史的事実を正確に記録し、かつ科学的な歴史研究を推進することによって、基本的人権の擁護をを図ることを目的として収録した。本報告書の利用に当たっては、この趣旨を理解された上で調査・研究に役立てることをお願いしたい。
4. 本報告書の作成に至る作業過程は、以下の通りである。
 - (1) インタビューにあたってはICレコーダーによる録音と、ビデオカメラによる撮影をおこなった。
 - (2) 上記の録音物をそのまま文章化し、それを75年史編纂室がチェックして原稿（一次テキスト）を作成した。
 - (3) 上記の一次テキストを新井俊一郎氏が校訂した。校訂にあたっては、新井氏本人が、一次テキストのデータをパソコンで直接編集し、公開用原稿（二次テキスト）を作成した。
 - (4) 上記の二次テキストを文書館および75年史編纂室が校訂した。校訂にあたっては、誤字・脱字の訂正、表記のゆらぎの統一、常用漢字への字体の統一を行った。あわせて疑義のある部分は、新井氏に直接確認した上で修正を行った。
 - (5) こうして完成した二次テキストを簡易製本し、文書館での公開用原稿とした。
 - (6) 上記の公開用原稿をもとに、75年史編纂室が証言内容の重複の削除、年代にあわせた証言の再配列などの編集を行った。この編集済みの原稿を新井氏が確認し、本報告書の原稿とした。
5. インタビューと本報告書の作成は石田雅春と伊東かおりが担当し、原稿の校訂作業は坂田千尋、戈穎昇他が担当した。また、録音データの文字起こしはふみ工房がおこなった。

掲載図版出典一覧

No.	出典
1～3	新井俊一郎氏提供
4	広島大学附属東雲小・中学校
5	広島大学文書館（以下、文書館と略） 蔵「新井俊一郎関係文書」
6	新井俊一郎氏提供
7	広島大学附属東雲小・中学校
8, 9	新井俊一郎氏提供
10	正木孝虎氏提供
11	広島大学原爆死歿者慰霊行事委員会 編『広島大学原爆被災誌 生死の火』 （広島大学、昭和50年）
12	文書館蔵「大牟田稔関係文書」
13～15	「昭和二十年の記録」刊行委員会編 『昭和二十年の記録：全滅を免れた 附中一年生』（広島高等師範学校附 属中学校・広島大学広島高等師範学 校附属高等学校第四十一回生同期 会、昭和59年）。以下、『昭和二十年 の記録』と略。
16	新井俊一郎氏提供
17	広島平和記念資料館
18	新日本出版社
19	『昭和二十年の記録』
20～22	新井俊一郎氏提供
23	国土地理院
24	広島平和記念資料館
25	広島市公文書館
26	広島平和記念資料館
27	「原子爆弾被災状況 広島市街説明 図」『広島原爆被災誌』（広島市、昭 和46年）をもとに作成。
28～31	広島平和記念資料館
32	新井俊一郎氏提供

No.	出典
33～36	広島平和記念資料館
37	アカシア会（広島大学附属中・高等 学校同窓会）
38, 39	広島平和記念資料館
40	アカシア会
41	新井俊一郎氏提供
42	広島平和記念資料館
43	新井俊一郎氏提供
44	広島平和記念資料館
45	新井俊一郎氏提供
46	『昭和二十年の記録』
47	新井俊一郎氏提供
48, 49	『昭和二十年の記録』
50	アカシア会
51	文書館蔵「新井俊一郎関係文書」
52	『昭和二十年の記録』
53～56	新井俊一郎氏提供
57	文書館蔵「新井俊一郎関係文書」
58～61	新井俊一郎氏提供
62	文書館所蔵「新井俊一郎関係文書」
63	新井俊一郎氏提供
64～66	文書館所蔵「新井俊一郎関係文書」
67	株式会社中国放送
68	新井俊一郎氏提供
69	株式会社中国放送
70, 71	新井俊一郎氏提供
72	株式会社中国放送
73	新井俊一郎氏提供
74	株式会社中国放送
75～77	新井俊一郎氏提供
78	株式会社中国放送
79～82	新井俊一郎氏提供
83～85	株式会社中国放送

No.	出典
86～88	新井俊一郎氏提供
89, 90	株式会社中国放送
91～93	新井俊一郎氏提供
94	株式会社中国放送
95	新井俊一郎氏提供
96～98	株式会社中国放送
99	新井俊一郎氏提供
100, 101	株式会社中国放送
102	新井俊一郎氏提供
103, 104	株式会社中国放送
105	新井俊一郎氏提供
106～109	株式会社中国放送
110～118	新井俊一郎氏提供
119	株式会社中国放送
120	新井俊一郎氏提供
121	株式会社中国放送
122	新井俊一郎氏提供
123	株式会社中国放送
124	新井俊一郎氏提供
125, 126	株式会社中国放送
127～140	新井俊一郎氏提供
141	株式会社中国放送
142～145	新井俊一郎氏提供
146	アカシア会
147～158	新井俊一郎氏提供
159～161	広島平和記念資料館
162～164	新井俊一郎氏提供
165	『昭和二十年の記録』
166～169	新井俊一郎氏提供
170	『昭和二十年の記録』
171～183	新井俊一郎氏提供
184	文書館所蔵「新井俊一郎関係文書」
185	広島平和記念資料館

No.	出典
186	鎌田七男氏提供
187～194	新井俊一郎氏提供
195	タウンニュース社
196	文書館所蔵「新井俊一郎関係文書」
197	日本写真保存センター
198	正木孝虎氏提供

第1章 生い立ち～8月6日まで

生い立ちについて

○**新井** 改めて自己紹介しましょう。詳しいことは別冊の自叙伝があるので省きます。

名前は、新井俊一郎(あらい・しゅんいちろう)。生年月日は1931年、昭和6年11月18日、当年とって8歳と6カ月です。生まれたのは広島ではありません。父と母が結婚してすぐの昭和6年に、父が女学校の教員として初めて赴任した山形県の西村山郡谷地町で生まれました。

父の新井嘉之作(あらい・かのさ)は東京帝国大学文学部を昭和6年に卒業したものの、有名な大学は出たけれど、就職先がない、という大不況真っ盛りの時代なので、恩師の先生から紹介していただいて、山形県のちょっと田舎のほうの女学校だが、そこへ行きなさいということで、東京帝大新卒での赴任先が、山形県の谷地高等女学校です。

赴任した昭和6年に私は生まれます。ということは、今どきで言うならば、出来ちゃった結婚だったのでしょう。赴任した現地でも結構話題になったようです。可愛い赤ちゃんが生まれた新しい男の先生が来た、というので有名になったようです。しかも高等女学校ですから、女子の生徒方がいっぱい居るという訳で、後年、平成11年11月26～29日、現地を訪ねて行ったら、出会えた教え子たち5人は、まだちゃんと覚えていてくれました。

そこで父が何を教えていたかということ、東京帝国大学では文学部西洋史学科 英国農村経済史を専攻していたはずにもかかわらず、得意だった英語のほか、歴史と地理を教えていたようです。

父は典型的な大正の苦学生で、小学校だけで中学校は出ておりません。小学校を卒業してから苦学しながら旧制中学卒業の資格を取って、それから旧制の松本高等学校を受験して合格。松本の旧制松本高校でシッカリ青春時代を謳歌して卒業。念願の東京帝国大学の文学部に合格したのです。実は松本高校時代に生家が養蚕業で失敗。父への仕送りが困難な状況に陥ってしまっていたので、悩んだすえ思い切って野村奨学部に応募したところ、学校での成績も、提出した奨学金申請書も、共に素晴らしい成績と筆跡であったことからか即座に

認められ、大学に進学してから支給、との条件で、返還無用の野村奨学金を給付して貰える程に優秀だった模様です。保証人は東京帝大の恩師、村川堅固教授であり、先生宅へ自筆の書類を持参したところ、「これはうまい、息子に見せよう」と、家の奥へ持って行かれたとの逸話が残ります。早くから父の東京住まいは長かったので、御徒町とか神田神保町の名前を良く聞かされたものです。とりわけ秋葉ツ原(あきばっばら)という、江戸っ子でも巧く使いこなせない東京弁で町名を呼んでいたのが珍しかった。江戸住まいの長い、典型的な大正の苦学生だったと言えるでしょう。

○**石田** 何ヶ原ですか。

○**新井** 本来は秋葉原(あきはばら)と言うべきところ、ちょっと訛って、秋葉ツ原(あきばっばら)と呼んでいましたね。現地に長く住み込んで、出版社や東京通信局の雇員などをやりながら苦学してたから江戸っ子弁が身に付いたのでしょう。

母は父と同じ出身地の、秩父の日野沢村でも山の中腹にあった、落人の末裔と伝わる旧家・高橋家の次女で高橋ツルと申します。父と母は同じ埼玉県秩父郡日野沢村の出身で、父は谷底の沢辺という集落、母は山の上の大神という集落で、二人とも実は地元小学校での同級生なのです。当時としては明治の大恋愛だとして有名になったようで、父の一番下の弟で私と一まわり年が違う昌夫叔父さんは、後年に至るまで随分色々な逸話を話してくれました。「俊ちゃん、知ってるかい?」と言う訳です。「君のお父さんとお母さんは大恋愛でね、こっそり俺がラブレターの運び屋をやらされたんだよ、キューピット役だよねえ」とね。

そういう具合で両親は、昭和6年3月31日に父が東京帝国大学で卒業式に出席した後、有名な三四郎池の畔で、今も我が家に残る記念写真を撮影し、4月3日に高橋ツルとの結婚式を挙げるとすぐ、遠く山形県へと赴任して行ったわけです。

後年、私は秩父の同じ村に戻って同じ小学校に転入するのですが、そういう慌ただしい結婚式を挙げたうえで山形県に赴任。その地で私が生まれます。生まれたのは11月18日ですから、東北地方の山形としては完全に寒冷期。しかも生まれた時の私は、母の表現では、「片手の掌に乗っかってしまうほどに小さな」7カ月足らずの未熟児だっ



1. 東京帝大を出て谷地高等女学校へ赴任した父と、誕生間もない私

たのです。つまり完全な早産児で、窓や戸の隙間から粉雪が吹き込んで来る中で未熟児の7カ月児。とても育たないと言われた赤子の私でしたが、執念と言われる程に必死な母の子育てのお陰で、私はこの世に生を受けました。

そういうわけで私は最初から、命懸けの場面を幾つも潜り抜けて来て今がある、というような生き方が続いたのです。後年の原爆だってそうです。ガンの手術もそうです。毎年のように繰り返す肺炎もそうです。そういう意味で41期会の仲間内から、また親戚からも、「俊ちゃんは命強いね」と言われて来ました。さて、何時まで、この命強さが続くか分かりませんが、私はそのすべてを語り尽くしておきたいと思って、文書館からのご依頼にお応えすることにした次第です。

生まれた時がそんな状況だし、子どもにとっては危ないというので父は考えます。こんな未熟児で寒い所に住んで居たのでは、この子は育たない。自分自身も体調があまり良くない父だったので、では南の国に学校を替わるかというので、また恩師の村川堅固先生のお世話を戴いて翌年の11月、

一挙に暖かい南国の九州は大分市、大分中学校に転任します。ところが、その引っ越しの騒ぎで、また私は肺炎に罹って生死の境をさまようのですが、また奇跡的に回復して父母を喜ばせたのです。

取り敢えず大分に落ち着き、昭和9年には弟も生まれ、やがて私は大分市金池小学校に入学しま



2. 大分市金池小学校へ入学

す。その頃から父は、突然に強烈な激痛に襲われるようになりました、昭和12年7月11日です。のちに胆石症と分かるのですが、当時は地元の医者が誤診をして、胆嚢炎らしいから手術をしろ、ということになったのです。猛烈な激痛が繰り返し、意識も混濁するなかを父は緊急入院し、全身麻酔の中で手術を受けました。しかし予後も悪く、再手術に踏み切ります。二度目の手術だから全身麻酔はダメだという。局部麻酔下での「胃拡張手術」だとか。それでも父は激痛に耐え奇跡的に命を取り戻しました。子供心に私も父の大事を認識していたのでしょう。その場面に夢に見ることしばしばでした。病院食の「大根おろし」の残りが美味しかった、との記憶も鮮烈です。12月13日だったかな、病院前の商店街を南京攻略を祝う提灯行列が、「万歳万歳」と賑やかに通り過ぎるのを、病室から見に飛び出たという記憶があります。父の病名は「穿孔性胆嚢炎」とのことでしたが、このときの病院名が古川病院。現在、広島での我が家の親子二代にわたる家庭医が、奇しくも同じ名前の古川医院です。

命は取り止めたものの予後が宜しくないと言うので父は、思い切って、故郷の秩父へ帰って養生しようということに決めました。昭和14年12月、別府港から汽船に乗って神戸まで行き、埼玉県の秩父まで列車を乗り継いで帰るといふ、当時の新井家にとっては大冒険を為し遂げました。そして私も、秩父の日野沢小学校2年生へ編入しました。

実は当時、私も同じように体調を崩していて肺浸潤という診断が下っており、療養しなければならないというので自宅で寝ている時間が長かったので、本を読む楽しさを知るようになりました。そのために、小学校2年生を2回繰り返す留年となったのです。だから私は、生まれは昭和6年ですが、学齡的には以後、昭和7年組と同じ学齡を辿ることになります。

広島への引っ越し

○新井 秩父で約1年ほど療養して、父も幾らか元気になったのでしょう、今度は広島師範学校から来てくれないかというお招きを頂戴します。昭和15年秋、先ず父だけが広島に行き、様子を見て借家も決めてから戻って来て、次いで一家揃って



3. 秩父から広島へ出発（長瀨峽）

広島に移住したのが昭和15年11月29日です。

平屋建て庭付きの借家は、広島市出汐町700番地です。その地名番地は、被爆と結びついてシッカと今でも覚えております。現在の地名は、南区出汐3丁目7-11。具体的に場所を説明しますと、広島に宇品線という軍用列車の路線がありましたが、その宇品線の上大河（かみおこう）駅の近くで、駅の前には陸軍被服支廠が、少し北の比治山駅前には陸軍兵器支廠があり、その二つの重要軍事施設に挟まれた、ちょうど両側から囲まれた場所に私の自宅がありました。その「上大河駅」を軸にして直径百米の円を描いた範囲内に、私と、一中の生き残りで、2020年10月28日に亡くなった兒玉光雄君、のちに被爆死する級友の正木義虎君、附属小学校での恩師・早瀬完一先生の4人が住んでいたという事実も、単なる偶然なのでしょう。

父が広島師範学校に赴任したので、私は、その附属国民学校、初めは小学校だけど途中から国民学校に変わりますが、その附属小学校に難なく転入を許されます。昭和15年当時、広島師範学校と同附属小学校は、完成したばかりの比治山橋の南たもとの皆実町に在りました。古色蒼然たる学校で、最初の受け持ちの先生は川崎員登先生、次が貫名忠義先生、最後は早瀬完一先生でした。帽子に白線が入った目立つ制服姿だし、少しオシャレな小学校だな、という感じでした。転校したのは秋でしたが、年が替わって昭和16年になって、春の園遊会では校庭に出店が出たり、お汁粉を売ったりする賑やかな学校祭があったのも覚えてます。

それと同時に、昭和16年になると学校が移転し

ます。初めから決まっていたようですが、現在地の広島市東雲町の猿猴川のすぐ脇の地帯に広島師範学校と附属小学校が揃って移転をします。昭和16年7月19日に本校も附属も、揃って学校が東雲町へ移転しました。小学校3年生になっていた私たちも、小さな椅子を皆実町から東雲町まで担いで運んだ覚えがあります。よくもまあ、小さな子どもが荷物を運んだものだと思いますが、結構な距離がありますからねえ。移転して、師範附属は東雲町の住人になります。自宅は出汐町ですから、今度は出汐町から方向を変えて、東雲町まで一面蓮根畑の田舎道を通学し始めた訳です。

そして昭和16年12月8日、戦争が始まります。ラジオの臨時ニュースを聞きましたが、父は顔色が真っ青になって、「大変なことになった」と言っていたのが印象的でした。なぜならば、他の人たちのように、「戦争が始まった。真珠湾攻撃は大勝利だ、万歳、万歳」というような雰囲気ではなかったからです。なぜか私も冷静でした。「大変なことになった」という、父の言葉の意味もよく分からなかったけれど、実感はないまま、戦争だなんてホントに大変なことになったと思っておりませんでした。

○石田 一つ質問させてもらってもいいですか。日野沢小学校から、いわゆる田舎の学校から県師範という都会の学校に移ったのですが、勉強とかはどうでしたか。あと、周りの子の様子とかは。かなり差があったと思うのですが。

○新井 はい。最初に大分市から秩父に替わったとき、街の学校から来た子どもだ、というので特別な目で見られていたし、服装も私は洋服だけど、同級生のほとんどは着物に草履姿でした。言葉も秩父は関東弁ではありますが、根本は田舎言葉の「ダンベエ」言葉なのです。一方、私は両親ともご当地の秩父出身ですが、家庭での会話は標準語でした。おまけに大分在住だったのですが、偶然ながら大分も広島も、瀬戸内沿岸の都市ですが用語は不思議にも関東系の用語であり、関西系ではない。

私の、日野沢小学校での成績は全科目が甲。いわゆる「ゼンコウ」と呼ばれる、成績優秀な子どもだったようです。成績の良い順に、上から甲、乙、丙、丁と呼んでいた時代の話ですが、それで妬ま

れましてね。秩父地方は、「石を投げたら新井にぶつかる」ぐらい新井という苗字が多かったのですが、遠い親戚に当たるらしい級友の新井某君に小刀で手の甲を切られました。何が原因だったかなど、すっかり忘れましたが、転校して間もない時期に、そんな刃傷沙汰が起こったほど、私は目立っていたのでしょう。改めて大分市は大会だったのかなあと、のちになって、ほろ苦く思い出したものです。なにせ秩父は両親の出身地である田舎のことだから、親戚もいっぱい居るし、従弟たちは庇ってくれますし、何しろ校長先生その人が母方の伯父さんだし、音楽の先生も母方の叔母さんだし、当初は少しトラブったけど秩父時代は私にとっては非常に住み心地が良かったのです。でもやはり、都会から来た子、というので別格の目で見られたことは間違いなくと思います。しかし今となっては、みな懐かしい友達だし、時に秩父へ帰った折など会いに来てくれる子も居ます。嬉しいし有難いと思っています。かつての級友も数少なくなっていますが、私は自分勝手に、秩父こそ我が故郷と思っております。

さて、次は、秩父という田舎の学校から広島市という都会への転校に伴う私の成績の評価と、新しい級友からの評判について、ですね。結論から申しますと、ほとんど変化なしと言えます。

私が秩父で暮らしたのは、ほぼ1年間です。今度は広島に転校したときの反応ですね。広島に来た途端に感じたのは言葉の違いです。

○石田 広島弁ですね。

○新井 はい。それまで私は山形県に居たけれど、これは生まれたばかりだから山形弁は知りません。ところが父が、しきりに話してくれる逸話がありました。赴任して山形の駅に着いた途端、駅の構内放送が、「落ちた人が死んでから乗ってください」と言うのを聞いて仰天したそうです。でも、よくよく耳を澄ませて聞いたところ、「降りた人が済んでから、乗ってください」と言っていたんだと分かったそうです。父は苦笑いしながら、思い出話をしてくれました。身の周りすべてが東北弁だったけど、父も母も山形弁には染まらなかったし、なにせ聞き取れないのだから染まるはずも無い。東北弁の影響はゼロでした。

山形から移った大分市は、これまた不思議なこ

とに、大阪より西なのに、言語学的には関東系の言葉を使う地域なのですね。だから私たちは、大分市でも常と変わらぬ日常会話が出来ました。言葉の問題で困ったことも、不自由なこともありませんでした。

一方、埼玉県は有名な「だんべえ」言葉です。典型的な田舎弁です。「俺」「おめえ」という言い方をするなど乱暴な言葉づかいだけど、基本的には関東方言ですから、イントネーション、アクセントはほとんど江戸っ子弁と同じ。「だんべえ」言葉さえ抜ければ、言葉としては江戸っ子弁の流れです。

そして広島に来ましたら、これも不思議なことに、広島も瀬戸内海沿いであるせいでしょうが、言語としては関東系の言葉使いなのです。

でも広島では、言葉の問題で級友から盛んにかかわれました。秩父では言葉でからかわれたことは無かったけれど、広島に来たら言葉でからかわれました。だって私は、東京弁の「ちゃった」言葉を使っていたからです。「食べちゃった」「行っちゃった」という完了を意味する言葉を使うわけです。ところが、広島弁の「ちゃった」言葉は、敬語なんですね。「先生が言っちゃった」とか、「お食べになった」の意味で「食べちゃった」と言う。同じ「ちゃった」言葉でも、用法が全く違うわけです。そんなところから、私は言葉の上でずいぶんからかわれました。逆に私にとっては、奇妙で不思議な用法の広島弁には困らされました。私が逆に広島仲間をからかったことも多々ありました。「いぬる」なんて分からないし、「みてた」は解説を聞いても難解。会話自体が成り立たない。「ほけ」と「突っ込み」流に表現すると、広島弁が耳に入ったら、私の方から「突っ込み」ましたね。「それ、なんや」とね。



4. 山羊を手前に遠望する県師校舎

埼玉県の秩父の山の中から来た訳だし、言葉は東京弁みたいだけど、ちょっと奇妙な言い方もあるが、恰好だけは都会風だから「まあ、いいか」という具合で仲間入りさせて貰えた、と言う感じで受け入れて貰えました。

学業の点では、事実上、大きな差は無かったと思います。なにせ小学校2年生での仲間入りですから、お互い大きな違いは無かったし、言葉の違いを笑い合った位で済みました。いじめ、なんて全くナシ。お山の大将は居ましたが、チビッコヤクザじゃないけど、最低限の仁義は心得たガキ大将だったと言うところでしょうかね。

それからというもの、戦中・戦後を一緒に生きる間柄、いうならば戦友仲間という関係で過ごして行く仲間になって行きました。あっという間に、そこまでお互い馴染んでしまったと言えます。

○石田 勉強などでは苦勞されなかったんですか。
○新井 苦勞しませんでした。なぜか分かりませんが、ちゃんと付いて行けました。それまで秩父の田舎の学校で教わって来たことが、広島でも大差なく通用しました。まあ、小学校2年生だから、そう大きく違いはなかったのだと思いますが、勉強のことで苦勞した覚えはほとんどありません。

しかも広島の学校の先生方、貫名忠義先生や川崎員登先生という担任の先生方が、さすが一流の先生方で良くして戴きました。のちに早瀬完一先生が、ずっと担任として6年生まで見てくださるのですが、家も近くに下宿していらっしやっただので、可愛がって戴いたし教えて戴いたので、そういう面での苦勞は全くありませんでした。

戦時下の生活

○新井 さて、これから話は戦争中の暮らしに移ります。昭和18年4月1日、学校名が変わります。それまで本校は県立師範学校だったのが官立になります。今で言うなら国立ですね。だから、官立広島師範学校男子部となり、附属も同附属国民学校となります。父も広島師範学校男子部の教諭なのか教授なのか何れかに任命され、判任官とか勅任官、高等官などという身分になった模様です。給料に直接影響するらしく、そんな話を母としていたのを子ども心に覚えています。

戦争が始まります。当時は大東亜戦争と言って



5. 教生との記念写真
(昭和18年春、5年生)

いました。私も昭和16年12月8日朝のラジオ。「本八日未明…」というのは聴きました。学校に行ったら、賑やかに「戦争だ、戦争だ」という騒ぎになっていました。私は、それほどびっくりした感じではありませんでしたが、何だかとても不安でした。だって、アメリカってどんな国かもほとんど知りませんし、なぜ戦争になったのかも良く分からない。ただ世界中が相手の戦争になって行くみたいだから、これはえらいことになったな、というのは何となく感じておりました。

そして、1学年ずつ学年が進んで行き、年を経るごとに日本の戦争状態が変になっていくということは、子どもながらも分かっておりました。

○石田 例えば、どういった点で感じられたんですか。

○新井 初めごろの真珠湾攻撃とかシンガポール占領、それからプリンス・オブ・ウェールズ、レパルスの撃沈までは、「大戦果、万歳、万歳」だったんですね。ところが暫くすると、昭和18年に入るところからだったかな。極端な物資不足、米など配給制度の拡大、軍隊の激しい移動、兵器廠の対空機関砲が木製の偽物に変わる、ニュースでも勇ましい戦果が乏しくなる、お寺の鐘をはじめとして金属類の供出だとか、防空演習の開始だとか、なにやら急激な状況悪化です。私が何年生だったのかな、同級生に海軍の高級将校の息子が居て、広島湾で戦艦「陸奥」が沈んだらしいぞ、という噂がクラス中に流れました。日本の戦艦「陸奥」といったら、連合艦隊司令長官が乗る旗艦じゃないか。えらく大変な死人が出たらしいぞ、と伝わって来て、これは大変なことになったぞ、と思いま

した。

それから間もなく、日本の航空母艦が何隻も沈んだらしいぞという情報が流れ、少年雑誌に空母「赤城」が沈んだとき、艦長も沈みゆく空母と運命を共にした、という武勇談めいた記事が堂々と載ったのです。「やっぱり」と思いましたねえ。国内で販売されて人気のある少年雑誌に、有名な我が国の空母が沈んだ、と公表された訳ですからね。【注記：記憶違い。正しくは「赤城」ではなく「飛龍」の加来艦長の実話から。】

父は学校での授業が打ち切られ、師範学校の生徒を引率して、呉市などへの泊まり込みでの学徒動員に出動するという、新たな任務が始まりました。もう授業などしておられる状況じゃない、という訳でしょう。呉の海軍工廠に全員で合宿して、そこにある巨大な造船所で働かされるようになりました。何をやったかというのを、こっそり教えてくれました。物凄い巨大な軍艦を造っているぞ。俺たちは、その手伝いをしろというので、その職工たちにこき使われている。可哀そうなくらいに学生たちはこき使われている。このことは最高軍事機密らしいが、近くを走り抜ける呉線の列車は、全部の窓にシャッターを下ろして走っているし、巨大な造船所の周囲には、上から下まで一面に簾を吊り垂らして見えないように隠している、ということをお父さんから聞き出しておりました。

ただヒトツ、絶対に分らなかったことがあります。その、戦艦らしい巨大な軍艦の名前です。今でこそ有名になりましたが、呉の海軍工廠で完成したのは戦艦『大和』でした。この名前は、戦後になって初めて知ることになる訳です。

呉では仕事が辛い代わりに、作業に従事する者には軍から特別に、食い物中心のご褒美が支給されるらしいのです。ときどき父は、搗きたての餅が配られたとか、特別配給でお米が配られたと言って、泊まり込んでいる呉の海軍工廠から、普段お眼には掛かれなような特別配給品を持ち帰ってくれました。これが何とも言えず、我が家にとって有難い贈り物でした。親戚一軒もない広島で、地元出身でなく「旅の一家」である私たちにとって、またとない恵みの品でした。

しかし頼れる先が、もう一か所ありました。生徒さんです。父には知人も少なく親戚もない。遠

く埼玉から来てくれた帝大出の先生だ、と知って、なにくれとなく暮らしのお世話をしてくださる教え子の生徒さんが居て、父を囲む「蒼空会」を結成して下さったのです。世話役の橋本亘という先生のお名前を覚えています。菅原二郎先生は、放送作家となって後年、私の前に現れ驚かされました。吉岡一郎先生は後年、附属中・高校の校長となって、アカシア会事務局長の私とコンビを組み、創立80周年記念事業を推進しました。そういう先生方からの支えもあって戦時中は、何とか生きていたような状態でした。それぐらいに、もう日本中が食べることで大変な時代になって来ます。

広島師範学校男子部附属国民学校での教育体験

○新井 私は、広島師範学校男子部附属国民学校の6年生第12学級を卒業しました。この師範学校は、かつては広島県師範学校と言っていたので、俗称「県師」（けんし）と呼ばれており、だから私たちは「県師の附小」と俗称されています。高師のほうは「高師の附小」と言って区別しています。

平和記念資料館あたりでは、その辺の区別が明瞭でなかったらしく、戦没学徒動員の特別展示会の時には、附属学校名が大混乱で間違っ表示されておりました。あのとき、私が訂正を申し入れたのですが、広島大学に附属学校というのは三原市にも福山市にもありますし、幼稚園も含めると全部で12あるんだそうです。それが、昔が何という学校名だったか、それが現在は何という学校名に変わったか、などについて、きちんと分かる人が少ないらしい。

通称「県師」。現在は、広島大学学校教育学部附属東雲小学校となるべきところが、学校教育学部という学部が消えてしまったので、いまは単に、広島大学附属東雲小学校・附属東雲中学校となっています。付け加えますが、東雲小学校に昔は中学校が付設されて居ませんでした。戦後の学制改革で、東雲にも附属中学校が新設されたのです。私の弟は東雲小学校と東雲中学校の双方を出ましたが、私の時代には中学校はなかった。ですから当時は国民学校と呼ぶことになっていたもので、昭和20年3月、私は広島師範学校男子部附属国民学校を卒業しました。

担任の先生は早瀬完一先生。師範学校を卒業して教員になるためには、当時、短期教育とかいう軍事教育を受ける必要があった模様です。文書館には、「劫火の跡」（早瀬完一『子孫におくる劫火の跡』平成17年11月再刊）という冊子を提供しました。簡易印刷の小さなパンフレット。その中に書いてありますが、短期現役兵…これで海軍式の訓練を受けたのが担任の早瀬完一先生だったので。先生の年齢は私たちよりも一回り上かな。つまり兄貴分という感じですべてが海軍式。若くて細身で長身の早瀬先生に私は、小学校3年生から卒業まで、ずーっとお世話になりました。この小冊子を早瀬先生から戴いて、初めて先生の被爆状況の詳細を知りました。

当時は登校中に直接被爆して全身火傷のまま行方不明、という噂が飛んで来て不安に苛まれたものでした。早瀬先生は、原爆から奇跡的な生還をなさったのです。そのほかに戦時中、短期教育現役兵とかいう必修の軍事訓練で、とんでもなく理不尽なシゴキを兵士たちから受けた経験をお持ちだったという事も初めて知りました。理解ある上官の存在が状況を変えてくれたようですが、早瀬先生までが軍隊特有の暴力集団の犠牲となりかけた事実が許せません。先生の優しさを、とりわけ嬉しく感じながらご体験を読ませて戴きました。

先生ご自身は、決してご自分から話そうとはなさりませんでした。そのことの重さを痛感しています。

県師の附属では、担任の先生は途中交代せず、ずっとそのまま持ち上がりです。クラス替えはありません。なぜかというと、男子組は1学級しかないんです。女子組も1学級しかない。2年生までは男女共学ですが、3年生からは男子組・女子組で別々になるから組替えの必要がない。だからそのまま、全てが持ち上がりです。

従って、早瀬先生とは、私の場合は4年間びっしり付き合わせて戴きました。しかも、出汐町の私の自宅の一つ裏の路地に先生の新婚のご自宅があったので、私は可愛がっていただきましたし、私は父が師範学校、つまり親学校、本校という言い方をしますが、父が本校の教員だったため、早瀬先生の方も私の父に一目置いており、その息子だ、ということで、今にして思えば、色々気を遣っ

て戴いたのではないかと思います。

その先生が、卒業を間近にした5年生の時に、「大変なことが起こるぞ。信じられないだろうが、マッチ1箱で一つの街が吹っ飛ぶような爆弾が出来るらしいぞ」と、みんなに言ったんです。同級生たちは、みんな覚えています。仲間がよく名前を出している高田勇君も、しっかり覚えているそうです。そして原爆のあと暫くして、「マッチ箱一個で」との衝撃的な話題を思い出します。「ああ、このことか」と思い出しましたね。『朝日新聞』に1944年の秋に記事が出たのだそうです。

「マッチ箱1個で、ロンドンの町を吹っ飛ばせるような爆弾をドイツが研究中」という趣旨のものだった模様です。アメリカは既にそのことを知っており、ドイツが核兵器開発に着手ということで、慌てて「マンハッタン計画」で突っ走ったとか。思えば、そういう話を早々と早瀬先生から聞いておりました。

早瀬先生が担任になった時から、時代は既にもう軍国教育真っ盛りですから、挙手の敬礼の仕方から直立不動の姿勢の取り方、モールス符号の打ち方、手旗信号のやり方などなど、何しろ海兵団で訓練を受けたばかりの新米の先生ですから、一生懸命に教えてくれました。私たちがアツという間に覚えて、立派な軍国少年へと驀進しました。

それからもう一つ、先生が私に教えてくれたのは、私の座右の銘として使っている格言です。海兵団で頑張って訓練を受けていた時期に叩き込まれた格言「迅速確実」。迅速にして確実に事を処理せよ。これは、私がそのまま処世訓として、いつの間にか後を受け継いでおりました。

担任の先生と言うのは大変です。なにしろ全教科を先生から教わりました。小学校というのは基礎教育が眼目ですから、音楽も習いましたし、習字も習いましたし、柔道も剣道も習いました。習字では正式な墨の擦り方、筆の握り方を教えて戴きました。

剣道を習った時には、木刀と竹刀の持ち方、打ち込み方という基礎的ながら特殊な技法をキチンと習いました。木刀を振るう素振りの場面は、よく見ることがあると思いますが、木刀というのは結構重たくて、すっと反りがあり、手元に柄があります。グリップの所です。そのグリップを握る

のですが、ゴルフと違うところがあります。左手で持って落ちないように握るべきだ、というのはゴルフと同じですが、その先が違う。左手の小指だけ、半分はみ出すように左手で握り、ぐっと握り締める。右手は鐙の辺りに軽く添えるだけ。そして振り上げて、自分のお尻を剣先で軽く叩く。それぐらい大きく振り上げて、ぴしっと、タオルを絞るように相手の寸前で止める。そうすれば相手の額、皮一枚の所で、ピタッと太刀が止まると言うのです。これが極意だそうです。これを、さんざん教えられました。

太刀の構え方も同じですね。ピタリと太刀の切っ先を相手の胸へ向けて、水平近い正眼の構えで太刀を止めるのです。静止することから始めます。左手の小指一本で太刀を支えている。右手は、そっと柄先へ添えているだけ。精神統一が必要ですね。ですから、いま私に木刀を振らせたら、見事に振って見せることが出来ます。

そういう実戦訓練を、小学校3年生からやり始めました。いまでもテレビ映画などを見ながら、なんとも時代考証とか当時の習俗慣習を知らない、役者と演出家の多いことを嘆いております。

モールス符号。トンとツーという短い音で文章を送る。これは戦争が始まった1941年の頃は最盛期で1945年まで使われます。1945年ごろになると、もう無線電話ですね。今のラジオ放送みたいな具合で、肉声をそのまま相手へ伝える方法が中心になります。例の「電探」という言い方をしていたレーダーが戦いの核心になる時期に相当しますが、当時の日本は、まだモールス信号が残っている。トンツートンツと書いていますが、長い音と短い音の組み合わせで文字を送る。それを訓練されて覚えました。

私の「アライ」という名前をトンツでやったらどうなるか、ということぐらい今でも出来ます。「ア」は、「ツーツーツーツー」で、長音2個と単音1個と長音2個。

「ラ」は「トトト」と単音3個だけ。「イ」は「トツ」で単音1個と長音1個です。かくて「アライ」となるのです。

真珠湾攻撃で有名な「トラトラトラ」の信号は、「我、奇襲に成功せり」の意味ですが、比較的簡単で、狭い機内から打電し易い構成で、「トトツ

トト、トトト」を繰り返すだけです。

これらの文字信号音を私たちは、短い言葉遊びの呼び換えで覚えました。「ア」は「ああ言うところ言う」＝「ツーツーツーツー」ですね。それから「ラ」は「ラムネ」＝「トトト」ですね。「イ」は「伊藤」＝「トツー」です。だから、「いろはにほへと」は、「伊藤・路上歩行・ハーモニカ・入費増加・報告・屁・特等席」と、こういう具合に言い換えで覚えました。

○石田 語呂合わせですね。

○新井 だから真珠湾では、「突撃開始」という意味で「ト」信号が連送で発信されたのですが、「特等席」ですから「トトツートト」です。

それとは別に特別に、「奇襲攻撃成功」と言う場合は「トラ」と発信するよう事前に決めてあった。

真珠湾を奇襲攻撃出来たか否かが大問題だったからですね。連合艦隊司令部としては、「ラ」の言い換え用語は簡単な「ラムネ」、つまり「トトト」です。だから広島湾で朗報を待っていた戦艦「陸奥」艦上の山本五十六連合艦隊総司令長官は、遠いハワイからの信号を直接に受信できたうえに、その信号が「トラトラトラ」（特等席ラムネ＝トトツートト・トトト・奇襲攻撃成功）の連送だったことで大満悦だったそうです。

奇襲ではなくて敵に発見された場合は、「強襲」と決めていたらしいのですが、強襲の場合は敵からの大反撃に見舞われ、我が方の大損害が見込まれるのですから、奇襲と強襲では大違いだった訳。

それをモールス信号で区分けして。ハワイから日本へ、攻撃機から発信した電信が、直接にモールス信号として届いたのだから、凄い事だったのですね。今でも覚えております。

それから、手旗信号は片仮名を、相手から読みやすいように逆文字で（裏文字で）逆さに、両腕と体全体を使って描く、という方法で文字信号を送るのです。これは現在でも、海上自衛隊でもって現役で使用されています。原則としては、右手に赤旗を持つのですが、描くという方式でカタカナの逆文字を全身で形作るのです。（手旗信号のまねをして）「ア」は、先ず両腕でカギ・カッコを作り、次に両腕を身体の前で斜めに伸ばすのです。カタカナの「ア」の逆文字を、全身を使って

描くと思ってください。「ラ」は頭の上にチョンを両腕で描き、次に体の前でカギカッコを描くのです。「イ」は、身体の前で両腕を使って斜線を描き、次には右腕を頭上に真っすぐ伸ばし、左腕は下へ伸ばして、カタカナの「イ」を逆の形で描いて出来上がり、と言う訳です。これで「アライ」となります。

手旗信号というのは、始める前に、両腕を上げてから、バタバタと両側で上げ下げして「始めるよー」と知らせます。終わったら、両腕を上から下へ揃えて下に降ろします。これが「終わり」の合図。

モールス信号では、「始めマーク」というのが始めの文句。「トトトツートト」、これが「始まりますよ」なんですね。「終わりマーク」も全く同じ。

ただのト連送というのは「突撃、突撃、突撃」で、「ラ」が入ると「奇襲成功」という意味です。だから、そのト連送というのは、今度は特攻隊が使います。突入するときに「トトツートト・トトツートト」です。それも、初めのうちはそうでしたが、末期の神風特攻隊では長音1本だけ。つまり、ずっと電信の電鍵を押し放しで突入して行く。音が切れた瞬間が突っ込んだ瞬間だ、という事になったそうです。こういうことを、基礎的なことすべてを国民学校時代に、私たちは担任の先生から教えられていました。

そのほかに学校では、歴史・国語・算数・算盤・図画・習字・工作・運動。早瀬先生は万能選手でしたね。すべてを教えて下さいました。私は虚弱児童で、水泳訓練は楽々園の水泳場まで行くか、学校裏の猿猴川に飛び込むか、どちらかなのですが、いつも私は白シャツの見学だったけど、小学校3年生のころだったかな、裏の猿猴川に放り込まれたんです。泳げない児童の目印に帽子と赤褌だったけど、なにせ私は完全な金槌です、たちまち溺れました。渡り廊下にある簀板（すのこのこと）をみんなを持って行って、川に放り込んで、あれに掴まって泳げという訳ですがダメでした。

誰か上級生が助けてくれました。それ以来、水泳が猛烈に怖くて駄目になってしまい、恥ずかしながら、今もって完全な金槌です。

それに虚弱児童というのかな、小学2年生を肺浸潤のため1年留年したために、広島に来て、



6. 楽々園での水泳訓練
(白シャツ姿、左から2人目が私)

運動はたいてい見学で、白いシャツ姿での学年の集合写真が幾つも残っています。

でも中学年、そして高学年と上級生へと進んで行く毎に、私は変わり始めておりました。水泳は相変わらずダメでしたが、跳び箱は上達して行きました。中学の入学時のテストにも有ると聞いていたので懸命でした。

筆記試験は無くなって、「口頭試問」と言う面接テストが主体の入学試験に様変わりしておりました。それに備えて国民学校では「口頭試問」という表現で、入試の事前準備が始まっており、修身・公民と国史が主目標になりつつありました。

5年生、6年生ともなれば、押され気味に戦局も絡み、もう大人並に扱われ始めておりました。敵機も上空を気儘に飛び回るほどに悠々たる態度で、太平洋戦線・波高し、を超えて猛烈な嵐襲来の気配でした。私たちは上級学年になりました。

警戒態勢での集団登校が常態となっていましたから、集団登校時のリーダーにならなければならないのですね。リーダーになるということは、空襲警報で敵機が来たときに、引率している下級生の子どもたちを安全に逃がさなければならない任務があるわけです。だから道端～学校へと登校する道路の両側に、どれほどの植え込みがあって、どれだけの溝があり、塀があるかないか、ということ全部覚えておいて、もし何かあったら「あそこへ逃げろー」と引っ張って行くことを考えながら引率するのです。

それから、学校の中のいろんな作業、例えば廊下を掃除する、運動会をやる、駆けっこをやる、広い運動場を掃除するなんていうのも、全部、上

級生が下級生を指導してやりますよね。その係になるから、6年で校級長になって、ますますみんな責任感を持つようになります。

新久和俊君という級友がおります。頭の良い子で最初のころ、級長をやっていました。自宅が近いんですよ。私が出汐町の外れ。彼が旭町と霞町の東外れ。互いに比治山女学校界限でのリーダーになっていましたね。

親友の高田勇君は段原の住人で、段原にある広大な旧家に住んでいました。お父さんの関係で店舗兼自宅が鉄砲町にあり、保険会社の支店長だったと思います。現在の自宅は、段原南の比治山トンネルの近くですが、当時は段原にあった広島女子商業学校の北堀のすぐ近くでした。彼が段原界限組のリーダーということで、山越えの段原組を引率して来るという格好でしたね。

そういうことで自然と、私たちは卒業の時から第十二学級という呼び名になっていましたが、6年男子組は、女子組よりも学校全体としてのリーダー性を持たされたので、仲間同士の意思疎通と同時に、上級生・下級生との間も非常に近い間柄になって行きます。それがまた先生方との間も近くなるわけです。

先生方には、たいてい当番での宿直制度というのがあります。宿直室は体育館の中にあって毎朝、最初に登校してドアを開けると、たいてい宿直の先生がそこでご飯を食べているか、寒いときは炬燵にあたったりしている。

子どもたちはみんな、「先生、おはよう」といたずらを仕掛けるのが好きですから、だーっと走って行ってガラッと開けて、「先生、おはよう」



7. 春の運動会
(昭和16年)

と声をかけて、「今日は誰先生が泊まっていたよ」なんて報告するんですね。

遊びといたら男の子は押しくら饅頭しかないですね。運動場のど真ん中というか、運動場に面した所に雨天体操場～いまで言う体育館があって、細長い斜めの壁が突き出ている支柱の役目を務めている。それがちょうど頃合いに、互いの押し付け合いゴッコ遊びに絶好の場所。三角形の隅っこが出来ている訳だから、そこへ向かってギュッと互いを押し込んで行くというのが、道具も要らない楽しくも温まる遊びでした。

上級生が下級生と一緒にあって、雨天体操場の、外壁に出来た出っ張り部分に身体を押し込んで行く。温かくなるので、寒いときには絶好の群衆運動でしたね。

○石田 今の体育館とか運動場のお話は、東雲のほうの時ですか。それとも比治山の下の時の話ですか。

○新井 東雲への移転後です。比治山下の皆実町時代は、私は2年生の終わりごろまでしか知りません。昭和16年7月19日には、学校が東雲に移転しますからね。私は昭和15年の秋に転入し、昭和16年の夏に学校が移転しますから、その間の半年ぐらいしか、皆実町時代の附属を知りません。だから今のは全部、東雲町での話です。

皆実町時代は、古い写真が残っていますが、明治からと聞く古い校舎で、昭和16年5月の「春の園遊会」は、しっかり記憶に残っています。露店のような出店があって、人だかりがして、お汁粉屋さんや、おはぎ屋さんが出ていたり、賑やかでした。父兄と一緒に行って演芸会もありましたね。運動会の写真も残っていますが、あれは皆実町のグラウンドでしたね。その時の、2年生の女子も一緒に写った写真が残っています。

でも、東雲に行ってから後は、卒業の時に撮ったスナップ写真のほかは、少ししか残っていません。あとはウサギを抱いた図書館前の写真で、これは原爆死した仲間の遺影登録に使いました。そういう時代でした。

昭和20年3月20日が卒業式の予定でしたが、空襲警報発令になって卒業式はお流れ。教室に戻って先生から卒業証書を貰い慌てて帰宅、ということで卒業になります。(卒業証書のコピーを示し

て)これが高田勇君の卒業証書。私のもありますが、小学校の同窓会の時に彼が提供してくれたものです。

空襲への備え

○新井 やがてB-29が連日のように悠々と襲って来るようになります。襲って来ると、どうやって我が身を守るか、ということが大問題になる訳です。小学校時代に、各町内会で一齐に動きが始まりました。防空壕を掘る、退避する、逃げる。それから焼夷弾が落ちたときのため、それを消す訓練をするなんていう運動が始まりました。防空演習、と呼んでいましたが、訓練に参加せよ、と圧力が掛かって来るわけです。つまり町内会が力を持って、国家総動員法というのが出来て、爺ちゃん、婆ちゃんまで全員が「国民義勇兵」みたいに強制的に徴用されて戦場で戦え、一兵卒になるのだ、という大変な事態に突入して行きました。つまり空襲となっても逃げてはならぬ。死んでも持ち場を守れ、持ち場を死守せよ、と言うことです。それを率先垂範すべきは中学生である、となってしまう。

小学校時代から全国的に、そういう気運が横溢していて、町中で町民が駆り出されて、そういう運動が始まる。消火訓練もある、防空訓練もある。それから、各家で防空壕を掘れ、という事になりました。防空壕を掘りましたよ、自分の家の狭い土地のなかで、つまり庭か床下に自分の身を隠せるぐらいの穴を掘って、何かで天井を覆って、その中に潜ることしかない訳です、自分の生命を守るには…。常識で考えたら、敵の爆弾や焼夷弾が直撃したら、ひとたまりもないハナシです。

庭か床下の地面を掘った防空壕の天井は、何で覆っていたとお思いですか。普通の民家なら床板か畳、それに天井の屋根板か瓦ですよ。頑丈な鉄板で天井を覆うなんて、絶対にあり得ない。となったら、爆弾1発ですべてがオジャン。

私の家は出汐町でした。あの一帯は埋め立て地帯なんです。だから30センチも穴を掘れば、下から潮水が湧いて来る。掘っても掘っても潮水が出て、掻き出してもダメ。どうしようもない。

仕方ないから、セメントを塗って滲み出る潮水を塞ごう、となりました。セメントは父がどこか



8. 出汐町時代の自宅
(平成30年撮影)

から手に入れて来て、バケツで適当に練って、掘った穴の壁に塗り付けました。何とか穴を全部、セメントで塗り固めたから大丈夫かな、と思ったらダメ。すぐに穴の壁や底から、怖れていた水が沁み出て来た。おまけに、塗ったばかりのセメントが一向に乾かない。ダメのダブルパンチです。今みたいに速乾性のセメントなんてない時代。沁み出た潮水が溢れた、深さ30センチ程度のお風呂場の浴槽みたいな防空壕が出来あがりました。空襲となったら、この中へ一家4人が逃げ込んで我が身を守れ、と言うのでしょうか。ムラムラと、疑念と共に怒りが込み上げて来る私でした。

附属中学校への進学経緯

○新井 そして、昭和20(1945)年になります。私は6年生になっています。なぜか分からない知らないが、昭和20年の元旦から私は日記をつけ始めます。現在も残っております。それまで日記をつけたことなんかなかったんですが、心機一転して日記をつけ始めます。

その元旦の日記帳に書いたのは、本当に大人びた文章で「栄えある昭和20年の元旦が明け始めた。神社に初詣に行く。神々しいかしわ手が響く」などと書き始めているわけです。「日本皇軍の勝利を祈る」。「皇国の興廢、この一戦にあり」という言葉があるけれども、戦争中なのだから、その勝利を祈る、みたいなことから軍国少年だった私の日記は始まっております。

もう、その頃は日本の上空に敵の飛行機がどんどん攻め込んで来ており、東京・大阪・名古屋などの大都市が全部、一面の焼け野原になってしまったことは、ラジオが報道しているので分かっています。新聞だって隠せませんよね。だから分かっています。なのに広島はずっと無事で、大規模な空襲はほとんどない。ということは道理で考えれば、必ず、「これからやられる」ということですよ。だからいよいよ昭和20年は、日本最後の決戦の年である、と自分で思ったんでしょう。それで日記をつける気になったんでしょう。



9. 附中に合格した私と家族
(昭和20年)

初めて日記をつけ始めた昭和20年が明けて、中学校を受験する年が来ました。あのころ元日には、いつも四方拝という式典があったので学校に行きました。そこで出てくる話題は、6年生だから受験のことばかりです。私は転校生だから広島知識が全くゼロに近いので、広島にどういう学校があるのか知らなかった。ただ一校、広島県立広島第一中学校という中学校は優れた学校で、広島県でもトップクラスの凄い学校だ、ということは知っていました。だから、それしか頭にないので、「よし、僕は一中に行こう」と心に決めていました。他のみんなも、一中だ、二中だ、修道だ、と何だかんだと言いつつ合っているけど、正月を越えればほとんどが、もう方向を決めているようでした。

しかも戦争中だから、昔みたいに入学試験というようなペーパーテストは省略されていて、体育

訓練、運動能力、身体検査、口頭試問という名前のメンタルテスト。そして学校からの内申書で入学採否が決まる、というような時代です。だから小学校では先生も生徒も、一生懸命に口頭試問の練習をしました。同時に体育の訓練ね。先ほど言った跳び箱の話じゃないけど、そういう訓練を一生懸命にやるという時代。それが即、受験のための準備でしたね。

みんなが進路を決めて行きました。当然のことながら、担任の先生と、当時は父兄と言っていましたが、今で言うならPTAかな。父兄との懇談会も開かれて、「息子さんの進路をどうしましょうかね」ということになるわけですが、そこで担任の早瀬先生から父に、一言あったのです。「ご長男は広島県立一中を希望しているようだが、彼の体格、性質、それからセンスからして私は、剛健タイプの一巾向きではないと思う。広島には高等師範の附属中学校というのがあって、これは広島と東京にしかない中学校だ。ご長男には、広島高等師範学校の附属中学校が向いていると思うが如何？」

○石田 小学校時代は熱を出して休まれることも多かったんですか。

○新井 私は肺浸潤で1年休学したぐらいだから、水泳訓練でも泳がずに見学するというタイプでした。集合写真でも、最後列で白いシャツを着たまま写真に写ると言う具合で、だいたい私は虚弱児童でした。朝礼の時にも、よく倒れていたようです。すぐ倒れる、ぶっ倒れる、というタイプだったのですね。

○石田 貧血ですか。

○新井 はい、要するに虚弱児童だったので、一中みたいな質実剛健の凄い学校に行くには無理だということです。広島には附属中学校という学校があって、そこに行った方がご長男には向いているのではないかと担任の早瀬完一先生から指導があったのですが、実は迂闊ながら、そこで初めて附属中学校という学校がある、ということを家族一同で知ったのです。知って即座に決めたのです。それで私は、一中から附中に志望校が変わったため、原爆を免れます。

ところが、クラスメートの中の、私の親友なのですが、正木義虎君は逆のケースでした。担任の

早瀬先生から、「正木君は高等師範学校附属中学校にも、また広島県立第一中学校にも、どちらへも入れると思うが、正木君の特質からしては附属向きだと思うが」との意向が示されたのだそうです。家族からの意向問い合わせに対し、父上の正木生虎海軍大佐からは、「私としてはどちらでも良いが、一中の方が素朴・剛毅の気風が一層濃く、肉体的にも精神的にも鍛えられることが多からうから、軍人を志望する義虎としては一中が良からう」と返事をなされたそうです。義虎君本人も、「ぜひ、お祖父様（正木義太海軍中將）の在校された一中に入りたい」と希望し、他の軍人志望の級友4人と共に一中を受験し合格したのです。そして被爆して亡くなるのです。私とは真逆のケースです。



10. 正木義虎君遺影
(正木孝虎氏提供)

お父上の正木生虎氏は、一中の被爆死生徒の父兄の記録『星は見ている』に、16ページに及ぶ長文の手記を寄せておられます。

* * *

(前略) 義虎たちを広島に疎開させたのは私です。義虎に一中を受けさせたのは私です。義虎を広島へやらなかったならば死ななかったであろうことは考えられます。しかし義虎は、自分たちが広島へ行く事は、単なる危険を避けての疎開ではなく、これによって父に毎日二倍以上の仕事をさせることが出来るのだ、ということを充分知っておりました。また、附属中学校を受けさせておいたならば集団疎開しておいたから、助かったろうと考えられます。しかし義虎は、病床にいるある日、

徽章も帽子とともになくなったからと、ボール紙で一中の徽章をつくり、妹に銀紙を貰ってこれを貼って、身体が治ったら、これを付けて学校へ行くのだと楽しみにしており、一中という学校を心から愛しており、一中に入ったことを後悔するという事は少しも無かったので、義虎としては、父を恨むというような事は微塵も無かったと思うのですが、私としては状況判断を誤ったことを悔やみ、つい、愚痴に似た気持ちにもなるのです。

(後略)

* * *

正木義虎君は、私と同じ出汐町に住んでいました。上大河駅のすぐ傍であり、陸軍の兵器廠と被服廠が目前なので家屋立ち退き命令が出され、出汐町の家を壊されて実家のある大竹の玖波へ引っ越して行きました。ただし、彼本人は中学校を受けることが決まっていたので、叔父さんが正木亮という検事長、後に死刑制度廃止論の弁護士として有名になる方ですが、その検事長公舎、今の轅町中学校の近くで縮景園のすぐ脇に豪壮な官舎があったんですが、彼はそこに下宿して県立第一中学校に通うことになります。

私は彼と親友でした。なぜかという、お互いに言葉が共通なんです。彼は東京の出身で、すぐに私と仲良しになりました。家も近い。そして本をいっぱい持っているんです。私も本読みでしたから、いつも彼の所に行っては本を借りて読む。彼は弟が2人、妹が1人と弟妹がたくさんいて、私は彼の弟たちとも仲良しで、私の日記の中には手動のバリカンで正木兄弟の頭の髪を全部刈ってやった、という逸話が残っています。また彼ら兄弟もそれをしっかり覚えているんですよ。その手動バリカンは、今も私の書棚に置いてあります。

あの日、正木義虎君は傷ヒトツ負わずに倒壊した校舎から這い出して生き残り、翌7日の夕方、警察で貰った下駄をカラコロン言わせながら、玖波の実家に辿り着いたのです。義虎君の無事に家族は大喜びとなり、本人も山手にあった親戚宅に遊びに行くなど健在ぶりを示していたのですが、やはり原爆の放射線には勝てませんでした。8月末にかけて典型的な原爆症を発症して亡くなりましたが、弟の孝虎君たちは小学生だったので、

疎開していて生き延びます。実は現在も私は、実弟の孝虎さんと交流が続いています。正木家は、お父さんが生虎、本人が義虎、次男が孝虎、三男が成虎。タイガー・ネイビーとして、虎の名が付いた海軍一家というので有名です。

広島一中は、いまも7月の最後の日曜日に慰霊祭を開催していますが、弟の孝虎さんは、一線を退いた後、毎年、東京から広島へ駆けつけて参列しております。ですから毎回、毎年、私と彼は出会って語り合うのを常としています。今も続いています。あの当時は、附属小学校から附属中学校を受けるか、一中を受けるか、の受験の時期であり、それが運命の分かれ道となったことを知っておいて戴きたい。同じことが広島じゅうの小学校、中学校で起こっていたのだ、と言えましょう。

私は師範の附属小学校を35人の男子組、35人の女子組で卒業します。高師の附属中学校に来たのは男子8人だけです。あとはみんな一中、二中(広島県立広島第二中学校)、市中(広島市立中学校)、修道中学、県立工業など。女子は県女(広島県立広島第一高等女学校)、市女(広島市立第一高等女学校)などに進学しました。そして、ほとんどが全滅するという運命を辿ることになったのです。

逆に言えば、附属中学校に私たち8人が行って、その8人が生き残るわけですが、附属中学校で原爆から生き残った1年生たちというのは、実は広島市内の各小学校の右代表みたいな具合で入学して来た者たちばかりなのです。ということは、私達みんなの各小学校時代の同級生は、広島の中学校に進学しており、それぞれみんな建物強制疎開の動員作業中に被爆全滅してしまったという学年なんです。だから「生き残ってしまった」と私たちは表現するのですが、生き残ったことを喜ぶ者は誰一人いません。そういう学年なのです。

これから、いよいよ附属中学校時代に話を移します。私の日記帳の復刻版を提供していますので、附属中学校の入学試験や合格の状況など、その後のことも、その年のすべてが記録されています。

入学試験は3月15日に、附属中学校に行って受けたのですが、私は何と、附属中学校という学校に、そのとき初めて行きました。

○石田 下見は行かなかったんですか。

○新井 事前の下見なんて一切ありませんでした。

た。受験の時に初めて友達に連れて行って貰って、「わあ古い学校だね、凄いね」と思いながら校門をくぐりました。明治の頃に出来た建物だそうで、途中で何度も改装されているそうですが、なんと日露戦争の日本海海戦で、連合艦隊がバルチック艦隊を全滅させた1905年の創立だ、と聞きました。ということは、入学したのが1945年ですから、ちょうど日露戦争と附属創立双方の40年目ですよ。入った途端が、学校創立40周年記念日だったわけです。凄い学校に来たものだなと思いました。

学校のたたずまいは、確かに明治時代の風格で、下駄箱があって靴を脱いで上がらなくてはいけない学校。2階建てで、附属中学校だけが独立していると思ったら違うんです。廊下が続いていて高等師範学校があって、続いて幾つか研究室があって、続いて向こうに文理科大学があって、また奥の方に行ったら立派なコンクリート建ての附属小学校があるという、全部一貫した建物構成になっているんですね。その四つの学校で、ぐるっと大きな塀に囲まれた中に、ヒトツの学園を構成している、ということを知りました。

大きな門が幾つもあるんです。正門は高等師範学校の正門なので、正面が高等師範学校の堂々たる講堂ですが、ここからは入ってはいけません。その北側隣に附属中学校の正門があるから、そこから入れと言われた。そこにも立派な石の柱が立っていて、そこから入りました。

ところが、そこから入ればいいのかと思ったら違うんです。ぐるっとその塀を北へ回って行くと附属小学校があります。附属小学校にも専用の正門がある。それを私たちは北門と呼んでいましたが、「市内の東側から来るお前たちは、北門から入れ。正門から入るんじゃない」と言われてね。附属中学の正門から入っても宜しいが、北門が一番近いから、そこから入れというわけ。

もう一つ、南門というのがあるんですよ。文字どおり南側で、千田小学校に向かう方角です。その門から出ると何処に行くかということ、すぐ傍に文理科大学の農場がある。その農場に作業に行くための門だと言う。ほう～そうですか、凄い学校だね。門が幾つもある、塀がぐるっと囲んでいて、中に四つの学校があって、それが全部廊下で繋がっている。「へええ」と感心したものです。

それで、ここからここまでが附属中学校の部分だよと教えられ、この廊下を渡って行ったら高等師範学校。なんだこれは、と考えましたね。だから、お互いに融通しあって教室を使い回していたようです。化学教室はあっちだとか、工作教室は向こうだとか、そういう融通性のある学校だということは後から知ります。入った途端は、ポカンとしましたね。

当時の附属中学校の状況

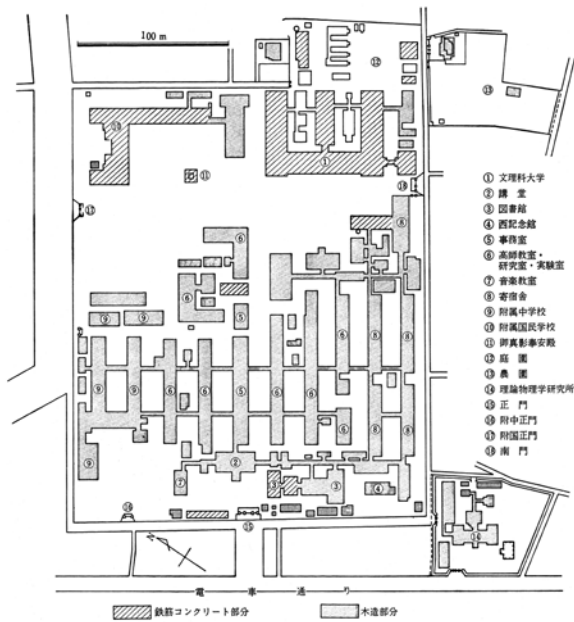
○新井 さて、中学校に入ります。当時は、例えば何町に住んでいる人たちは何中学校に行けというような、今でいう区域制のような制約はありません。だから各人が行きたい学校に行く、遠ければ宿舎や寮に入るというスタイルです。

なかんずく附属中学校はそういう学校で、広島県内、場合によっては九州・四国辺りからもやって来る生徒が多かったので、あちこちに攻学寮、薫風寮と寮が幾つもありました。そういう具合で、当時は自分が選んだ学校に行けた訳です。一中も二中も修道も、全部そういうシステムです。

もちろん当時は男女別学。小学校2年生までは共学で宜しいが、3年生以上は別学ですから、中学校となったら完全に男女別々。道ばたで男女が立ち話でもしていようものなら、たとえ兄弟姉妹であったとしても、あの二人はおかしいぞと、色目で見られた時代です。だから現代人に話をして、男子校だったなど分かって貰えない。

男子校の附属中学校は、当初は5年生まで居りました。旧制の附属中学校は5年生まで居たけれども、私が入った時には、既に5年生は存在して居ませんでした。世界中を相手に負け戦を続ける日本です。5年間も中学生が悠々と勉強などしてられる時代じゃないぞ、戦争をしているんだ、5年生になる前に陸軍幼年学校とか、少年航空兵とか、海軍兵学校とか、軍の学校に行って軍人になれ。つまり、即座に戦争に役立つ学校へ行け、などということで、中学校は5年制じゃなく4年生が最上級生になっておりました。

入学したとき3年生、4年生という上級生は、既に学徒動員令が発令されていて「通年動員」と称して学業を放棄し、年間を通して工場に行き、機関銃を作り、大砲の弾を作り、飛行機のプロペ



11. 被爆前の広島文理大・広島高等師建物配置図

ラを作れ、などという命令に従って上級生はみな、軍の施設へ動員出動していました。3年生は周辺の三菱精機（三菱重工業広島精機製作所）、4年生は市内の被服支廠で作業しており、何人もが直接被爆しています。2年生は空き地開墾で、農作業しての食糧増産活動に従事していました。

それから、科学学級という特別国策学級が昭和19年の春にスタートしています。1月13日と14日に入学試験をして1月20日、1年生34人、2年生30人、3年生26人を選抜して科学学級が編成され、授業が始まったのは1月下旬だったようです。どういう具合に試験を実施したのかというと、附属中学校に在籍している正規学級の1年生、2年生、3年生、それぞれから選抜して科学学級に移行するグループと、一般から公募して入学するグループと、この2種類の合格者で、昭和19年度の科学学級は成立したようです。それで、附属中学校出身の科学学級の生徒と、一般募集で入って来た科学学級の生徒の間に確執が生じます。すぐ卒業して居なくなるはずの4年生は、この段階ではまだ存在して居りません。

そして昭和20年の2月26日から28日までの3日間で、改めて一般募集した昭和20年度の新1年生の入学試験を実施します。それまでの1年生、2年生、3年生の科学学級生徒はそれぞれ進級して、2年生、3年生、4年生になっています。かくし

て昭和20年の4月に、初めて科学学級が、1年生から4年生までが全部揃って、正式にスタートした訳です。その新1年生というのは、西日本一円から一般公募して23人を選抜しました。入学試験でユニークだったのは、応募者全員を教室に集め、物理・生物・数学の授業を実施して、その授業をふまえた試験問題が出されたことです。他に実は早くから、広島高等師範学校附属国民学校の中に科学学級が設置されており、その6年生児童12人は、そのまま附属中学校の科学学級1年生に編入されました。こうして昭和20年度の科学学級1年生は、生徒数35人で編成されて誕生しました。

私たち広島師範学校附属小学校、元の県師範学校附属国民学校からも2人が受験します。同じように、広島県内の各小学校からも、それぞれ1人か2人ずつが、学校推薦を受けて科学学級の試験を受けます。そして、もう一つの特色は、西日本一帯から広く受験生を募ったということです。特に九州からが多かったようです。九州の附属学校系、それから修猷館（福岡県立中学修猷館）かな、そうした有名校から多数の受験生が来て、彼らが大学して合格します。

その試験はどんな試験だったかというのは受験したメンバーから聞いています。まず教室に受験生を通して、附属の教官が2時間ほど理科の授業をするんです。その後に、その授業の中から試験問題を出して答えを書けという問題が1問目。2問目が面白いのですね。「人間は目が二つある。もし三つ目の目を持つとしたら、どこに目があればいいと思うか。理由を付けて答えよ」という設問。先生はどこがいいと思いますか。

○石田 うーん、どこですかね。頭の後ろぐらいに付けましようかね。

○新井 正解は「指先」。

○石田 指先ですか。正解があるんですか。

○新井 正解と伝わる回答、と言い直しましょう。出題したのは、科学学級生みの親、広島文理科大学の三村剛昂教授だと伝えられています。このユニークな設問は、昭和19年度での出来事、とも伝えられています。それから3問目、物質の比重の問題。実験をさせて、そこで比重の問題を出して解かせる。こういうのが科学学級の試験だったそうで、後から問題を出した先生方が回顧談の中で、

面白い試験のやり方をやったよな、という思い出話をなさっています。それに、受けた生徒側も凄い試験をやられたな、という印象が残っているらしく、これは幾つもの記録が残っております。

この科学学級を産み出したのは、ほかならぬ湯川秀樹博士と、広島文理科大学の三村剛昂教授。このお二人が中心で、東京の高等師範学校附属中学校と広島高等師範学校附属中学校の先生方が具体的な科学学級の組織を考えたようです。

もう一つ、広島高等師範学校附属中学校の理科の田辺綱雄先生と、満窪鉄夫理事先生という今でいう教頭先生が、二人共同で広島の科学学級のカリキュラムを組み立て、それを全部ガリ版で切って作ったと回顧録で話しています。これは昭和20年を記録をするための座談会の中での発言からです。それだけの苦勞をして、広島は科学学級の主導役を担っていた、と言われているようです。それで最初は広島と東京だけに出来ますが、後に京都、金沢が加わる。しかし、やはり広島と東京が中心だったようです。

科学学級の生徒たちは、低学年の1年生たちは附属中学校の教官が物理・理科を教えるが、3年生、4年生の上級学年には、高等師範学校と文理科大学の教授たちが、ハイレベルの難しい科目を教えたということです。

それと、絶対に勤勞奉仕、動員作業、学徒動員に、彼ら科学学級の生徒を駆り出すことはなかった。彼らは金の卵であるからして、絶対に命を失うような危険な目に遭わせるべきでない、というのが至上命令であり、国の姿勢として最初から、広島・東京からは脱出させるという方針があった



12. 科学学級1回生と教官たち
(昭和20年)

ように、科学学級は早々と堂々と疎開をさせ、広島から脱出して県北の東城町に行くわけです。東京の生徒たちも、全員が金沢に疎開したようです。

広島の科学学級は7月9日、疎開のため東城へ一斉に移動して行きます。1年生から3年生までです。なぜか4年生は疎開を許されなかった。

(山野上純夫著『ふるさと暦 記者生活六十年』を出して) これですね。当時、科学学級の4年生だった山野上純夫さんの証言の中にあるのです。三村教授が、「近々広島という町を一つの実験場にしたい大きな科学的な実験が起こるだろうから、科学者の卵である君たちは、じかにそれを体験せよ」という趣旨の発言をなされたために広島に残っていたということです。

そして、科学学級4年生は8月6日当日、増本文吉教授の授業でTNT火薬の爆発力実験の話を、南側の2階の教室で受講していた最中に直接被爆をして、1人即死、1人が後ほど被爆死、計2人が亡くなります。あとの全員は負傷しながらも、倒壊した教室から脱出し生き残るのです。

一方、東城に疎開していた科学学級の生徒たちは、法恩寺というお寺と東城幼稚園の2カ所に分れて泊まり込み、現在の東城高等学校の教室を借りて授業を始めるということになったんだけど、分宿する場所が泊まれるような所ではない。寺なら本堂はあるけど、幼稚園なんて、まるっきり生徒たちが泊まれるようなところじゃないので、父兄というかお母さん方は全部、引率教官の奥様方も含めて、宿泊場所を、大人数が泊まり込めるよう布団を運び込むなど準備するやら、台所での食事の仕度から全部やって大変だったようで



13. 疎開先の法恩寺に集う科学学級の卒業生

す。

そういう大仕事をやってのけた父兄たちですが、その中の一人、江上トミというお母さんがおられた。その方は非常な料理の名人で、なけなしの食材を使って見事な食事を作ったそうです。戦後に解散することになった時も、絶対に腐らないムスビ弁当を作ってみんなに持って帰らせたという逸話と共に、その息子に、江上種一君という2年生の生徒がいて、原爆が落ちた直後に「広島に落ちたのは原爆である」と断言した、という逸話も残されています。その江上さんは、後にNHKの江上トミ料理教室（『きょうの料理』）で有名なタレントになった方です。科学学級1年生だった大隅和雄君の手記「幼時探訪」にも書いてありますが、私たちが出版した「昭和20年の記録」の中にも関連する様々な逸話が載せられています。

科学学級とは要するに、中学校以上のレベルで科学者の卵を促成栽培するという国策学級であって、私たちが発行した『わが昭和史』という手記集3部作があるのですが、あの中に科学学級出身の前野長昭君が、きちんと、当時の帝国議会での議論に始まり、戦時英才教育の建議案が可決され、実際に科学学級が誕生するまでの経緯を調べて書いておられます。

国策学級であるがため、日本が戦争に負けた直後、附属学校そのものも官立学校であることからして、占領軍によって潰されるのではないかという憶測を生み大騒ぎになるんです。同時に科学学級は、東城に持って行き疎開していた記録資料や文書類を全部そこで焼却しました。当時の軍が敗戦後に秘密書類を全部焼いたでしょう。それによって記録資料がほとんど消えました。それと同じようなことが科学学級でも起こったという事で、いまとなっては残念なことです。

そんなこともあって、東城の科学学級グループの解散が8月20日ごろになりました。そのため彼らは、被爆から2週間以内の入市という20日を超えており、入市被爆者の資格を失うこととなります。東城で解散となった科学学級1年～3年生は、次々に8月22～23日ごろ、広島へ帰って来るのです。しかも遠隔地出身者が多かったので、バラバラと現地解散になってしまい、どのような経路で各人の出身地へ帰って行ったのか、なぜ消えて

しまったのか、なども全く辿れなくなっており、後から追跡するのに物凄く苦勞しました。これが、短い生命だった広島の科学学級の物語です。

正規学級は、6列の7人ずつで42人、というクラス編成で、北組、東組、南組の3クラス。そして科学学級が35人で、入学は総計161人のはずなんですが、実はそのほかに3人、途中で消えた奇妙な仲間がいます。入学式には出席したが、すぐ消えた。なぜかという、建物強制疎開で追い出されて住む所がなくなったので消えた、というのがほとんどで、科学学級1人と正規学級2人という、いわゆる「列外1名」の幽霊級友が3人いるという、なんとも奇妙な私たちの学年です。

その辺りの事情をまとめた資料を作りました。

○石田（新井氏作成「昭和20年4月入学の生徒（41回生）異動状況一覧」を出して）これですかね。この間、頂いたコピーを持ってきたんですが。

○新井 それです。それで一目瞭然でしょう。

入学直後の学校生活、授業

○新井 4月4日に新入生として入学しました。東千田町の母校に残っていた上級生は、直上の正規学級2年生と科学学級の4年生だけです。

2年生は、「よし、下っ端が入って来たぞ」というので手ぐすね引いて待っていたらしく、たちまち私たち1年生は、2年生からこっぴどく制裁を受けます。「お前らは、我々上級生をなめている」、というのが彼らの口癖です。なめているつもりは毛頭ないんだけど、制裁すると宣告され、ゲートルを巻いたまま道場で正座させられたり、生意気だとぶん殴られたり、「教育勅語を読み」「軍人勅諭を暗唱しろ」と命じて、もし読み違えたらぶん殴られたり、みたいな調子で制裁を受けましたねえ。とりわけ、ゲートルを足に巻いたまま、道場の板の間に正座させられたときは悲惨でした。両足に全く血が通わなくなり、痺れて感覚も無くなり、ようやく「立て」と命令されても、誰一人立てない。よろよろと立ちかける者も、よく見ると足が捻じれてしまい、足の甲を下にしたまま立とうとして必死にもがいている始末。あれは苦しかった。

ところが科学学級の上級生というのは、どちらかという優等生だから大人しいんですが、その

科4の上級生も、やはり2年生が厳しい制裁をやっているのを目前にすると、黙っている訳に行かなくなるんでしょうね。科学学級の上級生に殴られた覚えは皆無だけれど、号令一下、科4生徒の指揮で訓練をさせられました。「4列縦隊、前へエ、進め」、「組み組み右へ、進めエ」、「回れ右前へエ、進めエ」、という具合です。この行進隊列が、実際にどういう隊形で進んで行くのか、先生方にお分かりになりますかねえ。

そこで、山野上（純夫）さんという方が、科学学級4年生のリーダーだったので私たちに向けて、いま、お話ししたような号令をかけるのです。

「1年北組イ、前へエ進めえエ」という具合にね。少し腰を曲げて、前かがみの姿勢で物を言う癖があったようで、ちっとも怖くないのです。上級生のなかにも、怖くない上級生が居ました。

入学当時は、正規学級の4年生もいて時々姿を見せたので、それは怖かった。先生方も何人かが学校に残っていた。それで授業が始まるのです。英語があることは分かっていたから楽しみにしていましたが、日本全国、実は英語は教えちゃいかん、ということになっていることは、すぐに知ります。にもかかわらず附属では、聞けば一中も同じだったらしいけど、きちんと英語の授業がありました。当時の日本が英語を教えなかった理由がふるっている、敵性語だから教えないという馬鹿な国だったんですね、日本は。

○石田 なぜ英語を楽しみにされていたんですか。

○新井 中学校に行ったら、英語・数学・物理など凄い科目が教えて貰える、という期待感が大きかった訳です。私の父は英語が堪能だったので、専門の西洋史以外に英語の科目も受け持っていました。当時のことだから読み、書きの英語でした。会話はダメだったのでしょうか。だから英語の授業があるのが嬉しく、楽しみでしたね。

○石田 当時の雰囲気からいうと、「英語を教えるなんて！」ということとは思われなかったんですね。

○新井 そんな雰囲気はチットモ無かったどころか、むしろ興味がありました。英語とは、どんな言葉なんだろう、とね。ABCぐらいは言えるけれども、まだアルファベットの全部は言えないし、書けない段階ですからね。

○石田 小学校では一切そういうのは習わなかったんですね。

○新井 教えない、教えない。そんな時代じゃありません。だから中学校に行っても、例えば英語には大文字があって、小文字があって、書き文字があって、なんていうことを、そこで初めて知るような有様が、あの時代の実情です。

○石田 ローマ字も小学校では習ってなかったんですね。

○新井 はい、全然。初めて中学校でお目にかかりました。現代では信じられないでしょうが、日本中が英語を使っているはいかん、という時代ですよ。アナウンサーと言っているはいかん、放送員と言えと言います。それなら、なんでラジオはラジオと言っているのか、変だよ、と私は思いました。

○石田 そうなんですね（笑）。

○新井 そういう時代だから、英語は実際、目に触れませんしね。ところが、海軍は英語を平気で使っていたんですよ。それで附属中学校では英語を習える、それから理科・数学という難しい学科もあるそうだと聞いていました。しかし、図画・工作・農業まであるとは思っていませんでした。まして、音楽の授業があるなどとも思っていなかった。中学校で、ですよ。だから時間表を見てびっくりしましたね。附属中学校とは、官立でありながら、そういう開明的な学校でした。

時間表を配られて、「これから授業だ、音楽教室へ行け」と教官が言うのです。「えっ、音楽教室があるんですか」という訳。行って見たら、中学校の正門脇にある立派な2階建てで、グランドピアノがあって、そこに初代の長谷川校長の胸像が飾ってあって。次から次と驚きながら、音楽の授業を受けました。何をやるかといったら『スキー』という歌。「山は白銀（しろがね）、朝日を浴びて…」という歌。声を揃えて歌わされたなあ。あとは附属の校歌を教えられた。応援歌もね。「スキーの歌」では、独唱せよと言われて全員が黙り込んだ。音楽の教官は、当時の広島では有名な山本寿先生だったと、あとから知ります。

工作では、自分の家から鋸や金槌を持って来いと命じられました。工作教室があって、凄い旋盤などが置いてあった。「へえ」と驚きましたね。1年生だから、旋盤など使うことはなかったけど、

何を作ったのか工作の授業内容は覚えていません。でも、なにせ工作なんて学科があったことに仰天しました。

図画の授業では、教室にアグリッパの胸像なんか置いてあって、「はい、スケッチしましょう」なんてね。イーゼルがあちこちに立ててあるし、人体模型もある古色蒼然たる雰囲気のかなに、図画の仲頼次先生が居られたという記憶です。のちに仲先生は、被爆死なさいます。

生物教室に行ったら骸骨が置いてあって、「うわあ、中学校というのは凄いな」と思いながら授業を受けました。

国語ではなく、国漢という科目～国語と漢文という訳ですね。だから国漢の授業で初めて、李白、杜甫とかの詩を教わったし、『万葉集』『日本書紀』『古事記』なども教わりました。

それから修身・公民というのがありましたよ。これは初めての、いわゆる皇国史観に基づく日本の歴史から始まって、徹底した全体主義教育を叩き込まれて、そこで『軍人勅諭』を覚えろ、という至上命令が出ましてね。長い長い軍人勅諭を、中学1年生の坊やたちが丸暗記させられました。教官は、位地正（いじ・ただし）先生。「意地悪の位地だ」と悪口を言いましたが、たちまち私たちは、位地先生を目の敵にするようになります。長い軍人勅諭を暗唱させられて、途中で詰まると罰が出る。ズラッと生徒の机が並んで居ますよね。その真ん中に通路がある。その通路に立って、両脇の生徒机に両の手を付いて足を縮めろ、というのです。つまり、両側の机に手を突いて身体を空中に浮かべろ、という命令です。これは苦しかったです。大多数の者がやらされました。もちろん私も。

でも、授業があったのは4月の1カ月間ぐらい。5月に入ったら、たちまち学徒動員令に従って勤労作業が始まりました。私の日記の中に出てくるんだけど、「どこどこに行って作業した」と。

もう一つ、敵の空襲が始まります。通学途中に警戒警報が出ると家に帰れ、空襲警報なら防空壕に隠れる。授業中に警戒警報、空襲警報が出ると、庭に掘った防空壕に逃げるとなるので、授業になりはしません。この状態が、5月になったら、どんどん、どんどん拡大する一方です。5月になってこんな状態になり、「これから軍の施設に行っ

て作業をやる」と命じられて5月14日。牛田の工兵橋の近くに、軍馬のための糧秣支廠というのがあって、軍馬が海外に出征するための飼料として、藁屑を針金で縛って1メートル四方ぐらいの塊に梱包して、軍馬と共に外地へ発送するという作業があったのです。その工場に私たちは、学徒動員として勤労奉仕に行かされました。全身が藁屑だらけになり困ってしまったものです。

同じ頃から、建物強制疎開の後片付け作業もやらされました。組によっては、兵器工場に行って機関銃の錆落としをやらされたようで、組ごとに作業内容が違うんですね。ただ、科学学級は一切、誰一人、作業に出て来ることは有りません。彼らは通常通り、難しい授業を受け続けていましたね。

作業現場に行くと、たいてい他の中学校も来ている訳です。そこで小学校時代のクラスメイトに出会います。「やあ、元気か」と声を掛けると、帰って来る返事はたいてい、「おう、お前ら、何イ食うたんや」でしたね。

○石田 「何食ったんや」ですか。

○新井 そう、たいてい「昼飯、何食うたんか」「腹減ったのう」と、久しぶりの対面での会話は、こんな話題ばかりでした。だから私の日記に出て来るのも、大半が食べることばかり。もう恥ずかしいなんて思っていられない、生きて行くためですから。そんな状況の中での授業体制でした。

ただし、学校の授業は厳しいというか、立派な内容の授業でしたね。英語も数学もね。私の担任は数学の三木（温美）先生とあって、海兵団上がりの海軍スタイルなんだけど、入学試験の待ち時間中に「おい受験生、暇だろうから計算尺を教え



14. 昭和19年当時の教職員
(昭和19年4月)

てやろう」といって、計算尺の使い方を教えてくれましたよ。入学試験中の待ち時間にね（笑）。

○石田 日記には4月の初めに、最初か2回目の授業で計算尺を使ったというふうに書いてありましたが。

○新井 はい。本番の授業でも教えて貰った。だけど、入試の待ち時間に教えてくれたから、あれはびっくりして覚えています。

本番の授業でも、計算尺を教えていて、「ちょっと疲れたから、運動場へ出て野球をやろう」という、気分の切り替え上手が三木先生のやり方です。10歳ぐらいしか年が違わない先生だから、なんだか本当に兄貴分という感じで、しかも、テキパキした言動と判断だから、我々生徒からしてもカッコイイ兄貴ですよね。面白い良い先生だなと思ったし、後からゆっくり尋ねたら、小学校の恩師の早瀬完一先生とは、海兵団で同期だったというから再びびっくりしましたね。

あと、主任が南組は田中清三郎先生といって歴史の先生。温厚な、しかも原村時代に私たちは三高（第三高等学校）の寮歌を教えて貰ったけど、まことに素晴らしい先生でしたね。当時、既に広島女高師（広島女子高等師範学校）の教授に転任することが決まっていたけれども、あの時代のことだから辞令が出ないし、給与も貰えないまま、しばらく附属でこのままやるわ、というので私たちと一緒に行動を取られたのだそうです。だから、敗戦が決まったら、すぐに女高師へ転勤となって附属から去って行かれました。惜しい先生でしたから、私たちは、とりわけ担任だった南組の生徒全員が残念がっていました。田中先生は、今もって忘れられない先生です。

もう一人、東組は小谷等教官。この先生は国漢の先生で、特に漢文の名手で、李白、杜甫と同時に書の名手でもありました。私たちが「謝恩碑」という慰霊碑を建てただけで、「私たち教官側も、原村出動で命を救われたのだから」と言って、わざわざ自ら筆を執り碑名を揮毫していただきました。「これは有名な中国の書家、王羲之の書体だ」と自慢しておられました。漢文を朗々と朗唱し、中国語で漢文を読み、舞台（教壇）の上で舞を舞って、信長の例の、「人間五十年、下天の内をくらぶれば、夢幻の如くなり」などという場を実演し



15. 卒業30年記念会での田辺綱雄先生

て見せてくださいました。いっぱい冗談も交えて楽しいと言うか、面白い国漢の授業でしたね。

これは旧制高校の雰囲気だな、と私は感じ取りましたね。嬉しそうに回顧談を繰り返す父から、旧制の松本高校の教官たちは、みな、独特の人間味に溢れ、奥深い感性と威厳と、個性豊かで生徒たちを感化することの多い先生ばかりだったと聞いていました。附属の先生も、旧制高校のような先生が揃っているんだなと思ったものです。

そのうえ、ずらり並んでいる先生方が、みんな髭を生やしていたり堂々たる格好の先生も多く、理科の田辺綱雄先生に至っては、顔が英国首相のチャーチルに似ているからチャー先生というアダ名が付いており、最初の出会いのとき理科の教官らしく、高空を1機だけ飛行機雲を引いて飛んでいるB-29を見て、その飛行機雲を解説してくれたのです。あんな高い空は成層圏と言うのだけど、そこは過冷却の状態にあるので、飛行機のプロペラが空気を掻き廻し、エンジンが排気ガスを撒き散らすので飛行機雲が生まれるのだと説明してくれました。田辺先生は九州の出身なので、「過冷却」を「クワ冷却」と発音する（笑）。すぐ、それで生徒の人気者になりました。「チャーが、またクワと言ったよ」なんてからかってね。面白い先生で、

年長者だから先生方の中でも一目置かれており、科学学級を中心とした広島脱出作戦の折には、理論と行動でのリーダーとして指揮命令する立場にありましたね。

建物疎開作業への学徒動員

○新井 さて、本論に入りましょう。8月6日8時15分、原子爆弾が落とされた時に広島の地面の上では、先ほど説明した中学生たち、およそ7,000～8,000人が、朝早くから働いておりました。当日は月曜日。8時15分といたら、日本の習慣から言うと、たいいてい月曜日の8時から8時半には仕事始めになります。だから原爆は、ぴったりそれを狙っている。アメリカはきちんと日本側の習慣を知って、分析しているのです。休日の日曜明けの月曜日です。一斉に揃って仕事を始めるぞという習慣。時刻もだいたい8時～8時半だが、暑い時期だから、早い時間に仕事を始めるに違いない。だから投下時刻も8時15分と決めた。これは私の勝手な推測ですが、間違いないと思っています。そういう計算のうえで、アメリカ軍は原爆を落としたのです。その真下には7,000～8,000人の中学生の男の子と女の子、小父ちゃん小母ちゃん、爺ちゃん婆ちゃんたちが、無数の蟻のように群がって、懸命に建物を壊す作業を始めていた。

私も、その建物を壊す作業をやりました。7月の頭から毎日ずっとやっていました。実は、もっと早く、6月ごろから既に建物疎開の作業は始まっていたのです。それは7月からの大規模工事の前触れではなく、兵器廠や司令部など、一部の重要な軍事施設の周囲を建物疎開によって空き地にして安全を確保する、という作業でした。

目的は違っていても、作業内容は一緒でした。建っている建物の柱を、まず鋸で切る～いわゆる大黒柱を先ず切るのです。すると家屋は一挙に倒れ易くなります。残った2階部分にロープを付けて、大人も子どもも、みんなが寄ってたかって、「えんやこら、せーの」のスタイルで引っ張る。ドサーッと建物が倒れます。

そんな記録が、実は朝日新聞社がずいぶん昔に出版した『昭和史の瞬間』という記録集の中に、写真入りで掲載されていました。当時の写真だから、非常に貴重な資料だと思うのですが、これと

同じ作業が広島で始まった訳です。朝日新聞が発行した記事に載っているのは昭和17～18年ごろの出来事ですから、ずいぶん早くから同じようなことを東京・関東方面では始めていたのですね。

広島では、昭和19年ごろから20年になって、やっと手を付け始めます。私たちが最初にやったのは5月17日です。それから1日か2日続けて裁判所の近くに出て行って、建物疎開で崩した家の残骸整理、そんな作業を1年生全員でやりました。そうしたら、その崩れた瓦礫の中から真っ黒になった死体が発見され、見つけた私たちは大騒動しました。これは仲間たちみんな覚えております。そんな作業を、既に5月には始めていました。ただ正式な防火用の空き地帯の建設みたいな構想としては、比治山を東の出発地点として、広島市内を東西に貫き、幅が100メートルで、東端から西端まで4～5キロという宏大な空き地を作ると決まったのは、6月末から7月の頭頃のようにです。

この『広島 爆心地中島』という本によると、だいたい今の平和大通りと現在の広島市役所付近を中心にして、大規模に建物を疎開する作業というのが7月の初旬に命令されています。私たちは6月の末に、その会議のことを教官方から聞いていました。何んとなれば、宮岡力先生という高師附中の学徒動員の担当教官が手記を残しています。2カ所あります。広島大学が出版した『生死の火』の中の269ページ。そこに宮岡力先生の名前で手記が残っています。それから、私たち附属の昭和20年入学組、「アカシア41期会」と呼んでいます。私たちが昭和59年7月20日、50歳に達したころに発行した『昭和二十年の記録』という本の中にも、その宮岡先生の手記が2篇載せてあり、ご健在だった当時の教官方9人に集まって戴き、被爆前後の裏面史を語って戴いた座談会でも、こういった状況の裏話が沢山語られております。同書の217ページから298ページまで、まさしく附属の被爆裏面史ですね。直接に関わった宮岡先生、満窪先生、北南東3組の担当教官も出席した回顧座談会ですから、実に微に入り細にわたっての発言が記録されています。

なお、この座談会の完全録音のカセットテープが3本、大事に保存されております。CDにも起こして保管しています。アカシア会事務局にも納



16.「昭和20年を記録する会」の音源

めてあり、今になっては貴重な音源だと思います。録音日は、昭和56年10月18日。出席教官は満窪鉄夫、宮岡力、田辺綱雄、高田平八郎、橋岡信一、藤居堅志、三木温美、田中清三郎、小谷等の各教官方です。生徒側も、大学南門で被爆し生き埋めになった村上啓介君ほか、高田、新井など16人。場所はホテル・シルクプラザ。会の名称は「昭和20年を記録する、恩師を囲む座談会」です。

まず軍から命令が出ます。こういう方針で建物疎開作業を実施するから、これに中学校、高等女学校の低学年（1～2年生）、国民学校高等科の生徒を出せ、という高飛車な命令です。これには一斉に、中学校の先生方が反対します。当然です。建物疎開作業というのは、建物をぶっ壊して、その後片付けを生徒たちがする訳です。とりわけ、その後片付けをするのは私たち中学校の低学年生徒の役目だ、というのですから先生方が猛反対するのも当然です。ガラクタの後片付けをするということは、真夏の太陽が容赦なく照り付ける青天井の下で、アリが餌に群がってそれぞれが切れっ端を引っ張って運ぶように、12～13歳の男の子や女の子、小さな子どもたちが群がって、瓦1枚、板切れ1枚、柱1本、肩に担ぎモッコで運ぶなどして、崩した建物の残骸を整理しろ、という命令です。もちろん大人もやりますが、大人は鋸で柱を切るなどの大仕事で、私たちは家屋の残骸整理です。

もし、遮蔽物など何もない頭上に敵機が飛来したら…。当時のことですから、制空権なんて日本側にはない。つまり敵機を要撃する日本機が飛び

上がって来るなどの心配は全くないから、平気でアメリカ軍の飛行機が我物顔で日本の空を飛び回っています。既に日本軍は、飛んで来るアメリカ軍の飛行機を撃退する能力など全く無くなっていたから、米軍は自由に東京や大阪に飛んで来て空襲をするという状態です。だから、もし我々が青天井のもと、そんな作業をしている最中に頭上に敵の戦闘機や爆撃機が飛んで来たら、機銃掃射や爆撃をされたら、もうヒトタマリもない。先生方全員が反対しました。絶対に危ない、危険だと。

そうすると、そこに出席していた西部軍管区司令部の司令官である陸軍中将～のちに被爆死するのですが、藤井洋治という名の陸軍中将が、苛だって手に持った軍刀をガチャンと床に突き立て、「作戦遂行上、幼少な学徒の出動は当然である。貴様たちは軍命令に反抗するのか」と発言して先生方を威嚇したそうです。

険悪な空気になったと見て、同席し沈思黙考していた県の秋吉威郎内政部長が割って入り、「空襲の際は早く避難できるように引率教師を増やし、少数毎の集団で作業に従事し、終了時刻を一般人より2時間早く切り上げる」ということで、止む無く出動に応ずることになったのだそうです。

そういうことで7月の初めから、私たち附属も朝早くから現場に出て行って、他の学校と一緒に建物疎開作業に従事しました。猛暑の時期ですから、少しでも涼しいうちにと、定刻より早く現場に行く学校が多く、学校毎に受け持つ場所が決まっているので、早々と作業に取りかかる学校が多かったのです。さもないと「お前の学校は、何やってるんだ」ということになる。だから各学



17.「建物疎開作業のようす」
(作/前田稔、所蔵/広島平和記念資料館)

校、それぞれ競争のように、自分の担当区域を少しでも早く片付けてしまおうと頑張ります。私たちも頑張って作業しましたねえ。

すると現場では、隣り合った持ち場の学生集団の中に、小学校時代の同級生たちが随分多く混じって居ました。出会って声を掛けました。

「おうい、元気かあ」。すると返って来る返事が、「お〜い、あんたら昼は何い食うたんや」という訳。そういう、お互い喰うことばかりの会話を交わして別れました。こうして作業現場で出会って別れた他校の彼らは、ほとんどが被爆して全滅してしまっただけです。私たち附属だけは、あとで詳しくお話するように、危険を察知した教官方の英断に依り、農村動員として広島から脱出するという、実質上の疎開に踏み切ったのです。

建物疎開の現場で、まともに原爆炸裂の閃光を浴びて死んでいったのは、およそ6,300人の中学校・高等女学校の1年生と2年生、国民学校高等科の生徒たちです。この6,300人という数字は、広島市平和記念資料館が公式に発表している概数です。しかし当局は、当局というのは何処なのか良く分かりませんが、動員学徒の原爆犠牲者数は、広島市外の学校を含む50校で、死者は7,196人と数えたようです。にもかかわらず、私たち被爆体験証言者は、犠牲者数は凡そ6,300人だ、と教えられ、そのように語っております。

つまり、原爆のために死んでいった学徒の人数は、調べようと思えば徹底的に調べられるはずなのに、なぜか現在まで概数しか公表されておられません。その実例のひとつ。私たち広島高師附中の犠牲者の数が、その6,300人の中にカウントされていないということです。なぜならば、たぶん建物疎開作業に従事して死んでいったのが6,300人だということであって、附属中学校のように建物疎開作業に従事しての被爆死ではなく、学徒動員命令に従っていたとは言うものの、学校独自の農耕隊としての作業中に原爆の犠牲になったのであり、建物疎開作業の犠牲者としてカウントする対象ではない、と認定されているのだらうと思われまます。

そういう扱いで、果たして宜しいのでしょうか。私には疑念がありました。それで平成16年8月6日付けで、平和記念資料館の「学徒動員企画展」

の担当者ほか被爆資料調査係宛てに、資料提供の文書を送付したことがあります。発信者としては、広島大学附属高校内の同窓会「アカシア会」事務局で、附属の「慰霊碑建立委員会」の一員としての私の名前でした。

私たち旧制の広島高等師範学校附属中学校も、学徒動員令の発令下、結構多くの生徒を原爆のため失っています。にもかかわらず、「学徒動員企画展」の何処にも関連する記載がないし、動員学徒犠牲者の数にもカウントされていないらしいのは何事でしょうか。私たちは全員、一人一人、犠牲者の個人名まで調査し明らかにしています。その高師附中の原爆死没者名簿を送付するので、更なる調査の上でカウントして欲しい、という申し入れの文書を私の名前で送りました。しかし、これに対して何処からも、何の反応もありませんでした。建物疎開作業中、という縛りのない動員令下の学徒の原爆犠牲者なら、当然、広島市内の全学校が対象となるべきではないでしょうか。

後に、動員学徒犠牲者の特別展示会というのが開催されました。その特別展示会を見に行ったら、確かに今度は附属中学校の名前は入っていました。ところがなぜか犠牲者の人数が違っていました。私たちの送った文書の、内容データ部分を転載しましょう。

* * *

- 原爆死没者（現職の教職員と在校生）
- ・教官＝岡本恒治（国漢・生徒部長）
瀬群 敦（文法・庶務部長）
仲 頼次（図画）
西村実雄（助手）、若狭良行（助手）
小松昭三（助手）
 - ・職員＝穂積 薫（事務雇）、松原 緑（事務雇）
小笠原菊三（雇員）、吉岡正一（雇員）、
草尾アサノ（雇員）
 - ・生徒（4年生）加藤恭三、光明幹郎、岡山國彦、
（3年生）梶原康紘、福原晃司、横山敏治、
松本清司、三浦亜沙夫、
（2年生）永井卓爾、
（1年生）北村龍郎、及川洋一、田村慈朗、
二宮芳樹、平本 博、増田永造、
粟屋 忍、今井啓爾、楠本惟雄、
高田作彌

* * *

教官が6人、職員が5人、生徒は4年生が3人、3年生が5人、2年生が1人、1年生が10人、合計30人。すべて固有名詞を掲げて明示しました。同窓会である「アカシア会」本部事務局の電算機で管理された会員名簿データに基づき、かなう限りご遺族にも当たって調査したものです。母校創立100周年記念事業として建立した「慰霊碑」関連事業の中で調査した正確なデータです。それなのに無視されていたり、誤った人数がカウントされているなど、不信感を抱いたままになっています。となれば、動員学徒犠牲者数6,300人という数字そのものも、少なくとも我が級友10人がカウントされておらず、不正確な数字ではないかと疑問を抱いております。

附属中学校のみならず、ほかの中学校でも生き残った生徒が何人か居ますが、私たち生き残りは、犠牲者数6,300人は正確ではないと思っています。正確な犠牲者数を、何としても調査し確定すべきである。それは生き残った私たちの、生き残っている広島の人間の、被爆を受けた広島市の責任ではないかと訴え続けております。これが私たちの主題である「悲劇の中学1年生」の現状です。

あのとき附属中学校1年生だけは、確かに7月20日、建物強制疎開作業から抜け出し、20キロ、東に離れた農村に行きました。その状況については、(本を手に取りながら)この『広島 爆心地 中島』という本の中にも明記されています。7月



18. 『広島爆心地・中島』
(新日本出版社、平成18年)

の下旬、一中、現在の国泰寺高校の会議室で、建物強制疎開作業が遅々として進まないの、作業を督励するための会議が軍の主導で開かれました。当たり前ですよ、みんな食べ物が無くて腹を減らしてフラフラなのに、そんな大変な作業がさっさと出来るはずがない。この本には、宮岡力先生の手記が堂々と転載されています。(本を読み上げながら)「広島に原爆投下のわずか十数日前の7月下旬のことであった。一中の会議室に、市内の各学校、当時の中学校の作業主任、学徒動員担当教員が集められた。中国軍管区から大尉級の将校と、県の学事課並びに労政課から視学と事務官、市からは都市計画課長等が出席された席上で、『最近の敵機の爆撃は、もっぱら焼夷弾の攻撃である。従って広島市においても早急にその避難地をつくりたい』と都市計画課長から挨拶があり」云々と会議が始まるんです。

会議が始まって、「8月2日から向こう1週間で完成させよ」という命令が出ます。この時、宮岡力先生は立ち上がって次のように発言したと記録されています。そのときの宮岡先生の発言を、この書籍を出版した人が引用しています。

宮岡先生の発言。

「いま学校に残っている1～2年生の生徒を勤労働員させることは無理である。彼らは年齢わずかに数え年14歳か15歳の少年である。今日の爆撃からすれば、空襲警報と同時に退避させるべき幼少年を、集団的に白昼下に曝して作業をさせることは余りにも無謀な計画である。幸いに私の学校、広島高等師範学校附属中学校は、以前からの計画によって1～2年生の生徒は農村の手伝い作業に出動させているので、他の学校も十分に意見を述べてしかるべきである」と発言された、と書いてあるんですね。

当時、3年生以上の上級生は既に軍関係の工場、または軍需工場に勤労働員されていたので、学校に残っているのは1～2年生の下級生だけでした。宮岡先生は、「私は隣に座っている県の学事課のある視学官の先生に『少し言い過ぎたかな』と囁いたら、視学官は、『あれで良いですよ。先生の所は国立学校だから自由な発言が出来ますが、我々は命令どおりなんですよ』と、暗に、意見や批判は許されないようなこの場の雰囲気は波

乱を呼びたいような表現であった」とも書いていらっしゃる。

そして会議が終わった時に、第一中学校の作業主任の先生は宮岡先生に「『君の所はいいよ。生徒数は少ないし自由な行動が許されるから。わたらの所は、1学年だけでも350～360人も居るんだから、どうにもならん』と、羨むような、また嘆くような囁きを漏らした」という記録が残っています。これが、附属が他の学校に先んじて広島市を脱出して行った実情と、先んじて脱出して行った附属に対する、学徒動員を所管する県の学事課や他の学校の見方を示しています。会議が終わったのち何人かの視学官や各学校の先生から、爆弾発言をした宮岡先生に「附属が先に(市外へ)出てくれるなら、それが先例だということになって、俺たちの学校も、後に続いて出ることが出来るかもしれない」との趣旨の言葉が寄せられたようです。

もし原爆が1週間でも2週間でも遅れていたなら、他の学校も、「附属が行ったのなら俺たちも出よう」ということで脱出して行ったかも知れない、というのが私たちの正直な思いです。教官方も同じことを繰り返し仰っていました。一中の先生の発言がよく出てくるのですが、後に一中の校長になった数田(猛雄)視学官なども、軍の命令に反発して、宮岡先生と同じような意見を何度も洩らしていらっしゃったと聞いています。だからこれは、悲劇の6,300人の中学1年生の実状と、それを巡る学校側、軍や県、市、国などの姿勢が読み取れる、切羽詰まった実情を表す場面だったと思われれます。

私はやはり6,300人という数字は正確にカウントして欲しい。つまり一人一人に、名前も家族も未来もあったはずなんです。各学校とも慰霊碑を建てています。だから慰霊碑を建てた学校は、それぞれ調査の実績や手掛かりが残っているはずで、改めて調査して、きちんとしたデータを提出して貰えば、正確な犠牲者数が出ないはずは無いと思う。

ただ、私たちの学校でもそうであったように、同級生に誰が居たか、なんてことが、あの大混乱の時期だから分からないままで終わってしまった、という側面はあるでしょう。何しろ私たちだって、年齢が50歳近くになっても「おい、あいつ、

居たかな居なかったかな」なんて、まだ漠然としている部分が残っていましたからね。でも、不可能じゃないと思うのです。同期の桜じゃないですか。

○石田 数田さんから何度も戦後になって、附属の後には他の学校を逃がす、そういったことを考えていたという話を聞かれたそうですが、それはどこから聞かれたのですか。

○新井 附属の宮岡先生から聞いた話です。それに数田視学官は、附属の科学学級が疎開先探して困っていたとき、ご自身の郷里である東城町を紹介して下さい、現地とも具体的な交渉までやってくださったと聞きました。だから附属の先生方は、宮岡先生を含めて数田視学官とは心安い間柄にあったと思われます。その過程で県の視学官や県立学校、市立学校の先生方などから、先に宮岡先生から聞いたように、官立の附属が先に出るなら先例になって他の学校も動きやすい、などの話が出ていたと聞きます。

○石田 数田さんに直接お会いしたのではなくて。

○新井 数田先生などから話を聞いた宮岡先生が、そういうニュアンスの発言があったと語って下さいました。数田先生が師範学校出だったということからか、父も数田先生とは顔馴染みみたいな間柄だったようです。比治山高女の国信校長も師範学校出だったので、国信先生とも父は交流があったようです。

○石田 では、人づてに何度も同じ話をいろんなルートから聞いたということですね。

○新井 はい、耳に入っておりました。宮岡先生とは戦後、しばしばコンタクトを取っていましたから。宮岡先生は手記に書いて提供して下さいました以上に、色々なことを語ってくれています。それから、広島に復帰してから後も、先生方とは何度も戦争中の話をする機会がありました。「謝恩碑」除幕式でも先生方全員が集まってくださり、「俺たちも良く生き延びたなあ」という会話が弾んでいるようでした。生徒も先生も、原爆から生き延びられたのには、やっぱり農村に合宿出動できたからだな、ということから何時も話は、そこへ移っていましたね。

数田先生のお名前は父からも聞いておりましたし、のちに一中の校長になられてからも、視学官

時代からの先生のお名前は、よく耳にしておりました。

賀茂郡原村への動員疎開の経緯

○新井 あと、多くの先生方の中で特別な存在だったのは、理事（副校長）の満窪鉄夫先生です。当時、私たち生徒は直接には存じ上げませんでした。しかし学校生活の裏で「広島脱出」に向けて活動した人物は、満窪先生と宮岡（力）先生のお二人でした。宮岡先生とは、すぐに私たちも仲良しになって、思えば酷いあだ名を付けたのですが、農場に行って農作業をする先生だから、人糞を肥タゴに入れて担いで行くので、「ジンプン」というアダ名を差上げました。実は率先垂範、自分から先ず、やって見せるタイプの先生でしたね。

そして宮岡先生には、もう一つ任務があった。学徒動員令のもとで行われる作業の生徒管理担当者として、附属中学校を代表して広島県や市、そして軍に対して直接掛け合う立場にありました。

かくて、附属中学校の学徒動員担当だった宮岡力先生と、教頭格として実質上の学校運営の責任

者だった満窪先生のお二人が、ともに同じ目標である、「大事な生徒を殺してはならぬ」という方向へと、密かに手を取り合って動き始めたのです。いや実は、私たちが入学した当初から、既にお二人は動き始めていた、というのが真実らしい。

なぜかという、4月30日、附属中学の校庭に爆弾が落ちました。B-29が爆撃の帰り際に、広島市内に20発ほど爆弾を捨てて行ったらしい。市内の各所で犠牲が出ました。そのうちの1発が、附属中学と高等師範学校の、ちょうど中間にある庭の真ん中に落ちて、直径12メートルの大穴が空き留學生が一人犠牲になりました。この事件が学校内に、極めて大きなショックを生みました。この実体験から、「これは危ない」と直感したのがお二人の先生です。広島に居たら絶対にやられる。それまで広島は、不思議なことに、ず〜っと無事でした。周りの中小都市まで全部やられているのに、なぜ広島だけ無事なのか、と誰だって考えますよね。同時に絶対的な結論も出る。「これからやられるはずだ」とね。では、どうすべきか、です。答えはヒトツ。「危険から逃れろ、脱出せよ」。

7月に入ると、呉がやられます。その呉空襲で、附属の配属将校だった寺田（角一）大尉が戦死します。呉からは大勢の避難民が広島に逃げて来て、凄まじい被災の状態がアツという間に拡がる。市内の各町内会に米が特別配給され、直ちにムスビを作って、飲み水と一緒に罹災者に配れと命令が出ます。教練で鍛えられた屈強な寺田大尉ですら、呉で戦死してしまうほど凄まじい空襲の地獄図。

これはもう、生徒たちは絶対に危ない、との判断が出る。これが第2の引き金となり、なんとしても生徒たちを、広島から脱出させなければならぬ、と学校内の空気が変わります。それを押し通したのが満窪・宮岡両先生と、科学学級の先生方でした。

満窪先生が考えたのは、先ずは科学学級を逃がす。ならば普通学級も同じように逃がすべきだ。つまり、すべての生徒を殺してはならぬという姿勢に方向が定まるのです。それで、すぐに上司である主事（学校長）に持って行きました。しかし河野通匡主事と、文理大の近藤（寿治）学長の二人とも、直ちに拒否。「中学生は一人前の兵士であるからして、死んでも持ち場を守れ」です。こ



19. 満窪鉄夫先生を囲む高田勇君と私



20. 真光神社で説明する宮岡力先生

れじゃあ話にならん、ダメだ、となった。

それで考えたのは、科学学級の生みの親、三村剛昂先生に相談しようとなった。そこで三村先生が断言するのです。「誰が何と言おうと、俺が責任を持つ。直ちに郊外に出なさい」。このことは、山野上純夫さんも証言なさっているけれど、「学長が反対しようが、主事（学校長）が反対しようが、俺が責任を持つ。広島から出なさい。科学学級を先頭にして、普通学級もすぐ市街から脱出させなさい」。

そのとき近藤学長は、広島県内を巡り歩いていました。当時から大学を西条方面に移転させるという計画があったんですね。それも、原村という陸軍演習場の近く。あの界隈に高等師範学校と文理大を移そうというので、その敷地を探すために宮岡力先生と近藤学長が一緒に出張していた。広島大学発行の『生死の火』の中に、そんな記録が残っています。当時から大学は、広島から脱出する計画があったんですね。そんなこともあって、学長が何と言おうと、とにかく生徒を広島から脱出させると決まったのが、それこそ呉空襲の直後だから7月上旬ですね。2年生は7月4日に戸野村へ農村動員として出動し、科学学級は7月9日に東城へ疎開し、7月20日には私たち1年生が原村へ農村動員として出動し、科4を除く科学学級の全員と、附属中学1～2年生の全員が郊外へと脱出して行ったのです。

その気配を逸早く、私たち普通学級の1年生は察知します。どうやら広島から脱出することになるらしいぞ、それも農村動員として農村に働きに行くことになるらしいぞ。「よっしゃ、では行くか」というので、私たち1年生も動員出動の態勢に入ります。その準備過程で「疎開」という言葉も出ましたが、私たち生徒は、単に都市から逃げ出すと言う意味の疎開ではなく、あくまでも学徒動員令に従っての農村動員挺身隊としての出動であり、堂々と学徒の本分を全うすべく、戦いの死命を決する食糧増産と食糧確保を目的とした農村への動員出動命令に基づき、隊伍を組んで堂々と出発したのです。これが原村へと出て行った我々の出動態度です。間違っても「逃げ出した」みたいな偏見の眼を持って見て貰いたくない。いわんや新聞出身某氏の如く、「附属は敵前逃亡した」な

どのいわれなき中傷発言は事実と反し、私たち附属の名誉を毀損するものとして否定せざるを得ません。

かくして私たち附属の1年生が出動の準備態勢に入ったのは、7月の10日過ぎでした。

○石田 7月の10日過ぎですか。

○新井 そのころ学校から内々に、広島から離れて地方に出て合宿生活に入るから、それに必要な物品を各人が家庭から持って来い、という指示が出ます。大所帯、大人数が合宿する訳ですから、大きな鍋や釜が要る。これは学校側で、夏の合宿訓練をやっていたから大きな蚊帳と鍋があるので、それを持って行くことにしました。それ以外に人数分の食器とか、炊事や料理の道具とか、細かい物品がいっぱい要りますよね。そういう物は各人が家から持って来いとなった。それで私は、大きなザルと諸蓋（もろぶた）を家から運びました。

○石田 もろぶた（諸蓋）って何ですか。

○新井 関東地方独特なのかな、切り餅の習慣があるので餅を搗いたあと、その餅を伸ばして切って並べて置くための、底の浅い木箱ですね。

○石田 ああ、あれを「もろぶた」と言うんですか。

○新井 はい。私はそれを供出しました。

○石田 この辺では丸餅なので、捏ねた餅を並べていました。

○新井 ああ、なるほど。私が育った関東地方では、餅をついた後は、伸ばして切って、切り餅にするわけですよ。それを浅い箱に並べていく。それを諸蓋と呼んでいました。

○石田 それは、割り振られて各家庭から供出したんですか。

○新井 いや、自宅にある道具や家庭用品を持って来い、という指示です。だから、どこか地方に出て行くらしい、ということを全員が知る訳です。これは地方に行って集団生活になる、ということが分かります。あと残った問題は、いつ、どこに行くのかです。そして18日ごろになると、今日行くか明日行くか、という雰囲気になる。18日なんて、広島駅に全員集合という命令が出たのです。ところが、集合したけど解散となって駄目になる。先生に聞いたら、切符が手に入らなかったらしい。

100人もの大集団ですよ。1年生の私たちは、総員161人のうち科学学級の三十数人が先に出て行きました。でも残りが130人ぐらい居る。うち20人ほどは、家庭の事情や体調不良のため残留部隊として広島に残るけど、あとの100人ほどは汽車に乗って出発するつもりだったけど、切符が手に入らない。今日は駄目だ、帰れ、となった訳です。そんなことで、実際に出動したのは20日です。

既に18日には準備が整っていた訳だから、持って行くべき物品は、もうトラックで運んでしまった。校庭にトラックが入って来て、大きな釜や布団やら、図書館から運び出した参考図書とか勉強道具も山ほど積み込んで、一齐に賀茂郡原村へと出発して行ったのを見送った訳です。そのトラックが、どこから来たかという、これが面白いんですよ。

○石田 どこから来たんですか。

○新井 広島の宇品港付近に、陸軍暁部隊という部隊が駐屯していました。正式名称は、陸軍船舶部隊。そのの經理部長の陸軍大佐が、科学学級1年生の前野長昭君のお父さんだった。だから学校は陸軍暁部隊の前野大佐に頼み込んで、科学学級が東城に行く時のトラックの手配とか、我々普通学級が原村に行くためのトラックの手配とか、お願いしていたのです。それから戦後になると、原村の南部廠舎という軍隊の廠舎に、暫く附属中学校が仮住まいすることになった時とか、全部、その暁部隊の經理部長だった前野大佐が手配して下さいました。つまり父兄の中に、そういう重要な人物が居たお陰で、附属中学は原爆から救われたと言って良いと思います。

例えば、正規学級の2年生は豊田郡の戸野村に行きました。やはり農村動員でね。戸野村が選ばれた理由は、2年生に湧島という生徒がいて、この生徒のお父さんが県の農林事務所長をやっていたという関係で、戸野村に引き受けて貰えたのです。2年生の戸野村への出発が7月4日。科学学級の東城町への出発が7月9日。私たち1年生が原村へと出発したのが最終便で7月20日。そして原爆が、直後の8月6日。誰もが驚いた、奇跡的な寸前脱出でした。

そういうことで、2年生が早めに戸野村へ行くことを含めて、全てそれが、生徒の父兄や父兄団

の組織的活動のお陰です。父兄団の団長である加藤悦蔵さんは、のちに息子さんと科学学級4年生だった加藤恭三さんを原爆で失うのですが、附中生徒だった息子を失う運命にも拘わらず加藤悦蔵父兄団長から終始、生徒たちの脱出について有力な支援を戴いたこと、特別な感謝の念を捧げたいと思います。

それで、私たちは入学して、4月は勉強し、5月は動員で働かされ、6月になったら暑さのなかで懸命に建物疎開作業などで働きながら、他方では農村への出動を図る。そして7月20日に私たちは堂々と出て行きました。行った先が、原村の教順寺と真光（しんこう）神社となるのですが、それは一重に、宮岡先生のお力によるものです。

宮岡先生は、1年生の受け入れ先を見つけようとして、賀茂台地あたりを自転車で走り回って、村や町に頭を下げて頼み込んでいたのですが、努力も空しく総べて駄目。しかも折悪しく夕立に遭遇して全身濡れネズミになり、止む無く自宅のある原村に辿り着いたのだそうです。その様子を見ていたお父上が、事情を察して、「村のみんなと話して諒解を戴くから、子どもたちを連れて来い」と仰ったそうです。真光神社の氏子総代など原村の有力者でもあったお父上が乗り出して下さり、一気に難問解決への道が開けたのです。

村長と相談したところ、各農家へ分宿するよりお寺に集団で泊まった方が良からう、となって教



21. 教順寺
(昭和26年頃)

順寺が検討対象となり、教順寺だけでは全員を収容し切れないから、宮岡先生のお父さんが氏子総代をしている真光神社も候補に挙がり、こうしてお寺と神社への分宿と決まる。しかし、トイレも炊事場もない。では、2年生は既に戸野村に行っていて安定しているから彼らに手伝わせよう。教順寺と真光神社に、それぞれトイレと炊事場を作らせよう。では先ず2年生による原村先遣隊を派遣して、事前作業を完成させることにして、地元のことだから宮岡先生も一緒に行こう、となりました。そういう経緯が事前にあって、私たちは7月20日に出て行った訳です。

私たち附属中学校1年生が、ようやく原村に着きます。組ごとに分かれて、北組と南組がお寺に入る。そこへ東組も到着し分かれてお宮に行くことになったけれども、そこで一人の生徒が文句を言いました、「こんな所に泊まれるもんか」と。

○石田 それは同じ中学1年生の子どもですか。

○新井 私たちの学友で、東組の粟屋忍君～実は粟屋仙吉広島市長の長男で、直前の転入生です。東京師範学校の附属中学校から転入で来たばかり、つまり、粟屋市長の指示で安全な広島へ疎開して来たばかりの転入生でした。

当時、アメリカ軍は各地へ宣伝ビラを撒いたらしいですね。「花の東京、焼け野原。疎開するなら〇〇へ」だとか。そのビラを拾って読んだ先生から、このビラのことを聞きました。初めからすべてが計画的なんだね、アメリカ軍は。そのビラ宣伝に乗せられたみたいに、東京から広島へ疎開して来たのが粟屋忍君だ、ということです。広島附属中学校に転入して、東組のメンバーに入って教順寺に来た。お寺を見て、「こんなボロっちな所に泊まれるか」と暴言を吐いた。

父親の粟屋仙吉さんという人は、もともと大阪府警察部長だった時代に、いわゆる陸軍とのゴースト事件～「信号無視とは、例え軍人であっても違反は違反だ」という、軍隊に対して一歩も引かなかった硬骨漢の人物です。その息子が、農村への動員出動先で暴言を吐いた。そのとき傍にいて暴言を聞いたのが、数日前から先遣隊として原村へ派遣され、1年生のため便所や炊事場の建設作業を終えたばかりの2年生数人。即座に、「何を言うか、生意気な」という訳で、2年生が粟屋

君をぶん殴った。本人は「わっ」とばかりに泣き出して、先生に訴えたいらしいのです。

○石田 訴えたんですか。

○新井 そう。「帰る」と言い出したらしい。担任の小谷先生は、折悪しく、その場に居なかった。それで宮岡先生～学徒動員を仕切っていた先生が、「広島に帰りたい」という粟屋君の訴えを聞いたらしいのです。ところが、その場にいてすべてを目撃していた旧友が、最近になって連絡が取れて数十年ぶりに再会を果たしたのですが、その彼、潮田史郎君は現場を目撃していたうえに、なんと8月4日、この潮田史郎君は、担任の小谷等先生と粟屋忍君と3人で広島に帰った、と証言したのです。事件発生は7月20日、直後に広島に帰ったと思われた粟屋忍君が、何と8月4日になって小谷先生らとともに広島に帰ったという明確な証言が出て来た。謎が深まりました。生徒は、教官と父兄の許可がなければ帰れないはずなのに、本人は直後に帰ってしまったはずだった、のにです。

○石田 黙って？

○新井 分からない。そこが不思議なんです。

○石田 消えたんですか。

○新井 どうなったのかが不明。お母さんがあくる日に寺に来たそうで、お母さんに宮岡先生が事情を説明して、その日は、お母さんだけが帰って行ったそうだけど、本人はどうしたのだろう。

今回の潮田史郎証言によれば、潮田君は7月20



22. 真光神社
(昭和26年頃)

日、真光神社に到着した直後、担任の小谷等教官の命で教順寺へ手紙を届けることになり、初めての田舎道を迷いながらお寺へ着いたトタン、寺の外で2人の上級生に叱られて泣いている粟屋忍君に出会ったと言うのです。しかも8月4日、体調を崩した潮田君は、小谷教官と共に列車で広島に戻って被爆するのですが、その4日になんと、粟屋忍君も一緒だったというのです。そんなことがあって、原村へ着いた当日なのか8月4日なのか今もって不明だけど、粟屋君は広島に帰って8月6日、お父さんと一緒に市長官舎で白骨となって発見されます。自宅に帰っていなければ、彼は生き残ったはずなんだ。これらのことを含めて、粟屋一族のことが本になって出ています。生き残ったお姉さんが被爆後に広島へ救援に入り、残留放射能によって亡くなります。でも日記を残していた。その日記を中心にして、ある作家が粟屋一家を取り上げ『康子十九歳、戦禍の日記』（門田隆将著、文芸春秋発行）と題して出版しています。私も持っています。忍君がそうやって広島に来て、お父さんと一緒に亡くなったということも記録されておりますが、原村での一件は、その何処にも記載されておられません。ここにも、ひとつのヒロシマの謎か、幻影か、伝説が、生まれつつあるのでしょうか。

原村での動員疎開生活

○新井 そういう事件があって、私たちは原村に居着きます。居着いて何をやったかという、それぞれ5～6人ずつの班に分かれて農家に行って、農作業の手伝いをする。当時、ちょうど7月20日は稲が伸びて、雑草が増えて、それを取らなくてはいかんというので、私たちがやった仕事は田んぼの稲の草取りです。機械もないから、ズボンをまくって泥田に入って手でかき回すしかない。それをやると、足にヒルが吸い付いて来る。7月は暑かったから、かんかん照り、稲は伸びている。ほったたを突つつく。汗びっしょり。私もやったけれど辛かったですね、ホント疲れた。

すると農家のお婆ちゃんが、「ちょっとおいで、坊や」と軒下と呼んでくれるわけ。「これ、お食べ」といって、人によって、おはぎ、おむすび、お団子などを下さるのです。食べましたよ。でも、食

べない者もいた。私も食べなかった方かな。

○石田 なんて食べなかったんですか。

○新井 寺に持って帰って、みんなと一緒に食べるんです。

○石田 なるほど、そういうことなんですね。

○新井 何回か私もそうした。自分だけ食べるのはやっぱり、申し訳ないじゃないですか。

○石田 分けるぐらいたくさん貰ったんですか。

○新井 いやいや、1人に1個か2個。それで何人かで行くから、合わせれば4個か5個にはなる。でも、寺に帰ったら80人くらいは居るんです。待っているのが。だから持って帰った。

○石田 どうやって、それを分けるんですか。

○新井 みんな喜んで食べた。分けるたって、指の先に何粒かくっ付けるみたいにして食べた。銀シャリです。それは旨かった。その味は忘れられません。だから、私たちは社会人になって、旅行して、出張して弁当を買いますよね。弁当の蓋に米粒が付いている。絶対に捨てませんね。先ず蓋から抉り取って食べます。みんなそうですね。だから、弁当のご飯は一粒も残さず綺麗に食べます。

あの農家で貰って食べたおはぎの味とか、貰ってみんなで分けて食べたおむすびって、本当に忘れられない美味しさでした。食べることは命につながっているということを、本当に実感したなあ。極限の毎日を過ごしている我々ですから、教官も見かねて傍に来て、「これもお国のためだから頑張ってくれ。頑張った者から～出勤回数の多い者から順番に、広島へ帰省することを許す。だから頑張れ」。これって、アメとムチですよ。でもこれで希望が湧いて来て、私は頑張りました。

そして頑張って、最初の帰省組に選ばれたのです。そして教官殿に最も大事な質問をします。「選んで戴いて有難うございます。それで、いつ帰って良いのですか」。すると返ってきた答えが、こうでした。「ようし、8月6日、帰って宜しい」

本当に何にも知らず、帰省者第1班の5人に選ばれました。生徒は5人ですが、実はもう一人いたんです。お母さんが一人来ていた。永谷義和君のお母さんが、差し入れか何かを持って来ていて、それで一緒に帰ろう、ということになって、付き添いの形になった永谷君のお母さんと共に、6人

で帰ることになりました。第1回の帰省班だから、みんなから羨ましがられてね。

○石田 ちょっと待ってください。お話を一回切ってお伺いしたいんですが、7月の18日～20日にかけて原村に行く時に、ご両親はどんな反応だったんですか。

○新井 動員の連続～続き。行き先が広島市内の建物疎開から農村に替わっただけで、遠くに行くのだから合宿になる。幼いのに可哀そうだ。汚れものの洗濯だとか、衣服の破れを自分で繕えるか、なんてことを心配していました。ほかは、食べ物は何を持たせてやろうか、ということぐらいかな。

○石田 手元から中学校1年生の子が離れていくということに対しては。

○新井 弟が集団疎開に出て行った時は、命を助けて貰えるというので、喜んで送り出したようだけど、中学1年生の私たちが農村に行くということについて、田舎に疎開出来て良かった、などと嬉しそうな顔をした人は父兄団で誰もいません。よくぞ健気に、ベソもかかず、国のためだから我慢して頑張れ。服が破れても、ボタンが取れても、みな自分で直さなければならぬのだから。本当に食べるものもない時代。頑張ってきてくれ、という励ましの言葉ばかりでした。戦時中ですから。

だから私たちは、勇んで出発しましたよ。本当にあの時は勢いよく出発した。2列縦隊で八本松の駅から寺まで、ダッダダと荷物を持って歩いてね。そんな感じ。だから、父兄の皆さんも、疎開、脱出、命が助かる、などの実感を表に出す人は皆無でした。一途な軍国少年と家族ですね。

○石田 あと、原村に行く時にどういったものを身の回りのものとして持っていかれたんですか。どのぐらいの分量だったんですか。

○新井 父から貰った登山用のリュックサックと、昔ながらの皮製のトランクだけでした。身の回りのものは洗面道具、裁縫道具、勉強道具、日記帳。それに食べるものとしては、茶筒の缶に焼いた大豆をギッシリ詰めて、それだけ。これがあの当時の唯一の保存食だったなあ。

○石田 勉強道具は一式持っていかれたんですか、教科書とか。

○新井 うーん、何を置いていったか覚えてないな。出の悪いペンと鉛筆、消しゴム、切り出しナ

イフ。それまでに書き始めていた日記帳、勉強ノートと、あとは何を持って行ったかな。理数系の教科書は配られていた記憶があるんだけど、国語や英語の教科書は配られた覚えがない。だから、たぶんプリントか何か。先生がガリ版で印刷してくださったもの。だって原爆で先生が二人被爆死しているけど、二人とも教室内でガリ版を切りながら亡くなっているんだから、ガリ版で作ってくれた教材。そんなものかな。あとは、僅かな参考書。私は父から古い歴史書を貰って持って行ったな。それと英語の書いてある小さな本があった。何だったのか覚えていないな。

○石田 では、かばんといっても、大きなかばんではなくて、小さいかばんに入るぐらいなんですかね。

○新井 私はカバンじゃなくてトランクです。今でも大事に残してあるんですが、寅さんの映画がありますね。寅さんがトランクを持って来ましょう、古い、時代ものの革製のもの、あれです。

○石田 では、結構大きいんじゃないですか。

○新井 大きいかなあ。あれは父の持ち物ですが、借りて行ったのです。他のみんなは、たいてい袋か柳行李ですね。柳行李って持ち難いのです。

○石田 分かります、単なる箱ですもんね（笑）。

○新井 だから私はリュックとトランクにしたんです。あと髪の毛を刈らなきゃいかんから、私は手動のバリカンを持っていたので、それかなあ。あとはシャツと靴下の替え、破れを直すための当て布。正露丸とか幾らかの薬。ほんと、身の回りのものだけ着たきり雀だな。夏だから良かったけど、誰も冬までかかるとは思っていないんだ。

○石田 なるほど。

○新井 だから、冬支度なし。

○石田 短時間で、また戻って来るだろうという思いだったんですかね。

○新井 そういう感覚。冬の予想などゼロ。だから、後から冬の布団なんかを持ちに帰るんだけど、冬の感覚ゼロでした。

○石田 あと、原村に行かれてからは非常にひどい食事だという話で、「雑巾汁」でしたか、雑草の塩汁ばかり食べたのですか。

○新井 お米の配給があるということになっていたけど、ありません。「遅配・欠配」という言葉

を知っていますか。すべての物資が配給制になっていました。「遅配」というのは遅れるコト。「欠配」は配給ナシということ。欠配のほうが多いんだ。遅れるのは、もう当たり前。何月何日にコメが来るなんてことが決まっても、来やしません。「どうしたんだ」と言ったら「駄目でした」で終わる。「仕方ないね」で、ハイ、オシマイ。

配給所というのは、覚えているのは米屋だったけど、貰うのは玄米。ということは、配給米を貰ったら、自分で搗かなければならない。例の一升瓶に入れて棒で搗くスタイル。さもなくば、そのまま食べる。そのまま食べたけど、あれは消化されずに、ポロッと出ちゃうからね。

○石田 そうですね（笑）。

○新井 だから玄米と、あと、押し麦は分かりませんか。

○石田 分かります。

○新井 押し麦と、それからトウモロコシ、アワ、ヒエ、コーリャン、切り干し芋。サツマイモを切ったものだったらいいほうで、切り干し大根。配給の麦の大部分が押し麦でしたけど、最後に、日記に残っているんだけど、脱穀しないままの麦が出てきたことがある。

○石田 「尾が付いた」というふうに書かれてい

ましたね。

○新井 これには驚いた。仲間同士で、「しっぽ麦」と呼んだけどね。

○石田 まだ、もみ殻が付いている麦なんですか。

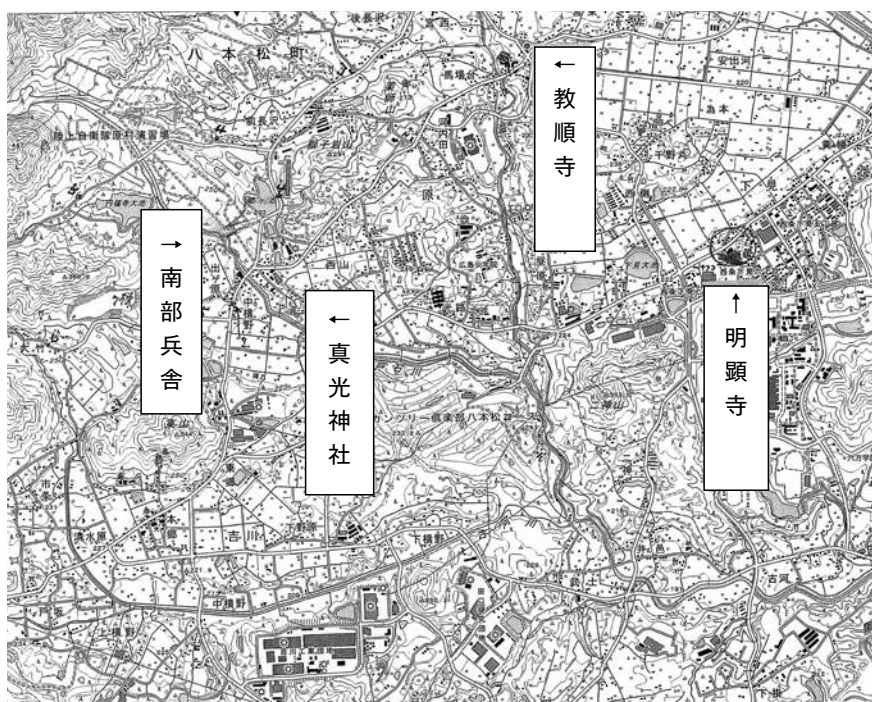
○新井 もみ殻の、鋭いしっぽが付いたままの麦が、堂々と配給になって出てきた。日記の中に残っているけど、さすがに唾然として書き残していません。とんでもない、食べられやしない。

あとは、配給というよりも、あちこちから手に入れた、米ぬか、おから、それから脱脂粉乳をつくった残り殻、酒かす～これは大御馳走でした。

とにかく、ありとあらゆる物を、どこからか手に入れていましたね。先生方も、学校としても、どこからか手に入れて来た。どうも学校が町の役場の人にコネがあったと思うんです。以前、昔を偲ぶ座談会で、ある先生が発言して、「子どものみんなには言えないけど、一升瓶2本持って行ったな」と仰った。その次の一言で、大爆笑。

「大人の世界では、そういうこともあるものです」

肉は、たまに配給があった。何の肉か分からない。魚の肉、これもたまにあった。鶏肉なら立派なものです。各家庭では、たいてい、ウサギか鶏を飼っていました。ただし、落とせなかったなあ。私の家でも、鶏もウサギも飼っていたけど、鶏肉



23. 原村周辺図

(出典：国土地理院発行2.5万分1地形図)

など食べた記憶はあるけど、子どもの時分に飼っていた動物を殺したという場面は記憶にありません。両親が、何処かへ持って行って、ちゃんと肉にして持ち帰ったのでしょうか。お寺や農園の時代でも、時々そんなのが回って来て、配給で回って来たのか、闇で回って来るかどうか知らないけど。ほとんど肉なんて食べたことはなかった。

○石田 それでは広島市内の時はなんとか食べられたけど、原村にいったら全然食べられなかったんですか。

○新井 原村でたまに肉が出たことがあったけど、あれは馬肉だったらいい。何でかというのと、そばに陸軍の兵舎があって、軍馬が結構いたんです。馬が病気で死ぬじゃないですか。それをサバイト食べていたんだと思われます。「今日は馬肉が出た」と日記に出ています。子どもにも分かったのかな。

○石田 味がはっきりと分かるんですね。

○新井 かたかったしね。馬肉が出たのは戦後だったかもしれないな。とにかく、ありとあらゆるものを食べていたけど、肉なんて本当にお目にかかることはなかったな。あとは、カボチャとか、根菜類ね。家庭でも作ったけど、配給でも出ました。原村で出てきた食べ物、そんなところかな。配給の食糧などは、農協まで受け取りに行きました。さもなくば、先生方の実家です。私の主任の三木先生の奥さんの実家が、すぐそばの志和町にあったので、そこまでみんなで大八車を引いて、ジャガイモを頂戴しに行ったことがありましたね。

だから、みんな痩せて、夜は寝ながらシクシク泣くし、布団の中でボロボロと密かに持ち込んだ煎り豆をかじる音がする。そしたら「おい、寄こせ」という声がする。寄こさなかったら、喧嘩になる。だから喧嘩も結構あったなあ。

○石田 やっぱり、そうなんですか。

○新井 本堂の中には自分の荷物は置けないから、本堂を囲んでいる廊下に自分の私物を、それぞれ場所を決めて置きました。雨が降ったら、全部、濡れる。仕方ないですよ。本堂の中は住む所であって、畳一枚に2人くらいが寝たっていう感じかな。蚊帳はありました。附属では夏の臨海教育のために、大型の蚊帳を持って居たので、それを一斉に持ち出して、蚊の攻撃からは助かった

のです。

その代わりに、お寺はノミがいっぱい居た。

○石田 待ってください。新井さんは真光神社のほうですか。

○新井 いいえ、私はお寺のほう。

○石田 教順寺のほうだったんですね。だから、まだ壁があるほうなんですね。

○新井 お寺はちゃんと壁があります。神社の方は3方に壁がないから、どうしたんだろうな。どうしようもないよね。吹きさらしだ。だから真光神社に行った東組は、北や南に比べ割を食ったことになります。なぜ東組が条件の悪い神社に行ったかという、担任の小谷先生が最年長で学年主任でした。だから、わざわざ条件の悪い所を引き受けたんです。だから一組42人のはずなのに、神社に来た東組は30人も居なかったな。相当数が広島に残っていた。病気がとかなんとか理屈を付けてね、きっと。

○石田 そうなんですか。

○新井 たぶん、そう思う。

○石田 それが小谷先生のクラスですか。

○新井 東組の全員42人が、神社に居られたはずがない。寝られるはずがない、狭いんだから。寝られたとしても、せいぜい30人かなあ。あとはどうしたかと思ったら消えていたな。広島には30人ぐらい残っていたけれど、東組の者が多かった。だから、火傷をしたりしたのも東組が多い。

○石田 そうなんですか。

○新井 東組は、途中で4～5人ずつ広島に帰って行くんです。日記の中に記述が残っています。先生に連れられて、腹を下したので広島に何人が帰って行ったとね。先ほどの話に出た潮田君もそうだけど、腹の具合が悪くなった人が多くて、先生と一緒に広島に帰ってしまった。潮田君は、戦後ずっと消息不明で、広島に残っていて被爆して亡くなったのではないか、ということだったんですが、あれから数十年後の2018年、消息が判明した。健在でした。私の知人からの情報で消息が分かり、西宮に居た彼に連絡して再会を果たしました。「俺は、広島に居たんだ。腹が痛くて広島に帰っていた。自宅で寝て漫画を読んでいて、直接被爆した」と言うのです。被爆の場所は何処だと尋ねたら、翠町の旧制広高の教官官舎だった。すぐ隣

が、岡田渥美君という同級生の官舎だったという訳です。潮田君は被爆後すぐ、大阪に逃げたんだそうです。お父さんの実家らしい。

ということで、東組は、結構、消息不明になったと同時に、そういう具合に、途中でどンドン姿が消えていった者が多い。だから、この「被爆時の級友動静表」を見て貰っても、それが分かりません。東組は、結構消えているのです。

○石田 2週間の中に、東組はばらばらと脱落した感じなんですね。

○新井 そうですね。毎日点呼を取っていたはずだけど、点呼の記録なんか残っていないしね。

○石田 なるほど、そういう事情なんですね。

○新井 戦後、一斉に相当数が消えてしまっています。なにしろ総員161人のうち84人。少なく見ても60人が、戦後すぐに消えているから半分近い。そういう形で、不本意ながら消えざるを得ない事情が、各家庭にあったということです。それで、いよいよ広島へと話に移ることになります。

第2章 原爆被災

8月6日の体験（原村を出発）

○石田 そうですね。では、8月6日のお話をお願いします。

○新井 そうしましょう。東組、南組、北組とも作業内容も一緒だし、ただ住む場所がお寺の本堂か、神社の拝殿かという環境が違ったということと、それに顔を洗うのも洗濯も共に、寺も神社も、前を流れる小川だったとか、地元から1人、若いお嬢さんを雇って炊事をして貰ったとか、戦後、そのお嬢さんとは再会して「有難う」とお礼を言ったとか、いろんなことがありましたね。

そして「よく頑張った者から広島に帰してやる」というアメとムチが出たので、ますます頑張りながら、楽しみが一つ増えて、5人が選ばれました。決まったのは8月4日の土曜日だった。寺の本堂に全員集めて、「これから第1回の帰省者を発表する」というので、北組、南組が集合した。なぜか、東組はゼロ。さっき言ったように、東組は早々と何人かが広島に帰っているからです。だから東組は選ばれず、北組と南組から5人選ばれて、東組はゼロ。その理由が後になって分かりました。つまり4～5日前に、東組の何人かが先生に連れられて広島へ帰っちゃっているからですよ。

○石田 それで東組の人から文句は出なかったんですか。

○新井 聞きませんでしたね。だいいち、発表のあった寺に居たのは北組と南組だけだから、広島に帰る5人は北と南だけ。

それで北組は私・新井俊一郎と笠間弘丈と西川亮の3人。南組は高田勇と西川廉行の2人です。西川廉行君は、後に正倉院御物の担当をしたり、東大寺の「萬葉の園」の顧問になったり、古代史古代遺物の研究家で有名になるという人物。彼のお父上も被爆死していて、形見の軍刀を過日、記念資料館に寄託しております。この5人でした。

今、生き残っているのは、新井と高田の2人だけ。笠間弘丈君は、実は早くから肺結核という持病があった。卒業して割と早い昭和41年4月11日に肺結核が悪化して亡くなります。両西川君。先ず西川廉行君は、京都在住時代の平成19年9月12日、心筋梗塞で亡くなります。広島大学教授だっ

た西川亮君は、定年退官の直後の平成8年4月22日に、これも脳梗塞で急逝します。残ったのは私・新井と高田勇君ですが、高田君も心筋梗塞を何度もやっけていて、何度もステントを挿入する手術を受けており、特別被爆者に認定された患者として治療中です。私は今、4回のがんを重ねて、放射線起因重複ガンだろうということで鎌田七男先生から認定を受けました。「0.6シーベルトの放射線を受けていたことが原因で、新井さんは放射線起因による多発性がん患者だ。入市被爆者としては希少な事例だから、ぜひとも私の研究対象患者になってくれたまえ」ということで、喜んで鎌田七男先生のお世話になっております。

ですから、現在、元気で健在という者は1人もおりません。これが被爆者というものの、ないしは原子爆弾という究極兵器の怖さと執念深さを表していると思われまます。いったん原子爆弾の放射線を浴びた者は、いつまでも、どこまでも、ずっと追いかけて回されて、寿命か放射線かの何れかで相手が死に至るまで追いかけて回される、というのが核兵器というものの本質です。これを理解しなければ、核兵器という怪物の悪魔性の本質を理解したことにならない。だから私たちは「核兵器なるものは人間が扱うべきものではない」という主張をしているわけです。だから、1945年8月6日は、その後の世界の在り方そのものを切り替えてしまった大変な日だったということです。その日について、これからお話をしましょう。

8月6日が来ました。級友たちから羨ましがられます。「ええのう、お前らだけ早う広島へ帰って。わしらは、ずっと後になるんじゃろうけえ」。そういう訳で、手紙をいっぱい預かります。なぜならば、あの当時、ポストに手紙を入れても相手にきちんと届くかどうか保証がなかった時代です。誰が配達するんですか。誰が行き先を探して配達に行くんですか。そんなことが出来る元気者は居ません。居たとしても、僅かに老人たちだけです。だからポストには入れたけれども……、となるのが当たり前なので、「おい、持って行ってくれや」とずいぶん頼まれて、リュックサックの中は手紙でいっぱいでした。あとは汚れ物。そして、どういわけか、私は日記帳を持って帰っています。

その後の運命も知らず、呑気に5人とお母さん

1人の6人が寺を出発します。実は寺を出発した組が八本松という国鉄の駅まで向かうんだけど、その途中に分かれ道があって、松根油を採取する場所として知られたところが小休止する場所でもあったので、そこで早弁を食った。

そのとき、頭の上をB-29が1機だけ超高空を、広島に向かって飛んで行きました。広島に先乗りをした米軍の気象観測機です。あれが「広島は天気良好。原爆投下OK」という暗号無電を打ったため広島の運命が決まったのだけど、そんなことは知らないまま私たちは、「また1機だけ来やがった。遊びに来やがったのか」と悪口を言いながら、そこで弁当を食べて、腰を上げて八本松駅に向かって行きます。八本松の駅からは、広島に向けて8時38分の下り列車が出るはずだったから、それを狙って出発したわけです。

8月6日の体験（八本松駅）

八本松駅に着いたのは、所定時刻の1時間以上前だったと思います。当時、あの時代ですから、ダイヤどおりに列車が来るはずがない。来たとしても、客車が来るとは限らない。天蓋のない無蓋列車、石炭を積む天井のない貨物列車が来て、それに乗り込むのが当たり前の時代です。だから、いつ来るかなと思いながら、何気なく広島の方角を眺めていました。1台か2台、軍用列車が、轟然と通り過ぎて行ったのを覚えています。

8時38分の列車を待つために下り線ホームに行くべきですが、あの当時は、駅のホームの上り線側に駅舎があったので、その待合室に居ました。そろそろ線路を渡って下り線側に行かなければならないと思いながら、上り列車側のホームに出ます。その時が8時15分です。私だけが出ました。他のメンバーは、まだ駅舎の中に居たようです。私は上り線のホームに出て、何気なく、何故か広島方面を見ていました。普通なら列車が来る東京方面を見るのですが、逆ですよ。

なぜか広島方面を見た途端、8時15分になりました。なだらかな山の谷間のくびれた向こう側、線路が延びて行った彼方が広島方面で、その空が炸裂しました。

空全体がギラッと光ったんです。色彩はどうだったか、なんて尋ねられたら困るなあ、空全体



24. 「私は原爆炸裂の瞬間、凄まじい閃光と避退するB29を見た」

（作／山田紬生、所蔵／広島平和記念資料館）

が煌めいて白銀色に吹っ飛んだ。怪しげに微かな青い光の帯が揺らめいたと見えただけ、何色で吹っ飛んだか分からない。空がギラッと青白く無数の渦を巻き込むように裂けた、という感じ。目が眩みます。例えて言えば、目の前30センチにカメラを5台か6台を並べ、目に向かって真正面から一斉にパッと、まともにフラッシュを光らせた、そんな感じです。

目が眩み、一瞬、世界が真っ白に吹っ飛んで目が見えなくなった、はずなのですが、私が目の奥に感じたのは確かに紫色かピンクに近い、不思議な輝きに広島側の空が一瞬のうちに染まって、池に石を投げて波がパーッと広がるように、広島方面の空一面に、眼も眩む明るさの煌めく光のリングが広がって、物凄い勢いで頭の真上に飛んで来たと思った。光の速さの何倍ものスピードでザーッと頭上に来たっ、と思ったトタン、全身を棍棒でぶん殴られたみたいに、ズッシーンと強烈なショックが貫きました。

原爆のことをピカドンと言います。ピカッと光って、ドンと鳴った。確かにそうかも知れませんが、どこか、遠くの安全な場所で見えた人はね。でも、まともに食らった私なんか、そうじゃない。クラッと目が眩んで、何も見えなくなったのに、見えないはずなのに見えたんだ。広島空がギラッと吹っ飛んで、ピンクか紫に変わった空の色の波がパーッと飛んで来て、そのまま頭の上に来た途端、ガッシーンと、私の全身をぶちの

めすショックに見舞われた。

私たちは訓練を受けていました。爆撃を受けたら、両手で目と耳を押さえて地べたに突っ伏せと。そのとき、その通り行動したのかどうかも覚えてないけど、何かやったのでしょうか。目を塞いだらなにも見えるはずがないのに、燃えて煌めく空が見えた。すぐ起き上がった瞬間、パーッと、そういう情景が見えたのかな、見えたのは間違いない。

途端に、広島方面の空～谷間から、猛烈な勢いで火山の噴火ですね。まだキノコ雲にはなっていない猛烈な噴火です、火山の噴火が1カ所、2カ所じゃない、4～5カ所から一斉にグアーツと空に噴き上げて行って、猛烈な勢いで煙と炎を巻き込みながら燃え上がって行って、紅蓮（ぐれん）の炎と言うから赤いような銀色のような、白いような黄色いような、様々な色彩が煌めいて、渦を巻き込むように炎を巻き込みながら、グイグイ、凄い勢いで宙空へ立ち昇って行く。

その昇って行く雲の右上に、点々と3つ、白いものが揺れていました。パラシュートです。「パラシュートに吊るして爆弾を落としたな」と一瞬、思ったけど違う。あれは観測用のラジオゾンデです。それがユラユラと、入道雲の右端の高い空で揺れていて、吹き上がった猛烈な炎と煙は、アツという間に物凄い勢いでグイグイ空高く登って行く。これもアツという間に1万メートル上空まで達したと言われて居ますが、それはそれは物凄い勢いです。

八本松駅の付近は騒然となっていました。何事が起ったのか分からないけど、なんだか猛烈な気配がしたと、5人のうちの1人、西川廉行君の手記が語ります。ギラッと空が裂ける寸前、超低空で頭上を巨人爆撃機のB-29が一機、キーンと金属性の轟音を残して飛び去ったのを見たそうです。そうかもしれない、と私は感じます。何事が猛烈な気配がしたのは、そのせいだったのかも知れません。

八本松の駅にいた人は、広島で火薬庫が爆発したんじゃないか、海田町の火薬庫の爆発だ、とかなんとか言い合っていました。でも、確かなことは誰にも分からない。下りの列車はなかなか来ない。そのうちに軍用列車がゴーッと通過して、待ちに待って、やっと来た列車は貨物列車のような、

ボロボロの客車のような妙な列車でした。もう時刻は10時近くになっていたかな、結構、時間が経ったころ、やっと下り列車が来た。私たち中学生5人が乗り込んで、広島に向かってガタンと揺れて発車しました。

次の駅までにトンネルが4つあるんです。長いのと、短いのとトンネルを一つずつくぐって行き、まるでスローモーションみたいに通り抜けて次の瀬野駅まで来たら、ホームに入った途端にガタンと列車が止まってしまった。止まったきり動かない。車掌がホームを前から後ろに言って回る。

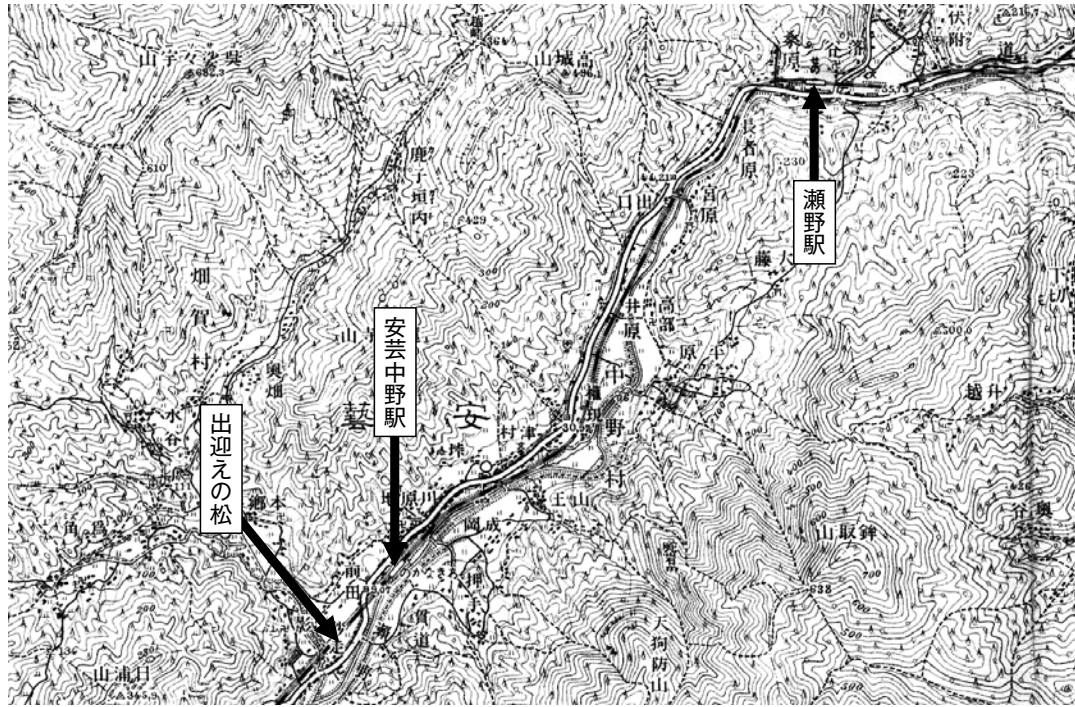
「列車は運行停止。広島方面で何かあったらしいので、ここで運行中止。全員降りろ、下車せよ」全員、降ろされてしまった。

降ろされて、我々5人は瀬野駅のホームで、どうするか話し合いました。実は私たちは、もう一つの任務を担っていたんです。広島に帰省を許すには、条件がありました。「お前たちを伝令に任命する。我々は農村動員挺身隊として出勤せよ、との命令に依って原村で頑張っている。その活動報告書を持って行き、広島の学校本部に提出せよ。新井に渡すから、間違いなく持って行け」ということで、私が大事な公文書を預かっていたんです。

私は名前が新井だから、アイウエオ順で、たいてい良いことも悪いことも、みんな私に持って来られることが多いので、公文書を預かっていた。それを学校本部に届けなければならない。これは命令でありました。当時の中学1年生と言うのは、命令には絶対服従です。今の人たちには理解不能でしょうが、絶対服従。死んでも命令を遂行せよという時代です。だから、なんとしても広島に行かなきゃならん。それに、あの炎の下は間違いなく広島だ。ということは父も母も学校も、あの炎と煙の下にある。やっぱり行こう、となった。列車は動かない。どうやって行けば良いのかと言えば、もう歩くしかない。広島まで15キロはあるが、その道を歩こうということになった。10時ごろです。

5人がホームから降り道路に出て、広島に向かって歩こうとしました。駅前には民家があり、商店が並んでいる。どこか家の中から、大声が聞こえて来た。8月で暑いから何処もみなドアを開け放して、そこから男の人の声がした。

「こちら広島、こちら広島」と怒鳴っている。「こ



25. 瀬野～安芸中野周辺図

(出典：地理調査所発行2.5万分1地形図、所蔵／広島市公文書館)

ちら広島、広島全滅」とハッキリ聞こえた。次に「救援を請う」これは「助けてくれ」ですね。

この声はアナウンサーじゃない。40～50代の大人の人が、悲鳴を上げるように「こちら広島。広島全滅。救援を請う」と叫んでいるんです。

そのあとに、「大阪さん、大阪さん、聞こえたら連絡してください。岡山さん、岡山さん」と続いた。これはラジオです。ラジオ放送の電波を使って、広島から大阪と岡山を呼んで助けを求めている。当時、民放はないからNHKだけです。しかもNHKは戦時中、「NHK」とは呼ばれていません。「日本放送協会」です。その頭文字がNHKなのです。日本放送協会の広島放送局の誰かが、こうやって悲鳴のように助けを求めている。しかも、ラジオの電波で、です。無線とか電話じゃない。確かにラジオの放送で「広島全滅」と聞いた。

そこから先、私たち中学1年生5人とお母さん1人の6人が、何処を、どうやって広島に辿り着いたかほとんど覚えていません。ただ一つ間違いないのは、旧国道の山陽道ですね、通称「西国街道」を通過して広島へ向かったはず。戦後、瀬野駅前の戸別詳細地図を地元の人たちに描いて貰ったのですが、その地図を見ても、駅の線路に

沿って通っていたはずの旧国道が消えている。つまり国道が線路沿いの藪の中に消えてしまい、今や新しい道路が出来て、反対側の川岸を新国道となって走っている訳です。後日、あの日に私たちが通ったはずのルートを辿ってみよう、と試みた人が何人居るのですが、すっかり様子が変わってしまっていて、とうとう目的は達成出来なかったそうです。

あの日、とにかく私たちは、その旧国道を広島に向かって歩き始めました。時間は、もう10時をだいぶ回っていたと思います。

歩き続けて、次が中野の駅です。正式な駅名は安芸中野駅です。現在は、その前に新しく別の駅が出来ていますが、当時は存在しません。瀬野駅から来て、安芸中野の駅前を通る旧国道の山陽道を歩いて、そして松並木が残っている街道へと向かいました。当時の旧国道には、必ずと言って良いほど松並木があります。中野には、昔のままに松並木が残っている場所が一カ所だけ、瀬野川の堤防沿いにあります。松並木通りです。

そこまで来た時に広島方面から、その松並木道に現れたのが、無数の幽鬼の群れです。まるで雲霞（うんか）の如く湧き出た被爆者の群れです。

時刻はお昼ごろです。近くの農家で、お昼代わりに水を貰って飲んだのを覚えている。

ということは、被爆したのは朝の8時15分だから、それからお昼ごろまでかけて、安芸中野と言えば広島から10キロぐらいかな。そんな遠くまで必死の思いで、何時間もかけてフラフラの状態のまま、よくぞ歩いて逃げたものだと思いますが、何百人、いえ何千人もの人が、男か女かも分からないほど、全身が赤裸に剥けている。頭と言えばチリチリの髪か、赤剥げの坊主頭。全身がテラテラ光る体液にまみれた赤裸で、腰の辺りに何か巻き付いているものがある。着ていた衣服の切れ端かと思ったら違うんです。自分の体の皮膚がズルりと剥がれて、腰の周りに布切れみたいに巻き付いているのです。

そのうえ、顔がみな風船みたいにパンパンに膨れてしまって、みんな両手を身体の前に差し出して、まるで怪談話に出て来るお化けの「恨めしや」の姿ソックリ。それがみな一斉に、少し低めに前へ両の手を差し出して、しかも全員が手の先からボロ布のような、包帯のようなものを地面スレスレに垂らしているんです。

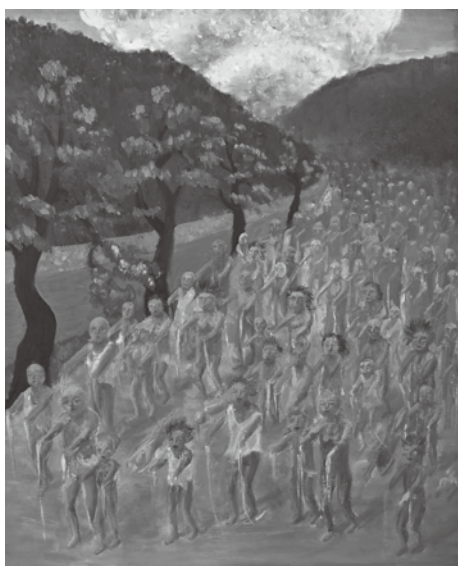
「ええっ」と思いました。そのボロ布のような物をジーンと見詰めて愕然としました。言葉を失いました。それは自分の体の皮膚なんです。全身と両腕の皮膚がズルッと剥けて、腕なんか、ちょ

うど手袋か靴下をクルクルっと脱いだみたいに、綺麗にクルリと剥けて爪先で止まっている。それが地面に向かって垂れ下がっているんですよ。垂れ下がって地面に触ったら痛いのかなあ、痛いはずなのに、ちょっと持ち上げ気味にして歩く。

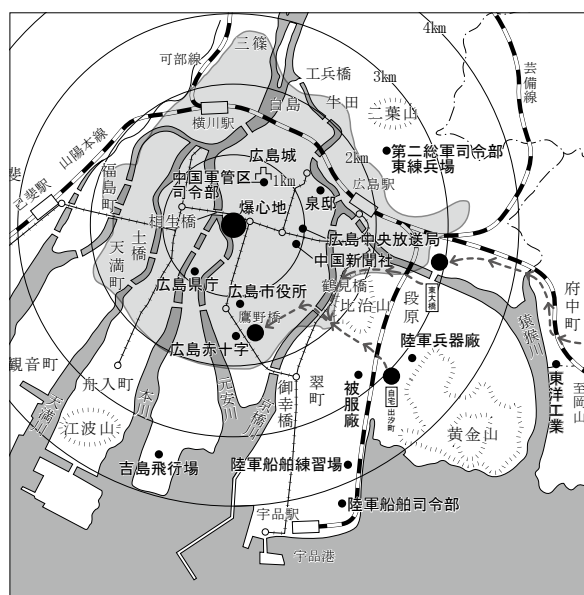
みんな空ろな表情。身体は赤裸、両腕から襦袢布みたいになった皮膚を垂らした何千人という群れ。もうこれは人間じゃない。幽霊の群れの出現です。焼けつくような真夏の太陽に晒された地獄の鬼かなあ。地獄から逃げ出した「幽鬼の群れ」、とでも表現するしかない有様でした。

この場面は後日、「原爆の絵」として、広島市基町高校の1年生、西家奈津さんに描いて戴きました。西家さんが、この絵にタイトルを付けました。『これでも人間か』と。絵を描いて貰うに当たって私は、懸命に注文を付けました。数知れない人間とは思えぬ大群が、まるで谷間から湧き出すように溢れて迫ってくる。それを地上の目で描くのではなく、まるで鳥が空から見おろしているような、遙か上空からの俯瞰の眼で描いて欲しい。

その異形な姿の群れが、幽霊のような人たちが、松林の下をスローモーションのように歩いて来て、次々に倒れて行く。私は「幽鬼の群れ」と表現するのですが、逃れて来る無数の被爆者の大群に出会ったのが、8月6日のお昼ごろ。広島からほぼ10キロ離れた、安芸中野の松並木通りでした。



26. 「山陽道・松並木の下で出会った幽鬼の群…
これが人間なのか！」
(作/西家奈津、所蔵/広島平和記念資料館)



27. 私の入市経路
(8月6日と7日)

私たち5人は、その群れとは逆に、広島に行こうとしていました。しかし、広島から逃れて来た人たちの群れを掻き分けて広島へ向かう～そんなことは出来ません。私たち5人は、すぐに畦道に飛び下りて、そこから広島へ向かって、あとは走ったか歩いたか覚えていません。10キロを走り通すのは無理だから、走ったり、歩いたり、休んだりだったと思います。付いて来た永谷君のお母さんも大変だったと思うけど、私たち6人は、懸命に広島へと向かいました。

そして、やっと広島に近づきます。海田から向洋を通り、船越を過ぎました。あたりの風景がガラリ変わりました。屋根瓦が吹っ飛んでいる。窓ガラスも吹っ飛んでいる。倒れ掛かった家屋もある。なのに不思議なことに私は、広島から逃げて来る人に出会っていない。何故か知らないが記憶にないのです。理由も原因も分からない。

でも、広島に向かって助けに行こうとしている人たちは何人も見ました。とある立派な門構えの家～古くからの病院らしいのですが、トラックが前の道路に止まっていて、看護婦さんが何人か一生懸命に荷物を積み込んでいました。かなり年配の先生らしい人が、声を漶らして指示をしていました。広島に向けて、これから救援に行こうとしていると分かりました。

後から伺って、もしやと思いました。広島の高外科病院の島薫院長先生が、ちょうどその頃、広島から離れて出張往診をしておられ、広島罹災と知って救援を急いだとのこと。私たちが目にした病院前の状況と一致するのです。そこは中野付近だったと私は記憶しているのですが、島先生のご自宅も中野付近と聞きました。未だ確認を取っていない出来事なのですが、私のおぼろな記憶の中では、広島へ救援に向かおうと必死になっていた国道沿いの病院の医師たちの姿が、後年、「R C放送番組審議会」の副委員長を務めていらした島薫先生のお姿に重なってしまうのです。

広島に近づくとつれ、民家という民家の屋根は全部、瓦が吹っ飛んで捲れあがっていました。扉も窓も、頑丈な門構えさえ吹っ飛んでいる。どうなったんだという感じです。そんな状況なのに、早くも家々の前には机が出してあり、そこに水や握り飯が並べてあるのには驚きました。

遥かに広島市内と思しき辺りは炎々と燃え盛っているのが、道々、ずうーっと見えていました。その頃は多分、立ち昇る猛煙はキノコ雲の形になっていたと思うのですが、私たちの中の誰一人として「キノコ雲」の記憶は有りません。ただ一面に、真っ黒な凄まじい煙の渦が巻いて、鮮やかな炎が立ち昇り、猛煙の太い柱の中で稲妻が走っていました。だけど不思議なことに、音が聞こえない。

音のことですが、どんな場面でもシーンとしているのです。普通なら「助けてくれ」とか、「痛いよ、お母さん」などの悲鳴が聞こえて良いはずなのに、私の記憶の中では、そんな声は全く聞こえていないのです。よく「阿鼻叫喚の巷」と表現します。私も新聞への投書で「阿鼻叫喚」と書きました。でもしかし「待てよ」と思ったのです。阿鼻叫喚の叫び声、悲鳴～あの時は聞こえていなかった。安芸中野で幽鬼の群れに出会った時も、やがて東大橋から広島市に入るときも、歩く道々でも沈黙の中だった。不気味な沈黙のなかで幽霊のような人々が、ゆっくりスローモーション映画を見ているかのように動いている。私たち自身の動きも、極めてスロウに感じておりました。どう考えても不自然だし不思議だけど、音なしの世界で、すべてがスローモーションなのです。

中野を過ぎて、次第に広島が近づきます。同行の友人、高田勇君が異様な現象に気づきます。あの近くに一寸した丘陵地帯があって、海田を過ぎて向洋のあたり。

○石田 船越ですか。

○新井 そう、船越ですね。船越あたりから比治山が見えたというんです。私も見えましたが、肝心なことに気づいていない。比治山の上には広大な御便殿という明治天皇の宿舎だった建物が移築されていて、遠くからでも良く見えておりました。ところがあの日、その御便殿が見えなくなっていて、鳥居だけが見えていた、と高田君が記憶しているのです。鳥居が見えるのに御便殿が見えない。どうしたのかな、と思ったそうです。比治山の向こう側、広島市内は炎々と燃え盛っていました。それなのに、私たちの周囲には溢れるばかりに逃げ惑う被爆者が居たはずなのに、全く記憶にないのです。何故なのか分かりませんが、見ていたの

に見えなかった、聞こえたのに聞こえなかった…。

8月6日の体験（東大橋）

○新井 そんななか懸命に私たち5人は、東大橋のたもとに辿り着きます。そこから急に意識がクリアになります、そんな感じですね。中野の松並木から後は、何か呆然としていたみたいでした。そして橋のたもとから広島市内を見ました、間近にね。

東大橋というのは、名前は立派だけれど幅が2間位というから4メートル足らず。丸太ん棒の橋脚で、手すりや欄干など全部が粗末な木製。だから名前は立派な大橋だけれども、本当はチャチな橋です。広島市内から東に向かって1本だけしか架かっていないから、みんな東大橋へ集中して逃げて来るんですね。恐らく3時か4時になっていたと思います。時計なんか持っているような者は居ない時代です。そこは爆心地から2,800メートル地点だと聞きました。

橋の上は、びっしり逃げて来る人の群れ。先ほど出会った人たちと同じような、お化けみたいな、地獄から逃げて来たような人たちの群れで溢れ返っている。橋からボロボロこぼれ落ちる人が居るけど、誰も拾い上げたり救ったりする人は居ない。

そんな、誰もが凄まじい姿の状況のなか、なんと五体満足、パリパリの制服姿の憲兵が橋の真ん中に居ました。2～3人かな、橋の上に立ちほだかって「誰も町中には入れんぞ」とばかり非常線



28. 東大橋

(昭和20年11月、撮影/米国戦略爆撃調査団、所蔵/米国立公文書館)

を張っているのです。きちんと「憲兵」の腕章を付け、腰に軍刀を吊って、「誰も通さんぞ」という雰囲気です。

そこに、もう1人、男の人が居ました。中年の男の人で、肩から写真機を提げて、自転車を押していました。その人が恐れ気もなく憲兵と言いつ争っているんです。「入れろ」「入れない」「通せ」「通さない」と大喧嘩。カメラを提げているし、絶対この人は新聞社のカメラマンか何かだと思ったのですが、逃げ惑う被爆者の真ん中で憲兵相手の大喧嘩が繰り返されていました。

そして遂に、大きな憲兵の怒鳴り声が聞こえたと思った途端、バーンとばかり自転車が川の中に放り込まれました。そのあと～これは不確実なのですが、カメラを提げた男の人まで川の中に放り込まれたような記憶があるのです。まさかそこまでは、とも思うのですが、あの状況の中で憲兵ならやりかねません。傍で見ていた私たちも震えあがったほどの恐怖の瞬間でした。

その憲兵が、今度は私たちの方に向かって来たんです。「貴様たち中学生だな。今ごろ中学生が何をやっているんだ」と迫って来ました。目の前の凄まじい出来事を目撃したばかりです。私たちは、その場ですくんでしまいました。

当時の憲兵というのは、物凄く怖い存在でした。憲兵と特高（特別高等警察）という、この両方は絶対的な権力を振るっていました。非常事態のもと憲兵なら、怪しいと睨んだ奴を、ピストルで射殺することも腰の軍刀で切り殺すことも勝手次第、という恐ろしい時代です。その鬼より怖いと恐れられている憲兵が、「貴様たち、何をやっているのだ」と迫って来たので、私たちは震え上がりました。

そのとき、どうやって、誰かが言ってくれたのか、自分で気づいたのかも覚えがないのだけど、「お前たちを伝令に任命する。報告書を学校本部へ持って行け」と教官に命じられていた、その報告書がポケットにある、と思い出したのです。

封筒の宛先に何と書いてあったのか知らないけれど、私たちの学校は広島市東千田町の文理科大学の構内にありました。当時、文理科大学は陸軍に接収されて西部軍管区司令部の本部となっており、そこには畑俊六元帥も居たはずですが、表書き

に何と書いてあったか知らないまま、報告書の入った封筒を憲兵に差し出し、必死の思いで、伝令としてここに来た事情などを説明しました。

文書を受け取った憲兵は、じいっと封筒の表書きを睨み、話を聞いていましたが、やがて顔を上げた時には、態度がガラリ変わっていました。

「よし分かった、通れ」。そのあとに何と、「気を付けて行けよ」と声を掛けて来ました。とたんに、私はムッと来ました。ほんの少し前、目の前で凄まじいばかりの乱暴狼藉を見せつけた憲兵が、手のひらを返したが如く猫なで声で私たちを通したのです。なんだ、これは、と無性に腹が立って堪りませんでした。あれだけの大騒動の直後です。驚きと共に、豹変した憲兵への怒りと不信感。もろもろの感情が入り混じってムカッ腹が立ち、「通っていいんなら、通てやるわい」みたいに、妙にムキになって東大橋を渡り切ったものです。

東大橋での体験で、もうヒトツ、どうしても忘れられない出来事があります。何時になっても証言をしていて、この場面になると自分が先ず、絶句してしまうので困り果てています。破壊し尽くされ燃え盛っている広島市内から逃がれ出て来た人々が揉み合う橋のうえ。その場によく到着した私たちは、橋を渡ろうとしましたが、溢れ出すほどの異形な被爆者の群に圧倒され、その場に立ち尽くしておりました。中野の松並木通りで出会った幽鬼の群れ、そのままの、凄まじい形相の大群がひしめく東大橋のうえは、まさしく地獄絵そのものでした。立ち尽くし、先へ行くのをため



29. 「消えていった幼い姉妹…生きていてほしい」
(作 / 中須賀愛美、所蔵 / 広島平和記念資料館)

らっている私たちの目の前に、ゆっくり、スローモーションのように出現したのです。小さな2人の天使が、輝く光の輪の中に、揃って手を繋いで現れた、と私は感じました。暗黒の人群れの場に、小さく光る白い影が二つ、す〜っと現れたのです。よく目を凝らして見据えた二つの影に、思わずギョッとしました。幼い女の子です。お姉ちゃんと思える女の子は、小学校1年生くらいの幼い子。その子にシッカと手を引かれているのは、まだ幼稚園にも行けないほどの幼児。ギューッと互いに手を握り合って現れた幼い2人の姉妹。なんと2人とも、顔が通常の二倍ほどに腫れ上がっているじゃありませんか。膨れ上がって、眼と鼻と口の部分だけがチョン、チョンと引っ込んでいるだけ。全身は赤裸ながら白く輝くような光に包まれているんです。そんな2人が、まるで宙に浮かんで近づいてくるみたいに、私の右脇をスーッと通り過ぎるとき、お姉ちゃんが一声、幼い妹へ声を掛けたのです。そう私は記憶しています。空耳だったのかも知れないが、確かに聞こえたと思うんです。

「しっかりねっ」

微かなヒト声を残したまま2人は、現れた時と同じように、逃げて行く幽鬼の群れの足元へと消えて行きました。

絶対に、この子たちは生きていない、助かっていないでしょう。幼い2人だけ。お母さんもお父さんも、誰も傍に付いて居なかった。2人だけで、ここまで逃げて来たのでしょうか。現れて近づき、通り過ぎ、消えて行った幼い2人を目で追いながら、橋のたもとに立ち尽くしていた私たちは、何も出来ませんでした。声もかけられず、手も出せず、助けてあげられなかった幼い2人の命。これが原爆と言うものなんです。これこそが、戦争と言うものなのです。何時までも私の夢の中で、手を繋いだ2人が逃げて行くんです。宙を飛ぶように光のなかを緩やかに消えて行くんです。語りながら絶句してしまうほど、いつまでも忘れられない場面が、1945年8月6日、東大橋のうえでありました。

8月6日の体験（広島市内）

○新井 あの当時、大きい橋のたもとには必ず交番がありました。それは警察と特高が、人の出入

りを見張っているためでした。だから東大橋の西たもと、憲兵たちの後ろ側に交番がありました。私たちは憲兵と被爆者の群れ抜けて、その交番の前まで辿り着きました。そこでもう一度、どうするか5人で相談しました。

広島に辿り着きました。広島への目的は帰省でした。「家に帰って、2～3泊して宜しい」という許可を貰って帰って来たのですが、もうヒトツ大事な命令を受けていた。「伝令として、報告書を学校本部に届けろ」です。伝令の使命はあくまでも命令であって、届けなければならない、という至上命令です。しかし帰って来た広島のこの状態では、学校まで行くこと自体、不可能である。

「この状態では」というのは、比治山の向こう側の広島市内一円が猛炎に包まれている。しかし、手前の段原地区は燃えていない。屋根が落ちて、家が倒れ屋根が抜け、瓦も窓ガラスも吹っ飛んでいるが燃えてはいない。では、どうするかというので、いったんこの場で解散、ということにしたうえで、やはり市内の様子を確かめようとしたのだらうと思います。あの当時の中学1年生としては、伝令の命を受けている以上、そうでなければならぬ。

東大橋というのは、現在と同じ場所にありました。でも今は架け替えられて立派な橋になりました。そこから川土手沿いに的場町へ向かって進むと、比治山の山麓を外れて、広島の町中が良く見えて来ます。燃えているのは比治山の東側からでも分かるけど、的場付近まで行けば広島市内の状況が更に良く見えるだらう、というので5人は揃って市内が良く見えるとこまで行こう、ということになったのだと思います。5人の中で私と笠間弘丈君の2人だけが南方の旭町・出汐町方面の住人だけど、残り3人の自宅は市内の鉄砲町と牛田町、そして郊外の五日市です。どうするか、です。

そういうことで、5人揃っての的場方面へ足をのばした。途中に大正橋がある。当時の大正橋は、現在架かっている場所よりも少し南側で、東大橋から程近い場所に架かっていました。その大正橋にも交番があって、その交番の傍まで私たち5人は行ったんだと思います。その辺まで行くと、ちょうど山麓を抜けて、市電の宇品線がカーブしてい

る辺りから、およそ広島市内の見当が付く場所に来ます。町名だと段原大畑町あたりかな。そこからは市内が良く見えた。そのあたりまで、私たちは行ったのだらうと思います。

何故ならば、生き残っている高田勇君と私の記憶に一致点があるからです。市内の電信柱はほとんどが、ぶっ倒れていたけど、大正橋交番の前にある電信柱は立ったままで、その先端がロウソクのようにボウボウ燃えているのです。誰かが火を付けたはずはないのに、電柱が立ったまま先端が燃えていた。貯水槽が町のあちこちに設置されていましたが、大正橋交番の近くにも防火用の貯水槽があった。その貯水槽の中に蠟人形～マネキン人形が、ギッシリ、まるでお風呂に入っているように綺麗に人間が並んで居て、そのまま蒸し焼きになっている。黒焦げではなく、美しい肌を保ち、まるでお風呂にでも入っているような格好のまま、防火用貯水槽の中で死んでいるのです。

これが、高田君と私の共通の記憶です。ということは、燃えていない段原付近ではあり得ない記憶です。的場から広島市内方面に向かう段原大畑町、当時の大正橋付近までは火災に襲われているから惨状が記憶として残り得る。となると、そこまで行ったんだらうと思います。

これは後に鎌田七男先生から聞きました。8月6日の直後、京大の広島調査団が、元の大正橋付近の放射線量を測定しているのだそうです。その測定したデータが地図に手書きされて残っており、そこにスポット地点として、相当量の放射線量が残っていたという記録があるのだそうです。その地図を見ながら「新井さん、君たちはこの地点まで行っているね」と鎌田先生が指摘なさったのです。たぶん、そうなんだと思います。そこまで行かなければ、広島市内の様子が見えない。

そして確認したのです。市内は明らかに燃え盛っている。とても入れない。そこで5人が相談したのでしょう。西川廉行君～彼は、自宅が五日市です。彼は私たちから離れて、たった1人、燃え盛る広島市内を横断して五日市の自宅へ向かいました。その時の状況を彼は、平成13年3月19日、手記に書き残しています。

その手記の中で西川廉行君は、まさに燃え盛る最中の広島市内を、猛火に追われながら走り抜け、

川を泳いで渡ったり、渡り船で渡して貰ったり、燃えていない橋を探して渡ったりしながら、なんとか広島市内を横断して五日市まで帰っているんです。その過程で遭遇した凄まじい状況を、彼は手記に残しました。「これは俺の遺言である。思い出したくないし、思い出したら眠れなくなるから、これまで書いたことがないが、これを最後に一言書いておく」と書き残して、それから3年後の平成19年9月12日に急死し、文字どおり、これが遺言となりました。

もう1人の西川亮君は、牛田に自宅がありました。ということは駅にすぐ近い。だから彼は早くから、「俺は家が近いから、あまり急いで帰る必要がない。ゆっくり帰ろうや」と主張していたと、本人の発言として記録が残っています。日記にも残っている。だから当日8月6日は、始発列車をやめて八本松駅8時38分発、広島に、ほぼ1時間後に到着という遅い列車にしたのです。もし始発に乗っていたら、広島駅に8時15分頃に着く列車になっていたはずで、西川亮君の発案で1列車遅らせたばかりに被爆を免れた、という事実が残った。ですから、彼は命の恩人の1人なんですね。

もう1人、高田勇君。自宅は鉄砲町。まさに燃え盛っている町のど真ん中ですから、そこにはとても入って行けない。それで、いざとなったら大内越峠を越えた辺りに緊急集合場所を決めていたらしいのですが、近くの段原の「女子商業学校」の辺りに古くからの本宅があった。鉄砲町の自宅はきっと駄目だろうから、明日でも火が収まった



30. 段原日出町付近から北西方向を望む
(昭和20年10月、撮影 / 米国戦略爆撃調査団、
所蔵 / 米国国立公文書館)

ころ行こう、ということで彼はそこから、私とほぼ同じ行動を辿ったと思うのです。

笠間君は旭町ですから、私と同じ方向なので、これからどうやって帰ろうかということも2人で相談するわけです。これも類推ですが、記憶から言えば、的場近くまで来ているのだから、そのまま逆戻りして段原筋を、壊れた家屋を乗り越えながら帰って行けば、直線距離で一番近い。更に言えば、宇品線の鉄道線路を通れば支障なく帰れるし、いちばん容易で手取り早い。

ところが、そんなコースを通ったという記憶が、私にも高田勇君にも笠間弘丈君にも、3人とも全くないんです。少なくとも、私にはない。

そして、先ほどの証言どおり、猛火が燃え盛っている状況の中で、防火用水槽が蒸し焼きになった人間の遺体で埋まっている状況。電信柱が燃えているし、馬もいっぱい焼け死んで転がっているし、燃え尽きた瓦礫の山が続いているし、人間の手や足というのは、本当に焼けて焼けて焼け尽くしてしまうと、焼けぼっくいみたいになってしまうのですね。そんな記憶ばかり残っているのです。ということは、私たちは段原筋を通ったのではないと考えざるを得ない。

だから私たちは、昔の大正橋の交番前から段原筋へ戻らず、燃え盛る広島市内を京橋川の川向こうに見ながら、広島電鉄の路線に沿って比治山下



31. 比治山西側のふもと
(昭和20年11月、撮影 / 米国戦略爆撃調査団、
所蔵 / 米国国立公文書館)

を通り比治山橋まで出ます。この先は私と笠間君の通学路だから比治山橋から比治山の裾を南に下り、かつての通学路を通して出汐町へ、旭町へと帰って行ったのだらうと思います。そう考えないと、私の壮絶な記憶と辻褄が合わない。高田君は、大正橋から回れ右をすれば容易に段原の自宅へ帰れます。西川亮君は、そのまま牛田へ帰れる。西川廉行君は、比治山橋からか、大正橋からの場経由からか、いずれかの道程で市内を強行横断して五日市へ行ったのでしょうか。大正橋付近で私たち5人は分かれた、たぶん、そうしたんだと思う。

もう1人。永谷君のお母さんのご自宅は出汐町なんです。ということは、私と笠間君と同じコースを辿れば帰れるわけだから。そうしようと、たぶん永谷君のお母さんから、大人として指示があったのではないかと思います。

そういうことで8月6日、私たちはそれぞれの自宅に向かいます。誰も時計なんかを持って居ない当時のこと、時刻は既に、8月6日の夕方に近かったと思います。なぜならば、父の手記によれば「長男の俊一郎は、夕方、ひょっこり家に顔を出した」と書いているのです。ということは、結構、自宅に帰り着くまでに時間がかかっているのですね。

8月6日の父の手記によれば、私は出汐町の自宅の裏口から、ひょいと顔を出している。表玄関ではないんです。裏口というのは、私がいつも通学の時に「ただいま」と顔を出すのが台所側裏口なのです。ということは、出汐町の交差点から斜めに上大河駅に出て、そこから裏道を通して自宅に帰るという習性があったので、そのまま帰り着いたと思われます。

どうやら私は、東大橋を渡って広島市内に入ったのち、的場近くから比治山下を通して比治山橋まで出ます。この比治山橋というのは昭和15年に完成した新しい橋です。その橋のたもとから南に下って、もと師範学校があった場所は、当時は陸軍電信隊になっていました。暁部隊の中に電信隊という部隊があったのでしょうか。トントーを電波信号で送る電信隊で、よく上官が部下に向かって「軍人精神注入棒だ」と言って、整列している兵士のお尻を短い棒で、ぶん殴っている光景を見ていました。その部隊の脇を抜ける道路があって、

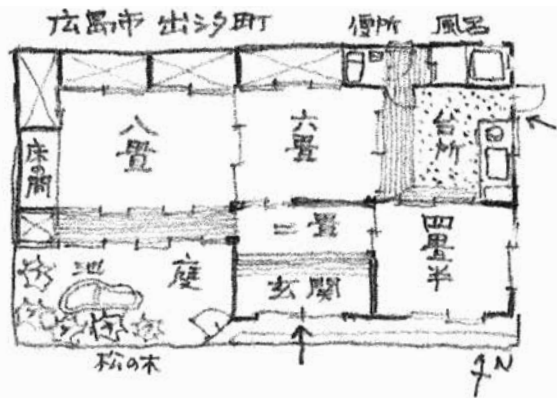
そこを南下して出汐町に出て、その交差点で兵器廠に行く道と被服廠に行く道に分かれ、私は被服廠に行く道を通して宇品線の上大河駅まで出て、そこから線路を渡って、出汐町700番地の自宅に辿り着いたということです。

奇縁ですが後年、兒玉光雄さんと当日の話をしていたら兒玉さん、出汐町にあった自宅のところを通して宇品線に沿って逃げたと聞きました。我が家の近くに兒玉さんの家もあったのですね。疎開か何かで壊されたのかな。当日の午後遅く、御幸橋から丹那駅に出て、あとは宇品線の線路を通して猿猴川の宇品線鉄橋から川を渡り、そこから郊外に逃げたとか。当日の私たちが通ろうとしたコースと逆向きのコースを、ほぼ同じ時刻ごろに通ったらしいのです。常識的なコースを私たちも通っていたら、逃げて来る兒玉さんと出会っていたかもしれない、と2人で話し合い、奇縁だねえ、と語り合ったものでした。

8月6日の体験（出汐町の自宅へ帰る）

○新井 私の家は平屋建ての借家ですが、屋根が抜けて、壁も窓ガラスも玄関も全部が吹っ飛んで、父と母が台所の上に血だらけで座り込んで居ました。自分では4畳半と思っていたけれども、父に言わせれば3畳らしいのですが、その3畳の間に落下した瓦礫を片付けて隙間を作り、三角巾で包帯をして血達磨の姿で座り込み、夕食の支度でもしようというのか、ガラクタの中を捜し廻っているという雰囲気でした。私は、そのすぐ脇の台所の扉をぱっと開けて、そこから「ただいま」と顔を出したんだと思います。両親は台所の中の瓦礫の中に、へたり込んで居りました。

どんな会話をしたのかほとんど覚えていませんが、こもごも互いの状況を語り合ったのですが、父と母は朝の8時15分に自宅の台所と居間で被爆をしたようで、父は居間に居て上半身裸で出勤の準備をしていたとき被爆。全身にガラスの破片を浴びて血達磨になりました。母は台所の窓から空を見て、「お父さん、空の色が変ですよ」と呼びかけた途端、吹き込んだ爆風に吹き飛ばされ、台所から居間まで飛ばされ、何かで顔面を打撲して右半面がお岩さんのように腫れ上がり、これまた全身ハリネズミの状態になったとのことでした。



32. 自宅の間取り図

母は看病の心得があるので、すぐに父の手当てをしたようです。というのは、母はずっと父の看病ばかりして来ていたので、そのあたりの准看護婦さん以上に看護の心得がありました。それで応急手当てをしたそうです。こういう緊急時は必ず近くの大河小学校に救急本部が出来るから行け、ということになっていたのだから揃って大河小学校へ行ったそうです。しかし、「お前たちみたいなのは、怪我のうちに入らん」と追い返されたとか。よく見たら、周辺すべてが例の幽鬼の群れ。手を前に差し出して全身大火傷の赤裸の人、何かにやられたらしい大怪我の人、ガラスの破片に切り刻まれた人。そういう凄まじい人で溢れ返っている有様なので諦めて帰ったのだそうです。

追い返された父は、そのあと自転車で東雲町の師範学校へ登校します。前夜に空襲警報が出たため登校時刻に2時間の余裕を与えられていたことが、師範学校の教師と生徒の怪我人を少なくしたようです。しかし、登校途中に見た光景が凄まじかったようです。立ち昇り高空へ達した猛煙。道端の蓮根畑のハスの葉が、一様にみなチリチリに黄色に焦げて捲れている。学校は爆風で屋根瓦もガラスも壁も全部が吹っ飛び、学生寮も壁が吹っ飛んで相当な被害だったが、周囲を畑に囲まれていた学校は、爆風で破壊されたけど火災からは免れていました。

先生方も何人もが怪我をしているようでしたが、生徒たちは市外に動員出動していたので、大した被害はなかったようです。集まって来た先生たちで応急の対策本部を作ったようですが、先生方も怪我をしているし、私の父もガラス片で怪我



33. 学校の救護所

(昭和20年8月8日、撮影/陸軍船舶司令部写真班、提供/広島平和記念資料館)

をしているので、大変な騒ぎだったようです。

学校は、広島師範学校男子部と言って男子部だから部長がいるわけです。その酒井賢男子部長先生が日赤に夫婦で入院していることが分かったので、7日になって父をはじめ師範学校の教官方と生徒たちが、日赤まで探しに行ったんですね。そして、あの日赤病院の物凄い中で部長先生と奥さんを探したのだそうです。奥さんは部長先生の入院した病室の中で、静かな顔をしたまま遺体となって見つかりました。酒井部長は全身大火傷をして重傷者の群れの中から発見され、学生たちによって日赤から担架で運び出され、教官方が付き添って学校まで連れ帰ったそうです。そのように師範学校でも緊急事態に対応して、父を含めた何人もが対応して行動した模様です。

情報が次から次に入って来ました。私の小学校時代の恩師の早瀬完一先生は、横川の橋の上で直接被爆し、全身大火傷で生死の境を彷徨ったようですが、当日の情報では行方不明。上河内秀男先生は戦災死。校長夫人と娘さんが死亡など、いろんな情報がどんどん入って来ます。それらの情報を持って父は、夕方になって帰宅しました。

母は、級友の松田繁君の家が近くで、お母さん同士は仲が良かったのですが、その家は土地を少し地上げして防空壕を造りました。だから、その防空壕は人間が入っても座れるくらい深くて丈夫というので松田さんの家の防空壕を借りる、という約束が出来ていたようです。我が家の防空壕は、深さが50センチ程度の床下式防空壕。地下水が沁み出していてダメ。だから母は、松田さんのところへ駆け込んで行きました。

私は今でも母は凄い人だと思っています。明治の女で、何もかもてきぱきやってしまう。父は反対です。何をやっても駄目。「何をやっても、すぐ怪我をする」と、いつも母はこぼしていました。失礼な言い方ですが、父は典型的な「学者バカ」と言って良いようなタイプでした。後に東雲分校の主事になりますが、分校主事と言えば現在の学部長。父は一体、どんな主事だったんだろうか。私にとって父は、ああいう管理職には向かないタイプだと思うのです。そんな父とは打って変わって母は、物凄いシッカリ者でした。母が居たからこそ我が家の4人は、無事に戦後の食糧難を生き抜けたと思うのです。

その母が、自分の持つ看護のウデを生かして、自らも深手を負いながら、8月6日の午後は我が家を仕切っていたようです。そこへ私がヒョイと顔を出した。その晩、母は松田さんの家に行ったり来たりしていますが、私は天井がない自宅で野宿する方を選んだように記憶しています。玄関前の道路にある消火栓が壊れて、どんどん水が噴き出していました。水がある限りは、何とかかなという覚悟でした。夜は寝たんだろうか、寝てはいない、寝られなかったなあ。

8月6日の真夜中だったか、7日の明け方に近くだったか笠間君が飛び込んで来た。彼は大河小学校出身なので情報通なのですが、私の友人で、大河小学校から附属小学校に転校して来た新久和俊君が、大火傷を負って帰って来たけど遂に亡くなった、と言って飛び込んで来たのです。

新久君は一中に進学しており、建物疎開作業に出動していて被爆し、大火傷をして目も見えなくなっていたのに8月6日の夜、どこをどう通ったのか、這いずるようにして西霞町の自宅まで辿り着いたらしい。そして家族に看取られるなか、「悔しい、悔しい。死んでたまるか」と呻きながら息を引きとったというのです。我が家から100メートルほどのところにある彼の家へ8月7日の朝、私はすっ飛んで行きました。朝、まだ暗かったと思う。被爆し半ば壊れた自宅の居間で彼は、家族に囲まれて、全身を包帯でくるまれ横たわっていました。花束が1束、枕元に供えられていました。飛び込んで行った私は、それを見て、「ああ、遅かった、間に合わなかった」と思いました。枕元に花

束が供えてあるということは、駄目だったということですからね。

私が飛び込んで行ったとき、お母さんが、目ざとく私を見つけて言いました。

「新井さん、よく来てくれました。この子はね、夕べ遅く、全身大火傷で眼も見えなくなって帰って来ました。そして『悔しい、悔しい。死んでたまるか』と言いながら、夕べ11時ごろ亡くなりました。新井さん、お願いします。ぜひ、この子の敵(かたき)を取ってください」

私は敵討ちを頼まれました。私もぼろぼろ泣きながら「絶対に、この敵(かたき)を取ってみせます。憎いアメリカをやっつけます」と約束をしました。そばに、お兄さんと妹さんがいらしたのは、かすかに覚えています。そこから、どうやって自分の家に帰ったかは覚えていませんが、そういう、敵討ちの約束をしたことだけは、今もなお、しっかり覚えております。

8月6日の状況（補足質問）

○石田 質問をさせていただいてもよろしいですか。

○新井 はい、どうぞ。

○石田 八本松駅でピカッと光りますよね。その後、蒸気機関車に引かれた列車が来るまで1時間から2時間ぐらいお時間があつたと思いますが、その間のご記憶というのには何かありますか。

○新井 ありません。慌てて避難しようと走りまわる人もあつたようだけど、どこへ逃げたら良いのか……。みんなでわあわあ言いながら、ただただ混乱するばかり。それ以外に何も記憶は残ってないですね。

○石田 あと、広島へ向かう途中で黒い雨というのは浴びられたんですか。

○新井 いえ、雨は降っていません。しかし、出汐町の家に着いた8月6日の夜に、黒い雨の話は耳にしました。西のほうで「アメリカのやつが重油を撒きやがった。真っ黒いやつをね。あれに火を付けるらしいぞ、気を付けろ」というようなかたちで、その黒い雨の情報は伝わって来ました。

○石田 伝わって来たというのは、近所の人たちが方々で話をされていたんですか。

○新井 みんな、寄ってたかって、ああだこうだ

としゃべり合っています。もう外を走り回るみたいだね。うちの子どもが帰って来ない、とかいう話も多かったし、少しでも何か新しいハナシを聞き込んでいないか、とみんな尋ね歩いていますから、それは耳に入ります。

○石田 では、出汐町のほうでは、皆さん夜の間、寝られずに起きておられたんですか。

○新井 それはもう、あの晩に寝た人は居ないのじゃないかな。みな右往左往でしたよ。静かな夜なんかじゃありません。誰が帰って来ない、探しに行かなきゃいかん、比治山に逃げたんじゃないとか、様々な情報とか噂に追い回され走り回って、雑多な情報がバラバラ耳に入って来るしね。我が家がちょうど道路の曲がり角にあったせいもあり、周辺は騒然としていたなあ。前の道路では消火栓が壊れて水が噴き出ているしね。

○石田 それは新井さんのお宅にも人が訪ねて来るような状態なんですか。

○新井 訪ねて来る、というような状態じゃない。ほとんどの人が家の中じゃなく、外の道に出てたむろして、盛んにしゃべり合っているみたいな状況でしたね。我が家からはちょっと距離があるのだけど、知り合いの松田さんの所でも、女学院に通っていたお姉ちゃんが帰って来ないと騒いでいることも伝わって来たり、向こう三軒両隣りの家も崩れているから、家の人は道路に出て来ているしで、母も行ったり来たりしていた。狭い町だから町中が混乱し騒がしくなっているのは耳に入りますよね。

段原の古い町をご存じないですか。

○石田 知っています。

○新井 あの古い段原の町並みを想像してください。あんな感じで、狭い所にぎゅうぎゅう詰めみたいに人々が住んでいるわけですよ。だから、いろんな噂が入って来ます。誰が居なくなったとか、何がどうなったとか。黒い雨が降ったというのも、雨ではないけど、ガソリンを撒いたという噂もそうでしたよね。その後、アメリカ軍のB-29は、ぐるぐる2回か3回、様子を調べるために上を飛び回ったらしい。だから、「また来やがったから、みんな気を付けろ」という警戒する声も聞きました。

それともう一つ、あの日、吉島の飛行場で日本

の飛行機が飛んでいるらしい。

○石田 それはご覧になったんですか。

○新井 見てません。記録を読んだのですが、ただ当時、「飛行機が飛んで来た。戦闘機みたいなのが飛んで来た」という噂は耳に入りました。あれは記録によると、当日たまたま、真珠湾攻撃の飛行隊長だった淵田美津雄さんが広島吉島の吉島飛行場に飛行機で来て、それから再び飛び上がって広島上空をひと廻りしたということらしい。

それとはまた別の記録によると、もう1機、福岡から誰かが吉島の飛行場に飛んで来ていて、爆風で機体が「く」の字に曲がってしまったのを無理やり飛ばして、原子雲の中に突っ込んで行っているのを見たのでしょ、敵機だと思って「来やがったぞ、気を付けろ」と言って、ずいぶん、あちこちで敵機来襲の噂が飛び交って居ました。米軍側の記録でも、広島上空から離脱中のB29の機内でも、「日本機が飛来」という警報が一回かな、出たらしいのです。

○石田 自叙伝のほうをお読みしても、お話を聞いてもよく分からなかったのは、ご自宅の被災状況ですが、屋根は全部飛んでいたんですか。

○新井 いやいや、上からの凄い圧力で屋根が潰されて、真ん中あたりがどドサッと抜けて、壁は外から内側に向けて吹っ飛ばされ、廊下のガラスも障子も窓も吹っ飛んでいました。柱は何とか立っていたので、崩れかけた天井が持ちこたえられたんでしょうね。

○石田 では、壁はもう全部、穴が空いていたんですか。

○新井 いや、穴とかバラバラと壁土が落ちて、壁のあちこちにスキ間が空いて、そこから外が見えるという感じ。壁の中には、竹を使って筋交いが入っているじゃないですか。壁土というのは案外頑丈だな、と思った。押し入れなんかも崩れずに大丈夫でしたからね。

○石田 では、完全に壁が抜けているわけではなかったんですか。

○新井 はい、そうです。天井は一部抜けたけど、壁は部分的に吹っ飛んで、壁土が落ちて散乱～壁芯の竹組が見えている有様。だから天井も壁も大部分が残っています。窓はガラスが完全に吹っ飛

んで、窓枠だけになって吹き抜けガランドウの感じで、畳の上にも台所にも瓦礫の山が出来て、屋根瓦や板切れ、壁土、ガラスの破片がいっぱい積み上がっている訳です。ガラスの破片が体中に突き刺さり、父も母も全身ハリネズミ、壁土の泥と一緒にくたで血達磨の状態でした。

そこへ私がヒョイと入って行ったのだから大変だ。どこか居場所を作らなければならない。それから食べ物は何処に行ったかと、大事な食糧を瓦礫の山から探す。水道からは水が出ないから、どうしようとか。そんな感じでしたね。

○石田 ありがとうございます。壁も窓も抜けたとおっしゃっていたんですが、勝手口からひょっこり入って来られたという話で、壁がないんだったら遠くから見えたのではないかなと思ったんですが。

○新井 そこまでの全壊ではありません。台所って割にガッチリしていますよ。あそこの壁は抜けていませんでした。台所は流しもあるし竈もあるし、出窓には食器棚が造り付けになって載っかっているし、一番端っこの風呂場との間に台所の出入り口ドアが開いてるのです。台所の窓ガラスは全部吹っ飛んで、窓枠と食器棚だけになって、吹き抜けみたいに開けっ放しになってしまい、塞ごうにも板もボール紙も無いし、困ったなという有様でした。

○石田 あと、ご記憶があればの話ですが、例えば安芸中野の「出迎の松」の所で被爆者を初めてご覧になった時とか、あるいは比治山をぐるっと回って行って大正橋の所で市内の方を見た時とか、匂いとか音というのはどうでしたか。

○新井 音は、不思議なことに、聞こえなかった。しーんとして、何も聞こえて来ないと言う感じ。そんなはずはないのにね。それと匂いですか。何と表現したら良いのかなあ、ホントは言いたくないのだけど、猛烈に埃っぽい匂いと共に、魚を焼くような独特の匂いが凄まじかった。初めのうちは壁土が落ちて雨に濡れた匂いがしました。それに近い匂いが主流だったけど、燃えている広島に入り猛炎が身近に見えて来ると、蛋白質が焼ける匂いと言うのかな、生魚を焼くような嫌な匂いが加わり、それが次第に激しくなってきました。夜になると各学校の校庭から炎と煙が立ち昇って

来て、明らかに人間を焼いている火葬と分かる匂いが流れて来て、これが何時までも匂うので参りました。あの匂いというのは、堪らないほど嫌な臭いです。思い出したくない匂いですね。近くの大河小学校で遺体を焼いているのが、すぐ分かりました。

○石田 市内に近づくと、そういう匂いというのは強くなって行ったんですか。

○新井 ちょっと違う。市内に入ると別の匂いが加わるのです。初めのうちは土埃のような匂いがしていました。家々の壁が吹っ飛んでいますからね。熱線によって焼け焦げた土壁の匂いと土埃の匂い。それが広島市内に入ると、東大橋を渡り切ったら、新しく死臭というのかな、早くも腐敗し始めた死体の匂いと、何かが焼け焦げる匂いと、それらが入り混った、耐えがたい、鼻持ちならない匂いが襲って来ました。それまでは、ほとんど何の匂いも感じて居ませんでした。土埃の匂い以外はね。

○石田 あと、市内に近づいて、その目に見える風景の話はお伺いしたのですが、煙とか土埃で視野はどうだったんですか。遠くまで見通せたんですか、それとも見えなかったんですか。

○新井 私たちからは良く見えました。8月6日は、霞か雲かじゃないけど、広島町全体が燃え上って煙濛々たる状態だから、その中では何も見えない～視野は利かなかったでしょう。でも7日には、ほぼ市内全体が一望のもとに見えました。

○石田 では手探りに近いような状態で歩かれたんですか。市内に入ってから、東大橋から段原のほうにというのは。

○新井 いやいや、私たちの歩いたところは燃えても居ませんし、快晴で見通しは良好でした。風向きも追い風だから、立ち昇る煙も私たちの方には流れて来ません。周囲は普段通りに、明るく見渡せていました。

しかし東大橋を渡り切って市内に入ってから、燃え盛っている場所では100メートルくらいまでしか見渡せなかったでしょうが、向こう側は一面の炎と煙の世界だから全く何も見えなかったでしょう。私たちは、比治山の麓を巡っての場に近しい辺りから町の中心部を見ようと思ったが、炎が燃え上がっているのは良く見えるけど、その奥

の方などは煙に隠されて何も見えないという感じ。

○石田 どちらかというとも霧に包まれているような、ぼんやりとした感じですか。

○新井 いえ、広島市街全体が猛煙・猛火の中に包まれているのが、東大橋を渡った私たちからは良く見えました。風向きは東風と言うか、立ち昇る猛煙は彼方へと流されて行くので、私たちは煙に遮られることなく見通しも良く歩きました。東大橋から広島市に足を踏み入れ、のち大正橋へ、そして的場近くまでは煙に邪魔されることなく、足許も周囲も十分に見える中を歩きました。

○石田 その中で言えば、土埃とか、あと人が焼ける匂いが混ざった猛烈な匂いがしていたわけですね。

○新井 そうですねえ、東大橋を渡った付近では、焼け焦げる匂いよりも、爆風で崩壊した家屋の壁土が崩れて舞い上がった土埃とか、妙な匂いがしていたと思います。ところが、大正橋からの的場へ向かったあたりから私は何故か、匂いどころか、記憶そのものがポッキリ途絶えてしまうのです。

私の自宅は出汐町です。理屈から考えて、大正橋付近から自宅へ向かうには、段原筋を真っすぐ南下すれば良い。すぐ我が家に着くはず。さもなくば国鉄宇品線の線路を伝って行けば、爆風で崩れた段原の家々に邪魔されることなく、間違いなく我が家に辿り着けるはず。

ところが私の記憶には、崩れた段原の町並みや、南へと走る宇品線の線路の記憶は全く無いのです。それとは全く逆に、燃え盛る町並みや、立ったまま天辺が燃えている電信柱、燃え落ちた瓦礫の中から突き出ている焼けぼっくい、人形がお湯に浸かっているみたいな防火用水槽などの記憶が、歴然と蘇って来るのです。こんな光景は、段



34. 炎上中の広島市街

(昭和20年8月6日、撮影/木村権一、提供/広島平和記念資料館)

原筋を通ったのでは決して見られない。見えたとすれば、比治山の山麓沿いに市電の宇品線を辿った、と考えれば有り得る。大正橋交番の前で私も高田君の2人ともが、立ったまま燃えている電柱を見たという記憶が共通しているのです。人間の手や足は、燃えて燃えて燃え尽きると、焼けぼっくいようになってしまう。あちこちに配置してある防火用の水槽に満員みたいに蠟人形かな、マネキン人形かな、綺麗な肌をした人形の大群がお湯に浸かっている。みんな人間です。蒸し焼きになって白い肌の蠟人形のようにになっているという記憶です。どうやら私は、比治山下を山麓沿いに宇品線を辿って比治山橋に出た。そこから自宅の出汐町までは、いつもの私の登下校路なのです。こういうルートが私が辿ったと考えると、記憶がピッタリ一致する。こうして私は当日、比治山下を辿って出汐町の自宅に向かったのだ、と自分で納得しております。その途中、恐怖は全く感じなかったし、不思議なことに映像はキッチリ記憶しているのですが、音も匂いも全く記憶に残って居ません。出汐町の半ば崩れた自宅に辿り着いてから、ようやく我に返った、みたいな感覚です。

父の自伝に依れば、私が帰宅したのは既に夕方になっていたようです。父母と慌ただしく会話を交わして、ようやく気が落ち付いて来ます。つまりは、音も会話も正常に聞こえている訳です。その頃から、大河小学校で遺体を火葬しているらしい嫌な匂いが漂っているのに気づきます。この日は不思議なことに、記憶がそうであったように、臭覚も、聴覚も、風景などの視覚も、断続的といえるのかな、途中で途切れていたり全く欠落していたり、見えていて見えていなかったり、聞こえていて聞かなかったりかな。そんな具合で奇妙な現象に陥っていました。これを聞いた伝承者の1人が、「放射線を浴びると、記憶が失われることがあるのだそうです」と説明してくれました。「新井さんが、そうだったのだと思います」とも付け加えてくれました。そうなのかも知れません。確かに私が、そうだったのですから。

B-29重爆撃機で原爆を投下した、米空軍のティベッツ (Paul Warfield Tibbets, Jr.) 機長が、原爆が炸裂した瞬間、口の中で、何と言ったらいんだらう、何か金属の味がパーッと広がった、と

語っています。私の場合も、それに似た味というのかな、口の中で妙な金属っぽい味がしたような記憶が残っています。

○石田 それは、どの辺りで感じられたんですか。

○新井 大正橋の近くだった、と思います。そこから比治山の麓を巡って比治山橋に辿り着いたころにも、同じような、変にイガラッポイような、金属を舐めているような味を感じました。ティベツの手記では、「放射線が自分の口の中にある歯の治療跡にある金属に反応したのではないか」というように書いています。でも私は、あの当時、虫歯はあったけど、金属を使うような上等な治療はしておりません。奇妙な味でした。

自宅に戻ってからの嫌な強い臭いは、当分、続きました。広島に滞在したのは6日から12日までの6日間だったけど、近くの大河小学校で死体を焼いていたので、毎日、毎日、嫌な臭いが流れて来て消えませんでした。

○石田 あと、東大橋を越えて市内に入ってから、ほかに生存者の方には出会われたんですか。

○新井 覚えていません。東大橋の上のように、被災者の大群に出会って居たら記憶に残るでしょうが、誰かに出会ったと言う記憶がない。これは、同じく生き残っている高田勇君も同じなんです。

○石田 東大橋に行くまでは、結構すれ違ったり、同じ方向に行く人がいたんですか。

○新井 いえ、これもほとんど記憶にないのです。明るく7日に至っては、東千田町の学校へ行くと



35. 比治山本町より南西を望む

(昭和20年10月、撮影 / 米国戦略爆撃調査団、所蔵 / 米国国立公文書館)

めに昭和通りをズーッと歩いたのだけど、人っ子一人居ない。遺体も転がっていない。私1人が、きちんと道の開けた昭和通りを歩いて行った、という記憶です。本当に不思議でしたよ。当然、死体がいっぱい転がっている、と覚悟して歩き出したのに、周囲には瓦礫の山が低く続いているけど、何事もなく道路を通れたのだから、何とも異様な感じでした。後から分かったのですが、船舶工兵隊の少年兵たちが、6日の夜のうちに散乱する遺体を収容し、あらましの瓦礫を片付けて市内の主要道路を通行可能なように整備したらしいのです。

暁部隊というのは変な部隊で、陸軍のくせに船を持っているんですね。潜水艦まで持って居たらしい。それでもって大発（大発動艇）で川筋を一斉に遡って来て、先ず「重傷者を救助せよ」という命令。次にすぐ「死体を収容せよ」となった。この命令で、緊急出動して来た少年兵たちが河岸に上陸。一斉に、周辺に転がっている多くの死体を収容し、道路を片付けてしまったのです。入市被爆した彼らの手記が残っているようです。

○石田 新井さん自身は、そういう救援に入った兵士の方々は見なかったんですか。

○新井 見ていません。私が市内に入ったのは、まだ十分に明るかったから、8月6日の午後夕方近い時刻だったのでしょうか。なにせ、誰も時計なんて貴重品を持っている者なんて居なかった時代です。およその見当でお話ししております。橋の上で出会った憲兵たちだけです、兵隊の姿を見たのは。救援出動した陸軍船舶兵たちも、先ずは被害の大きそうな町の中心部を目指したのでしょう。川を流れている遺体は、鳶口で引っかけて引き揚げたと聞いています。焼け野原の陸上でも、似たようなやり方の遺体収容作業が行われたようです。私が学校へ向かった7日の午後は、すでに主要エリアである町中の作業は完了していたんでしょう。そう思います。兵隊の姿は見掛けませんでしたから。

8月7日の体験（附属中学校への報告）

○新井 自宅に帰ってから、大事な任務が待ち構えていました。伝令です、母校本部への報告書の提出です。報告書は上衣の懐の中に入れていたと思います。8月7日は、朝早くから東奔西走で

した。新久君の家から戻って来るなり、すぐに学校に行かなければならない。しかし父も母も「行くな」と言って止めました。「危ない、まだ町は燃えている、行くな」とね。それでも私は強引に「町中の大火事は、もうすぐ収まるに違いないから」と主張して、出かける身支度をしました。

父も学校へ行くようでしたが頼み込んで、我が家に1個しかない鉄かぶとを借りて、しっかり足にゲートルを巻いて、大事な報告書を懐にして、家を出ました。お昼ごろだった、という記憶です。

昨日の、8月6日に辿ったのとは逆のコースで歩きました。自宅を出てからの道路は支障なく通れます。家の壊れ方もそれほど酷くない。出汐町から電信隊の通りを歩くのですが、なんなく比治山橋に出た所で私は、啞然として、立ち尽くしてしまいました。広島市内が、ぐるーっと端から端まですべて見通せるのです。己斐の山が見える。安芸の小富士と呼ばれ広島湾のランドマークになっている宇品沖の似島が見える。皆実町のガスタンクも見える。日赤病院の高い塔も見える。それらの全部が、すぐ近くに見えるんです。

橋の向こう側に、大きな馬が一頭、ひっくり返っているのも良く見える。比治山橋の手前側は焼けていないけど、向こうの西側は一面が焼けてしまって宏大な焼跡になっている。ずーっとみんな、よく見える。未だ焼跡の各所あちこちが盛んに燻って煙が噴き出しているのも良く見える。快晴の青空だけど、さすがに例のキノコ雲のような厚く大きな雲は薄れてしまっているが、景色全体が、なんだか霞んでいるような感じが残っていました。

比治山橋を渡りました。軍馬が一頭、焼け死



36. 本通りから見た爆心地方面

(昭和20年8月7日、撮影/岸田貢宜、提供/岸田哲平)

で転がっていました。広島は軍事都市です。使役されていた軍馬が無数に飼われていました。物資輸送は全部、軍馬が引き受けていました。トラックは貴重なガソリンを食いますからね。その大きな馬が、四つ足を宙に突き出し、巨大な膨れ上がった胴体を曝して死んでいました。その馬を恐る恐る避けて昭和町に入り、東千田町の母校に向かって歩き始めました。この橋は、昭和15年に完成したと聞きましたが、コンクリート造りの立派な橋。その橋を渡ります。その先の町は、すべて焼けてしまい、焼け野原と化していました。

町中が焼け野原なのですが、不思議なことに、道路と思しき一帯は瓦礫が綺麗に片付けられており、易々と通行できるのです。8月7日の、お昼すぎですよ。両側は勿論、瓦礫の山が煙を吐き出しながら燻っているのですが、真ん中だけは普通に通れるのです。後日、知りました。前の晩に、宇品に駐屯していた陸軍砲部隊の兵士たちが、お得意の舟艇で一斉に川を遡って来て、目につく場所の遺体という遺体をすべて収容したというのです。同時に町中の主要道路を開通させるべく、家が焼け落ちて瓦礫の山になっていた道路を通れるように整理したと言うのです。潮の干満で川面を登り下りしていた遺体も、遠慮会釈なく鳶口で引っかけて舟艇に引き揚げ、凄まじい町中の死体の山も、誰にも見せてはならんぞ、とばかりトラックに次々と収容し火葬してしまったというのです。

そんなことは知らないから私は、道路が通れる、おかしいかと思いつきながら道路の真ん中を通りました。辺りが燻っていて、まだ熱かった。

昭和通りを通り、どんどん焼け跡を突き抜けて行くと中電の配電所の残骸もあったし、富士見橋を渡りました。そこから道路が、少し南へとカーブしていますね。それで後から気が付くのですが、富士見橋と言えば爆心地から1,200メートルぐらいじゃないのですか。私は、そこを通過して、ちょっとカーブして左に折れて、広島文理科大学の学園入口の北門に着きました。

私が最初に辿り着いたのは、文理科大学と高等師範学校、同附属中学校、同附属小学校という4学校を囲む学園のコンクリート壁でした。その構内の附属小学校に最も近い北門です。今も北門は存在しますが、その北門が昔のままの位置かどう

か分かりません。戦後に敷地の北西角部が都市計画線を通すため削られたのですが、影響はなかったのでしょうか。

ともかく8月7日の午後、私は富士見橋から道路を少し左に折れながら、通常の通学路を辿って北門に向かって行き、北門の前に到着すると、周り中が焼け野原で瓦礫の山でした。そんななか大学の北門は厳然とコンクリートの塀を左右に従がえ、大きな門構えの口を開いて立っていました。2枚の扉は何処かに吹っ飛んだのか、門構えだけの北門となっていました。

その北門の手前に、筵が1枚落ちていました。いや、誰かがそっと筵を被せてあげたのでしょうか。その筵の四隅から、焼けぼっくいのような手足が突き出ていました。後から聞きましたが、文理大の物理の正木修教授だったと、実見分した三村教授の証言で身元が判明したとのことですが、あのときは誰か分からないけど、可哀そうだと思ったので誰かがそっと筵を掛けてあげたのでしょうか。その場で一瞬怯んだ挙句、私は足を止め合掌し、ご遺体を避けるようにして北門から構内に入り、そこで更にもう一度、私は愕然となるのです。

真っ正面に、綺麗な三角錐の山が見えました。安芸の小富士と呼ばれる、宇品沖の似島でした。北門の位置からは、左側に附属小学校の3階建てのコンクリート校舎が、窓から未だボウボウと火を噴き燃えていました。同じく左奥には、赤レンガの文理科大学の3階建て本館が見えました。此方は窓から幾らか煙が噴き出ている程度で、鎮火しているようでした。玄関があります。その前にテントが一張あって、人影が数人見えました。

肝心の附属中学校、その隣にあったはずの高等師範学校。何れも由緒ある明治の学び舎は、両校とも綺麗さっぱり焼け失せておりました。焼け跡はまさしく瓦礫の山で、工作教室にあったと思しき旋盤のような機械の鉄屑の山が、うず高く各処に積みあがっておりました。

西を遠望すれば貯金局。隣には日赤病院の特徴のあるタワーが望めるだけ。4つの学び舎を囲んでいたコンクリート塀の中は、文理大と附属小学校を残して、何にも無くなっておりました。伝令として持参した報告書は何処へ、と一瞬の躊躇のち、私は走り出しました。

人影とテントの見える、文理大の玄関へと駆け寄ったのです。私は伝令として報告書を提出しなければならぬ。玄関前に見える人影は紛れもなく学校関係者だろう。駆け付けたとき私は無我夢中でした。ひたすら、懸命に附属の教官を見つけ出して報告書を提出しなければならぬ。その事だけが私の勇気を駆り立てていました。玄関前だったのか、それとも、玄関から文理大の建物に入って行っただけのことだったのか、今や忘却の彼方です。事実、文理大の建物の玄関近い二部屋が焼け残っており、そこが臨時の緊急対策本部となって、大学、高師、附中、附小の先生方が駆け付けていたのです。

その場で私は、教えられたとおりの大声で名乗って伝令任務を申告し、母校教官を呼び出しました。その人は、私の声に「おう」と応えて出て来られ、「こんな時によく来た、伝令だな。用件は何だ」と私の報告を聞き届け、持参した報告書を受け取ってくださいました。ホッとした私は、ふと安堵の想いに捉われそうになりましたが、最後に精いっぱい大声を張り上げます。

「報告終わり。有難うございます。帰ります」

言い終わって挙手の敬礼をし、正確に回れ右をして自宅へと向かいました。来た時と同じように同じコースを逆に辿り、ちゃんと大学の北門から自宅へ帰って行ったはずですが、そこから先は全く記憶がありません。広島文理科大学は爆心地から1,420メートルだそうです。私が構内に入った北門は、玄関より爆心地に100メートルくらい近いのではないのでしょうか。更に富士見橋を往復とも通過した訳ですが、此処は爆心地にもっと近いと思えるのです。

日記によれば、そのあとすぐに3～4日間、私は自宅で寝込んでしまいます。37度台の発熱をし、嘔吐感があり、全身がだるく、食欲も落ちました。この状態の苦しさは覚えています。今から考えれば、私は残留放射能を浴びて放射線障害を起こしたのだらうと思います。大学の本部玄関前は、爆心地からの距離が1,420メートルです。私は大学の玄関より爆心地に近い北門から入りました。更に言えば、大学の北門よりも、往復で通った富士見橋は、爆心地から1,200メートルという近距離だとか。直後に37.5度の熱を出し、疲労感と嘔吐

感があって寝込みました。私が浴びた放射線量は、かなり高かったのではないかと考えられます。

これまた後日、2019年の秋、鎌田七男先生のお言葉によると「新井さんは、直接被爆に換算すると、爆心地から1,400メートル地点で直接被爆したのと同じ程度の被爆線量を受けている」とか。受けた線量は、ほぼ1シーベルト、1,000ミリシーベルトに相当するというお話を、2019年5月に伺いました。そして秋になって、もう一度、染色体検査をした結果、私の浴びた放射線量は、0.6シーベルト＝600ミリシーベルトだった、というデータを載っています。そのように私は、あのとき北門から大学構内に入って、相当量の放射線量を浴びたということを私は鎌田七男先生から伺いました。そのことが、私の6回にも及ぶガン発症に繋がっていると理解しております。原爆の放射線起因の、いわゆる多発性、重複ガンです。

1ミリシーベルトという放射線は、普通の人間が1年間で浴びる通常の放射線量だそうです。そうすると、私はその600倍、ないし1,000倍を一瞬で浴びたことになって、ダメージとしては染色体をぶっ切られて、転座が発生したということが、当然、考えられるというように鎌田先生の解析からは伺っています。その瞬間に、私が現在苦しめられている放射線起因の重複がんが発生する原因となる染色体転座が起こったと言わざるを得ないと思います。

自宅に帰ってからは、日記にあるとおり、寝込みます。37度を超える発熱、嘔吐感、全身倦怠感がありました。動員出動先の原村へ帰らなければいけないけど、とてもじゃないが帰れないという状態。この日記の記述が、私に特別被爆者としての認定が早急に下りた、普通の人よりも早く下りた理由だろうと鎌田先生から指摘されて、「あなたは入市被爆者にしては希有な存在だ」と言われる理由だと思えます。

ということで、私は、母校のある東千田町を訪ねたことで放射線を浴びました。後日、恩師の先生方との座談会で確認するのですが、その現場にいた附属の先生と思われる方は満窪鉄夫理事、今でいう副校長先生であり、私の報告書を受け取ってくださった先生だと思って居るのですが、その先生に何十年もたって、ここぞという勢いで直接

伺ったら「いや、記憶にないね」と仰ったので、実はがっかりしたものです。

それと、担任の三木先生に直接、「あの報告書には、何と書いてあったのですか」と確かめたところ、三木先生曰く、「なあに、我々は元気でやっているよと書いてただけだ」と言われて、もう一遍、がっかりしたのですが、そうオチが付いています。

重要書類ないしは公文書と聞いていたので、八本松駅で伝令として堂々と切符を買うことができた報告書は、何のことはない、学徒動員で出動した者は、みんな元気でやっているよという軽い気持ちのレポートだったということで、後日みんな苦笑いしたものです。しかし、本当に役に立った報告書だったと今でも思っています。

もう1人、文理大玄関前の現場にいらしたのは、例の宮岡力先生という農村動員担当の園芸・農業の先生であって、何をやっていらっしゃったかという、あの現場付近で附属の1年生が遭難・被爆死したらしいので、その死体を発掘すべく作業に取りかかっていたところだったのです。それが8月7日のことです。実際に発掘し発見したのは8月8日から9日にかけてであり、8月6日の朝、東千田町の附属中学校では、中学1年生を中心とした30人ほどの残留部隊の生徒たちが、大学農園に向かって農耕隊として作業すべく出発し、2列縦隊で行進していたところでした。それがちょうど8時15分だったということです。これが附属中学校一年生の、大学南門の悲劇といわれる被爆事例です。

附属中学校の被爆状況（大学南門の悲劇）

○新井 さて、ぜひ、お話ししたいのは附属中学校の被爆状況です。

全滅は免れました。でも、いま申しましたように、相当数の生徒・先生方を失っています。建物疎開の作業は止めて、生徒の大多数は市外に出たけれど、体調の悪い生徒や家庭の事情などで20～30人の生徒が広島に残りました。残った生徒には任務として、学校近くにある大学農場での農耕作業が命じられました。

当時、附属中学校には園芸・農業という正規の授業科目が存在しました。これは、初代主事の長谷川乙彦先生が渡英した折、イートンスクールな

どの実践的な教育から感銘を受け、「農業」とか「園芸」などの自然を相手とする科目を採り入れたものだ、と伝えられています。その授業で、農業をして自然界から食べ物を得ることを学びました。食糧増産をする。これこそ国是に従った作業であり、学徒動員令に従った作業だから、正々堂々と出来るわけです。農村には行けなかったが、同じく食糧増産作業に従事しようという農耕隊の生徒が20～30人、広島に残って居た。

一方、科学学級の4年生は、その当時、三村教授からの一言もあり、学校に残って授業を受けていた。先生方も、それに何人か付き添って学校に残って居た。そこへ原子爆弾が投下されたわけです。

当日の朝、昨夜からの当直だった満窪鉄夫、菊地勇両教官が帰宅すべく学校を退出。8時ごろ、入れ替わるように登校して来た国語の岡本(恒治)先生が、農耕隊として作業に従事すべく集まって来た生徒たちの朝礼・点呼をしていました。農耕隊には上級生6人が指導生徒として付き添い、1年生15人を引率して大学農園に出発するというので校庭で点呼を取り、背の低い順に2列縦隊を組み、3年生の濱井隆治さんの「前へ進め」の号令で行進を開始。そして、文理科大学の南門を通り抜けて、すぐ近くにある大学農園に向かって行進して行きました。

縦長になった2列縦隊が千田小学校の角近くへ来た時刻が8時15分でした。その直前、列の後ろの方で2年生たちが、「ありゃ、B(ビー)が飛びよるで」と叫んだそうです。「何だ、何だ」というので、後方に位置する上級生と1年生の背の高いグループの一団が立ち止まって振り向き、そ



37. 満窪先生など当時の教官たち

のB-29を見たそうです。しかし、前の方に並んでいた背の低い1年生たちは、隊長の濱井さんが発した「止まらずに、進め」の指示を忠実に守り、振り向きもせず生真面目に進んで行き、ちょうど千田小学校の近くの民家が軒を寄せ合った場所に差し掛かった瞬間が、8時15分でした。

一瞬の出来事でした。B-29を見上げて振り返った上級生と背の高い1年生たちは、まともに熱線を浴びました。前を進んでいた背の低い1年生たちの先頭は、あっという間に崩れ落ちた家屋の下敷きになりました。折悪しく2階建てが並んで居た地域。崩れ落ちた瓦礫に埋まった瞬間、あたりは巻き起こった猛煙で暗黒の世界。生き埋めになった村上啓介君の話によれば、暗闇の中から5～6人の声で、「おーい、助けてくれ。こりゃあ、どうなったんや」と聞こえて来たそうです。

しばらく続いた「おーい、誰かおらんか」の声が、やがて静かになって来る。パチパチと火が燃える音が近づいて来る。どうにも動けない。電信柱か何かを押さえ付けていたのだそうです。

必死の想いで、「えいや、えいや」と一生懸命にガサガサ動いていると、やっと1本、手が抜けてガサッと地面に左手が突き出たのだそうです。そうしたら、女の人が通りかかった。そのどこかの小母さんが「誰ですか、誰ですか」と言いながら手を引っ張ったら、倒れた電信柱に引っかかっていた肩掛け鞆が、スポンと上に抜けたんだそうです。鞆というものは上から被るものだ、と思い込んでいたけど、その小母さんの言うとおりに、鞆を外して手を出したらスポンと抜けた。「思い込みというのは恐ろしいもんだ」と言ってね。

その小母さんに礼を言う暇もなく、彼は崩れたガレキの上に出たら誰も居らず、火がボウボウ燃えて来たので、止む無く逃げ出したとか。実は、その小母さんというのは、同級生の木村淳二君のお母さんだったのです。千田小学校の近くに住んでいて、サッカー日本代表になった木村現さん(39回)のお母さんで、その弟が私たちの同期の木村淳二君で、お母さんが後日、「あの辺りで附属の生徒を1人助けた」と話していらしたとか。アダ名が兄貴と同じ「ギャク」だったと言う訳。

その村上啓介君は、燃え出した建物の中から抜け出して、正門から出て現在の県病院の方に向



38. 広島赤十字病院屋上から広島文理科大学を望む
(昭和20年11月、撮影 / 米国戦略爆撃調査団、
所蔵 / 米国国立公文書館)

かって逃げようとしてしました。そこで、校舎内で同じように被爆した科学学級4年生の級長、辰巳健二さんと出会います。「どうしたんや。大丈夫か」ということになり、辰巳さんからは「学校はもうダメだから避難せよ」という指示を受け、そこから村上君は日宇那の船舶司令部の方面へ逃げます。ところが辰巳さんは何故か、また引き返して、学校の中に入って行ったらしいのです。

南教室の2階で文理大の増本文吉教授から化学の授業を受けていた科学学級の4年生は、一瞬のうちに爆風を受けて建物ごと崩落します。棟柱に圧されて、父兄団長加藤悦蔵さんの息子、加藤恭三さんが即死。光明幹郎さんは、耳の辺りに大怪我をして助け出されますが、破傷風になって後に死亡。28人の科学学級4年生は、ほとんど全員があちこち負傷したまま崩れ落ちた教室から抜け出します。級長の辰巳さんの指示で、いったん比治山に全員集合したのだそうですが、そこで辰巳級長が、「状況は悪い。全員解散」と命令して解散となったようです。

その後、辰巳級長は附属に戻って行き、脱出したばかりの村上君と出会ったようです。村上君と出会ったのち辰巳さんは、文理大の焼け跡へと向かいます。そして文理大の玄関前に駆け付けていた満窪先生や宮岡先生に出会い、村上君から聞き出した1年生の遭難を告げたのだらうと思います。被爆後に初めて燃え盛る学園構内に入ったのは満窪教官だと言うことが、「生死の火」の手記で明らかになっています。そのころ文理大の玄関

前には、大学や高師の先生方も次々に駆け付けておりました。南門付近で1年生が遭難したらしいとの情報は、集まった先生方には伝わっておりました。それを伝えたのは、遭難現場から脱出したばかりの村上君と出会った辰巳さん以外には考えられません。そのためか、子息、及川洋一君の消息を求めて学校に満窪先生を訪ねた御父君の及川儀右衛門先生は、「大学南門付近で紛れもない附属中学校生徒の白骨遺体を発見、との情報を得て遺品を検分したものの別人と判明し愁眉を開いた」との手記を残しておられます。

6日は状況が混乱したまま過ぎて行きます。大学は、玄関脇の一室が焼け残っていたので玄関前にテントを張り、応急の対策本部を設営しました。次々に教職員や高師の生徒が構内に帰って来たので、総員で一帯の焼け跡を調べ、文理大の建物内などから多くの犠牲者を発見し収容します。

夕方になって、附属の加藤悦蔵父兄団長が子息の安否を尋ねて来られ、附中運動場の防空壕に安置されていた科4の加藤恭三さんの遺体を引き取って帰って行かれました。その一部始終を見送った満窪先生は、その手記の中に、「愛児の死体を自転車の荷台に乗せて帰って行かれる父君の姿が、彷彿として蘇って来る」と書いておられます。その夜は、満窪先生ほか集まって来た教職員は、大学玄関前に張ったテントの中で眠れぬ夜を過ごした、とのことでした。

7日になります。夜が明けるのを待って満窪先生と桂喜一事務官とが、附属中学校の焼け跡で遭難者の搜索を始めます。瀬群教官は、傍にあった先生の時計で遺骨が判明します。岡本教官は教務室に居たはずと探すと、果たして、当直だった満窪先生と交代して座った席で遺骨が発見されました。しかし身元を確認すべき所持品が見当たらない。定子夫人は、どこかに避難しているのではと、あちこち捜し廻ったけど見つからない。遂に諦めて、満窪先生が発見した遺骨を抱いて帰って行かれたそうです。外にも多くの事務職員や雇員、助手たちの遺体を発見し、8日に附属小学校の北門前に穴を掘り、9人の犠牲者を火葬したとのことでした。この7日の午前11時ごろ、原村から宮岡力教官が現場に駆け付けます。そのとき大学の玄関付近で三村教授に出会ったそうです。三村先生は、

「これは原子爆弾だ」と仰ったそうです。なんでも7月に京都であった理論物理学会で、原爆というのは可能性はあるが実際には完成できるはずはない、と発言なさった直後のことであり、「これは確かに原子爆弾だ」と言っていらっしゃったそうです。

そこへ田村慈朗君のお父上である暁部隊の田村大佐の指令で、陸軍中尉ほか数人の兵士が駆け付け、満窪先生、宮岡先生、及川儀右衛門先生ご夫妻に高師の生徒たちも加わり、本格的な遭難生徒の探索を開始します。かねて白骨遺体が発見されていた南門付近を重点的に発掘してゆくと、千田小学校のちょうど角のところで3人の遺体が出て来ました。その中の及川洋一君の遺体は、真新しい下着姿で両手を合掌の姿で発見され、遺体検分に立ち会った及川先生と奥様が、着衣の手縫いの跡を見出し間違いなくご子息の洋一君だと判断なさいました。そして次に、着ていた服のネームに平本博と書いてあったので本人と確認。3人目に、制服に明らかに田村慈朗という署名が残る遺体が発見されたのです。発掘された遺体は3人でした。

ところが、実は4人目に当たる北村龍郎君が、級友の谷口治達君と共に脱出に成功し、揃って仁

保小学校まで逃げたものの可成りの重傷を負っており、一晩中、母を呼びながらの苦悶のすえ、7日未明、傍らの谷口君が気づいた時には既に息を引き取っておりました。かくて南門の悲劇として、附属中学校の1年生4人が犠牲となったのです。

朝礼で農耕隊の点呼をした国語の岡本恒治先生は教官室で、文法の瀬群敦先生も事務室で、図画の仲頼次先生も遺体で見つかりました。

附中の卒業生で5年生でもあり母校の助手を勤めていた西村実雄さん、若狭良行さん、小松昭三さんら3人の遺体も発見されます。

事務職の稲積薫さん、松原緑さん。学生寮などでお世話になっていた雇員の小笠原菊三さん、吉岡正一さん、草尾アサノさんもそれぞれの勤め場所で遺体となって発見されました。ご遺体は、附属国民学校の北門前で、満窪先生他の手によって荼毘に付されました。ご遺骨は、焼跡に散乱していた鉄兜に納められたのち、次々に訪れたご遺族の手に引き取られて行ったそうです。

このように、教職員が11人、生徒が19人、合計30人が、広島高師附属中学校の原爆犠牲者数です。広島大学発行の『生死の火』などを基に、私たち41期会が調査した結果です。

こういう状態で附属は被爆の惨禍を受けているという事実も知っておいていただきたいのです。附属だけが全滅を免れたということで、附属中学校は敵前逃亡したと、あちこちから謂れない非難を受けました。それに対して、私たちは沈黙を守り通しました。私たちは堂々と軍の命令に従い、食糧増産のために科学戦を戦い抜くために、科学学級も普通学級も農村に出動し、必死の覚悟で学び働き続けることに徹しました。軍の命令とお国のために私たち附属中学校は、食糧増産に働き且つ学ぶ、科学の戦いを勝ち抜くために戦うという覚悟で出動して行ったのであり、戦線離脱などと非難される謂れは毛頭ありません。



39. 東千田町から北東方向を望む

(昭和20年10月、撮影 / 米国戦略爆撃調査団、所蔵 / 米国国立公文書館)

第3章 敗戦後の体験

8月15日前後の状況

○石田 では戦後の話をよろしくお願いします。
○新井 8月15日の終戦の日には、各学年ともほとんどが、それぞれの出動先である原村、戸野村、東城町などの宿舎に戻って来ておりました。私も8月8日から暫く自宅で寝込んでいたものの、一緒に伝令帰省していた笠間君から、「おい、原村へ行こうや」と誘いを受けたので8月12日、彼の介添えを受け母も駅まで付いて来てくれ、乗り込んだ上り列車に向けて母がハンカチを振って見送ってくれるなかを、原村の宿舎に辿り着いたのです。そして敗戦の日を迎える訳です。

一足先に西川亮君が帰っていて、彼は、「広島はどうなったか」というので教順寺の全員から質問攻めに遭っていました。ヒロシマ被爆により私たち同期生の中で、実は何人もの戦災孤児が生まれております。そういう状況ですから、みんなから質問攻めになる。その話を聞いて、これは危ないぞと思った者は、何が何でも歩いて山越えしてでも帰宅するというので、更にまた広島へどんどん帰って行きました。それらの人数は不明です。

それでも何とか14日ごろには、相当数の者が戻っていました。ラジオが、「15日正午の放送は必ず聞け」と繰り返し予告放送をします。この「必ず聞け」という予告放送から全員に、「おかしいぞ、何か起こるらしいぞ」という予感が拡がりました。同時に、原村には陸軍演習場があり、兵舎があり、陸軍部隊が駐屯しています。それが14日ごろから、兵舎の方角で何だか騒がしくなってきたのです。将校が馬に乗って血相を変えて疾走して行ったり、火薬を爆発させてバーンと煙が上がるとか、夜中に大騒ぎをしているぞ、などの情報が入って来る。これは唯事じゃないぞ、となっていました。そこへもってきてラジオが、「8月15日の正午から大事な放送がある、必ず聞け」という命令を繰り返し放送するのだから、不安感がいっぱいに拡がりました。

15日、全員が聞きます。寺に何人残っていたか覚えていませんが、たぶん20～30人かな。すぐ隣に農協がありました。その農協の広場に行くと、ちゃんと農協の窓辺にラジオが引っ張り出してあ



40. 原村陸軍演習場で訓練する附属中生徒
(昭和4年頃)

り、町の人たちも大勢が集まって来ていて、正午からの放送を聞きました。

例の、雑音だらけの放送が始まります。「なんだか様子がおかしいぞ」という雰囲気のまま聞いたラジオです。いつもと違い、「軍艦マーチ」とか「海行かば」が流れてから放送が始まるという方式ではない。重々しくアナウンサーが、何か前置きの言葉を読み上げたあと、これまで聞いたこともない、奇妙な節回しの声が聞こえ始めました。天皇です。玉音放送という言葉も初めて知りました。玉音、つまり天皇の声なんて聞いたこともないけど、やがて「これは本物の天皇陛下だぞ」と確認に至り、何を言っているのか耳をそばだてました。でも、内容が分かりません。

ただ、所々は聞こえました。私が覚えているところは、「耐え難きを、耐え、忍び難きを忍び」と、間違えそうになりながら、読み上げた部分。これは分かりましたねえ。それから「宣言を受諾し」だったかな、そういうのが途切れ途切れに聞こえました。

「これは…」と思いましたねえ。「負けたな」と気づきました。天皇の奇妙な声が終わったあと、アナウンサーが勅語を繰り返して読み上げ、ポツダム宣言を受諾して戦争終結、と告げ敗戦の事実を解説したとき、これを聞いてようやく、「ああ、日本は戦争に負けたのだ」とラジオを聞いていた全員が理解出来ました。

辺りを見回しました。シーンとして誰一人、声をあげる者も居ません。泣く人も誰一人として居ません。遠く鼻をすする音が聞こえたかな。みんなラジオの方を見詰めてシーンとして、空虚な眼

差しですね。これが、敗戦の玉音放送を聞いた直後の私の記憶なんです。不思議ですね。みんなラジオをジーンと見つめていた。見ていたのではなく、ただ中空を凝視するというか、うつろな視線を泳がしていただけなのでしょう。シーンとしておりました。

後日、当時のニュース映像を見ました。ニュース映画です。皇居の前でうっ伏して泣いている人、焼け跡で頭を垂れて涙を流す若い婦人。そんな映像ばかりでした。ところが私たち附属中学校の1年生は、あの日あの時、誰も泣きませんでした。涙をこぼすものも居なかった。何故か分かりません。こうなるべきだったのが、そうならただけなんだと思った、としか言いようがない。受け容れざるを得ない事態が起こったのだ、としか言えない玉音放送でした。

そのあと、友人の一人がぼつんと言いました。「これがコペルニクス的転回というヤツだ」と。高田勇君です。このときは父の死を確認した直後で、彼の母と兄は、まだ生きていました。しかし月末には二人とも原爆症のため彼の眼前で悶死し、彼は孤児となり、自らの手で母と兄とを茶毘に付さねばならないという、中学1年の少年にとって残酷と言うべきか、言葉を失うほどの地獄が待っていたのです。でも彼には次兄と実弟が残っていました。彼は、原爆孤児と呼ばれるのを極端に嫌います。「両親は失ったが、まだ二人の家族が残っている。だから孤児ではない」と言い張ります。この高田勇君の気持ちが理解できなければ、原爆と戦争を語る資格はありません。

さて、敗戦と決まってから原村は大変な騒ぎになりました。原村演習場に駐屯している暁部隊で、暴動が起きたんじゃないかと思うほどの騒ぎでした。兵士たちが走り回っていました。それこそ、自転車やら馬やら、車もあったかな。それから近くに池が幾つもあるんですが、池の中にプカプカ何か大きな物が浮いている。何かと思ったら、2メートル角ほどの四角いゴムの塊です。ゴムって戦争中は重要な戦略物資ですよ。ゴムを手に入れるために日本は、南方に大兵力を進出させて戦争を招いたといわれているほどです。その貴重品の塊が幾つもある、近くにある七ツ池にプカプカ浮いている。誰かが放り込んだとしか思えない。

そして今度は我々自身です。いったん寺に戻ります。教官方から話があったと思いますが、我々はどうなるんだ、ということです。一番最初に思ったのは、我々は国立学校である。そして科学学級という国策学級も持っている。間もなく占領軍として鬼畜米英が日本に上陸して来る。そうなったら、我々みたいな官立学校で国の直属学校は、有無を言わさず取り潰されるのではないかと考えました。先生方も、同様の危険性ありと思ったらしいです。では、どうするか。どうしようもありません。手も足も出ません。占領軍が実際に来てみなければ分からない。

次に考えねばならぬ事項は、我々はここで何をすれば良いか、ということです。何はともあれ、先ず食って生きねばならない。そのためには農家に行ってお手伝いをさせて戴いて、少しずつお米を貰う。とても配給だけじゃ足りませんからね。そうやって、これまでも食って来たのですが、その大義名分がなくなった。もし農家をお願いするにしても、受け入れて頂けたら有難いけど、これだけ大人数の食い盛りの少年たちに何らか食べる物を与えて下さるとは、いくら気の優しい村の人たちとしても難しいだろう。私たちの合宿所に手伝いに来てくださっている近所の娘さんたちも、このさき来て頂けるかどうか分からない。

つまり今の合宿生活体制、農村動員出動体制が維持できるか否かが最初の問題でした。結論は無理だという答えでした。では、どうするか。解散するしかない。では帰ろう、ということになります。帰るためには先ず現在員を確認しよう、ということで級長が、現存するメンバー全員をチェックしました。既に半分ぐらい居なくなっていました。人数が少なくなっているけど仕様がな、このまま解散することになりました。

いつ解散するか。手持ちの食糧から逆算すると18日までが精いっぱい。ということで8月18日解散と決め、全員一斉に教官引率のもと八本松の駅に集合し、何とかして切符を手に入れて広島まで帰り、そこで解散しようと思いましたが、ということで、一斉に身辺整理が始まります。これが15日から始まって18日に広島へと、こう方針が決まったのです。

秩父への一時避難

○新井 そういふ大きな混乱が起こった挙句に、なにはともあれ解散して全員広島へ帰ろうということになり、一斉に18日に原村を引き上げることになったのですが、勝手に先に帰って行く者も居るのです。つまり父か母の迎えが来て、一足先に広島へ帰る者が続出しました。実は私もその一人でした。引き揚げの前日、17日に私の父が原村へ迎えに来ました。もう父は心を決めておりました。

終戦の15日、偶然に父は広島駅で、母と一緒にラジオのスピーカーで聞いたんです。スピーカーを積んだNHKの放送車が広島市内を走り回って、「8月15日の正午にラジオを聞け」と叫んでおり、NHKの放送車は、その時間に広島駅へ来たのだそうです。父母は敗戦の報を駅で聞きました。

なぜ父と母が広島駅に来ていたかと言うと、天皇の放送を聞く前にですよ。もう間違いなく日本は危ない。私たちは広島に転勤で来ているのだから、頼るべき親戚は1軒もない。だから食うものが手に入らない。配給だけではとても生きていけない時代です。親戚知人皆無の広島では、どこからも食べ物を手に入れることが出来ない。おまけに父は体が弱く、生きているのが精一杯。これでは、遠隔の地、広島で生きて行くことは困難だ。玉音放送を聞いた、そのとき父は、既に故郷の秩父へ引き揚げようと心を決めていたんです。

それで母と相談して、取りあえず貴重品を埼玉県の秩父まで送ろうという事で、借りて来た大八車に荷物を積んで広島駅まで来て、秩父まで送る方法を駅員に相談しようとして、たまたま駅に来ていて、偶然に、そこで天皇による終戦の詔勅放送を聞いたのです。それで決心が固まります。即座に父母は、秩父へ逃げ帰ろうと決めました。そのあと駅でどうやったら荷物を送れるかと相談すると、不思議なことに、芸備線経由ならば埼玉県までチッキ便で送れると分かったのです。それならというので、持って来た荷物を、フラフラになっている父と比較的元気だった母の二人だけで、芸備線のある一番奥の7番線まで引っ張って行き、荷物発送の手続きを済ませたのち、再びフラフラになって自宅まで帰ったのだそうです。

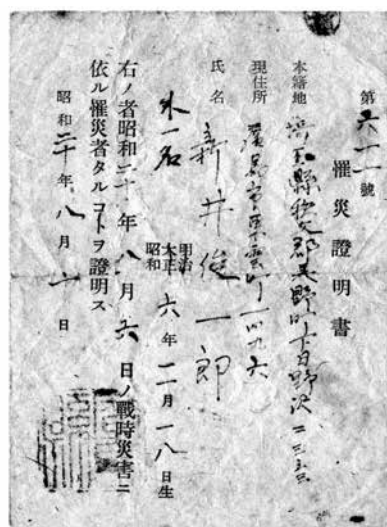
では、子どもたちを連れ帰らねばならん、とい

うことで手分けして私と弟を疎開先から連れ戻すことにしました。家の中は被爆で無茶苦茶になっているのを片付け、雨に降られたら大変だということで防空壕として掘っていた穴に大切な物を詰め込んで隠し、あとは持てるだけの荷物を作り、手分けして子どもたちを迎えに行きます。

たぶん先に母が16日に、庄原へ疎開していた弟を迎えに行ったはずですが、次の17日に、原村へ父が迎えに来ました。私は父が迎えに来たとき、そこで初めて秩父に逃げ帰ることを聞かされました。慌ただしく高田君ほかの仲間と別れの言葉を交わし、父と共に原村の教順寺を出ました。そのとき高田君と二人で話し、「これから秩父に逃げて帰るが、手紙を出すので、出汐町の家がどうなっているか、広島に戻ってから住めるかどうか手紙で知らせてくれ」と頼んで別れます。

出汐町の家に戻り着くと、弟も帰って居り、どこからか父母が罹災証明書を手に入れて来て、その証明書を持って行けば列車に乗れると聞かされ、明るく18日出発、と決めました。その罹災証明書の実物は、今も大事に持っております。

身支度を開始しました。6日の被爆で破壊された自宅での生活、学校の被害調査と罹災した教官の救出や生徒の世話など、連日の奔走で父の疲労は限界に来ていました。下痢も続き体力は尽き果てようとしていました。しかし、何としても遠い故郷の秩父まで辿り着かねば、生きて行く今後の見通しが立たない。必死の思いの脱出行です。母が中心になって持参する必需品を選び出し、手分



41. 被爆時の罹災証明書

けて運べるよう荷造りしました。私のリュックサックとトランクは、たちまち最も大事で便利な被爆難民用の手荷物となりました。体力の限界に達した父に荷物を持たせる訳には行かない。大豆など食料の残りを一升瓶に詰めて、床下の防空壕に隠しました。父が無理なら、母と私の二人が引率者にならざるを得ません。「ようし」と私は、一行のリーダーになる決意を固めました。準備が整い、父の容体も少し安定して来たな、と思われたとき、18日も夕刻になっていました。こうして被爆難民4人の逃避行開始…まずは広島駅へ。

なけなしの荷物を持った親子4人家族。父はまだ体力が無くてふらふら。弟は4年生、私は長男で中学1年生だから、いちばん元気で引率者の母の手助けになったと思います。最も頼りになるのは母でした。身のまわりの必需品を詰めた荷物を持ち、なけなしの米でムスビ弁当も作り、煎った大豆を持って宇品線で広島駅まで行きました。

早くも兵士たちの復員が始まっていました。まるで復員列車です。大荷物の、明らかに隠退蔵物資と思われる包みを背負った復員兵士の群れが、堂々と列車を占領して乗り込んで来ます。元気のいい若い連中ばかりです。爺ちゃん、婆ちゃん、小父ちゃん、小母ちゃん、体の弱い子どもなんか吹っ飛ばされるばかりの勢いです。来る列車は貨物列車ばかりで、それに乗り込むのです。復員兵らの大群衆が押し合い圧し合いして貨物列車に乗り込むのです。とても私たちみたいな家族連れ4人組などが乗り込めるはずがない。いつまで待っても乗れない。夜になっても未だ乗れない。やっと乗り込めたと思ったら、4人とも手も足も床に着かないまま、車内の天井から宙吊りされているみたいな格好でしか乗れない。これでは、衰弱し切ってフラフラの父を連れて東京へ行くなど、とてもじゃないムリ。という訳で、折角乗り込んだばかりの列車から降りてしまいました。

夜中になります。やっと来た上り列車は、呉線回りのノロノロ鈍行列車で、またもや無蓋貨車でした。18日の夜遅く、何とか貨物列車に乗り込んで出発できました。ところが発車してノロノロと呉駅まで来たら、ガタンと止まってしまい、この列車は此処までだ、と全員が降ろされてしまったのです。真夜中になっています。仕方なく呉の駅

舎前で野宿しました。駅前広場は小さくて狭い。そのうえ駅前から前の道路に向けて、緩やかに傾斜し下っているのです。寝て居たら自然に転がり落ちて行く。駅前には真つ暗闇の焼け野原。お空の星だけキレイでしたが、眠れませんでした。ここで驚いたのは、薄いながらも広い敷布団を母が持ち込んでいたこと。見通していた、ということでしょうか。母の凄さに感嘆したものです。

19日の朝、眠れぬ夜を呉駅前で過ごし、4人は駅前の路上で朝を迎えます。暫くして私たちは、広島から呉線を走って来た列車に乗り込みました。壊れてはいたけど一応、客車の態を成しておりました。混雑ぶりは昨夜と同様。少しはましだったかな。糸崎から三原に辿り着き、そこから大阪行きに乗り換えます。何とか無理して乗り込むことが出来、大阪まで行くのに初めて沿線の風景を見て仰天します。物凄い光景、一面の焼け野原です。それが、何時までも何処までも続いているのです。これでは負けるはずだわい、と納得したものです。

神戸に近づきました。すでに夕方近くなっていました。神戸の町の、あちこちに明かりが灯って煌めいていました。ああ、戦争が終わったんだ、明るく電気を灯しても良いんだと感激しました。

大阪駅に着きました。夜になっていました。また乗り換えです。ヨレヨレの家族4人が東京行き



42. リュックサック

(寄贈 / 新井俊一郎、所蔵 / 広島平和記念資料館)
何処へでも背負っていった

に乗ろうという訳です。駅構内は大混乱でした。

私たちみたいな被災者の一群。買い出し部隊と思しき膨らんだ背荷物集団。見慣れた復員軍人の大部隊は、揃って担ぎきれないほどの大荷物を携行しておりました。そして目を疑ったのが、乱暴狼藉の限りを尽くす朝鮮人の群。第三国人と呼んだ方がいいんでしょうか、一夜にして戦勝国民となった民族です。列車に乗り込もうというのですが、やることなすこと猛烈に乱暴なんです。先陣が列車の窓ガラスを外からズラッと割って行き、そうして空いた窓から本体の集団が客席に雪崩込んで、先に坐っている乗客を放り出し、客席と言う客席を全部占領するんです。俺たちの天下だと言わんばかりに奪った席に悠々と座ります。後から乗ってきたお客は、蹴つ飛ばして追い出すという始末。追い出された日本人は小さくなって、列車の隅っこに黙って固まっているほかありません。敗戦国民の悲哀を。シッカと味わいました。

そんな中で私たちは、上り列車を待ちます。19日の夜遅くなって、やっと乗り込めました。体の弱い父がいるので何とか座席を一つ確保したかったけど無理でした。大阪駅を出た夜行列車は、ガタンガタンゴトンゴトンと音を立てながら東京に向かって走って行きます。しきりに、とんでもない途中の場所で何度も、止まったり動いたりを繰り返す。もちろん車内放送なんかあるはずも無い敗戦直後。被爆難民の私たち4人は、それでもなんとか座席をヒトツ確保できたので、そこに父を座らせ、ちょっとばかり安堵したまま、揺れる車内で居眠りしつつ、子ども心に幻影となって刻み込まれている、「大井川の踊る鉄橋」を渡ったのを覚えています。いつも秩父へ帰るとき通過する鉄橋ですが、鉄橋の支柱たちが窓越しにバタンバタンと踊るように見えて不思議でした。

20日の夜が明け、暫くゴトゴト走ったあと東京へ近づきます。横浜や品川あたりの様子が、父の手記での表現では…、

「満目蕭条たるものであった。国破れて山河あり、これが実感として迫って来た」とある。

そのとき私たちは、大柄な一人の客から凄まじい勢いで怒鳴られていました。「なにやってんだお前たちは。こんな大混雑の中で、立派な大人が座席を二人分も占領しやがって」。母が一生懸命

に弁解します。父は虚弱体質な上に腹部を大手術をした直後なので、どうか勘弁して座席に横にならせてください、とね。納得させるのは大変でした。

猛烈な大混雑の列車です。病人と一緒の逃避行とは何とも苦しく、難しいものだと痛感しました。病人を介抱しながらの被爆難民なんて、母の苦勞は並大抵のものじゃなかっただろうと思います。それでも東京に近くなったころ、私たちも交互に座席に坐れるだけの余裕が出来ていました。そうして当座の手荷物をいっぱい抱え込み背負ったまま、焼け落ちて、すっかり変わってしまった東京駅に着きました。昼頃だったな、と記憶します。

超満員での列車の旅から兎も角、いったん解放感を味わいながらお昼にしよう、となりました。東京と言えば父の縄張りだから父に引率され、東京駅のホームから出て、正面の皇居方面の出口から日比谷公園に向かいました。良いお天気で、さほどの暑気を感じない木陰に揃って腰を下ろし、荷物を拵けてお弁当を取り出しました。

とたん、疾風の如くと表現すべきか、「泥棒ッ」と叫ぶ暇もないほどの早業で、せっかくのお弁当が浮浪児の集団にカッ攫われてしまったのです。「アツという間もない」とは、このことか。お見事でしたねえ。公園に現れた私たちボロボロの4人の難民親子は、良い鴨が現れたぞと、早くから狙われていたのでしょうか。おかげで無けなしの弁当を失ってしまった私たちは、トボトボと再び東京駅へと戻って行くしかありませんでした。お昼として何か口に入れたかどうかなど、全く覚えておりません。東京駅から今度は上野駅へ行かねばならないのです。父は「省線で上野へ行こう」と言いました。国営鉄道どころか父の時代は、鉄道省直営の省線電車だったのでしょう。「省線」という呼び名は、新井家では戦後も暫くのあいだ使われていた標準用語でした。

省線の上野駅は地下にあります。ご存知でしょうが、東京から各地方へ向かう電車路線の大半が、上野駅から出ています。だから逆に東京へ出て来た地方人の大半が、先ずは上野駅に到着する訳です。そういう意味で昔から上野駅は、ニュースの狙い目になっておりました。上京して来るお上りさんと学生たちは、このホームに降り立ち、それ

それぞれの夢を目指して散って行くわけです。あの時の私たちも、上野駅から埼玉県秩父へと逃れ行くためにまずは上野駅に行き、そこから高崎線に乗って熊谷駅へ行き、又そこから私鉄の秩父鉄道に乗り換えて、遥々と有名な観光地である長瀨駅か皆野駅を目指して行くのです。そのために私たち4人は、大混雑の坩堝みたいになって居る東京駅から、今度は省線で上野駅へ向かう、という又も繰り返さねばならぬ大衆衆との格闘に向けて突入しました。何度も何度も、武蔵の国は関東地方の屈強な集団に撥ね飛ばされながらも、武者ぶり付くようにして省線電車で潜り込んだ私たちが、ようやく懐かしの上野駅に着いた頃は、夜もだいぶ遅くなっていました。広い上野駅の地下道は、こんな時刻になっても、おいそれとは歩けぬほどの大混雑で、いつまで待っても押すな押すなの大騒動の連続です。大荷物を抱え病身の父を伴っての身動きは危険、という判断で上野駅地下道の大階段に座り込んで野宿することに決めました。

のちのち有名になった上野駅地下道の大階段にへたり込んだときは、もう階段を上り下りするなど御免、と言いたいほど疲れ切っていました。昼弁当を失ってから、何か食べたのかも全く覚えていません。どちらにしても、もうコメのムスビなどは腐って発酵し、妙な匂いを発しておりました。それでも食べたのか、どうにかしたのかも覚えて居ません。持参していた炒った大豆は、自由に食べられた唯一の携行食品でしたが。

その時に不思議なことが起こるんです。これは父の手記に残っています。一人の浮浪児の少年が父のところに寄って来て、「おじちゃん、これあげよう」と焼き芋の一つ呉れたのです。父が手記に書き残しています。

「うす汚れて髪も乱れていたが、目鼻立ちは割りに整った少年だった。戦災孤児とか浮浪者という言葉は、この頃はまだ一般的には使われていなかった。私は彼に与えるべき何も持っていなかった。しかし、これはまるで逆ではないか。このままでは悪いな、と考えている間に、少年の姿は暗い人混みの中に消えてしまった」

そこで野宿しました。もう何日になったのかも分からなくなっていました。覚えていません。たしか明るる日が8月21日になっていたはずですが。

やっと一家4人は、上野駅から高崎線で熊谷駅に着きました。そのあたりの駅は大混雑には違いないが、乗り降りして乱闘騒ぎは起こりませんでした。しかし辿り着いた熊谷も、一面の焼け野原でした。ホッとする間もなく、熊谷から今度は秩父鉄道という私鉄に乗り換え、埼玉県の秩父に入っていきます。混乱もなく無事、秩父鉄道に乗り込んで、今度こそホッと心安らぐ思いに浸ったものです。電車の中で、懐かしい秩父の田舎言葉が耳に入って来たのです。この何日間かの、人間が人間の上に乗って来るとして来るみたいな長距離列車の必死の格闘騒ぎを忘れることが出来そうでした。ああ、故郷に帰って来たな、心底そう思いました。

長瀨という有名な観光地の駅で降りて、そこから目的地の日野沢村まで、急な溪谷沿いの山道をずっと、それこそ2里も3里も歩きます。普通なら馬車か何かに乗って行くのですが、4人はクタクタに疲れ果てながら、重いトランクを下がりリュックサックを背負い、どこかで母が手に入れた芋か大豆の蒸かしたものを両手に下げ、懸命に歩いて行きました。小柄な母が、全身の力を振り絞って、今にも倒れそうな父を支えていました。

途中に吊り橋があります。そこまで来たとき、もう限界でした。へたり込んでしまい、腐ってしまった大根飯か大豆飯のムスビを無理やり齧って、水筒の水で喉を潤わせ、やっと腰を上げ再び歩き始めました。暗くなって来ましたが、もう時刻なんて、気にする力は残って居ませんでした。

21日の夜中近く、ヨレヨレになった広島からの被爆難民4人は、日野沢川の川沿いに建つ、秩父の新井本家に辿り着きました。先祖代々、村社である日野沢大神社の神官の一族であり、明治の建立と伝わる古くて大きな家屋なのですが、辿り着いたのは、もう夜中だったと思います。

あっという間に、大変な騒ぎが起こりました。新井本家は日野沢川を渡る専用の橋が架かって居り、渡り切った先に下流から上流に向けて幾つもの建物が続く、典型的な養蚕農家造りの家屋群でした。一斉に本家の家族全員が飛び出して来て、周囲をグルリと囲まれました。

玄関先の明かりの下で、本当にマジマジと、「お前さんたち、足があるかい」と尋ねられましたよ。マジに質問され、顔を覗き込まれたのですから。



43. 埼玉県秩父郡日野澤村沢辺の新井本家

「絶対に駄目だと諦めていた」と、荷物を受け取り身体を支え、父と私たちを家の中に導きながら、秩父の皆さんは口々に言いました。

広島の家を抜け出してから、さあ、何日かかったんだろう。家族4人、みんなもうボロボロ。くたびれ果てて汚れ果てて、もちろん風呂にも入っていないから垢まみれで、食べるものはないし、父はもう痩せこけてしまったし、母だけが気丈でした。長男の私は、それでも何とか母を支え、父を救って旅を続けるしかないと思死でした。弟は、そのころから大腿部に菌が入ったのか、ひどい炎症を起こし痛がって歩けなくなっていました。のちに広島で手術をすることになるのですが、こうして母と私の二人が、やっとのことで父と弟を介護しながら、遙か埼玉県の秩父まで辿り着くことが出来たのでした。

到着した21日の夜は、日野沢川添いの新井本家で疲れ切った身体と心を休めました。本家特有の巨大な五右衛門風呂で積もった垢を洗い流し、勧められた食事も、広島での出来事の説明もそこに、4人とも死んだように眠りに落ちました。

22日。母の実家「高橋家」は、同じ渓谷沿いの村の山の中腹にある「大神村落」の中でも一番高い場所に建っているのですが、疲れは残っていたけど無理して坂道を登り、「みな無事で帰って来たよ」という報告に行きました。さすがに昨夜は深夜近い夜中の到着だったためか、普段なら珍事発生などの噂はたちまち村中に知れ渡るのですが、高橋の家には全く情報が伝わっておらず、昨夜の「新井本家」での大騒動を凌ぐ騒ぎを惹き起こしました。驚きと歓びの大騒ぎが沸き上がり、

従弟たちを含む全員が前庭に飛び出して来ました。ここでも同じように「本当に足があるのか、何処も怪我してないのか」と真剣な顔で驚き尋ねられ、こちらが当惑する始末でした。

8月18日に大混雑の広島駅を出て、呉駅から広島駅へ、三原・糸崎駅から大阪駅へ。そして東京駅から上野駅へ。高崎線で熊谷駅に着き、乗り換えて秩父線で長瀨駅に辿り着いて下車。夏の炎暑の中、歩きに歩いて秩父の山の中、日野沢村の故郷に被爆難民として逃れ着いたのが21日の夜中でした。

そこから私たちの、広島からの被爆難民としての脱出行を終えて、秩父での流浪難民生活が年末まで続くこととなります。広島へは帰れないのです。すぐ直後に猛烈な台風が来ました。鉄道が寸断され、出汐の我が家も、恐らく駄目になっただろうと思って居ました。後でハガキを出したら、そうとう遅れて高田君から返事が来たのです。雨で全部やられてガタガタになっているが、住めないことはないが、誰かが家の中に居るぞ、と言うんです。誰か居るぞって何のことだ、と混乱しましたね。

父の健康は、相変わらず不安定でした。実家に帰って来て落ち着き安定したのも束の間、9月の半ばごろ、39度5分の高熱を発して、遠く保健所から女医さんの往診を受け、「原爆症だろう」と診断を受けます。一方、母の打撲傷は治らず、顔の右半面が紫色に腫れあがり、一向に治る気配もありませんでした。相当な爆風で飛ばされ、強烈なショックを受けていたのでしょう。村の保健所から来た医師の診断では、骨折とか頭蓋内の異常はない、とのことでしたが、まるで「四谷怪談のお岩さん」のようだ、と嘆いていました。全身のガラス片による創傷は父母とも、案外早く治って行きました。

そんなことで、11月17日に広島へ戻るまでは、故郷である埼玉県の秩父で、学校にも行かず両親の実家での暮らしを続けていましたが、几帳面なことに、日記帳を持って行っていたので日々の暮らしなどを書き込みながら、新井と高橋、両本家の人たちの世話になって過ごして居りました。

あの時代ですから、戦地へ出征していた本家の末の叔父、新井昌夫主計兵曹長やら、都会で焼け

出された一家やら、誰も彼もが引き揚げて来るし、台湾に行っていた叔父の新井唯一さん一家5人も、肺結核で弱った身体を引きずるようにして引き揚げて来ました。

そんな具合で新井の本家も、母方の高橋の本家も、敗戦直後は人口が倍増しています。田舎といっても秩父の山の中は、稲田がないんです。だから米が穫れない。秩父古生層で有名な、急峻な山と谷間に僅かな民家がへばり付いているというような寒村、というか貧村ですから、麦や粟、稗とサツマイモと桑と、そんなものしか畑では育たないわけです。配給はそこそこあったんでしょうが、とてもじゃない、一挙に20人近い大家族になった新井本家ですから、全部が自家製、自己完結式生活であり、逃げ込んだ私たちは、秩父の親戚のおかげで敗戦後生き延びさせて戴きました。

9～11月の附属中学校の状況

○新井 私が秩父に逃げている間に、広島では様々な事態が進行していたわけです。その状況は広島に帰ってから聞きました。説明します。

附属中学校1年生の全員が8月18日朝、広島駅まで集団で帰って来て、駅前広場で解散します。1年生は当日、教官引率のもとに午前4時40分ごろ教順寺を出発し、八本松駅を午前6時前に出る列車で広島へ向かい、広島駅に午前7時ごろに着き、駅前広場に集合して教官から、「ここで解散をする。9月1日朝9時に、千田町の附属小学校焼け跡に集合せよ」との指示を受けて解散しました。



44. 広島駅

(昭和20年11月、撮影 / 米国戦略爆撃調査団、所蔵 / 米国国立公文書館)

広島駅前広場というのは爆心地から1,900mですから、2キロ以内です。しかし、駅裏は2キロを超えています。我々原爆から20日以内である18日に、爆心地から2キロ以内である広島駅前広場で解散しました。つまり全員が入市被爆者になった訳です。

私は、8月6日には広島市に帰っておりましたが、私以外に原村に残っていた仲間たちは、この日、この場所で、入市被爆者としての資格を取得します。それまでバラバラに広島へ帰っていた者は、各自で入市被爆の証拠を提出し申請しなければならない訳ですが、そのほか同一行動で18日に広島に帰った大多数の級友は、入市被爆者としての認定申請に際し、その行動を記録した「昭和20年の記録」が重要な証拠として採用されました。

9月1日、附属小学校の焼跡に集合となるのですが、実際には僅か20～30人しか集まらなかった模様です。そのため止むを得ず、もう一度、再集合の指示が出ます。母校の校舎を被爆で失っている訳ですから、みな行き場がありません。だから元の動員先に集合せよ、という指示になりました。

(『昭和二十年の記録：全滅を免れた附中一年生』を手にとって) この末尾に記載されている年表は、私・新井俊一郎と同級生の吉本幹彦、南組の高田勇、それから私と同じ北組の西川亮、この4人の日記を基にして作りました。

「9月1日午前9時、正規学級の附中全校生徒は千田町の附属小学校の工作室跡に集合。各人の被災状況、現住所などの調査、主事(校長)の訓話。その後、学年別に今後の方針を聞く。1年生は9月3日に原村へ」、つまり出動先へですが、「集合することに決定。科学学級の生徒は東城町へ約半数が再集結したものの、10月1日に原村へ集合の方針が決まったため、移住のための荷造りと後始末を行う」とあります。これが9月1日です。

「原村に集合せよ」となった9月3日、「正規学級1年生は原村に再集結したものの、指示どおりの日時に集まったのは少人数。宿舎は帰省前と同じ寺と神社」ということで、学校体制は整えられなかったものの、どこかで何かを始めなければならないので、やむなく出動先を寄宿舎として考えれば、そこで生活しながら勉強が出来るというこ

とで、合宿式の寺子屋体制に入るわけです。1年生、2年生から最上級生まで、そうなります。

被爆以降、附属中学校はタコ足学級になります。上級生は広島青年学校とか臨海学校とか。それから東洋工業とか、附属小学校の焼け跡教室とか、バラバラになりました。1年生の私たちは原村に行きます。2年生は戸野村に行ったんだろうと思いますが、詳しくは確認していません。そういう状況で戦後すぐの新制広島大学のタコ足学校みたいに、学年ごとに、それぞれの場所に散らばって学校再開となります。

9月11日、「近藤学長」、文理科大学の新任学長が「原村教順寺に来訪。その後、宮岡教官とともに学長をゴルフ場へ案内。暁部隊の兵士と教官の指示により、生徒30名が出動して同行作業」。これは原地区への学校移転を考えているんです。早くから文理科大学などの移転を学校としては考えていたらしいのです。あの原村の陸軍演習場、ゴルフ場というのは原村陸軍演習場の農場になっていましたから、私たちはこののち、その農場になってしまったゴルフ場を耕すのです。フェアウエーを堂々と耕して、芋を植える豆を植えるという作業をやりました。信じられないでしょうがね、今となっては。名門のゴルフ場を耕したのですから。

後から立派な八本松ゴルフ場になったのを見て悔しい思いをしたものだけど。同級生の中にもゴルフ場のメンバーが何人も居ましてね。後日訪ねて行って、「俺は、ここで芋を作ったんぞ」と威張っていましたがね。そんなことが、たちまち9月に起こっています。

それから9月13日、橋岡信一、宮岡力、結城清一、来馬欽吾各教官と山本事務官が原村の暁部隊を訪ね、施設と物資の引き渡し交渉をして譲り受けます。暁部隊の折衝責任者の前野大佐とは、毎回登場して下さり格別の世話を戴く人物ですが、科学学級1年生の前野長昭君の父親です。

「暁部隊の前野主計大佐との話し合いが正式に成立し、附属中学校の原村移転と授業再開の目途が立つ」と記録されています。暁部隊と交渉して、原村の兵舎と、全ての施設と物資とを、広島高等師範学校附属中学校が引き取るということになったのです。その交渉の過程で、経済犯の囚人を兵舎の一棟に収容したいとの話が出て断ったけど、

どうせ何時までも断り切れないだろうという事が、西条の吉土実（よしとみ）小学校への移転の契機になったと、藤井堅志教官が証言して居られます。

あと私たちへ、その原村の兵五郎原にあった陸軍兵舎などに集合せよ、との指示が出るのですが、その間にはいろいろな出来事があって、科学学級も原村に引っ越して来て、兵舎ではなく明顕寺で合宿生活に入るなど、いろんなことが起こります。

「17日夜、猛烈な暴風雨に遭う」

○石田 枕崎台風ですね。

○新井 9月20日、「教順寺で月見の宴」。これはとても印象的だったようです。

歴史の田中清三郎教官が主催したんですが、生徒たちもずいぶん家族を亡くしたし、孤児になった生徒が何人もいる。帰る家がない子がいっぱい居る。きっと寂しいに違いないから、せめて生徒たちを慰める意味で、寺の前の庭に筵を敷いて、月見の宴ということで、なけなしの食べ物を分けて食べながら和歌をつくろうという催しです。ここで歌会を開いたのですね。非常に感動的な集いだったようです。

10月1日、「広島に帰省することが決まっていたけれども、主事先生の命令で中止になる」。やたらこんな急変が起こるのです。今風に言えばドタキャンですが、決まっていたことが、すぐひっくり返る。何も決められない状況が続きます。それで、いったん原村に来たけれど、家に帰って宜しいとなる。そこから、何とかして通学しようという話が起こるんです。

「1年の東組が宿舎の真光神社を引き払って、教順寺の北と南に合流。科学学級の生徒も原村の兵舎に再集合開始」。ここで、やっそこさっとこ、一か所に集まり始めます。何故かという、生徒の数が激減したからです。1年生も全員で161人のうち、60人ほどが被爆死や出身地への転校・帰郷などで姿を消しました。急激に人員が減って行くのでクラス編成が出来ないんです。3クラスを2クラスに減らすことになります。科学学級も帰郷、退学、転校などで大幅に人員が減ってしまいました。その減ってしまった人数は、後からじわじわ補充せねばならん。そんな状態になってしまいました。それでも、学校を再開しなければならない、

となるのです。

10月2日、「第一小隊、第二小隊という小隊の呼称を廃止し、従前の東、南、北の呼称に戻る」。つまり軍隊調の生活から、やっと通常の生活に戻り始めるんですね。「数学、歴史の授業あり」、やっと正式に授業が始まったんです。「今後の授業予定表も発表になる」、これが10月3日ですね。

そして10月6日、「原村の教順寺にて、被爆した級友の追悼法要が行われる」。これが私たちの教順寺での追悼法要の第1回です。何周年記念として集まるたびに私たちは、必ず教順寺に行って、物故者級友の法要を執り行います。これが私たちのやり方です。このやり方は県師の附小の卒業生グループでも、同じように物故者法要を執り行って居ります。附小を卒業して死んでいった男女の仲間が大勢いるわけですから。

10日には科学学級が原村に来ています。東城から引き揚げて、原村の明顕寺というお寺に入ります。そして、なんと驚くことに、10月30日、「農場にて教育勅語奉読式。教官会議。ラッパの合図で集合する。アメリカ兵5人が教順寺に現れる」と、記録に残っている。教育勅語奉読式、ラッパの合図で集合。なんと戦時体制がまだ残っているんですよ。そこに占領軍のアメリカ兵が来た、なんとも時代錯誤と時代の象徴みたいな奇妙な出来事。

そして11月1日、「1年生も学校体制に入る。農場に出かけ」、まだ原村に合宿しているんですよ。「農場に出かけ」ということは、これはゴルフ場です。「農場に出かけ、本部前で全校生徒そろって朝礼し、全校生徒が開墾作業の後、教順寺に帰る」。ここにもまた「米兵3名が来る」と書いてある。

後から聞いたけど、仲間の誰かが「ギブミーチョコレート、ギブミーシガレット」と言って、アメリカ兵から貰ったらしいのです。また快くアメリカ兵が呉れたんですよ。拳銃は腰に付けていなかったそうだけど。すると後から教官が事の次第を知って、猛烈に生徒を叱ったそうです。「なんだ、お前たちは。敗戦国の食食じゃあるまいし恥を知れ!」とね。そういう叱り方をした先生は…。

○石田 その「ギブミーチョコレート」というのは、もう知っていたんですね。まだアメリカ兵が

来ていないのに、ほかのところから聞いたんですかね。

○新井 英会話のことですか、英語の授業もありましたからね。

○石田 貰えるということ。

○新井 それは、やっぱり生活の知恵でしょう。私たちの学年120人の中には二世も数人居たし、結構チャッカリしたのも居たしね。附属と言う学校は、教育実習のための学校だから、多種多様な、様々な生徒を選抜して集めていたのでしょうか。附属学校というのはそういう特色があるようですね。つまりエリートだけを集めたら駄目なので、統計学的な平均分布の考え方というのかな、さまざまな生活レベルの、さまざまなタイプの生徒を集める、というのが選考の基準のはずです。そうやって集めている訳だから、いろんなのが居ますよ。ノーベル賞を受けた人の実兄も同級生ですしね。

○石田 大隅先生。

○新井 はい、大隅良典先生の実兄、大隅和雄君は私たちの科学学級生徒でした。彼は国史学の方に進んだけど、実は科学学級生徒と言うのが彼の本質だった。だから彼が集めた科学学級生徒らしい文献図書資料類の全てを、実弟の良典氏に早くから譲り渡していたと本人から聞きました。それが、ああいう弟を産んだと言っておりました。なるほどと聞いた覚えがあります。そういう人物がいるかと思ったら、一方では、呉で暴れたヤクザ者も居りますからねえ。

さて、次は12月2日に飛びます。この頃には私も広島へ帰って仲間と合流しています。急激に寒くなります。大部分の者が帰省していた自宅から原村へ戻って来ます。つまり遠方の者から順番に、28日、29日に帰省させ、冬支度をさせているんですね。冬支度をしてから帰って来い、ということになっていました。それで、12月2日、「大部分の者が帰省から戻る。通学問題は状況悪化との説あり」と記録が残っています。

つまり合宿生活を終わらせて通学ということにしたいけど、切符が買えない。通学定期なんて買えないという新聞報道が出て、合宿生活を脱して通学に切り替えよう、との期待が一挙にダメになってしまったのです。

しかし、12月3日には、「通学願書を提出。転出調査」とある。つまり、これを機に、附属から転校したりして居なくなった生徒を調べることになります。ようやくの現状調査と確認ですね。

そして5日の日。現場に海軍の電信所があるんですが、私も作業に加わって居たんですが、その「電信所まで運搬作業」をしています。ここを附属中学校の物理実験室に使っていました。

「通学は、普通定期を買うか、ないしは学校そのものが五日市に転出するか、いずれかなるやも知れずとのこと」、という噂が公然と飛び始めます。つまり敗戦により、官立の附属学校は消える運命にある。生き残る道は、塾のような型でしかあり得ないだろう。だから、こうやって合宿で塾を始めているのだが、その塾として五日市に移って行くしか、もう生き残る道はあるまいという切羽詰まったことを、ここで先生方が考えていらっしゃる。宮岡先生の回顧談にも出て来ますね、そういう危機感と、学校としての塾開講の計画などがね。

これは当時、新聞に出ました。私は見ていないけど中国新聞に出たそうです。「附属は五日市へ」とかいう見出しで記事が出たらしいですね。それを読んだ生徒たちが動揺します。

そして8日の日に、南部兵舎という陸軍の典型的な兵舎に行く……映画にありますね、柱に止まってミンミンミンと蟬の鳴き声をしろ、という理不尽なシゴキの場面が。

○石田 野間宏の『真空地帯』ですね。

○新井 はい。あれとそっくり同じ舞台装置のままが原村に在った、と考えてください。あの映画に出て来るような陸軍兵舎に、私たちは移り住んだんですよ。

その南部兵舎で満窪鉄夫理事、実質上の副校長の送別会が行われます。あの、私たちを広島市から脱出させるべく奔走した満窪先生が、実は宮崎出身で後日、宮崎の選挙管理委員会の委員長、教育長などを歴任するのですが、宮崎に帰ることになったのが、この日でした。

そして、明くる9日には、「夕食にシッポ付きのままの麦飯が出る」というのが、私の日記に残っています。

原村旧南部廠舎（兵舎）での学校生活

○新井 では、私のことを少し説明しておきましょう。

11月13日、敗戦後の長い期間を過ごした秩父を出て、秩父線の小前田に立ち寄ってから東京に出て博多行きを待ちました。往路と同じように満員列車への乗車に当たって朝鮮人たちの集団暴力を遠目に見ながら、何とか大阪行きに乗り込み、復員兵や避難民たちの群れの中を乗り継ぎ乗り継ぎして、15日夕刻に広島へ帰り着きました。

広島駅に着いての第一印象は、駅の屋根に「R T O」と大きなローマ字の看板が出ていたことです。Railway Translation Office。アメリカの星条旗が翻っていました。ああ、やっぱり日本は占領されているんだな、と思って広島駅に降り立ちました。駅舎は仮復旧でしたが、改札口も出来上がっていました。

出汐町の家まで宇品線で帰ります。広島駅のいちばん端っこの0番線が、宇品線のホームでした。

大家の家族が、高田君からのハガキ連絡のとおり、我が家に入り込んで居りました。そこで、ひと悶着が起こるのですが、結局、大家の家族と同居することになります。父が話し合っ、台所の小さな3畳の部屋と玄関付近に私たち4人の一家族。奥の6畳と8畳の部屋に大家の家族が住むということで、一応の折り合いが付きます。しかし、こんな有様では住めないなということで、のちに



45. 附属中学校1年生の私
(入学時)

東雲の師範学校の中に、生徒の寄宿舎を改造して教官の官舎が出来て移転することになるのです。

ともあれ、暫くぶりに附属の仲間と合流して珍しがられます。「帰って来たな。お前は帰って来ないんじゃないかと思ってたぞ」とね。

いや本当は、帰って来ないつもりだったんです。父がひどく弱っている状態だったし、とても広島まで戻って行って、生き延びる自信はないというのでね。しかし、師範学校の山下直平校長から連絡が来るし、出汐の家の状況も気になるので家族より一足先に10月19日、父一人が広島へ向かったのです。来た時と変わらぬ凄まじい交通状況のなかを強行した広島行きでした。列車中で広島に行くというので乗客から質問攻めにあいながら20日の夕方、何とか到着。案の定、我が家に大家が入り込んでおり父と衝突。とりあえず学校へ行き宿直室に泊まり込み、学校との話し合いは即座に復帰と決まったものの、学校が3カ月の臨時休暇となったため父は再び秩父へとトンボ返りしました。「惨憺たる旅だった」と父が述懐していますが、痛む腹を押さえながら、石のように硬くなった焼餅を齧りながら10月末に、車内では半ば立ち通しのままヨロヨロと秩父に帰って来たのでした。

家族4人が揃って広島へ向けて出発したのは、11月13日です。途中で母方の伯母、山口丈子さんの居る秩父鉄道の小前田に立ち寄ります。長女で従姉に当たる麗子さん（20歳）は長年の療養の甲斐なく肺結核のため亡くなったばかりでした。日本画家で父の山口敏夫さんも昭和16年12月8日に肺壞疽で死去。悲運の一家でした。土葬の習慣が残る地域なのでお墓が窪んでおり、私には優しい綺麗なお姉さんだったので悲しい墓参でした。

晩秋の日を浴びてお墓に詣でたあと、丈子伯母の家を去り、秩父鉄道で揃って東京に向いました。博多行きには乗れなかったけど、暫く待って大阪行きに乗り、大阪ではうまい具合に乗り換えが出来て、15日の夕方、広島の家に着いたのでした。既にお話しした如く、家主との交渉ごとののち両家で住み分けると決まり、私は原村へと帰るのです。

11月19日、母と共に教順寺へ帰着。長い田舎道をテクテク歩きながら8月6日の行程を思い出していました。付き添って来た母は、担任の三木先

生や田中先生と挨拶を交わしたのち、再び遠く畑の中に行く道を帰って行きました。遥かに母を見送り役場に転入の手続きをして戻ったら、農場へ出動していた全員が賑やかに帰って来て、私は珍しがられたのでしょうか、みんなから一斉に質問攻めにあいました。

11月28日、朝食後に授業が開始されます。数学Ⅱと国文。午後になって先生方は会議のため外出（たぶん南部兵舎へ）され、夕食後に戻って来たら、通学が可能となったことや、そのための帰省などについて生徒に報告しています。

4人の日記のうち詳細な授業科目の記録などで異色だった西川亮君の日記が、この日で途絶えます。翌年1月に西川君は、広島一中に転校して行きました。

12月1日、気の早いものは2～3日前から、正規には本日、早朝から起き出して帰省の身支度をし、お寺の庭2カ所で大焚火を燃やして氣勢を上げて暖を取り、真っ暗の中を出発。八本松駅から無蓋貨車に乗り込んで帰省しました。

ちょうどこの日、弟の嘉彦の腫れあがった大腿部の手術が日赤で行われ、発熱40度の悪条件のなか意外な大手術となり、弟は「痛い、痛い」と泣きながら帰って来るといふ騒ぎが起っていました。筋炎とのことで、秩父で過ごしていた時期の発症とのことでした。バターの塊のような筋腫が切り出され、大腿部の傷跡は痛々しく可哀そうでした。

12月2日から冬体制に入るといふことで、生徒たちが続々原村に戻って来ます。「通学問題は状況悪化」との噂が流れ、生徒の間に動揺が走ります。こうして、再び従前どおり、作業の合間に授業を行うという、塾型の原村生活に戻って行きます。

12月3日、「通学問題は事態好転」との朗報が流れ、噂に花が咲いて生徒たちが賑やかになって行きます。「通学願いを提出せよ」との指達があり、転出についての調査も行われます。

昭和59年になって、この「通学願い」の現物が三木教官自宅のデスクから発見され、仲間内では一挙に話題が拡がりました。軍事郵便ハガキの廃物利用で、記入日付は、昭和20年12月1日となっていました。

12月6日、愉快的な出来事が起こります。合宿生活の拠点である教順寺で、説教が行われたのです。上級生からの制裁～と言う意味の説教ではなく、場所がお寺さんですから、お寺として本来業務である「お説教」の行事が行われました。一般の檀家の皆さんが本堂に集まるので、生徒たちは本堂の外廊下に固まって集団避難して、住職による説教を拝聴したのです。日記にも記録されました。「実に話が巧みで上手。本当に為になった」、「お供えに大きな餅が五重ね、薩摩芋が五俵、米二俵が持ち込まれた、羨ましい限りだ」～腹の減っている少年たちの目前に豪華な食物が供えられ、「食べたいっ」との、子どもたちからの激しい思念が注がれた情景です。ところが幸いなことに、夕食になってから出会うのです。あの全員が狙っていた薩摩芋による食事と、久しく出会ったことのない甘い砂糖が2合ずつ配給。歓喜に沸き立つ少年たちの顔を想像してください。たまには、こんな事もありました。たまには、ですがね。

12月8日、戦時中なら「大詔奉戴日」として盛大に式典が行われた日。当日の授業で、作文の課題も「12月8日」でした。

思いがけない離別式が行われました。その頃の私たちは、先生の素顔や実績など全く知らないままでしたが、満窪鉄夫理事とのお別れの式に参列すべく、全員が南部兵舎へ行きました。「有難いお話を聞いて教順寺に帰る」と吉本幹彦君が書き残しています。どんな挨拶が満窪先生からあったのか、今となっては知るすべもありませんが、私たちに今が在るのは、ひとえに満窪先生のお陰だったなどと、当時、誰一人言う人もなく、全く知らぬままの命の恩人とお別れでした。

そして12月13日、教順寺から荷物を南部兵舎に運搬し、そこで初めて南部兵舎を見て、あまりのお粗末さにびっくり仰天します。戦時中さながらに、ラッパの合図で全校生徒が集合し、2学期の修了式が開かれました。河野主事（校長）の訓話があり、冬休み期間は1月22日までと発表され、かくてお世話になって来た教順寺と真光神社とはお別れとなり、全ての宿舎から引き揚げ、全校生徒が教官もろとも、暁部隊の南部兵舎～原村の旧陸軍兵舎での合宿生活に入るべく物資を運び入れました。実際に兵舎の中に入って荷物を置き、居

場所に寝てみて何もない兵舎のなかはガランドウだし、とても寒かった。この日から冬休みに入り帰省しました。去る7月20日、附属が学校を挙げて合宿生活に入ると言うので、命じられて家から持ち出し学校に提供していた大型のザルと諸蓋（もろぶた）を探し出し、これも一緒に家へ持ち帰りました。

12月30日、新聞に「附中、五日市に移転か」との記事が出た、と記録に残っています。

昭和21年の状況

○新井 昭和21年1月22日、賀茂郡原村の南部兵舎に附属中学校の全校生徒が集合し、教職員ともども、まるで松下村塾みたいな感覚で共同生活による学校体制に入りました。流浪の民よろしく、原村、賀茂台地周辺の放浪を続けることになる、学校としてすべての教職員生徒の集団生活の始まりでした。

23日、吉本幹彦君の日記、「始業式。寒風吹く野原で行われる始業式は、学校の校舎が広島にあった時に比べて校運の変化を思わざるを得ない。しかし、この交通不便な原村の生活も、あと少しということだ。主事先生のお話では、我が校は間もなく他所へ移ること、しかも、各学年毎に分別して移ることを話された。ああ、何処へ移るのか」。

【注記：この部分を校正中に、当該日記の筆者である吉本幹彦級長が、令和3年4月22日、満89歳で死去す、との悲報が入電。常に我々が41期会の先頭に立ち、卒業式での生徒代表挨拶の勇姿が今も眼に残る学年リーダーの死去を悼む言葉が、41期会メーリングリストなどで一斉に飛び交っております。】

まだ学校そのものの運命が不明確のままであり、生徒たちの不安が一杯でした。とにかく寒かった。兵舎の壁を蹴破って、その板切れで焚火を焚くという猛者が現れたほど寒さは猛烈でした。気がかりになって南部兵舎を訪ねて来た父が、思わず絶句してしまったのが重く記憶に残っています。それほどにお粗末な廃屋そのものの兵舎。長ぼそい兵舎の中央を土間が貫き、その両側に一段

高い板の間が続き、そこが我らの住居範囲で、天井は梁も柱も丸出しの三角屋根。窓も平安時代そのままに、棒で板窓を外に突き出すことで開けられるという古代風の仕掛け。寒風は兵舎の何処からでも吹き込んで来るといふ、容赦ない冬の寒気に圧倒された合宿生活でした。

24日、4年生が揃って原村の兵舎を去り、広島三菱造船所青年学校に移転しました。これは進学に備えての授業再開のための措置だったと橋岡信一先生の述懐が残ります。去って行く4年生は私たち1年生を3年生の寮（北部兵舎？）に呼び集め、「これから学校が西条に移っても、変わらず附属の生徒らしく生きよ」との遺訓を述べて別れました。つまり学校の西条移転が計画されている事をほのめかしながら母校を去って行く、最上級生としての決別の辞と激励が、何故か私たち1年生と3年生に向けてあったのです。

30日、「通学か、寮生活かについて生徒の希望調査あり。圧倒的に通学希望者が多い」。

2月1日、「通学定期券が配布される」。自宅から通学することになったのです。ということは、南部兵舎から引き揚げ自宅に帰るといふこと。ただし、これは希望者だけで、家が遠い者などは相変わらず兵舎に泊まり込んで宜しい、通える者だけ通え、ということになりました。私は家に帰りましたよ、当然です。

2月2日、南部兵舎での短いけど酷かった全校の共同生活を終えて、この日、私を含む大多数の者が、身の廻りの荷物を抱えて、自宅へと帰って行きました。反面、遠方在住者や事情のある者たちは、原村の兵舎で寄宿生活を余儀なく続けることになりました。原村の兵舎に残った人数は、意外に思えるほど多かった模様です。

2月4日、通学となって登校する最初の月曜日。登校先は相変わらず原村の農場で、さっそく農場での農作業が始まりました。農場側から食料増配があり、働く生徒たちへのご褒美だったのでしょうか。お昼が美味しく、たっぷり食べられた、との記憶があります。作業主任は峯房一先生でした。吉本日記によれば、峯先生が1年3学級の級長3人と相談して作業時間を決めていたのですが、ほかの生徒たち皆が、「通学しているのだから、早く作業を終えて早く帰らせてくれ」と主張し、峯

先生が農場側と話し合い、早く帰らせるよう決めたのです。そこで北組の級長だった吉本君が、悔しそうに日記に書き残しているのです。

「南部兵舎で寮生活を続ける級友たちと共に仕事が出来ない、という我ら通学生は、意気地がないと思う」～級長の責任感と仲間意識でしょう。

さて通学が始まったあと、なんとなんと2月7日と8日に、附属中学校、始まって以来という全校ストライキが起こります。お聞きになったことはありますか。

○石田 いや、ありません。

○新井 私は実体験しました。昭和21年2月6日の午後、南部兵舎での授業が終わって帰宅するため八本松駅から下り列車で広島へ向かっている途中、(安芸)中野駅に着きました。そのとき列車の中を3年生が、前から後ろまで走って来て、「附属中学校の生徒は全員降りろ」と中野の駅で降ろされました。3年生は列車から降りた全員を集め、上級生からの通告といふか、命令が下りました。「明日7日は全員登校するべからず。自宅待機せよ。我々は同盟休校に入る」

つまり、6日に中野の駅で降ろされ、7日にストライキで、8日はストライキ解除で全員登校しました。しかし中には、「俺には愛校精神がある。他人が附属を見捨てても、俺は附属中学校の生徒であり登校する」と主張して、7日に堂々と登校した者も多かったのです。

それからの経過が面白いんです。2月8日の日記によれば、「ストライキ参加者は始末書を提出。学校側は4カ条の訓育方針を公表」となって、ストは解除されるのです。つまり生徒と学校側がストライキの解決交渉をやっているんですね。そして生徒が申し入れた4カ条が通ったんでしょう。学校は、その4カ条を発表します。

「訓育方針4カ条: 1 創造、2 気節(気品と節度)、3 責任(自由)、4 信愛」

私たちの「昭和20年の記録」には、この始末書の写しも掲載してあります。因みに何故か私は登校しなかったにもかかわらず、始末書を提出した記憶がありません。これ以後、学校側の姿勢に急激な変化が表れます。

9日、「農業実習の大切さについて主事訓話」。これが、ストライキの主因だったんです。「我々

は勉強するために学校へ通っているのだ。毎日、農場で開墾作業をさせられているばかりで、少しも授業がないのは何事だ」という怒りと、戦争中の軍国教育の権化みたいだった教官ですね。修身公民で位地正という先生が居たんですが、あの先生は、なぜ今なお学校に居るんだ、という怒りと疑念。死んでも職場を守れ、みたいなことを主張していた河野主事への不信感。これらが一挙に噴出してストライキとなったわけです。最終的には、その問題の先生は附属を辞めます。

農場の開墾作業は、「これは私たちが生きるための食糧増産なんだから、頼む、一生懸命やってくれ」と主事が生徒を宥め諭す訓話をする訳です。「それならやろう。その代わり授業もせよ」ということで一斉休校は決着する訳です。

そして2月11日、本来ならば紀元節として学校では記念式典が開かれる日なのですが、この日から5日間の臨時休校に入ります。つまり学校は主事訓話をやったものの、実質お手上げで、5日間の休みを取るから互いに頭を冷やせと、こうなったわけです。これが後にも先にも、広島高師附中としては最初で最後のストライキです。

○石田 いま、要求にあった授業をしろという話ですが、授業は全然なかったんですか。

○新井 無かった訳ではありません。兵舎で暮らすなかで、農作業の合間、飛び飛びに授業をする、という程度でした。雨が降ったら作業が出来ないから、そのときは授業。お天気の日も、作業が終わったら、兵舎に帰って来て夜に授業。そんな寺子屋にも劣る状態でした。宿舎は元来が兵舎なんだから黒板なんか無い。仕方ないから板を拾って来て、炭を塗って黒板代わりにする。チョークはあったらしいけど黒板消しなんて無いから雑巾で消す。教科書も無いから、先生が口述で授業する。ときにはガリ版か何かで刷った教材を使ったようだけど、そんな立派な教材なんて見たことない。教科書も教材もノートもない。科目は国語、英語、数学、物理、生物かな。物理は、南部兵舎の近くに海軍の実験棟があったので、そこを物理実験室に使っていたという記憶です。四角塔と呼んだように記憶します。

こうして、幾らか授業はあったけど、まともな授業は出来ない状態でした。あの環境は、映画の

『真空地帯』よりも劣悪でした。寒いし、せっかく張ってある壁板を蹴っ飛ばし、ぶち割って焚火にして燃やして暖を取った。壁板を破って燃やすんだから、その後に穴が開きますよね。何かで穴を隠したんでしょうけど、寒い何のって言葉にならない。問題は、それ以上に食うものが無かったことです。

引き継いだ暁部隊が残して行ったのは、酒の空瓶が山ほど。相当数の毛布が残っていたので、寒いから全員に2～3枚ずつ配給し、みな頭から被って寒さを凌いだ。寒いから私も2枚ほど追加して貰いましたよ。靴も軍靴の大きいサイズばかりが山ほど。これは後日、西条の役場と話し合っただけで幾分小型の靴と交換したらしく、私も一足貰ったけど、子どもには大きすぎて大きすぎて、家から原村までのドタ靴だから、足が豆だらけになった。「足を靴に合わせて履くんだ」なんて乱暴な言い方が通用しておりました。無茶苦茶ですよ。

暁部隊からの物品台帳では、牛も乳牛が26頭、豚が70頭か80頭、アヒルが100羽くらい居るはずなのに、みな減ってしまっている。牛はチチヤスに運び込み、豚は2頭くらい食料にしたようです。アヒルは全部食べてしまったと、当時の橋岡先生が証言しています。コメは全くなかったとか。だから全校生徒と教官方、残留組の農場職員たちの大部隊が農場で暮らして行かねばならないのに、軍隊から引き渡されるはずの物資がほとんど消えている状態のなか、食べることを一番にして苦闘の連続でした。そんな滅茶苦茶な生活をしていたんだから、先に言った通り、あの身体の弱い父が一度視察に来て、「これは…」と言って帰って行きましたよ。これは駄目だ、という感じでね。

生徒側も先生側も、これは長続きしないということは十分に分かっていますから、どうするかということで一生懸命です。それで変化が生じます。西条に移転というのが、それですね。

○石田 ストライキの解除が2月の。

○新井 ストライキの準備が2月6日、実行したのが7日、2月8日は解除になって、全生徒が登校して、そのあと先生から、ああだこうだという説明と同時に、新しく4カ条を守るからお前たちも守れ、という調子でお詫びがありました。農業実習というのは我々が喰うための、生きるための

作業だから勘弁してくれ、我慢してやってくれ、という学校側からの詫びを伴った申し入れと、5日間の休日。これだけのことがストライキの結果として出てきたわけですね。

○石田 解除の連絡はどうやって受けたんですか。ストライキをやるぞというのは、中野駅に降ろされて3年生から聞いたという話ですが、ストライキ解除という連絡はどうやって来たんですか。

○新井 ストと知らずに7日に学校に行った者が、何人も居るんです。彼らからの耳打ちというか、口こみと連絡で伝わって来て、あれは何て表現すれば良いんだろう。

○石田 伝令ですか。

○新井 伝令かなあ、仲間うちの噂話の伝わり方も早いけど、口コミ連絡というのも早く伝わりますからね。互いの家が結構、近かったりしますから、情報の伝わり方は仲間内では早いんですね。

○石田 そうですよ。だから、その割には1日でどうやって連絡がついたのかなと思って。

○新井 そういう意味では、確かに見事な連絡網が整っていましたね。先ほどから名前を出している高田勇君というのは、7日にストと知らずに登校した組なんです。「登校したのに、俺は始末書を書かされた」と彼は怒っていましたけどね(笑)。

その始末書の現物が、出て来たんです。

○石田 それは高田さんがお持ちだったんですか。

○新井 高田君の始末書じゃなくて、別の級友の分です。『昭和20年の記録』を出版する少し前に、三木教官の自宅デスクから発見されました。昭和59年1月4日です。同書の205ページに、その写しが掲載されています。

○石田 はい。あともう一つお伺いしたいのが、枕崎台風で山陽本線がずたずたになりますよね。汽車の運行というのはどうだったんですか。普通に通われたようにお話をされていましたけど。

○新井 私は広島に居なかったんで体験していませんが、広島に帰ってから苦労話を随分聞かされました。列車は当分駄目だったらしく、「俺は山越えで歩いて学校に行ったよ」というような苦闘話を耳にしました。先生方を含めて山陽線不通のあいだ、全員が必死になって学校へ辿り着こうと苦闘しているんです。山越えなんて相当数の者が



46. 全校ストの始末書

敢行しています。行けるとこまでは自転車で走って行って、途中で通れないとこで自転車を放り出し、崩れた山肌を攀じ登って山を越えたとか、何とか南部兵舎まで歩き通した教官もいらしたはず。いつ山陽本線が開通したかは、私は聞いていません。

○石田 秩父から帰ってくる時には、もう通っていたんですね。

○新井 はい。台風のため山陽本線が不通、と聞いていたので、帰れないよだから駄目だということだけは知っていました。何処からとか何時まで、というようなことは分からないけど、あとから例の高田勇君に聞いたら、みんなあちこちから、志和から歩いた、中野から歩いた、とか言うし、山越えして徒歩で原村の学校まで辿り着いたという者が多かったようですね。あの当時の少年たちは、みんな一生懸命に学校まで辿り着いているんですね。高田君も山越えして学校へ行ったそうだし、休んだという者はほとんど居ない。必死の思いで、というか旺盛なる精神ですね。教官の藤井先生などは昭和20年を記録する座談会で、呉線を廻って安芸三津から山越えで原村に入ったという冒険談を語っていただきました。

○石田 かなり被害は大きかったというふうに聞くんです。終戦後なので、記録が残っていないんですね。

○新井 私の家なんて、秩父から帰ってみたら、家の中に仕舞っていた大切な物が、全部ビシヤビシヤでした。建物自体は辛うじて建っていましたが、家の中は全部ズブ濡れ。だから床下の防空壕に収めていた貴重品なんて、みんなグチャグチャ

で全部駄目。筆筒も戸棚も全部水浸しで、写真のアルバムは、みんなくっついちゃって駄目になっているし、父の資料なんか大事な書類や原稿など、ほとんどあの時に消えたのではないかな。筆筒の中も水だけでした。秩父に持って行ったもの、またはチッキで運んで行ったものが、まともに残っているぐらいで、広島に残して居た物は、みな、やられていました。

父の『世界大百科事典』とか『世界文化史大系』とか、貴重で高価な本も置いて行ったんですが、売り物にならなかった。闇市に持って行って売って米にしようと思ったのに、買って貰えなかった。それぐらい減茶苦茶でした。だから私は、残っていた本を夢中になって読みましたね。『世界文化史体系』なんて本は、一揃い全部、眼を通しました。

という具合で、本棚はムチャクチャ、筆筒もムチャクチャ、布団類もムチャクチャ。台所だけがサマになっていましたね。そのくせ家を乗っ取った大家さんたちは、平気な顔をして住んでいました。つまり、自分の所だけは何とかしたのでしょうね。私たちの物は成り行きのまま、放っておいたわけです。そこへ私たちは帰って来たのだから、もうどうしようもない。これはもう出汐町の家には住めない、というようなことで東雲町の師範学校の学生寄宿舎を改造して教官用の官舎を作って戴き移転することになるわけです。

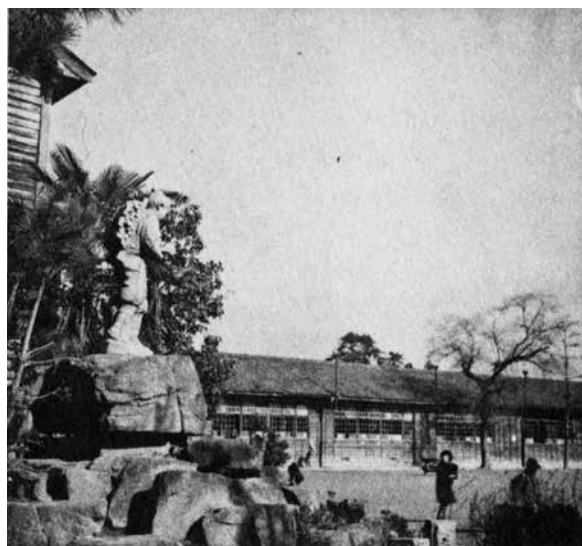
○石田 なるほど。分かりました、ありがとうございます。ございます。

西条町吉土実小学校での学校生活

○新井 私も、ずっと仲間と一緒に原村に居れば説明し易いんだけど、被爆難民みたいに広島から逃げ出して空白にしていたので、その間のことは、この程度にいたしましょう。

自宅から通学、ということになりましたが、これがストの誘因になったと言えます。「2月4日から、自宅から原村への通学開始。授業は無くして農場で作業」という記録から通学の時期が分かります。6日に、「下校時、中野駅で全員が汽車から降ろされて、3年生から同盟休校を指示される」。

2月15日、南組担任だった田中清三郎先生が、広島女子高等師範学校へ転任されます。早くから



47. 吉土実校舎
(昭和26年頃)

辞令が出ていたのに被爆、敗戦などの激動期で時機を逸していらしたのです。そこで南組の分割、と言う非常措置が取られます。激動期で生徒の急激な減少という話をしてきましたが、ここに来て1年生を3組に分けて保つことが出来なくなります。南組を半分に分け、前半を東組に、後半を北組に編入し、1年生は北と東の2クラスに分かれました。そして2月21日、「初めてクラス自治会開催」。これもストライキの影響です。生徒の自主性を尊べということで、自治会が組織されます。

23日、「学校自治会が初めて開かれる。出席者、1年生から3年生までの各組の級長・副級長と教官、月1回の開催と決まる」とあります。

2月28日。「西条の吉土実小学校跡への移転作業、始まる」～これは覚えています。寮生は西条駅裏の長徳寺と教善寺というお寺に泊まることになります。さて、西条の吉土実小学校ですが、これは西条の、あの有名な町長…。

○石田 武則一水さんですね。

○新井 昭和56年に開催した、当時の恩師の先生方による回顧録座談会によれば、廃校になったあと軍が使っていた吉土実小学校が、敗戦のため空いたとの情報を得て、地元出身の宮岡先生ほか、その武則町長や結城助役の所に乗り込んで談判した結果、借りることに成功した訳です。その過程で仲々面白いウラ話があるんですね。

あの武則一水さんのところへ、或る日、先生方が乗り込んで行って一席設けたんだそうです。暁

部隊が南部兵舎に残して行ったガチョウかブタを、西条のどこかの料亭に持ち込んで、これを提供するから適当な料理を作ってくれと頼み込んで一席設け、廃校になって軍が接収して使っていた吉土実小学校を、敗戦で空いたから附属中学校に払い下げる、という確約を貰ったのだそうです。

そして、あそこは建物があると同時に、机、黒板、教壇など全てが揃っているという話で、それを貰うことになっていたけど、行ってみたら何も無かった。だから私たちが吉土実小学校で実際に手直しをして勉強を始めた記憶が残っています。窓はどうなっていたかな、ガラスはまともに入っては居なかったから、ボール紙か何かを貼ったのかな。でも、ちゃんと壁も天井も屋根もある。しかも一部は2階建てだ。南部兵舎に比べたら雲泥の差か、天国か地獄くらいの違いでしたねえ。

16日が終業式で、「偉大なるものは嵐の中に立つ。今年は、新日本の紀元元年なり」と近藤学長訓話との日記記事が残っています。かくて、波乱と苦難に満ちた附中1年生時代が終わった訳です。波乱万丈の1年生時代の終わりは、昭和21年(1946年)3月16日でした。それは同時に、新たな西条時代の始まりでもありました。

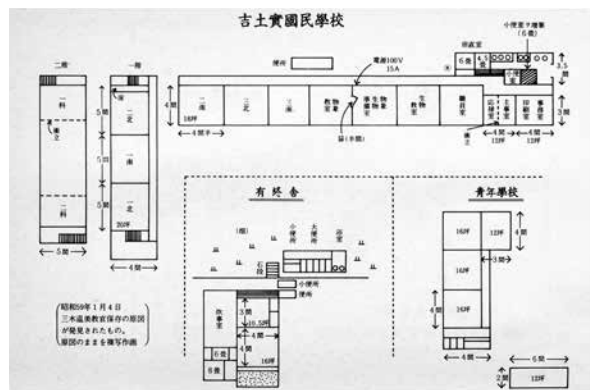
4月6日。久しぶりに西条の吉土実学校へ登校しました。通学定期を受領し、1年生3学期の成績表を渡されるはずだったのに、何故か担任の三木先生が不在のためオジャン。まだまだ学校も、本格的な学校体制が整っていませんでした。

新2年生に進級し、正規学級の新2年生から新4年生までが、賀茂郡西条町の旧吉土実小学校に集合し、一斉に授業が開始されました。クラスの呼び名が変更になりました。これまでの東組が南

組となり、これまでの北組はそのまま。科学学級もそのままだけど、科学学級の全員は広島市に帰り、広島市東千田町の文理科大学と附属小学校の教室を借りて分散授業に入りました。かくて私たち新2年生は、南組と北組、そして科学学級の3組になりました。学級の名称は創立初頭から、北と南の両クラスが基本だったからです。東組は戦時下に追加設置されたクラスだ、という経緯がありました。科学学級は広島で授業を受けることになり、東組は消滅し、被爆、敗戦で人員が急激に減ったということ、また補充が追いつかないということで、クラス編成が縮小されたということです。

4月16日、入学式が執り行われました。かねてより2年生と言う存在は、新1年生にとって脅威そのものでした。旧制中学校の悪弊とも言うべきか、これまで上級生による下級生への「恐怖の説教」が行われて来たからです。私たちが新入生時代に、2年生から暴力的行為を受けました。苦痛と恐怖と怒り、そのものでした。だから私たちは、誰言うともなく決めておりました。今後は絶対に誰に対しても暴力を奮わない、と。遂に最後まで、我が自ら決めた約束事を守り抜きました。そして今もなお、そのことを誇りにしております。

現在と違い、当時の吉土実学校への通学は困難を極めておりました。敗戦から1年を過ぎ、やや混乱は落ち着いて来たとはいえ、山陽線は未だ蒸気機関車の時代です。とりわけ瀬野駅から八本松駅までは、本線と称する国鉄路線のなかでも唯一と特筆されるほどの急勾配なのです。正確には1,000分の25の勾配、つまり1,000メートル進むうちに25メートル高くなる、という急勾配なのです。国鉄八本松駅は実に標高ほぼ500メートルの高地に存在する駅であり、本線と呼ばれる国鉄路線のなかで他に例のない急勾配です。普通の貨物列車などはすべて八本松駅の西にある瀬野駅に停車し、列車の最後尾に後押し用の補助機関車を追加しなければ八本松駅まで登り着けないのです。機関車も精一杯の頑張りが必要。轟音も激しく、蒸気を吐き出し、煙も吐き出し、喘ぎ喘ぎの走行です。そこへもって来て途中でトンネルが4つもある。列車がトンネルに突っ込んだトタン、もうもうたる黒煙が窓からドアから吹き込んで来て、あ



48. 吉土実国民学校平面図

わや窒息寸前、みたいな状況に陥るのです。

客車の座席に座っていても苦しいのに、鉄道は敗戦後の混乱が続いています。座席に座れるなんて望む方が無理。車内に立ったままなんて当たり前。客車じゃなくて牛馬を積む貨車、貨物車、無蓋車や石炭車などにも無理やり乗り込む。乗り込めなくてデッキにぶら下がる人、窓から身体をはみ出す人、列車の屋根や、機関車の後ろ側の炭水車に乗り込む人などは、堪ったものじゃない。トンネル内で煤煙に巻かれ瀕死の状態になる危険がイッパイ。勇気があるのか機関車の先頭部分にしがみついて乗る者も居て、猛烈な横揺れ振動で振り落とされそうになるという状態で自宅から通学するには、危険がイッパイだと承知の上での選択だったのです。もし列車の屋根に乗ったりしたら、途中の陸橋に頭を打ち付けて即死するでしょうからね。

5月21日、靴下と営内靴の配給がありました。営内靴というのは軍隊の用語です。この裏話が先生方の座談会に在ります。暁部隊から様々な物資を貰った中で、山のように靴下と毛布と靴があった。ところが何と靴はみな11文（約26.4cm）という大きいもの。これは子どもに履かせるわけにはいかないから西条町まで交渉に行って、あらかじめ西条町が軍から払い下げを受けていた物の、もう少し小さい靴と交換したという話があります。だから私たちが配給を受けたのは、その幾分か小さい方の靴だったはずなんです。しかし、私も貰ったけど困った、という話は致しましたね。

そして24日に教官から指示されたのが、有名な「教科書などの軍国主義的記述の部分は切除せよ」とのGHQ指令に基づく作業です。

○石田 墨塗りではなくて切除したんですね。

○新井 私は墨で塗った記憶なんですが、吉本日記には「切除」と書いてありますね。どちらの方法もやったと思います。1ページ丸々の所は、簡単に切り取れましたからね。部分的なところは塗り潰すという方式だったのでしょう。

そして昭和21年5月29日に校友自治会の記述があって、年表に、「日記は、ここで途切れる」とあります。ここで、4人すべての日記が終わります。年表の方は、昭和23年3月17日の附属中学校の卒業式まで作成しました。



49. 吉土実国民学校での体育祭
(昭和21年11月3日)

日記は途切れたものの、西条への通学と吉土実学校での正常な教室での学校体制は、時の経過と季節の変化につれて急速に様相を変えて行きました。先ず当初ガランドウだった教室に、学校らしい椅子や机が入って来ました。学校と生徒たちの窮状を見かねた父兄団からの援助もあったらしく、噂に聞けば、何処かの青年学校から譲り受けたという、ちゃんとした椅子や机が運び込まれて来ました。黒板も入り、窓にも全部ではなかったと思うけどガラスがはまった。大部分がボール紙の窓だったけど、なんとか学校らしくなったと嬉しくなって来たものです。

食べ物は相変わらず貧しいままだったけど、誰かが何処からかゴムまりを手に入れて来てからというもの、校内でゴムまりサッカーが始まり、クラス対抗戦が始まるなど急速に生徒たちの人気を集めて大流行になったのが愉快でした。これは、広島に戻ってからも人気抜群の球技(?)として継承されましたが、戦前から附属中学の伝統球技であった蹴球班が、かくて、息を吹き返す契機になったということでしょうか。

体育会と言う名称で運動会が開かれるような安定した学校体制が整い始めていました。そのころ昭和22年1月には、主事が河野通匡先生から鎌塚扶先生に代わっています。吉土実学校の運動場で騎馬戦に興ずる私たち41期会メンバーらの写真と共に、くたびれたような板壁校舎を背景にした教官席に、藤井堅志先生と新任の鎌塚先生が楽し気に立ち居しているスナップも残っています。傍らに町の子らも写り込んでいる様子から、さぞかし吉土実町内を巻き込んだ戦後としては賑やかな運動会だったのでしょう。

一方では危険な事故が発生しかけたことがありました。大事故寸前だった、と言って良いほど危機一髪でした。西条の駅を下り列車が発出したばかりでスピードも遅かったから助かったのです。この日も通学列車は上下とも超満員でした。夕方下校時の出来事です。中学校の新1年生で、大柄で元気者が事故の主人公です。やって来た下り列車は生徒が乗り込めるかどうか逡巡するほどの超満員でした。無理やり乗り込んで行きましたが、中学1年生です、客車内への乗車は無理と判断したのでしょうか。彼は機関車の後ろに付いている炭水車によじ登って行き、難なく多数の友人と共に、積み上げられた石炭の山に辿り着くことが出来ました。定刻、汽笛と共に列車は瀬野から広島へ向って発車します。ガタンと揺れて、ゆっくり列車は下り方面へと動き始めたトタン、何故かヒョイと彼が、積み上げられた石炭のうえで立ち上がったのです。「危ないっ」と誰かが叫んだときは遅かった。駅舎のすぐ下り側に架かっていた陸橋に、まともに彼の頭がぶち当たったのです。悲鳴と血飛沫が上がり、大柄な彼の身体は炭水車の石炭の上に倒れ込みました。ギギーッという大きな軋む音と共に急ブレーキが掛かりました。誰か機関士の近くに席を占めていた者が、咄嗟に急報したのでしょうか。ガターンという大きな音と共に列車は陸橋の下で急停止し、あたりは大騒ぎになりました。救急車なんて、近代的で心強いものは存在しない時代。駅員や町の人々が寄ってたかって血だらけの彼を炭水車から引きずり下ろし、そのまま抱きかかえるようにして走り出していました。結局彼は、大怪我だけで命は助かりました。発車したばかりで、列車のスピードが出て居なかったことが彼に幸運を呼び寄せたのです。

この事故が、学校は当然のことながら、附中4年生の息子を原爆で失ったままの父兄団長、加藤悦蔵さんの心を決めさせたのです。危険な通学を止め、母校そのものを広島へ復帰させようと。

附属中学校父兄団の団長を務めている加藤悦蔵さんは、科学学級4年生だったご子息の恭三さんを原爆のため母校構内で失っていました。にも拘わらず加藤さんは、我が子は失ったものの、敗戦後の附属で懸命に学び続ける生徒たちの姿を見て、生きて頑張っている我が子を見ているような

気がしてならず、附属中学校の生徒を持たない父兄でありながら、学校のため生徒のため、父兄団長の重責を担い続けていらしたのです。

昭和25年11月10日発行の『附中附高PTA会報』第2号から、加藤悦蔵さんが残した手記の一部を紹介しましょう。

* * *

(被爆死した我が子への想いを述べたあと)
此んな状態で肉体は我が家へ持ち帰ったが、『母校と共に死すは本望』との我が子の精神は学校に何時までも留まっていて、焼け荒んだ校舎の跡を哀しみの眼で見守っているであろう。あれからのち私は、何時何処でも附中の生徒を見ると我が子に逢うた様な懐しさを覚える。その附中の生徒が疲れ果てて汽車で西条から帰る姿は耐え難い苦痛であった。一時も速に以前の附中の生徒の様に胸を張って闊歩させたい。さすれば何時迄も、あの焼けた校舎の下に居て、何時までも附中の4年生である我が児はどんなにか喜ぶであろう。此が私の念願でした。PTAの皆様!!、誠に御無理な御願をして申し訳ありませんでした。然し皆様のお陰で次々と立派な校舎が出来ました。生徒の為にはあらゆる努力を惜しまぬ教官方の御陰で訓育も旧に復しました。其処で嬉々として学び且遊ぶ生徒。其は昔乍らの附中精神の復活であります。此を見て地下の我が児もどんなにか喜んで居るでせう。あの元気溘瀾たる生徒方が皆私の待望の子供達だ。どうか益々良く学び良く遊んで貰いたいと心の底から御祈りして居ります。(戦災後五年を迎えるに当り、思出のまま綴った父兄でない父兄団長であった私の心境を御笑草にして下さい)(後略)

* * *

千田町への学校復帰

○新井 昭和22年1月15日、東千田町の焼け跡に待望の新校舎が落成。ようやく附属中学校の全校生徒が広島に復帰。雪の降り積もった工事中の広場で始業式を開催しました。ただし校舎は、平屋建て1棟9教室のみで、建築工事は未だ完了して居りませんでした。

ここで生徒代表が祝辞を述べるんです。その祝辞たるや、素晴らしい祝辞でした。私はその生徒、4年生の田村順一（39回）さんというお名前ですが、その方とは奇縁というのでしょうか、その後ずっと生涯を共に過ごす友人になるのです。

「われわれ名誉ある附属中学校の生徒は、激烈なる戦いの最中といえども、学徒としての本分を失うことなく艱難に耐え…」と名調子の大演説を始めたかと思ったら、バタッと途中で調子を変え、「私は嬉しい。失った学舎と、失った歳月を取り戻し、こうして懐かしの千田町へ帰って来れた喜びでイッパイなんです」と、ガラリ変わった名スピーチ。みんな聞きながら泣きました。ジーンと心に染み渡るような生徒代表の名演説でした。田村順一さん、ペンネーム多地映一さん。生徒代表の祝辞でした。

（東千田町に再建中の附属中学校校舎の写真を示しながら）その校舎たるや、建築中の写真があるんです。お手元にもありますか。

○石田 アカシア会事務局のほうでコピーを取らせていただきました。よくあんな貴重な写真が残っていたなと思って。

○新井 あれは私が見つけたのですが、誰が撮ったのかが分からない。撮影時期の記録はあるが、撮った人の名前が分からない。ぼんと事務局へ寄贈されていた、という感じなんです。私が事務局長だった時期ですから有難く頂戴したんだけど、貴重な写真です。日赤まで写っていてね。

○石田 これは角度からいったら附属小学校の上



50. 千田町での校舎建築工事
（昭和22年初め）

ぐらいの所なんですかね。

○新井 そう、あの辺から撮ったに違いない。誠に明瞭、大きく伸ばしたのが事務局にあるけど、本当にハッキリと写っているんですよね。嬉しかったなあ。

○石田 まさにこういう状態だったんですね。

○新井 はい。私もすっかり覚えています。この真ん中の空き地で式をやったんです。1棟目と2棟目の間の庭で。そこが真っ白に雪が積もっているんですよ。ちょうど、あの当時に使っていた用語で言うと、一寸だから3センチぐらいかな。寒いなのって。そこに全校生徒、と言ったって何人いたのかな、ぎゅうぎゅう詰めで集まって、正面にその生徒代表が立って名演説を始めて、途中で調子がガラッと変わって、声涙くだる名スピーチ。いやあ、感激でしたね。やっと広島に帰れたんだ、と思いましたね。

ここにあるのは、昔からある工作室か何かの鉄筋コンクリートの建物なんです。これは昔からあったんです。

○石田 焼け残りですね。

○新井 ええ。それともう一つ、なんとか母校を千田町に建築しよう、再建しようということになった。それで学校当局と父兄団とが力を合わせて学校を再建しようということになって、大学の事務局に何処へ建てたらいいかを相談した。大学の総務部長か事務局長が言ったんだそうです。「どこでもいいから好きな所に建てろ」と。おう、そうか、それならば、というので敷地のど真ん中に建てたんです。ど真ん中ということは、古い地図で言うならば、正門から入った高等師範学校のあった位置ですよ。そこへ建ててしまった。

○石田 ちょうど旧の正門の真ん前ですもんね。

○新井 正門の真ん前ですよ。それで後から文句がついたんですって（笑）。

○石田 そうなんですか（笑）。

○新井 文句つけたって、ちゃんと事前に総務部長か誰かが、「どこでもいいから建てろ」と言ったんだから、俺たちは平気だったと、先生方は威張ってましたね。

あと、どんどんこれが2階建てになり、第2棟、第3棟と出来上がり増築されて行って、私が卒業する時は3棟か4棟あって、そのすべてが2階建

てになっていました。

母校再建のため募金もしました。こんな逸話が残っています。バラック校舎の窓に窓ガラスが入ったんですよね。ところが一晩のうちに全部盗まれてしまった。驚くと同時に口惜しかった。けれど、戦後の何も無い時期だからどうしようもない。仕方ないから、もう一度、窓に新しくガラスを入れなおしたんだが、今度はガラス一枚ごとに全部、「附中」、「附中」とガラス切りかなんかで書き込んで、今度こそ盗られないよう工夫しましたね。

昭和22年1月15日。母校の焼跡に待望の新校舎が落成。ここで広島にやっと復帰することが出来ました。それまでは原村、西条の放浪、流浪の民時代と私たちは呼んでいます。実質上、なんと2年間、学校が放浪したわけですからね。

○石田 そういうふうに学校が放浪する中、なかなか授業も大変だったと思うのですが。

○新井 先生が一生懸命にやってくださいました。つまり教科書なんかないのでガリ版ですね。ガリ版印刷の材料って、どこから手に入れたんだろう。今から考えれば、千田町の母校の目の前に弘法堂という文房具店がありましたね。今でもあるのかな。あの弘法堂は確かガリ版の唯一の専門店ですよ。でも、あんな早い時期から、あそこで手に入れること出来たのでしょうかねえ。自慢話になりますが、実は私もガリ版の名手なんです。

○石田 ええ。そういった形の字を書かれますよね。

○新井 いまでもガリ版用の鉄筆を持っています。

○石田 そういった状況の中でも、附属学校なので、教育実習のご記憶はありますか。

○新井 あります。ずいぶん後にね。

○石田 吉土実とか南部兵舎の時にもあったのですか。

○新井 ああ、吉土実時代か。南部兵舎時代には教生の記憶はない。吉土実時代はどうだったかなあ。こちらでも教育実習の記憶はないなあ。教順寺、南部兵舎時代にも教育実習の記憶はありません。聞くとところによれば、高等師範学校そのものも校舎を被爆焼失しているし、なにか乃美尾に行って授業を再開しようとしたが大変だったと、当時、二部隊から高等師範学校2年生に復学した

高田勇君の実兄が語っていたと聞きます。だから高師も学生たちを呼び戻しながら授業再開で手一杯。教育実習など考える余裕も無かったのではないかな。実際に私たちが教生を受け容れたのは、広島に復帰して翌年の、中学3年生時代に千田町の原子砂漠の中に立てられたバラック校舎の前で、地面は砂地の場所で教生の先生から撮って貰ったスナップが最初です。だから、千田町に戻ってからはハッキリ覚えています。生徒側が教生の先生をからかったりしていたから。

○石田 そうなんですか(笑)。

○新井 悪いけど、意地悪しましたねえ。これ、附属学校共通の悪習なのかな。

○石田 その、いじめたというのは、やっぱり先生を困らせるような質問をするんですか。

○新井 ええ。青くなって卒倒しそうになる先生もいましたね。私など小学校時代から教生の先生とのお付き合いがあるのだから。だって、こっちのほうが上手だから。教える教生側は順番が来たら教えて終わってオシマイだけど、教えられる生徒側は、次から次に新米先生が教壇に立って、ドギマギしながら授業をする訳です。そのすべての教生の先生に生徒側はお付き合いせねばならない。附属の生徒は、各地各小学校から代表のように集まって来ています。転入生もいます。だから経験や知識は教生の先生とあまり変わらないし、ひょっとしたら教生の先生よりも、ずっとませた生徒も居ます。だから、先に先に勉強しておいて質問攻めにする。または「先生、それ違うよ」と指摘するわけですよね。教生の先生としては、とっさには対応できない。それで脂汗を流すとい



51. 附中の玄関前での集合写真
(昭和22年6月19日)

うことになるのかな。

○石田 それはやっぱり、あの教育実習生は気に入らんと、とかいって狙いを定めるんですか。それとも、誰に対してもするんですか。

○新井 授業を始めたら、この先生はどうなのか、などと生徒側はすぐに分かります。それからのことです。やたら誰にでも、なんてやり方は流石にしません。私たちは、広島に帰って来てから最初に、教生の先生に写真を撮って貰っています。その写真をみんなで頂いたんだけどね。嬉しかったし、附属に入って初めての写真だから、その先生にはお礼をいいましたね。やっぱり見るからに、広島弁でいうところの野風道（のふうどう）～野風道というのは態度の悪い生意気千万な、というニュアンスですが、そんなタイプというのは少年たちにはピンと来るものです。

初めからオタオタしていて、見るからに危ういと分かるような教生の先生というのは、こちらがイライラしてしまいますね。それが拙いと思います。私は被爆証言で子どもたちに話をしていて気づくのだけど、子どもというのは、本当に素直に敏感に反応します。話の中味が分からなかったら、さっさと居眠りします。目の前でも堂々とね。

そのぐらい敏感に反応するのだから、附属中学1年生、2年生ともなれば、こちらも教生の先生が来るとなると「何を」と身構えます。反対に、気弱なタイプとか、初めから負け戦タイプの先生には手を出しません。見るからに挑戦的なタイプだったら、「先生、質問です！」となりますね。普通の社会でも似たようなものでしょう。

教生慣れ、というのかな、附属の生徒はちょっと小生意気で、教生の先生を見くびっているところがあります。附属の悪いところはそこだと私は思います。

○石田 それが（附属学校の）特徴じゃないですかね。

○新井 仲間同士で言うのです。おとなしく、普通の先生には誰も意地悪はしません。なにか気になるタイプって、どの世界にも居るじゃないですか。そんな教生の先生が狙われると思っていいでしょうね。教生の先生には申し訳ないけど。

新学制への切り替え

○新井 そして、4月には3年生に進級します。昭和22年です。それまで北、南、科学学級だった名称が廃止となり、A組、B組、C組となったのです。現在も中学校はそうですね。元の科学学級はC組として組替えなしで、そのまま残りました。つまり、科学学級は、戦争時における国策学級であったにもかかわらず、戦後1年間は生き延びたのです。戦後になっても、新しく試験をして科学学級の新生を採用したんですよ。だから第42回生まで科学学級は存在します。この時も科学学級は、C組と言う名称で存続しています。ここところが私には理解できません。不思議です。

そしてもう一つ、それまで附属は男子校でしたが、昭和22年に新学制が敷かれ、4月から新しい1年生として女子も入って来ることになります。附属としては大変革です。男子校に女子が入って来るなどということは驚天動地の事件で、まるでエイリアンが出現したような状況。私たち先輩男子組は校舎2階の窓に鈴なりになって、女子生徒入学の瞬間を待ち構えておりました。

先ず最初に前兆がありました。校舎が次から次に改築・増築されて行くのですが、最初に増築されたのが女子トイレだったのです。それまでは男子校ですから、小便は流れれば良いや程度の便所だったのですが、女子はそうはいかない。女子トイレの工事が始まる。私たちは工事を見ていて、これは大異変が起こるに違いない、女子の大群が現れるぞ、とね。当時の教官で、のちに校長となった上野実義先生は、ご自身も附属の19回卒業生でしたが、上野先生も懐旧談で、「あのときほど、女子便所の工事が学校中で大変な話題になったことはなかったね」と話しておられました。

女子の第1回生は、アカシア会第43回生となる訳ですが、彼女たちが附属中学校創立以来の初めての女子生徒として登場します。私たち新3年生は2階の窓に鈴なりになって、それを眺めたものです。その女子生徒を含む新生をリードする役を務めたのが、私たちより1学年上の新制高校1年生（40回）だったので、「あいつらはええのう、ええ恰好をして羨ましいのう。来年こそ、わたしの番でえ」と言い合う騒ぎになったものです。

それと同時に、旧制広島高等師範学校であった

のが新制広島大学に。そして新制広島大学の新制附属中学校、そして新制附属高等学校という新制附属学校2校が誕生します。つまり旧制学校が学制改革によって、そっくり新しい6・3・3制度に切り替わった訳です。学校全体が一挙に大改革されました。

しかし新制大学が出来たのに、私の附属中学校の卒業証書は奇妙なんです。広島大学ではなく、旧制時代のまま「広島高等師範学校学長 長田新」の名で発行されているのです。

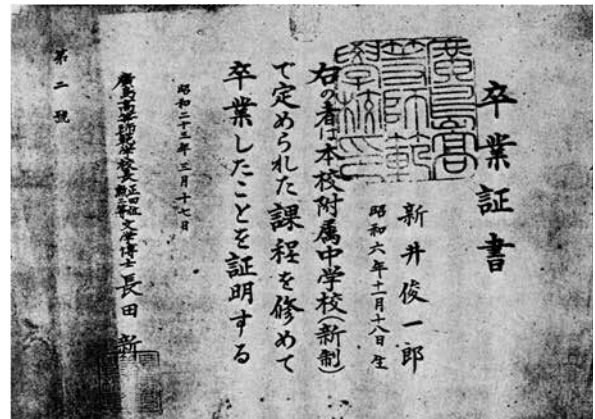
そののちの新制高校の卒業証書は、奇妙というよりは複雑。「広島大学」と並べて「広島高等師範学校」と学校名が両学校名併記なのです。卒業生代表で出て、壇上で卒業証書を受け取ったのですが、新制に変わったのだけどなあ、という理解不能な奇妙な実感でした。そうそう、その場面で私が呼び出された訳ですが、マイクで「卒業生代表、本籍、埼玉県、新井俊一郎」と呼ばれたとき会場全体が一瞬、ザワザワとなりました。後輩たちがざわめいたのです。私の本籍が埼玉県と知って、です。放送班創設などで結構私が校内のクラブ活動の有名人だったので、まさか私が埼玉県人とは思っても居なかった、という意味のざわめきです。「はい、実は、そうなんです」と多くの後輩に説明で追われました。

6月19日、教育実習の記念に、新校舍玄関前で教生とともに記念撮影。これが入学以来初めて撮った写真であった、とね。これはお手元に提供していますよね。

○石田 はい、頂いたような気がします。

○新井 差し上げた記憶があります。実は2枚お渡ししていると思います。もう一枚は、英語の田辺昌美先生と、級友の森本克明君が米国生まれの二世としてアメリカに帰るといので、記念写真をバラック校舎の前で撮りました。地面が砂漠のまま。この2枚を確か献呈してあると思います。これが私たちの、唯一残った戦後すぐの写真です。あの時代、戦時中の卒業写真も入学写真もスナップ写真も、共に一切ありません。

昭和23年1月、第3棟の東半分10教室（2階建て）が完成します。2月、第2棟の西半分の2教室が完成します。3月3日、第1回校内芸術祭（生徒自治部芸術班主催の文化祭）が開催されます。



52. 新制附属中学の卒業証書

そして3月17日が、附属中学校の卒業式です。私たちの記録です。読み上げます。

○石田 はい、どうぞ。

○新井 「母校の跡地に復興なったとはいえ、講堂もなく、バラック然とした木造音楽教室に全員集合。卒業式を失念した主事が遅刻したため、開式が大幅に遅れる。頂いた卒業証書は、用紙事情不良のため、ぺらぺらのB5判。卒業の記念アルバムも写真もなし。もちろん修学旅行もなし。卒業式すら危うくお流れになりそうという、どこまでも恵まれざる昭和20年入学組の卒業式であった。そして、中学卒業とともに他校に去った級友が多い」

○石田 なんか卒業式を忘れるというのは、びっくりしましたが。

○新井 （『昭和二十年の記録』に掲載されている卒業証書を示して）ここに中学の卒業証書の写真が載せてあります。これで私の中学時代が終わります。それと同時に新制中学から新制高校という、附属学校の新しい千田町時代が始まるんです。これは私たちの同窓会誌会報『アカシア』の中の連載記事と、私の自叙伝に詳しく記録しております。文書館には全部寄贈してあると思います。

私たちが昭和20年入学組を中心として同期会を組織している理由、と言うか動機としては、附属高校を卒業したグループだけによる正規の同窓会員「アカシア41回生」ではなく、旧会員をも含めた「アカシア41期会」として組織しています。それは、被爆と敗戦のため心ならずも転校し退学し、広島から去って行った旧友を含めた我らが同期の集いだ、ということの意味して居るのです。

たまたま私たちは原爆の年に、広島附属中学校に入学しました。広島高等師範学校附属中学校という学校すら知らない者も何人か居ました。私もその一人でした。でも入ってみてびっくり仰天したのは、凄い学校だということを知ったからです。

まず先生方が凄い。一人一人が尊敬に値する、一人一人が優れた人格の先生方ばかりでした。よく恩師というのは教え子の人生の方向を決めてしまおうと言うけど、そういう恩師の先生方、熱い先生がずらっと揃っている。たった一人、修身・公民の先生以外は、教練担当として派遣された軍人の寺田陸軍大尉も立派な将校でした。我々生徒に

対して少しも偉ぶることなく、混乱の中でも懸命に教師としての務めを果たそうと努力して下さいました。そういう先生方が揃っていた。

それと同時に感じたのは、あの当時は旧制の時代です。我々は旧制中学に入り、旧制高等学校に進むということを考えていた時代です。その先は、もう戦争中だから自由にはならないんだけど、旧制高校というイメージが強かった。私たちは附属に入った途端に、旧制高校の雰囲気とはこういうものなんだなと感じました。父から聞いて知っておりました。まさしく、そういう雰囲気だと思えるような先生方が、ずらりと揃っていました。嬉しかったですね。

第4章 放送と出会った高校時代

新制高等学校へ進学、放送班の創設

○新井 昭和23年、誕生したばかりの新制附属高等学校の1年生となり、いよいよ生徒会活動が活発になって行って、さまざまな内部組織が出来あがります。私たち41回生の仲間の中に柳坪（やながつぼ）進君という人物がおります。父親の時代から広島市議会の重鎮で、やがて柳坪進君自身も広島市議会の議員になり、後には議長にまで登り詰める人物ですが、私たちが最上級生になった時に彼は、生徒自治会の会長になっておりました。

同時に私も、どちらかというトガリ版を切って文芸雑誌を出版するとか、色彩には強くないけれども絵が好きだから美術班に入るとか、本が好きだから図書班に入って図書館で手当たり次第に本を読み漁るとか、付近の小山に登るのが楽しだから山岳部にも入ろう、そういう訳で、やたら多くの「部活」に参画したがる生徒でした。

高等学校になった頃には、どうやら附属も学校体制が整って来ました。ほとんどの校舎が2階建てとなり、学校内に東芝の最新鋭の校内放送設備が設置されました。そのとき高等学校1年生となっていた私たちですが、級友の柳坪進君は生徒自治会の41回生の代表委員になっておりましたし、私も図書班など文化部の一員として活動を始めておりました。その私たち二人にある日、学級担任だった英語の田辺昌美先生から突然、声が掛かって来たのです。

「このたび当校に、日本でも有数の校内放送設備が設置された。この新鋭放送設備を、ただの校内お知らせ放送をするだけに終わらせるのは如何



53. 生徒協議会の委員に



54. KHS・放送演劇班

にも不本意で勿体ない。生徒会の自主活動として任せるがどうだ。ひとつ、この放送設備を利用して生徒向けの校内放送を企画してはどうか。君たち生徒だけで自主放送をやってみないか？」

即座に二人は引き受けました。やってみたかったのです。戦後の自由と民主主義国家草創期～社会科なる新学科も生まれ往時とは全く雰囲気違ってしまった学校で、男女の別なく自由に校内の全生徒へ語り掛けられる校内放送という仕組み。そしてそれを新高校生になったばかりの41回生全員がヒトツに団結して、生徒会委員の柳坪君を校内放送班の代表者とし、私が放送実務の責任者として体制を組みあげ、この二人を中心に41回生全員が放送班を運営することになったのです。このときから41回生みんなが、番組の企画を立て、台本を書いたり、出演者を募ったり、インタビューしたり、放送の稽古をしたり、すべての校内放送班の役割を分担してくれました。

41回生は3学級ありましたが、その当時から全員が、放送部長として私が築きあげた新生・放送班の重要なメンバーになってくれたのです。代表者である柳坪進君も自ら進んでアナウンサー役を務めてくれるし、私は放送部長として番組企画を立てて台本を書く。仲間たち全員も台本を書き、その印刷やら番組の演出やらと、学級ごとに手分けしてA班、B班、C班などと役割を分担。お前は企画を立てろ、お前は脚本を書け、お前は下級生である中学生から希望者を募って放送班に参加させろ、お前は下級生の女子をアナウンサーとして養成しろ、お前はテーマごとに取材しろ、などなど中高一貫校としての学校体制を先取りして、高校・中学を通じて一貫した放送班体制を敷きました。私たち41回生は男子学級だが、下級生には女子が入って来た。よし、中学校から女子アナをスカウトしよう、放送局でも女子アナは人気者だから。我々も放送局並みに女子アナを表に立てよ

うや。それがいい、そうしよう、そうしようと衆議一決。

その中軸の位置を占めていたのが私で、関東出身だから言葉で苦勞すること皆無だったこともあり、生徒だけで運営する附属中高一貫組織の「KHS 校内放送室」を、広島市内でも最初という早い時期に誕生させました。かくて生徒自治会のなかでも文化部活動が急速に展開されて行き、その中軸を担ったのが、私たち41回生でした。

同時に運動部も誕生します。蹴球班には後の日本代表、長沼健・木村現両選手など名選手が存在していて有名でしたが、附属の陸上競技も盛んであり、岡野雅美君という級友が急速に頭角を現します。彼は当時、100メートルを11秒2ぐらいのタイム。ずんぐりむっくりの小さな体躯ながら、凄まじい爆発力を発揮して弾丸列車みたいなスピードを持つ男だったので、間もなく広島で開催された国体に短距離選手として出場し好成績を収めました。80歳を超えて亡くなりましたが、岡野雅美君は私たち41期会の期待の星でした。

戦後、私たちがそれだけのことを成し遂げることが出来たのは、全て母校の恩ありてこそ、です。私たち41回生には、学校のためになることなら何でもやる、学校に恩返し出来ることなら何でもOKだ、との心構えが備わっています。学校と同窓会と生徒会が進めて行く学校改革、革新運動には何でも協力をして、率先垂範ではないけど、どんどん上級生になるに従って運動の中心を担って行くという気構えが、その当時から既に芽生えておりました。それがまた、私たちを支えてくれたとも言えます。そんな時代でした。

○伊東 高校の時に自治会の放送班に入られたことが、その後のお仕事につながるのですか。

○新井 はい、ここで話をしていますか。準備はしているんだけど。附属高校時代の生徒自治会、クラブ活動としての放送班活動の話ということだね。

○伊東 そうですね。なぜ放送班に入られたのかとか、その辺の話ですが。

○新井 そこが先ず違うのです。私は放送班に入ったのではなく、戦後初めて放送班自体を創設したのです。あの時代。つまり原子砂漠と言われたほど広島は何も無くなり、附属を含め各学校と

も広島市内に復帰して学業を再開すべき校舎も失っていました。だから、附属を含む各校とも、広島市内の跡地へ復帰するため必死の思いで、原子砂漠にバラック校舎を建て始めていた、というのが当時の偽らざる状況です。そのなかで附属は、ようやく昭和22年の1月、東千田町の跡地に、仮校舎を建築して復帰を果たしたことは、先にお話した通りです。だから学校内に放送設備を整えるなど、当時としては画期的な学校判断だと言えるでしょう。ほかの学校も放送設備など備えるどころの騒ぎじゃなかったはずです。

そういう状況の時代に、他校に先駆けて校内放送設備を整えた附属は、先見の明を称賛されるべき決断だと私は思います。そして、その流れを先に進めて、「放送班活動」へと展開させ率先させようとする動きをした学校当局の判断も、私は時代を読んだ優れた決断だったと思います。

私は、その時代の先を見る学校判断を受けて立ち、あの時代、何れの学校も成し得なかったであろう「放送班創設」という偉業を成し遂げた、と今にして誇りに思っております。私は、附属に初めての放送班なる組織を創設した一人なのです。

先ほども話しましたが、「学校に東芝の立派な校内放送の機械が入ったから、お知らせ放送だけでなく、お前、校内放送をやってみないか」と教官から言われたのがキッカケなんです。なぜ私を選んでくださったのか、と考えております。担任の先生の目が、ずっと私を見ていたんでしょね、あいつならやれそうだと。その先生は、のちに広島大学の学長候補と目された英語の田辺昌美先生だったんですが、私は田辺先生の影響で、生涯の生業となる世界、つまり放送の世界に足を踏み入れることになりました。

柳坪君の名前も出したと思うけど、かれは生徒の自治会活動を担う方向でしたが、私は文化部系の、もっぱら自らが創設した放送班の仕事へと一直線に進みました。放送班を創るまでは、やれ文芸班だ、図書班だ、美術班だ、なんていうのに全部入っていました。そこへ「新しい放送設備が出来た。これを使って巧く運営したいので、お前、やってみないか」と声を掛け下さったのが、たまたま私の学級担任でもあった田辺昌美先生、英語の先生です。私を常日ごろ見ている、あいつなら

やれそうだったんでしょうか。それで生徒自治会の委員であるクラス代表の柳坪君と共に二人でやれ、と呼ばれて言い渡されました。命令ではないけど、「やってみるか」と言われたわけです。即座に私は、「面白そうだ、やろう」となりました。即断でしたね。

戦後の日本で最も激しく変化したのは、放送番組でした。当時のマスメディアは、新聞の他は映画とラジオ。テレビなんて、まだまだ夢物語でした。だから民衆は戦時中からずーっとラジオにかじりついていた時代です。

それまでラジオは、軍部中心の大演説と大本営発表しかないような、軍部と政府の戦意高揚を目的とする宣伝番組が中心だったわけです。そこへ、アメリカ軍を中心とした進駐軍が入って来て、日本のラジオを根底から変えてしまったのです。戦後の日本のラジオ放送は、GHQからの指令で、戦時中に比べると天と地ほど違ってしまいました。奔流の如く流れ込んで、アメリカ式のラジオ番組に一変しました。私は一挙にその虜になっていました。

戦時中の大本営発表のウソを暴いた「真相はかうだ」は、日本中で大きな話題になりました。よろず知恵袋みたいな「話の泉」。米国のクイズ番組の焼き直し「二十の扉」。そして音の世界が生み出すイメージ豊かな米国直輸入のラジオドラマに魅了されていました。飯沢匡、菊田一夫、伊馬春部、ノーマン・コーウィンなどなど内外のラジオ作家も続々登場して、今では考えられないことだけど、テレビなんか未だ登場していない戦争直後は、ラジオドラマ全盛の時代だったのです。そんな具合に私はラジオ放送の虜になっていた折も折、学校側から「校内放送局を創ってみないか」と誘われたのだから、一も二もなく、即答でOKした次第です。

このとき附属に設置された新鋭の放送設備たるや、何と言うか、もう当時は2階建てになっていた第一棟校舎、階段下1階の教官室の片隅……廊下から教官室への出入り口に近い部屋の隅っこに、縦長で黒い大きな放送機のラックが1台置いてある。その傍に、黒くて長いアイスキャンデーみたいなマイクロホンが、スタンドに立てた予備を含めて2本だけ。横にはレコードを回すターン

テーブルが1台。それだけでお終いというお粗末さでした。でも当時とすれば物凄い新兵器に思えました。

しかし場所は教官室の片隅です。教官方のデスクとの間は背の高い本棚と物品ロッカーで仕切られているだけ。双方の会話など筒抜け状態です。お世辞にも、新しく誕生した放送班のスタジオです、なんて自慢出来るような放送室じゃない。畳敷きにしたら3畳くらいかな。狭くって互いにぶつかり合って機材がガチャンと倒れそうな危なっかしい放送室。それでも一応、教官室内を本棚などで仕切っただけですが、狭い一画こそ、我らがKHS専用の「校内放送室」でありました。

高校1年生から中学1年生までの放送班員は、午前中の授業が終わって昼前になったら、一斉に各教室から飛び出して放送室まで駆け付けなければならない。生放送だし、教官室の中に放送室があるのだから、放送を始める前には本棚の向こう側の教官たちに向かって、「静かにして下さい」と叫ばなければならない。録音機などないのだから、取材部分の放送は、みな「実感放送」形式でした。お分かりになりますか、実感放送って？

録音装置を持たない放送班の、苦心の方式でした。例えば、「東条ほかの戦犯に死刑が言い渡されましたが、それについて感想を聞きました」と司会者が言うと、放送班員の梶川久昭君が回答者に成り代わって感想を話す、という形式でのインタビューです。今そこで、インタビューが実際に行われているような形式で、質問と答えを班員の誰かが受け持って話すのです。もちろん、事前に実際にインタビューがしてあって、そのやり取りメモを基に原稿が準備してあるのです。私たちド素人放送局は、度胸宜しく、実感インタビューなど高度なテクニック(?)をやったのけたのです。

中心人物は41回生の私。学校から声がかかったのは41回の新井と柳坪の二人です。だから私たちは、この二人を軸にした41回に声がかかったと認識し、学年の総力を挙げてKHS校内放送室の設立に取り組み、その運営を、これまた総力を挙げて担ったのです。私を中心に、あっという間に設立準備が進み、クラスを超えて適材適所で人材を配置しました。大きくは対外的にKHSを代表する柳坪君を軸にした総務企画部。私を中軸にした

編成放送部。岡田忠昭君を軸にした放送技術部という、大きく3部門を置き、そこに全学年から人材を投入しました。

何よりの強みは、級友の上土居幸信君が提供してくれるSPレコードの山でした。スタートを前に皆で歓声をあげましたねえ。これで先ずは一安心でした。クラシックから軽音楽まで、凄い量のレコード。彼のお父上の収集品でした。有難い収集品の無償提供です。なにせ学校には在庫ゼロの時代です。物凄く有難かった。

みんな、学校でワシらが放送をやるんかと面白がって参画してくれました。もう一つ人材集中の魅力は、後輩低学年に出現した女子生徒を勧誘してアナウンサーに登用したことでした。男子校に出現した女子生徒は、たちまち人気の的になっていましたが、その大部分が何と、これまた、あつという間にほとんど全員が放送班に入って来たのです。一挙にKHS校内放送室は、生徒会活動の最先端を走る人気抜群のトップランナーになっていました。こうなると先輩風を吹かしていた41回生仲間も意気込みが変わって来ます。学校内での放送事業(?)運営に全員参加型で熱中してくれたのです。同時に下級生たちも女子アナのみならず、珍しい新しい分野の放送への魅力もあってか、男子生徒も次々に入って来てくれました。

かくてKHS校内放送班は、企画、取材、編集、原稿作成、印刷、アナウンス、朗読、流す音楽の選曲など、驚くべき多方面の専門分野にわたる人材が役割を引き受けてくれ、遂に大冒険へと踏み切ることになったのです。

いわく、毎日の昼時間に定時・定期番組を組み、各曜日ごと、番組の形態ごとに41回生を頂点としたチームを組み、3交代式みたいに準備から、テストから、本番へと、本物放送局もシャッポを脱ぐような、流れるが如きシステムを作り上げてスタートすることとなりました。

そのすべてを私がリードした訳ですが、私に特別、放送の知識があった訳でもなく、そんな経験も当然ながらゼロ。放送班と一緒に立ち上げた仲間内にも誰一人、ラジオの知識を持った人材は居なかった。なのになぜ、今から考えてもスゴワザの大冒険を成し遂げられたのか不思議です。ただただ私がラジオ好きで、NHKラジオを良く聞いて

ていたことだけは事実です。それと、言葉で私は苦勞したことが無かった。関東地方出身ということからでしょうか。

1948年11月11日、放送開始を予告。

同11月17日、放送開始。

その第1回の放送記録が全部揃って残してあります。実物の原稿本編は全部、アカシア会事務局の「アカシア・ライブラリー」に寄贈しており、永久保存してくれと頼んであるけど、私が複写して全部揃えて持っております。

当時の放送台本はこれだけだけど、これが第1回放送の時の教頭先生の挨拶原稿。複写だけど、この原稿の実物は今、事務局に納入してあります。理事でチェロの名演奏家だった教頭の田中浩造先生が、「校内放送は全部、生徒たちの放送班に任せて、生徒の自主運営でやらせるから、お前たち、しっかりやってくれ、協力してくれ」という内容で、原稿を自筆で書いてくれているんです。これは、後にマツダの取締役資金部長になった赤木英壮君が代読しました。もちろん本人の先生が来て読み上げたのではなく、全部を生徒に任せる、というので。こういう方式で第1回の放送番組が放送され、その原稿がそっくり全部残してあります。

この放送形式は、NHKが戦前のロサンゼルスオリンピック水泳競技の放送で使った「疑似中継放送～実感放送」と言う形式とそっくり同じでした。何も知らない敗戦直後の私たち高校1年生が、むかしNHKが使ったのと同じ「同時のナマ中継放送らしく実演した事後作成の放送番組」を、同じ方式でやってのけていたとは、と改めて当時の放送班(KHS校内放送室)の実力のほどを、自画自賛ではありますが、評価したいものです。

○伊東 だから、ご著書の回顧録(『激動の昭和史を生きて』)はかなり細かく書かれてあって。

○新井 はい。その中にも書いています。『昭和二十年の記録』の中にも書いていますが、私たちは、最初、校内放送室と呼んでいたんです。だから頭文字を取ってKHSというコールサインで始めたけど、だんだん、みんな、ただ単にお知らせとかニュースというのじゃつまらないと。自己啓発の意欲発揮ですね。

ラジオドラマを放送

○**新井** 当時、ラジオドラマが物凄く流行っていたんです。信じられないでしょうが、それで私たちも番組をドラマタイズしようや、放送劇みたいにしようやというので、自分で原稿、脚本を書いて、下級生の中学1年生、2年生あたりを役者に仕立てて、芝居がかった放送番組を作り始めるんです。全部が生放送です。凄い冒険ですが、録音機なんてない時代だからね。

その原稿が全部残してあるんです。主立ったものは全部残して本部事務局に分厚いファイルにして寄贈してあります。私は自分が最初に関わった大事業だから、コピーして自分の分だけを持っています。たいてい、あの時代は、言い出しっぺは自分でやるようになってしまうんですね。

これが第1回の記録。昭和23年11月17日が第1回の放送で、その前の11日に予告放送をやっているの、その予告放送が実質的には第1回になるのですが。予告放送を11日にやって、17日に正式に放送を始めました。このアナウンサー役の古田芳實君は、後に勧業銀行の役員になった人物です。生徒会の副会長だったかな。私たち級友の何人かを毎日、アナウンサーやディレクターに仕立てて、女のアナウンサーは中学1年生と2年生の女の子に頼んで、そういう具合に班編成を組み立ててね。

それで、だんだん放送劇をやるよということでもドラマ化して来るので、「お芝居も上演したいな」

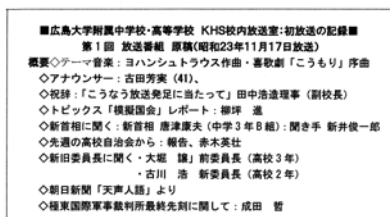
と言い出す者も出る。それなら班の名前を変えればいい、「演劇」を付けて「放送演劇班」にすればラジオもお芝居上演も可能だ、問題なしだ。というので、このまま最後には舞台劇まで上演してしまいました。放送班の創設当時は、そういう形の組織にして暫くの間、ず〜と後輩の時代まで放送班は残っていて、校内放送を続けてやっておりました。だからOB、OG名簿を作ると相当数の班員が居たと分かります。最後にはOB会も開催しましたね、3回ぐらい。

こういう放送班組織は、ずっと後まで残っていたけど、遂に現在は消えた模様です。その途中で10年ほど以前だったかな、学校側からの要請もあり、もう一遍やれや、と言うので私が生徒と一緒に放送班を再開したことがあるのだけど、5年くらいで消えてしまった。放送班って最初はラジオ時代だったのですが、今の若い人たちはラジオドラマなんて全く知らないし、興味もない。当たり前ですね、現代は完全に映像の世紀ですよ。時代感覚が合うはずがない。今はデジタル時代だから、全く感覚が異なるわけです。

でも、あの時代、ラジオドラマを舞台に乗せて、生徒全部を集めて目の前でラジオドラマを実演して見せる、なんてこともやってのけました。台詞や音響効果や音楽やらを公開して見せてしまうのです。それを附属小学校の講堂でやったのです。ところが、附属の生徒だけが見ているかと思ったら、あに図らんや、他の学校からも、こっそり見に来ていた。後から分かる(笑)。ほかの学校からも見に来ていて、あいつら附属の連中は妙なことをやってるぞというのでね。(台本の入った封筒を出しながら)それが、この中に残っているのだけど、「芋虫カーリー物語」(原作「この虫十万弗」、原題: My Client Curley)という米国のラジオドラマです。実はこれの原本が欠損せずに残してあるんです。アカシア事務局に納入してあります。ラジオドラマって、聞いたことありますか。

○**伊東** はい。

○**新井** 戦後すぐの時代は、ラジオドラマ全盛のころで、アメリカから名作ラジオドラマが続々と日本に輸入されて、日本もラジオドラマ全盛時代になります。これが初めて、附属の放送班がステージで、お客さんや生徒たちの前でラジオドラマを



TM「こうもり序曲」…始まり、区切良いところで下に小さく
アナ 今週のトピックス!
皆さん今日は、皆さんお待ちかねの、初の校内放送を行います。
TM…消える
アナ 先ず初めに、主事先生が不在につき田中先生に、「校内放送発足に関する主事先生感想を代読していただきます。
田中 今日からこの時間に、生徒諸君の計画による色々な放送が、此のマイクを通じて教室の諸君に送られることになりましたことは、今後の諸君の学習活動に新しいページを加える者として誠に喜びに堪えません。その発足に当たり、主事先生の慶びのお言葉がある筈でしたが、生憎とご出張になりましたので私が代理で此処に述べた次第です。
さて諸君は、我が校の放送設備がビクターの製品で日本全国でも数えられるだけ十分な優秀なものであることを知っていますか。「不遇のスピーカー」ならば百数十個つけなければ、この機械の本当の雄打ちは分らない」と言われる強力な性能の物であることを知っていますが、あの機種が広島高師の附中に搬入されたとは流石に附中だけのことはある」とビクター本社で評判されたことを知っていますか。こんな立派な機種を持ちながら今まで我々は、果たして其れを有効に役立てていたでしょうか。なるほど学校放送の時間もありませんが、殆ど有名無実の状態で

55. 第1回放送(昭和23年11月17日)の台本復刻版

実演生放送した脚本です。

○石田 きちんと新井俊一郎と書いてありますね。

○新井 これは私が書いたのです、ガリ版を切つてね。全部自分でやった。

○伊東 ちょっと拝見させていただいてよろしいですか。

○新井 あ、どうぞ。この下にあるのは、その脚色途中の元原稿です。作者はノーマン・コーウィン (Norman Corwin) といって、アメリカの放送劇作家なんだけど、NHKが日本語版を作って放送したのを、ちょうど私は聞いたのです。イメージたっぷりて凄く面白かったんです。すぐNHK東京へ手紙を出して、「田舎の高等学校の放送班ですが、カーリー物語のドラマが気に入ったので脚本を1冊だけ恵んでくれませんか」と言うのと、ちゃんと届いたのです。どこの誰かも分からない子供宛にね。驚き喜びました。それで、その脚本を改めて読んだら、とても我々には出来っこない、凄いです。

それからあとが、我ながら執念でしたね。出来そうにないのなら、出来るように脚色すれば良いではないか、と言う訳。そういうことで我々でも出来るように書き直して、それをみんなで稽古して舞台の上で公開したわけです。著作権なんてこと、全く無知でした。当時、写真機なんか誰も持っていないから記録写真は何も残っていないけど、こんな感じで音楽を流したり、音響効果といって電話のベルがジャンジャン鳴ったり、人々が騒いだり、そんなことを様々に舞台の上で演じて見せたわけ。それからかなり後になってNHKもラジオ中国も、むかし附属高校の放送班が附属小学校の講堂の舞台で演じたのと同じことを、堂々たる広島市公会堂でやって見せたのです。見ていて私は、密かに快哉を叫びましたね。はるか以前に高校生の私がやってのけたのと同じことを、プロ中のプロたるNHKやRCCが遅れて真似をした、とね。このメンバーは私たち41回生がメイン。それに43回生と44回生の可愛い女の子。特に44回生は仲良しになったのだけど、コンビを組んで放送班を運営して、終いには本格的なお芝居までやりたくなかったので、班の名前を変えれば問題ないと、班の名称を「放送演劇班」という名前に変えて、遂に舞台劇まで上演してしまうのです。舞台劇は

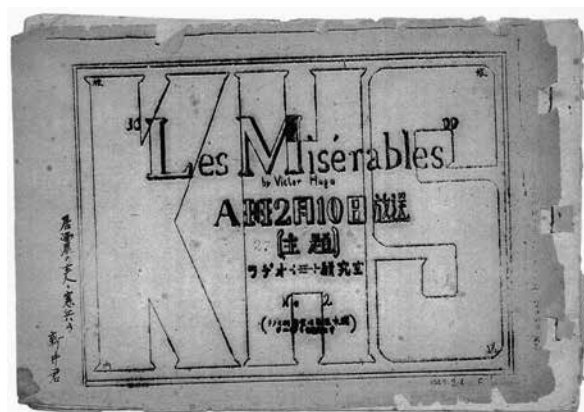
武者小路実篤作「桃源にて」。これは舞台での集合写真まで残っています。

台本や舞台装置は手作り

○新井 (台本を開いて) これは当時のガリ版刷りの放送劇の台本。当時使った本物です。高校1年生の西田宏君が書き下ろした脚本です。あのころは誰かが原稿、脚本を書いて、自分でガリ版を切つて、みんなで台詞を分けて演じたものです。これが1949年2月1日、きちんと日付が書いてある。KHS校内放送室の名称もある。「私達と社会」～社会科という新しい学科が出来たから、それが皆にはとても興味深かった。これが放送台本で、学園祭があつて、これが当時の放送班のメンバー。(写真を出しながら) これは後からOB会をやった時の写真だな。それともう一つ、舞台劇上演後の記念写真が残っている。とうとうラジオだけでは面白くなって、ステージでお芝居までやってしまった。国語の森本正一先生に脚本を選んで戴き、演出もやって戴いてお世話になりました。こちらが田辺先生で、こちらが森本先生、これが放送班の仕掛け人の私(笑)。それから、先ほど言った同期生の41回のリーダーで。見えるかな。

○石田 いえいえ、大丈夫です。

○新井 ここで偉そうに威張っているのが王様。演じたのが高田勇君という、同期のリーダーで、小学校以来の私の仲間。芝居なんかやったことない、小学校でも幼稚園でも芝居などやったことない嫌だ、というのを無理やり引っ張り出して、威張ってりゃ良いのだからと(笑)。こういうことしてたのが私の附属高校1年生になったばかりの時代、大騒ぎの張本人になったわけです。これに



56. KHS の放送台本



57. 舞台劇「桃源にて」上演記念

来、放送班を創設して大騒動して、生徒自治会も活発になって行きましたね。当時の生徒自治会の会長が、大堀ジョーさん。2世で、いまはカナダ在住と思います。終戦後すぐの生徒会長で、ユニークな人物でした。紙が少ないからガリ版印刷して全員に配ってお知らせする、なんて出来っこない。ひところの中国と同じで壁新聞ですよ。渡り廊下に壁新聞を貼って、生徒会からお知らせをする。その壁新聞を作るのが私の役目でした。理由は読み易い文字を大きな字でも小さな字でも、ちゃんと書けるから。私は書いてくれと頼まれるから、「よっしゃ」と引き受けて、壁新聞を毎週書き換えて帰る。委員会を開きます、とか、今度の文化祭でこれをやります、なんてことを壁新聞でお知らせする。各クラスに紙を配ってなんて、お金もないし紙もない時代だし出来ない。そんな敗戦直後の、貧しいけど意気軒高な生徒会活動でした。

こんなガリ版で脚本を作る、こんなペラペラの紙しかないわけだから、鉛筆で書いたらすぐ消えてしまう。時には、高等師範学校の試験で使われた答案用紙が回って来ることがある。裏を見たら答案が書いてある（笑）。高師の生徒なんだから構わんだろうというので、そういうことが出来た時代でした。私が高校1年生という16歳か。こんな舞台装置もあった。壁一面に貼った大きな紙に、一面、中国の山水画を描いて貰ったのです。上級生にね。背の高い美術部上級生の40回の桐原秀雄さんに頼んで描いて貰った。その紙も本通りで紙屋を営んでいるアカシアの先輩に、「何とか安く1枚くださいよ」と頼み込んで手に入れたなあ。その大きな紙を、後ろの壁一面に下げようと思ったら、すぐ破れてしまうんです。だから全部、

新聞紙で裏打ちをして、細い麻縄か何かを上から下まで通して糊で貼って補強して、その表面に山水画を描いて戴くのに苦労したものです。その苦労も今から思い出せば楽しかったけど、徹夜を何度もやりました。当時、校長先生は主事先生と言っていたけど、越智校長先生を真ん中にして、当時では珍しい舞台写真が残っています。これが私の放送班時代の記念品ですね。

○石田 こういう活動のお金というのはどこから出るんですか。演劇をするにしても、やはりいろいろと装置にお金がかかりますよね。

○新井 お金は生徒自治会から少し貰った記憶があります。当時から生徒会費というのを払っていました。その生徒会費から自治会の活動費が出て、そこから各班(クラブ)が少しずつ貰ったのでしょう。あとは聞いたら笑ってしまうのだけど、級友の井上公宏君が八丁堀に住んでいて、場所がいいからと、当時から既に彼の所を私たち41回生たちは溜まり場にしていたのです。お芝居は古代中国で、いろんな衣装とか冠とか刀などを作らねばならない。でも材料が買えない。図面は父が所蔵していた世界美術全集か何かから、適当と思える絵画を参考にデザインして作るつもりでした。材料を買う金が無いなら仕方ない、じゃ行こうか、となりまして、八丁堀ど真ん中の井上宅から私たちは真夜中の八丁堀界隈に出て行きました。材料を探すために、です。夜中に本通りを歩けば、周囲に何やらかにやら落ちているんです。ごみがいっぱい捨ててあります。厚紙にしる、ボール紙にしる、垂木という一寸角の棒などの切れっ端やベニヤ板などなど。だから、井上君と私と高田君とで夜中の町を歩くと、いろんな物が無料で手に入ります。ペンキだけは部費で買いましたが、ノコギリなどの工具は自前で都合付ける。イトノコがあれば便利だけど、そんな器用な物はない。普通の鋸で図画工作を始める要領で、王様の冠や太刀、粗末な小屋の軒先、遠見の山水画風の山並み。あと残るは我らの根性だけが勝負の分かれ目でした。徹夜作業となり、若いからなおさら腹が減りました。でも時間だけは十分あったので、やっと何とか形になった頃、夜は白々と明けて来たのでした。3人とも、揃ってダウン。その成果が、この残された記録写真に見て取れるのです。初めて

のお芝居経験は、もう辞めた組と、よしやろう組の二組に分かれて終わりました。その何れが多かったか、ご想像にお任せいたします。

ですから、予算はペンキ代に使ったぐらいで、あとはほとんど拾い物。ごみ捨て場から持って来た材料で出来ました。この根性は、大学に進んでも残ってしまうのです。

○石田 だから、入場料とかは取らなかつたんですね。こういう公開というのもただで。

○新井 これはもちろん全然無料。見て戴くだけでも有難いというもの（笑）。

○伊東 観客からの反響とかは、どんな感じでしたか。

○新井 大拍手。だって、こんなものを見るなんてこと有り得ない時期でしょう。しかも、これは舞台劇だけど、放送劇のほうは物珍しいわけ。箆籠を振り回したら、小豆が転がってザーザーと鳴る訳だし、ガヤガヤ騒ぐのも人間がマイクを囲んでガヤガヤ言うんだから考えれば変な感じだし、電話機はホンモノを使ってリンリン鳴らすんだから、「何、やってるんだよ」と後ろから覗き込むような始末です。

舞台にはマイクが1本だけ立っていて、出演者がマイクの周りを台本片手に何かしゃべりながら近づいたり離れたたり、それだけでも興味津々。遠くから「おーい」と怒鳴ったり、ひそひそ話をしたり、みんな見ていて珍しいわけですよ。「うわーっ」という感じで見ていましたね。

好評だった「芋虫カーリー物語」

○新井 ラジオドラマで公開した、この「カーリー物語」というのはアメリカの物語。芋虫がスティンキー少年の吹くハーモニカの音楽に乗って踊るんです。その踊る曲は「Yes, Sir, That's My Baby」という曲です。日本ではほとんど知られていない曲なので、女学院まで行ってアメリカ人の先生に尋ねたら知っていると言う。外国人の女性に会うなんて初めてだし、英会話は駄目だし、心細いので英会話を勉強中だった高田君について行って貰ったなあ。この曲を知っているというので喜んで、良かったとばかり歌って貰って、ピアノの先生に採譜して戴き持ち帰ったら、その採譜した先生というのは広島の名ピアニスト、山上雅

庸先生だったと知って二度ビックリ。歌って採譜して戴いた譜面が残っているのですが、今や貴重な譜面となりました。その主題歌をハーモニカで吹く。附属の合唱班に歌って貰う、それが伴奏の音楽になる。

「Yes, Sir, that's my baby ♪ No sir, I don't mean maybe ♪ Yes sir, that's my baby now ♪」

こんなふうなメロディーでした。芋虫は、この曲を聞くと踊り出すのです。でも、芋虫の踊る姿を見せる必要はない。ここがポイントです。ラジオだから見せることは出来ないし、その必要もない。踊るのを見せる必要はなくて、誰かが「あ、踊ってる、踊ってる」と言えば芋虫が踊っているように思えるんです。何か箱の中でも覗き込んで、「踊ってる、踊ってる」と言えば、それだけでいいのです。

踊る芋虫は急激に人気が出て、ディズニーから芋虫の発見者スティンキー少年へ声がかかって来る。映画会社からも映画化したいと申し込みが来る。放送局からも、興行師からも続々オファーが舞い込む、人気は爆発的、世界中から電話がかかって来て人気は急上昇。おかげで、お金もどんどん入る。大変なお金持ちになってしまう。興業に打って出て「踊る芋虫カーリー」と大々的に売り出そうということになる。と、その時、ふいっと肝心の芋虫の姿が消えてしまうのです。

がっかり来た少年は、ひとり寂しく過ごしてい



58. 公開放送劇「いもむしカーリー物語」台本

たある日、ピアノで「Yes, Sir, That's My Baby」の曲をポロンポロンと弾いていると、譜面台の陰からチョウチョが1羽、飛び出して来たのです。

○伊東 すてきな話ですね。

○新井 譜面台の陰から飛び出したチョウチョが、ひらひら、ひらひら、少年の周りを飛び回って、名残惜しそうに窓から飛び出して消えて行くのです。そこを舞台の上ではナレーターが、

「そうです、芋虫はチョウチョになったのです」と語り終えた瞬間、会場が「うわーっ」と一斉に拍手喝采になったのです。

最後のナレーションです。

「彼は私の頭の上を飛び回って、それから、たんすの上のスティンキー少年の写真の所まで飛んで行き、又もや私の所まで帰ってきて、じーっと私を見詰めた後、窓から飛び出して行って、再び戻ってきませんでした」

「かいつまんで申しますに、私は腰を下ろして泣きたい気持ちになっています」、「そうです、大人が芋虫のために泣き出すなんて誰が考えたことがありますでしょうか。しかし、私は泣きました。そして、それを恥ずかしいとも思いません」。

これがラストコメントです。ここで会場に再びどよめきが湧いて、最後にナレーターが、「これでノーマン・コーウィン原作、芋虫カーリー物語を終わります」と締めて、レコードでの音楽が盛り上がり上がって終わるのです。

○伊東 レコードは学校が持っていたんですか。

○新井 すべて借り物です。私の同級生に上土居幸信君という人物が居て、父親譲りのSPのレコードを山ほど持っていたのです。これを全部提供してくれました。ワルツ「女学生」、円舞曲「ハンガリアンダンス」、「ローマの謝肉祭」「スケーターズ・ワルツ」、この辺が確かカーリーが踊っている場面でしょう。それから、「軽騎兵序曲」「おもちゃの兵隊の観兵式」。最初のあたりは、「詩人と農夫」、これがオープニングの音楽でしたね。

○伊東 何の音楽を入れるかというのは、NHKの台本ですか。

○新井 いえいえ、こちらが勝手に選んだのです。

○石田 なるほど、オリジナルで。

○新井 それは私たち、NHKのようにオーケストラで音楽を流すなんて出来っこない。主人公は、

カーリーという名前の芋虫。それを見つけたスティンキーという少年と、仲間のファンキーという少年。それからディズニーが出て来る。興業を打つという劇場支配人も現れる。ラジオのプロデューサーとか、何人も人間が出て来る。舞台の上で演出するのが私と井上君の二人。アナウンサーは、今のレコード提供者の上土居君。ミキサーをやってるのも41回生の仲間。これも後にNTTに行った岡田忠昭君。音響効果が成田哲君のほか、松本時夫君という、のちに広島高等裁判所の裁判長で定年退官した人物が音響効果の助手。彼は後日のOB会で、「私は遂に法曹界（ハウソウカイ）で生涯を生きましたが、皆さんの思いとは違う文字のハウソウカイ（放送界）を生き抜きました」と挨拶し、一瞬の間を置いて、OBとOG全員が大爆笑となりました。みんな私たちの同期生と下級生による放送班の仲間たちです。

音楽はここに書き出しているな。提供者の名前まで書いてある。渡辺了夫君～舟入高校は原爆の劇で有名ですが、その校長をやった渡辺了夫君が同期生で、この時も私たちの放送劇に関わってくれている。そのように、うちの連中みんな、これから放送の世界に入った者も多いけど、そのように仕向けてしまったのが結局、私ということになり、「お前の責任じゃ」と言われたことがあります。一緒にやっていた井上公宏君は、後に文学座演出部に行きます。文学座の演出助手になるんですが、それだけでは飯が食えないというので、NTV（日本テレビ）、TBS、NHKのテレビスタジオの助手。あれはフロアディレクターというんだけど、そういう仕事をやった男が私の同級生で、41期会事務局仲間です。彼もガンで亡くなった。井上君～ここで威張っている男だね（笑）。こっちでも威張っている、ここでも威張っているな（笑）。彼がアカシア41期会の事務局メンバーの一人でした。早く亡くなったのが残念。それから八丁堀の拠点も消えてしまったのも残念。コーヒーが飲めて、電話があって、コピーがあって、便利だったんだけどね。当時、ワープロまであったからね。

田辺昌美先生の思い出

○新井 附属って、こんなところまでやらせてくれて、すべて生徒に任せてくれました。先生の口

出しは一切なし。最初に、田中浩造理事先生の挨拶の言葉があっただけ。それから「お前え、やれ」と、ただ一言だけ言った田辺昌美先生の鷹揚さ。あの田辺先生も最初に「おい、お前え、やれ」とだけ言って、あとは全然口を出さない。その代わり教官室の片隅に放送室があるんですが、教官室ですから、そこで先生方も会議をなさるわけですよ。生徒の方から先生に「放送だから静かにしてくれ」と怒鳴る。先生の方が「ごめん、ごめん」と謝るわけ。こんな奇妙なことが暫く続きました。

○石田 数年前には考えられないですね。昭和20年を境にして、がらっと変わりますよね。

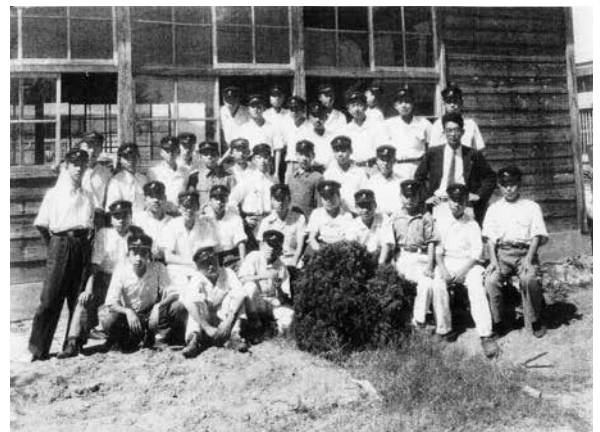
○新井 あの時代だから、先生と生徒が兄貴と弟みたいなものですね。本当に年も近いし、年上の先生も居るけど、担任の三木温美先生なんて、私より一回り上だから兄貴みたいなもんですよね。

田辺先生は英語の先生ですが、映画が好き、それから文学が好き。ディケンズ (Charles John Huffam Dickens) の研究家で、娘さんも広大に居るんじゃないかな、お父さんと同じくディケンズの研究をしていらっしゃる。文学好き、映画好きで、生徒の方から手を上げて、「先生、この間、太陽館 (的場町) で見た映画ですがね」などと話を向けたら、もう止まらない。乗ってくる。授業なんか、ふっ飛ばして、「情婦マノン」「カサブランカ」「道」「第三の男」「レベッカ」「誰がために鐘が鳴る」「ゾラの生涯」などなど、あの当時の懐かしの映画～特に洋画となったら、いつまでも話が終わらない。そして「今日は英語の授業だったな、また次にやるわ」という調子 (笑)。

それと同時に、私が役に立ったらしいのは、田辺先生は自分で英文テキストのような、リーダーズダイジェストみたいで週刊雑誌のような冊子を文化評論社から発行していらしたのです。「新井君、文化評論社はガリ版印刷だから、すまんが表紙をガリで切ってくれないか」と頼まれることがしばしば。私は、その当時から、いや当時だったからこそ、活版印刷など夢のまた夢だったから、印刷とはガリ版印刷が主流の時代だし、自分で懸命にガリ版印刷の技法を勉強していたのです。鉄筆とガリ版のセットを買い込み、文藝班の機関紙の表紙も自分のガリで作っていたわけで、結構ガリ版で文字を書くところが好きでしたね。それで先

生は、器用な私に頼み込んで、英文テキストなど様々な冊子を作るとき表紙を切ってくれないか、という感じで、田辺昌美先生からは結構、頼りにされておりました。ほかにも大勢の41期会メンバーが先生宅まで押しかけたり、自宅に上がり込んで大宴会を繰り広げたりと、それはそれは人気抜群の教官でした。英文科志望の者だけじゃなく、私みたいに政経学部志望者も押しかけ、夜の街で出会った放浪組も多かったようです。先生が大学の英文科教授になった頃だったかな、こちらも仕事納めで部下を引き連れ放浪していたらバツバツ、酔っぱらって仲間の先生と肩を組んだまま、ふらふらと夜の町中を彷徨って来た田辺先生と出会ったのです。とたん、先生から大声がかかりました、「おいコラ新井、一緒に来い、もっと飲もうじゃないか、付いて来い!」。それは、次期学長候補では、との噂が高くなった時期のことでした。

お酒が好きだったのが悪かったなあ。ウイスキーが大好きで、ボトルキープをしては飲みに行き、遂にお店のナンバーワンをかつぱらってしまったとか。去る日、「田辺昌美先生を偲ぶ会」を開催したことがありましたが、先生の奥様がお元気で嬉しそうに出て来られました。そういう先生だからお酒を煽るほど飲むのが好きで、高校生時代にも家に何度も押しかけて行きましたが、「お前らに飲ますわけにはいかんけどな」と言いながら、平気で自分は飲むのです。そのうち、こちらも成長して大きくなって行きますよね。そこで、「1本持って来ましたよ、先生」と言うと、さあ、



59. 田邊先生と高校1年生たち
(昭和23年)

そこでまた騒ぐことになるわけ。それが田辺先生の肝臓を傷めてしまい、広島大学の英文学の教授として実績を上げ、何代か先の学長候補と言われていながら惜しくも肝臓ガンで亡くなってしまったという、非運の先生です。あの先生のお陰で、私はとうとう放送の世界に没入してしまったのですが、そういう昔堅気の人間味溢れる凄い恩師です、田辺昌美先生という方は。

○石田 今、先生のほうからの口出しはなかったという話ですが、アドバイスもなかったんですか。

○新井 全く何も無し。すべて任せる。良いも悪いも仰らない。面白かった、面白くなかったも言わない。「ちゃんとやるとるか」「金は足りとるか」「台本の印刷は出来るか」、中学1年生に対しては「ちゃんと、時間までに全員が集まれるかな」とか、そういう心配はしてくれましたよ。しかし、こと班の運営について、番組の中身についても一切なにも言わず、でした。そうすると、こちらも一所懸命になります。信頼されているのだから、それに応じてキッチリやろう、となるんですね。先生方も心得たものです。生徒側も、と言ったところでしょうか。人を動かすということは、ですね。自然に教え込まれていたのでしょうか。

それでね、田辺先生に習った英語が、ほんとうに通用したのです。何年後になるかなあ、初めての海外出張のとき、昭和50年でした、カープの初優勝の年だったから。ひょいと口から英会話単語

が飛び出したのです。私たちについて来ていた通訳氏が、「新井さん、あなたは帰国子女か留学経験者ですか?」と私に尋ねるのです。一瞬、何のことか分からなかった。アメリカに行くと、レストランでズラリ行列を作って、並べてある山のような色とりどりの料理を自分の皿に取って行くシステムがあるじゃないですか。私も皿を手にして並んでいたらボーイが来て、ザっと大きくサラダを掬って私のお皿に盛ろうとしたのです。その瞬間にヒョイト「Not so much」と出たのです。それを耳ざとく聞きつけた通訳氏は、私がヒョイト軽く言っただけだったので驚いたらしい。巧いって、ね。そんなこと知らないから私の方が驚く番でしたね。

エンパイアステートビルの上のレストランに入ったことがあるんですが、その時は物凄く霧が深かったので、「Oh! Deep mist!」と言ったら、「素敵な言葉を使う」と言われて（笑）。

みんな田辺先生から、少しずつ貰った言葉。だから私は、その出張中は「あいつはどうやら英会話が出来らしい、これからはあいつにしゃべらせよう」となって、えらく私は往生しましたけどね。

そんな具合で公私ともに、私は田辺先生に随分と引っ張られたところがありますね。英語だってそうです。英語が好きになったもの。特に英会話は面白いなあ、旅行英語程度ですけどね。

第5章 演劇に打ちこんだ大学時代

広島大学政経学部に進学

○石田 大学の演劇研究会のお話を。

○新井 では広島大学演劇研究会について、お話ししましょう。敗戦直後の附属時代は、新時代到来とて多方面にわたる活動を始めています。その延長線に乗って、私が附属を卒業したのは昭和26年ですが、それから新製の広島大学に入学するところへ話を進めます。

大学への進学に当たって父は、自分が東京帝大の出身ですし、私も自分は秩父の出身だと認識しているので、関東方面は親戚も多いことから、家庭内では私を東京に出すか出さないかが話題となっていました。しかし学校勤めの父の薄給では予算的にとても無理。父は広島師範学校男子部の教官ですが、それだけでは家族を養うので精いっぱい、俊一郎を東京に出すような金はない。奨学金を貰っても無理だということだったので、私もあっさり東京行きなど考えず広島で良からうということで、出来たばかりの新制広島大学の3期生として受験します。

実は、その前にどの学部を受けるかが未定でした。それまで附属では放送班を設立し張り切ってやっていました。大学に入ってから放送班に入ろうと思っていたけど、新製の広島大学には放送班などないらしい。じゃ、仕方ないから似たようなところとしては、演劇研究会というのがある。そこへでも入ろうかとなったのが私の人生を決めました。放送班らしいことにも、舞台劇らしい仕事にも、どちらにも関わって行くことになるのです。

広島大学の学部も、高校時代に放送班に関わっていた経緯からも文学部にしようかと考えたり、新しく誕生した政経学部なる学部を狙おうかと思ったり、悩みましたねえ。でも私にとっての将来性を考えれば、政経学部かなと思いました。当時の広島大学は総合大学を目指しており、政経学部が新設されていました。広島大学創設の時期は、政治学部と経済学部とを区別することなく、両者を一体化した政経学部でした。いまは法学部と経済学部に分裂していますが、当時は政治も経済も何れも学ぶことが出来る学部だったわけです。



60. 政経学部
(昭和30年頃)

そのためもあって私は当時、政経学部の中の政治か経済か、どちらを目指そうかと迷うことになり、理屈っぽい政治より経済を選ぶという選択に踏み切りました。父は文学部西洋史学科でしたが、実質的にはイギリス農村経済史を研究しており、父の影響もあって経済哲学史的な分野～私も歴史が好きで興味があったので、そうした分野も学べるかな、と思って経済学部を選びました。ところが、この選択は大失敗でした。

経済学とは、つまり徹底した現代経済学だったのです。内実は数理経済学でした。私は数学が不得意でした。不得意だから、試験勉強では懸命に数学を勉強したので、試験の成績は皮肉なことに数学が一番良く、得意だと自信を持っていた社会の成績が、意外に振るわなかったのです。ともかく私は、難関といわれていた政経学部の、それも現代数理経済学科(?)なる最も苦手とする学科に入ってしまったのです。もともと電話番号を見るのも嫌だ、というタイプだったので、入ってみてびっくりです。見込みが全く外れていました。

もちろん経済史という選択肢もあったけど、名称が好印象の厚生経済学(welfare economics)を選んだのです。これはwelfareなんだから、将来的に福祉厚生とか、そちらの分野について学べるぞと思ったら違っていました。これも大失敗で、理論数学を基礎にしたwelfare economicsなんです。だから、初めから数理的に現象を学び分析せよという分野で、担任の田村泰夫先生もアメリカ帰り、優しい先生ではあったのですが、私の望みとは完全に違っていました。

しかし、入学し、所属学部も所属学科も決定してしまっただけで、逃げ出すわけには行かない。仕

方ないから懸命に勉強しましたが、残念ながらほとんどチンプンカンプン。結局そのまま卒業させて戴きましたが、せめて、ゼミナールには出ようと思ってゼミを受けたものの、半分ぐらいしか顔を出していないというボンクラ学生でした。でもゼミの田村泰夫先生は親身になって卒論も指導してくださり、松山のご出身ということで、そちらの地域でも就職先も探して下さいなど、誠に有り難いお世話を戴き、私の不作法もお許しください、なんとか卒業させてくださいました。

卒業論文は、恥ずかしながら必死の思いで数理経済学を応用し、新しい放送という分野を題材にして、商業宣伝であるコマーシャルメッセージの放送効果を測定する計算方式を研究する、という目的のもと、研究成果を即断するのは困難であり、新しい分野であるだけに、これからも研究を継続せねばならない、という処で論を終えて卒論を書き上げました。田村先生は私の乱暴な論文を卒業論文と認め、合格者の中に私の名前も書き込んで下さったのです。卒業生の中には表紙だけ出して卒業、という猛者も居たらしいけれど、なんとか私は書き上げました。原稿用紙にして100枚は超える大論文にしたので、今でも残っている模様です。後輩が「新井さんの卒論を見ました」と言って来たので恥じ入るばかりでした。

演劇に打ち込む

○新井 なぜ、そんなことになったかという、広島大学に入学して以来、「お前さんは、経済学部を卒業したというよりも、広島大学演劇部を卒業したと言った方がいいね」と言われるほど、お芝居にのめり込んでいたからです。最初は放送班がないので止む無く演劇部に入ったと言っていたのですが、正式に演劇研究会に入ってから、仰天したのです。

演劇部の部長たるや、ペンネーム多地映一、本名・田村順一。なんと昭和22年1月、あの雪の朝、千田町の焼け跡、真っ白な銀世界のなか開催された附属の復帰式で、喜びの大演説を声涙下る名スピーチに一変させた、あの生徒代表、その人だったのです。奇遇でした。奇縁と言うべきでしょう。私たちは、この大学演劇研究会での再会を機に、生涯を通じて共に生きる芝居仲間、放送マン仲間



61. リーダーだった多地映一氏

となって行くのでした。

ペンネームが多地映一ということも、そこで初めて知りました。後にこの方はテレビ映画の作家として、当時有名だった「ケーキ屋ケンちゃん」などの脚本を書いて、舞台劇脚本も上演脚本も多数。現在は横浜在住で、放送作家として活躍中です。ですが当時は3年生で、広島大学演劇研究会の会長でありながら、演出家であり、役者でもあり、会の雑務お引き受け係と自己紹介なさった大先輩でした。兼俳優、兼雑用係と全部が田村さんの仕事という状況。

附属の先輩・後輩ということは、すぐに分かりました。もちろんすぐ私が挨拶に行きましたので、えらい奴が入って来た、ということで直ちに助手として認めてくれて、すぐさま民話劇「夕鶴」の演出助手、兼舞台監督助手をやれ、と命じられました。かくて直ちに舞台でのお芝居の世界へのめり込んで行くのです。

私たちは「お芝居」と言います。「演劇」という言葉を使いません。そんな大それた理由はないのですが、「演劇」というと何か理屈っぽくて、難しそうで、大規模な舞台で、恰好よく、真正面で理論家ぶって偉そうに見えます。でも私たちは、そんな偉そうなことは一切やりません。致しません。「俳優」という呼び方も同じですね。私たちは、「役者」と呼びます。その方が親しみやすいじゃないですか。少なくとも、偉そうには見えませんね、役者たちは。初めから木下順二とチャーホフ

(Anton Pavlovich Chekhov) からお芝居談議が始まり、次いで習ったのは、ロシア人の理論派演出家であるスタニスラフスキー (Konstantin Stanislavski) の「真実を体感する」というシステム演技論を叩き込まれました。同時にラポポルト (Israel Bernard Rappoport) の演劇論、演出論演技論を叩き込まれました。もう一つ田中千禾夫と岸田國士先生、舞台俳優の千田是也さん。もう、こんな名前を知っている人は居ないと思いますが、俳優座を率いていた千田是也の『近代俳優術』という本、このあたりをテキストとして叩き込まれました。

それで、理論は本を読むことで頭に入りますが、演技、舞台装置、照明、化粧、衣装、小道具などは実際にやってみるしか方法がないわけで、これは先輩から叩き込まれましたねえ。

スタニスラフスキー・システムで、先ず肉体訓練をやることから始めました。舞台に立つ、という単純なことから教えられるのです。立ったら歩かなくてはいけません。歩くことから実演させられた。歩いたら止まらなくてはならない。止まったら座らなくてはならない。座ったら立たなくてはならない。つまり実際に生きている生活を、そのままを舞台上で、リアルに体感し、再現するという演技論、演出論を舞台という現場で生で叩き込まれましたね。これは高校時代に放送劇をやっていた時とはまるっきり違う。正式な演劇論を、先輩と大先輩が書いた演出論、演技論の書籍から学びました。

まず最初に関わったのは、木下順二の「夕鶴」という舞台劇でした。このお芝居は、のちに広島に山本安英さんほか「ぶどうの会」が乗り込んで来て、横川の小さな劇場で上演しました。私たち広島大学演劇研究会は、全員こぞって舞台公演の応援に行きまして、幕開けから何から、お芝居上演の裏方全部を手伝いました。これ幸いとばかり、舞台の端から実際の名演技を見詰めました。出演者はたった4人。「つう」という鶴の化身が出て来ます。それから「与ひょう」という人間味豊かな人物が出て来て、その苛め役「惣ど」と「運ず」という人物が出て来ます。あとは子どもたちだけという簡素な芝居ですが、木下順二さんが書いて山本安英さんが「つう」を演じて大評判となっ

た作品です。それを私たち大学演劇部でも同じようにやろうというわけで、「ぶどうの会」という本物が間もなく広島に来るそうだから、来る前にやらないと受けないだろうから、その前に上演しよう、というのが演出の多地映一さんの方針で、すぐさま稽古に入った最中に私たち1年生が入会したのです。

舞台稽古を間近で見ました。お芝居の稽古とはこういうものだ、役づくりとはこういうものだ、お芝居は、このように上演に向かって稽古して行くものだ、こういう段取りが必要なんだ、ということを一から十まで手を取るように見せられました。この芝居の稽古も、先輩が後輩に口うるさく教えてやるというのではなく、やっているから見て居ろというスタイル。これは後々の私のスタイルにもなるのですが、そういう徒弟奉公式のやり方で芝居造りの訓練を受けました。

「夕鶴」を上演する

○新井 最初に関わったのが「夕鶴」の舞台上演です。会場は、なんと今の附属高等学校がある旧制広島高等学校の講堂でした。その時のパンフレットが残っています。「たつのおとしご」と「夕鶴」の2本を上演しています。これが当時のパンフレット、「夕鶴」ですが、新井俊一郎の名前があります。舞台監督の助手ですが、新人の1年生のくせに、たちまちこんな大役を命じられました。

お芝居の幕が上がってしまったら、もう演出家は手も足も出せません。役者と裏方がやるのを遠くで見ているしかないんです。「駄目じゃないか」など、公演中には言えません。手も足も出ないような舞台を正しく進行させるのが舞台監督の役割



62. 民話劇「夕鶴」の名場面

です。その助手ですから大変重要な役割ですが、具体的にやったことは、音楽～BGMを流すこと。それから機を織る音が聞こえて来ます。鶴の化身である「つう」が布を織るカタン、コロン、パラン、トントンという機の音を会場に流さなくてはならない。また舞台へ出て行く役者に、いつ出て行くか、キッカケを与える。舞台から舞台袖へ入って来る役者は、袖に入ってから、どう逃げるかを誘導する。舞台の上手から下手に、こっそり先回りして、次は下手から出て行くとか、そういう舞台上のことですべてを取り仕切るのが舞台監督の役目です。それを手伝うのが、舞台監督助手である私のやる仕事でした。初体験だし夢中でした。

「夕鶴」という民話劇のお話は既にご承知でしょうから詳しくは申しませんが、広島大学演劇研究会の公演で「つう」を演じたのは、女子大2年生の女性です。当時の広島大学は男女共学ではありませんでしたが、演技者として演劇部へ入って来る女子学生は極めて少なかったもので、近くの女子大学、昔の女専（旧制女子専門学校）が女子短期大学になっていたもので、そこから女優を借りて来て、「つう」の役で舞台に立って戴きました。言うところの客演ですね。素敵な人でした。「つう」役者としては、本物の「つう」役者に負けないのでは、と思うほどの名演技でした。上原英子さん、名前も顔もしっかり覚えています。広島には珍しいほどの名女優でした。舞台写真も残っています。

それから、「惣ど」と「運ず」は2年生の浅海洋史、中山達磨のお二人が、「与ひょう」という、信じられぬほどに素朴な農民を寄ってたかって苛める悪役を演じて見事でした。主人公の「与ひょう」役は、演出の多地映一さんが自ら出演しました。自演自演出という表現がありますが、これがまた見事に当たって、トボンとした素朴な農民の姿が滲み出る名演技でした。これには途中でワラワラと村の子供たちが登場します。みな「与ひょう」と「つう」の仲良かったちです。この子たちは、私が附属の放送班へ頼みに行き、賛助出演をお願いした子役たちです。子役と言っても、みんな45回生か46回生の中学1～2年生で、戸田斐子さんや小林知子さん、高田宏子さんなど名子役が揃っておりました。

「演劇」という言葉を使わないのは、役者のこ



63. 「夕鶴」の上演を終えて

だわりだと思いますが、「俳優」という言葉も使わず「役者」と言い習わしておりました。これも古いしきたりそのままです。ただし、いま現在、舞台役者が使っている、何時であろうとも「おはようございます」なんていう、ちょっぴり舞台人を気取った挨拶言葉は、私たちは絶対に使っていませんでした。朝が「おはよう」、午後は「こんにちは」と言うのが、当然の常識ですからね。

今は演劇、舞台、映画、テレビの世界では、何時であろうと最初に会ったときは「おはよう」と言うんだそうです。私はテレビの世界に入っても、午後以降には「おはよう」とは言いません。午後は「こんにちは」、朝は「おはよう」、夜は「今晚は」です。私はあのような「ぶった言葉」が大嫌い、だから大仰な「演劇」などという言い方も使わないようにしています。

これから話は後半に入るんですが、公演に際して、こういうガリ版のパンフレットも刷りました。これは私のお手製ですが、表紙も私です。西志和村まで出かけて行って出前の独自公演をやったときのものです。この時はお招きを受けて、いわゆる地方に出て行くドサ廻りですね、外部から招かれるまでに育っていたのです、私たち学生演劇の世界も。こんな感じのチラシを作って地方周りをしました。「三年寝太郎」と「結婚申込み」と「夕鶴」と3本立て公演ですね。私はこの中の「三年寝太郎」で主役の寝太郎をド突く悪役を演じました。この時も「夕鶴」では舞台監督みたいなことをやりました。「結婚申込み」は2人の上級生と友情出演の美女の出演で、会場いっぱい笑いの渦にしていました。チャーホフの喜劇ですが、役者が巧いと会場は笑いが爆発するんだ、と実感し

た先輩たちの名演技でしたねえ。内輪話ですが、そのうちの一人は後年、RCCのプロ野球中継で名アナウンサーとして名を揚げた、我が演劇部のエース3年生の桐原正文さんでした。相手役の、今にも消えてなくなりそうな迷演技で会場を沸かした3年生の土橋訓之さんも、後年は某高校の校長先生におさまっていらっしゃいましたねえ。

舞台監督など何でも屋

○新井 「三年寝太郎」は、私が演劇部に入った年、新入生の1年生が中心になって芝居を勉強して上演しようや、やろうやろう、となって取り組んだ作品です。「木下もの」と言われる木下順二のお芝居です。裁着袴（たっつけばかま）を穿いて、頭には頭巾を被る、という典型的な昔の田舎芝居のようなお芝居です。そんな衣装や鬘を何処から持って来たのか、ということですが、鬘は段原町の古い小路の奥に1軒だけ残っていた鬘屋から有料で借り出しました。もう現在は無くなりましたが、広島にも鬘屋があったのです。そこまで行って、ちょんまげ姿やら老人の白髪頭の鬘などを借りることはありました。「三年寝太郎」で身に着けた裁着袴や羽織と言うか、ちゃんちゃんこはお手製で、私の母が縫って作ってくれました。

私たち新人用のお芝居「三年寝太郎」は、主役の寝太郎を2年生の中山ダルちゃんこと、中山達磨（本名：行孝）さん、その寝太郎を苛める「勘太」が私、婆さまは級友の多田礼子さん、娘を級友の小松（本名：松本）郁子さん、長者どんを級友の伊能宏（本名：井上公宏）君、しゃっくり男を級友の内村正行君、力自慢の男を級友の城戸徳浩君などという配役。これが私～新井俊彦(芸名)の初舞台でした。公演会場は児童文化会館と言う、当時の第一級の劇場。でも入口を入ったトタンに匂ってくる芳香。トイレの香漂う劇場として有名な劇場ですが、附属の講堂となった旧制広高の講堂に比べれば、緞帳も照明器具も楽屋も奈落も備わっているし、何しろ本格的な劇場らしい客席の列が眩しかったものです。この時だけ広島児童文化会館で公演したのですが、初めて中国新聞が取材に来て写真を撮られて、記事になって紙面に出たのです。新聞評も比較的好評であり、その記事と写真は初めて私が新聞に載ったというので、切



64. 「三年寝太郎」の衣装で走った運動会

り抜いて今でも大切に保存しております。

このパンフレットの表紙は「夕鶴」の舞台装置の略図です。屏風1枚、機を織る部屋の障子が1枚、あとは雪の切り出しと言って、雪の塊の形をベニヤ板を切り出し、白く塗って舞台の前端に幾つかチョココンと置く。舞台の奥はグレイの幕が1枚下がっているだけで、その幕に照明を当てて色を変え夕焼け空を見せるとか。時によれば舞台の奥に、切り出しの遠い山なみをセットすることもあります。

実は「三年寝太郎」は、ここにデザイン画は無いけど、私が舞台装置を担当することになったのです。「三年寝太郎」と、翌年に上演した「崑崙山の人々」の両方の舞台装置を私が担当することになり、デザインを考え出すのに夢中になってたんです。お芝居の舞台装置を考え出すことは、意外と面白いものです、私にとっては、ですね。結果的に、その両方とも私がデザインし作製したのですが、寝太郎の舞台装置は至極簡単に完成。その反面、「崑崙山…」は苦勞に苦勞を重ね、製作するにも徹夜ものの大仕事になりました。その舞台装置は両方とも、結構、評判になり話題を呼びました。こんなことも私は好きでやったのです。

「三年寝太郎」の舞台装置図は残していませんが、一言で言えば、舞台一面、真っ黒の背景の中に、白いテープで大きな蜘蛛の巣を張り巡らせただけです。ほら、簡単でしょう。だから作るのも至極簡単で、見るからに愉快で面白かった。港から船が出港するとき、色とりどりの紙テープを投げますね。あれです。あの紙テープを使って舞台

一面が巨大な蜘蛛の巣になってしまえば、はい、それで完了。

一方、「崑崙山の人々」は心底、苦勞しました。そのデザイン画が残っていますが、いわゆる山水画を思い出して下さい。このお芝居の舞台は、中国の山奥に有ると言う、不老不死の仙人が住む崑崙山なのです。そこへ大日本帝国のゼロ戦が墜落して来るし、不老不死を研究していると自称する珍妙な科学者たちが迷い込むし、仙人たちの仲間のフラミンゴや童子も騒ぎ出す。なんとかして死にたいと願う仙人たちに争いが勃発。でも誰も死なない。墜落した戦闘機のパイロットと仙境に住む童子は、諦めたように永遠の囲碁を打ち始めるし、科学者一行もガックリ、という奇妙な展開の脚本。それもそのはず、作者はラジオドラマの脚本家として有名な飯沢匡氏。お話は楽しげだけど、お芝居の舞台は仙人が住むという崑崙山。その峩々たる山脈の一面を、劇場舞台に造り出さねばならない。またもや父のお世話を戴くことにしました。あの、世界美術全集です。そこから、これぞという場面を見つけ出そうと思ったのです。のちに全巻が米に化けてしまいました。当時は全12巻が揃っていたのでしょ。懸命にページを捲り、古代中国を描いた絵画を探しました。高校時代に同じように古代中国の絵画を探した「桃源にて」のお芝居を思い出しておりました。今ならネット検索で、たちまち最適な絵画を発見可能でしょう。あの時期、美術全集から古代中国の、この世には有り得ないような不思議な風景が実在する、など知らない時代です。懸命に探し続けてやっと、本当にやっと、それらしい風景を描いた絵を見つけました。それからは必死でした。お芝居の話の流れを阻害せぬようデザインせねばならない。

舞台装置を設計するとき、一番の問題は登場人物の行動線です。それを頭にシッカと入れて考えるのです。タテ、ヨコ、タカサの3次元設計ですね。スケッチブックを開き、描いては消し、消しては描くの繰り返しでした。そして遂に、こんな感じの舞台装置を作りました。これが当時、私が描いた舞台装置の概要図と登場人物のスケッチです。さて、これからが大変でした。ステージ設計図面とスケッチのとおり舞台装置を作る責任が我が身にのしかかって来るわけ。この経験は後年、

私がテレビの世界に入ってから大いに役立ちました。設計図を引いたり、望みどおりにステージセットを組んだりという技能は、テレビの世界では必須のワザです。テレビの初期、試験放送の時代、これがやれる人材がRCCには居なかった。だから仕方なく私は、大学演劇部時代に身に付けていた舞台経験を生かして、みんな自分一人でやってしまった。テレビのタイトル文字を書くことから、スタジオセットらしい椅子・テーブルの配置図も無理やり拵えてしまった。でもその分、みな自由勝手に出来たし、実験やら実習稽古にもなったので役に立ったな。その意味では面白かった。何も無かったけど。あったのは「窮した時は工夫あるのみ」という原則みたいな自信でした。あれこれ、みんな自分でやって見て、それで色々なことの裏側までが分かって来たものです。

チョット脱線。テレビはラジオと違って目に見えるわけで、登場人物も裸で出るわけにはいかないから、髪型から着るもの、履くもの、被るもの、手に持つもの、これらは持ち道具・小道具などと言いますが、そういう物もキチンと作ったり揃えたりしなければならない。

また、何もない殺風景な場所で放送するわけにも行かない。だから背景やら置物やら、壁も階段も。舞台装置と言えば椅子があったり、遠くに街が見えていたり、山が見えていたり、ベンチがあったり、ソファがあったりという、それらしい場所を設営するのです。作るか持つて来るか置くか吊るすか、というわけ。それをテレビカメラで映すのだから本物に見えなければダメ。

テレビスタジオの中には、何台ものテレビカメラが動いているし、周囲や片隅には出入り口や台所や居間や玄関まである。スタッフも大勢が右往左往している。花瓶が置いてあったり、金魚が泳いでいる水槽があったり、モニターと言って、いまテレビカメラが写し出している画面を見せるためのワゴンみたいなヤツまでがウロウロしている。さすがに広いテレビスタジオも、互いにぶつ突き合うほど狭く感じ、邪魔になる物がやたらに多いのです。だから、テレビカメラと出演者が動き回るのに邪魔になる物は、エイヤとばかり「笑ってしまえ」となる。「笑う」と言うのは、この世界だけで通用する業界用語で、「取り除け」との

意味。「わっはっは」と笑ったら周囲の全員が「お前、馬鹿か」という目で、笑ったあなたを見ますよ。つまり、「笑」って邪魔にならないように配置すれば、巧くカメラで撮影できて、ガチャンと突き当たったり、音が出たりしなくなるか、事故が起こらないよう考えなくてはならない。それは私にとって、自分が舞台を経験して来たからこそ、ずいぶん役に立ったのです。

誰もやるヤツが居ないから、「おい、お前、やれ」となりました。その命令を下した人物の一人が、例の母校70周年記念式典で「お前、やれ」と業務命令を下した附属の大先輩、山本満夫常務であり。同氏は実は現場トップの方だったのですが、その山本満夫さん（通称、山チョウウさん）が、「おい新井、テレビは初めてだろうが、何でもいからやれ」、「難しいだろうが、とにかく、やれ」という調子なのです。そんな不条理な命令を平気で下す名人なんだけど、仕方なく私が命令通りにやってしまうと、けろっとした顔で言うんです。「ほうれ見ろ、出来たじゃないか」。これが山チョウウさんの口癖なんです（笑）。

その「ほれ見ろ、やれたじゃないか」というときに私が、どれほど苦勞していたのか、なんてこと呑気な常務には分かっていないのでしょうか。そうだと思うけど、ホント役に立ったのが、学生時代にお芝居で培った苦勞でしたねえ。

閑話休題。さて予算が無いから、大学演劇部での「崑崙山の人々」上演の時も、又もやゴミ捨て場漁りをやりました。ゴミ捨て場に行ったら、附属時代と同じ、材料はいっぱい転がっているんですよ。あのころ町の人たちは、物を捨てるのは平気だったんですね、きっと。私たちは垂木と言っていますが、一寸角の長い木の棒がコロンとごみ捨て場に捨ててある。ベニヤ板も厚紙もね。これ全部が舞台装置を作る材料に最適なんです。図画工作のお時間ですよ、なんて自嘲の笑顔と共にみんな戴いて帰りましたねえ。有難かった。街から拾って来て、みんなそれで、舞台装置が出来上がりました。

大学に入ると、大学からの予算を学生自治会が運動部とか文化部、演劇部などへ適当に配ってくれるんです。別にまた、そこそこの入場料も取れるので、その両方で上演予算をやりくりしました。

予算の金額までは覚えておりませんが、一つだけ嫌な記憶があります。

上級生の一人がチラシの広告を取って来たのですが、そのお金が待てども待てども演劇部へ入って来ないのです。そこで、なぜか私が会計係の代わりにお金を戴いて来い、ということになり、その上級生を学校ヨコの質屋通りに呼び出したのです。やって来たのは、そのご本人と、友人と思しき乱れた風体のパンカラ学生数人。私は怯えました。脅かされる、と見て取ったからです。その予想通りでした。ご本人が現れ、身を斜に構えて右手をズボンのポケットに突っ込み、如何にもドスでも握っている気配で、「払う金は無い」とヒトコト。

私が、なおも何か言おうと乗り出した瞬間、ぱっと身を捻って中腰になり、下から睨み上げる目線のまま、右手をポケットの中で大きく動かして、「やるか！」との構えで「文句あるか」。

「ある、貰ったはずのお金は演劇部のものです、払って下さい」。私も必死でした。「なにい」と右手を出しかけたとき、傍の一人が「もう止め、見ろ、怯えてるぞ」と止めに入ってくれました。

事件にはなりませんでしたが、広告料はついぞ払って貰えませんでした。そのドスでも握っているような格好をして、怯える1年生の私を脅した上級生。ずいぶん後年、県教委の課長となり、窓際の上席でふんぞり返っている姿は、間違いなく、ドスを握っている風を装って私を脅迫したあの上級生、その人でした。

演劇研究会というのが正式名称だから、研究して教えてやるんだから会費を出せ、との上級生からのお達しです。入会して学ぶのですから当然だということで、「はい」と会費を出します。この会費でお芝居上演の経費のほとんどを賄うのですが、足らざるは入場料を戴きましょう。ちょっぴり自治会から助成金も入るが雀の涙、でしたね。だから演劇研究会としての運営は、入場料と、パンフの広告料と、自治会から分配される助成金と、私たち会員からの研究会費と、ということで演劇研究会は何とか賄えました。足らざるは夜中のゴミ捨て場漁りの術でした。

「崑崙山の人々」は、ゴミ捨て場で拾って来たベニヤ板や垂木を、デザインされた山や丘や岩の



65. 「崑崙山の人々」の舞台
(左端が私)

形に切り抜いて泥絵の具を塗り、組み立てて舞台装置を作るのですが、これは3～4人ほどで、まるまる3日間、完全に徹夜しました。3日間の徹夜など、生まれて初めてで最後でしたね。しかも私は役者としても出演しなければならない。ちょい役ではありますが、台詞もあり舞台に出なくてはなりません。

最後の舞台シーンに登場して、その場で幕が下りるのですが、私には幕が下りたという記憶が全くナイ。科学者の一人として崑崙山に登って来て、墜落した日本機のパイロットと仙人との奇妙なやり取りが進むのですが、不老長寿の術を研究するため仙境である崑崙山を探る科学者の助手が私なんです。この科学者たちも最後には仙人にされてしまうのです。仙人の姿、つまり頭がマル禿になって、チョップリ毛が生えている仙人にされてしまい、永久の命を戴ってしまい地面にへたり込む。そういう役柄なので最後は地面に座り込んでしまい。そこで幕が下りるのです。たしかに幕は降りたはずなんですけど……。

いつ幕が降りたのか、全く私に記憶がございません。舞台上で眠ってしまっていました(笑)。自分で言うのも恥ずかしいのですが、こんな経験は生まれて初めてで、そして最後ですね。3日間の徹夜のセイです。その代わりに、この舞台装置は好評でした。いわゆる山水画ふうに作ったのですが、苦心の名作舞台装置でした。

幕と言えば附属の講堂を思い出します。「夕鶴」の初回の公演は、当時の大学教養部時代の旧制広高の講堂だった同じ講堂を使って上演したのです。当時から講堂には、緞帳を意味する幕なるも

のはありませんでした。今は附属の講堂になって立派な緞帳が下がっていますが、あの幕のない講堂で、舞台装置を作ったり、あそこで照明を当てたりしたんですから不思議ですが、出来たのです。その幕ですが、講堂の中2階から、反対側の中2階に向けて針金を引っ張り、それに幕を吊るそうとしたのですが、幕って結構重たいんですよ。ということは、幕自体がだらんと垂れ下がってしまって幕にならない(笑)。しかし、幕を取り付けないと芝居にならない。幕が開いて芝居が始まり、幕が閉まって終わる、というように何とか格好をつけようと苦心惨憺したけど、巧く行かない。止むを得ず、お芝居の最初と最後だけ幕を使い、あとはずーっと開けっ放しにしました。それはおかしな格好ですけど、何とか幕になったのだから、奇妙な苦勞をさせられましたねえ。

照明器具は、「夕鶴」上演のときから外部からの借りものでした。広島に古くから篠本照明という専門の照明屋さんがあったので、そこから500ワットと1キロワットのスポットライトを有料で借りて来て、私たち学生が操作しました。照明というのは、ただ光を当てて明るくするだけではなく、だんだん暗くなって夕焼けになり、再びまた、だんだん明るくなる、などが出来ないといけない。それには抵抗器という装置が必要なんだけど、これを借りるとなると借用料が高いんです。そんなお金はない。

これが「夕鶴」上演の最初に突き当たった難問でした。ところが工学部の2年生に大隅健吉さんという器用な先輩がいて、難問を一発で解決してしまっただけです。それも信じられないようなスゴワザでした。

バケツを一個持って来て、水を満々と張ります。それに塩をたっぷりブチ込むんです。そこへ今度は銅板を2枚持って来て、銅板と銅板に長い針金を結び付けて、これを照明器具の電源に差込むのだけど、その2枚の銅板を、塩水をいっぱい入れたバケツの中に、そろそろ器用に差し入れて行くのです。ゆっくり銅板をバケツの塩水の中に入れていくと、塩水が抵抗器の代わりをして、照明の明かりが、だんだん暗くなって行くのです。逆に銅板を引っ張り出せば、次第に抵抗が弱くなるのでしょう、煌々と明かりがつくのです。そんな見

たことも経験したこともないスゴワザで、名作「夕鶴」の舞台は大成功を収めました。傍で見て居た私は、易々とバケツ抵抗器を操る大隅さんのワザに、驚きと驚嘆の想いで見とれておりました。

要するにバケツと塩水と銅板2枚と針金を、2台の500Wのスポットライトに直列で接続したのだと思いますが、考えればイチかバチかの冒険ですね。巧く行ったら拍手喝采と言いたいところだけど、まさしく拍手喝采でしたね。2回目の公演は児童文化会館でしたが、そこでは正規の機材を使わなくてはならないので、そんな荒技は出来ませんでした。見事な大冒険の大成功を現場で見ることが出来、驚嘆したものです。

これは当時のものとして残っています。脚本だけは個人で大事にしておきたいと思うので残しますが、他のものはすべて文書館へ提供します。大学としての演劇公演のパンフレットとか、こんなものもあります。当時の大学演劇部のパンフレットで、全部に私は関わっています。(ポスターの原画を広げながら)それと同時に、こんなこともやりました(笑)。これは私が描いたんですが、広告パンフレット。そんなもの演劇研究会で印刷出来るはずもないし、でも私の作品であることは間違いない。

○石田 これは1枚だけ作ったものなんですか。

○新井 覚えていませんねえ。たしかに描いたのは私だけ……地図を描いたつもりでしょうけど。絵を描くことは子供時分から好きだったことは間違いありません。役に立ったことも間違いのない事実です。「皆実分校」という文字も入っていますね。

○石田 「ゴチック」と書かれたりとか、あと「上質80斤500枚」と書かれているので、印刷ポスターの原板ではないですかね。

○新井 そうか、ここに500枚と書いてあるね、そこまでは覚えてないな。

○石田 ぱっと見たら、入稿のときの指示のように見えるんですよ。

○新井 そうかもしれませんね。「上質」と書いて「80斤」と書いているね。ほんとだ。印刷に回したのかな。

○石田 でも、どちらにしろ、新井さんのデザインのポスターということは間違いないですからね。

○新井 描いたのは私だけでも、印刷したことも、何処かへ貼っていたなども記憶にない。こんなものが残っていました。私が持っても仕方ありませんから、当時の新制大学の、新設された広島大学の一員だった学生の、青春の1ページとして提供します。「三年寝太郎」のパンフレットには、私が関わっています。「夕鶴」も関わっています。これは広島市民劇場、教育委員会主催で別途に応援出演しています。

この「三年寝太郎」の舞台装置は、「二重」というステージの上に畳敷きの部屋を一つ作って、あとは出入り口があるだけで、汚い壁一面が大きなクモの巣で占められているんです。これは私のデザイン。確か既にお話し致しましたね。港から船が出航するとき、テープを投げますよね。あのテープを巨大な蜘蛛の巣の形に壁面に張り巡らせた行った、それだけでした。このデザインは激賞されました。「クモの巣1枚ですか」と言って。これが私の起点です。附属の放送班と、この二つが私の基礎になりました。

○伊東 俳優よりも演出にご関心を持たれたんですね。

○新井 役者は私の本領ではありません。大学の演劇研究会では演出を学んだつもりです。人数が足りないから役者をやれ、というので役者もやったけれど。役者としての心得など、一応経験せば分からないことを多く学べました。演出者としても、役者経験は大きなプラスとなりました。



66. 角帽姿の大学生時代

かし私は演技者向きではありません。やはりお芝居の裏を支える役割が最も自分に適していると確信しています。演出とか、舞台装置とか、音響効果とか、そういう、いわゆる舞台裏～裏方を中心に私は学びました。表方は私に似合わぬと思います。

○石田 脚本のほうはどうなんですか。

○新井 附属高校でのKHS時代は、必要に迫られて毎日のように放送台本を書きました。このことは随分、今になっても役に立っていると思っています。本格的な放送台本は、放送局に入ってから本気になって書きました。高校のKHS放送班時代の私は、何でも屋でした。脚本を書いて、アナウンスして、朗読も放送しました。技術的なことも、ある程度は分かりましたね。

有名な「ビルマの豎琴」が映画化される前、未だ、それほど有名でなかった時代に「歌う兵隊」のタイトルで出版されたのを読んで、感激して、校内の生徒たち皆さんにも知って貰いたくなり、何回かに分けて自分で朗読して放送した思い出があります。あの作品が有名になる前に、僕たちは先に作品の素晴らしさに気付いていたんだぞ、と誇りたい気持ちです。

KHS時代のお終い頃は、もう、通常の放送アナウンスなら、原稿なしで自由にアナウンス出来るまでになっていましたからね。

アマチュア放送劇団「あまがえる」から「ラジオ中国放送劇団」の創設へ

○新井 実は広島初の民放、ラジオ中国が昭和28年に誕生していました。正式には昭和27年5月に「広島放送」として創立、10月に開局だけど、28年に至って活発な活動を開始しています。

一方当時、NHK広島がラジオドラマを盛んに作っていました。何故ならば、広島には近く、ラジオ中国という民放が誕生する、情報によれば、どうやらラジオ中国はラジオドラマを作って放送するつもりらしい。そうなれば、うちも負けてはおれんというので、NHKは東京から広島にラジオドラマの大先輩というか、第一線の第一級の制作者たちを送り込んで来たのです。

記録が残っていますが、独活山万司（うどやままんじ）さんなどの名前をご存じないですか。ほ



67. 「ラジオ中国」が開局
(PR用ポスター)

かにもNHK広島には、森永武治、杉岡暁、児玉剛三さんなど一級のラジオドラマ演出家が揃っていました。有名な連続ラジオドラマ「鐘の鳴る丘」という番組名は、きっと聞いたことがおありでしょう。それから「君の名は」も。この二つの有名な連続放送劇の演出家である独活山万司さんが広島の放送局長で赴任して来ました。それからラジオコメディの演出家として有名な森永武治さんは、制作部長で来ました。この人はディレクターとして有名で、後に『コメディ、ラジオドラマ全集』などの本を出した方です。そういう有名ラジオマンを、広島局に集中的に送り込むほどにNHK広島局は、新発足のラジオ中国に強い対抗意識を持っていたと考えられます。

○石田 今風で言うと民業圧迫じゃないですか(笑)。

○新井 『日本放送作家協会中国支部史』(平成12年発行)を持っているので提供しましょう。広島放送作家協会という組織があります。この協会には放送作家の先生方が所属しているんですが、この中に当時のNHK広島局とラジオ中国を中心とした、ローカルのラジオドラマの歴史が克明に記録されています。

この中に、たびたび新井俊彦も登場していますが、そのころのNHK広島局とラジオ中国に、私は「広島大学放送演劇研究会」の一員として続けて出演しておりました。そう表現しても良いほど、ラジオ番組への出演チャンスが多かったのです。広島大学演劇研究会に属する新人俳優の私たちに

も、ラジオの声優としてNHK広島局からお呼びがかかって来たのです。

昭和27年に誕生したラジオ中国は、明るく昭和28年から積極的な番組制作活動を開始していますが、そのころから、地元の広島でラジオドラマを作って放送しようではないか、との意識が盛り上がっておりまして。先に山本満夫という名前を出しましたが、この方がラジオ中国の編成部副部長として、ラジオ番組制作の陣頭指揮を執っておりました。しかし当時は、当のラジオ中国には未だ放送劇団がありません。片やNHK広島局の方には正式に、NHK放送劇団という本格的な声優組織が存在しており、活発な放送劇制作活動を展開していました。

その時代、広告代理店の電通が、日本全国の民放設立に大きな役割を果たして行きます。民放誕生に際して積極的に割り込んで来た、と表現した方が正確かな。広島も、その代表例の一つです。広告の電通は、広島に初めて誕生したラジオ中国に資本金とスタッフとを送り込んで来ました。そのうえで、番組面でも実質的な形で強力で売り込んで来ました。昭和28年春のことです。見事な営業活動と言えるでしょうが、先ず逸早くスポンサーを獲得しておいて、広島電通が自前でラジオ番組を制作し、誕生したばかりのラジオ中国に売り込もうという作戦を展開したのです。その作戦に私たち広島大学演劇研究会のメンバーや、女子短期大学、女学院高校などの演劇部員、青年劇場の女優などが一役買うこととなります。その中に、実は私も加わっておりました。

すべて広島電通肝入りの計画です。つまり、ご当地で優秀な役者を揃えたアマチュア放送劇団を創設し、彼らの出演で広島電通が連続放送劇を制作し、スポンサーもろとも、その番組をラジオ中国に売り込み放送して貰う、という計画です。驚くことに早くも広島電通的的場町にあった社屋内には、ラジオ用のスタジオまで完成しておりました。仕掛け人は、広島電通の中村覚（のち関西テレビ常務）さん、高沢祝爽（のち広島電通支局長）さんほかの電通ラジオマンたち。かたやアマチュア放送劇団側の仕掛け人は、広島大学演劇研究会代表の多地映一（本名：田村順一）さん。劇団名は「劇団あまがえる」。メンバーは多地映一、桐



68. 劇団あまがえる出演の放送劇「海底岩窟王」台本

雅美、土橋訓之、中山達磨、丸山英子、諏訪礼子、片山桂子、新井俊彦（私です）。番組名は連続放送劇「海底岩窟王」、脚本：鬼怒川浩、提供「カルビーキャラメル」、ラジオ中国からの放送日：昭和28年3月3日。放送時刻：不明（15分番組）。

そのラジオドラマ作りに関わったのが「劇団あまがえる」と自称するアマチュア放送劇団。これが結成されたは昭和27年で、実際の活動開始は昭和28年に入ってからとされます。中心人物は広島演劇研究会の会長である多地映一さんで、この方が電通と交渉をして、広島にアマチュアの放送劇団を創設したんです。なぜ広島電通と交渉出来たかと言うと、その当時、広島電通に中村覚さんという附属の先輩が居りました。38回だったかな。後に関西テレビの常務になって広島に出張で来てRCCに立ち寄った際、社長室前でバッタリ出会った瞬間、「おお、新井君か、老け込んだなあ」と言われてガックリ、という経験がありました。その中村氏と、附属出身という縁で多地映一さんがルートを付けたのだらうと思われま。ともかく広島電通のリーダー格が附属の先輩だったために、多地さんが交渉してアマチュア放送劇団を作ろうと意見が一致したのでしょう。その劇団でラジオドラマを作り、電通お手の物でスポンサーも探し出した上で、それをラジオ中国に売り込もう。ならば電通がラジオスタジオまで作ってしまえ、

となったのです。私に声がかかって参画したときは、的場に在った電通の2階に本格的で立派なスタジオがあったのでびっくりした記憶が鮮やかです。

そこで放送劇を作ったのです。広島为民放としては、電通製作だけど、初めてのラジオドラマです。スタジオは立派な技術設備のミキサールームが付いていて結構広く、その技術の部屋とスタジオの間には厚いガラス窓があり、スタジオの中を覗くことも出来る本格的なスタジオ設備でした。

私の最初の役割は、附属の放送班の経験を生かして、ドラマの音響効果を担当しました。広島に鬼怒川浩という作家が居りました。少年探偵団じゃないけれど、冒険探偵団風の物語を書き上げて、その台本によるラジオドラマを電通が録音してラジオ中国に持ち込んで放送させる、という企画でした。番組タイトルが凄い。「海底巖窟王」と言う、子ども向けの冒険物語で、出演者は誕生したばかりの「劇団あまがえる」。劇団のメンバーは先述のとおりです。

ラジオ中国の創立時、昭和27年は中国新聞の3階を借り切って呱呱の声を上げました。その屋上に空き部屋があって稽古場に使えるというので貸して貰ったりして、劇団「あまがえる」は稽古を続けていました。ガリ版を自分たちで切って印刷して台本を作り、稽古してから電通のスタジオで録音するのです。私は主として音響効果係でした



69. 中国新聞社ビル
(3階がRCC事務所スタジオ)

が、そのうちに「お前も、やっぱり声を出せ」ということで役者の一人に引っ張り出されて、遂には名作「たけくらべ」の主演を命じられたり、桐原正文さんから、名作「安寿と厨子王」の演技で、長らく会えなかった盲目の母親を発見した厨子王は、どのように母親らしき老婆に声を掛けるかと、貴重な演技指導を受けたり、この時期の私は、演出者としてではなく、演技者としての目と心とを会得し得たように思えるのです。

広島初のアマチュア放送劇団である「劇団あまがえる」は、時代の寵児として様々なジャンルの放送劇を制作し存在感を高めました。大学4年になっていた多地映一さんと電通の中村覚さんとの話し合いでアマチュア放送劇団が誕生したのが、昭和27年12月13日だったという記録が残っています。そして録音テープをRCCラジオ中国に持ち込んで放送したのが、昭和28年3月3日という記録も残っています。

今度はラジオ中国側の話です。「劇団あまがえる」のテープが持ち込まれて、それを放送するだけではラジオ中国としては面白くない。NHKは自前の劇団を持っている。NHKは、それなりに成果を挙げている。ならば、ラジオ中国としても正式な放送劇団を作ろうじゃないか、ということになります。そして研究生を募集します。

私たちも全員が劇団員の試験を受けました。でも私たち以外に経験者が居るわけがない。だからじゃないけど、ほとんどのメンバーがラジオ中国放送劇研究生に合格します。かくてラジオ中国にも「放送劇研究会」が生まれました。これが昭和28年5月です。「劇団あまがえる」は自然消滅し、そのメンバー中心で新しいメンバーも加わって、同年10月には「ラジオ中国放送劇団」として正式に出発するのです。そのなかに、私も加わって居りました。

そして、いよいよラジオ中国独自で制作したラジオドラマ番組がスタートするんです。それが同年7月14日と記録されています。

その前に妙な出来事が起こります。ラジオ中国側が、電通から「劇団あまがえる」を分捕って来て、ラジオ中国側スタッフの演出で、「劇団あまがえる」がラジオ中国のスタジオで録音を取り、そのままラジオ中国から放送するという奇妙なこ

とを1回だけやっています。他人の禪で相撲を取る、みたいな出来事です。これが昭和28年4月22日。ラジオ中国制作、「劇団あまがえる」の出演で「山椒大夫」と言う放送劇を放送したと記録されています。この「山椒大夫」で私は厨子王の役を演じました。今でも恥ずかしいのですが、この録音テープが私の手元に残っています。大昔の素人演技で恥ずかしいのですが、私がこっそり自宅へ持ち帰っておりました。

そのラジオ中国放送劇研究会が、のちに正式の放送劇団に変身するのですが、メンバーはそっくりそのまま15人ぐらいの劇団になります。その責任者が、当時のラジオ中国編成の山本満夫副部长さん。24回生です。

研究会がスタートしてのち、同年7月14日からラジオ中国で、毎日1本ずつで月曜から土曜までの毎日、15分番組が連続のラジオドラマシリーズとして始まりました。ローカルのラジオ中国としては大冒険である連続放送劇の始まりで、その全てに私は関わっていました。これが昭和28年で、大学生のままラジオにのめり込んでいるから、大事なゼミナールにも顔を出せなくなってしまったわけで、大学のゼミに顔を出すよりラジオ中国に出席しているほうが多かった、という乱暴なことになります。

○石田 これは演劇研究会もやりながら、ラジオ中国もやるというかたちですか。

○新井 はい、そうです。

○石田 ということは三足のわらじですよ。学生をやりながらサークル活動をして、なおかつアマチュアの劇団とで。

○新井 そういうことになりますね。

○石田 「劇団あまがえる」では幾ばくかの報酬は出たんですか。

○新井 「劇団あまがえる」は、ラジオ中国放送劇団の研究会が出来た時に消えます。報酬はありませんでした。

○石田 無報酬ですか。

○新井 はい。ラジオ中国の劇団研究会に入ったのち正規の劇団になったときだったかな、何かの記念として山チョウ（山本満夫）さんから一人500円を貰ったという記憶はあるけど、ずっと無報酬で出演料なし。無茶苦茶ですよ（笑）。電

通に言わせれば「やったー」というつもりでしょうが、電通が仕切っていたわけで、どこかへ消えたのかな。

スポンサーはカルビーだったはずですよ。「カルビーキャラメル」だったかな。電通には何がしかの入金はあっても、私たちの方には来なかったのかな、不思議だねえ（笑）。当時、私たちはラジオに出して貰えるから嬉しかった。そんな時代感覚なんて分からないでしょう、今の人たちには。嬉しがって報酬など全く無関心で出入りしてましたね。

私は当時、学生の身分でNHK広島局にも出演していました。NHKは、きちんと出演料をくれました。確か500円。ちゃんと税金を取られていました。出演料の明細書は今でも持っています。やっぱり源泉税10%だから50円引かれて、手取り450円でした。その台本は今でも保存しています。最初に出演したのがラジオ中国に出るよりも少し前です。本棚の奥に平積みしてあるのが過去の放送劇の台本です。（書斎の戸棚を開けて台本を取り出す）。

○石田 量がすごいですね。

○新井 だから、ラジオ中国にも出演する、NHK広島局にも出演する、広島大学演劇研究会としても芝居をやっている、それから大学のゼミナールにもちょこちょこ顔を出す、みたいな無茶をしています。それから時々ガリ版切りのアルバイトにも行くということで、忙しいばかりですね。

○石田 そうですね。

○新井 そして奨学金も貰っているから、父にはほとんど迷惑を掛けずに済んでいた、ということになりますよね。奨学金の払い戻しは後年、いつの間にか父が一括して払ってくれていましてねえ。申し訳ないし、苦労ばかりかけてしまった。奨学金の記録も残っています。そんな学生生活をして、昭和30年3月9日に社会人になるわけです。

NHKからの出演依頼

○新井 そんなころ、昭和27年の5月でした。なんとNHK広島局から私宛に出演依頼の電報が届いたのです。驚愕しましたね。当時は各家庭に電話など有ろうはずがない貧しい時代です。連絡方法は電報だけでした。

連続放送劇、「私たちの町～第70集、峠は三里、山の郵便屋さん」作：真下三郎、演出：杉岡暁、放送日は昭和27年5月23日、19：30からのNHK第一放送。上流川町のNHK広島局の練習場で稽古するから来たれ、との文面です。

被爆建物で半壊の痕跡が明らかな局舎まで、いそいそと駆け付けました。稽古は、そうそうたるNHK広島局の演出家のもと、これもそうそうたる正規の放送劇団員たちに交じって、私はチョイ役の青年を演ずるのだから緊張しましたね。なにせ初めての本格的なラジオドラマ声優としての稽古ですから。これは凄い経験になりました。

それまで高校では、自分が創設した放送班での体験だけ。大学では放送班がないので止む無く入った演劇研究会という、学生演劇集団での自己流芝居経験だけだったところへ、突然、本格的な放送演劇術の実地を体験できるという、稀有なチャンスが舞い込んで来た訳です。

当時のNHK広島局には、ラジオ界の著名演出家が勢揃いしていたのですから。そのときの放送台本は今なお大切に保存しています。出演料は400円でした。キッチリ源泉税40円が天引きされていました。今になっても私が何故、突然にNHKから声優として招かれたのか謎です。演出の杉岡暁さんが附属の大先輩（36回）だったから、後輩の私のことを聞き知っていたのかなあ、など考えこんでいます。

そのあとも私は、同年7月8日、19：30から放送の懸賞入選放送劇、美濃綾子作「万年筆」（30分番組）で準主役の青年の役を与えられ、優れた演出者と名優ぞろいの劇団員の前で必死の熱演を果たし終えた、と記憶しています。

続いて7月11日、今度は正午からのNHKラジオ第二放送で、連続放送劇、黒崎秀明作「理想の街」第2回にも招かれて出演し、のちに劇団「あまがえる」で出会うことになる異色の声優、女学院高校の諏訪礼子嬢と共演しました。

特筆すべきNHKでの経験を語りましょう。同年7月16日放送の連続放送劇、知切光歳作「稲生武太夫百物語り」への大学劇研として集団出演した折の得難い経験です。NHK側の演出者は、広島局へ赴任して来たばかりの、ラジオコメディの演出で有名な森永武治さん。出演は、のちにRC

Cの劇団リーダーとなった岩崎徹さんはじめ、NHK広島放送劇団の芸達者が総出演という豪華版。そこへ、村人たち役など声優の人数が足りないとの要請に応じて駆け付けた、私たち大学生のにわか声優の一団が加わったのです。物凄い大人数の出演者を前に森永さんが、やおら申されました。

「広島県は三次に古くから伝わる妖怪物語です。時代ものですが、村の人々が化け物見物に集まるというので役人まで出張って来た最中に、いたずら好きの妖怪が悪さを仕掛けます。それはならじとばかり平田篤胤公が取り押さえようとするが、遂には村中の家々で畳が踊り出すやら、旋風が吹き荒れるやら、晴れた空からにわか雨が降り注ぐやらの大騒動が勃発。その場面で学生諸君など、皆さんは村人や役人となって頑張って演じて戴きたいのです」

柔らかい語り口ながら、ツボを心得た説明と演出者としての指示でした。という訳で、大人数での稽古に入りました。ところが、さあ大変。あまりに出演者の人数が多すぎて、誰が何をしゃべっているのか台詞も聞き取れず、收拾がつかない状態に陥ったのです。

しかし演出の森永さんは少しも騒がず、指示を出し始めました。いわゆる、ダメ出しですね。

「その学生さん、そのセリフは短くしましょう。お役人のあなたは台詞ナシにして、ひたすら怖い怖いと悲鳴を上げましょう。あ、その村人役の方、その台詞は止めて、ウワーッ、ウワーッと大声を上げて逃げ回ることしましょう」

大騒ぎの稽古のなか森永さんは、誰が、どんな台詞をしゃべったのかを聞き分けていらしたので。そして、どうしても方言が抜けない人、台詞が明瞭でない人、的確な解釈が出来ていない人などの台詞をカットする方法で收拾してしまったのです。おかげで遂に、台詞ゼロというエキストラ氏が続出したという、笑えない結末も生むことになりましたね。

私はというと、目の前で著名な演出家がラジオドラマを演出している様子を見せて戴き、的確で心配り豊かなダメ出しも実体験しました。偶然とはいえ、放送劇の演出法を直伝でご伝授して戴けるといふ稀有な幸運に酔いしれておりました。後

年に至るまで、この奇遇は私の得難い経験となり、現場人間としての基礎を築き上げるのに役立させて戴いたと感謝しております。

ラジオ中国の誕生

○新井 民間放送というのは、戦後、アメリカ軍の占領を受けて初めて誕生するのです。それまで日本のラジオというのは、ちょうど昭和の歴史と一緒に、大正14～15年ごろ、昭和元年ごろ、東京は芝浦あたりで初めて試験放送がなされて生まれます。

東京と大阪と名古屋に、J O A K、J O B K、J O C Kという三つの放送局が当時、初めての民間放送として誕生し話題になります。放送を始めると直ちにラジオ受信器が普及し始めました。

すると、政府が黙って見ているわけがありません。国が乗り出します。その民放ラジオ3局に向かって、統合して財団法人になるか特殊法人になるか、いずれにせよ法人格を持った日本放送協会なるものに参画せよ、という命令が下ります。

この3局は猛烈に反対したのですが、結局、国家の権力には逆らえず、初の民放3局は「日本放送協会」に統合され、消えることになったのです。

しかし、最後の声明文が残っています。

「われわれは欣然として、われわれの独自精神を守り抜くつもりである。国家の奴隷になるつもりはない。われわれは、あくまでも民間放送としての矜持を保ち、今後も活動を続けるつもりである」。この声明を残して初の民放3局が消えNHKが誕生する、という事件～昭和初期のお話です。

かくて国家統制の下、NHK日本放送協会が誕生しました。当然、今と同じように、あのころはラジオだけだから聴取料でしょうね、それを徴収するという制度も出来て、放送法、電波法という法律も出来ていたようです。

現在の放送法、電波法は強制力を持っています。「ラジオ、テレビ受信機を購入したら、NHKと受信契約を結ばなければならない」となっているんです。民間は大いにそれに反対し主張しています。「契約自由の原則に反する法律」だと。しかし国は突っばねています。

この争点は現在も存在しています。ですから国民の中で受信料を払わない人が沢山います。その

一例としてお話ししますと、私の上司であった中国放送の某氏は、遂に全くNHKに受信料を払わなかったと伝わっております。「払う義務はない。契約自由の原則である。俺はNHKと契約を結ぶつもりはない。俺は民間放送だけを視聴する」と突っばねていたとか。NHK側も困ったはず。現在も契約自由の原則は厳然と存在しております。これが民間放送誕生に伴う問題点です。

民間放送ラジオ局の誕生は、GHQによる日本占領政策や、GHQの内部抗争も絡んで混乱が見られ、間もなく勃発する朝鮮戦争、次いでサンフランシスコでの講和条約締結など、大きな世の中の変動に曝されながらも、やがて名古屋地区を先頭に、全国各地で一斉に民放ラジオがスタートします。それまでの動きを見て参りましょう。

昭和22年1月8日。連合国総司令部（GHQ）は占領政策を与る対日理事会で、「放送の単一形態、すなわちNHKによる放送独占形態は、占領政策の上から見て極めて有利であり、民間放送の開設は困難である」との最終決定を出していました。

しかし日本国内では、NHKによる放送独占に対して大きな批判が上がっており、早くも敗戦の昭和20年9月には大阪財界から新放送会社設立の計画が出されるなど、各地で同様の動きが始まり、昭和21年1月には名古屋で「中部日本放送」の免許申請が出され、民放への機運は高まりつつありました。しかし放送設備を揃えるには高額な資金が必要なうえ、電波技術、番組制作から放送までのシステムなど困難な問題が多く、未だ当時の日本では民放は無理と言われておりました。

しかし1949年、昭和24年6月18日、GHQは、「電波監理委員会の設置、NHKの公共機関化、民放の許可」という対日占領政策の転換を行い、民放開設を容認する方針を打ち出しました。これを受けて政府は、「電波監理委員会」を設置します。たちまち同年5月1日、「広島平和放送」が名乗りを上げました。その中心人物はNHK広島放送局の初代放送部長だった内田信夫氏で、地元の有力経済人の藤田一郎・山本実一氏らと諮って免許申請書を提出したのです。

翌年の昭和25年5月2日。衆議院本会議の採決を経て、電波三法と呼ばれる、「電波監理委員会設置法」、「電波法」、「放送法」が公布され、同年

6月1日から施行されました。この電波3法は放送の在り方について、先ず政府機関的な形態からの脱却、すなわち独自独立体制の確立と、完全な民主化。そして複数競争体制の導入を目指しておりました。政治・行政からの完全独立を目指すものでしたから、当然ながら日本政府は快く思っておりません。先に結論を述べますと、日本が占領下から脱して独立したトタン、この電波監理委員会設置法なる「悪法」を政府は、サッサと廃止してしまいます。以後の放送行政は、政府の意のままに進むこととなり、そして現在に至るのです。

ついでに蛇足をもうヒトツ。

教育委員会という委員会組織があります。この二つともが、GHQの指導の下で日本の中に出来上がった独立組織でした。つまり、政府とは一線を画し、独立した組織として自由な立場で教育行政を行い、自由な立場で放送行政を行うことを目的とした委員会組織が生まれたのです。現在は教育委員会だけが残っていますが、設置された当時の趣意とは異なり、いつの間にか教育委員会は独立組織でも何でもなく、県知事や市長など首長の指揮下に入ってしまう、現在に至っております。

さて、昭和25年6月25日、朝鮮戦争が勃発。日本国内は思わぬ特需景気で沸き立ち、一挙に経済力を回復して行きます。その中で、国連軍の主体である米軍が全面的に朝鮮半島での戦闘に投入され、ガラ空きになった日本国内の安定を維持する、との名目で警察予備隊という名称で実質的な自衛軍が誕生します。現在の自衛隊ですね。

それと軌を一にして、先に述べたとおり、占領軍のGHQは、それまでNHKだけの独占体制だった放送界を完全にひっくり返し、民放を容認する方向へと反転した訳です。

何故なのかは、さまざまな憶測がありますが、GHQ内の超民主化派が一掃され、いわゆる保守派が主導権を奪い返した、との見方。そして国民からの強い要望が原因だとする説が有力です。

ともあれ、こうして日本中に一斉に民間放送を設立しようという動きが生まれ、各地で申請合戦が始まります。困ったのは政府です。広島でも、先の「広島平和放送」のほか、「ラジオ広島」が民間放送局としての設立を申請しておりました。ほかに、もう一社あったらしいけど、それは途中

で脱落した模様です。

そして昭和26年1月15日、電波監理委員会からの勧告により、「広島平和放送」と「ラジオ広島」が合併して一社にまとまり、それが「広島放送」でした。その調整の基準となったのが、東京に2局を認め、そのほかは県域放送と言う呼び方をしますが、各県に一局の民放を認めよう、との電波監理委員会の方針で調整が進んだ模様です。

こうして「広島放送」が誕生へと進み始めるのですが、免許の条件として地元財界からの強力な財政支援を受けて資金を確保し、放送設備も完全な機能を維持した立派な設備を要請されました。その次が放送のノウハウです。

広島には、「二葉会」という財界の団体があります。そこの手前の会社から資本が提供されました。次に登場するのが、広告代理店の電通です。これは全国組織を持っています。電通はアメリカ帰りのラジオ的なノウハウを既に持っていたので、民放設立の指導的役割を果たします。

同年4月21日、電波監理委員会から予備免許が与えられました。呼び出し符号、コールサインはJOER。ここでEの文字が入っているのは、予備免許の順番が5番目だったと言う印です。周波数1260KC、出力1KWです。この日は、他にもラジオ東京など16社に一斉に予備免許が交付されています。

同年9月1日、初の民間放送局として、名古屋の「中部日本放送」CBCと、大阪の「新日本放送」NJBの2局がラジオ放送を開始します。その一



70. ラジオ中国のJOERタワーと私

方、我がR C Cは資金難に苦しみ、予備免許で指定されていた放送局の工事期限を、予定の10月20日では無理として、期限延伸を願い出る有様でした。

翌年、昭和27年2月25日に緊急発起人会を開き、新聞3社からの資金提供とニュース提供を得ることとなります。ここで初めて地元の中国新聞社に加えて朝日新聞社、毎日新聞社が、平等の立場で参画を許すこととなります。中国新聞・朝日新聞・毎日新聞の3社が15%ずつ出資して設立へ向かうことが承認されたのです。

その頃になると、先にスタートした名古屋と大阪の2局に加えて、大阪にA B C朝日放送、福岡にR K Bラジオ九州、京都にK B C京都放送、東京にK R Tラジオ東京などが開局しており、いずれもが予想に反して(?)好調な収益を挙げ始めていたのです。それが広島放送にとって強い追い風となって行きます。

昭和27年5月7日、創立総会を開いて正式に「広島放送」が設立されます。「R C Cの50年史」によれば「夕刊ひろしま」に募集広告を出したら670人もの応募者が集まり、広島市幟町小学校で6月13日から3日間にわたって採用試験を行ったようです。職員の採用は当初の40人から50人に増員され、その後の準備状況の如何によっては追加採用が認められたそうです。

ところが、放送開始前の8月8日、臨時株主総会が開催され、社名を「広島放送株式会社」から「株式会社ラジオ中国」に変更するとともに、授権資本を6千万円とし、開局日を10月1日と定め、採用人員を50人とし、開局準備の進捗状況に応じて更に人員を採用すると決定しました。社名変更の理由は至極簡単です。地元の中国新聞社からの圧力によるものです。

誕生したばかりの「ラジオ中国」には、もとNHK広島局の初代放送部長だった内田信夫さんのほか技術部長だった人、現役のエンジニアなど実務経験者が創立時の発起人や社員として6人ほど入っていました。会社は社号を「ラジオ中国」としたのち、藤田定市一会長、山本実一社長、内田信夫専務、永野衛相談役、田中好一取締役、永井大三取締役の6人で「運営委員会」を構成し、中国新聞社の2階に事務所を開設して開局準備に取りかかりました。その時の職員は僅か7人だった

とか。

同年9月26日から観音町の送信所からサービス放送を開始しています。それを私は聞きました。

昭和27年10月1日に本放送を開始します。放送時間は午前6時30分から午後11時までの、一日16時間30分。ラジオ東京からのテープネットを中心に、広告代理店からの持ち込みを除き、自社制作番組は49.3%に上り、番組セールスも9月1日までに週間23時間の売り上げが成立している、という好調ぶりが目立ちます。

当時は、いまの流川の三越の場所にあった中国新聞社の高いビルの3階ホールに、事務室とスタジオを置きました。

広島にラジオ中国がスタートしたとき、広島の民間放送として第1号ですから、先輩格はNHKだけです。広島では昭和の初期からNHK広島は放送を開始していて、コールサインがJ O F Kだし、Aから順番にFまで来たのだから、日本でも早い方の6番目の開局かな。もちろん先述のとおり、ラジオドラマでも先輩格でした。そこへ私は学生の身分で、出演者として潜り込んでしまい、ちゃっかりラジオドラマ作法を実地に学ぶという幸運に恵まれた訳です。NHK広島局は、結局、私の師匠役を果たしてくれたこととなります。

ここで一つ、説明しておきます。日本中の放送局、今はラジオもテレビもですが、みな新聞が関わっています。広島の場合は「中国放送」という名前のとおり、中国新聞がラジオ・テレビ局のR C Cを支配しています。朝日放送は朝日新聞が押さえています。読売テレビは読売新聞がテレビ局を押さえています。毎日放送では毎日新聞が放送局を押さえています。という具合に、現在は各新聞社がテレビ局、ラジオ局を堂々と所有しています。

ところが、電波法、放送法、電波監理委員会設置法に「集中排除原則」というのがあるのです。かなり前、どこかの新聞社がこれを取り上げて「新聞社が放送局を持っているのは法律違反ではないか」という記事を出したことがあります。しばらく話題になったのですが、途中で消えてしまいました。

この「マスメディア集中排除原則」というのは、資料によりますと、放送することができる機会を

出来るだけ多くの者に確保することにより、出来るだけ多くの者に放送による表現の自由が共有されるようにするため、放送法第91条で設定されたもの、となっています。

このマスメディア集中排除原則の基本的な部分
が、平成23年6月の一部放送法改正で法定化されました。放送法第93条の第1項および第4号および第2項、電波法の第7条第2項第4号、放送法第162条第1項と書いてありますが、何かというと、一つの新聞社なりテレビ局が、他のメディアの株式を所有・占有し、その他のメディアを監理・指導し所有することを許さないという原則なのです。これが集中排除原則。文字どおり、マスメディアがどこか他のメディアを支配・監理することは許さないという原則が厳然として存在しております。それにも関わらず、全国のテレビ局・ラジオ局は、全部、新聞社の支配下にある。広島中国放送は名前のおと中国新聞の支配下にあり、持ち株を計算すると32.37%となっており、中国新聞は中国放送を、いまや完全に支配下に置いたといえます。

つまり、生え抜きのRCC出身者に言わせると、GHQではないけれども、中国新聞によって乗っ取られた。占領軍に乗っ取られてしまい、ご承知のとおり、社長がしきりに変わります。みな中国新聞から送り込まれて来るのです。私が定年で辞める時も、中国新聞から送り込まれた社長から辞令を貰いました。「あの社長から辞令を貰うなど御免蒙りたい」と言っていたのですが、最後の退任となれば、これまた辞令だけは貰わないと辞めたことにならないと渋々受け取りました。しかし誰でもそうでしょうが、生え抜きのRCC人間としては、中国新聞から支配されていることを是としておりません。

ところがやっと2020年6月26日、本当に久しぶりに生え抜きの社員から社長が誕生したのです。これまた珍しいことですが、技術系の出身者として初めての宮迫良己さんが、RCCの代表取締役社長に就任しました。過日、縁あって宮迫社長と社長室で懇談の機会を得たのですが、人品骨柄、頼もしい限りと感服しながら辞去した覚えがあります。私は今やOBのなかでも最年長組の一人となってしまうましたが、金井宏一郎さん以来の生え抜き社員からの抜擢の社長人事であると、RC

CのOBの一人として、こよなく喜ばしき慶事なり、と嬉しく思っております。いささか影が差してきたと言われる民放界を、ぜひとも地方の力を見せつけて再生させ、未来への明るい展望を開くよう、多くの放送プロを輩出させるよう、活躍を祈るや切であります。

もう一つ言いたいことがあります。中国放送、ラジオ中国という名前です。この社名を聞いた人は、たいてい、「あなた、日本語お上手ですね」と言います。前回の東京オリンピックで、ラジオ中国から社名を入れたデンスケという録音機を持って取材に行ったスポーツの山中善和アナウンサーが、東京のスタジアムで取材していると、どこかの国の誰かから、「あなたの日本語、お上手ですね」と褒められたというのです。当の山中アナも返事に窮したそうですが。

私がお社を辞める前の海外出張でも、辞めた後の海外旅行でも、どこへ行っても「あなたは日本人か」。続いて「どこから来たか」と聞かれ「広島だ」と答えると「えっ」と反応があり、必ず「原爆では？」と迫って来ます。世界中で広島という名前は、小さな子どもでも知っています。

イタリアの山の上に、小さな独立国があります。そこで家内と一緒に教会に入って行ったら、小さな子どもから質問を受けました。「日本人か、広島から来たのか。では原爆は？」と。そこで私は片言の英語で、自分の被爆体験を語ってあげましたが、小さな子どもたち、たぶん修学旅行だったのでしょうが、その子どもたちは、広島に原子爆弾が落とされて大変なことになる、ということなど、ちゃんと知っていました。

同じように、アルプスの頂上でも、修学旅行の子どもたちの集団に囲まれて、「ヒロシマから来たのか、原爆では火傷したのか、なぜ助かったのか」など質問攻めにあい、記念写真を撮られました。その記念写真は後から、そのアルプスの子どもたちの学校宛に送ってあげたこともあります。それほどに広島は世界中で有名な名前であるにも関わらず、中国放送とは何事かと私たちは怒っています。しかも創立時は広島放送として発足しているのだから。5月に設立して8月に社名が変わったということは、3カ月で変わってしまった。これは資本の圧力だと思いますが、こういう乱暴

が罷り通って中国放送となった。

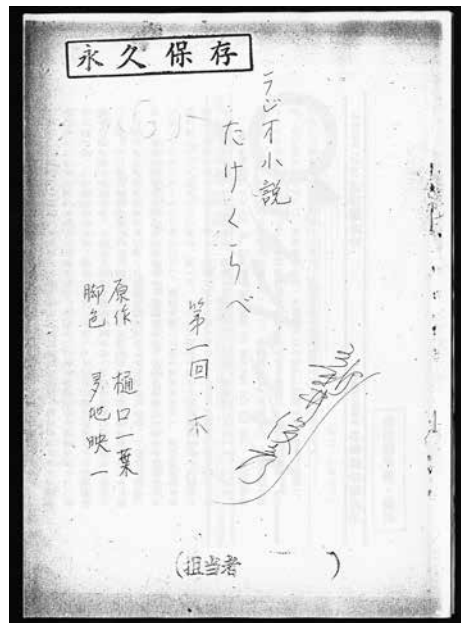
それから、もう一つ理由があります。ラジオ中国でスタートして、やがてテレビになります。テレビになると、テレビの番組の中で局名をコールサインとして名乗らなければいけない。「ラジオ中国テレビジョンです」と言わなければならない。JOERがコールサインで、「JOERテレビジョン」は呼び易いのですが、「ラジオ中国テレビジョン」とは、いかにも奇妙です。

社名を変更しようということになりました。当時、私は組合の書記長をやっておりましたから、ここはチャンスとばかり、社名変更を組合からの決議として会社に突きつけました。当然、「広島放送」に戻せとね。一言の下に撥ねつけられました。これも、まさに資本の力ですね。如何ともしがたかったものです。こういう状況なのだということ、ぜひ知っておいてください。

ラジオ中国への出演

○新井 不思議にも昭和27年という年は、私にとってNHKはじめ、外部への出演が連続した一年でした。同年末には、ご当地初の民放のラジオ中国が誕生して放送を開始します。試験放送を、戦時中から愛聴していた並4球ラジオで聞いた私は、一足早く名古屋で放送を開始した「中部日本放送」の電波を、同じ並4球ラジオでキャッチしたときの嬉しさを越えた感動を覚えたものです。たしかアナウンサーは桑原美紀子さんだったと記憶します。

それと同じころ、アマチュア放送劇団「あまがえる」が誕生したわけですが、年が明けて昭和28年に入ると、私は流川町の中国新聞本社ビル3階を占拠して誕生したラジオ中国へ出入りし始めているのです。それも正面玄関からではなく、裏手の駐車場入り口で、新聞印刷機のインクの匂いが強烈な裏口の階段から出入りするという、まるで社員同様の感覚でラジオ中国に関わり始めたのです。昭和28年春、いよいよNHKとラジオ中国の間で放送劇合戦がたけなわとなる時期に、私は、先ず劇団「あまがえる」の一員として中国新聞3階のラジオ中国へ招かれました。担当は田頭和憲さんという小柄なラジオ制作課員で、ラジオ中国でも初めてのラジオドラマ演出家として私と仲間



71. ラジオ中国自社制作ドラマ第1号

たちを迎えて下さいました。劇団「あまがえる」のユニット出演で、ラジオ中国が初めて放送劇を制作しようという企画でした。

作品としては、初めて多地映一さんが放送劇として脚色した榎口一葉原作の「たけくらべ」三部作です。放送日時が不明なのが残念ですが、昭和28年4月のことで、第2回放送の台本実物が私の手元に残っており、過日、RCC資料室に寄贈しました。のちに著名作家となった多地映一さんにとっても、これが放送作家としての第一作となり、狙っていた映画監督から放送作家へと転身した瞬間でした。語りが女専（のちの女子大、現在の県立広島大学）の丸山英子（のちRCCアナ）さん、美登里を諏訪礼子（女学院高校）さん、信如を私、長吉を多地映一さん、おどけ者の少年を中山達磨（のち福山葦陽高校教諭）さんが演じました。

後年、多地映一さんは顧みて、「印象的だったのは丸山英子さんの朗読。原文の朗読と現代語のナレーションの使い分けが見事で、それぞれに風格があり、聞き惚れるほどの語り手ぶりでした。ドラマ全体も原作の良さに助けられ、しみじみとした出来栄え。これならFK（NHK広島局）劇団のドラマに劣るまいと私どもは胸を張りました」と語っています。

同年4月22日から本格的に、ラジオ中国から10分ものミニ連続放送劇がスタートします。この担当も田頭さん、脚本も多地さん、出演も劇団「あ

まがえる」、作品は有名な「山椒大夫」が選ばれました。この作品だけは奇跡的に、第一回の放送台本と番組のカセットの録音テープとが私の手元に残っています。語り手は、広島カープの実況放送で有名な山中善和アナでした。この番組で厨子王役を貰って私は、劇団の先輩で後年、RCCのアナウンサーとなった桐原正文氏から、演技というものの神髄を教えられたことが忘れられません。ドラマの山場といえる海辺の場面。

盲目の老婆が筵に座ったまま「安寿、恋しやホウヤレホウ、厨子王恋しやホウヤレホウ」と歌うがごとき節回しで鳥追いをする姿を目にします。永らく探し求めていた母の老いたる姿でした。それと気づいた厨子王は、声を掛けようと近づくのです。「母上さま」…と。私はマイクの前で、思わず大きな声で叫びました。

「違う！」と、即座に私を止めたのは桐原さんでした。「永らく探し求めていた母の姿を遠くに認めたとき、君はどうするか。すぐに、しかも大声で母を呼ぶだろうか。違うだろう。遥かに見える臃げな姿を確かに母と見定め、しっかりと確認し、近寄り、やがて走り寄るだろう」

私は、はっと気づきました。そして、気づいたままに演じました。「よし」と桐原さんが微笑み、多地さんが頷きました。この瞬間、私は演技というものは、とはっきり学んだのでした。

昭和28年4月22日から、午後1時30分から40分までの10分間。ラジオ中国は自社制作したラジオドラマを放送しました。「たけくらべ」に始まり、「山椒大夫」、「チェーホフ短編集」、「ラジオ文庫」などが続きました。ラジオ中国の4坪（約13㎡）程のスタジオで、ラジオ中国の制作課員の演出で、ラジオ中国が制作したラジオドラマが連続して放送されました。出演は何れも劇団「あまがえる」でした。

そのころラジオ中国の部内では、山本満夫編成副部長と、制作課員の下川訓之、田頭和憲、福木基哲さんらが考えていました。「もうそろそろ、自前の劇団で放送劇が作れないものか」。4人の頭には、NHK広島局専属の放送劇団の存在が大きく場を占めておりました。

かくて昭和28年5月24日、観音町の送信所を中心とした試験場で、190人もの受験生を対象にラ

ジオ中国放送劇研究生の採用試験が実施されました。もちろん私ほか劇団「あまがえる」のメンバーほとんども受験しました。

同年5月29日、20人ほどが第一期のラジオ中国放送劇研究生の合格が発表され、新井俊彦と名乗っていた私も合格しました。これは同時に、広島民放ラジオ界で初めて放送劇を世に問うた、アマチュア放送劇団「あまがえる」の発展的解消の時でもありました。

採用した側のラジオ中国が、先ず放送劇研究会に与えた便宜は、流川の中国新聞社ビル内での施設を利用した研修を認めたことに始まります。3階のラジオ中国フロアでの空きスペースを利用した最初の顔合わせ、社員宿直室か屋上の新聞宿直室を利用しての研修会とドラマの稽古のほかは、事務コーナーでの台本印刷に必要な用紙とガリ版印刷機を使う自由くらいでしたかねえ。

研究会での勉強会指導者は、もっぱら芝居仲間か、伝手を頼って呼び寄せた広島出身の声優、杉田俊也さん一回だけでした。ただ、その間にラジオ中国のスタジオ関係者など、技術、編成など多くの社員諸氏と知り合えたことは多大の成果をもたらしたと思います。

そしてラジオ中国と劇団研究会は、大きな決断とともに一大冒険へと歩みを踏み出すのです。それは同年7月15日に始まりました。

ラジオ中国の自社制作、全13回ワンクール連続の放送劇が、一斉にスタートしたのです。なんと毎週月曜日から金曜日までのウィークデイ、午後7時15分からの15分間で、日曜日にも1本の、合計毎週6本の自社制作番組が一斉にスタートしたのです。

* * *

日曜日、題のない風景、長谷井杏平、田頭和憲
月曜日、ピカドン草物語り、坂本ひろし、滝口節夫

火曜日、母は太陽、田端展、福木基哲
水曜日、エデンの海、若杉慧、美濃綾子
木曜日、文藝ポスト、砧一平、田頭和憲
金曜日、芸備民話集、兼川晋、下川訓之、

(放送曜日、題名、作家名、演出家 or 脚色者)

* * *

日曜日から金曜日までの、木曜日だけが通常番

組で他の5本は何れも連続放送劇、という生まれたばかりの放送劇研究会と、ラジオ中国の若い演出家集団にとっては猛烈、且つ、過酷な活動が課せられるという、今では信じられぬ大冒険が始まった訳です。いかにラジオドラマ大好き人間の集団とは言え、超多忙なうえ、なんとすべて無給！何かお手当を戴いたという記憶、全く誰もナシ。

昔も今も、原稿というものが約束通りの期日に間に合った試しがない。だから原稿が届いたとなると研究生全員がワットばかりに原稿を奪い合い、直ちに手分けしてガリ版切りを開始。何人もの人物がガリ切りするのだから、上手も下手もない。ページ毎に字体が違うなど、そんなこと誰も気にしない。ガリ切りが終わったら、今度はガリ版印刷だ。これだって上手下手があって、文字が濃かったり薄かったりと出来が違う。これにも誰も文句ナシ、間に合いさえすればヨシ。刷り上がったら、またもや全員でページ毎に揃えてホチキスどめ作業の製本。完成したら全員が台本を引たくって、屋上の宿直室兼稽古場へと脱兎のごとく走る。待ち構えるラジオ中国制作課の演出者を囲み、読み合せから本読みと、超特急でのドラマ稽古という、即席栽培ラジオドラマ作法の風景でした。

新聞社の3階を占拠していたラジオ中国は、大部屋の片隅に4坪ほどの収録スタジオを備えており、仕切り壁は砂を詰め込んだ防音壁で、スタジオは完全な密閉空間で空調設備ナシ。アップライトピアノはあるけど、スタジオ内に宿泊設備が共存しているという奇妙で不思議なスタジオでした。聞けば、ラジオ中国児童合唱団という組織が存在しており、この狭いスタジオでコーラスを録音しレギュラーで放送しているというのです。「えらいこと、やっているなあ」というのが私の本音でした。夏場は氷柱1本で涼を取ろうという訳ですが、そんなことで涼しくなるはずがない。でも凄いい速さで氷柱が細くなるので調べたら、寄ってたかって誰かが氷を削って食べていた、とか。本当の話です。まさか後年、その合唱団を私が担当するようになるうとは、そのとき夢にも思いませんでした。

大部屋には多数の社員が、忙しそうに働いており、なかでも目立つ人物が居ました。蝶ネクタイに半ズボン姿。その人は有名な新兵器、デンスケ

携帯式小型録音機を肩に抱え、今にも走り出そうという態勢でした。報道の人だな、と思いました。のちの報道局長でした。

異様な姿の巨漢が目につきました。平気の平左のステテコ姿。「暑い、暑い」と口走りながら大部屋の中を右往左往していました。何をやるのだろう、と不思議でした。誰も文句を言わないのです。アナウンサーからプロデューサーへと転身した名物アナでした。

収録用のスタジオへ入ってみました。ムツとした暑さを感じました。トタン、スタジオ内にある宿泊設備の扉が開いて、「ああーっ、眠い眠い」の声もろとも、小柄なスポーツマンタイプの紳士が転がり落ちて来ました。ラジオ中国放送劇団ほかの専属芸能団を創設した中心人物、山本満夫編成副部長、その人でした。

その時期のラジオドラマ脚本作家は多士濟々でしたが、吉田文吾さんが、広島放送作家協会の会長でした。なかに長谷井杏平（のち杏亮）さんという珍しい名前の方が居ました。この方は実は広島師範学校の出身で、本名は菅原二郎さん。ラジオ制作課に所属している私を、早くから広島師範学校の新井教授の息子だと気づいていたようですが、私の方は全く知らず長いこと失礼を重ねておりました。のちに広島放送作家協会の会長となり、各放送局での脚本・構成活動や、若い作家の養成に尽力なされた方です。とりわけラジオ中国が放送劇に力を集中していた時期、放送作家仲間を率いてラジオ中国のドラマ脚本を一手に引き受けるという、広島の放送界で記録に残る活動を展開した作家です。私が高校時代に放送班でやってのけた、ラジオドラマの舞台上での公開放送と同じ手法で、長谷井先生の脚本「運転手君、ハンドルを切り給え」（45分ドラマ）が昭和28年9月27日、ラジオ中国開局1周年記念の「RCCフェスティバル公開録音大会」（児童文化会館）で公開放送されました。誕生したばかりのラジオ中国放送劇研究会が大挙して出演したステージ公開のラジオドラマは、その珍しさも手伝って、会場から拍手喝采を浴びました。演出はラジオ中国の田頭和憲さん。私は声優と音響効果担当の二役で出演しました。

舞台の上でマイクの前へ立って声優として台詞

をしゃべったと思ったトタン、今度は舞台奥へ下がって車のクラクション音を出すなど、音響効果係として動き回るなど忙しく自分の役割を演じながら、かつての日、附属の放送班で編み出した放送劇の公開放送という新機軸が、こうして正規の放送局でも採用されて実現した公開放送に参加しているのだと感激を味わいながら、往年の高校生だった時代の自分を思い返して感慨無量でした。

同年10月1日、ラジオ中国放送劇団が正式に発足しました。戴いた金一封が500円だったこと、専属劇団になった契約料なのか、これまでの苦勞への報奨金なのか、いずれにしても「たったこれだけ？」とは全員の驚きだったという明瞭な記憶が残っています。

この時期、劇団員は給料なるものを一切戴いておりません。不思議な現象ですが、全員がラジオ馬鹿で、芝居好きの集団だったのでしょね。社会人だった何人かは、途中で去って行きました。このとき放送劇研究会から名優数人が、ラジオ中国のアナウンサーへ転身して劇団を去って行きました。それがまた、のちの私にとって放送劇団員から入社試験を受けてラジオ中国の正社員へ転身しようとしたときに、良き先例として影響することになるのです。

やがて出演料という、謝礼金が戴けるようになりました。正式に放送劇団として認められ、そのメンバーには番組1本に出演するたびに出演料が出るようになったのでした。出演作品1本あたり出演する毎に出るのです。自然、出演回数がカウントされて謝礼金の総額に結びつくのですから、各人毎の戴く出演料の総額に差異が出始めます。謝礼金が戴けるようになってからと言うもの、劇団員のなかで金額と出演回数の差異が問題にされ始めます。初期のオールボランティア時代にはあり得なかった、率直な感情吐露が芽生え始めたのです。その当時は、会社にも給与体系そのものがありませんでした。

10月12日からは、先に名を挙げた作家の長谷井杏平さんによる30分物の連続放送劇「夢よ永久に」が、以後50回にわたる長寿番組としてスタートします。同時に私も放送劇団の声優として、また効果マンとして、二股かけて走り回るようになります。

このころ初めて、劇伴音楽というものが登場します。ちょうどこのころ、ラジオ中国が芸能団を組織して専属化するという態勢に入りました。

放送劇団の他に、サロンオーケストラという楽団が誕生し、もと戸山軍楽隊長だった佐藤正二郎さんを指揮者に迎えて発足しました。メンバーは第一、第二バイオリン、ビオラ、チェロ、コントラバス、クラリネット、サクソフォーン、ピアノ、ドラムスという9人編成の小型楽団でした。

ほかにも浅井拡さんが指揮する男女混声の大人の合唱団が誕生しておりますし、東正知、垣内稔君などの放送効果団まで生まれておりました。ラジオ中国としては、積極的な芸能番組活動へと舵を切った時期であります。

当時、毎週一回の定期的な30分ドラマ「テアトル広島」という、短発読み切り型ラジオドラマシリーズも登場しました。のちに「トリオ劇場」と銘打って京都、神戸の民放局と共に、放送劇の3局交換番組にまで発展。本格的な放送劇時代の到来です。劇中のブリッジやBGMなどのドラマの伴奏音楽も、作曲してサロンオーケストラに演奏して貰い、それを録音して劇中で使うという、放送劇にとっては素晴らしく贅沢なことが可能となったのです。凄い新時代の到来でした。

もう一つ、信じられないような事実を打ち明けましょう。民放ラジオは戦後の日本に誕生した新メディアですが、これはテープ録音の方式が実現して戦後の日本に怒濤の如く流れ込んだことで初めて可能になったものです。しかしラジオ中国が誕生した頃は、未だ録音テープなるものは貴重品でした。だから開局したばかりのラジオ中国も、録音テープは多量に持って居たものの、ほとんどが録音された番組をキー局から録音テープの形態で受け取って放送するという、テープネット番組の放送用に使われていました。

もちろん自社番組の制作用のテープもあったけど、相当に高価なものだから自由に使うことは出来ない。テープは簡単に切って繋ぐことが出来るのがメリットなんだけど、切ったら残りを捨ててはならぬ、との厳重なお達しが出たのです。普通なら平気で捨てるようなテープの切れっ端でも、30センチを超えたら、必ず専用の接着テープで繋いで使い回しました。そこまで録音テープを節約

せよ、と言うのなら仕方ない、原則として自社番組はテープ録音せず生放送で済ませよう、となりました。

その方針は、ラジオドラマの制作現場でも遵守されました。ラジオドラマという微妙で繊細な番組ではあっても、事前録音ではなくスタジオから生で放送せよ、ということで、これは大変でしたね。一度や二度じゃない、毎週放送している連続放送劇も、みな生放送だ、となっていたのですから。つまり、絶対にミスが許されないのです。ラジオドラマが、ですよ。うっかり役者が台詞を間違えることって、あるじゃないですか。そんな時どうするのか。実際の出来事ですが、「おい、君、山田君……だと思ったら、田中君だったなあ」なんて具合に迷優は、ミスを誤魔化して褒められた、との逸話が残っているほどです。それにしても現在のご時世では信じられない、ラジオドラマ全盛の時代でした。放送局側も、私たち出演者側も、それはそれは懸命にドラマに熱中しました。ラジオドラマ一辺倒の時代でした。

よく話を聞いてみると、広島での民放第1号のRCCラジオ中国は、創立期の新入社員50人の全員が素人だった模様です。しかし、勢いたるや相当なものでしたねえ。やる気満々で意気軒高。だから私たち外部からラジオ中国の番組に関わった連中のほとんどが、全くの無給でも嬉々として出入りしていたのですから。間違いなく私も、その中の一人でした。誰も教えてくれるような先達は居ないけど、民放ラジオのノウハウは己たちで開発しよう、これでしたね。禁止用語だけど、メクラ蛇に怖じず、かな。

教えてくれそうな人は、技術系には数人の先達がいました。主としてNHK出身者。ほかには電波監理局からの鎌原信さんなどか。NHKからの技術者で篠田紀彦さんは、偶然にも私と同じ附属の34回で、これまた偶然ですが附属での次女の恩師、箱田順子先生の実兄でした。後の取締役技術局長で、私がテレビ制作部時代の制作技術部長。つまり共に一緒にテレビスタジオで番組を作ったり、テレビ中継車で出動する場合も常に一緒、という間柄。さまざまな場面で教えを戴きました。そんな程度で、番組制作の実地指導者は自分だけ、なんて具合です。当時は業界の教科書、なんて有る

うはずもない。もし有ったら、恐らく日本中で引っ張りだこになっていたことでしょう。そんな有様でのスタートで、よくぞ敗戦から間もない混乱期を乗り越えて成長できたことよ、と不思議に思えてなりません。「ラジオなんて、空気を売るような会社のスポンサーになる気はない」と公言した、有名化粧品会社もあったような時代の話です。

では、実態はどうなんだ、と疑問が湧きます。これも不思議です。素人集団の集まりで、民放ラジオの番組編成とか、番組の作り方、録音の仕方、スタジオと建設方法、防音装置、録音機、マイクロフォン、なんて具体的なノウハウはどこから仕入れたのでしょうか。なによりも番組の作り方など、いったいどうしたんでしょう。今で言うコンテンツとか、番組の編成方針とかです。私が入りしていた時期に社員は50人ほどで、ラジオ制作課にも十数人が所属しておりました。前職は元警察官とか、学校の先生が多かったかな。それから元商社マンですね。海軍兵学校の最後の卒業生で震洋特攻隊の一員だったという人もおりました。警察官にはちょっとびっくりしましたが、つまり雑多な職業からの転身組が中心だったのですね。

あの当時、民間放送がスタートしたのは名古屋が最初です。名古屋のCBC中部日本放送が第一号で、それから大阪の新日本放送とか、九州のRKB毎日放送とか、ラジオ東京が誕生するのですが、民放第一号のCBC中部日本放送がスタートした時、有名な宣言を発するのです。

「民間放送として、NHKへ向けての敵前上陸である」

NHKが築いて来た王国を、われわれは民間の立場で築き直す。それだけの覚悟で、新日本を築くがごとく新しいラジオの世界、民間放送の世界を築き上げようではないかというのが、民間放送スタート時の理念でした。それぐらいの心構え、心意気を持ってスタートしているわけです。

しかし実際には、教える人が誰もいないから、みんな何をどうやったかいいのかわからない。仲間に尋ねたら「教科書があるじゃないか」と言う。なるほどNHKから毎日、放送電波が出ている。これが教科書だ。つまり反面教師じゃないけど、NHKの番組を教科書として勉強すれば良い、というわけです。NHKの真似みたいなものは嫌だ。

何か独自色を出したい。NHKには常に転勤という人事制度があります。広島でラジオドラマを作っているNHKの優れた人材も、2～3年したら東京かどこかへ行ってしまいます。我々民放ローカル人間には、原則として転勤がない。それでも東京支社とか大阪支社へ転勤することはありますが、大規模なNHK規模の転勤は考えられないし、いつかは本社へ帰って来られる。私などは遂に、1回も転勤がありませんでした。転勤させるだけの人材でなく、能力すらなかったのかも知れませんが、現場人間一本鎗のつもりだった私は、現場一本鎗と言う訳には行かなかったけど、定年退職まで遂に転勤なしで終わりましたね。

広島に生まれたラジオ局だから、広島でしか出来ないことをやろう。広島弁の番組や、被爆都市として原爆関連の番組は当然だ。などの論議があったらしく、今から考えると草創期のラジオ中国は、何とも凄いことをやってのけたと思うのですが、「ピカドン」という言葉を使って、子供向けのクイズをやっているのです、「ピカドンクイズ」。

○石田 それは入社何年目ぐらいのお話ですか。

○新井 入社以前の、昭和28年～29年です。

○石田 新入社員で、そういう提案されたんですか。

○新井 いえいえ、私が企画したのではなく聞いた話ですが、開局初期には、そういう番組があったという話です。私は学生の身分でしたが、ドラマ関係の人間だということで自由に出入りしていたから、自然に耳に入り聞き知っていました。

○石田 大学演劇部の頃になるわけですか。

○新井 正式に入社したところには、さすがに、その番組は消えていましたね。そういう調子で、開局した当座のラジオ中国には、何とかして広島らしいものを作ろうという熱気たるや、壮たるものがあったと思います。

もう一つの特徴は、「ラジオ中国の歌」を作って、毎日の放送開始時に流していたことでしょうか。なんと芥川也寸志さんの作曲です。凄い人選ですね。作詞は上田つよし。ペンネームだと思いますが、開局時の編成部長だった内田信夫さんか、元社長の内田一郎さんでしょうね。歌詞は「♪ランランラジオ中国は～」という調子の軽やかな歌です。ということは、テレビが始まったら使いものにな

らない。だから現在はお蔵入りです。芥川也寸志さんの名曲が消えるのは勿体ないし、今にしてラジオ時代を懐かしく思い出しているのですがね。勿体ないハナシですがねえ。

それから、ラジオには時報というものがあります。必ず「正時（しょうじ）」ないしは「正時（せいじ）」という言い方をします。6時、7時、8時。「ピ、ピ、ピ、ポーン」というのがNHK型です。最初、ラジオ中国には時報装置がありませんでした。どうやったかという、時効だし、社史にも載っている事実らしいので仕方ないでしょう。目の前に音叉か何かを置いておいて、イヤホンでNHKのラジオを聞きながら、例の「ピ、ピ、ピ、ポーン」と鳴った途端に、音叉をポーンと叩いたと聞きました。NHKの時報を盗み聞いての時報だったとか。間もなくセイコー社の優れた時報時計が入りましたが、それ以前の哀しき秘話ですねえ。

お粗末な話の連続ですが、最初の頃、アナウンサーがついついコールサインを間違えて、堂々と「J OFK」と言ったという逸話もあります。あの当時ラジオ中国は、「RCC」という略称をほとんど使っていませんでした。同じように、「NHK」という略称もほとんど使われていませんでした。当時の広島ではNHKのことを「FK」（エフ、ケイ）と呼んでいました。コールサインが「J OFK」だからです。だから当時はラジオ中国のことも「J OER」だから「ER」（イー、アール）と、市民も皆さんも、そういう呼び方をしていました。だから「FKさん」とか「ERさん」という言い方が世間に通用しており、そこから番組名を「ER算数」と呼ぶ番組が、初期のラジオ中国に生まれております。

○石田 マージャンか何かですか。

○新井 いえ、マージャンではありませんが、子ども向けの算数の問題集みたいなゲーム番組だったようです。クイズゲームみたいなことを先輩が始めたとき、「ERさん」という局への愛称から、語呂合わせで「ER算数」という番組名を考えたのでしょうか。私が入社した時には、既に消えていましたが、そんなのがあったようです。そのほか、広島型番組名として目につくのが、連続放送劇の「ピカドン草物語」です。ストレートな題名ですが、お話は戦災孤児の物語でした。

第6章 ラジオ中国への入社

ラジオ中国への入社

○新井 ラジオ中国の試験を受けるについては、父に山ほどの心配をかけてしまいました。学生時代から私はラジオ中国の人たちを多く知っていました。山本満夫副部長は大先輩でもあるし、入社試験を前にして「宜しく頼みます」くらいは言ったけど、入社試験がアナウンサー試験だけだと分かってからは、堂々と表側から工作しましたね。

だって私はアナウンサーになりたいわけじゃない。番組を作りたいのですから、会社の偉い人に勇気を鼓して頼み込みました。一応、アナウンサー試験は受けて合格しました。ただし二次試験の面接会場で、「私はアナウンサーよりも、いま人手が足りないと聞いている番組を作るディレクターとして仕事をさせてください」と発言し、当時の中国新聞社長でもあった山本実一社長をビックリ仰天させたいのですが、結果そのとおりになりました。私も正直なところ驚きました。なにせ、新入社員の暴言が聞き入れられたのですから。

山本社長は中国新聞の社長兼務だから、新入社員としての挨拶は、同時に入社した村岡芳行アナウンサーと二人で、中国新聞の山本社長の社長室まで行って、「ラジオ中国に本日入社しました」と挨拶したのを覚えています。

雨降りの中、ラジオ中国からキッチンと社用車に乗せて貰って流川の中国新聞本社まで行って、玄関から入って社長に挨拶をしました。ラジオ中国は昭和28年の暮れには、もう上柳町に自前の社屋が出来上がっておりました。だから私は学生時代に、中国新聞社の3階にあった草創期の時代と、上柳町に移転したラジオ中国の新放送会館との双方に出入りしておりました。

上柳町の新館から、シボレーだったかな、会社の車に乗せて貰って、雨の中を流川の中国新聞、今の三越の場所にあった中国新聞のビルへ向かいました。シボレーが到着した新聞ビルの前で、雨が降りしきるなかを走って新聞社の玄関に入り、そのままエレベーターで社長室まで行って入社挨拶をして帰りました。

すると、帰った直後に新聞社から電話がかかってきて、「今の新井、村岡の二人組は、泥足のま

まで社長室に入った」と叱られてね（笑）。靴跡がついていたんですかねえ。

○一同 ははは（笑）。

○新井 社長の秘書からクレームがきました。靴脱ぎは玄関にも、社長室の前にもあったはずだし、ちゃんと拭ったつもりなんだけど、泥足の跡が残ったんでしょうね。社長秘書から直ちにクレームが入ったというのが、私の新入社員としての失敗第1号です。かくて社会人になりました。

ラジオ中国入社直後の仕事

○新井 ラジオ中国に入社した昭和30年3月9日から、私は、たちまち子ども番組を担当せよと命じられました。

毎日の夕方放送の「子どもクラブ」というメインタイトルで、月曜日から金曜日までの15分番組です。曜日ごとにお話の時間があったり、子どもコーラスがあったり、児童向けの連続ドラマまでありました。前任者が開拓していたもので、子ども向けとはいえ、なかなか趣向を凝らした仕掛けがあって、若い女性作家がコンビでドラマを執筆しているなど、やりごたえのある番組群でした。子ども向け番組というけど、いったい夕方の時間帯に子どもたちは、本当にラジオを聴けるかなと思いながら担当していました。いろいろな種類の番組が並んでいる「子どもクラブ」というウィークデイ番組と、同じく夕方のウィークデイ番組の「学園放送」という学校巡りのような番組、この二つのウィークデイを占めた大枠が、二つ重なって、主たる子ども向け番組となっていました。



72. ラジオ中国（RCC）児童合唱団

さて、それら子ども向け番組を担当し始めた私は、次第に通常の真面目ではあるけど、NHKの教育番組みたいな内容では興味が湧かないな、と思い始めたのです。だいたいドラマ上がりと自認している人間ですから、だんだん欲気が出て来ます。それまで、「子どもクラブ」という枠内で、何をやっても構わないという自由さがある番組の中で、既に会社は放送児童合唱団を抱えていたので、子どもたちによる合唱番組を流している。それから大人のラジオ中国放送合唱団という組織も抱えていましたから、その放送合唱団で混声合唱による童謡、唱歌なども流していました。

「児童合唱団」を引き継ぐ

○新井 驚くべきことに、私がラジオ中国に出入りし始めていた昭和28年初めには、既に立派な児童合唱団が存在しており、毎週夕方の定時番組で、童謡から唱歌までの幅広いレパートリーを披露しておりました。指揮者の寺西敏雄先生の功績と聞きました。

担当は小畑さんだったのか、もしかすると早くも下川訓之さん並みに、早々とRCCに潜り込んでいた人物がお世話していたのでしょうか。入社前の学生には見当もつきませんでした。確かに正規の児童合唱団としてRCCに存在しておりました。小学校2年生～中学校3年生くらいまでの、20～30人ほどは居たと思います。

指揮者は寺西敏雄先生、ピアノ伴奏は北千枝子先生。お世話係は、と見渡しましたが存在していない気配。団員のお兄ちゃんとお姉ちゃんが保護者宜しく面倒を見ている模様でした。その中に見知った少年が居ました。新藤兼人監督の「原爆の子」に現地出演者として台詞のある大切な役を演じていた松井輝夫君です。エキストラ出演していた私が顔を知っていたのには理由があります、彼は皆実高校の生徒で、私の弟の級友で、同じ合唱団のメンバーだと知っていました。その合唱団名は、「北千枝子会合唱団」。そうです、ラジオ中国児童合唱団のピアニストの北先生その人が、皆実高校の音楽教師でもあったのです。

もう一人、後日、彼女の兄の名を教えられて仰天する少女が居ました。彼女の名前の方を失念しているので、初めから謎を解いておきましょう。



73. 寺西・北両先生と打ち合わせする私

兄の名は才木幹夫。当時はNHK放送合唱団のバリトン歌手として活躍中でした。そして後日、ラジオ中国がテレビ放送を開始するに際し、音楽学校出身者の音楽専門家としてRCCが引き抜き、私の部下として入社して来た才木君の妹でした。

【追記：令和3（2021）年の夏、才木幹夫さん本人と電話で話し合うチャンスがあった折、彼から、RCCへの入社人材引き抜きのような形ではなく、正規の入社試験を受けての入社だった、との発言があったことを補足しておきます。】

正式に入社した私は、まず手始めに児童番組の担当を命じられました。そこで初めて「子どもクラブ」という毎日夕方放送の15分ベルト番組の名を知り、曜日ごとの番組内容を知り、初めて児童合唱団の責任者代表の寺西敏雄先生を紹介されて知りました。傍らには北千枝子先生も控えていらっしゃいました。松井君の存在を知ったのは、その直後のことでした。

他には若い女性作家二人が交互に執筆している現代の童話のような物語の番組、児童向けの読書会みたいな番組など、結構、担当者の手を煩わせる番組が多いなと感じたもので、これは何とかしないと、と考え始めたことを強く記憶に残っています。

重要な事実を語り残しました。児童番組は、他にも「学園放送」と言うタイトルで各学校を訪ねて学校訪問のリポート番組があることはお伝えしました。それらの番組担当の引継ぎが行われ、私の前任者が出現しました。再び私は仰天した次第

です。ラジオ制作課の為末裕敏主任（プロスポーツ選手、為末大君の祖父）と共に現れたのが、予想もしていなかった附属の先輩、田村順一さんだったからです。広島大学演劇研究会からラジオ中国に入ったのは、制作課の下川訓之さんと桐原正文アナだけとっていたからです。田村さんが言いました。

「山チョウさんから、かねて制作課に人手が足りないので手伝ってくれと頼まれていて、少し前から児童番組を担当していた。新井君が入社すると聞いたので番組を君に引き継ぎ、私は上京して作家生活に入るつもりだ。あとを宜しく頼むよ」

驚きながらも納得していました。実は少しの期間上京していて東映か何処で、実際に映画監督を目指していたはずなのですが、上京して放送作家へ転身したい、舞台劇も書きたい、と前々から聞いていたからです。それがまさか、私のラジオ中国入社を期して実現の方向へ展開するとは思ってもしなかったからです。こうして「子どもクラブ」を担当することとなり、かねて存在を知って驚いても居た児童合唱団を担当して、毎週一回は、北先生のピアノ伴奏で「仲良しコーラス」として録音し放送するようになります。実際に担当してまたまたびっくりしました。児童合唱団と言えば、揃って高い澄み切った声が、聴く耳に刺さって来るように聞こえて来るものだと先入観がありました。それが全く裏切られたのです。この児童合唱団は全く違った合唱団でした。

これは指揮者であり指導者である、寺西先生の新しい児童合唱理論によるものです。発声法が根本からして一般の児童合唱団とは異なっているのです。寺西理論では、児童の合唱時の発声法は地声ではなく、頭声発声と言って、いわば頭のテッペンから声を出すように柔らかく、しなやかに声を出すべきだ、というのです。裏声に近い発声法と私には聞こえませんでした。それが十数人纏まって合唱となって聞こえて来るならば、まさに天使の歌声の如く美しくも澄み切った合唱が聞こえて来るはずだというのです。

昭和27年から28年の、ラジオ前世紀時代の話として聞いていて驚く事ばかりでしたが、古い時代の狭い8畳ほどのスタジオで、ピアノも響くし、子どもたちのブレス音も響くような環境の中で、

良くぞ収録出来たものだと、あとから私は驚くとともに感心したものです。マイクも当時流行のAベロでは、感度が敏感過ぎるし双指向性だからダメ。ダイナミックの77DXだったのかな、639Bかぼちゃマイクだったかな。それとも当時、早くもEベロが出来ていたのだろうか。

昭和28年9月、上柳町に新館が完成してからの録音方式でも、ピアノ用とコーラス用に普通、マイクは2本使います。当時は合唱もワンポイント收音方式です。合唱団の集団の頭のうえにマイク1本だけが、吊り下げられている状態です。

私が担当するようになってからも、ピアノの鍵盤の音とコーラスとの音のバランスが最悪。北先生のピアノもタッチが強いのですが、コーラス側も例の頭声発声ですから、例えて言えば、蚊の集団とピアノとが、音の競争をしているが如き状態なのです。全くバランスが取れないどころか、コーラスそのものが收音できないのです。

合唱団は頭上のマイク1本だけで音を拾うのです。コーラスにエコーを付けろ？ そんなこと考えるだけ無駄。出来っこない時代の注文ですから完全無視されていましたねえ。（後から考えたら、初期からKP2録音機は使っていたのだから、録音ヘッドと再生ヘッドの位置ずれを利用して電子的にエコーが可能だったはずですが…）それでも何とか録音できたのだから不思議。よほど耳の良い技術者とマイクのお陰でしょう。

あの当時、狭い仮設スタジオ内で重いアップライトピアノを大人数で、少しずつ片側から動かす方法で移動させたり、団子状態の子どもたちを宥めたり、暑い夏なら氷柱を新品に取り換えたりと、



74. 上柳町に完成した放送会館

児童番組の担当者は、子どもたちのお世話が大変だったはずですが。

新館の広いスタジオになってからも、同じようなことが毎週続くのです、理由は簡単ながら、正直なところ腹が立つのですが、交代勤務だから毎回の録音技術担当者が違ってしまいますのです。やり方も違ってしまふ。「先週、苦勞を重ねて収録に成功したのに」と叫びたくなるどころです。

私が入社したのは、スタジオ機能も改善、充実、新装なった新放送会館時代でしたが、そこでも人員の配置方法は似たようなものでした。こうなると毎回変わらず担当している私の方が詳しくなつて、遂には、ああしろ、こうしろ、と指示し始めてから、シマッタと気づきます。

技術者をミキサーと呼ぶのですが、交代勤務の彼らにもミキサーとしての意地と誇りがあります。それを新人ディレクターの私が口を挟むとは何事ぞ、と怒りを買うことになるじゃないですか。それからというもの、古参ミキサー氏には一切の指示を出さず、少々意見の挟むだけにしました。でも田中通俊君みたいな、劇団時代からのドラマ収録で顔見知りどころか同輩の仲間になった男には、あからさまに文句をつけましたね。こればかりは経験が物を言うから。

ここで詳細を報告しますが、昭和32年4月21日。この一見、異様とも思える頭声発声での児童合唱が、全国民放界の番組コンクールで最高賞の金賞を受賞するのです。

全く期待もしていないし、コーラスだけで、私が少しばかり番組らしいコメントを付け加えたことと、画期的なエコー実験をやったのけたのですが、ミキサーの武藤昭三君と田中通俊君が開発した、例の録音機K P 2の録音ヘッドと再生ヘッドの間隔の差を利用した、電子的エコー発生法を初めて採用したことが決め手でした。(現在では、音響へのエコーはすべて、この方式を採用しています。)

だから、これには自信がありました。児童30人が歌うコーラス(審査員が、とても30人もの合唱団員が居るとは思えないと驚嘆 or 批判の言葉を残していますが)に、深く清らかな電子エコーを付けたのです。

コーラスそのものの出来も抜群でした。北欧の

子どもたちの合唱曲集として特集したのですが、「ヒバリのラーク」、「メトロノームの発明者、メルツェルさん」という2曲の無伴奏合唱曲が、そのなかでも目玉でした。頭声発声の澄明さで統一された子どもたちの声が、清らかに遙かに凍った北欧の平野を遠く流れて行くように感じられて「ヒバリのラーク」先ず一点を取りました。

次いで、「メルツェルさん」に至っては、寺西先生のメトロノームの如き正確無比な指揮棒のもと、子どもたちの声がヒトツになって、時を刻むカチカチカチという音を表現する、「タッタタッタ」スタッカートでリズムを刻む歌声が、深い深いエコーを引いて、更にリズムが正確無比に刻まれて行く至芸とも言えるコーラスで、音声と音響との両面で審査員全員の心を魅了したのだそうです。

金賞獲得でした。朗報を聞いた武藤ミキサーと私は、思わず抱き合つて「やったぞ」と成功を祝つたものでした。武藤君は、それから間もなくして心臓疾患のため世を去りました。真新しい広いスタジオで収録した子どもたちのコーラス。頭上から吊るしたコンデンサーマイク1本で30人の声を収録しました。針が落ちて聞こえるほどの静けさというけど、新放送会館の広い第1スタジオで、スタジオ自体のホールトーンも気になるほど神経を集中させての収録。よくまあ、バランスよく子どもたちの声が拾えたものよ。

それに輪を掛けるぐらいの細心の注意を払つて使用した、録音機K P 2×2台を組み上げての、録音ヘッドで収録しながら即座に再生ヘッドで再生し、その再生音を更にまた即座に収録する。またそれが再生されるのを直ちに収録して……原子力の世界で原子分裂が臨界に達した無限反応の如く、子どもたちの声が録音機からスピーカーを通して永遠に続いて行くが如く聞こえて来ます。ここでの再生音を即座に収録して再び再生する間隔は、技術者の微妙な手心で操作しないと、無限反応の失敗の如く、音声が一瞬とハウリング現象を起こすのですから神業と言える技術です。

どの音も、どの声も「ヒバリのラーク」。揃つて清らで澄明なエコーを引いて聞こえて来ます。聞こえて来て、そのまま、また遙か彼方の北欧の氷原へとエコーが流れて行き、微かになって消え

て行くように思えるのです。音の幻影か、とすら思えました。

「メルツェルさん」というメトロノームの発明者を表現した曲では、メトロノームの音を模したリズムの均一な刻みが、「タッタッタッタ」とノイズも擦過音も聞こえず、澄んで清らかさをも感じさせる子どもたちの声が、正確に左右に振れる振り子のごとく、精密機械の如く、正確無比に音のリズムを刻むスタッカート。その全体が絹のヴェールでふんわりと覆われたように、綺麗なエコーがスッポリ掛かっているのです。

機材の性能からして、エコーの掛けかたに、微妙な手心を加えることが絶対の条件です。少しでも間隔を狭めたり、広げたりし過ぎるとダメ。手心は猛烈に微妙なのです。ほんの少し間違えただけで、音が刻まれたまま尾を引いて、何時までも拡大方向で音を刻んで、遂にはピーーンとハウリングを起こしてしまうのです。分かって戴けるでしょうか。

そのすべてで成功した結果が、ラジオ中国児童合唱団の「仲良しコーラス」金賞獲得となったのです。功労者は言うまでもなく児童合唱団ですが、それをラジオ番組として録音に成功したのは、ひとえに武藤ミキサーの苦心のミクシング、手腕と感覚です。受賞の歓喜の祝宴から間もなく逝った彼の御霊に、心からの感謝を捧げたいと思います。

「新井幼稚園の創設」～児童劇団～

○新井 大人の、ラジオ中国放送劇団は、昭和28年秋から存在しておりましたが、私が入社した昭和30年には、子どもには歌を歌って貰って番組に出て戴く、という常識でオシマイ。子どもたちに番組に出て貰う、という発想も必要性も無かったようです。毎日の夕方、子ども向け番組を二階建てで並べよう、というときに、「子どもクラブ」のコーラスなら子どもの声が聞こえるのは当たり前ですが、そのほかの児童向け番組では、アナウンサーなど大人の声は聞こえても、可愛い子どもの声が全く聞こえて来ないのは如何なものか、という議論が始まったのです。子ども向け番組に、小父さんや小母さん、お兄ちゃんやお姉ちゃんが出て来ても、子どもが出たと聞いた事がない。ちっとも子ども向け番組とは言えないぞと思いました。

どこからか上手なチビッコ声優を探して来ようと思いましたが、どこの世界でも、先ずは言い出しっぺが手を付けるもの、と決まっています。私は決めました。直ちに子どもの劇団員を募集して、お芝居好きの可愛いチビッコ声優として、優秀な子役たちを揃え「ラジオ中国放送児童劇団」を結成しようと思いましたが。

入社したばかりの、昭和30年春のことでした。しかもこれは、すべて内緒に計画して実行に移しました。正式に会社の許可を得て、などと呑気なこと言ったら、何処からか必ず邪魔が入って駄目になるに決まっています。それなら即効性のある自己流の方法で実行しよう。私設の児童劇団でも構わんじゃないか。子どもたち相手だから専属料など支給できないし、出演のたびに出演記念品とお礼の図書券を贈呈しよう。番組収録が遅れて夜になるようなら、必ずタクシーで送迎すれば安全確保できる。ご家族にはちゃんと事前挨拶が必要。

ここまで内輪で決めて置いて、あとは近場の広島市内を走り回って探そうとなりました。ラジオで告知などしなかったのに不思議でした。何処から漏れたのか、先ず社内の偉いさんから「うちの子を使ってみないか」との内緒話が続出。社員仲間からも推薦者が続き、意外に早く10人ほどの小学校2年生～5年生の男女児童が集まりました。

いちおう試験をしました。全員採用と、既に心に決めていたのですが、10人揃っての集団採用試験をやりました。声優募集ではあるけど、子どもたちの役者としての才能を調べたのです。集団で遊ばせ、同じセリフを全員で稽古してから、集団でテストしました。試験官は私だけ。即決で選び、意外にも全員が役者としての才能あり、と判定で



75. 川岸でおケイコ

きたのです。表情豊かで感性豊かな子が3人、少し教えれば大丈夫なのが5人、あとの子は遊んでいるうちに慣れて来たら大丈夫と判定しました。かくて勝手にラジオ中国放送児童劇団を結成し、児童劇団の一期生10人が選ばれ、私が団長となり、ここに通称「新井幼稚園」が誕生したものです。

児童劇団の宿命ですが、年齢を加えて上級生になることと、家族の転居などで次々にメンバーが変わります。次々に卒業して行き、次々に新人が入団して来て、延べ人数は増えるばかり。のちに児童劇団OB会なる組織も生まれ、数回のOB会も開催するに至った次第です。

子役登場となってから、「子どもクラブ」にドラマタイズされた番組が急増しました。連続こども放送劇「赤毛の耕吉」などという瀬戸内海の島を舞台にした少年物語や、広島に伝わる民話を児童合唱団のコーラスを軸に民話劇の子ども版みたいに構成した音楽劇、民謡ならぬ昔の童歌シリーズ、日本と世界の童謡と民謡集、などの子ども向け番組を、「学園放送」という学園巡りシリーズと共に、毎日2本ずつで月曜日から金曜日までの、ウィークデイ連続の子ども向け番組の放送を続けたものです。

「子どもクラブ」という、夕方のシリーズ番組の枠は自由な構成が許されていたので、入社して最初の原爆忌特集番組として、原爆孤児を収容して有名な似島学園を題材に、「少年の島」として、ドキュメンタリードラマを取材し構成して放送しました。通常のNHKなどとは違う手法を採りました。普通ドラマというのは、たいていナレーションが入って、場面転換をして、出演者・演技者がドラマを続けていくのですが、私は一切ナレーションを使わない。本物の原爆孤児たちの回想の言葉を録音して、俺はこうだった、ああだったと語って貰い、それをナレーション代わりに使って場面転換をして行く。演技は児童劇団の子どもたちと大人の劇団員たちが演ずる、という手法をとりました。そののち私は、半ばドキュメンタリー、半ばドラマみたいな、いうならばセミドキュメンタリー風の子どもの番組を続けて作るようになりました。

その最初が、被爆10年目の1955年、昭和30年。入社して初めての原爆忌に「子どもクラブ」枠で

制作したセミドキュメンタリー番組の笈浩二作「僕は泣かない」は、ラジオ東京、南日本放送、日本短波放送にもネット放送されました。内容は笈浩二君（41回で、被爆・転校・留年し再会した私の級友で座付き劇作家、本名、懸川高治）作の「疎開物語」シリーズの一環で、集団疎開中に原爆で両親を失った児童が強く生きて行くなかで、級友から励ましや恩師との心の触れ合いを描いた作品で、それから「お山の杉の子」、「少年の島」。幻想的な原爆物少女ドラマとしては、「玲子となすびと夢」など、続けざまに毎年8月6日を中心に、子ども向けの原爆特集ドラマ番組を作りました。これらの作品には、マイク取材を受けたご本人の他、おとなの劇団員に交じって子どもたちが名演技を披露しています。それらの録音テープは、先にお話したように、高価なテープは使い回しと言って、何回も使えるので他の番組用に使われてしまい、残って居りません。例え残っていたとしても、資料を保存せねばならない、との観念を持っていなかった初期ラジオ中国の姿勢では、永久保存のマーク入りでも残っていないのですから。

昭和30年代の初期に活躍した児童たちは……、松岡淳一郎（チビッコ声優、男児第1号、昭和30年6月9日、川本禎子作「子どもクラブ・お話“時計とネズミ”」、酒井智子（チビッコ声優、女児第1号、昭和30年9月15日、川本禎子作「僕らの島②～魚籠が盗られたの巻」）、奥田耕造（男児第2号、昭和30年9月5日、笈浩二作「イタズラ三銃士①～魚釣りの巻」）、蜂谷修一（大人）、木下直輝、世良秀隆、大村喜則、富田一也。

ドラマ最盛期からテレビ時代にかけては……、堤謙、北村知康、村上正、的場克彦、武市亘雄、



76. 公開録音「イタズラ三銃士」

兒玉（垣内田）秀子、安井（北村）真知子、吉川（中野）泰子、白石美智子、織田（中川）正子、高山（矢野）光代（故人）、吉田（佐古）喜代子、常定（並河）一葉、吉津啓子、大塚裕子、大塚順子、河合洋子、喜多洋子（故人）、柳沢陽子（一ノ瀬レナ）、三光清子、淡海雪子。リーダーは劇団員の上田修君でした。

稽古中にくたびれて、スタジオ内のシュタインウェイピアノの下に潜り込んで遊んでいて眠ってしまったり、録音が遅くなってしまい、タクシーで自宅に送り届けようと走り始めたら、黄金山の新開発団地だったためタクシーもろとも迷いながら登って行き、半分眠ってしまった女の子を自宅に送り届けたらお母さんが出て来て、「こんな分かり難い山の上まで送って戴いて済みません、さあ上がってお茶でもどうぞ」と、しきりにお招きを戴いたこともあります。もちろん丁寧に、お招きはお断りいたしましたけどね。

お稽古に斬新な実感訓練なる手法を取り入れ、「集団の中に問題児が居て、何かとことを起こし争いになるが協力してみんなで話し合う」という「スタニスラフスキー張りの訓練」を開始したら、何と本物の喧嘩になってしまいました。児童劇団の中に感受性の鋭い子が何人も居ました。だからポイと問題を投げたら、それがたちまち刺激となって子どもたちのなかにある強烈な競争心を煽ってしまったのです。「やり過ぎた」と即反省し場を取りなしました。

新劇や映画の名優たちが述べています。「上手な子役と動物が出演すると、私たち大人は完全に喰われてしまう」～名子役と名犬の自然で巧みな演技（？）には、如何なる名優と言えども勝負にならないとか。

児童劇団の子役たちを指導する私は、いわゆる「口写し演技」は絶対にやりませんでした。先ず大人が演じて見せ、そのまま、そっくり子役に真似して演じさせる演技指導方法です。一応の成果は望めても、その子役は伸びません。何時までも人まね演技で終わるし、誰かが演じて見せねば自分では演じられない、と言うタイプに育つから。

子どもたちに言ったのは、ただ、「こんな場合はどんなことを思うだろう、どんなことするだろう。なんて言うだろう」～と必ず子どもたちに考

えさせ、考えた末に出て来た演技を自分で自然に行うという「真実の感情と真実から生まれる自然な演技」を求めて指導しました。「例えば、ねえ」と、類似の演技を示して誘導することは有りましたが、人まね演技だけは絶対に許しませんでした。児童劇団のメンバーは年と共に変わって行きましたが、嬉しいことに、それぞれみんな「名子役」に育ちました。ラジオドラマだけではなく、テレビドキュメンタリー番組での場面点景人物としての出演や、映画のロケでエキストラ出演など多彩な活躍をしてくれ、私が演出したテレビドラマ「さがす」の主役の少女、「お母さんシリーズ、みかん」の準主役の少女など、それぞれ名演技で大人の俳優たちを喰っておりました。私の自慢の子役たちで、冠高原でのキャンプや私の自宅でのクリスマス会など、今なお懐かしい思い出の多いグループです。同じような子どもたちで結成されている児童合唱団や、ジュニアオーケストラとの交流も多く、互いに仲良しグループを作って、大人になっても交流を続けている模様です。園長さんの私としては、それぞれみな私に関わった子どもたちの団体だし、嬉しい挿話として受け取っております。

ラジオ草創期に話を戻します。

録音構成といって、被爆者の方々を取材しての、正攻法のドキュメンタリー形式の原爆特集番組も何本か作りました。

現在、NHKは「ノーナレ」と銘打って、大昔の私が使った手法と似たような手法の番組を、PRスポットで「新しい趣向の番組」として大々的に宣伝しながら放送し始めています。

でも私が用いた手法は、ナレーションとしては



77. 飯盒炊さんが楽しかった「冠高原キャンプ」

すべて本人の声の録音を使う。つまり、本人の語った言葉（内容）によって、ナレーション代わりに物語を進行させ、アナによる語りは廃止しました。その代わりドラマとして伝えねばならない物語性の強い部分だけを、劇団員の演技に任せるという手法です。この手法を私は、ドキュメンタリードラマと銘打って何度か用いました。大事なことは、録音された主人公の音声が明瞭に聞き取れることでしょう。それがダメなら、番組として成り立ちませんから。主として昭和30年代初期の、ラジオ番組でのチャレンジでした。

「広島ジュニアオーケストラ」

○新井 私が独断で事を進めたのに、もう一件、別の団体の設立があります。その設立を裏支えた子どもたちの団体は、児童劇団とほぼ同時期、子どもたちだけ4人による初期の楽団、「仲良しグリーンアンサンブル」があります。これがのちに見事、花咲いて「広島ジュニアオーケストラ」となるのです。

入社して間もない昭和30年の夏ごろ、町野アナウンサーの知人として紹介された、一人のユニークな若い音楽の先生。広島大学音楽部の打楽器科卒業の山口和彦先生。その人と出会っていなかったら、私の進む道程は可成り変わって行ったことでしょう。山口先生は当時、備後府中町（現、府中市）の中学校の音楽教師で、既に中学生によるミニオーケストラを結成して演奏活動を続けていました。そのころ福山市郊外の神辺町出身で天才的な木琴演奏で名を馳せていた卜部茂子という少女を預かり、他に3人の少女を加えた4人だけの小さな子ども楽団を作り上げ、全員の音楽性を伸



78. 山口和彦指揮の広島ジュニアオーケストラ

ばすべく懸命な努力を開始したところでした。

「子どもクラブ」と言う15分のベルト番組に、この山口和彦先生率いる子どもたち4人だけの「仲良しグリーンアンサンブル」で、懐かしの童謡・唱歌を中心にした曲を集めて演奏する、「子ども音楽会」という番組をスタートさせたのが昭和30年秋のことだったと記憶します。

以後の活動と言うか楽団の急速な発展ぶりは、まさしく私と山口和彦先生との合作と言って良いでしょう。最初は4人の子どもたちが集まって、木琴とピアノとオルガン（のちのエレクトーンの前身といえる「電子オルガン」という新兵器が早くもラジオ中国に備わっていたのです）、フルートもあったかな、それにバイオリンも加わって来るのですが、山口先生を慕って遠方から通う、小学校2年生の卜部茂子ちゃんは、中でも目立った存在でした。すぐに、「茂ちゃん」との愛称と共に、スタッフ全員のアイドルになりました。でも小さな少女が、自宅のある福山市郊外の神辺町から広島市まで、録音のため列車で通って来るのは大変な努力を必要としておりました。疲れ切って、スタジオ内で眠り込んでいる茂ちゃんの姿は、可愛いと言うより可哀そうでしたねえ。

とても小さな子どもとは思えない、卜部茂子ちゃんによる木琴の名演奏ぶり。ラジオ中国の番組から登場した「仲良しグリーンアンサンブル」は、茂ちゃんを中心に、順調に成長して行きました。それに、現在なら、すぐにエレクトーンと言うところでしょうが、少し時代が早いので、RCが特別に入れていた電子オルガンが現代のエレクトーン並みに、 Hammondオルガンからピアノ風音域までの、広い幅の楽器として活躍できたのです。

でも電子楽器だけあって、調整が難しい。そこで登場するのが小崎潔技術部副部長さん。ご本人も楽器演奏が出来るという音楽好きなミキサーさんですから、電子オルガンの裏ブタを開けて、やおら取り出したドライバーで楽器の中の電子部品を微調整し始めるのです。開発され登場したばかりの新兵器です。ピッチ、音程、音質などが小崎さんの耳と腕によって微妙に調整されたうえで、「はい、出来たよ、使っていいよ」との小崎さんの声と共に、演奏を担当する少女が楽器に飛びつ

いて来ます。その様子を傍らで小崎さんが、優しい微笑をたたえた目で見つめている姿。今でも目に浮かんで来ます。大人も子どもも仲良しでした。

やがてバイオリンも加わり、「仲良しグリーンアンサンブル」と名乗ってラジオの「子どもクラブ」に登場し、懐かしい小学唱歌や童謡を演奏する小さな「子ども音楽会」番組が流れ始めて間もなく、急速に楽団自体が変化し始めるのです。

山口和彦先生にとっては、常在音楽塾だったのでしょうか。どこからともなく先生を慕って集まって来る子どもたちに、友人でコントラバス奏者の野田耕右さんなど幾人もの音楽仲間も引きずり込んで演奏家速成栽培を始めていたとしか思えません。集まってくる子が、みな、あつという間に上手になるし、逆にまた、上手な子が次々に集まって来るのです。傍で見ていると驚嘆しましたねえ。不思議な「子どもオーケストラ誕生風景」でした。

ラジオ中国の児童向け番組「子どもクラブ」は、児童合唱団のコーラスに加えて「仲良しグリーンアンサンブル演奏会」が登場してからというもの、児童向け番組ゾーンは次第に音楽色を強めておりました。番組は一挙に賑やかになって来ました。ささやかな子ども楽団だった「仲良しグリーンアンサンブル」も、あつという間に楽団員が増えてバイオリンやビオラ、チェロ、コントラバス、フルート、オーボエ、トランペット等々、もはやアンサンブルじゃなくオーケストラの雰囲気を用意する少年少女音楽団へと急成長して行きました。見守っている私が驚き呆れるほど早く上手になり、メンバーも増えたのです。

そのうち山口先生ご自身も、大学の音楽学科のある福山から広島市郊外の向原高校へと転勤となり移って来ました。ちょうどその時期と、楽団の充実期とがピタリ一致しているように思えてなりません。

その向原高校には実はもう一人、ユニークな英語の名物先生が居りました。なんと私と一緒に学生演劇で活動していた、劇団「あまがえる」でも一緒だった中山行孝（芸名、中山達磨）先生が、演劇部顧問で活動を続けていらしたのです。偶然の会同ですが、私を含めて3人が、偶然ながら突如、同じ土俵に上がって来たような心地でした。



79. 鰐淵晴子さんをゲストに「お正月子供大会」

話題となった昭和32年1月2日に付いて、お話を致しましょう。実は入社したトタン私には、毎年正月2日、常連番組の「お正月こども大会」という1時間枠の家族向け公開生放送番組の担当が命じられておりました。

担当になって最初の年、昭和31年1月は幟町小学校の講堂から、設立したばかりの児童劇団の名子役たちに劇団R C Cの大人の役者たちが混合出演し、指揮の寺西敏雄先生書おろしの音楽物語を、児童合唱団と共演して好評を戴いておりました。

昭和32年1月～今度は2年目です。目玉には何を……と考えているとき山口先生が現れ、映画「のんちゃん雲に乗る」の主演女優で有名な鰐淵晴子さんと妹の朗子さんを招いて、広島の子どもオーケストラとの共演で、メンデルスゾーンのバイオリンコンチェルトを演奏しないか、と持ち掛けて来たのです。聞けば伝手があって父の鰐淵賢舟先生とは旧知の間柄だとか。驚くとともに、そこまでの自信が持てるまで成長した子どもオケを、この新年恒例のラジオ公開放送の場で公表し、楽団名も新たに「広島ジュニアオーケストラ」と名乗って登場させ、子どもオーケストラと鰐淵晴子さんのバイオリンとの共演ぶりを、お正月特別番組で大々的に披露しようと思いを決めたのです。

すぐさま上京して東京の鰐淵家を訪ね、母親のベルタ夫人とも挨拶を交わして出演を願いました。即座の応諾で、元日からご家族全員揃って広島へ行くこと仰って下さいました。昭和31年の半ばごろから準備に取り掛かりましたが、あれよ、あれよという間にジュニアオケへの参加者が増え、2管編成でコントラバス4本という本格的なオーケストラの姿を整え、楽団員も50人規模へと成長

しておりました。

お正月が来ました。会場の児童文化会館はお正月らしく着飾った家族連れで満席。舞台の上には誕生2年目とは思えぬ堂々とした構えの子どもオーケストラがズラリと勢揃い。ステージも華やかに飾り付けてある「お正月こども大会」の大看板と花咲き乱れる雛壇を埋める児童合唱団と児童劇団の子どもたち。ファンファーレと共に司会のアナウンサーが登場して番組の開始を告げます。時報が正午を報じ、生放送が始まりました。中央ゲートからは鰐淵晴子、朗子姉妹が並んで登場し、指揮者山口和彦先生の指揮棒が一閃。メンデルスゾーンのバイオリンコンチェルトが始まったのです。この演奏を山場として、会場の子どもたちと鰐淵姉妹との楽しい触れ合いが続く「お正月こども大会」は、お正月の賑わいを漂わせながら華やかに、そして盛会裏に幕を閉じました。

一番心配していた私の懸念。ちゃんと鰐淵晴子さんのバイオリン演奏を盛り上げる程の演奏力を子どもたちのオーケストラが示しただろうか、という心配はどこかへ吹っ飛んでおりました。お世辞抜きに「広島ジュニアオーケストラ」は立派な演奏を会場いっぱい響かせて、沢山の子どもと大人から、いっぱいの拍手を浴びておりました。

それからほどなく、でした。NTV日本テレビからRCCに連絡が入って来たのです。山口和彦先生が、いつの間にか書きためて出版していた自叙伝「わが歌は高原に」をテレビ映画化したい。ついてはRCC関連部分のロケなどで、ご協力を戴きたいとの申し入れでした。会社は快諾しました。ということは、私が忙しくなるということでは



80. フルオーケでの演奏会
(昭和42年)

した。

昭和38年秋、ロケ隊が乗り込んで来て、ジュニアオーケの演奏会の場面を見真講堂で撮影するという事になりました。脚本などすべてがNTVにより手早く準備されておりました。主人公の山口先生役は鈴木瑞穂さん。配する美人女優は中原早苗さん。舞台は、とある地方の民放ラジオ局。その美人ディレクターが陰ながら主人公の先生を支えるという設定だから、私が中原早苗さんのモデルという訳なんですね。当然ながら、ほのかな恋物語に発展する映画なんですが、ロケ場面では当の本人が美人ディレクターではなく、録音機材を操作するミキサー役で出演しましたよ。映画は昭和39年1月8日、日本テレビから全国放送されました。何となく奇妙な気分でしたね。

これで山口先生のモーレツぶりが止まるかと思いきや、まだまだ次があった。私も、だから引きずられましたね。オペラ「毛利元就」の上演です。しかもこれ、ダブルヘッダーなんです。先ずは、向原高校の文化祭で上演し、成功したら次は何と、世界遺産の宮島、厳島神社の国宝の舞台上で上演しよう、という途方もない壮大な企画です。それを平気で言い出して、やっつてのけるのが山口和彦先生の凄さでしょうね。その先生の活動を支える財政は、と言うと、RCCラジオへ出演した際の少しばかりの出演料と、ジュニアオーケの指揮者である山口先生の向原高校からのお給料。それだけ。とんでもない話ですよ。誰が考えても一挙に人数の増えた楽団の維持費が出ない。楽器も自然に増えているから、これの購入費も維持費も必要。どうしているのかと思ったら先生、ちゃんと父兄会（当時の用語）という名の支援組織を作っていて、お父さんたちが裏から我が子の成長を支えていたのです。それにしても山口先生と言う人物は、給料は全額注ぎこんでしまい、母親と弟と妹とを養っている気配がないのです。ときどき姿を消すときは、広島のNHK交響楽団でティンパニーを叩いていらっしゃる。ああ、これが先生のアルバイトか、と気づいたけど、これだって大した収入じゃない。

そうこうしているうちに山口和彦先生は、向原高校のユニークな、麻尾教頭先生と、英語とお芝居の中山達磨先生と、生徒会の庄司文雄会長と、

演劇部員たちのすべてを口説き落として、遂に、オペラ「毛利元就」上演に踏み切ったのです。まだRCCがテレビを開局していない時期だったから、昭和33年だったのでしょうか。私も無理やり上演関係者の一員にさせられました。

なにせ向原高校には、学生演劇で一緒だった中山達磨氏がデーンと存在しており、しかも主役たる毛利元就を演じるのだ、応援しろ、となくなってしまった。劇団RCCの仲間、上田修君と栗栖忠士君の二人も、むかし同じ大学劇研で騒いでいた仲間じゃないか。友情出演くらい当然だろう、という訳です。3本の矢のうち2本ぐらいにはなったのかな。楽団RCCからも、ピアノの町野美智枝さんが友情出演。ジュニアオーケ全員も友情出演。

舞台装置や豪華な元就の衣装などは、中山先生の指導による向原高校演劇部の全員が全力を傾注したとのこと。私はRCCを代表して全編を収録し、夕刻のラジオ「学園放送」の枠で放送しました。1958年、昭和33年9月20日でした。

問題はその後、日時も記憶の彼方へと消えましたが、ホントに山口和彦先生と中山行孝先生は、宮島の厳島神社の本舞台と拜殿とを使って、実妹でRCCのディレクターとなっていた山口陽子さんの演出で再演したのです。招かれて参加しましたが新聞各社など取材陣が取り巻く中で、中山達磨（本名、行孝）先生の演ずる毛利元就公も、威厳に溢れ堂々たる歌声で、誰一人として音楽学校出身者ナシのオペラだなどと信ずる者は居らず、大成功でした。

このジュニアオーケストラが総出演したテレビ番組があります。指揮者は何と石丸寛。番組名は「ゴールドブレンドコンサート」。歌と司会はご当



81. 厳島神社社頭での中山行孝氏と私

地出身のペギー葉山さん。会場は広島郵便貯金会館、ゲストとして招いたのは地域で活動する有田神楽団など多士済々のメンバー。そして演奏は広島交響楽団のプロ演奏家と共に堂々と登場したのが、創立20周年を迎えた広島ジュニアオーケストラの皆さんでした。番組の趣旨もあってプロ楽団のほかに地域のアマチュア楽団の人々も糾合して、混成のゴールドブレンドコーヒーじゃないけど、プロとアマとが一体となり、指揮者の石丸寛と助手の先生とが何度も広島に来て演奏の特訓をしたうえで、遂に何と、ハイドンのオラトリオ「天地創造」、それにベートーベンの交響曲第5番を演奏したのです。1973年、昭和48年7月28日に公開収録して8月4日に放送されました。

司会のペギー葉山さんが、「今日の出演者の中で一番人数が多いのは、創立20周年を迎えたばかりの広島ジュニアオーケストラの、チビッコ演奏者に皆さんです」と驚きの表情で紹介したものです。しかも一緒に紹介したプロオーケストラのメンバーの中にも、往年のジュニア出身者がズラリ揃って居たことも、会場の人々を驚かせる大きな要素でした。

こっそり打ち明けますが、このとき出演していたチビッコ・バイオリニストの中に、まだ習い始めたばかりの私の幼い長女・純子が交じっていた



82. バイオリンを奏く長女純子
(昭和48年頃)

こと、内緒にしておいてくださいね。指揮者の石丸寛さんから、「その可愛いバイオリンさん、ピブラートをシッカリね」との直々の指導まで戴いておりました。これ、番組演出上の必要から生じた出来事なんです。のちに彼女は長じて広島ジュニアオーケストラのコンサート・ミストレスを務め、のちにトップクラリネット奏者だった小野賢一郎君と結婚して今日に至っており、我が家は現在、2所帯3世代の7人家族となっていることも、ついでに内緒で打ち明けておきましょう。

番組～ウラおもて

○新井 もともと私はドラマ畑の人間です。と、思っています。だから、どうしてもやるのがドラマ思考になるのです。番組にしても、子ども向けも大人向けも含めてドラマタイズされた番組形態が多い時代でした。どだい私は劇団出身のディレクターです。最初のうちこそ児童番組中心の番組担当でスタートしたのですが、1年も経たないうちに、先輩たちが担当していた「テアトル広島」というメインタイトルの、単発読み切り30分ドラマの制作集団に組み込まれました。つまり子ども向け番組を担当しながら、大人向けのラジオドラマも担当せよ、となったのです。

いつだったか、直属の上司に言われたことがあります。「原爆ものの番組は、どうしてみな、あんなに暗いのかね。もっと明るく楽しい原爆ものを作れないか」とね。「原爆もので明るく楽しいものがあるのなら、お目にかかりたいものだ」と大喧嘩になりました。その上司は本気だったらしいのですが、そんな発言をする上司、というか大人がいる時代です。あのころ自分では、そんな大人にはなりたくなかったし、大人になり切っていないつもりだったのでしょ。そういう時代のラジオ中国です。

昭和34年にラジオ中国でもテレビが始まりますが、テレビが始まるまでの時代はラジオ一本槍の時代でした。当時の局舎は中国新聞の3階から、昭和28年の秋に上柳町の現在のRCC文化センターの位置、あそこに新社屋が完成しました。立派なスタジオが大小二つもあって、何もかも放送局としての設備が整った、それは立派な社屋が出来ました。そこへ移ったのです。入社直前の、放

送劇団員だった時代のことです。

移る前の中国新聞3階時代はどうだったか思い出すと、いつも笑い話になるのですが、畳8畳ぐらいの大きさのスタジオが1個だけありました。防音装置といって、外の音を遮るために四角い枠でぴしっと頑丈に出来て居なければならない。というので、スタジオを囲む四角い枠の中には、砂がギッシリ詰め込まれていました。コンクリートじゃない、砂の防音壁です。だから砂が常に、サラサラとこぼれ落ちて来るのです。静かにしていると、サラサラ、サラサラとこぼれ落ちる音が聞こえて来る。性能のいいA型ベロシティマイクだと、きちんと拾うんです。

そのうえ何故か知らないが、スタジオの中に宿直室がある。扉を開けたら布団が入っていて、そこで寝られる。ある朝、スタジオで「おはようございます」とラジオ放送が始まった途端、どこからかグーグーといびきが聞こえて来て、ドアが開いて転がり落ちてきたのが山本満夫編成副部長、山チョウさんだったとか。放送事故という業界用語があるのですが、これは明らかな放送事故でした。山チョウさんのいびきと、転がり落ちて「いや、すまん、すまん」という声が全部、放送に出てしまったという笑い話（笑）。真偽のほどは未確認です。

だいたい録音テープという大発明のお陰で、大規模に民間放送というものが成立し得たのですが、録音テープとか、ラジオ放送のシステムそのものは、みんなアメリカからの直輸入でした。だから放送業界の用語は、すべて英語でした。ラジオじゃなくて、レイディオです。「クォーター」なんて言うシステムがあります。ラジオ放送というものは15分刻みの番組で出来上がっており、15分番組を4本重ねると1時間になります。これをクォーターシステムと呼びます。

このシステムは現在でも使われており、放送番組の基本形となっています。これはアメリカで生まれた放送システムで、15分刻みが原則です。アメリカには「クォーター」というコインがあります。4分の1ドルですね。このアメリカ型の4分の1方式という思想が、そのまま放送の世界で基本として用いられているのです。

これはテレビの世界でも使われていますが、日



83. EM-1型デンスケ録音機

本の民間放送ラジオは全部アメリカから輸入されて生まれましたし、日本に持ち込んだのは広告の電通です。だから電通が今でも、放送業界で大きな権力を維持しているし、遂には政権、政府にまで食い込んでいるのが現状です。

中国新聞の3階時代の思い出を、もう一つ。新聞社の屋上にラジオ中国は、もう一つの小さなスタジオを持っていました。私も珍しいもの見たさで、覗きに行ったことがあります。3階の事務室の片隅にあるのは、番組制作用のスタジオですが、屋上にあるのは、毎日の番組を放送するためのスタジオ。つまり、そこでニュースを読んだり、天気予報をやったり、時刻を知らせたりする専用スタジオがあり、当然ながらスタジオ脇には、放送を出すための機材と技師が詰めている主調整室という部屋がありました。3階事務室にある録音用スタジオにある技術室は副調整室、略して「副調」と呼んでおり、屋上の技術室は「主調」でした。つまりスタジオと調整室は、当時、2か所に分かれて存在しておりました。

その屋上の送出スタジオからはアナウンサーたちが手分けして毎日、各新聞社から提供されるニュースを生放送で読み上げているのです。朝日・毎日・中国の各新聞社から届けられるニュース原稿を読み上げるのです。各新聞社には、新聞紙面に載せる記事とは別に、ラジオ専用のニュース原稿を書き直す専門記者がおり、その原稿を新聞側は指定された時刻までに遅滞なくラジオ中国へ搬入し、受け取ったラジオ中国側の報道担当からアナウンサーへと原稿が手渡され、アナウンサーは屋上のニューススタジオから生で、その、新聞社から届いたニュース原稿そのままを間違わ

ぬよう読み上げねばならない訳です。

民間放送ですから、ニュースの前後にCMが入ります。ニュースの途中でドアを開けてスタジオへ入って来る訳には行かないので、CM担当の女性アナウンサーはほとんどの場合、男性アナウンサーがニュースを読み上げる前から一緒にスタジオへ入っています。つまりニューススタジオの放送席には最初から男女アナウンサーが、マイクを挟んで向かい合って着席している訳です。

まず男性アナウンサーがニュースを読み上げる。読み終わって彼が例えば「中国新聞ニュースでした」と終わりを表すアナウンスをすると、その言葉をキッカケにCM担当の女性アナが、ポーンと音叉を叩いてから、やおらCM原稿を読み始めるのです。ところが、その時を狙って男のアナウンサーが女子アナに、しばしば悪戯を仕掛けるのです。目の前の女子アナを、何とかして笑わせようと懸命な技を仕掛ける。そして女子アナウンサーが堪らず吹き出すか、なんとか堪えて吹き出さないかで賭けをするのです。聞いている聴取者こそ良い迷惑ですよ。こんなことが出来た、平気で悪戯横行というラジオ草創期でした。

もう一つ考えられないほど大らかだったのは、あの当時、新聞に休刊日があるように、ラジオ局には、一日のうち放送がお休みという時間帯があったこと、ご存知ですか。つまり現在では当たり前の24時間放送じゃなかった。午後になると放送が無かったのです。南方では、午後になるとシエスタといってお昼寝時間帯です。その感覚と同じかな、放送する番組が無かったのかな、電波を出すと赤字になると計算したのかな。夕方になってから放送再開なのです。24時間放送になるのは、ラジオが赤字を生まなくなってから暫くしての出来事です。ご想像、出来ますか。

おまけに当時は、時間外勤務、なんて感覚、誰

時刻	放送内容
7:00	ラジオ中国
7:30	ラジオ中国
8:00	ラジオ中国
8:30	ラジオ中国
9:00	ラジオ中国
9:30	ラジオ中国
10:00	ラジオ中国
10:30	ラジオ中国
11:00	ラジオ中国
11:30	ラジオ中国
12:00	ラジオ中国
12:30	ラジオ中国
13:00	ラジオ中国
13:30	ラジオ中国
14:00	ラジオ中国
14:30	ラジオ中国
15:00	ラジオ中国
15:30	ラジオ中国
16:00	ラジオ中国
16:30	ラジオ中国
17:00	ラジオ中国
17:30	ラジオ中国
18:00	ラジオ中国
18:30	ラジオ中国
19:00	ラジオ中国
19:30	ラジオ中国
20:00	ラジオ中国
20:30	ラジオ中国
21:00	ラジオ中国
21:30	ラジオ中国
22:00	ラジオ中国
22:30	ラジオ中国
23:00	ラジオ中国
23:30	ラジオ中国
24:00	ラジオ中国

84. ラジオ開局時のタイムテーブル

も気にしていない。早朝、深夜、当たり前の時代です。私たち外郭団体メンバーも、社員並みに当然視していました。文句も出ません。だから見て居ると、深夜になって仕事が終わってから、帰るには遅すぎるというので男女の社員が、会社に近い旅館に平気な顔して、お揃いで入って行くんです。それが、何人も何人も、毎晩の如くです。みんな平気の平左。会社が指定した旅館なんだそうで。おやおや、というお話。これは後日、ご本人たちから聞き出した本当の裏話。私たちは駄目でしたがね。

当時のラジオで、最も大切なものはレコード。放送で、レコードで音楽を流すことは最高に手がかからず、安易で、便利で楽が出来る。しかし、そのレコードを各民間放送局が揃えて持っているか、となるとトンデモナイという状態。かく言うラジオ中国も、レコード室なる組織はあったけど階段下の小部屋みたいな場所を占領した狭くてお粗末な部屋。係員は女性一人だけで、レコード棚は半分以上がカラッポ。だから誕生したばかりのラジオ中国は、臆面もなく広島市本通りのレコード専門店に、これから放送しようと思うレコードを自転車で借りに行っていたとか。借り賃は幾らだったかと尋ねたら古参の下川訓之氏曰く、「記憶にないからタダだったと思う」ですって。これも事実の裏話。レコード店はマルタだったそうです。ご迷惑をおかけしました。

もう一つの裏話。そんなとき、アナウンサー氏に、ひとことアドリブを付け加えるよう頼むのだそうです。「この番組は、マルタレコード店のご厚意でお送りしました」とね。その当時のレコードとは、ほとんどがSPレコードと言い回転数が78回転。割れやすく、傷がつきやすく重い、扱いの難しいレコードでした。のちに主流となる45回転のーナッツ盤だとか、33回転のLP盤などは、いまだ未来の空想世界の代物、という時代でしたねえ。

○石田 マルタレコードって、お店はどこにあったんですか。

○新井 広島市本通りの、ちょうど真ん中あたりにありました。もう今はありません。本通りの真ん中には、レコード屋さんのほかに、琴・三味線の専門店とか、レストランでコックドールという

カレーの美味しい店もありました。それから本屋さんでは、金正堂、廣文館。和菓子の虎屋本店など著名店が並んでいました。現在は、すべてが姿を消して現代風で何屋さんか分からぬ店が本通りを占領してしまい、往時を偲ぶもの皆無の本通り。残念至極です。これが、中国新聞の3階時代です。

放送局は新聞社と協定があって、ニュースは新聞社から提供される。事件があったとき放送局も取材に行くけれども、それは事故の当事者から話を聞くということであり、ニュース原稿は必ず新聞社から貰うという協定が敷かれた新聞ニュースの時代です。新聞社から原稿を持って来るのも、意外に偉い古参記者が持って来るが多かったな。私も多くの記者に出会いましたね。中国新聞の芥川寿夫さん、いまNHKの「ひろしまタイムライン」に登場している大佐古一郎さん。毎日新聞のラジオ報道部副部長で広島駐在記者だった重富芳衛さんなど、私が出会った人たちです。そのほかに、NHK広島の初代アナウンサーだった文筆家の薄田太郎さん、日本画家の浜崎左髪子さん、尺八の人間国宝の島原帆山さん、作家の畑耕一郎さん、文化人の真下三郎さんなど、著名人との交友関係だけは広がってしまいましたね。

このころ時々新聞記者さんが、自分で原稿を読んだり自らリポートすることもありましたね。記者リポートというものです。「新聞記者の眼」だったかな。それがどうやら新聞記者さんにとっては、ちょっと苦になる様子でした。しゃべることは苦手、というのですね。しかし中には得意だった記者さんもいました。ラジオの草創期、毎日新聞の新人記者だった山野上純夫さんです。実は附属の3級先輩で第27回ですが、その方が自分で台風襲来のニュースを自分流で伝えるリポート役をやった時の実話を、後日、ご本人から聞きました。

先述の毎日新聞で古参記者だった重富さんが、ちょうど広島支局へ赴任していた時期、昭和28年9月です。巨大台風襲来に備えて鷹野橋の広島市消防局に置かれた災害対策本部に詰めていたとき、ラジオニュース担当の重富さんから電話が掛かって来て、「そこに浜井市長も居るのだろう。電話で対策本部の様子を直接、ラジオニュースとして語れ」と命じられたのだそうです。

それで山野上記者は、電話機を握り締め、「消



85. 音楽録音用の第1スタジオ

防局には高さ40メートルの望楼があります。強い風が吹き付けるたびにミシミシと揺れています。その振動が、対策本部の在るこの部屋まで伝わって来ます」と語ったのだそうです。直後に上司の重富さんから褒められたとか。「君の言葉こそ、ラジオ時代のニュースだ」と。「私が自慢できるのは、あれぐらいかな」とは、ご本人の述懐です。

そんな時代が昭和27年から28年の半ばまで続いて、昭和28年の秋、上柳町にラジオ中国の新館が完成しました。私たち放送劇団の面々も堂々と出入り出来ることになった訳です。この新館には広くて大きなラジオスタジオがありました。オーケストラや、楽団、合唱団、劇団などが共演できる広さを持ち、中四国地方で唯一のシュタインウェイピアノを備えた第一スタジオ。その隣にはラジオドラマやナレーションもの、物語などの語りもの番組に適当な、中程度の広さを持つ第二スタジオがあります。そして、この両スタジオを同時にコントロール出来るよう、特別に設計されたガラス窓と調整機器を備えた副調整室があるという、当時としては優れモノのスタジオでした。

私も両スタジオを同時に使って、ラジオドラマを制作したことがあります。大きい第一スタジオにオーケストラと合唱団を入れ、小さい第二スタジオに放送劇団と効果団を入れて、ラジオドラマを生放送したことがあります。たった一回だけの経験でしたが、音楽と台詞と音響効果が互いに入り混じって、奇妙な反響やホールトーンなどの悪影響を取り除いての純粹音響とも言える放送が出来ました。贅沢だけど、効果的な音の世界を作り出すことが出来たと、マルチスタジオ方式での番組制作に誇りを抱いております。

当時はプロデューサーと呼んでいましたが、音楽ものが得意なプロデューサーが2人おりました。

1人は音楽学校出身、もう1人は学校の先生出身ですが、自分でもバイオリンを弾いています。この2人の人が音楽番組を引き受けていました。一方、私たちはドラマ中心でしたが、その学校の先生から放送界に転じたという、バイオリンを弾く器用なディレクターが、これまでも名前が出ていた田頭和憲さんです。この人は実は多芸な方で、お芝居経験の有無は不明なのですが、ドラマ演出が得意な器用人。非常に小柄で子ども並みの背格好なのですが、私が高校時代にラジオドラマを公開で実験放送した、と話したら早速、自分でもやって見せてくれたのが、例の「運転手君、ハンドルを切り給え」という特別番組でした。私は劇団員として出演していますが、そのスナップ写真も残っています。初期のラジオ制作課には時代を象徴するが如く、彼のような器用な人物が揃っていた、と言えるでしょう。

同時期のドラマ担当としては、広島大学で梶山季之と同期であり、演劇研究会では2年先輩でもある下川訓之さん。大竹出身の文学青年タイプだった福木基哲さん。そして遅ればせながら、ドラマ演出担当として劇団から仲間入りした私の3人でした。正規の試験を受けて入社しドラマ担当の一員となったとき、田頭さんがヒトコト漏らしました。耳ざとく聞きつけた私は、いささかの感慨と共に記憶に留めました。

「そうか、これからは、新井プロデューサーなんだねえ」

ラジオ番組の作り方

○石田 少しお伺いしたのですが、今のお話を聞いて、中国放送はかなり資金が潤沢なイメージを持ったのですが、番組を作るときに予算的に困ることはなかったんですか。

○新井 民間放送が誕生したときの世間からの評価は、銀行の融資基準もパチンコ店以下でした。ラジオ中国も資金潤沢どころか、ご多分に漏れず貧弱な資金でスタートしています。だから私たち初期から関係していた者たちは貧乏人の集まり、として見られていました。なにせ、民間放送がスタートしたとき、先述のとおり、大スポンサーとか日本商工会議所会頭とかが発言したと伝わっていますが、有名大会社の社長が、「民放なんて、

空気を売るような商売が立ち行くはずがない」と声明を出した、というほどスポンサー筋からの信用がなかったのです。それが、スタートして1年も経たないうちに、評価がガラッと変わります。民放側自身も驚くほど業績好転、となったからです。開局2年目から全国の民間放送は赤字が解消したはずです。

ただし、私たち社員の給料は安かった。私は入社当時の昭和30年4月分の給与明細書を持っています。それによると額面が8,240円で、所得税や健康保険など827円が差し引かれ、手取りは僅か7,413円でした。当時のラジオ中国の大卒初任給は、その程度だったということですね。社員数も全部で50人から60人ほどでした。

○石田 制作費で困ることはなかったんですか。ドラマの制作費で、なかなか領収書が通らないとか、そういうことはなかったんですか。

○新井 ありませんでした。だいたい、初期のラジオ中国には、予算制度そのものが存在していなかった。それほどの草創期、昭和27年から28年という時期の話です。現在の常識から考えると、制作者側の儉約思考も厳しかったのですが、信じられないほどすべての経費が安かったのです。

どうやらドラマには大金がかかっただろうと考察の模様ですがトンデモナイ。ドラマに必要な費用としては、先ず脚本料と出演料。放送台本の

印刷用紙は会社持ちだし、ガリ版を切るのも、ガリ版で印刷するのも自分たちでやるのだからタダ。稽古するのも社内の部屋が使えるのだし格別に経費も不要。だから必要な経費としては先ず脚本料ですが、これも、15分ものドラマ一本が当時、800円くらい、30分物でも1,500円ほどだったかな。

これ、残っていた台本の裏表紙に私の手書きメモが書いてあった。出演料は昭和29年末ころまでは、研究生も劇団員も出演料ゼロだったから、この経費もナシ。昭和30年頃に私が社員になった時期、ようやく劇団や合唱団、楽団がラジオ中国と専属契約を結んで出演料が貰えるようになりました。それでも出演料は500円以下。それまでは、みんなタダ働きみたいなもの。だから制作費で困ったことなど皆無。考えたら無茶苦茶な話ですよ。民放の草創期だったから出来た珍現象かも知れません。私も、その片棒を担いでいたことになりますね。ラジオ大好き人間の集団だったから可能だったのでしょう。

○石田 なるほど。経費自体が、あまりかからなかったんですか。

○新井 産まれたばかりのラジオ中国としても、払わずに済むお金は一切、払わなかったということでしょうね。はなから「金は無いぞ」というのが偉い人の口癖でしたから。後年、附属の同窓会で藤居平一さんから降り掛かって来た名言、「金は無いけど、やれ」を思わせる情勢でした。予算制度もないのだから、「金はないよ。君たち、あとは適当にやってくれ」みたいな感覚かな。誕生したばかりのローカル民放と言うのは。そんななかでラジオドラマをやったのけたのだから、凄い執念を持った連中の集まりだったのでしょう、

昭和30年
4月分賃金支拂明細書
氏名 新井俊一郎 殿

支	基本給	8,240	円
	扶養手当		円
	職務手当		円
給	地域手当		円
	超過勤務手当		円
額	合計	8,240	円
控	健康保険料	220	円
	厚生年金保険料		円
	失業保険料	65	円
	課税対象額	7,955	円
	所得税	119	円
	融資金		円
除	共済会費	50	円
	組合費	100	円
	市町村民税	190	円
	運動部費	20	円
	厚生部		円
額	中国新聞購読料		円
	差引支給額	7,413	円

86. 入社時の給与明細書



87. ラジオドラマの公開録音で活躍するチビッコたち

今から考えるのに、ですね。

○石田 では、児童劇団とかをつくられたという話ですが、あまりギャラも。

○新井 ありません。子どもたち相手だから、現金給付は最初から考えていません。月末とか切りの良い時に、一括して図書券を渡しておりました。教育的配慮、ですかね。喜んでくれましたよ、お母さんたちもね。録音で遅くなった時など、私がタクシーで自宅まで送って行きました。せめて、それくらいのことをしないと、気持ちよく出演して貰えませんし、お願いすることも出来ませんから。こうして子どもたちに番組へ出て貰ったことで、番組への評判もさることながら、子どもたち自身が通う学校で話題になったようです。そこからまた、児童劇団への人気も出たり、出演希望者が現れたり、家庭でも話題になったりで波及効果とでも言うのでしょうかねえ、「子どもクラブ」という番組の認知度も急上昇しました。嬉しかったし有難かったですね。子どもたちとも仲良くなって、ますます「新井幼稚園」は楽しい集団へと成長して行きました。のちになると、児童劇団の出身者が成長して大人の放送劇団に入団したり、と言う具合で互いの交流が生まれるなど、思っていた以上の好影響と発展とが結びついて、創設者である私も嬉しさイッパイという時代へと進化して行きました。

今はもう還暦を迎えたような、元児童劇団の子どもだったお爺ちゃんやお婆ちゃんが、今は老いたる自由人の私を訪ねて来てくれる時代です。教員の経験はないけれど、教え子たちと呼べる人たちが居る幸せと有難さを、身をもって実感しております。テレビ時代になっても児童劇団は大活躍をしてくれました。テレビドラマの主役を演じた名子役の少年や少女が、児童劇団から何人も輩出しましたからねえ。みんな、ボランティアではないけど、ラジオやテレビに出られることが嬉しかった時代です。自分の声が放送に流れたり、自分の姿がテレビ画面に映ったりすることが嬉しかった時代です。

劇団を目指す人たちもそうだったけど、町や村の人たちも同じでした。まだあのころは、友だちや親戚に言って回って嬉しがっていた時代です。だから、歌の名人、尺八の名人、踊りの名人、音

戸の舟歌の名人なんて、中継に行ってもほとんどの人がノーギャラでした。「学園放送」など学校巡り番組で学校へ取材に行っても、学校にお礼を払ったことなど、申し訳ないけど1回もありません。むしろ、学校から取材スタッフに対して何か頂戴することがあるくらいでした。

○石田 逆に、ですか。

○新井 はい。「おなか为空いたでしょう。食べて行きなさいよ」とか、子どもたちが作って育てた野菜だからと、大根や薩摩芋を戴くとかね。むしろ、こちらはジープに重くて嵩張る機械を積んで行って「ご苦労さん」とねぎらわれ、冷たい飲み物など頂いたりするぐらいで、何か差し上げた覚えは一切ありません。時たま、鉛筆やノートなどの文房具セットを持参しましたが、これは喜んで受け取って戴きました。放送局からの「謝品」と呼ぶ、一種の出演記念品は各種、揃えておりましたから。

○石田 ちょっと話が遡るんですが、新井さんが学生時代にラジオに出演されておりましたよね。ご自身の気持ちとか周囲の反応はいかがでしたか。

○新井 NHK広島局ですね。私は役者になるつもりはなかったし、自己訓練も不十分でした。そんな私を招いてくれたのですから懸命でしたね。更なる訓練のつもりで演じました。でもNHKで主役に選んで貰ったときは、なんだか面はゆいと同時に、私の拙い演技を買って下さった演出者の方に、お礼を申しあげたいほど嬉しかった覚えがあります。評判の方は、あまり記憶にありません。

○石田 当時、皆さんはラジオを聞いていますよね。「聞いたよ」とか、何か反応があったんですか。

○新井 局宛てにはあったのですが、私にはあまり反応はありませんでした。こちらは学生だし出演すること自体が嬉しかった時代です。大学の演劇研究会にも正面から声がかかって来て、「ガヤ」と言うのだけれど、エキストラとして、わいわい騒ぐのにも呼んで貰えて嬉しい訳ですよ。300円ぐらいでも、NHKはきちんと出演料を払ってくれますからね。ラジオ中国から貰ったという記憶はないなあ。放送劇団が誕生したとき、研究生から劇団員になった人に、たしか初めて500円ずつ戴きました。「これ、なんの金だ」と互いに言い合った記憶があります。なにせ、それまでは

全くノーギャラでしたから。

だって、ラジオの録音テープ自体が高価な時代です。私の昭和30年時代のスナップ写真が残っていますが、テープは30分リールとか15分リールなど各種あるけれども、1カ所にハサミを入れると使いものにならないと厳しく言われていました。しかし、全く切らない訳に行かないような取材があります。背景に何かの音が流れている状況下で、相手が言い間違えた。背景に音が無ければ録音し直しが可能だが、背景の音も必要なのだ。そんな場合は二度とやり直しが効かない。トチった（失敗した）言葉だけを切り取って、前後を上手につなぎ合わせることをテープ編集、と言います。これこそ実は、録音テープが発明されたことの最大のメリットだったはずなのです。ところが「テープを切ってはならぬ」と言う。これは実は、経営者的な発言であり、切って繋ぐことが可能、というのがラジオ時代到来の象徴的出来事なのです。

だから切りましたよ、テープを斜めに。私たちは切り方も、たちまち上達しました。繋ぎ目も全く素人さんでは気付かないほど巧みになっていました。でも私たちは、高価なテープが勿体ない、という感覚を捨ててはいません。切って捨てたテープを拾い集め、長さが30センチから40センチ以上あるテープを拾い集めて懸命に繋ぎ合わせ、再び使えるような状態に戻し、空のリールに巻き取って再利用したのです。勿体ない時代、でした。

○石田 つないだ所は、音は飛ばないんですか。

○新井 はい、そこが職人業です。全く飛ばない。テープ幅は6ミリだったかな、あれを和鋏でスツと斜めに切るんです、切り捨てる部分と、残す部分とを2カ所。斜めに切って、互いに繋ぎ合わせ



88. テープ屑の山に埋まって

るのです。特殊なスプライシングテープという、テープの繋ぎ目専用のテープを切れ目に貼って繋ぎ合わせる。テープの終わり端と、その後へ繋ぐテープの先端とを繋ぐのです。互いを突き合わせながらキッチリね。言葉で説明するのは難しいな。要は、テープの切り方が問題です。実際は、テープを二つに折ってピッと切るのです。そこがテクニックですね。（ハサミで切る真似をしながら）切り捨てる部分と残す部分とを二つに合わせて折り、切った端を互いに突き合わせて繋ぐ。それだけです。繋ぐためのスプライシングテープ、当初はアメリカ製品、のちには日本製が出現しました。だから当初は、すべてが高価だったのです。みな、アメリカからの直輸入だったのだから。日本製が出てからは、急激に安価になりました。

繋ぎ方のコツですが、言葉と言葉の間に僅かに隙間を作るのがコツです。分かりますかねえ。言葉というものは、すぐに繋がってしまいたがるものなのです。そこに適当な間を置かないといけません。例えば、「それで、ねえ」が、すぐに「それでねえ」となってしまう。「それでねえ」と「それで、ねえ」ではニュアンスが全く違う。逆に、「それで、ねえ」を、わざわざ「それでねえ」と結びつけてしまう技もある。その場合は、本人がしゃべった音声の途中にある、ほんの僅かな隙間を切り取って捨てるのです。その場合、隙間を切り取って繋がった音声が不自然でないよう調整する技が必要です。逆に、「それでねえ」と結びついている言葉を、「それで、ねえ」と前後に分けてしまう技もあります。前後の言葉の間に隙間を入れてしまう、という強制的な技です。隙間が大き過ぎると、文字通り間が抜けてしまう。その心持ちとか、そこの呼吸が難しいのです。

オープンリール式の録音機にかけたテープを手で回して、音の頭や尻を探しておいて、何センチか何ミリか、前後にずらすのです。このコツが、当時のラジオ・ディレクターの技術であり、腕の見せどころでした。音響や演技の演出よりも、事後に録音テープを切り刻むのが見せどころでしたね。

○石田 それが、いわゆる編集作業というものですか。

○新井 そう、テープ編集ですね。テレビの場合

も同じように編集が大切でした。初めは16mmフィルム時代の時代だから、セメント編集と言って、切った部分をフィルム編集用の特殊なセメントで貼り付けて繋いだものです。編集部分で2駒分のロスが生じることなど、お分かりですかね。

テレビもフィルム時代からビデオテープ時代になりますが、やはり初期は、ビデオテープを鋭利な剃刀の刃で切って繋いだものです。物凄く難しかったなあ。ビデオは、すぐに電子編集の時代に入ります。そうすると、もう誰にでも出来る簡単な技になってしまいました。それまでは、ラジオと同じようにビデオテープを切ったものです。

わが社で最初にビデオテープを切って編集したのは私です。社長の承認稟議が必要でしたね。ビデオテープと言う奴は、30分物1本が何と30万円を超えるほど高価な代物で、資産台帳に計上せねばならないほどだったし、もし切ったらオシャカ。以後、使い物にならない。となると社長ならずとも、ビデオテープを切るなんて馬鹿なことするな、と命ずるでしょうね。詳細は省きますが、そのビデオテープはコンクール提出用だったため切らねばならない事情があった。だから社長も稟議書を提出させ、社長印を逆方向に押しして怒りのほどを表現したのでしょうか。嫌々ながらの、切って宜しいとの許可が出ました。それから3日間、専門の技師で車地重実（くるまじ しげみ）君と田中通俊君と私の3人組で、わが社としても初めての、ビデオテープを切って編集するという難問と取り組み、解決すべく、徹夜作業が続くことになりました。重量も相当なもので、2インチ60分物で7キログラム。90分ものになると10キロ近い重量。それはもう、運ぶだけでも大変でした。



89. 初代の2インチ VTR

ビデオテープとは電子的に映像と音声と、それに編集用の信号とが記録されている幅広の樹脂テープです。初期の幅広VTRテープは切るのも繋ぐのも大変。だから切れ味鋭い剃刀の刃を使いました。切る場所はテープを電子的に現像して、編集信号（エディット・パルス）のある場所を見つける。それは、テープの隅っこ端っこにある極めて小さな編集ポイントです。それを電子現像して探し出すのに、まさに一昼夜かかりました。英文の説明書を読みながら考えるのです。現実目のあるビデオテープで、いったい編集ポイントなる一点は、どこにあるのだ、どれが編集ポイントなんだ、とね。必死の形相でしたね。

実は時間にも制約があり、のんびり編集点とやらを探している余裕も無かった。切って繋ぎ合わせるポイントを探し出し、その2か所を、先ず切断する。見事に切れたら、その切っ先を互いに突き合わせて繋ぐ、という未知で困難な世界に突入する。なんと2昼夜かかった。ビデオテープに定規を当てて、斜めにスーッと剃刀の刃で切る。切り捨てる部分と、残す部分との2か所の切断作業。目が血走る、なんて程度じゃなかった。

それから次は、切ったテープの両端をキッチリ突き合わせてピッタリ繋ぐ。なんとなんと、これが最難関でした、出来ないのです、先ずテープを真っすぐ切れない。切れてもピッタリ合わせられない。切り口を合わせてスライシングテープで



VTRテープの変遷	2インチ	60分
	1インチ	90分
	D2	60分
	ベータカム	20分
	DVCPRO	60分
	DVCPRO	20分
	(大きい順に)	

90. VTRテープの変遷

貼り合わせるのが出来ない。出来ない出来ないの連続。疲れ果てた挙句、3人とも居眠りの連続。ハッと目を覚まして、またもや難関に挑戦する。この繰り返しでした。テレビ画面がパラリと一枚でも捲れたらテレビ事故と判断されるのですから、編集済みのテープをVTRにかけて走らせ、編集か所をスッと通った時は歓喜の叫びを上げました。

ようやく何とか繋がったと判断できた時の嬉しさは、今なお忘れられません。ほんと三日三晩の苦闘でした。ラジオでもテレビでも私は、こうして常に、ラジオ中国、始まって以来初めてというワザに挑戦することばかり担当しておりました。

これが、草創期のラジオとテレビ時代を疾走した、初期放送マンとしての私の役割だったのでしょうか。まるで、ラジオ・テレビの初登頂ルートの開発、レールの設営が、私の任務だったのでしょうか。今にして、そんな思いにとらわれてなりません。

昭和28年に中国新聞ビル3階から上柳町の新館に移ってラジオ局としての設備が整い、やがてテレビ時代へと向かう時期です。その頃から、経費のことが、あまり厳しく言われなくなりました。録音テープも安くなったのでしょうか。でも信じられない実話があります。紙で出来た録音テープがありました。実物を使ったことがあります。樹脂製のテープは高価だから、紙で作ったのですね。すぐに切れてしまい、全く使い物になりませんでした。たちまち姿を消しましたが、だいたいラジオ用のテープとは、相当のスピードで回転しているものなのです。(手で回す真似をしながら)かなりの高速で回るから、バチャンと止めるとバチンと切れてしまう。そういう乱暴な使い方は出来なかったのが紙テープでした。たくさん局がどんどん使うから、大量生産すると安くなるという原則と同じように、ラジオテープも安くなって来て、使うのに、うるさく言われなくなりました。

問題は、テレビの放送を開始したことです。昭和28年に民間放送ラジオが発足。同時にNHKはテレビを始めました。見ていました。まさか自分が、あれをやるようになるなど思ってもいなかった。ラジオで放送の世界へ入ったつもりでしたから。映画は好きだったけれど、まさか映像の世界

に自分が入って行って、それを指揮・監督するなんていうことは夢にも思っていない。だから、ただ面白がってNHKのテレビを見ていました。

○石田 ご自宅にテレビがあったんですか。

○新井 いいえ。ずいぶん後になってから買いました。昭和34年に我が社もテレビを始めただけで、昭和28年から30年頃は、そんな気配も感じていませんでした。でも、町の喫茶店に行くと、「テレビ上映中」なんて表に大きく書いてある。呼び込みまで、やっていましたね、「当店では今、テレビが映っていますよ！」なんてね。そのころ私は、東京の新橋駅前街頭テレビを見ました。これは有名でしたね。NHKテレビがやってのけた、都内各所での街頭テレビ作戦です。テレビ放送のPR作戦ですよ。テレビでは、「力道山のプロレス中継」がダントツの大人気でしたね。

民間放送がテレビの放送を始めたときも、同じように大々的なPR作戦を展開したものです。「ラジオ中国でも、テレビ放送を始めましたよ、いまラジオ中国テレビが見られますよ」なんてね。定年退職後に、そんな思い出話をする番組にゲスト出演したことがあります。テレビ放送の初期に広島市内の喫茶店で、ラジオ中国が初めて民間放送らしいテレビ番組を放送し始めた、ということで一斉に、お客の呼び込み作戦が始まった、なんて裏話を繰り広げたことがありました。民放テレビの放送開始が、お店の営業として「呼び込み」の材料になっていたのですね。

あの時代、早速テレビを据え付けた家なんて、一体、どのくらいあったのかな。一家に1台ずつテレビがある、なんていうのは、随分のちの時代です。私が父にテレビを1台プレゼントしたのは、たしか、我が社がテレビの放送を始めてから1年か2年たった頃でした。私自身がテレビを買ったのも、ほぼ同じ時期。まだまだテレビなんて、高嶺の花でした。

○石田 ずいぶん高かったんですね。

○新井 テレビは会社で見れば何とかなる、と思っていたけど、やっぱり自分で買わなきゃいかん。同時に父親の居間にもテレビを1台、と思いましたが。テレビがカラーになったときも、同じことをやりました。東京オリンピックの昭和39年10月からカラーですからね。私もテレビ人間になっ

ていたので、カラーになったときも苦労しました。

○伊東 ラジオの話ですが、ドラマ制作をされたころも、広大な演劇部の後輩とか母校の演劇部とのつながりはありましたか。

○新井 昭和28年ごろからの劇団員時代も、昭和30年からのラジオ・ディレクター時代も、ずっと交流は続いていました。放送劇団のなかにも、元広大劇研の部員だった先輩や後輩が居たし、ラジオ中国の先輩社員にも大学演劇研究会の先輩が居ました。放送劇団からも昭和29年ごろ、3人がラジオ中国のアナウンサーへと転身しました。

広島大学演劇研究会の1学年後輩に、懸川高治君という人物が居ました。彼は実は私と同じ時期、附属中学校1年生だったとき被爆して身体の半分を火傷して登校不能となり、修道だったか二中だったかへ転校し、1学年留年してから広島大学で私と再会したという、もと附属中学校で私とクラスも同じ41回の同級生だった人物です。再会した昭和27年春、「おい、お前、懸川か」、「おい、お前、新井か」と互いに顔を見詰め合い、被爆時の回顧談を交わしたものでした。

それから彼は間もなく放送作家としての才能を開花し、爾後、私の専属ライターとなります。いい作品を幾つも書いてくれた級友の懸川高治君、ペンネーム笈浩二。いまは浜松市在住。のち浜松で高校の教員となり、校長を経て浜松市の教育委員会で課長から部長となり、現在も浜松在住で毎年、見事な一句を添えて賀状を送って来ます。

しかし何故か、私たち41期会との交流には乗って来ず、私とだけの交流を保ったままです。被爆者の中には、懸川君のように旧友とは距離を置いたままという人たちの多いことに留意が必要です。そんな笈浩二氏の作品には夢があり、現実には厳しい状況の場面であっても、ホンノリ心温まる脚本を書いてくれる作家でした。

初期の子ども向けラジオドラマ、笈浩二「ボクは泣かない」（昭和30年8月6日）、ドキュメンタリードラマ、笈浩二「お山の杉の子」（昭和31年8月6日）、ドキュメンタリードラマ、上田修「少年の島」（昭和32年8月6日）がそうでした。

「少年の島」と呼ばれていた、似島学園を取材した初のドキュメンタリー手法の作品、新井俊一郎構成・笈浩二脚本の「お山の杉の子」で解説し

ましよう。

似島の孤児収容施設は当時、収容された子どもたち自身が手造りで築いた施設だったのですが、なにか収容所みたいに受け取られる雰囲気知られ、収容されている少年たちの脱走事件が多発。問題になっていました。ある少年（匿名）が島を脱走して捕まり、広島少年鑑別所に送致されます。そこで彼は和田方光さん、という少年鑑別官に出会います。そして立ち直る、と言うか、出会いをキッカケに自立した少年へと生まれ変わるのです。

長じたのち彼は、原爆孤児同士で結婚することとなります。そして徳川夢声の司会で有名だった「テレビ結婚式」という番組に招かれ、宮島の厳島神社を会場にして結婚式を挙げ、全国へ放送されて話題となりました。このテレビ番組も、私はスタッフとして参画しておりました。その彼の少年時代を私は、昭和30年夏にラジオで番組化したのです。

少年本人に、似島学園での時代を回顧談として語って貰い、その声を録音・編集して番組のナレーションとして扱い、回想場面はドラマ化して語るという、先に述べたノーナレ式手法です。基本的な企画構成は私でしたが、笈浩二君に脚本を依頼しました。準主人公である和田鑑別官は既に東京へ転勤しており、入社2年目の私は初の出張として東京へ行き、和田鑑別官から少年との出会いなど、すべての少年との物語を収録したのです。

少年と和田鑑別官、二人の回想録を「狂言回し」として場面転換を担わせ、本人では再現不可能な物語の内容は、放送劇団の出演によってドラマ化しました。かくて完成した番組が「お山の杉の子」です。残念ながら脚本も録音テープも残っていませんが、当時としては画期的な手法だったと思います。それなりの評価も受けました。しかし主人公本人は残念なことに、「テレビ結婚式」で被爆者同士が結婚、ということで人生の幸福を味わっているやに思われていた最中、突然に自ら命を絶ってしまったのです。余人には理解できぬ被爆者の深い心の暗闇を思わせる出来事でした。とりわけ私には、少年時代から知っていると思い込んでいた彼の心が、同じ被爆者とは言え、遂に理解不能だったということに激しいショックを受けた不幸な事件でした。「明るく楽しい原爆物を作れ」

という藤田一久制作課長からの指示を思い出し、その理不尽さを怒った記憶が、痛烈な思いで蘇った出来事です。

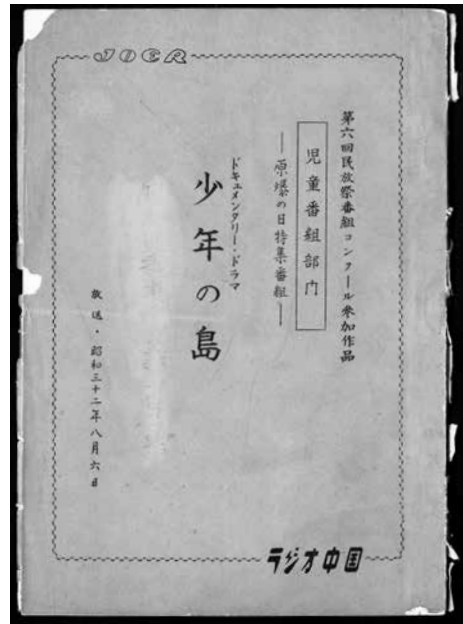
資料保存に失敗

○**新井** ここで、極めて残念な事実も話しておきましょう。こういう、貴重な番組の台本と録音テープの資料類は、放送が終わったあと、記録として必ず局の資料室に「永久保存」と明記して納入するシステムになっていました。広島にある放送局として、貴重なアーカイブズとして保存するのは当然の義務です。私たち社員も、そう思って作品素材類は必ず資料室へ納入しておりました。ところが昭和40年ごろRCCの資料室は、長年に亘って記録保存して来た資料類の棚卸と確認作業を実施したらしいのですが、そのとき事もあろうに、貴重な「永久保存」と明記してある台本と録音テープが何故か、ごっそり廃棄されてしまったのです。

暫くして私が気づいた時には、私の過去のラジオ番組の記録全部が失われたあとでした。密かに自宅へ運び、私有を図り自己管理していた僅かな資料だけが残った、という始末です。ほかにも、広島県の県鳥に指定されている「アビ」の鳴き声とか、古代からの技法「タタラ製鉄法」の音響とか、放送番組と共に、重要な音源も失われました。原因も責任者も、いまもって未解明のまま。当時の某報道副部長の仕業、との噂が流れましたが不確実。なにか現在の無責任体制の政府にソックリ、と呆れ怒っております。従って、この証言の裏付け資料も提示できません。困惑する以外ありません。信じられぬ現状を打ち明けましたが、なんともお恥ずかしく残念至極です。劇団「あまがえる」時代の台本や録音テープも、私は当時、どこの放送局にも所屬してないのだから、自分の記録だからと自宅へ持ち帰っておりました。だから、これだけのお話が出るのです。幾つか残った劇団「あまがえる」時代の台本と、自分の声が入っている、昭和28年ごろの我が声優演技が聞き取れる音源は、いまカセットテープとして保存していますが、これは今や我が家の宝物です。

○**石田** 今の「少年の島」とか「ボクは泣かない」というのは。

○**新井** 全部、消えています。



91. 「少年の島」放送台本
(昭和32年)

○**石田** 復元できないんですね。

○**新井** 音源そのものが存在しないのだから復元は不可能です。「少年の島」と「ボクは泣かない」は、脚本だけ私が持って帰っていたので、遅蒔きながら本編はRCCに寄贈し、コピーを私が持っています。自分で家に持って帰っていたから残ったのです。(台本のコピーを出して)これが、消えてしまった児童合唱団がコンクールで金賞を取った時の放送原稿である私の手書きのスク립トの写しです。これが「海底巖窟王」という、昭和28年放送の劇団「あまがえる」時代の台本。これはラジオ中国として正式にドラマを作り始めた時の「山椒大夫」の脚本。これも同じく「たけくらべ」の台本。みな現物は、私からRCCへ歴史的遺物として寄贈してあります。これは、私のラジオ時代最後の原爆ドラマ、上田修作「玲子となすびと夢」の脚本です。構成は私です。そうか。民放の番組コンクールへ出品したから提出資料として残ったのだな。これはドキュメンタリードラマの取材メモで、その脚本「ボクは泣かない」の台本コピー。これくらいかな、残っているのは。

以上がRCCとしての、私としての草創期のラジオドラマの記録です。すべて初期の台本は自分たちでガリ版を切り、新井俊彦の芸名を使って演じていますね。こんな感じだったな。やっぱり、

これなどは効果音の担当か。ラジオ番組の正規のノウハウなんて、NHK以外は誰も知らない時代。自分たちでラジオのやり方を探り、誰も文句を言う人はいないから手探りで自分たちだけで決めて、それをラジオのルールとしました。私たち民放ラジオ草創期の人間が、ラジオもテレビも、先ずは自分たちで路線を敷いて実行するしかなかった時代でしたね。それが現在も続いているということでしょうか。

○石田 敷いた路線というのは、どういう路線ですか。

○新井 初めて足を踏み入れたラジオ、テレビ世界の基本のキであるノウハウ。ラジオの番組制作法などは、お芝居の世界で言う脚本作法と似ています、基本線がね。それをラジオ的に脚色・修正しました。なにせラジオとは、言葉と音だけの世界ですからね。イメージの世界です。ラジオ番組そのものが、ドラマに近い性質を持った世界です。

イメージ豊かな作品として生み出さなければ、ラジオ番組じゃない。まず企画に基づいて構成を立てたら、その構成に従って自分で脚本を書きます。最初に手掛ける手法は「箱書き」と言います。幾つもの小部屋を備えた四角の箱をイメージして、起承転結ではないけど、このように番組を運んで行きたいという構成を考え、小箱の中へ要点を順番に書き込みます。ラジオなら音の世界、テレビなら音響と映像の世界を、自分のイメージを大切にしながら、ずうっと組み立てていくのです。そのときは具体的なコメントも映像も、未定のままで宜しい。箱書きを書き上げ、そのイメージに沿って取材したり、必要に応じて劇化したり、脚本に着手したりと次のステップに進みます。

でも当然ながら、なかなか予定通りには、イメージ通りには行きません。大幅な手直し、構成のやり直しに迫られます。当然の事態変化です、対応するしかない。また修正をかける。何度も箱書きを書き直して行って、シノプシス (synopsis) という言葉を使うのですが、大きな筋立てを作り上げます。具体的な基本方針が見えて来た、という段階への到達です。先入観を持ってはならないし、既定の構成案への誘導的な作製法は、まるで誘導尋問をする検察官みたいで非難されるべき姿勢です。企画というものは、いざ現場に行ったら大き

な変更を求められるのが現実です。融通無碍な、算数でいうなら応用問題を解くが如き対応能力が必要、と 부탁드립니다。

ディレクターという立場は、映画の世界での監督です。それ相応の能力と責任が求められます。私見ですが、文学的才能のほかにも、音楽、絵画、色彩、音響、舞台、照明、演技、言語など多方面の能力も必要では、と思っています。綴り方の才能は絶対要素。これを疎かにするような人は、失礼ながら即座に、ご退場をねがいたいものです。

ラジオの世界だから格別に言葉に敏感たれ、と要求しました。お前たちは広島人だから広島弁しか知らないだろうが、ラジオでは標準語を使わなければならない。だから言葉に敏感になれと強調しました。正しく美しく聞きやすく、使いやすい話し言葉を身に付けよと命じました。アナウンサーでなくとも、です。徹底的に広島弁で行く、という手法のラジオ番組は別として、普通はニュースを含めて全部、標準語です。いまでは共通語と呼んでいますね、全国的な共通語だから。

もう一つ、音楽に詳しくなれと言いました。音楽の世界に入り浸れ、とまでは言わないけど、音楽を好きになり、音楽に詳しくなれと求めました。つまりは音に敏感になるための一貫として、音感ですね。これが最大限の要素であると。そして、クリエイティブと言っていますが、すでに存在する何かを真似するのではなく、自分独自のものを産み出せ、とね。そこに存在するものを乗り越えろ、とね。

あとは録音テープを如何に巧く使うか、というテクニックの問題が存在します。これは教えられる。テープというのは、逆に回すことも出来れば、再生ヘッドを利用して、音にエコーを付けることも出来る。さまざまな音響を付け加えることも可能。今やデジタル方式に大変革したのだから、何でも出来る時代が来た。昔はアナログだから、音響という奴は、ダビングを重ねると猛烈に雑音が増大するのです。だから、自由に音を重ねたり組み合わせたり出来なかった。ところが、いまはデジタル方式と言って、そこに音の有るか無いかで区別する、という2進法で音の世界が構成されているので、自在に電子的な実験が可能となりました。むかし私などが苦労して出来なかったこと

が、いまは一瞬で出来るのだから悔しい限りです。早く生まれ過ぎたね、と古い仲間たちと苦笑しております。むかし、ダビングで発生していた雑音、ノイズですね、正確にはバブルノイズと言って、真空管から出る雑音ですが、いま真空管なんて、無線マニアくらいしか知らない世界でしょう。現在はデジタル時代。無限の可能性を秘めた夢の技術です。取材だって、ロケーションだって、撮影だって、録音だって、編集だって、アニメーションだって、ドラマなんかSFだって、多次元空間のシチュエーションだって、宇宙空間だって、過去への時間旅行だって、みんなみんな可能になった。凄い時代が来たものだと、いまや放送古代人に成り果てた私は、毎日のようにボヤイテおります。

テレビの話に脱線しますが、テレビドラマの講習会なんて社内では一回も開いたことはありません。私自身も受けたことは1回もない。でも、夢中でテレビドラマを作りました。民間放送連盟主催のコンクールに提出する、芸術祭に出そうなんて、そんな大それたこと、実は自分から名乗りを上げたことは皆無なんです。自分の能力は自分で分かっていますからね。我がスタッフでも、ドラマ撮影の基本である「方向性」の原則、なんて当初、誰も知らなかった。もちろん私も知らない。その程度なのに、いつも「お前、やれ」と命令指示が来る。東京支社から言ってきたり、上司から来たりです。「まだ早い。テレビドラマなんて、いま手を付けたばかりの素人集団なのに、コンクールに出品などとんでもない、そんな能力も態勢もない」と主張しても、実状が分かっているのか「やれ」と来る。「東芝日曜劇場」などという全国版テレビドラマシリーズに、「製作チームの一員として参加しよう」なんてことになったとき、さすがに心配になった東京放送からドラマ演出家の一人が、応援と言う名目で監修・監督にやって来ましたね、広島のアサヒ現場まで。そんな状況下でも敢然と私たちラジオ中国テレビの制作陣は、私と小畑和子さんの二人のディレクターを中心として、助手やら外部応援やら、劇団、効果団、美術要員などの人海戦術でやり遂げました。勉強しながらの本番をね。ロケとスタジオ録画の、両面作戦でした。



92. TVディレクター第1号の小畑和子さんと
(昭和44年)

さて、ラジオの話に戻ります。先ほどの民放の番組コンクールへの参加だって「これはまだ、ドキュメンタリードラマと言ったって手法は未完成なんだから、出来も完璧とは言い切れぬ。スタイルも手法も、これから完成させる段階だから」と主張しても、何故か上司は聞き入れない。「珍しいから出品せよ」なんです。優秀賞ぐらゐは貰えると踏んだのかな。事実、優秀賞止まりでしたがね。

○石田 「珍しいから」というのは、ドラマの作り方が珍しいんですか、それとも内容が珍しいんですか。

○新井 両方でしょうね。「ドキュメンタリードラマ」という手法は以前から存在していました。しかし、その意味するところは、ノンフィクション物、というニュアンスでした。事実即した物語の構成、というところかな。ところが私の目指した手法は、ラジオの特性を生かした、ラジオのロケーションドラマ的な手法、とでも言いましょうか。つまり、ドラマの中には役者のほかに、本人が本人の役で出て来て、本人の言葉で本人が体験した事実を語るのです。つまり、完全なノンフィクション。事実そのものです。もちろん本人が演技するなどあり得ないから、過去の劇的場面などは、役者が本人などに成り代わって物語を演じてくれます。だからドラマなのです。事実即した

というより、実在する人間が事実を語り、その発言内容をドラマ化して物語を進行させるという、いささか変わった新しい手法のドラマです。語り手によるナレーションと言う、既成のドラマの進行形式は使いません。そこの違いです。

事実に即したドラマというのは、幾つもあります。誰かの書いた事実をネタにした小説をドラマ化したもの、などが普通ですね。実話に基づいたドラマ、と呼びますが、私のドラマは違う。何と表現したら良いのかな。実話のドラマが大半を占め、実在の人物が語る実話が、この物語の進行を司るドラマ、とでも表現しましょうか。ともかく、その意味で新しい手法によるラジオの作品で、新しい形式のドキュメンタリードラマが出来上がったのでした。そして上司の予想通り、地域での番組評価で優秀賞を獲得しました。

いまNHKテレビが得意そうに主張している「ノーナレ」が、当時の私の手法そのものかな。

さてさて、ドラマ演出と、役者の演技と、そこで流れる伴奏音楽と、音響効果と、テレビならば舞台装置や衣装や小道具など。あなたに、それが良いのか悪いのか判別できますか。とりわけ演技が下手だとか、台詞がダメだとか、テレビならば映像が良いか悪いか、など、お分かりになりますか。ご家庭でラジオを聞き、テレビを見て居て、如何ですか。文句を言いつつ、ラジオを聞いたりテレビを見たり、なさっているではありませんか。今の私が、まさにそうです。これって、精神衛生上、極めて宜しくありませんね。先ず、全く楽しくない。次に、いつも不機嫌。イライラしている。プツプツ、いつも口の中で小言を言っている。だから家族のみんなが不愉快になる。とね。止しましょう。楽しもうじゃ、ありませんか。

と、言ったものの、今頃のラジオもテレビも、ひと頃に比べると酷くなったと思いませんか。これで本当に楽しめますか？楽しめない、何故？先ずは正統派としてのニュースから考えてみましょう。先ずNHKニュース。これは、楽しいってものじゃないから除外。では、民放のニュース。これ、本当に正式なニュース番組なの、と尋ねたいようなニュースを流す民放局があります。日テレとフジだったかな。東京には、基幹4局の他に5局目の関東ローカル民放・TXNテレビ東京とい

う放送局が出来て、ときどき、丸投げ外部委託の失敗番組やフェイクニュースを流したり、ヤラセの偽番組を放送したというので、政府やお目付け役から叱られているテレビ局。噂を聞いたことあるでしょう。

放送局には放送法と電波法という厳しい免許法制が整っています。なのに、変な民放局が生まれて、変な番組を流して、あちこちから叱られているなど普通じゃ考えられない変なことが平気で起こっている。おかしいと思いませんか。今、ほかの普通の放送局でも、変な放送局と似たような変なこと、平気でやるようになって来ていること、お気づきではありませんか。許可を得て放送番組を作って、公共の電波を使って放送しているからこそ、放送局と名乗れるはずです。ところが、今の放送局で、放送番組を自分のところで、自分で作って放送している放送局が幾つあるか、ご存知ですか。実態は、ほとんどの放送局が、自分のところから放送する番組を、そっくり外部の番組制作プロダクションへ丸投げの下請けに出して制作させ、費用だけ負担して、如何にも自分のところで自分が作ったように「製作著作」と麗々しく自社名を表示して放送しているのです。自社にも、番組を下請けに出す手前、番組制作の知識を持った編成部員との肩書を持った少数の社員を抱えては居るけど、彼らは自分で番組を作るなどの役割は無く、単なる指揮監督的立場のみです。そうってしまったらもう放送局ではなく、番組を電波に乗せて発射するだけの「番組送出用の電波発射会社」じゃないですか。いまや民放の実態はほとんど、こうなっています。

「ラジオ版、立体コント番組」

○新井 あと、ラジオ時代で面白かったことは、ラジオで私は、「立体コント」というのを始めました。コントというのは、出演者が舞台上でしゃべり合って、どっと笑わせてオシマイになる。ラジオでも、役者の演技でお客さんがドツと笑ってオシマイになる。これを舞台上で実演したんです。「立体コント」と銘打ってね。ちょうど今の漫才師がドタバタをやっているようなものを、ラジオでしゃべくらせて録音して、その後にジャジャーンとピリオド風に音楽が入るところを、舞台ではバ

ンドが軽快にジャズを演奏して締める。コントの締めにはジャズの生演奏を使いました。番組名は、立体コント「メリーゴーラウンド」と決めました。出演は劇団員の軽妙な演技で知られた3人、お爺ちゃん岩崎徹、お兄ちゃん上田修、お姉ちゃんの田賀小夜子の、3人とも完璧な広島弁の名人で、ドジ・ボケ・マヌケの3人組を結成。名付けて劇団トリオ「メリゴラ・グループ」。普通はラジオスタジオのマイクの前でしゃべるのだけど、お祭りだとなると外に飛び出す3人組。舞台の上で文字通りの立体コントを演じて客席を沸かせるという、珍無類のラジオ番組を産み出しました。昭和30年に入社した直後のこと。

司会はカープの野球中継で、洪い声での実況放送が目立った桐原正文アナウンサー。この方は、元ラジオ中国放送劇団のメンバー。もっとさかのぼれば、もと広島大学演劇研究会の重鎮名優で、チェーホフ「結婚申し込み」の名演技で有名になった役者であり、軽妙な演技力の持ち主。当然ながら私の2級先輩。

そこへ加わったのが、「シェリー箕島カルテット」なるジャズバンド。それは、ラジオ中国が誇るサロンオケの主要メンバーによって結成されたジャズバンドでありました。ときにはゲストに歌手も招き、ドサ回りと言って、各地持ち回りの公開録音イベントとして何度も地方へ出かけて行ったものです。もちろん私も同行しておりました。

実は、この「メリーゴーラウンド」のプランは、附属の高校3年生の時に既に企画書だけ書き上げていたのです。遊園地にあるメリーゴーラウンドからの命名ですが、単に名前を借りただけで、立

体コントがメインとなる企画を作っていたのです。

初めのうちは私がコント原稿を書いておりました。原稿用紙の間にカーボン複写紙を挟み、アナ、出演3人、バンド、ミキサー、私用にと7枚分の放送原稿を手書きで書いて作っていたのです。当時からボールペンという新筆記具が産まれてくれたお陰でした。ところが次第に持ち番組が増えて仕事も過重となり、コント原稿を考えて、台本を手書きする重労働に耐えられず、堪らず先輩で放送作家の多地映一さんにコント原稿をお願いするようになり、遂には番組専属のコント作家を引き受けて戴きました。原稿料が安かったことが、いまなお申し訳なく思っています。千円単位だったかな？

大学で私の1年下に、上田修君と言うユニークな人物が居りました。彼もまた、大学生のままラジオ中国の劇団員になった人物ですが、前述のメリゴラトリオの一員としても軽妙な役者でしたが、彼も脚本作家としての才能に恵まれており、のちには役者としてよりも、放送作家としての活躍ぶりが目立つようになって行きました。修道高校の出身で広大演劇部に入って来たのですが、修道高校時代に校内での演劇発表会で彼は、「天に啼く山羊」という、発育不全の少年を演じて一躍、その天性の演技力が評価されるに至りました。その会場で彼の名演を直接見ていた私と多地映一さんとは異口同音、「広大劇研に来てくれないかなあ」と互いに顔を見合わせて願ったものです。願いは、やがて叶いました。上田修君は大学生となり、広大劇研の会員に加わってくれました。

高校生時代と少しも変わらぬ、特異でユニークな感性を備えた青年となっていました。たちまち存在感を発揮した彼は、ルートに沿って流れ込むように放送劇団の研究生に加わり、たちまち正劇団員となりました。上田修君（芸名、玉木しゅんぺい）は宇野重吉並みの特異な演技風に加えて、人柄が滲み出るような軽妙な脚本を書き、かつ自ら演じて見事でした。後年、突如、私が報道部長を命じられた年の民放の番組コンクールに、報道部として出品した作品の執筆者に玉木しゅんぺい氏を指名しましたが、見事に奨励賞だったか優秀賞だったかを受賞して大きな話題となりました。

提出部門が「娯楽部門」であり、提出者が報道



93. 前列右端が多地映一氏、左端が上田修氏
(昭和51年)

部だったからです。およそ報道が娯楽番組なんて、どなたも予想しなかったでしょう。

この一年間、さまざまな問題で世間を賑わせた我々が地域を、はるか上空をゆくヘリコプターから鳥の眼で空撮してお見せしながら、そこへユニークでアイロニー豊かなコメントが、景色の移り変わりと共に、静かに語られて行く、という「空からおめでとう」と題する初めての実験番組でした。企画者というか仕掛け人は私だったのですが、脚本を依頼した玉木しゅんぺい君のユニークなコメントが、報道部からの出品だけど楽しい作品だ、というので報道部提出の報道番組でありながら初めて受賞しました。報道番組が娯楽番組として受賞した、なんて未だ聞いたことがない。すべて玉木君、本名、上田君を起用したお陰です。報道で娯楽なんて、普通あり得ませんよね。

○石田 そうですね。

○新井 あり得ませんが、賞を取った。裏を打ち明けると、幾つかの事情が絡まって、突然に私がラジオ制作部長から報道部長へと異動を命じられたことに起因しています。なにせ私は、報道人としての経験ゼロの素人。悪名高い記者クラブなんて入ったことも取材したこともない。政財界のお偉方になってマイクを向けたこともないような私が突如、報道のトップである部長に任命されました。詳細な説明は省きますが、常識ではありえない人事発令で報道部長になった。人事発令で就任した報道部長だから仕方ない。これからは私として出来ることはやるが、出来ないことは出来ないで通そうと腹を据えました。まあその一環として、この番組の逸話を聞いてください。

相当以前からRCC報道部は、優秀な中型ヘリコプターを持っていて取材に使っていました。着任早々、次のお正月番組を作るのに困っている、と聞いた私が、優れモノのヘリコプターがあるのだから、広島県内の主だった町や村を端から端までの全域、くまなく大空から撮って行けば、我が家が映ったとか我が町はこんなに狭かったかね、など地域の話題になる。それに年内に発生した好悪様々な出来事を思い出しながら、それぞれユニークなコメントを付けて流せ。そのコメントは軽妙なタッチの作家、玉木しゅんぺい君に依頼すれば最適。空から眺める鳥の目線を俯瞰と言うけ

ど、あの鳥の目線で各町の特徴を映し出し地域に伝わる逸話などを、お正月らしい軽いタッチでしゃべって貰おう。こんな具合でしたね。

○石田 それは昭和40年代、50年代、いつごろの話なんですか。

○新井 私が報道に行った後だから昭和51年の暮れだったかな。カープが優勝した次の年に、私は報道部長に転じた。そののちのデスク会議でお正月特番組の話になったときの、私からの新任部長提案だったと思います。たしか高橋研造君が担当に決まった、というか、彼が悩んでいたときに解決策を提示して、それを担当することになったのかな。賞を取ったあと、高橋君の喜びようが大変だったこと、覚えていますね。

だから私は、自分では報道人間とっていないんです。放送局の人間だというと、すぐに報道ですか、と来る。記者さん、ニュースを取材する人、出世街道に行くエリートマン、それからジャーナリストだ、と言われますよね。私なんか、ジャーナリストと言われると恥ずかしくて堪らない。出世への登竜門と言われ、激励されましたよ。ところが私は、その基礎的な素養を磨くべき場所である報道で、全く報道経験のない人物なのです。報道人間かくあるべし、なんて教育を受けた覚えも一切ない。全く反対の、叩き上げの制作人間です。なのに定年後、修道大学と比治山大学で10年以上、長々とジャーナリズム論を講義したのだから、我ながらお恥ずかしい仕様です。大病のため、いずれも途中で辞任しましたが。

○石田 今、「メリーゴーラウンド」のトリオの話で、ドサ周りをしたとおっしゃっていたのですが、広島県内を公開録音で回られたんですか。

○新井 そうです。

○石田 県外には行かなかったんですね。

○新井 はい、県外へは出ません。民間放送というのは原則、県域放送なのです。県域を外れての放送事業活動は許されていません。放送法と電波法により地方局への放送免許で規定されています。

そうは言っても電波ですから、地図通りに県外に出るな、と言ったって所詮ムリです。多少の漏れが生じて、思わぬところから「聞こえたよ」「見えたよ」との連絡が来る事例が多々あります。RCCラジオで最も遠くからは、オーストラリアか

らだったと聞きました。

どうしても番組企画の都合で県外からの中継を入れる必要が生じた場合は、「恐れながら」とばかり、当該地域の同系列の放送局にご挨拶（仁義を切る、と言います）に出向き、理由などを説明して黙認をお願いするのです。

たとえば、昭和48年にラジオ制作部長になるのだけれど、部長になっても私は、現場を外れることはありませんでした。だから直ちに悪口を言われた。「あいつは、いつも自分の席に居ない」とね。これ、私の持論です。「管理職なるもの、偉ぶってデスクに座ってハンコを押すだけが役目じゃない。プレイングマネージャーであるべきだ。こんな少人数の現場を抱えたまま仕事を外れるなど、上司として非常識かつ無責任である」。私は初めから、必ず自分で現場に出ていく主義でした。だから会社の中では、いつも悪口を言われていました。「あいつは、いつもおらん」と。平気でした。そんな、ただデスクに座っているような奴にロクな奴は居ない。私は必ず現場に立って番組を担当するスタイルで、部下が担当する番組であっても、ラジオの時代から現場に立っていました。ラジオの「柏村武昭のサテライト No.1」で松山市に中継に行くというと、部長である私も、のこのこ付いて行きましたよ。

○石田 部長は付いて行って何をされるんですか。

○新井 見ているだけです（笑）。スタッフは優れもの揃いですからね。そして、迎えてくれた先方の局の担当者に、「宜しくお願いします」と言って頭を下げるのです。そうして挨拶をするだけです。南海放送とは経緯があって昔から知った連中が多く、互いに系列を超えて局と局と

の間柄を温かく保って来た関係です。

○石田 下のほうから見たら、お目付け役が付いて来るかたちになって、なかなか息苦しいんじゃないんですか。

○新井 いやいや、柏村武昭とか、あの番組のスタッフは全員、気心の知れた連中です。上下の関係など、お気遣いなく、というところですね。柏村君に至っては、DJコンクールで日本一を獲得した直後、フリーになろうかと迷ったとき私に、「どうしましょうか」と相談に来たぐらいですから。

○石田 そうなんですね。

○新井 それと、担当者が私の直属の部下、というか面白い男でねえ。もとアナウンサーだけど私と同じで、番組を作りたいからアナウンサーをやめると言って、仕事を放り出し制作部へ異動して来た人物。松山の南海放送というのが、これまた私の昔からの友人が幾人も居る局なんですよ。何故かというとな海放送は、設立時にアナウンサーやスタッフが足りなかった。仕方がないので、こちらも出来立てのホヤホヤだったけど、スタッフが揃っていたラジオ中国に助けを求めて来た。だから草創期の苦労をお互いが助け合っているの、系列が違ってしまっても私たちTBS系のRCCラジオ中国も、NTV系列のRNB南海放送も互いに親戚同士みたいなのです。

互いに侍が多かったなあ。一家言を持ち、いつの間にか優れた仕事をやってのけているような人物揃いでした。物造り人間とは、それでなくちゃならない。あれから相当に時間が経った現在は、既に、そんな気風は消えたでしょうね、世代交代が進んだから。私は実はほかにもね、近隣の労働組合の役員同士という関係で、応援に行ったりピケを張ったり、社内をデモったりの経験も加わり、古い人間同士なら「おい、お前」の間柄なんです。県外出張も楽しいケースが多かったなあ。北の山陰放送も、西の山口放送も、東の山陽放送も、互いに似たような関係です。でもそこに系列ごとの競争が絡まってくるから、民放同士に難しいことが起こるのです。

腸捻転という言葉、ご存知ですね。いえ、医学用語じゃなくて民間放送局同士のネットワークという、運命共同体みたいで、利益配分組合みたいで、相互競争防衛共同体みたいな、大袈裟に言え



94. 「柏村武昭のサテライト No.1」

ばNATO欧州共同防衛組織とよく似たネットワーク組織が民放業界には4個、存在しています。実は困ったことに最初のうち大阪には、東京放送系列の民放として朝日放送があった。NETの系列局として毎日放送があったのです。それを入れ替えようという民放系列界での大手術が昭和49年11月19日に実施されました。そして大阪では毎日放送が東京放送系列へ、朝日放送がNET系列へと捻転解消となった出来事がありました。

ラジオもテレビもネット系列間の競争が熾烈となり、松山の南海放送と広島の中興放送とは往年の友好関係が失われ、今や敵対するNTV系列とTBS系列としての両局関係となった気配です。秘話ですが時効だから話しましょう。一時期は私が報道に居たころ、NTV系の南海放送を何とかして東京放送系列に引き込めないものか、との裏面作戦が密に行われていたこと。当時は広島カープの試合数を少しでも多く放送できるよう獲得したいという対策を込めて、広島にTBS支局が存在していたことなど、今や誰も知らないでしょうね。この密かな作戦は実らず、その代わり平成4（1992）年10月1日、松山に東京放送系の新局「あいテレビ局」が誕生して久しいなど、矢の如き時の流れを実感しています。

ラジオドラマ「広島事件録」の思い出

○新井 とてつもなく忙しくなった年というのは、一つ言い残したけれども、テレビ制作担当になった時に、ラジオと兼務しろと命じられたのですが、兼務して何をやったかという、ラジオの連続ドラマを13本作った。作られたのではなくて、私が企画し着手していた折にテレビに行けという異動辞令が出たので、残した仕事はやり遂げたい、と主張して、ラジオ・ドキュメンタリー13本を作ったのです。昭和36年、すべて私一人の演出です。

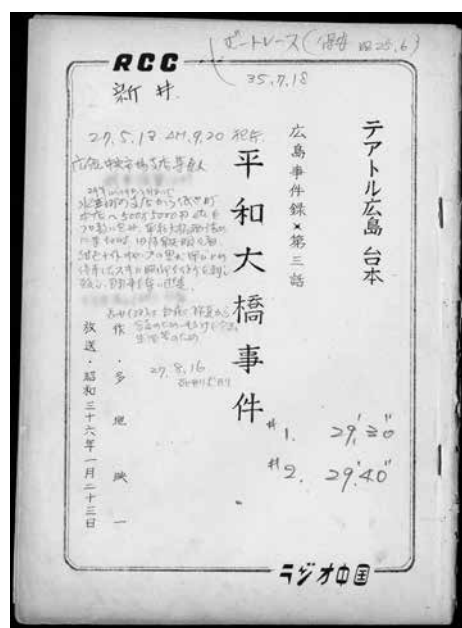
これも作家の多地映一さんとのコンビですが、広島県警提供の広報誌の中から手に入れた、基礎資料がドッサリ手元に在るわけです。その中の様々な事件の裏表を、当時の捜査担当者が自ら書いたエピソードが残っている。凄い資料なのです。事件解決の体験談みたいなものまである。その貴重な資料を基にして脚本に仕上げ、「広島事件録」

と銘打って、ラジオの30分もの。それこそ正しく生々しいドキュメンタリードラマ13本を作り上げました。時期は昭和36年の放送です。

実録の部分は、当時の被疑者、容疑者、犯人、ないしは周囲の証言者の録音を取って使う。それが出来ないところは、劇団員が犯行現場の状況を演じてみせる。「広島事件録」13回。このテープは、全部ではないけど、自分で家に持ち帰っていたものだけが残りました。あとは、みんな消えてしまったけどね。

○石田 主にどういった事件を取り上げたんですか。

○新井 お役所や大企業じゃなく、何処にでも居るような庶民が中心人物の事件です。広島で戦後、最初に発生した特異な事件に、「平和大橋事件」というのがあります。平和大橋が出来たばかりの頃に一人の老人が生活に困り、どうしても金が欲しい。それで何時もこの時間、平和大橋の上を自転車で通り過ぎる銀行マンが居る。あの銀行マンは、本社から支店へ現金を運んでいるらしい。こいつを狙ったら金が手に入るだろうと思って、その老人が棒の先に包丁か何かを取り付けて槍を作るんです。それで銀行マンが平和大橋を通り過ぎるのを待ち構えておいて、爺さんは男を刺してお金を奪うという事件があった。それをそっくりそのまま、当時の刑事の思い出話を使って再現ド



95. 「広島事件録、第3話・平和大橋事件」台本（昭和36年）

ラマにしました。

事件は、その老人を岩崎徹さんに演じて貰い、広島弁の銀行員を竹田淳三さんという、庄原出身で県北の生々しい広島弁を操る、というか、生え抜きの広島弁をしゃべる役者に演じて貰った。この番組は、現場でロケーションをやった部分もありましたが、ドラマ部分はすべてスタジオで収録しました。

チリチリンと遠くから自転車を走らせて、「来たぞ、来たぞ、来たぞ」と老人が待ち構えていて、「ええい」と槍で突くというドラマでした。そういう当時発生した事件を再現して、平和大橋は完成したが、まだまだ生きて行くのがやっとな、という切羽詰まった戦後の時代だから、その老人は金なくて暮らして行けず、思いついたのは誰でも一応は考えること。銀行なら金があるという。誰だって考えますが、そういう事を実際にやっけるほど切羽詰まって殺しをやったのでしょ。

そういう時代の生々しい事実を、聞く人に改めて突き付けたドラマでした。迫る銀行員の、自転車を漕ぎながらの広島弁の独白。待ち構える老人の荒々しい呼吸音まで聞こえる迫力のドラマでした。

それから、「東雲事件」というのもありました。私は東雲町に住んでいるんだけど、一人暮らしの裕福な老人が東雲町で殺され、その死体が床下に隠されていた。たくさん持っていたらしいお金も、みな消えてなくなっている。犯人は誰か、ということになった。

実は目撃者がいたんです。新聞配達か何かの人で、「黒い人影が、朝早く、あの家からふっと出てきて消えて行った」との証言です。また、隣に住んでいた奥様が犯行時刻頃、「ガタガタと物音がした」と言うので、警官が訪ねて来るんですね。そして、もう一人の、別の確かな目撃者を警察が発見することになるのです。姿形まで良く分かる。つまり、レインコートか何かを着ているとか、帽子を被っていたとかね。しかし結局、事件は迷宮入りになってしまったのです。一人の老人が死んでね。

それで私たちは思った。迷宮入りをお宮入りにせず、なんとか犯人を捕まえてやろうじゃないか、とね。そして、2番目に詳しく見ていたという人

に面会して詳しくインタビューしたのです。正面から「インタビューします」と言えば証人は、ガードを固めて全部はしゃべってくれないだろうから、週刊誌か何かを丸めて、その中にマイクを忍ばせておいて、知らん顔で事件の話聞き出すという調子でインタビューをしました。

その結果、非常に具体的な話を聞き出すことが出来たのです。何時ごろに出て来て、靴はスニーカーのような感じの物を履いていて。あのころスニーカーとは言っていなかったけどね。目深にレインハットみたいな帽子を被っていて、周囲を見回すような姿勢をしながら、あの家からスッと出て行った、と言うのです。その時間が、隣の文房具屋の奥さんが聞いていた「ガタガタ」という音のした時刻とぴったり合う。その奥さんというのが実は、RCCの向井運転手の奥さんなんです。その奥さんにも直接インタビューして、はっきりした証言を貰った。それで、だんだんと具体的な犯人像が浮かんで来る訳ですよ。結局、犯人を特定するまでには行かなかったけど、ここまで情報が明らかになったら犯人像が分かるのではないかと、いうところまで、極めて具体的な足取りから、音を聞いていた時刻から場所まで分かって来たので、「よし、ここまでで放送に踏み切ろう」と、その段階までのすべてをインタビューと証言の録音とを交えて放送しました。

すると、東警察署から署員が、すっ飛んで来た。「テープを、もう一遍、聞かせて欲しい。あのラジオを聞いたら犯人の見当が付きそうだと、もう一度、捜査をやり直そう」とね。しかし放送局というのは、ラジオのテープにしる、テレビのVTRにしる、外部に貸し出してはいけない、取材源秘匿の問題があるから。だから、貸し出すのは出来ないが、ここで目の前で録音テープを再生して聞かせてあげよう、となった。

そうしたらテープを聞いた後、刑事さん、「よっしゃ」と言ってすっ飛んで帰って行きました。しかし、やはり真犯人は捕まえられなかったそうです。もし捕まっていたら、「東雲事件、その2」として放送してやろうと狙っていたのですがね。以下に各回の放送日と題名を列記しておきます。1961年、昭和36年の放送です。何れも脚本は多地映一、演出は私。

- | | | | |
|----|-------|------------|---|
| | * | * | * |
| 1 | 放送日不詳 | 金平糖事件 | |
| 2 | 1月16日 | 大須賀事件 | |
| 3 | 1月23日 | 平和大橋事件 | |
| 4 | 1月30日 | 胡麻原山事件 | |
| 5 | 2月6日 | 瀬野川事件 | |
| 6 | 2月20日 | どろぼう談義 | |
| 7 | 2月27日 | 東雲町事件 | |
| 8 | 3月6日 | チンピラ | |
| 9 | 3月13日 | 御調事件 | |
| 10 | 3月20日 | 理容学校事件 | |
| 11 | 3月22日 | 緑井事件、その後 | |
| 12 | 3月27日 | 座談会「事件を語る」 | |

13 4月3日 ひろみちゃん殺し

* * *

そんなことで、精力を使い果たしている時に、テレビの仕事が次々に飛び込んで来るのです。しかし、まだ昭和36年の初めは、テレビのスタジオもVTRもない。全部、生放送で時間どおり収めるという過酷な条件の中で、ラジオドラマを13本作りながら、たった男・女二人のディレクターだから、自分たちだけで威張ったものです。「我ら二人は第1号だよな。女の第1号と男の第1号だよな」と自慢したけど、誰も聞いてくれていない(笑)。

第7章 テレビ放送の開始と番組制作

テレビ放送の開始と東京での速成研修

○新井 広島民放テレビ開始は、昭和34年4月1日に開局した、ラジオ中国テレビです。NHKテレビだけが、民放ラジオと同時期の、昭和28年2月1日から、既にテレビ放送を始めています。

それに負けるなというので、民間放送ではNTV日本テレビ放送網が、NHKにすぐ続いて昭和28年8月28日にテレビ放送を始めます。民放テレビの中で一番早い。少し遅れて他の民放テレビも始まって行くのですが、何せラジオとはケタ違いに、テレビは金も人も喰う。時間も結局、大きく喰ってしまいましたね。あの当時、民放ラジオ局は続々開局していますが、民放テレビ局は未だ日本テレビだけ。

何故か私は未だ学生の身分で、日本テレビのスタジオとテレビカメラなる大型機材などを見せて貰った記憶があります。ある作家、瀬田美樹男さんの紹介で潜り込んだという記憶で、まさしく卵焼きが出来るほど強烈な照明と、巨大な図体の化け物じみたテレビカメラを驚異の眼で見ました。

続いて、昭和30年4月10日、私のラジオ中国入社と時を同じくして、民放テレビ第2号のKRTラジオ東京テレビ（現、TBS東京放送）がテレビ放送を始めることになるのですが、全国的に民間放送テレビが広まるのは、まだまだ先の、当時の皇太子殿下・妃殿下の結婚式であって、美智子さんのミッチーブーム。あのパレード中継が全国に民放テレビの火を点けました。昭和34年4月1日でした。因みに、この日だけで9局がテレビ放送を開始しています。その中に、ラジオ中国テレビジョンの名も見えます。

遡って昭和32年10月22日、あの列島改造論の田中角栄郵政大臣が民放テレビ43局に、一斉大量の予備免許を下付して大きな話題を呼びました。このころから、テレビと利権の関係が問われ始めたと言ってよいでしょう。田中角栄なる政治家と放送局免許の利権との噂も、この大量免許からです。

このとき予備免許を貰ったラジオ中国は、ただちにテレビの準備に入ったのですが、ラジオの時と同じで、免許は貰ったものの誰かテレビに詳しい人は居ないか、と泥縄式に慌てて人材探しに踏



96. 初期の白黒カメラとレンズ

み切っています。送信所と、テレビ中継車と、テレビスタジオ付きの新放送会館も必要。NHKでの経験者が電波管理局の関係者、もしくは視聴覚教育の関係者か、映画界の人物など見当をその辺りにつけたかどうか、途中入社で入って来たのは電波管理局からの技術系らしき2人、教育委員会の視聴覚関係者1人、それくらい。あとは舞台美術と照明技師とメイクの専門家が必要。ほかに社内を見わたしても、ラジオ人間ばかり。テレビや映画や芝居のこと知っている人は？となって、国内研修として誰かを先発テレビ局に国内留学させるにも、さて誰を、と迷ったのでしょうか。技術系のスタッフだけは早めでしたが、私たち番組系スタッフは遅れに遅れて、先発テレビ局であるキー局の東京放送（当時はKRTラジオ東京と呼称中）などへ出そう、となったのが昭和34年3月でした。4月にはテレビ放送を開始する1カ月前。事前の試験電波や試験放送を考えれば、泥縄式も良いところ。時間はありませんでした。出張辞令は出たけど、私の行く先はKRTラジオ東京テレビ制作部の橋本信也氏。彼を師としてドラマを含む芸能、中継番組全般を研修せよ、でした。選ばれたのは、ラジオ制作課の私と小畑和子女史の二人で、「テレビ制作課を兼務せよ」との辞令。小畑女史は社会教養番組一般がメインでした。でも実際は互い



97. テレビ開局の広告電車

に一緒に行動を取り、同じ研修を二人揃って受けることが多かったと記憶します。テレビの基礎知識なんて誰も知らない、誰も教えてくれない。遠いところから映像を送って見るわけだからテレビジョンと言うのだ。映像が見える理由は、光の点が画面を左右に走り、それが上から下まで走り続け結局525本の光の線が映像を作り出しているのだ。これをNTSC方式と言うのだ、くらいかな。因みに現在のHDTVデジタルハイビジョンでは、走査線は一挙に1125本に増え、更に精細な画面を作り出しています。

さて、「テレビ時代だ」となったので私たちは取るも取りあえず上京し、「一か月間では多過ぎて開局に間に合わぬ、20日程度で帰って来い」との速成栽培命令。「ついでに二人が一緒になれば、有名な新井和子さんじゃ」と、既に知られていた東京放送の著名ディレクター氏の名を挙げて冷やかす者も居りましたが、トンデモナイ。当の本人たる私たちは必死の思いでした。だいたい小畑女史は5年ほどの姉上様の原爆孤児。彼女は料理や家庭などの教養番組研修、私はスタジオドラマから歌舞伎座中継などの舞台中継、戸外での中継番組など、芸能から演芸技能、ドラマを中心に研修する。師匠は、NHKからTBSに移籍したばかりの中堅ドラマ演出家・橋本信也さん。ほかにも折から著名な岡本愛彦さんが活動中だし、多士済々のメンバーが揃っている。これ幸いとばかり、誰彼となく後を追いつつ、彼らの技を盗み取ろうと食い下がる毎日でした。演出家の橋本信也氏は、典型的な徒弟制度方式で私を扱き使いました。私はAD、アシスタントディレクターと呼ばれる助手ですね。なんでも師匠の命に従ってスタジオ内を走るのです。「壁の時計の針を合わせろ」「次の

場面では針を動かせ」～針を何分動かせ、なんて具体的な指示は出ない。ADなら自分で判断して行動せよ。見事な教育法です。言われたことを言われた通り実行するのではなく、自分で指示を先取りしつつ、師匠の指示を理解し、自分で考えて指示以上に行動するのがADの仕事で役割だ。TBS研修中の現場で拾った台本は、全部、有難く載って持ち帰りました。それがそのまま手本です。散らばっていたキューシートも、捨てられたセット図も、セットの展開図も、スタジオ内の人間の動きとカメラ、セットの間の行動線も学び取り盗み取りました。だからついで、橋本信也氏からのレクチュアを戴いた記憶がありません。折々に交わした会話がすべてでした。サブでのキューの出し方も、カメラに対する指示も、音声や照明への指示も、短く、明瞭で、鋭い洞察力を含んでいました。

この当時、信じられないでしょうが、TBSでもレギュラーのテレビドラマ何本かが、なんと、ナマ放送でした。まだまだVTR撮りが大変だった時代です。そう簡単にはVTR装置が使えなかった時代です。まるで、各方面から山のように注文が来る病院のCT検査みたいですね。

30分ドラマの場合ですが、スタジオの壁際にズラリとテレビのセットが組んであり、スタジオの真ん中はガランドウのスペースが確保してあり、そこに大型のテレビカメラがペDESTALドリーという移動車の上に据えられて3台から4台、ときには5～6台もが集中するのです。ゴチャゴチャになって、カメラ毎に引っ張っている太いケーブルが絡まりそう。でも不思議にコンガラガラナイでスムーズにカメラは移動して行くのです。まるで神業。カメラマンと、それを支えるケーブル捌き係という専門家との連携プレイのお陰なのです。

生放送となると、「ハイ、ここで場面代わって次の場面」なんていう余裕や、場面転換の時間など全くナイ。前の場面から、直ちに次の場面に移るのだから、さあ大変なのは出演者たち。さすがにそのあたりは脚本家が考慮していて、連続した場面と同じ役者が続いて出ている、なんて無茶な設定はして有りませんが、衣装も、手に持つカバンも、着替えたり持ち替えたりする時間がない、なんて難問はザラに出て来る。

一斉に走り廻り、お付きの世話役も一緒に走り廻り、化粧係は汗を拭うべく疾走し、それにつれてカメラも人間も、ドーッとばかり移動して来る。それはもう、スタジオ中が戦闘状態で乱痴気騒ぎ。誰かに突き当たっても「痛いっ」なんて声も出せない。でも歴戦の勇者であるベテランAD、FD（フロアディレクター）氏は平然たるもの。すべの先を読んで、先回りの術で悠然と構えておりましたねえ。

置いてあった灰皿は消えてるし、壁の時計は朝から夜になってるし、見えなきゃ構わぬだろうと言う訳で、上半身だけバリッとしたスーツ姿だが、椅子に座って見えない下半身はステテコのまま、なんて私が遭遇した本当の話です。

テレビドラマの生放送の現場なんて、凄まじいほどの殺気に溢れた戦場でしたねえ。全くのテレビ新人だった私は、未だKRTと呼ばれていたラジオ東京のテレビ局社で、超ベテランの助手群の中に放り込まれ、とにかく走れっ、と命じられるまま走り切った、実体験研修でした。

「青い目の東京日記」とかいう、アメリカ美人の出る軽演劇風ホームドラマなどに、ですよ。見ていたら何でもないような普通のドラマなのに、それはそれは鍛えられました。心底、テレビという奴は、と思い知らされました。生半可の心根では、たちまち音を上げるか、落ちこぼれるかのどちらかでしょうね。

一足早くテレビを始めていたKRTラジオ東京テレビジョン。RCCと同時期の3月に東京でスタートしたのがフジテレビだったので、私たちと一緒に、フジの研修生たちもラジオ東京テレビの現場で働いていましたね。実は私、東京での研修中の定宿は、神宮前に在った「尚志会館」でした。附属出身だから良からうと言う訳で利用させて戴きました。そこに、もう一人の同宿人が居ました。広島大学の元学長、皇至道さんの長男、皇達也君。附属の50回でNET（のちのテレビ朝日）入社を狙っての上京でした。互いに「頑張れよ」と言い合ったものですが後年、彼はNETの芸能番組担当ディレクターとして大立者となり名を挙げました。彼の姉上、皇暢子さん（46回）もまた後年、ラジオ中国のアナウンサーとなって私と共にテレビ時代を走り抜けた人材です。彼ら彼女ら姉妹も、

ともに私が創設した放送班で、附属時代に活躍していた根っからの放送人でありました。惜しくも達也君は早世しましたが。

日本教育テレビ、NETという放送局が昭和34年2月に誕生しています。NET日本教育テレビというのは、名前のおり教育放送を専門とするテレビ局です。当時、まだ郵政省は教育放送が重要であると考えていたので、各民間放送も教育放送番組を15%程度、流さなければならないということになっており、その15%を供給すべく赤尾好夫氏が社長となってNET日本教育テレビという基幹放送局が出来たわけです。これが後にテレビ朝日という名前に変わり、教育放送専門局の肩書をそっくり返上して「テレビ朝日」という一般の普通放送局に変貌します。民放には、特殊な目的で生まれたはずの放送局なのに、いつの間にか普通の一般放送局になってしまった局が幾つかありました。その典型がNET日本教育テレビで、似たようなケースとして、準教育テレビ局だった毎日放送が、先述の腸捻転解消を機に普通の一般局に変身しています。昭和39年4月12日には教育放送専門局として日本科学技術振興財団による東京12チャンネル（のちのテレビ東京）が誕生します。読売テレビも本来は、準教育放送専門局だったはずです。みなの中に、一般的な普通のテレビ局に変わってしまいました。政治的転換だと見られています。

そういうかたちで昭和34年4月にラジオ中国テレビがスタートする時には、KRTラジオ東京テレビ（東京放送テレビ）は一步早くスタートしていて、既に幾つもの名作を世に送り出しておりました。例の岡本愛彦さんの名作「私は貝になりたい」。これが昭和33年10月31日ですね。それから、私が昭和34年3月にラジオ東京テレビに研修出張したとき、私の師匠はNHKから来た橋本信也さんと岡本愛彦さんほかでした。NHK出身者をラジオ東京は大量に引っこ抜いていたのでしょね。ほかにも数人のNHK出身のテレビディレクターがおりましたから。映画界からも大部来ている様子でした。日活とか松竹とかね。美術とか大道具関係は、藤波小道具とか高津商会とか、みな専門の業者が入っていました。それらの部門こそプロ揃いでしたね、見ていて一目で分かりますから。

研修の国内留学と言っても、1カ月はムリで、早く帰って来て現場に入れ、ですから。二十日ちょっと過ぎぐらいの短い間。そこで教えられたことは、典型的な徒弟奉公システムでした。思いつき鍛えられました。テレビの現場でね。有名な岡本ラブヒコさんなど、稽古場やスタジオで何度も出会い、稽古中のスタジオへ潜り込んで実際に盗み見しましたが、さすが雲の上の人でした。

ところがテレビ新時代には、えてして瞬間湯沸かし器みたいな激情型の人物が多かったようで、K R Tテレビの田中某とかいう若手中堅の音楽番組のディレクター氏は、中二階の副調整室の椅子に座ったまま、階下のスタジオ内でカメラリハーサルに取り組んでいる第一級の有名歌手に向けて、スタジオじゅうに轟くスピーカーの大音声で、「何やってんだ、ばっきやろう、ポンと出の新人じゃあるめえし、お粗末だぞ、出直して来い」などと怒鳴りつけているんです。見学していた私の方が恥ずかしくなってスタジオから外へ出ました。怒声を受ける歌手側も、だれ一人文句を言うでもなく平身低頭。それこそ有名な第一級の歌手が、ですよ。テレビのディレクターって、そんなに偉いのかなあ、と苦いものが、しきりに喉に込み上げて来たのを思い出します。「はい、頭っから、もう一度」で、その場はオシマイ。

スタジオでのドラマほか各種番組制作と、ロケーション撮影、歌舞伎中継まで全部、私は橋本信也さんの部下として勉強しました。だから私は今もって、ドラマと中継番組ディレクターであると同時に、地域番組を中心とするローカル局としての立ち位置専門の番組担当。とりわけ現地からのテレビナマ中継を担当する専門ディレクターとして全力疾走して来たなあ、と回想しております。

同時期にK R Tで研修を受けた小畑和子さんも、報道経験はありませんでしたが、K R Tの社会教育番組、新聞で言うならば家庭欄・文化欄みたいなものですが、そのような番組グループの下に付いて研修していました。のちに小畑和子さんは主として、料理番組中心のご婦人向け番組を担当するようになります。

のちに私は、広島県の郷土芸能もの、地方の民俗風習番組から中継番組、そして遂には、テレビドラマにも手を広げて、合計10本のテレビドラマを

制作しました。うち自分で演出したドラマが4本でした。残りの6本は若い部員が演出して作り上げました。私はテレビ制作部長として番組の制作に当たりました。企画を立て、構想を練り、演出や助手などのスタッフを決め、予算を取り、出演者を決め、美術、照明、化粧などの外部スタッフへ発注し、その番組を演出する制作課員へバトンを渡すのが制作という立場の私の役目です。結構、有名な人の脚本も使いました。大阪の藤本義一さんには、私が大阪の自宅まで押しかけて行って、「是非、ヒロシマを書いてくれ」と頼み込んで書いて戴きました。書下ろしの30分テレビドラマ「地表」。演出はテレビ制作部の筆頭にいた佐々木嘉治君に委ね、なかなかの佳作を作り出せたと思っています。藤本義一さんには、いささか無理を願ったのではと、やや心が残る作品でした。

ほかには広島にゆかりのある高橋玄洋さんの「駅裏」かな。地元の作家グループでは日下次郎さん、多地映一さん、笈浩二さん、玉木しゅんぺいさん、など多士済々でした。

これらのテレビドラマ制作は、当然ながらテレビスタジオとV T R完備の新館が完成した昭和36年10月以降の成果です。

草創期の放送施設

○新井 昭和34年4月1日が、R C Cラジオ中国テレビのスタートです。スタートするにあたっては、広島市南部の海沿いにある黄金山の山頂にテレビ送信所を造る、ということで広島市との交渉から始まりました。山頂には山城の跡があるのです。石垣も残っているし、簡単には建設許可は出せない、というのです。文化財保存という見地から交渉して、山の表側は遺跡が残っているから使えない、奥側の小高い部分ならば、ということで、そこにラジオ中国テレビジョンは鉄塔と局舎を建てるの許可を貰って建設に取り掛かったのです。

ところが、ですよ、10年ほど後に広島テレビが出て来ました。同じように黄金山にテレビ塔を建てたいと広島市に申請しました。遺跡が残っているから山の表側はダメと聞いていたから、どうするのか、と見ていたら何と、山の表側で、ラジオ中国が遠慮したところへ堂々と広島テレビのテレビ送信所の建設工事が始まったじゃないです

か。私たちラジオ中国の社員たちは過去の経緯を知っているから全員、無然たる表情で山頂の工事を眺めたものです。あそこにあった遺跡がどうなったのか、誰も知りませんがね。どうなってしまったのでしょうか。

私たちは、黄金山の山頂に鉄塔を建てたと同時に、送信所の局舎内に、小さなスタジオを作りました。アナウンス用のスタジオです。そこからアナウンサーが、ニュース、天気予報、コマーシャルを読むためです。送信設備には、通常なら不要なテロップという字幕カードを電波に乗せる装置が追加されました。ほかにもフィルム送出装置が追加されます。テレビ映画を放送する設備ですね。そういった、テレビ放送に必要な最低限のもの全部を黄金山山頂のテレビ塔の下の送信所内にコンパクトに設置しました。つまりラジオ中国のテレビ送信所は、テレビ電波を発射するだけの設備ではなく、一人前のテレビ番組を発射できるだけの必要最小限度の設備を備えた、小型のテレビ放送局に変身していたのです。理由は簡単です。テレビスタジオもなく、VTR装置もないラジオ中国テレビとしては、この方法で最小限度の自社番組をテレビ電波として送出し、VTRも無いのだから、唯一のテレビ局らしい機材であるテレビ中継車を駆使して制作するテレビ番組を、すべて生放送だ、と割り切ってスタートしていたのです。

その生放送を担当していた唯一のテレビ制作スタッフたる私と小畑女史にとって、テレビ中継車だけで番組を作り続けた2年半は、血が滲むが如き苦闘の連続でした。

だから、上柳町の社屋内のラジオスタジオかロビーをスタジオ代わりに使うか、社外の適当な施設を借りて照明やセットを組み、そこから生中継で放送するしか方法がない。篠田紀彦技術課長、



98. 第1号テレビ中継車

田中通俊主任らと一緒に広島市内各所を歩き回り、スタジオとして利用可能なビルを探し歩いた記憶があります。第1候補は鷹野橋付近にあった藤田組のビル、第2候補は平和公園内の平和記念資料館ロビー、第3候補は本社のラジオ第1スタジオでした。事実、テレビ送信所と平和記念資料館のホールを使ってのテレビ自社制作番組第一号作品を、誕生したばかりのラジオ中国テレビが原爆忌特番として、完全ナマ放送で強行したことがあります。なにせ当時のラジオ中国テレビには、テレビ用のスタジオはおろかVTRすらないのだから、止むを得ない現実的決断でした。

当然のことながら、そんな場所からのテレビ番組送出には初めから無理があります。技術的に本社宛てのマイクロ波の伝送可否という基本的な問題のほか、2～3台の巨大なテレビカメラを搬入し、場内を自在に動かしても画面に揺らぎや振動の起こらぬほど床面が滑らかであること。複雑で多数の器材を要する照明装置を設置し可動させる広さもあるか。番組内容に応じた広さのスタジオセットを、その場所に組み上げることが可能か。音声を調整するのに不要な雑音の有無のほか、会場内につきもののホールトーンと呼ぶ場内反響はどうか。などなど大きな困難が付きまとい、さまざまな無理を押し切った、放送事故（放送での失敗を、こう呼びます）の危険を承知の上での強硬手段でした。

放射線とガンを初めてテレビで告発

○新井 昭和34年8月5日。その春、広島に呱呱の声を挙げたばかりのRCCラジオ中国テレビジョンは、広島市の平和公園から初めての原爆特別番組を、これまた初めて全国向け番組としてナマ放送しました。

広島市の南端にそびえる黄金山に建設したテレビ送信所には、スタジオもVTRも持たないテレビ局として、せめてものニュースなど最低限必要な自社制作番組の送出機能（テレシネ設備を含む）だけは辛うじて備えられていました。

テレビ局らしい機材として所有していたのは、ただひとつ。3台の白黒テレビカメラを搭載したテレビ中継車と電源車の一式だけ。その宝物のようなテレビ中継車と電源車とを平和公園に乗りつ

け、電源はシティソース（電力会社の供給電力）の利用を予定するものの、万一の停電事故に備え電源車も搬入しての2台並列で駐車しました。

広島市平和記念館では折から広島平和美術展が開催されており、近くの慰霊碑前では「原水爆禁止世界大会」が開かれておりました。その平和記念館（当時の呼称）のロビーを仮スタジオとしてテレビのセットを組み上げ、照明器具も搬入して仮設照明を組み立て、ここから全国に原爆特別番組を放送しようという計画です。

いま私の手元には、色褪せて擦り切れそうになった当時の放送台本が1部だけ残されています。ここから先は、この台本から番組内容をご披露しましょう。

放送は昭和34年8月5日（水）午後10時からの30分間。ラジオ中国テレビからの全国11局ネット。番組名は『『ここにこんな人が』第23回～原爆ガンと取り組んで～』。出演は、内科開業医の於保源作（おほげんさく）氏。聞き手は、著名な評論家の渋谷秀雄氏。ゲスト、広島市原対協副会長で産婦人科医の正岡旭氏。被爆者で友人の武田武一氏。以上2人。

提供、田辺製薬。提携、週刊朝日。キー局は、ABC朝日放送から全国11局へネット。制作局は、ラジオ中国テレビジョン。

被爆から75年を経た現在、ようやく原爆の放射能がガン発症の大きな要因であると認知されるに至り、いわゆる原爆症患者としての認定に新たな道が開かれています。ところが、この放送記録が示しているとおり、昭和34年8月、既に市井の内科医から全く同じ見解が発表されており、まだ新



99. 「原爆ガンと取り組んで」撮影風景
（昭和34年）

しいメディアであったテレビの電波に乗って広島から初めて全国に公表されていたのです。

放送台本の一部を転記しましょう。

* * *

「去る6月13日、爆心地に近い此処、広島市平和記念館ホールで開かれた『原子爆弾後障害研究会』には、日本全国から300人を越える科学者が集まってそれぞれ注目すべき研究発表が行なわれた。そして、如何にすれば恐ろしい原爆の影響を防ぐ事が出来るかという共通の問題について活発な討論が行なわれた。なかでも、一人の町の開業医が8年間にわたる努力の結果まとめ上げた『原爆ガンの統計』という画期的な研究成果を発表する姿が人々の目を引いたのである。

この人が、広島市翠町に住む内科のお医者さん、於保源作先生である。先生は、原爆を受けた人の中でガンの患者が意外に多いことに先ず気がついた。放射能とガンの関係については既に良く知られている……『原爆とガンの関係』、これは詳しいデータを集めて研究しなければならない重要な問題だと考えた先生は、さっそく調査にとりかかったのである。」

《それから8年。於保先生は、広島市役所にある死亡届をもとに、この8年間に広島で亡くなったおよそ2万人について、一人一人詳しい調査を重ね、それをこまかく分類して行った。その結果、原爆を受けた人は、受けなかった人よりも20%ほど多くガンに罹っているし、ガンに罹る率は爆心地に近い人ほど高く、爆心地近くで原爆にあった人のガンによる死亡率は、普通人のなんと3倍から7倍にも達することが判ったのである。この研究のためには、先ず、なによりも詳しいデータを集めなければならない。そのために先生は沢山のアルバイト学生を使って一軒一軒、戸別訪問させ「原爆調査票」というカードにデータを記入させたのである》

於保先生が自力で集めた2万枚の調査カードには、こうして全員の被爆地点や詳細な症状などが記録されている一方、「14年も経っているので分らない」との回答も多く、もっと早く研究を始めるべきだったと、先生は悔しがっていたと言います。

* * *

原爆の日の前夜、広島から全国へ放送された「ここにこんな人が～原爆ガンと取り組んで～」の番組の聞き手であった渋沢秀雄氏と於保源作医師との対談で、於保先生が原爆ガンの研究に取り組んだ動機として幾つかのメモが台本に残されています。

- * * *
- ・「実態が失われつつある」
- ・「日本人の手による調査」
- ・「合同診療会での体験」
- ・「科学的データの把握」

その当時、広島では原爆症患者の合同診療会も開催されていました。多くの町の医師たちが、みな一様に於保先生と同じ思いを抱きながら、日常的に被爆者と接し続けていたことが、残されている放送台本から読み取れるのです。平和記念館の仮スタジオに並ぶ出演者は、司会の渋沢秀雄氏と於保源作先生。そしてゲストに産婦人科の医師でもある広島市原対協副会長と、知人の被爆者の4人でした。

対談の内容は、自ずと原爆症とガン、合同診療会と研究会での討議が中心となり、物理学者の発表したデータと於保理論が合致したことが主要テーマでした。つまり、被爆地点が爆心地から2～2.5kmまでの場合、放射能によるガン死亡に多大の影響がある、などの事実が科学的に実証されていたという点でした。こうして番組は、ABCと呼ばれる米軍による原爆の効果測定調査機関との関係、原爆症研究への政府からの支援、研究結果が被爆者に与える影響、そして於保先生の研究結果が各界に今後、どのような影響を及ぼすだろうか、などの疑問を投げかけながら番組を終了しています。

広島で実際に被爆者を診療し治療を続けてきた医師の間では、早い時期から、被爆時に受けた一次放射能はもちろん、原爆が爆発したのちの残留放射能も、更には強力な放射能を受けた物体から放射される二次放射能による被曝についても、重大な懸念が提起され始めていました。このことは、於保先生が指摘された問題を含めて、被爆から75年を経た今日、原爆医療法による原爆症患者の認定に当たって、改めて重要な要素として取り上げ

られるに至っており、あの放射能論議の具体的かつ実証的実例そのものではないでしょうか。「原爆ガン」の問題を、被爆から14年目にしてテレビで全国に向けて発言された於保先生の先見性と献身的なご努力には、ただただ頭がさがる思いです。番組で明らかにされたように、広島では医師による研究会などで早くから原爆の放射能とガンの関連性が指摘されていたことを、いわゆる専門家筋や政府筋は今まで知らなかったか無視していた、ということなのでしょう。

ここで恥ずかしながら、放送裏話を少々。

「ここにこんな人が」の広島平和公園から全国への生放送は、誕生したばかりのラジオ中国テレビにとって一大冒険であると同時に、絶好の実習チャンスでもありました。しかし、責任あるキー局の朝日放送としては、新米の地元局に任せっぱなしには出来ない立場にあります。番組CMは現場の仮スタジオからのナマ出しであり、おまけに、発局である地元RCCは開局早々として、ナマCMの全国向けナマ放送など全くの初体験でした。前日のセット組み込みからリハーサルのはじめは、大阪から大挙して駆け付けた営業とCM担当者、および若干の地元スタッフとによるナマCMリハに集中しました。

そのただ中に放り込まれた私たちは、文字通り汗みどろの奮戦となりました。平和記念館のホールには、テレビ用に滑らかに動くペDESTALドリーなどあるはずもない。せいぜいトライポットという名の三脚だけです。なんとか三脚に油を差して滑らかに動くよう期待するしかありません。幸い記念館ロビーの床は滑らかでフラットだから、なんとかドリーインなどカメラの自由な移動は可能だが、カメラから出ている太いケーブルをさばく係は誰に頼むことにしようか。連絡用のインカムも、カメラ本体から伸ばして使うしかないから、生放送中の行動範囲は限られてしまう。「必要に迫られたら、FDはインカムを外してスタジオ内を走れ」との号令が出ました。照明も、ありったけ全部を会館ロビーに搬入し、場内に組み上げたイントレ櫓に取りつけて、座談会とCMコーナーの2ヵ所だけを集中的に明るくするように狙いました。しかもナマCMたるや、「表面を水が流れ落ちる波板のガラス越しに商品のクローズ

アップを狙ったとたん、次はCMアナの表情を狙え」などの指示が出て、4本のターレットに4種類のレンズを取り付け、手でハンドルを回してレンズを選ぶという、旧式巨大カメラを操作するカメラマン氏は終始、汗だく状態でした。

私と小畑女史の2人が広島での民放テレビディレクター第1号だ。つまりは、君たち2人だけで全国放送のテレビ番組を作れ、という至上命令です。手分けしましたね二人で。小畑さんがテレビ中継車に乗り総合ディレクターとして映像、音声すべての采配を振る。残る私は、記念館ホールに仮設した仮スタジオでの座談会現場すべてを、つまり、照明からマイクから座談会の椅子席から司会者や出演者の誘導からリハーサルの進行から休憩中の飲み物の手配から、カメラ3台の移動を誘導するなど現場のすべてを仕切りました。

ただ一つ、極めて重要で失敗が許されないナマCMの進行だけは、キー局たる朝日放送と地元応援部隊の合同チームにすべてを委ねました。恥ずかしながらラジオ中国テレビには、もうほかに担当を命ずべき人材は残って居ませんでした。

準備には何日を費やしたでしょうか。主人公の於保先生との打ち合せはもちろん、先生の内科医としての日常など、何度もご自宅や往診先などを訪ねてフィルム取材を重ねました。当時は16mm白黒フィルムでの撮影であり、音声同録（つまり、トーキー）など望むべくもない時代です。取材カメラも、拝み倒したうえで、報道からカメラマンもろとも借用して何とか致しました。

番組の中では、そのフィルムによるシーンが結構つづくのですが、なにせ生放送で、しかも仮スタジオからなので、リハーサル中に現場ではフィルムシーンが見られないのです。これには正直困ったけど、どうしようもない。番組タイトルも前CMもスーパーも、すべてを送信所テレシネ室からのマスターディレクター氏による一発勝負のナマ加工によって送出する、という他人任せの大冒険でした。

本番中だったか、その直後だったのか今はもう記憶に薄いけど、すぐ近くの平和公園から突然、大きな悲鳴と怒声が湧き起こったので驚きました。全国から平和行進が到着し、原水爆禁止世界大会も開かれていることから、これは事件発生、

と直感しました。

「右翼が乱入した」と、現場から情報が届いたけど、騒ぎは収まるどころか、慰霊碑前と平和公園全体が凄まじい騒乱状態に陥った模様でした。はるか後に私たちは、そのとき慰霊碑前に乱入した右翼の青年の名前を、ふるえ上がるがごとき戦慄をもって知りました。

翌年、日比谷公会堂で開かれていた「総選挙にのぞむ三党首立会い演説会」をテレビが生中継している最中に、まさしく衆人環視のなかで社会党の浅沼委員長を刺殺した犯人、山口二矢を知ることになります。私たちの番組が終わったころ（と、思われます）、原水爆禁止世界大会が開かれている会場に突入して来た男こそ、あの日比谷公園での犯人、山口二矢だったのです。

テレビ中継車担当の小畑和子さんは8月6日、原爆で両親と兄の家族3人を失い、自身も学徒動員中に被爆していました。私とえば、紙一重で被爆死を免れた中学1年生であり、放射能の危険性など全く知らぬまま、広島市内をさまよって後年、あの夜、於保先生ご指摘の放射能起因のガンにより6回ものガンに襲われ、いまなお治癒の兆しさえ見えぬガン治療に明け暮れている入市被爆者です。平成21年2月3日、正式に特別原爆症患者と認定されました。

つまり、この原爆放射線とガンの関係を初めてテレビで全国へ訴えた番組を担当した私と小畑女史（令和2年3月14日没）の二人とも被爆者でした。しかも私のガン病歴は、正しく於保先生が全国へ訴えた通り、原爆放射線とガンの関係を実証するものであり、改めて於保先生の先見の明と実績とを語り明かし、先生の理論を世に訴えたいと思うのです。もう黙ってはおられない、との苛立ちと怒りを先生に代わって訴え続けて行きたいと思うのです。

ヒロシマで初めて、民放テレビが平和公園から世界へ向けて発した警告が、今こそ人類にとって最も緊急で重要な警告であったという事実を、今こそ大きく訴えて行きたいと思います。

にもかかわらず当時、昭和34年8月5日の夜、広島から全国に向けて放送された衝撃的な番組に対して、少なくとも担当者だった私たちに対して、政府や公的機関からの反応どころか問い合わせす

ら皆無だったこと。そして原爆とガンについて初めて声を挙げた於保先生のもとにも、政府はおろか関係機関などから何らかの調査か問い合わせがあったという気配も皆無だった、ということに激しい怒りを禁じ得ません。

於保源作先生は平成4年1月14日、市井の内科医として被爆者医療の問題点を初めて世に問い、多発するガン患者の治療に一身を捧げた85歳の生涯を閉じました。先年まではご子息が広島市翠町で、源作先生のご遺志を継いで於保内科小児科医院の名で地域医療を担って活躍していらしたのですが、病を得て残念ながら医院を閉じたこと、於保先生のご令嬢から伺いました。小畑女史は残念ながら令和2年初頭に亡くなりましたが、私は米寿を越え卒寿を目前に、病軀をいたわりつつ、証言活動などを細々と続けています。ただ病は年齢を重ねるごとに襲い掛かり、今もなお、6回目を数える腎臓ガンに悩まされております。

テレビ開局サービス放送も実習材料

○新井 昭和34年3月17日、テレビ開局前のラジオ中国テレビは、試験放送を兼ねて4月1日の本放送開始までの間、サービス放送を実施しました。

試験放送の開始時刻は11:00、「テストパターン・ミュージック」と称して、テレビ放送用のテストパターンを映像送出しながらフランシスコ・カナロ五重奏団の「パリのカナロ」ほかの軽快な演奏を流すという趣向。更に開局当日は、電電公社のマイクロ中継を利用して、大阪府立体育館からの「大相撲春場所中継」を放送しています。

特筆すべきは当日、3月17日、完全な自社制作テレビ番組をラジオと一緒に放送するという、サイマル形式で放送したことでしょう。国内留学で研修したばかりのテレビ番組制作術を、早くも実習を兼ねてのサービス放送としてテレビ制作番組第一号作品を放送しました。

番組名は「日立コンサート」、放送は昭和34年3月17日(火)16:00~17:00、広島市公会堂からのラジオ・テレビによる開局前のサービス放送、カメラワーク実験・実習番組で、制作はラジオ中国テレビジョン、担当はテレビ制作課です。もちろん担当者は私と小畑女史の二人、この時のFD(舞台監督)は小畑女史、私がテレビ中継車

内でのPD(プログラムディレクター)を受け持ちました。番組内容は「歌謡コンサート」です。

出演は芦野宏、二葉あき子、藤本三三代。演奏は服部良一とコンサートオーケストラ。構成は持ち込みで宣協社という広告会社。司会はRCCの豊島彰アナウンサー。映像SWは田中通俊。映像CCUは玉貴卓也。カメラは水野卓治、青山晃、藤原薫という豪華強力メンバーでした。

言うまでもなく全員自前のスタッフであり、みな必死の思いで第一号テレビ番組のナマ放送に集中いたしました。

歌謡曲番組というのは案外、新人テレビマンにとって画面を作り上げるには易しいでしょう。なにせ歌謡番組ですから、必ず番組には歌の歌詞という有力な手掛かりがあります。その歌詞に従ってカメラの映像を切り替え作り上げて行けば、先ずは何とかサマになるのです。

いま、映像を作り上げる、と申しましたが、実は、ここからイメージの世界になって行くのです。イメージを産み出す映像の奥深さと共に、映像の組み合わせ方による美しさも変化して行きます。しかもスチール写真という静止画ではなく、常に動いている動画が基本です。テレビの世界では、如何にカメラを動かして映像を作り上げるか、という最高の映像技術の問題が降りかかって来ます。

これらを言葉で描き出すのは至難の業ですが、常にテレビを見ている方々には分かって戴けるでしょう。テレビ初期時代は、一台のカメラに4個の焦点の違うレンズが取り付けられています。そして通常の場合、3台のカメラが集まってヒトツの番組を作り上げます。つまりところ合計12個のレンズが映し出す映像が、組み合わせされ結びつき合って番組が出来上がるのです。

更に通常は、全ての必要な機材が設置されたテレビ用のスタジオの中で、3台から4台のカメラが縦横に動き回って、多様な映像を切り取って行くのです。それに伴って音声も多様な変化と情報を拾い出します。思うだに変化に溢れた多元方程式を突き付けられながら、同時に、この多元方程式を瞬時に解き明かさねばならないという、一種の離れ業を演じなければならないのが、テレビ番組演出者の役割となるでしょう。

理屈を捏ねるのは、このあたりで止めましょう。

テレビは、映像と音響とで出来あがっています。その何れもが、同時に激しく変化し動き回るので。その瞬間、瞬間を切り取り、繋ぎ合わせるのが番組ディレクターの仕事です。歌謡曲番組では、音曲の流れと共に歌手の表情など歌の雰囲気映像化します。歌手の顔が大写しになったあと、ソロ演奏をするオーケストラ楽員が映り、やがて画面は会場全体に変わって行き、その中から再び歌手の姿が現れて来る、と同時に次の歌詞が歌い始められる、というように途切れることなく画面と音楽が映像化され、また音楽が映像を支えます。それらの映像変化は同時にまた、音楽の小節ごとの区切りに従って切り替わるのが原則です。

などなどのテレビ的操作技術の習得は、新人テレビマンにとって大変でした。歌や演奏の小節数を数えられない人も居ます。画面サイズで大写しのクローズアップ、と言っても一体どの程度の大写しが適当なのか分からない人もいます。業界用語では、大写しをC U、胸から上を狙ったサイズをB S、足先から全身を写すサイズはF F、その場のすべてを見せるF Sという全景サイズもあります。みんなアメリカ直輸入の用語ですから、やたらヨコ文字用語が多いのです。それに日本の歌舞伎や舞台美術などの特殊な業界用語もテレビの世界には入って来ている。上手と下手、タッパ、板付き、二重、箱馬などなど、そんな専門用語は知らないというスタッフもいる。それなのに、統一された用語によるシステムを、全員が共通に身に付けていなければ仕事にならない。初めのうちは泣きたいほどの凄まじさでしたねえ。

民間ローカル局なんて、演歌からクラシックまで、何でも全部こなせないと役に立ちません。音楽番組を担当するのに、楽器の名前すら知らないスタッフだって居たのです。

広島で初めて朝日ホールで開催された「ペレスプラド楽団演奏会」を中継放送したとき、それが原因で大失敗しました。舞台上の出演者は猛烈に激しいマンボの演奏集団だから、ただ彼らの演奏ぶりを見せていれば、それだけで一応は演奏会気分になれるから、これが失敗作だなんて一般大衆は気づかなかったかも知れませんが、大失敗作品でした。

事前に東京浅草の国際劇場まで下見に行ってい

ただのだけど、やっぱりダメでした。これ、今でも悔しさが残る出来事です。演奏の小節数を数えながら「カメラ割り」をするのだけど、「マンボNo.5」だとか「セレソローサ」だとか、金管楽器がソロで大活躍するのをバッチリ狙わなければ、テレビで中継する意味がないほどの場面なのに、ダメでした。かなり場数を踏んで来たカメラマンだったのだけど、楽器の名前が分かっていなかった。

事前に確認していなかった責任があるけど、ヘッドセット型連絡電話、インカムでカメラマンに、「それ、トロンボーンだ」とか、「次はテナーサクソだ」とか必死に指示するのだけど、楽器名が分かっていないから素晴らしいソロ演奏が狙えないのです。だからほとんど全編が、フルショットの全景か、ミディアムショット、グループショットだらけでオシマイ。こっぴどく叱られましたねえ、キー局サイドとスポンサーから。返す言葉もありませんでした。我が最大の失敗作品でした。

その点、歌謡番組と言うのは、歌詞に従って映像を絞って行けば一応なんとかなるのです。だからR C Cテレビ第一号作品の「日立コンサート」は、誕生したばかりのハッ月子みみたいなテレビ制作とテレビ制作技術の両チーム合同作戦により、無事に見事な「歌謡実験番組」として放送できました。

バッチリ我々新人テレビマンとしての、自己研修になりました。もちろん、まだV T Rが無い時期なので、公会堂からの全編ナマ中継放送でした。ナマ中継、という最大の緊張感にも慣れて来ました。ナマ放送時代の最大の成果は、このナマへの恐怖を乗り越える意識と準備策の獲得でしたねえ。

4月6日から本放送に入ったのですが、今のような24時間放送ではありませんでした。午前中の11:15に放送を開始して14:00で昼の部を終了。次は夕刻の17:00に放送を開始し、22:30で当日の放送を終わっており、一日8時間だけの放送で、あとは放送を休止しておりました。

4月10日は、ご承知のとおり、皇太子・皇太子妃ご成婚記念特別番組の中継放送で一日が終わった感じの、テレビ放送開始初日でありました。

次の自社制作番組はガラリ変わって4月4日、広島市公会堂からの「西日本民謡舞踊大会」の舞

台中継ナマ放送でした。

事前の打ち合わせと、内容下見とカメラ割りの打ち合わせで大変だったという記憶の番組。なにせ初回の打ち合わせが、広島市土橋町の西の検番で行われ、私をはじめスタッフ一同が、お初にお目にかかる検番のお姉様方や旦那衆の前で神妙な顔をして、義太夫や長唄、小唄、日舞の師匠様方との顔合わせと、独特の用語と慣習と舞台映えとの出会いでありました。

とにかく全員が場違いで戸惑って、何をやるのかが理解できず、幸か不幸か制作課長の藤田一久氏だけが業界に精通しているとして、藤田課長の命ずるとおりで舞台の組み立て、照明から衣装、鳴り物などの打ち合わせを進め、会場内の客席へのカメラ位置決定から、60分と言う放送時間の制約に応じた登退場をメインとする舞台進行を打ち合わせました。

確かまた私が、舞台に慣れているからというので舞台下手のフロアディレクターを務め、上手の舞台監督は藤田課長が引き受けたと記憶します。中継車に乗って番組全体を仕切るのは小畑女史しかおらず、民謡・舞踊などに全く無知な小畑・新井のチームが引き受けた次第です。何をどうやって放送したか覚えていません。花柳流の御師匠さんとか、長唄と三味線、小太鼓や鼓、のちに制作課員となる出雲敏弘君の笛、地方と呼ばれる人々の所作の見事さなどが記憶の底から蘇って参ります。

当時、話題となったのが、同年4月15日(水)20:00～21:30、テレビ版ラジオ番組公開ナマ放送「歌の風車」でした。なにせ、ご当地広島のスポンサーで、ラジオ界随一の人気公開番組です。ラジオ中国テレビジョン開局記念特別番組として、テレビでの中継放送が企画されての一大イベントでした。番組冒頭の園田アナウンサーによる名物の「東洋工業提供オ、歌のう風車あ」というタイトルアナウンスから始まる、ラジオの全国版人気番組を広島に持って来て、テレビ放送開始を記念してラジオとテレビで放送しよう、との東洋工業からの提案と聞きました。まだ正式にテレビを始めて2週間の放送局だ、と言うのに。

手元に放送台本の原本が残っています。放送時間は、なんと1時間30分という、特別拡大枠での



100. ラジオ「歌の風車」をテレビで公開放送

放送でした。台本はK R T東京放送から持ち込まれています。ステージセットの基本もラジオの公開放送と全く同じで、ステージ中央には高い大階段が据え付けられ、左右は見事な円柱とカーテンで彩られており、階段両脇がオーケストラ席で、歌手は中央の大階段から次々に降りて来ると言う趣向です。

司会は、獅子てんや、瀬戸わんやのお二人、歌は青木光一、織井茂子、曾根史郎、浜村美智子、旗照夫、藤本二三代、津川洋一、野村雪子、三浦洸一、野沢佳子、大江羊一、川村淳、築地容子など13人という豪華版。諸準備は周到でした。なにせ会場の広島市公会堂を二日間借り切っており、前日の午前中がステージ関係の仕込みで、午後2時から会場カメラリハーサルが行われました。

キー局の東京放送からもスタッフが大勢乗り込んで来ており、彼らが舞台と照明などの仕込みとテストを済ませておりました。私たち地元組は、ラジオとテレビの番組スタッフとして関わるだけで良いと言う万全の態勢でした。歌謡番組の経験は3月17日の「日立コンサート」などで、私たちがなりに研鑽を積んでは来ましたが、さて、これほどの本格的規模で、しかも東京キー局のスタッフを下準備で走らせたうえ、その彼らの目前で、新米テレビ局として豪華な歌謡番組を作り上げねばならない、というのは相当な緊張感を覚えざるを得ない環境でした。

その中心に居て、中継車内の狭い調整室で映像と音声を選別しながら、テレビの番組を作り上げる責任が押し掛かっておりました。その緊張感のゆえでしょうか、事前リハーサル中の舞台背景に大きな人影が映って、それが悠々と上手から下手

へと移動して行くではありませんか。明らかに舞台背景の Horizont 前に仕込んであるストリップ照明器具群の前を横切った、テレビ現場に無知なズブの素人の仕業です。

思わず私は、会場内への一斉告知用スピーカーのマイクを引っ掴んで怒鳴りました。「誰だ、照明器具の前を横切るヤツは。バカモノ、引っ込め！」。これが、のちのち有名になる私の一世一代の大音声、「バカモノ・マイク」でした。しかも、これにはオマケがあります。このリハーサル中の大事件の有様が、R C C ニュース16F のなかに残っていたのです。記念番組だから記録に残そうとなっていたのでしょうか、現場を撮影した16mm 記録フィルムに、この舞台背景を横切る大きな人影が残されておりまして。しかも人物までが特定されていました。犯人は権田文彦君。テロップなどの画像美術課に配属されたばかりの新入社員。なぜか現場に居たことが不思議です。

ナマ放送＝絶対に失敗できぬ。ナマ放送＝絶対に時間内に収める。そんな苛烈なナマ放送時代なのに私たちテレビ制作課は、「源平芸能合戦」という全国放送の、ステージで展開される芸能対抗合戦の公開ナマ放送番組を担当していました。全国を巡業して回るみたいな形で、二か月おき平均、くらいの頻度で広島担当の順番が回って来ます。そのころにはさすがに1名増員が認められ、制作スタッフは3人になっていました。新人は沖野理君という、英語教師出身の頼り甲斐のある若手でした。番組は、タイトル通り職域対抗の歌や踊りや寸劇など、芸能くらべ番組です。

ナマ放送だから、芸能対抗合戦だからと言っても絶対に時間内に収めねばならず、出演者は地域

の人々だから時間制限の中で演技を収める、なんて出来っこない相談です。でもしかし、絶対に舞台上で繰り上げられる職域対抗の芸能合戦は、何が何でも時間内に終わらなくてはならない。言わば「無理難題でも、やれ」と命じられたみたいな公開番組です。こうなったら、何としてもやらなくてはならないと覚悟を決めました。そして、少しでも舞台というものを知っている私が、舞台上の一切を取り仕切るフロアディレクターを引き受けることも決めました。だから中継車は小畑女史に一任、と決めました。これで態勢は決まったが、やはり舞台上の仕切りを私一人では無理です。出演者などは、だいたい舞台の両袖から出入りするし、出し物の道具なども、舞台上にどこからでも出し入れしたいのが出演者の心理です。舞台の両側に一人ずつスタッフが必要なのです。首脳部もようやく分かって来たらしく沖野君を配属してくれたのです。ホッとしましたが、それからが勝負でした。

出演して下さる東洋工業とか中国電力とか職域との交渉は小畑女史が大活躍したのですが、この役割分担は大成功でした。今から思えば、広島での大規模な職場の大部分が出演に応じて下さったのですが、これみな小畑さんのお陰だと感謝しています。会場が公会堂だったのも助かりましたねえ。児童文化会館と言う会場もありましたが、児童文化会館はラジオ時代で卒業しました。

テレビ時代に入ってから、平和公園の一隅に建った広島市公会堂の時代に一転しました。なぜならば、新しく広島市公会堂を建てようと思ったとき、テレビ時代になったら集中的に公会堂は使われるだろう、しかもテレビが始まったのだから舞台設備も会場機構もすべてテレビ対応に作ろう、と合意が整っていたのです。だから公会堂からラジオ中国本社まで、NHKも現場からNHK広島局まで、テレビ放送中継用の同軸ケーブルをあらかじめ敷設したのです。そして現場である公会堂の駐車場側と、舞台と場内の主要個所とに、カメラケーブルとの接続口が特別に設置されたのです。つまり公会堂は、完全にテレビ局が使えるよう予め設計され、そのように建築された会場となっていたのです。



101. テレビ「源平芸能合戦」

公開オールナマ放送の番組で苦闘

○新井 テレビ開局早々に飛び込んで来た「源平芸能合戦」という、舞台上で公開する職場対抗の芸能合戦には、ちゃんと専門の司会者が居りました。

福助足袋がスポンサーで、「福ちゃん」という名の司会者がいて、舞台上で繰り上げられるチーム当たり10分程度の寸劇やお笑い劇場みたいな演芸を取り仕切って放送時間内に収め、両チームの勝敗を決めて発表し、「お疲れさーん」と番組を終わるのです。ところが何故か司会者の彼は、演じられる内容を手伝ったり、素人出演者に指示したりは一切やらぬ。「それは局側スタッフの仕事」と彼は割り切っていました。

つまり、本番では司会者として頑張るが、それまでの役割、または裏方の準備段階からドライリハーサル稽古などには一切、顔を出しません。舞台稽古は出演者と制作局スタッフがやれ、というシステムなんです。だから私たちスタッフは舞台進行の裏側で、すべての手配と準備態勢を造るのが大事となるのです。

舞台稽古では、舞台へ出て来ない司会者の福ちゃんの代わり（スタンドイン）まで局側のFDである私が担い、いつもの楽し気で囃し立てるような口調まで物まねして、「やれやれ、それやれ」と出演者をけしかけながら、寸劇などの芸能を短い時間内にやり遂げさせるよう誘導し続ける、という大役を毎回、黙って担って来たものでした。

カメラを入れての本格的リハーサルには、さすがに「福ちゃん」本人も舞台に出て来ましたがね。

それはそれは、忘れられないほど楽しかった出し物もありました。相手チームがどこだったか、あちらさんの名誉のためにも、覚えていないと申し上げておきましょう。出演チームは、あの明快な芸人たちが爆発するような米軍岩国基地のG I部隊でした。出し物は、言わずと知れた「西部劇」物語です。

とある西部の町、一軒のバーの中が舞台で、ワイアット・ワープみたいな腕利き保安官が、この街を仕切る悪者たちを、たちまちのうちに片付けて町の英雄になる、というお馴染み過ぎるほどの典型的西部劇シーン。ふんだんに下稽古を積んできたと見えて（違った、身に付いたヤンキー魂かな）、店内の椅子やテーブルが見事にぶっ壊れる

わ、グラスが割れて吹っ飛ぶわ、圧巻場面としては頭のカウボーイハットが銃弾で吹っ飛んだり、まるで映画のシーンをナマで見ているような迫力と見事な早業連発。もう、我がスタッフも、付けるべき注文（ダメ出しと言います）は皆無。啞然として、目の前で繰り上げられるドライリハーサルを眺めているだけでした。ただ一つ、制限の13分以内には、とてもじゃないが収まりそうにない。我らがスタッフとしてもG I英語にゃ制御不能。

ところが、さすがは鍛え込まれた軍隊です。恐る恐るスタッフが上級士官に申し入れたところ、出演兵士たち、「アーテンション！」の号令と共に上官から指示を受けたトタン、パッと敬礼し「イエス、サーッ」。賑やかで派手で、軽やかな身ごなしで豪華絢爛の大活劇。「一大西部劇」の「源平芸能合戦」は、のちのちまで話題となったほどの大盛況と最高の出来で称賛の嵐でした。こんな時は、苦労続きのテレビ現場人間もホッとします。

○石田 社員さんは、たった2人。

○新井 テレビ制作課に2人。追加配属の新人が1人、あと技術とカメラマンがおります。

○石田 手伝いはそれだけですか。たった5人で生中継の番組を回していたんですか。

○新井 いや違います。テレビの現場には、番組制作を担うスタッフとしては、制作が私と小畑と沖野の3人。そしてテレビ技術という、チームで動くエンジニア集団が加わります。そのなかには、3台のカメラを操作するカメラマンが3人。中継車の中にも、現場から送られて来る3場面の画像を切り替え選択して放送へ送出する1人、音声のコントロールを担当する係が2人程度、全映像を



102. 源平芸能合戦の舞台
(昭和35年6月7日)

常に調整している1人。中継車の外部で、本社へテレビ中継用のマイクロ電波を発射し、またそれを受信する係とが2人、会場内での音響拡声などを担当する係も2人程度、巨大なカメラから出ている太くて長いケーブルを混乱せぬようさばく係も3人程度が必要です。外部委託の照明、舞台装置美術員を除外しても、テレビ番組の技術要員は少なくとも15人程度が常に稼働しております。制作スタッフの3人だけという規模とは比べ物にならないほど、多くの技術要員が必要なのがテレビ現場の特徴です。そのほかにも外部委託業務として、テレビ化粧、衣装や結髪、小道具や、消え物という使いきって無くなる食べ物や飲み物などの調達係も必要です。

関連しますが、出演者は当然ですが、私たち番組スタッフだって本番を目前に控えていたり多忙だったり、弁当や飲み物が必要になります。遠方への出張などでは、スタッフ全員の宿泊施設と食事も確保せねばなりません。これらの細やかな番組庶務事項は誰が担当するのでしょうか。誰かが引き受ける必要が発生します。移動用のワゴンのチャーターとか、海辺なら連絡用のボートなどの手配も必要。それらのすべてを、演出担当の私が制作総合責任者としてコントロールしていなければ、巨大な集団作戦みたいなテレビ番組の制作は成り立たないのです。テレビというものは、外から見ただけでは全く分からぬような職務と人員が、それも相当程度大量に必要なんだ、という事実を知っておいてください。

そんななかで、テレビが開局して当初は2人だけ、のち3人の制作スタッフだけで私たちは、困難なナマ放送を数多く、こなしておりました。

「源平芸能合戦」という、舞台上での公開生放送の芸能比べ番組は、ホント、私たち新米テレビマンをこき使って、同時に鍛え上げてくれました。舞台上に1台、客席に2台のテレビカメラを据えます。舞台の上に居て、出演者や司会者をリードして時間内に収めるようコントロールするのが私。テレビ中継車には小畑さん1人が座っていて、脇に居るスイッチャーという画面切り替え係の技術者に指示を出すのです。舞台への指示は小畑さんから、耳に懸けたインカムという連絡電話を通じて私にだけ来る。のちに新人として沖野君が配

属されたけど、当初は私だけ。中継車から来る様々な指示のすべてに私だけで対応なんて出来っこないけど、何とか対処しないと番組は吹っ飛ぶ。

おまけに番組が始まってしまったら、中継車の小畑さんから私に指示が来ても如何ともし難い。無理です。走り始めたナマ番組は、走り出したらもう止められない。部長であろうと社長であろうと止められない、手も足も出せない。僅かに対応可能な人物が一人。舞台袖で耳にインカム着けて走り回っている舞台監督～テレビ用語でFD、フロアディレクターの私だけです。彼一人に全権を委ねるしか無い、舞台を仕切っている彼は、責任重大なのです。それが公開ナマ放送番組の宿命です。冷静に考えて見たら、ホント、危険イッパイ無茶苦茶でした。

○石田　すごい綱渡りですよ。

○新井　まさに綱渡りです。ナマ生放送で、しかも全国放送です。失敗は絶対に許されない。

そこで思い返しているのですが、このモウレッツな番組で時間オーバーしたり、途中で映像が切れたり、出演者が失敗したり、どこからかクレームが付いたりと言うような問題事故が全く起こっていない。奇跡としか言えませんね。まだド素人みたいなテレビ局が、ですよ。振り返って見て、事故ゼロなんて自分でも信じられない。根性入れてやったけど、しっかりと鍛えられたなあ。

基本的に照明は、当初は自前でしたが、のちにはすべて広島に古くからある篠本秀吉照明研究所に外注委託するようになりました。

加えてフジテレビで活躍していた長男さんの篠本豊君と言う、長嶋選手に何となく似通った明るいキャラの青年をテレビ照明の担当として引き抜き採用しました。これで我が社にも照明の専門家が入社したのだから、彼の親父さんが社長である篠本照明を、のちのち上手に使い回せるとの狙いが適中したことになりました。

同時に広島舞台美術から中堅の美術幹部の延藤蹕蔵君も引き抜いて仲間に加え、テレビ用のタイトルや図面を描く美術部門の専門家群も募集して組織化し、次第にテレビ局として体制が整い始めました。となれば、もう私が出しゃばって、タイトル文字を書いたり、舞台セットの設計図を引いたりすることも終わりました。

それは、テレビ開局から半年過ぎたころ、というノンビリしたテレビ体制の整備状況でした。こうして一応、テレビ必須の照明、舞台美術、PA音声部門なんて外郭の必須部門が整ってみると、ナイナイ尽くしで自分ですべてを勝手にやっていた試験放送時代が懐かしく、最も実力を鍛えられ、蓄積することが出来た、刻苦も多かったけど充実した時代だったと思い感謝しています。

あと困ったのはテレビのメーキャップ、化粧品です。初期の時代は男も女もアナウンサーもゲストも、みんなみんな、テレビ化粧をしなければなりません。社内に化粧の人材は居ません。僅かに私一人が、舞台演劇でのドーラン化粧と言う化粧方法を知っていました。しかしテレビには、舞台用のドーラン化粧なんて、使う化粧品からして全く違うし、基本から異なっており役に立たない。これまたアメリカ帰り本物のメイク係からご教示を戴かねば、ということになり、社員に適材は居ないので専門のアサヒビューティーサロンから優秀な人材を選び抜き、東京放送で特訓して貰うべく遅蒔きながら専門家を東京へ派遣して貰うことになりました。

テレビ化粧はマックスファクターという最高級の化粧品を使うのが常識。アメリカから取り寄せましたね、マックスファクター化粧品の大箱セットです。もちろん各種色相の化粧品が詰め合わせてありました。箱を開いて小畑さんともども歓声を上げて喜んだのを覚えています。お値段ですか、絶対の必需品なのだから金額など聞きもしませんでしたね。

朝日ビューティーサロンのスタッフから、ベテランの植木早苗さんが選ばれて東京で研修を積み、そして我が社のテレビ化粧の専属となりました。

彼女はいつの間に研修していたのか、通常の歌謡番組などを越えて、のちに全員が熱中する、我が社初のテレビドラマの特殊な化粧技術も、全てお任せ出来るほどの優れたメイク係でした。本当にお世話になったと感謝に堪えません。

のちに、八丁堀交差点でバッタリ出会いましたが、双方ともが電車線路の真ん中で、「ああっ」と立ち止まって、暫くの間、互いに見つめ合って立ち尽くしていた、という記憶が鮮烈です。

ナマ中継放送にも暫くすると慣れてきて、舞台セットも簡単なジョーゼット布を広く張り巡らせて照明を当てて変化を生み出せば、至極簡単にテレビ用の舞台美術セットが出来上がるものなのです。照明と美術の相互力量を合作しての早業です。

試験放送中のサービス放送期間中などで私たちは、幾つかのラジオ番組をテレビ向けに書き直して舞台上演し、チャッカリ、それをテレビ番組化したうえで、真面目に勉強だとして、正規の稽古方法として本読み、カメラ抜きでのドライ稽古、カメラを生かしてのカメラ稽古、本番式の通し稽古（ゲネプロ）の手順を踏んでテレビ番組の制作実験として研修し、それをですね、その稽古で出来上がった作品を堂々とサービス放送と銘打って実際に放送したものです。それも1本や2本じゃない、4～5本も実験劇場サービス版という特集番組がそれです。ラジオ公開放送で経験済みの舞台ものが多いのですが、それが奇妙にも凄くテレビ向きのバラエティ番組となっていたり、今どきのコント小話番組と銘打っている実験的な番組そっくりで、実は私たちのテレビドラマのカメラワーク実習作品だったなど、さて幾つの番組が該当作品だったか、お気づきでしょうか。

昭和34年から昭和35年までの間で、実験番組として実習した番組タイトルを列記しましょう。

* * *

- ・ラジオメリゴラ特集、テレビ実験版ミニミニテレビドラマ形式「憎まれっ子、世にはばかるの巻」
- ・新春特集番組。「広島県郷土芸能テレビ大会、第一回」広島市公会堂から公開生放送。安来市から来演の安来節のドジョウ掬い名人芸を縮景園からご披露。次いで会場では、芸北の有田神楽団が演ずるご存知「八岐大蛇」特別版で、公会堂の二階から舞台まで張った2本のロープの上を、炎を吹きながら大蛇が滑り降りて来て登場。他の大蛇と合流のうえ素戔鳴尊と立ち廻りのうえ見事に退治されるというドラマチックな芸能イベント盛りだくさんの郷土芸能大会をテレビ、ナマ放送しました。
- ・「トリオロスパンチョス演奏会」（公会堂）
- ・実験ドラマ「地球の上に字を書こう」（公会堂）
- ・「USAF、アメリカ空軍音楽隊演奏会」

- ・「行く年来る年～因島の裸詣り」(因島)
- ・メリゴラ特集テレビ版「イビセエドの巻」など

* * *

なにせテレビ用のスタジオもVTRもないテレビ局なんて、どうせロクな番組を流せるはずがない、とどなたもお考えでしょう、それが当然。でも私達は違いました。石田先生のお言葉通り綱渡りですが渡ってのけたのです、一回も落ちずに。

○石田 失敗は、全くなかったんですか。

○新井 全くなかった。いや、さっき申しましたけど、たった1回だけ、「歌の風車」です。照明が当たっていますよね。バックライトといって背景になっているホリゾントの壁に下から照明が当たっているんですが、その照明の前をスタッフが一人、悠々と横切った。影がパーアッと壁に映った(笑)。それくらいかな、派手にドジ踏んだのは。当時まだ私は、ラジオ時代からずっと自転車通勤していましたので夜中の帰り道、疲れ切って居眠りしながら自転車で帰ったなあ。

○石田 黄金山の上まで自転車で上がっていたんですか。

○新井 いやいや、自宅と会社のあいだの通勤での出来事です。黄金山の送信所と本社の間は、会社のジープで毎日、スタッフをピストン輸送。

○石田 あ、ジープで。さすがに(笑)。

○新井 あれは囚人護送車というアダ名でしたが、ジープの荷台にホロを付けて、その中で皆が相向かいに坐って急な坂道を登るのです。

テレビスタジオが無いから、仮設のニューススタジオなどの放送設備を備えた黄金山送信所に毎日、朝・昼・晩の何回か時間割が決まっています、必ず担当者が山へ登らなくてはテレビニュースなどすべての番組が放送できない。そんな情けない有様だったんです、開局初期はね。

テレビを始めるぞ、っていうので急遽50人もの要員を採用しました。これがみな定年になったら困るぞ、と主張したけど「今が困っているのだから仕方ない」との論法でチョン。だから、従来のラジオ局舎じゃ新入社員が収まり切らない。

仕方ないから隣接地を確保して、そこへテレビスタッフ用のバラックを建設して全員を収容。そこでフィルムを編集するやら、ニュース原稿を書くやら、書き上げた原稿を握り締めてアナウン

サーと報道マンとが、ジープで黄金山へと飛び出すとか大騒動が勃発していました。冷暖房など有ったかもしれないが熱気ムンムン。凄まじいばかりの泥縄式テレビ開局態勢でした。

私と小畑さんの二人も、「テレビガイド」なる5分のミニPR番組をレギュラー担当していたので、交互に毎日、山へと走り上がっていました。

その隙間を縫って、公開生放送だとか芸能中継番組だとかをやりとげていたのだから、文字通り殺人的多忙さでした。台風が来て登山道が崩れ、ジープがはまり込んで転落寸前などという危機一髪事故も発生。でも幸運にも、結局まったく人身事故皆無でした。でも一斉に水虫患者が大量発生した、などの事件も苦い思い出です。

ああ、付言しておきますが、私と小畑さんはラジオ制作課との兼務でしたから、他のテレビ担当の連中とは待遇が違い、ラジオ本社のラジオ制作課の中にちゃんと、マイデスクを持っておりましたのでご安心ください。

あの黄金山道路はRCCが建設して、のちに広島市に寄贈しました。寄贈した後に、地元の町内会が、折角りっぱな道路を作って貰ったのだから、ということで道路脇にズラリ桜を植えたんです。あれから50年を超えて、桜も今や樹齢が充ちる時期。それで地元の「桜を守る会」から申し入れがあって、RCCからも何がしかの補助金を寄付しているとか。私が地元の住人なので、「桜を守る会」からの依頼を本社へ仲介させて戴いたという経緯があります。

ところで、RCCがテレビ塔を建てるにあたって、戦国時代からの遺跡を残すべく広島市からの申し入れに従い、黄金山の表側を避けて裏側にタワーと社屋を建てたのですが、それから10年。広島テレビが誕生して同じく黄金山に鉄塔を建てることになりました。私たちは事の成り行きを知っているから、さて采配や如何に、と見詰めていたら、新局は山の表側の広島市内から良く見える表側に社屋と鉄塔を一体にして建設し始めたのです。

驚きましたね。広島市は何たる一貫性のない矛盾に満ちた決断をしたものだ、と私たちは啞然としました。残して欲しいと懇願されていた遺跡なるものは、果たしてその後、如何あいなったものやら。広島市にお尋ねしたいものです。

現在は黄金山にテレビ塔は存在しません。NHKを筆頭にテレビ局のすべてが共同で、広島市外の絵下山にデジタル送信塔を建立して運用しています。黄金山に残る鉄塔は、FM広島の放送アンテナと化した旧RCCのテレビ塔。比治山に建つのはNHK～FMのタワー。様変わりしましたね。

○石田 平和記念式典は、今のように中継放送をしていなかったんですか。

○新井 平和記念式典は、ラジオもテレビも、開局当初から毎年、報道担当で中継放送しています。

○石田 担当が違うんですね。

○新井 はい。報道が担当して中継しています。私と小畑さんとでスタートした制作課は、ラジオ・テレビ制作課であって、いわゆる演出グループとしての立場で番組を制作しています。ですから、報道番組とは直接の関わりは持っていません。

失敗続きだった宮島からの中継放送

○新井 安芸の宮島は日本三景の一つ。それを有する広島の民放なら当然のように、そこからの実況中継は誰しものが望むところでしょう。もちろん私たちも、当然のように昭和34年のテレビ開局と同時に狙ったのが、国宝・厳島神社からのテレビ中継放送でした。

実はラジオ時代から、幾度も宮島の厳島神社からのナマ中継が企画され、何人もが挑戦したのですが、いつも、雑音が多かったり途中で切れてしまったりと、なぜか失敗続きだった日くつきの日本三景の一つ「安芸の宮島」でした。

それもそのはず。宮島とは、広島湾の西北湾岸沖に浮かぶ結構大きな島なのです。島全体が厳島神社のご神体となっているゆえに「宮島」と称するのですが、頂上には「弥山」と言う名の、神秘的な自然林が広がる山がそびえていて、目指す厳島神社は広島から見れば、宮島の裏側、つまり島の反対側に位置しているからなのです。

電波は真っ直ぐにしか進みません。途中で邪魔物があれば、そこでストップします。ラジオの電波なら、電離層に反射などと、幾分か言うことを聞いてくれることもあるのですが、ことテレビ電波となると、これはもう、真っ正直者と言って良いほど真面目なのです。つまり真っ直ぐにしか進まない、光と同じ性質を持っている電波なんです。

邪魔者を避けて先に進む、などと言うような器用なことは出来ない。

だから宮島の裏側にある厳島神社からテレビ中継しようとなったら、当時は、陸上競技の三段跳びみたいな方法を使っていました。まずは神社から対岸の宮島口へと電波を飛ばし、その電波を宮島口で受けてから、やおら広島市内のRCC本社へ向けて改めて電波を飛ばして本社が受信する。そしてRCC本社から放送電波として発信する、という面倒な方法を使っていました。

今なら簡単至極。宇宙に浮かぶCS衛星へと現地から電波を飛ばし、衛星から跳ね返った来た電波をRCC本社がキャッチして放送へ流す。それだけです。現在の放送人はなんとまあ、苦勞知らずで便利な世の中に生きてるんだなあ、と私たちは羨ましくも妬ましく思っているところです。

閑話休題。時代は昔へと遡ります。

現場からテレビ電波を発射するには、その装置が必要です。簡単なものじゃなく、それ相応のテレビ番組として全国へ放送するなら、正式なテレビ中継車と電源車の2台を、現地に運び込まなくてはなりません。現地は宮島です。つまり、四面を海に囲まれた島です。一台が10トンする特殊車両を2台、波立つ海の上を運ばなければならない。当時のこと、専門のフェリー会社なんて無い時代。

困り果てた篠田紀彦技術課長に、こっそり、耳打ちする友人がおりました。附属の後輩である寺本典夫経理課長。なんと寺本さんの身近な親戚が、有名な海軍兵学校の後身、江田島の海上自衛隊術科学校の最高幹部だった。

そうです、海上自衛隊には重量物揚陸用のLST、上陸用舟艇があるじゃないですか。まだ日陰



103. 宮島に上陸用舟艇で渡るテレビ中継車

者みたいだった時代の海上自衛隊と、RCC技術課のあいだで密かな打ち合わせが進み、両者の間で友情に基づく合意が成立、実行と決まったのです。

RCCの車両課から向井儀光課長、米本佑主任のベテラン二人が出て来ました。特殊車両の瀬戸内海の島への初の揚陸作戦開始です。車両の長さは約10メートル、重量が約10トン。それが2台。

車両のベテランと上陸用舟艇の艇長とで、具体的に何が話し合われたか、今となっては幻の彼方ですが、両者にとっては互いに初体験です。実験するにも実験の仕様が無い。ぶっつけ本番だ、となった模様でした。

乗り込みと揚陸の現場は、宮島口側は客船が使わない脇にあるスロープ岸壁と、宮島側は商店街から出たところの大鳥居のある岸壁と決まります。普通の船着き場は当然ながら使えない。上陸用舟艇の特殊能力を100%発揮して貰うほかに手が無いとの判断からでした。当時のスナップが奇跡的に残っています。私は現場で立ち会いましたが、素人には物珍しさと異様な緊張感とで記憶は臆です。残っている現場写真から見て、舟艇への中継車の乗り込みは案外、容易だった気配です。潮の干満と岸壁のスロープが功を奏したのでしょう。

問題は宮島の岸壁への揚陸でした。108基の燈籠が途切れた大鳥居のある岸壁です。海面からの高さが高い岸壁。満潮時を見計らって舟艇を接岸させ、前の大扉を開いて岸壁に乗り上げ、10メートルの長さの車体をエンジン全開で一気に揚陸させたのです。2台とも見事な成功でした。

ところが直後に事故発生でした。上陸成功と喜び一杯でエンジンを吹かせた車体が突然、ガタンと斜めに傾いたのです。「ああっ」と言う間に後輪の片方が道路脇の汚水溝に落ちたと分かりました。

ジャッキ揚げしながら誰かの、「運が付いたぞ」と大声が響き、笑い声も上がりました。それが運が良かったのか、それとも不運だったのか、すぐ私には分かったのです。

なぜか電波が届かない？！

○新井 RCCでは、ラジオ時代から宮島は鬼門



104. 司会の町野アナと子どもたち

だと言われています。そのテレビ第一号は私でした。

番組は昭和34年8月の「夏休みテレビ旅行」。夏休み中の子供たちにテレビで日本の名所を紹介しよう、というTBS系列全国版の番組で、広島からはRCCの担当で、日本三景の一つ、「安芸の宮島」をテレビ実況中継ふうに見て貰おうという企画でした。

海に浮かぶ回廊を巡らせた平安時代の宮殿さながらの国宝、厳島神社のすべてをご覧いただきましょうという、盛り沢山の企画でした。厳島神社の回廊には町野吉甫アナと、彼を囲んでRCC児童劇団の高山光代お姉さん、奥田耕造君、堤謙君、北村智康君など名子役たちが大挙して出演し、神社側からは祢宜さんが平清盛に始まる古い歴史などの説明役として加わり、伝統の「蘭陵王」などの舞楽や雅楽が、国宝の舞台や楽坊で重々しく演じられることになって居りました。

かたや中継班としても本気度を示すべく、長い回廊に延々とレールを敷いて、重たいテレビカメラでの流れるような移動撮影を準備していました。遠く海上に浮かぶ宮島名物の大鳥居も、その雄姿を真近に見上げるべく参道にもカメラを据えて神社の回廊なども狙っており、3台しかないカメラを移動させることに依り、4台も5台ものカメラで厳島神社を紹介しているが如く見せようと、スタッフは張り切っておりました。

問題は、テレビの中継技術でした。最大の関門だった中継車の宮島への上陸は、海上自衛隊の全面協力で見事に成功。おまけに「ウンまで付いたから中継は大成功だ」の歓声まで付いて来たウン

を生かすべく大計画が整っておりました。

先にも申したが如く、巖島神社は宮島の反対側にあります。だから私たちは、光と同じように直進しか出来ないテレビ電波を、鏡で反射させることに依って広島市方面に方向転換させるべく、先ず対岸の大野町にあるマツダ迎賓館の屋上に巨大な反射板を取り付けておりました。これはすべて、かねてからの朋友、テレビ技術の田中通俊君の設計によるものでありました。

テレビの電波は、光と同じ性質を持っていると言いました。その通りなんです。真っすぐ進むと同時に、光と同じように、途中で鏡があればキッチリ反射する性質がある。その性質を利用して巖島神社から対岸の大野町に設置した鏡（反射板）に向けてテレビ電波を発射します。その電波は、その鏡で正確に反射して、今度は広島市南部にある黄金山送信所へと直進し、広島湾の海面上を西から東へ横切って飛んで行き、そして黄金山でキャッチされた電波は送信所内で文字をスーパーインポーズするなど加工されたうえで、今度は正規の電電公社（当時）のマイクロウエーブルートで東京のK R T東京放送（現在）へ送られます。そうしてK R TでV T Rに収録されたうえで、本番の全国放送に備えて保管され、やがて夏休み中に全国へと放送される、という段取りになって居りました。

なぜ、こんなヤヤコシイ方式を採用せねばならなかったのか、と言え、当時、未だR C Cはテレビ開局から間がないのに、残念ながらV T Rもテレビスタジオも持っていなかった。ただヒトツ、テレビ中継車と電源車ワンセットを所有し、黄金山のテレビ送信所内には簡易型ながら、テレビシネ室とニューススタジオを備え、最低限だけテレビ中継映像に文字パターンを挿入したり、F 16映像を挿入したりする加工設備を持っていたから出来た、綱渡り方式のテレビ自社制作番組送出方法を探っていたからです。

当然ながら、マイクロ波と言うテレビ中継用の波長が極く短い特殊な電波を使う中継技術は、事前のテストが先ず必要。中継テストだけなら、マイクロ波送信機は小型だから自由に持ち運びが可能。担当の田中通俊技師らは何度も何度も、例の反射板の据え付け工事から現場に立ち会い、中継

電波の実地テストを繰り返しておりました。

もちろん結果は大成功。宮島からの電波はキッチリ、R C C黄金山送信所に届いておりました。誰もが準備万端、難関の宮島中継の大成功は間違いなし、と信じ切っておりました。

現場では暑い夏の太陽に照らされながら、チビッコリポーターたちは頑張っておりました。目の前で繰り上げられる、平安時代という大昔から伝わる雅楽だとか、国宝の舞台で舞われる不思議な美しさを湛えた仮面が恐ろしい蘭陵王という勇壮な舞楽にも見とれて居ました。

神社の祢宜さんという偉い神職の人から聞く話は、ここにある回廊とか舞台とか雅楽を演奏する小屋みたいなものすべてが、日本の国宝だと聞いて仰天します。

長い回廊を巡りながら、それを三本足のテレビカメラが滑らかにレールの上を滑って付いて来るのにも驚きました。回廊の上に何時の間にか長い長いレールが敷いてあって、巨大な重たいカメラは、そのレールの上をトロッコが走るように走って来るのですから。

フロアディレクターの小畑和子さんも、日よけのスカーフの下で汗をかきながら「大変な中継だけど、うまく行くぞ」と思っていました。

テレビ中継車のディレクター席で現場から送られて来る画像に指示を与えながら私も、準備は大変だったがうまく行くぞ、喜んで貰えるぞと、心弾む思いで収録の定刻を待ち構えていました。

本番前の、本番そのままの総稽古、カメラリハーサルは、見事に予定通りの時間で終了となり、私はホッと安心しました。

15分くらいの休憩が取れ、30人を超える出演者に、余裕を持って、本番前のスタンバイを指示できました。

遥かな東京からも専用電話で、「広島からの映像は綺麗に届いている。V T Rも準備OK」と連絡が入りました。

「10分前」と各所のスタッフへ、インカムでカウントを伝えました。どこからも問題なく、無駄な声も消えました。

「本番5分前、全員、スタンバイ」

電波が落ちた！

○新井 その瞬間です。一斉に専用電話が叫び出し、黄金山からの連絡用無線が喚きました。

「現場さーん、電波が落ちた、雑音だけしか届かない、何とかせよ、現場さーん！」

一瞬、現場の全員が、ポカーンとなりました。現場では何事も起こっておらず、相変わらず太陽の光が熱く、大鳥居は勇壮だし、見物人も山のように集まっている。

真っ先に中継技術のスタッフが、車から飛び出しました。演出と一体の田中通俊君は、本番寸前です、車に残りました。カメラと音声の責任者です、席を外すわけには行かない。

「電源チェック、マイクロチェック、パラボラチェック……送信関係、すべてをチェックだ」

騒然となった技術部門を目の前にして私は、予定通り事を進める方針を決めました。ここで慌てては、スタッフ、出演者、全員が混乱する。指示を出しました。

「予定通り進行します。3分前…」

かくて私たち、テレビ制作チームは、現場のカメラマンなど技術者ともども、完璧に、予定通りに番組を進め、これまた何事も無かったが如く、予定通りに番組を終了させました。

電波が落ちたことなど、全く知らない出演者たち。何が起こったのか判然とせぬまま現場チームは、平然と番組を進行させ、そして予定通りに終わったのです。

いつものように、番組終了と共に出演者や神社関係者への挨拶と御礼を正しく済ませ、チビッコリポーターなどの帰宅を見届け、それからやっと事態の確認と収拾について頭を切り替えました。

本番直前まで、東京へ送るマイクロ波は間違いなく正常でした。東京からも確認電話が入っていました。それが本番5分前に落ちたのです。

何故か、について現場では、あらゆるポイントのチェックを終えた段階で、すべて異常なく、正常に機能していた、との報告が結論でした。

あり得ない。事態は実は、もっと急を要しておりました。失敗は失敗として仕方ない。だが、「夏休みテレビ旅行」という特別番組は、生きているのです。

確か放送日は、失敗した収録日の10日ほど後

だったように記憶しています。(8月19日と判明)

少なくとも、これに穴を空けるようなことは絶対に出来ない。この責任者は、明らかに発局であるRCCだ。どうするか。再び同じような中継を実施するなど考えられない。なら取り敢えず、現場からは撤収と決まりました。

またもや海上自衛隊の、上陸用舟艇の援助を受けての撤収作業です。今度はもう段取りすべてが慣れたものでした。

「やっぱり、ウンが付いたのかなあ」、ボヤきながらの撤収作業は、何事もなく無事に終了して、スタッフ全員、本社へ帰り着きました。

本番寸前に中継電波が落ちる(途切れる)など考えられぬ事態だが、事実、電波は落ちた。明らかな放送事故だが、原因は不明としか言えない。だが、放送すべき「夏休みテレビ旅行」と言う番組を制作し放送する責任は厳としてRCCにあり、幸か不幸か、収録から本番まで日時の余裕はあるが、もはや同じ失敗を繰り返す危険は避けねばならない。となれば、「安芸の宮島」を紹介するという初期の企画を生かす道は、F16番組として、RCCが責任を持って全力を挙げ撮影し映画番組化するしか方法がない、と決まったのです。

とんでもない重圧が突然また、私の上に降りかかって来ました。番組担当が私だったからです。30分番組だったかなあ、もしかして45分じゃなかったかな。考え込んだって作品は出来ない。ざーっと大まかな構成を立てて、それに従って宮島のあらゆる側面をF16で取材して貰い、出来上がって来たフィルムの内容と撮り方に従って再構成し、補足撮影を発注して足らずを埋め、やおらナレーション原稿を書くと言う、通常の逆とも言える速成構成法を採りました。

じっくり構成を練って、カメラマン一人一人に注文を付け同行取材してダメを出し、補足撮影を依頼するなんて悠長なこと出来ない緊急事態です。上がって来たフィルム映像を見て考えるしかなかった。カメラマンとは一切、同行取材しなかった。

出来なかったと言う方が本当です。早くも急いで書き始めていました、ナレーション原稿を。それは、フィルム編集が完成したら、ナレーション原稿と一緒にKRT東京放送へ持ち込み、私が東

京放送のテレビマスターから生放送で全国に向けて流すことになったからです。文字通りの突貫工事でした。

10人ほどのカメラマンが、各々の感性と目線で、宮島と厳島神社とを映像化するコンテスト、みたいになっていました。それを受けた私が、映像の流れに合わせて全体構成を組み立て、シーンごとに物語を組んでナレーションを書き込み、モザイクみたいだった全体を纏め上げて一本のF16映像作品を産み出す、という作業でした。

昼夜兼行と言う言葉がありますが、確か放送までの余裕時間は幾らも無かったと思います。新幹線なんか無い。特急など、ノロノロ運転もいいところと言う時代。

唯一の早業は、米軍基地となっている岩国空港が、民間と併用となって東京へ飛んでいる航空便を利用することでした。まだ我がRCCで航空機を使って出張した者は居ません。それなのに私が第一号として、岩国空港を使って東京へ素材を持ち込むことが既定の事実となっており、加えて何故か、町野吉甫アナが私に同行すると、早くから決まっていた模様です。

当日の司会アナだったからでしょうが、必死の形相で届いたフィルムを凝視し、編集を見届け、ビューアー（Viewer）で繰り返しフィルムを見直しながら原稿用紙にペンを走らせる私が、危ういと思えたのかも知れません。とにかく毎日が必死でした。

もう正確な日時は思い出せませんが、東京放送への素材搬入の期日が切迫して来たころ、もう、これ以上は待てないと言って来ました。まだ原稿が完成していないが、フィルム素材は揃った。行こうか、となったけど、原稿は未完成だ。しかも放送するに当たって、KRTラジオ東京のスタッフ用の台本を私が用意せねばならないと分かったのです。コピー機なんて考えたことも無い時代。私たちが実際に作っていたスタッフ用の台本とは、スクリプトと呼び、信じて貰えないかも知れないが、複写紙を何枚か原稿用紙の間に挟んで複写された複写原稿のことでした。これを台本と呼ぶか、スクリプトと呼ぶかの違いで、事実、これを使って我が社のマスターでは生放送を実施していたのです。

だから私は、KRTラジオ東京テレビの、ナレーションを担当してくれる正統派アナ専用と、テレビ送出の技術者用と、それに自分用の、最小枚数、3枚の複写原稿を準備することが必要となった訳です。

町野アナのエスコートを受けながら8月18日、私は岩国空港からダグラス型30人乗り程度の中型機に乗り込みました。カバンには放送用のF16フィルムリールを納めたケースと、加工用の文字や図表のテロップと呼ぶカード類。膝の上には原稿用紙と複写紙を並べ、飛び立ったら小型テーブルを倒して原稿を書き始める態勢で、初の航空便出張による離陸の瞬間を待ちました。横の席では町野アナが、心配そうな眼差しで私の顔を覗き込んで居りました。空を飛ぶことの怖さなんかより、書き終えていない原稿の後半を如何に書き進めるかで、私の頭の中は満杯でした。

米軍機の隙間を縫って、ダグラス機は案外フワッと飛び立ちました。おや、と思ったときは、もう空中に浮かんで居ました。翼端の彼方に、広島湾に広がる海が輝いて見えました。轟々というプロペラ音が喧しいな、と気になったものです。さて、とばかり待ち構えていた原稿用紙を抜けました。新発明のボールペンが、これほど有難いと思ったことはありません。力を入れれば入れるほど、文字が明瞭に浮かび上がって複写できるからです。何も考えず、ひたすら「安芸の宮島めぐり」と言える「夏休み子供番組」用の原稿を書き続けました。

後のことは、ほとんど覚えていません。翌日の8月19日、薄暗いラジオ東京のテレビマスターで、衆人環視のただ中、テレシネ室にフィルムとテロップを搬入し、マスターで担当技術者と並んで椅子に掛け、目の前で光る無数の画面から関連画面を見つけ出し、狭いテーブルに放送原稿を置き、最も読み易い表紙部分をアナウンサー氏に手渡して開始時刻を待ちました。場所はKRT局ですから、F16のスタートやテロップスーパーなどの指示は、すべて局のスタッフから出ます。私は、その傍らで介添えする形でのマスター出し操作でした。いったい何人の人が立ち会っていたのか、町野さんが何処にいたのかも分らぬまま、あっという間に始まって、そして終わっておりました。

アナブースから出て来た大柄な、本格派のKRTアナウンサー氏が言いました。

「やり易かったですねえ」

いえ、番組内容が良かった、ではなく、よく聞いたら、原稿の文字が綺麗で読み易かったので、スムーズにナレーションが出来たとの感想でした。

何にしても、大騒動の一件が、何はともあれ落ち着いた瞬間でした。心底、ホッと安堵の吐息をつきました。気がついたら傍に、町野アナが笑顔で立っておりました。町野さんの顔を見つけ、もう一度、私は安堵の溜息をついたものです。どんな意味にしても、全国放送を担当して下さった東京放送のベテランアナウンサーから、直接にお褒めの言葉を戴いたわけです。肩の荷が下りました。感謝の外ありませんでした。

海面の干満の差が事故の原因？

○新井 帰り着いてから聞きました。あの、本番の直前、まさに5分前に発生した原因不明のマイクロ送信電波の事故。放送技術部門だけでなく、宮島からの中継で発生した訳だから、海洋関係やら船舶無線やら多方面との連携作戦で、おぼろげに事故原因が分かって来たのだそうです。

考えれば現場からの中継電波は、高いか低いかを別にして、常に海の波の上を飛んでおりました。

現場の神社から、まずは海を渡って対岸の大野町のマツダ迎賓館の屋上へ。そこに新設した大型の金属製反射板に電波が突き当たり、反射板の角度に従って反射し方向を変え、今度は広島市の南端にある黄金山に向かって広島湾を横切って飛んで行きました。ここでも同じように電波の飛びコースがほとんど海の上でした。

此処までの電波の飛び具合を考えるに、神社からの映像などをテレビ電波として発射した位置は、参道の岸壁の上です。海面からは2メートル程度かな。その電波を受け止めて反射させたのが、対岸の迎賓館の屋上というから、これは標高5メートルくらいかな。そこから電波は海の上を飛んで、標高221.7メートルの黄金山の送信所に届いた。宮島から広島市までの直線距離は約15キロ。ほとんど、海面すれすれにテレビ電波が飛んで行ったことになります。マイクロ波は細いビームとなって直線を飛んで行きますが、その下に海面

があり、その海面が潮の干満で上下すると、細いビームとなって飛ぶテレビ電波といえども飛び具合に影響を及ぼすことがあるのだそうです。この電波の飛ばし方を「海上伝播」と言うそうですが、例えば干潮の間にテストしていてOKでも、満潮となってからテストすると駄目、ということがあり得るのだとか。

ええっ、まさか潮の満ち干がテレビ電波を邪魔するなんてこと、本当にあるのか。事実、宮島で失敗したじゃないか、とこうなってしまったのです。

なら、高いところから電波を発射して、高い己斐の茶臼山へ飛ばしたら如何？ そうなんです、ピンポン、正解です！もっとも現在では、宇宙に浮かぶCS通信衛星を利用するテレビ中継だから、どこからでも中継するのに不可能は無いそうですから、どうかご安心を。私たちは、少しばかり早く生まれ過ぎたのです。

デジタル時代の現在、私たちテレビ古代人が苦労に苦労を重ねて実現に漕ぎ付けた技法は、みなほとんど、不必要に成り果てているそうです。あの時代に苦労したことなんて、現在のデジタル技術では、すべてが簡単にして容易に可能。昔の人々よ、残念でしたねえ、となくなってしまった次第。嗚呼。

初のテレビドキュメンタリー番組を

○新井 ちょうど、テレビスタジオが完成する直前の8月6日にあわせて、私は、16mmフィルムでドキュメンタリー番組を作りました。

昭和36年8月6日(日)の放送で、当時としては特殊な20分番組でした。カメラマンは報道の萩原啓志君で、この時から私は彼とのコンビでドキュメンタリー番組を作り続けるようになります。番組名は、フィルム構成「『鶴よはばたけ』～瀬戸奈々子の手記『かえらぬ鶴』より～」。RCC初のテレビドキュメンタリーのフィルム番組です。

だからフィルム番組としての処理が、事前も事後も恥ずかしながらお粗末至極でした。スタッフとして、この時期には、私が抜けた後の中軸を努める佐々木嘉治君が、ADとして加わってくれています。テレビ制作課のスタッフ合計が、この時

から4人になったのだったかな。

構成・演出は私、撮影・編集は萩原啓志、助手が佐々木嘉治と言う、小じんまりしたチームで作りました。脚本は私が書きました。撮影は主として長尺もののフィルム撮影に向けた、アリフレックスという新鋭撮影機を使いました。映画の世界では、フィルムの長さ（寸法）を尺と言う用語で表現します。その業界用語がテレビの世界にも入って来ているので、フィートに相当する用語と考えて下さい。丸い缶入りの白黒ネガフィルム一缶が、中身100フィート、時間にして2分30秒くらいだったかな。

普通のニュース取材で使うカメラは、一缶100フィート入りのフィルムを装填したDRカメラです。これは手でゼンマイを回してネジで駆動する頑丈なカメラですが、惜しいかな、フィルムは100フィートだけ、撮影時間も精一杯ゼンマイを巻いてシャッターを押しても、せいぜい30～40秒くらいしか撮影できない。レンズも3本ついているが、手でレンズをガチャガチャ回して、標準焦点の50ミリを使うか、75ミリの少しくローズアップ気味レンズで狙うか決めて、それからシャッターボタンを押すわけ。「勝負は、シャッターボタンを押す前に決まってしまうんだ、心してシャッターボタンを押せ」と教え込まれました。「シャッターチャンス逃すな」とか、「決定的瞬間を狙え」と命じられても、カメラに幾つもの制約がある。だいたい決定的瞬間なんてヤツは、あっという間に過ぎてしまうものなんです。難しい。私たちも報道部からカメラを借りて、自分で撮影すること、しょっちゅうでしたからね。

原爆特番の「鶴よはばたけ」は、初のフィルムドキュメンタリー番組だから、撮影で苦労したと同時に思い切った実験もしました。撮影カメラがアリフレックスだと言いましたが、あのカメラだと、長尺フィルムを装填して長時間撮影が可能なのです。番組のトップ場面。原爆病院に入ると階段があり、それを登って病室に着きます。あちこちの天井から千羽鶴が下がっており、ベッドの患者さんが扇風機で揺れる鶴の飾りを見上げて横たわっている。

この情景は普通、いくつもの短いカットで撮影し、それらを編集し繋いで表現するものです。で

も私たちは、その方法は取りませんでした。ここで長尺撮影可能な新兵器の出番です。萩原君が肩に大型カメラを担ぎ、脇から私が彼を転倒せぬよう誘導しながら、寸時もカメラの回転を止めることなく、病院玄関から病室までのノンストップで移動撮影を続けたのです。あたかも訪れた患者の家族の目になったが如く、ですね。

もうひとつ、天井から下がった千羽鶴の映像を、レンズ前に回転プリズムを装着して撮影しました。一番の苦労は、一定の速度でプリズムを回転させるワザでした。紐を巻いておいて、その紐をユックリ引っ張ってレンズを回転させる。私の担当でした。幾つもの鶴が空間を回転するというイメージ、なんとか成功した映像を目にしたときは嬉しかった。

幼い娘を残して原爆症で亡くなった若い母親の手記が朗読されます。その背景で、これら様々な映像が現れ、流れ、そして消えて行く構成です。

悲しい母の手記が流れる場面で私は、ある女子中学校で撮影した、バレーボールの試合に歓声を上げる少女たちの群像を挿入しました。後年、映像作家の羽仁進氏が、この場面を絶賛してくれたと聞き、こちらも歓声を上げたものです。まさにそれが、私と萩原カメラマンの狙いだったからです。この作品、テレビ初期の制作だったため、タイトルのフィルム焼き込みとか、音声のSOF化（音声をフィルムに光学的に焼き込む処理）など、未完成のまま資料室で保管されていました。

そのため経年劣化が生じて音声テープが聞き取れない状態に陥り、いまは劣化したままがDVD化されて保存されていると聞きます。音声は実は当時からフィルムに焼き付けられておらず、短編



105. 慰霊碑の前で瀬戸奈々子さんの遺児と祖母

ものだから同期（シンクロ）可能との技術的判断で、ラジオ用音声テープへの録音で放送されたままだったのです。永らくの室温上昇で、音声テープがチリチリに捻れてしまっていました。残念至極です。タイトルや音声のフィルム焼き込み処理などは、地方のテレビ局では出来ません。みな京都の東洋現像という専門会社への外注加工でした。その費用を惜しんだ結果の失敗です。

フィルムの編集とは、現像したポジフィルムを見ながら、不要部分を切って捨てる作業だと思ってください。切り捨てた部分の駒がヒトツ、次へ繋ぐべき駒がヒトツ、都合2駒が失われ、そこを特殊な接合セメントで貼り合わせるのですが、この2駒が実は問題なのです。分かりますかね。

ビデオ編集でも、似たような経験をしました。音楽の指揮者が使う用語に、「アフタクト」という言葉があります。タクトを振り下ろす寸前に指揮者は、指揮棒を一瞬、振り上げる仕草をします。これが「アフタクト」です。この呼吸ですね、編集すべき箇所を決定するときの、繋ぎ目の駒を決めるコツは。編集者の使う業界用語に「ヒトコマ詰め」という用語があります。気持ちだけヒトコマ、短く編集することです。

この番組は、ネガで撮影をしてポジフィルムにプリントし、そのポジで作品を編集して完成品を作り出し、その完成作品を基礎にネガフィルムを編集してネガの完成作品を作り、更にそのネガによる完成作品を基にしてポジフィルムにプリントして完成させました。こうして、手間はかかるが本格的な完成品として放送に供する、というドキュメンタリー作品としての正規の撮影スタイルを初めて採用しました。

当時、テレビ用のフィルムは、ネガ・ポジ反転、というのですが、撮影したフィルムそのままが、ポジフィルムとして正常に見えて使えるよう現像するというフィルムが多用されております。

普通の映画などでは、先ずネガフィルムで撮影して、そのネガからポジフィルムへと焼き直し、ポジフィルムを編集することによって作品を完成させ、完成作品に併せてネガフィルムを編集し、そのネガによる完成作品をポジで焼き増しすることによって上映可能なポジフィルム（35mm）作品が完成するという、複雑な手順を踏んでおりま

す。それには普通、音響は光学録音と言って、フィルムの端にオプティカル録音の信号（波形による音声記号）が焼き込まれており光学式SOF（オプティカルサウンド・オン・フィルム）と呼ばれておりました。

なおテレビ界では、フィルムへの音声信号の乗せ方は違っており、フィルム（16mm）の端に磁性帯と言う鉄粉が塗られたゾーンが存在し、その磁性帯部分へ電磁方式で音声を録音するという、マグネチックSOF録音方式を取っています。

一刻も遅れを許さぬテレビニュースの世界では、ただでさえ悠長な手順など踏んでいる余裕はない。だから、撮影したフィルムが即座に上映可能なポジであることが絶対要素となったのです。音声も手軽な電磁式録音方式でした。

しかし後日の必要性とか、正規の作品とかは従来通り正規のネガ撮影、ポジ編集という基本ルールを守ります。ポジからネガを作る「デューブ」という技法もありますが、フィルムは編集痕が明瞭に残ります。などの理由で、必要に迫られた場合にしか使われない技法へと変わってしまいました。デジタル時代となった現在では、消えた技法でしょうね。

そんな時代へと向かうテレビ開局直後の時期に、私たちは、後代に残すべく敢えてネガ撮影の方法を選びました。初めての冒険でしたが後年、カラー時代になってからの撮影は、すべてネガ取材方式を採用しました。早すぎた実験であり、冒険だったかもしれません。だから現在も現物が、ネガとポジの双方が、RCC資料室に残っています。私もDVD化して私的に手元に残しております。

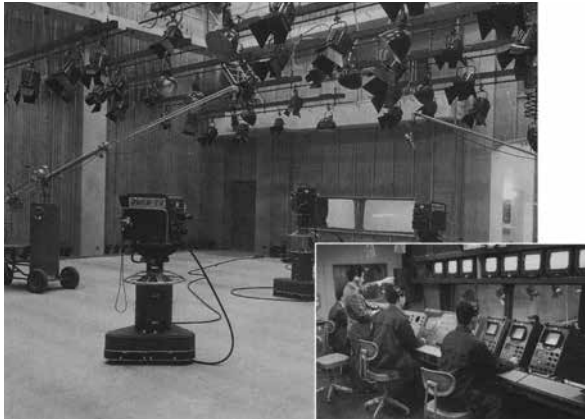
テレビ専用スタジオの完成

○新井 テレビスタジオは昭和36年10月19日、広島市基町に完成した新放送会館内に、テレビ技術の田中通俊氏とテレビ制作の私など、関係者合議の設計により出来上がりました。広さは約300㎡、まだ白黒時代ですがテレビカメラ3台が備えられ、ブームマイクや照明設備も完備。憧れ待ち焦がれたテレビスタジオが目の前に拡がり、嬉しさ溢れる瞬間でした。

（新井氏作成のメモを見ながら）昭和34年4月の



106. 落成した基町放送会館



107. テレビスタジオと副調整室

テレビ放送開始から36年10月の新放送会館スタジオとVTR設置までの間、テレビ中継車のみで苦闘していたナイナイ時代の終わりでした。

カラー時代は昭和42年9月10日、カラー映画を放送するための、カラー用フィルムプロジェクターがテレシネ室に設置されたのを手始めに、私が特別番組制作班の事務局長を務めながら、フィルム番組の取材制作も担当していた開局15周年記念テレビ特別番組「瀬戸内海シリーズ、全52回」のうち「観光編13回」が、同年10月1日から、中国放送で初めての自社制作カラー番組として放送されました。

なおRCCは、同年4月1日、社名を中国放送へと変更しました。

全国でテレビがカラー化されたのは随分早く、昭和34年4月15日に日本テレビが初めてカラー番組を放送したのち、昭和35年9月10日からNHK



108. テレビ「家族そろって歌合戦」

東京と大阪、日本テレビ、ラジオ東京、朝日放送、読売テレビがカラー本放送を始めています。

RCCのテレビスタジオが出来るまでのことは、幾つか話しましたが、「家族そろって歌合戦」なんていう公開の全国向け番組も、スタジオの無い時代に担当して放送していましたし、何本かの歌番組も公会堂から中継生放送しました。「家族そろって歌合戦」のように、地元の楽団を使っの歌謡コンテスト番組も引き受けて放送するようになって来ると、全国向けとして恥ずかしくないだけの演奏力を持つ楽団を揃えなければならぬので、そうした面でも、さまざまな苦勞をしました。

これだけ全国版の大規模な音楽・芸能番組を引き受けるようになった時期には、当初の、たった2人だった制作課員も若干増員になり、佐々木嘉治君、沖野理君、才木幹夫君らを加えて5人チームになっていました。これで何とか舞が舞える、と喜んだものです。のちに佐々木嘉治君には、「家族そろって歌合戦」のチーフ・ディレクターを委ねましたし、テレビドラマの演出を任せるなど、一人前のテレビ・ディレクターに育ててくれました。この時期に至って、ようやくテレビ制作チームは、草創期の苦闘を乗り越えたと言える状況になっております。

さて、昭和36年の10月、待ちに待っていたテレビスタジオが基町の新放送会館に完成しました。ところが、出来た途端に私が大失敗をやらかしてしまったのです。

3台のテレビカメラを備えたテレビスタジオが完成したと同時に、これまた、待ちに待っていた新兵器のVTRが設置されました。これは誇るべ

き凄いスタジオが完成したというので、視聴者の皆さんへ自己宣伝しようということになり、即決で企画の方針が決まりました。放送日は同年11月3日、タイトルは、INVITATION TO RCC、「RCCへの招待」と銘打った自己宣伝の45分番組を、新スタジオから、お手の物の全編ナマ放送でやろう、と決まった。それが大失敗を招いた。

なぜ大失敗したかという、カメラを6台も使ったんです。中継車に3台ありました。スタジオにも、新しいテレビカメラが3台入りました。さらにVTRが設置されたので、VTRも使って、社内あちこちの場面を先撮りしておき、それを随所に流そうということになりました。そういう機材を順次スイッチオンして電源を入れて行った途端、ボタンとスタジオが停電。どうにもなりませんでしたね。

番組が始まった途端でなかったのが不幸中の幸いなのか、逆に不幸だったのかも分かりませんが、番組が始まって途中で7分間もの停電となったので、技術者全員が停電の原因を探して対処している間に私は、原因など分からぬまま咄嗟に、真っ暗なか緊急用のライトを頼りに、このあとの番組を如何に進めれば体裁よく、予定どおりの番組として復帰できるか。そして如何にすれば、定刻どおりピタリとテーマ音楽もろとも、番組を終了させることが出来るか、必死の形相で手元の台本をひっくり返していました。それが担当ディレクターたる私の唯一、必至の責任でした。

カメラ合計6台～スタジオカメラ3台は、社内のあちこちに全部配置していました。中継車からもカメラ3台を引き出して社内を持ち込み、フロアごとに配置していました。当社初の2インチVTRにも事前収録の場面が幾つかスタンバイされていました。

番組は、新しく完成した放送会館の中は新鋭の放送用機材で満杯であり、「夢のようなことが夢でなくなる魔法の世界です」、という設定のバラエティ仕立てで、歌アリ踊りアリの番組として用意していました。

つまり、一連の番組ではあるけど、実は幾つものブロックを積み上げたみたいに、不思議なテレビの世界を次々に、区分けして紹介する仕組みで成り立つ、という構成にしてあったのです。

思い切って、幾つかのブロックを切り捨てました。勿体ないも惜しいも、あらばこそ。時刻というヤツは12進法です、番組も時計も60秒刻みで進行しています。エイヤとばかりの、必死の12進法計算で番組内を緊急再構成しました。公式記録では7分間の停電が1回、となっているけど私は、長い停電に続いて、電源を入れるたびに立て続けに3回の停電が発生したと記憶しています。必死の計算は、一回だけじゃ終わらなかったから。

台本の数ページを削り、準備していたVTRシーンを吹っ飛ばし、現場を仕切る数人のフロアディレクターに指示を出し、出演している可愛い子供たち司会者群を宥め、現場に待機していたゲストとテレビマンたちを移動させ、気が付いたら明るく電気が点いていました。照明が戻ったトタン、私が何をしていたか、今や記憶は吹き飛んでいます。しかし、ただひとつ、画面は慌てず騒がず悠々と、何事もなかったかのように進んでいました。

どうやら加重負荷による停電、ということが分かって来ました。では、また停電があり得る、と気を引き締めながら進みます。狂言回しと言う用語が業界にあります。この時の司会者群が、まさしく適切な言葉と態度で危機的状況を防いでくれました。番組の構成者でもあり司会者でもあった劇団の上田修君と、彼を慕って出演していた可愛いチビッコ司会者群との名コンビと、危機一髪を救ってくれたRCC技術陣との集中力に、心からの感謝の思いでいっぱいです。

問題は時間でした。時間どおりに終わらなければ、見事な失敗です。それも中途半端に終わったのでは、自社を自慢するための番組なんだから格好が付かない。頭の中では、都合4回もの停電事故に際してパーッと計算した結果が功を奏すか、失敗作を失敗作として後世に悪名を残すだけで終わらせるか。停電が収束してからの残り時間は、猛烈に回転させた頭脳力の結果を待つという、憂鬱な気分でした。

定刻が迫りました。終了テーマ音楽が録音されたテープを、終了時刻から逆算して早スタートさせる時刻が、キッチリ予定通り、何もトラブルもなく来たのです。アシスタント氏の、「エンドテーマ、早スタートしました」の声が、新しい副調整

室に響きました。「おおーっ」とドヨメキが起こりかけたけど、「まだ、まだ、まだ早い」と私。

そして残り番組は進み、あちこち部分的に吹っ飛んで、完全な新館紹介番組にはならなかったけれど、最後は会館ロビーに集まっていたバレエグループのダンスが始まって、既に流れていたテーマ音楽が大きく湧き上がってミゴト完奏（きっちり演奏が終わることを完奏と言います）。かくてテーマ音楽が完奏し、エンドテーマが出て、番組は終了しました。

それ以来、「新井は何が起こっても何とかしてしまう、きっちりエンドマークを出す奴」という評判を貰うことになりました。かくのごとく私のテレビ・ラジオの時代は、失敗だらけでした。

テレビスタジオと共にVTRが活躍します。現場中継も活躍します。ネット系列を外れたネット番組として名を売った「ワイドサタデー」ですが、ABC朝日放送が基軸のキー局となってネットしているので、系列を越えて西日本の多くのテレビ局が入っています。岡山の山陽放送、広島の中国放送、海を越えて松山の南海放送、九州の大分放送。それからお隣の山口のKRY山口放送。南海放送と山口放送は日本テレビ系列ですが、朝日放送のほかは東京放送系列。しかも全部ナマ放送で、現場から中継することが原則。ということは、私たちがテレビの初期にナマ放送を強いられていた時代と同じ。だから、その時代を思い出しながら私たちは、「ワイドサタデー」に熱中しました。

そのほかにも、幾つか持ち回りの番組があります。前出の「源平芸能合戦」、「家族そろって歌合戦」のほか、「蝶々雄二の夫婦善哉」、「テレビ結婚式」など、みな舞台上での公開ナマ放送の番組です。手間もかかって、全国放送だからひとときわ気も使うし、大変でした。そういうネット番組とローカル番組を幾つも抱えて走らなければならなかったのですから。

番組制作に必要な知識・技術

○新井 ネット番組というのは、結構、実は営業的にも、収益として会社のプラスになるのです。地元制作ということで制作料も入ります。ネットの分け前というのか、配分がきちんとネット料として入ってくる。だから小さな制作体制の地方局

でありながら、結構しばしば制作担当順が回って来るのです。それらすべてを引き受けるには、制作課の人数が2人や3人では足りない、ということで必要に迫られ少しずつ増員されて来ました。

やがて、立派に完成した新鋭のテレビスタジオを使って、自分たち地元で番組を作ろうということになります。ところが、スタジオがあり、テレビカメラ3台があっても、それだけじゃテレビ番組は作れません。テレビとは映画と同じで、人物が登場するだけじゃ様にならない。テレビとは目で見る番組なのです。何もかもが見えてしまうし、何かが見えていないと、雰囲気も出て来ないものです。裸のスタジオで西部劇は出来ません。基礎的な、あらゆる道具立てが必要なのです。

サブロクなんて業界用語、聴いたことありませんか。最近メートル法を採用したようですが、旧来型寸法の尺貫法で、3尺×6尺×0.5尺の平台、又は二重と呼ぶ、舞台装置の基礎となる台のことです。サイコロはどうです？博打で必需品のアレではなく、一辺が10×10×5寸などの箱型の台を、舞台美術の業界ではサイコロとか箱馬、足とか呼び、別に馬と呼ばれる2尺（60センチ）程の嵩上げ用の台も使われています。平台と共に、舞台装置を組み立てるための基礎になる道具です。

建具などを建て込むための支木とか馬立などが必要です。まず、これらの道具類が無いと、スタジオ内にテレビ用の舞台装置セットが組めない。だいたい普通の座談会でも、スタジオのフロアに直に椅子を置いて座ったのでは、カメラの目線から見て低すぎる。だから常にスタジオでは、先述の平台を何枚も運び込み、各種のサイコロで高さを調節しながら座談会用の会議室を建て込んだり、囲炉裏を囲んで座敷を作ったりしてテレビ用のセットを組み立てるのです。

遠くに見える山並みなどを表す遠見とか、そのあたりに転がる岩石を表す切り出しとか、丸物や半丸物など、テレビセットには色々な道具や造作が必要なので、それらを仕切って作り出すワザ師も必要です。また、それらの基礎知識が無くては、一人前の演出者、またはテレビディレクターである、とは言えません。

だからまず、テレビ番組をスタジオで制作しようとなったら、それ用の台本を作ると同時に、テ

レビセットの設計図も必要になります。照明プランも必要。基本的にはスタジオ美術や照明さんなどの専門家が設計するのですが、その基礎となる演出者の思いが籠ったスケッチを描くことぐらい出来なくては困ります。

番組内容によって人物の配置やら、人物に動いて貰うなら、その動線を確認して図面に反映させねばならない。室内なのか室外の庭なのか、はたまた交差点なのかも決めねばならない。それらしい風景も見えるわけです。立ち木やポストもある。人が歩くかもしれない。みな、演出家であるあなたが決めて図面に反映させるべく、その平面図を頭に描かねばならない。細部も決めたら、正規の図面を引くよう舞台美術へ発注せねばならない。それにはすべて費用がかかります。図面が出来て細部も決まったら装置の製作を発注し、一定の時刻までにスタジオに組み立てて貰い、順序良く次は、照明を決める作業に移らねばなりません。

ここでも登場人物の動線が絶対に必要。その動きを追って、あらかじめ照明を仕込んで置かねばならないからです。ステージショーみたいに、スポットライトが人物を追う、などの照明の当て方など、普通のテレビスタジオでは致しません。先ず出来ませんね、そんなこと。

スタジオには、一面にテレビセットが建て込まれており、ライトを振り回すたびに、セットの大きな影がスタジオ内を動き回るのでしょうから。スポットライトくらいの機材名は知っているでしょうが、現在風のコンピュータ制御でライト自身が踊り廻るような光の演出は、近來の出来事です。光芒を見せるためには会場内にスモークを焚かなきゃならず、その人体への影響などの研究も欠かしてはなりません。

ほかにも、重要な照明器具と役割を知っていますか。天井から吊り下がっているボーダーライト、足元に並んでいるフットライトまでは聞いたことあるでしょう。しかしさて、持ち運び可能で便利なストリップライト、なんて知っていますか。女性の裸じゃありません。フラッドライトの一種です。広く一様に明るくする簡単な機構の照明器具です。スポットライトもフラッドライトも、照明の使い方を示す器具名です。サスペンションライトは、天井から下の舞台に立つ人物に頭上から真

下へと光が注がれる、特殊で印象的な用途の照明器具の名称です。個人的には、私の好む手法を産み出せる機材なので好きですね。

何もない壁へポツと光が輝く、その光の尾が壁面を斜めに横切って走る、なんて、これだけで余分な舞台装飾は不要ですね。タッチと呼びます。この手法の効果も好きな照明法ですね。色彩が自由に駆使できる分野です。是非、挑戦を！

次は出演者の衣装と化粧です。自前の衣装で良いなら結構だけど、季節に合わせて毛皮のコートを、ということになると、手配からあとすべて一切を引き受ける羽目になるでしょうね。衣装の借用料は、クリーニング代を含めて相当に高額と覚悟が必要です。衣装は自前、が今や基本ですかね。外注すれば、すべての事が済む時代だから。

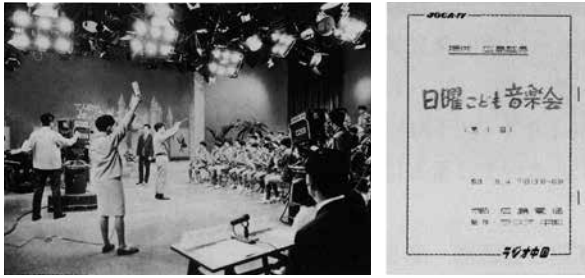
現代のテレビインタビューでは、化粧はもう基本的にはナシ、という局が多いようです。せいぜい汗取りか、テカリを抑えるためのパフ程度でオシマイみたいですね。開局時は、テレビ用の化粧は大変でした。歌手などはテレビ局を信用せず、専属の化粧係を引き連れて来ましたからね。例の、マックスファクター化粧品絶対の時代です。

さてやっと、自社制作のテレビ番組を作ろう、との機運奔騰の時期到来です。先述のような多岐にわたる諸問題を、なんとかすべて解決し得たと判断できた時期です。昭和36年10月19日に基町にテレビスタジオ付きの新放送会館が完成。翌年、昭和37年4月には、初めて自社での本格的なテレビ番組の制作を狙って「テレビ定時番組企画案」を書き上げ、新機軸のRCCテレビ番組をスタートさせる体制を組み上げ、RCC最初の定時ローカル制作番組、「RCCテレビホール」をスタートさせました。

毎週木曜日の夕方30分、という自由な枠を設定するから、何をやっても宜しいとの意味で「ホール」と名付けるので、ローカル局らしい自由で実験的な番組を作れ、という夢のようなローカル自社制作番組の広場が誕生しました。

その代わり予算は少ないぞ、と先に念を押されましたが、そこはそれ、一種のプール制で予算を考えようや、と私たち現場スタッフは勝手に決めました。時は、昭和37年4月10日のことでした。

自由な大宴会も認めて好きなこともやらせるか



109. テレビ「日曜こども音楽会」

ら、その代わり、お堅い筋からの持ち込み企画の定食番組もやってくれ、とばかりに独立したレギュラー番組が次々に舞い込んで来ました。

特集で放送して好評だった「日曜こども音楽会」が、好評に応じて30分のレギュラー番組に成長しました。昭和38年4月7日スタートで、日曜日の9時30分からの30分番組。数年間の長寿番組へと育ちました。スタジオで数組の子どもたちによる内容自由の音楽会ですが、コンテスト形式ではなく、合唱団の指揮者とか教育委員会の先生など3人の音楽専門家が一曲の演奏が終わるごとに優しいアドバイスを与え、そして次の演奏に入る、という形です。スタジオから飛び出し各地で公開放送するまでに発展して好評でした。企画発案者は私だったけど、担当は音楽学校出身の才木幹夫君。のちには沖野理君や出雲敏弘君だったかな。公開放送番組へと変身してからは県内各地を訪問して、子供たちが出演しやすい番組だとの人気も出ましたね。司会者も劇団の上田修お兄ちゃんと増田礼子アナのコンビから、井尾義信アナと劇団の怜子お姉ちゃんのコンビに代わったり、長寿番組となっただけに司会者も講評する先生方も何度か交代した自慢の番組です。提供は最初が広島証券、のちに広島相互銀行に代わりました。

同じ年の8月7日、今度は広島市が提供する定時番組が出現します。「市民と共に」で、いわゆる地方自治体の市民向け広報番組です。15分番組で週一回のレギュラーでした。この種の番組で最も難しいのは、県や市側と局とのなれ合い番組にならないよう、そこに適当な間合いを取ることです。番組化するに当たっての姿勢と言った方が分かり易いかな。宣伝番組ではなく、あくまで広報と言うかPR番組なんだ、という枠を守る節度です。相手のあることだからトコトン喧嘩をするわけにも行かないが、突っ込むべきところは明確

にすることは必要です、これは沖野君がメインディレクターでしたが、のちには制作部から報道部へ担当が変わっても続く長寿番組となり、たしか現在も続いているはずですよ。

ローカルの定時番組は、もう一つ、料理番組がありました。これは酔心とかいろいろな提供スポンサーもあったし、女性の得意分野でもあるので、小畑和子さんがメインでした。彼女は自宅でも二人のお姉さんと料理教室をやっている人ですから、テレビスタジオの片隅の少し奥まった一角に常設の料理コーナーを設営して、そこで毎週1回の料理番組をやりましたね。

次にもう一つ、文部省からの提案があって、「3歳児」(シリーズ)という番組を定期的に担当するようになりました。幼児教育番組で、3歳児という一番手のかかる年齢の幼児の教育法などがテーマで、その3歳児を、家庭として、学校として、幼稚園として、どのように育てて行けば良いかというので、広島大学の附属幼稚園担当の森林先生に常任顧問として加わって戴き、時には番組の表に出ていただき、沖野理ディレクターを担当者に据え新人の原田敦子さんをADにして、レギュラー番組として作っていきました。

最初のうちは、スタジオの中に3歳児そのものを招いてスタジオを幼稚園にして、その一角で森先生ほかの有識者、それから幼児教育専門家などにお話を伺ったり、目の前の子どもたちの所作を見て、さまざまお話をいただくというスタイルをとっていました。しかし、当然ながら3歳児は手に負えませんね。黙ってはいませんし賑やかなです。走り回ります。スタジオの中は賑やかな運動会になります。だから、これは途中で方向転換しますが、似たような構成は残しましたが、部分的に収録しておくなどの方法で逃げられるわけですから。この番組は、ずいぶん続きます。文部省からの提供番組でした。

それから、最初の頃、業界大手のレナウン提供で「女性サロン」という徹底した女性向けのスタジオ番組も生まれました。担当するスタッフで女性は小畑和子さんと原田敦子さん。あと全員が男性。苦勞しましたねえ。

タイトルどおり内容は、女性週刊誌的な奥さまの美容から化粧、衣装から料理、趣味や身の回り



110. 初の主婦キャスター、松島員子さんと

の小物から女性の生き方まで、なんでもお役に立つ、新聞でいうならば家庭欄・文化欄みたいな番組をテレビでやろうという壮大な企画。

数少ない女性視聴者を増やそうとの魂胆を秘めて司会者に、恐らく地方局ではRCCが初登場となるはずの、一般人の主婦を選びました。凄い美人とまでは行かないが、「それなりに美しい主婦」で趣味人の奥さま、松島員子（かずこ）さんを見つけて主婦司会者に登用したのです。

その相手役となったのは、「それなりにステキな男性アナウンサーを」ということで、RCCのチーフ・アナウンサーだった村岡芳行君を起用しました。私と同期入社した村岡アナは、のち東京放送に招かれて、全国ネット「JNNニュース」の総合司会を担当して全国に名前と顔を売った低音が魅力のアナウンサーです。

スタジオセットもNHKの「夢で逢いましょう」を気取った、お洒落で可愛いセットを組み、向き合って座る男女二人が、互いに身をチョイと斜めに捻った姿勢での会話から番組が始まる、という訳。今週のギャラリー、歌のプロムナード、くらしを楽しく、ふるさと散歩、などの4部門を柱として、事前にパイロット版を作って検討するなど念には念を入れてスタートしました。

構想は良かったけど、女性向けのオシャレ番組という事からか、あちこちから次々と、やたらに注文が入って来ました。初めは面白そうだねと喜んで対応していたけど、切りがなく要求レベルが上がって多方面へと広がって行くのです。

かくてハワイロケの注文まで出て来たところで、遂にスタッフが音を上げました。それでも1年ほ

どは続いたかな。テレビ初期の苦闘史のヒトツ。

○石田 どんな注文なんですか。

○新井 スポンサーがレナウンです。オシャレが狙いの番組です。司会者二人の衣装だとか、装身具についても話を広げて欲しいとか、スタジオに沢山の奥さま方を招いたらどうか、などなどもっともな注文ですよ。そのうち番組内容にも演出方法にも様々なスタッフ泣かせの注文が来ました。番組提供のスポンサーという、番組全体を買い切ったと同じ、というような感覚になるのかな。突き詰めると番組全体がスポンサーのCMになってしまいかねない危険性を帯びているのが、スポンサー買い切り提供番組の宿命です。

それでは番組全編がCMだ、ということになってしまい、CM規程によりNGなのです。しかし、あの苦労が今にして役に立っている、と私は思っています。ただ後輩に正しく伝わったかどうか正直ちょっと疑問ですが。

そういうかたちで「テレビホール」というレギュラーの自社制作30分番組の他に、ローカル制作番組が次第に増えて来ました。全国的なネット共同制作番組も結構入って来るし、頻りに地方局であるRCCに制作の順番が回って来るようになりました。あの局は制作能力がある、と判定されたのでしょうね。

当の地方局であり我が方も、対応すべく少しずつスタッフも増えて、それまでは制作課だったのが名前も「テレビ制作部」になる、という訳です。そこで私は、副部長と呼ばれるようになりました。すると会社側から、「君は副部長と言う名の管理職になったのだから、組合を辞めなさい」と言っ



111. 華やかになったテレビスタジオ

て来ました。

これまでしばしば話に登場した山本満夫編成副部長なみに、役職名が副部長になったんだから、もう組合員じゃなくて会社側の役職者だ、という理屈です。ほかの大会社では部下となる部員と言えば何十人、何百人でしょうが、RCCじゃ制作部と言っても人数は僅か8人程度。とても比較になりません。

でもホント、少しずつですが人数は増えて来ました。新人女性の新田敦子さんや、音楽専門のディレクターという人物が増えました。前述の才木幹夫君。前職はNHK広島合唱団のバリトンだった人で、もちろん音楽学校出身者。実はご縁がありまして、実の妹さんの才木清子さんが兄より先にラジオ中国児童合唱団に在籍していた、という関係者。彼が私と同年代ということもあり、「日曜こども音楽会」やら、プロアマ混成の公開番組「ゴールドブレイク・コンサート」のメインディレクターを務めて貰ったり、年末の「第九」を含めて、音楽物の重要ポイントを担って貰いました。

とりわけ「ゴールドブレイク・コンサート」という、地元の演奏家を集めてオーケストラを結成し、名指揮者の石丸寛氏が彼ら演奏家集団を特訓して、遂にはベートーベンの「交響曲第5番」を演奏してのけるという日く付きの番組ですが、才木幹夫君が中心になって、困難なプロ・アマ混成のオーケストラによる本格的な演奏会をやり遂げてくれました。私も部下にきつく「音楽に強くなれ」と言っている本人ですから、やはり自分も耳学問ながら懸命にのめり込んで、「第5番」の演奏会の時などは、スイッチャーというエンジニア

のチーフと一緒に、「第5番」の総譜をめくりながら、オケの演奏中にカメラ映像の切り替えタイミングを決める「カメラ割り」をしたものです。

実は、いま言ったエンジニアのチーフ氏、田中通俊君ですが、惜しくも早く亡くなりました。彼も私と同一年で昭和6年の生まれ。工業高校出身ながら、早くからRCC技術陣のチーフになり、後には最高位の技師長にまで駆け上った人物なのですが、ラジオ時代から、私が演出、彼が技術のミキサーということでコンビを組んでいました。

そのコンビ作品のなかでも特筆すべきは、ラジオの特性を生かして大変特殊な番組を1本作っています。入社した直後のクリスマス特集番組で、「星くずのきらめくところ」という、夢みたいなお洒落なタイトルですが、我が級友作家、笈浩二君によるラジオファンタジー番組です。

交通事故で重傷を負った少女が、意識を失った間に漂った夢の世界を辿るファンタジードラマです。その特殊な星々の世界のような雰囲気や音で、つまりは音楽と言うか、音響で表現しようと挑戦したのが、田中通俊ミキサーと私のコンビです。結局のところ二人だけで、不思議な宇宙の世界を表す音楽を作曲したし、さまざまな楽器や器具を使って私たち二人で演奏したし、それらを特殊な技法で録音して縦横無尽に編集しました。

グロッケンと呼ばれる鉄琴を叩いて、その音とメロディーを録音します。何種類も録音を取って、それを全部重ね合わせてエコーを付けます。次に、そのエコー音を逆さに回転させて録音を取ります。すると、通常は音の後に尾を引くはずのエコーが、音の頭に付くのです。分かりますか、(身振



112. 技師の田中通俊氏



113. 級友作家の笈浩二氏

りで音の動きを示しながら) そうすると、音がヒューッと飛んできて、目の前をヒューッと流れて去って行くのです。そう聞こえて来るのです。

ラジオの録音機には、録音ヘッドと再生ヘッドとが並んで付いているのですが、その位置に僅かな差がある。これを逆手に取って、録音した音を即座に再生し、更にそれをまた録音するのです。当時は未だエコーマシンなどない時代。だけど私たち二人がやった方法こそ、現代のエコーマシンの基礎だった訳です。時代が早すぎたのですが、特殊効果を使って番組を作り上げました。

後にこれを、どういう巡り合わせなのか分かりませんが現代音楽家の諸井誠氏が聞いて、即座に、「これこそ、ドデカフォニーだ」と仰ったそうです。現代音楽の世界では12音階音楽というんだそうですが、そんなこと、当時の私たちは全く知りません。現代音楽なんぞ作ったつもりも全くないのですが、聴く人が聞けば、あれは現代音楽のサンプルだったのでしょか。この作品もラジオ中国児童劇団の酒井智子ちゃん、奥田耕造君、北村智康君などチビッコ声優が大活躍して、民間放送の番組コンクール中四国大会で優秀賞を戴いたことが懐かしくも嬉しい思い出となっています。

技術の田中通俊君はテレビ時代になっても、やはり同じようにテレビのスイッチャーとって、技術部門のチーフで映像を切り替える役をやって

くれていました。だから、テレビ時代の初期はすべて、田中通俊と新井俊一郎のコンビで映像と音響とを仕切っておりました。私がカメラ割りをしてキューを出す。1カメ、2カメ、3カメと選んでいく。彼が映像を選んで切り替え、音響を作り上げて行く。そして共にドラマを作ったのです。

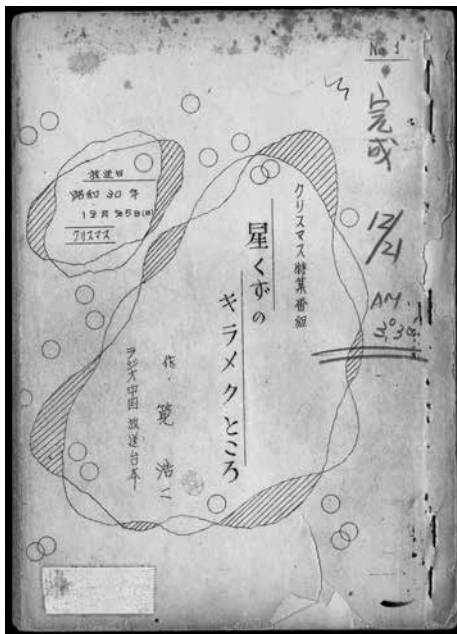
ラジオドラマを録音するとき彼は、必ず役者の語尾一声を、アッテネータという音量のつまみを瞬間的に少し回して掬うのです。

日本人というのは、ほとんどの人がしゃべっていて語尾が消えるのです。日本語で一番大事なのは、実は語尾なんです。語尾に、学校に行きたいとか行きたくないとか、好きだとか嫌いだという言いたいことの決め手となる動詞が来る。それなのに日本人というのは、大切な語尾を消してしまう癖がある。だから一番大事な、好きなのか嫌いなのか、行くのか行かないのか、ということが分からなくなるという悪い癖があるんです。役者にもそういう癖は残ります。絶対にやってはいけないことですが悪い癖が残る。田中通俊君は音響ミキサーとして、音の担当者として、語尾の音声をヒューッと掬う。つまり音を少し、聞き取りやすくなるように音量を上げてやるという、こんな小技までやってのける音の専門家でした。

テレビ・ファンタジー「夢女」

RCC初の芸術祭参加番組として、脚本・音楽から出演者まで、すべてを地元の間人だけで造り上げようという、意欲だけは極めて壮大だが成功の確率は極めて僅少…という無茶な冒険に挑戦したのは、テレビ開局から3年目で、テレビスタジオが完成しVTRが設置されてから僅か1年後という、昭和37年11月のことでした。このとき私たちは同年7月に、例の「テレビホール」枠を設置して貰い、初めてテレビドラマを作ろうという夢を実現させ、ようやく3本のテレビドラマを仕上げたばかりでした。

それなのに同年11月には、早くも芸術祭に挑戦、と決まったのです。だから私は、夢の実現だから誠に有難いことだが、さて現実として実力は無いし経験も少ないし、テレビドラマ造りのノウハウ、と言っても私がKRTラジオ東京への事前研修で現場を踏んで身に付けただけ、という心細さです。



114. ラジオ特集「星くずのキラメクところ」台本 (昭和30年)



115. 「夢女」予告テロップ

いったい何をどうやれば良いのか暗中模索…という思いでいた最中でした。

なのに不思議なことに、現場を預かる私の知らぬまま、いつの間にか第17回芸術祭への参加が決まっており、まるで業務命令みたいな形で上司から番組の制作が指示されて来たのです。思えば奇妙な出来事です。初の芸術祭参加という晴れ舞台を与えれば、制作現場の連中は喜んでテレビドラマ造りに熱中するだろう、との会社上層部の読みだったのでしょ。それとも出先の東京支社が先走ってキー局を口説き落とししたのでしょうか不明です。

実はルールとして、地方局が芸術祭に参加するとなれば、地方で放送しただけではダメなのです。キー局に頼み込んで東京地区で放送して貰わねば、芸術祭の審査員が番組を見て審査することが出来ないはずだからです。

ただ私としては同じ素材で、作品のすべてを縮景園という広島市内の名園でのオール現地ロケでテレビファンタジーと銘打ったテレビドラマ「夢女」を作りたい、という夢は持っていました。

しかしそれは、現地の管理事務所から丁重に断られてしまった、日くつきの持ちネタだったことは事実です。放送台本まで完成しておりました。これだってまた、実は大冒険でした。全編VTR収録を考えていましたが、今みたいに簡単にVTR編集なんて不可能に近い時代。だからまるで全編を生放送みたいな方法でドラマを現場で作ってしまわねばならない、という奇想天外な危険がイッパイの大冒険を考えていたのです。でも結論的には、縮景園の管理当局から丁重に断られてオシャカになっていた企画でした。だからこそ私と

しては、猛烈に有難いものの、同時にまた、猛烈に困惑してしまった業務命令でありました。

正直なところ、手を付けたばかりのテレビドラマ造り最高のチャンスでありながら、手を付けたばかりだったが故に、その物凄い怖さも分かって来ていたところだったからです。

その芸術祭への出品予定作品は、テレビファンタジー「夢女」でした。世間にはテレビ・ミュージカルだと宣伝されて居ましたが、違います。

物語の素材は、昔から地元の農村地域に伝わる素朴な民話です。実は数年前、私の演出でラジオファンタジーとして完成させ、民放祭番組コンクールに出品し、奨励賞的な優秀賞を得ていたものを、改めてテレビ用にリメイクした作品なのです。

それは、ずーっと、えーっと昔のお話です。ある国のとある村に、お花ちゃんという不幸せな女の子が住んでいました。継母から意地悪されたお花ちゃんは、いつもの丘に登り、いつものように枯れ木の根元で泣き寝入りして、いつものように夢を見ました。だーれにも言われん、ステキな夢を見たのです。そして歌うのです。

「夢を見た見た 夢を見た

だーれにも言われん 夢を見た」

そうして始まる民話劇風の「夢女」は、夢の話聞き出したい村人や天狗たちを前に、ステキで楽しい夢の話を自分一人だけ抱き締めて、お花ちゃんは絶対、だーれにも、話しませんでした。

	*	*	*
作	多地	映一	
音楽	山崎	登	
演出	新井俊一郎		
振り付け	富士波雄三		
装置	延藤	蹕蔵	
照明	篠本	豊	
進行	上床	直人	
化粧	植木	早苗	
効果	R C C放送効果団		
技術	撮像課		
V T R	運用課		
演奏	ラジオ中国サロンオーケストラ		
合唱	ラジオ中国放送合唱団		
	*	*	*

お花 坂元真琴（劇団NHK）
 お石 田賀小夜子
 お作 野中 悦子（劇団NHK）
 天狗 岩崎 徹
 長者 上田 修
 息子 栗栖 忠士
 行者 竹田 淳
 じいさん 富士波雄三
 同聲 室積 薫
 ばあさん 富士波一調
 同聲 加藤 操子
 里人A 室積 薫
 里人B 延藤伊千雄
 子供たち ラジオ中国児童劇団
 富士波雄三社中

* * *

この時期にはテレビスタジオもVTRも完備していましたが、私は敢えて野外中継的な雰囲気、自然という得難くも素晴らしい舞台セットでの番組制作を意図していたのですが、先述のとおり、広島市内の「縮景園」の使用が許可されず、止むなくスタジオ制作に方針を切り替えたものです。それだけに今度は、テレビ・ファンタジー・ドラマと銘打っての作品に仕立てたい私は、自然の景色が利用できないのなら、逆転の発想で、スタジオセットをメルヘンのイメージで統一しようと考えました。しかも80坪ほどの狭いスタジオに大きな幾つものセットを組むことは不可能だし、いくら芸術祭参加だからと言っても制作予算は文字通りの地方局並。

それなら、と考え付いたのが一杯だけのセットでありながら、角度を変えてカメラで狙うことで幾つもの物語が展開できるし、そこですべてのシーンがこなせるような、多目的・多角的、かつ幻想的で単純な立体的セットを考え出すことが出来ないか、というプランでした。

当時は既に、スタジオ美術要員として演劇の舞台美術分野から延藤蹕蔵君という要員を招いており、スタートしたばかりのテレビ自社制作番組のスタジオセット分野で活躍中でしたが、私は敢えて彼に設計を依頼せず、演出者としての私の意図をスケッチして彼に提供し、そのスケッチに基づいて美術要員たる彼が具体的な図面を描く、とい



116. 「夢女」の絵はがき

う方法を取りました。

「山のなかの小高い丘。その真ん中に一本、奇妙で面白いな木がヒョッコリ」

これが私のイメージ。何枚もスケッチを描きました。少年時代から鉛筆画が得意で、人気画家の樺島勝一氏の細密画を模写したものです。一方、建築家のような設計図も得意。これは学生時代のお芝居で舞台装置を担当したことで養われた特技かな？

「3本の、短くて、なだらかなスロープが地面に届く小高い丘には、先っぽが二股に分かれた百日紅のような枯れ木が立ち、廻りにも数本の木立。枯れ木の根元には奇岩がゴロリ。彼方には貧しい村があるらしい。噂に聞く天狗でも出そうだな」

これが私の創り出したテレビファンタジーの、舞台セットのイメージです。

テレビ美術担当の延藤蹕蔵君は、忠実に私のイメージをスタジオセットとして生み出してくれました。スタジオ中央に孤立する奇妙な枯れ木の枝々には、薄い紗とジョーゼット布が張り巡らされ吊り下げられ、枯れ木のツルツルに磨かれた肌は光り輝いて美しく、3方向に伸びる3本のスロープを駆け上がると、どこから駆け上がっても同じように、高さ3尺ばかりの丘の上に立つことが出来ました。

さすがに奇岩がゴロゴロ、という小道具は広島では作れず、京都の高津商会という小道具専門業者から取り寄せたのですが、それらは当然ながら、みな軽いプラスチック製でした。

「夢女」というドラマを作るまでに、テレビドラマを何本か作りましたが、経験はその程度。テ

レビドラマ専門の演出家になった、と思ったことなど一度もない。しかし「やれ」ということになってしまった以上、持ちネタだった「夢女」を思い切って持ち出したのです。

もちろん芸術祭は見事落選。木下順二風の民話劇の亜流だとか、厳しい言葉も戴きましたが、なぜか何人かの批評家の方からは、これは珍しい手法だとか、珍しいドラマだとか、ファンタジックな要素ふんだん、というお褒めの言葉も頂戴しました。

挑戦というか実験というか、テレビ業界としては禁忌だと言われていた手法を幾つか使いました。天狗が空を飛ぶ場面が出て来ます。私はラジオでやったと同じように、VTRを逆回しさせたのです。貴重品みたいに高価で大事なVTRテープを逆回転させるなど、何が起こるか分からぬ危険で非常識極まる行為です、あの当時ではね。お金が無ければ工夫するしかありませんからね。

しかし私は、やってのけました。そうしたらなんと、映像がキッチリ見事に出たのです。進んでいたはずが、急に後ずさりするわけです。だからVTR収録に際して、飛び降りる映像を撮るためには飛び上がれば良い。飛び上がる映像を撮るためには飛び降りれば良いのです。そういう奇妙な事がVTRテープの逆回転で出来たので、指示したものの自分でも驚きました。

もうヒトツそれに、びよんと空に跳び上がった瞬間に、その足元の僅かな空間に向かって急速ズームインする。一瞬のうちにカメラレンズをズームインする。飛び上がった足元の空間に急速ズームインすると、如何にも、ヒョイと空に跳び上がって消え去ったように思えるのです。



117. 低床式カメラも大活躍！

スタジオの天井から、重くて大きいテレビカメラを逆さに吊り下げて、天井からフロアに集まる群衆を狙うと、天空から地上を見下ろしているように見えるのです。そのままカメラをクルクル回転させると、見えている地上の風景も回転して目が回る。

テレビ技術的には、カメラを逆向けで下に向けてなど絶対禁止の時代でしたから、技術部門の上司には秘密にしたまま、現場の独断でやってのけた冒険でした。機材に故障が生じたら、バレてしまう。数百万円はするテレビカメラ1台をオシャカにする危険は十分に在った。もし、そうならいたら大問題でしたが、ならなかった。

録画テープの編集までやってのけたし、生涯一度だけの大挑戦番組でしたねえ。そういう私のテクニックが名古屋地区の批評家の間で結構、評判になったらしく、地域の雑誌で「これは絶対に金賞ものだ」という絶賛記事になっていました。でも残念でした、見事落選となったのですけどね。

そういう話題になる作品が作れたのも、田中通俊君という凄いエンジニアが居て、「やってやろうじゃないか」とばかりにやってのけたからです。

当時、テレビカメラは横にはならんとか、倒してはいかんとか、禁止事項が山ほどでした。その最たるものが、カメラを天井からぶら下げて真逆さまに地面を写せ、という事までやってのけた。鳥の目の映像が出現したのです。

草創期の苦闘も、今や微かな光の陰となって消えて行くのでしょうか。人のやらない事、やってはならぬと言われたことを、敢えてやってしまう勇氣と反逆精神の持ち主たちが、懸命にテレビの新時代を切り開いて来た、これはナイナイ尽くしの地方局魂なのかもしれません。

テレビ「お母さん」シリーズに挑戦

○新井 テレビ開局前、東京放送での研修で、たったヒトツ教えて貰って実際に役立ったと言えるのは、テレビドラマを仕上げる基本でした。昭和39年、「おかあさん」シリーズという全国放送の30分枠のドラマ番組を広島に作らせてみるか、という誘いが掛かって来たのです。「夢女」で芸術祭に参加するような局だから、受賞はならなかったが1本、作らせてみるか、など中央で誰かが考え

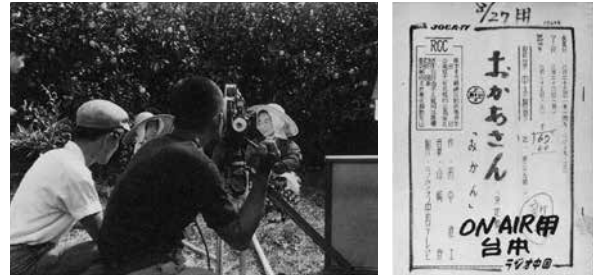


118. 岩崎徹氏

たのでしょうか。いうまでもなく、テレビドラマに手を付け始めたばかりの我が局のスタッフ。「よし来た、やりたいっ」との声と同時に、「危ないっ」との声も挙がった。これまた私は、決定については蚊帳の外でした。不思議にも今回は、東京支社編成から降って来た天の声でした。私が立候補した訳ではない。しかし、二度とあり得ない有り難いチャンスです。このとき私は心を決める前に、一人の大先達に相談を持ち掛けました。

RCC放送劇団の中核に居て、劇団を強力に牽引指導していた岩崎徹さんです。もともと文学座の俳優で、杉村春子さんとも面と向かってモノが言えるほどの人物。しかし兵役で航空隊に取られたのち退役除隊し、故郷の出雲は松江市に疎開して敗戦。のち松江で地元劇団を結成して芝居をしていたところNHKの目にとまり、広島でNHK放送劇団に入ったのち、今度はRCCがスカウトして招いたという経緯の本物の芝居人でした。たぶん例の山本満夫さんだと思いますが、岩崎さんの存在に目を付け、RCC放送劇団の指導者をお願いしたのだと推測します。私も岩崎さんからは、それこそ演出者と役者との枠を超えて公私ともに、お芝居と放送の世界での師匠としてドラマの神髓を伝授いただいたと感謝しているものです。あの「夢女」でも、岩崎さんがいらしたからこそ、あのレベルまで登り詰めることが出来たのだと確信しています。必死の形相でした。

岩崎さんは文学座出身ですから、田中澄江先生、



119. テレビドラマ「みかん」収録風景

田中千禾夫先生ご夫妻と親しいわけです。それで先ず田中澄江先生に脚本を頼もう。それも「お母さん」という通しタイトル通りに、瀬戸内海の島に生きる「お母さん」をテレビドラマに書いて貰おう、と話が整ってから事はトントンと進み始めました。降って来たような大役だけど、「お母さん」シリーズ制作局の一員に参加させていただくこと。題材は瀬戸内海の島を軸にした母物語を狙い、脚本は田中澄江さん、主演は南美江さんほかと地元俳優陣、制作はRCCテレビ制作課との基本が定まりました。当然ながら裏側の編成・営業間で、スポンサーの中外製薬とキー局とのネット料金と制作費の取り分などの交渉もスタートしていたはずでした。

私は疾走を開始しました。岩崎さんを経由して田中澄江先生に直談判したところ、あっさりOKが来たんです。私は東京中野にある田中先生の自宅まで押しかけました。手土産が「もみじまんじゅう」だったか詳細は忘却の彼方ですが、澄江、千禾夫ご夫妻がにこやかに私を応接まで迎えて下さいました。一気にお願いの筋道をすべてぶちまけてしゃべりました。意欲だけは誰にも負けない自負はあるが、正直なところ、テレビドラマ制作の経験は未熟で環境もローカル色だけは豊かです。取り上げたい素材は、瀬戸内海に住むミカン造りの人々の暮らし。被爆者も働いているが過疎も問題、など島の現状などを語り続けました。澄江先生は快く執筆を引き受けて下さいました。辞去する際もご夫妻が玄関口まで出て来られたお姿が忘れられません。のち確か原稿を2～3回直してくださったと思いますが、ほどなく完成脚本が届き嬉しさいっぱいでした。原本はRCC資料室かな。

タイトルは「みかん」。文字どおり「島のみかん」

がドラマの題材となった作品です。出演者にもヒントを戴き、その線で主人公の未亡人を南美江さん、姑を津島道子さん、友人を稗田敦子さん、息子を山田幸夫君という中央の役者陣でかため、舅老人を室積薫、長男の婚約者を高山光代、島の知人に岩崎徹という、劇団RCC総出演の布陣で固めました。島が舞台のドラマ、となると必然的に瀬戸内海の適当な島でのロケーションが必要です。初めて経験したロケハンで、上蒲刈島の宮盛にロケ最適地を発見して小躍りしたものです。ミカン畑が連なる丘の上にこじんまりした墓地があり、そこからは港も村の小学校も見下ろせる。遙かに島影の続く瀬戸内の海が見える。バンザイでした。

さて困ったのが、ロケ時のミカン畑。いまは7月なのに、ドラマでは鈴成りの蜜柑畑が広がった墓地から海が見下ろせることになっているのです。

○石田 どうされたんですか。

○新井 やむを得ぬ、「ミカンを鈴なりにせよ」との指令を下達しました。広島市内の「おもちゃ屋」と「装飾屋」の店頭から、プラスチック製の蜜柑が一斉に消え、時ならぬ瀬戸内の7月の島に、黄色いミカンが鈴なりになったのです。

○一同 ははは(笑)。

○石田 まだ白黒の頃ですか。

○新井 はい、白黒時代ですよ。白黒だから助かったんだけど、カラー時代にそんなことをしたら、すぐばれますよ。葉っぱの色と全然違うはずだ。

結果、地方局RCC全スタッフの努力と執念でした。効果団、化粧と衣装と美術進行集団に猛者を配属していた成果でした。16mm白黒フィルムロケでしたが、1巻きで3分足らずしか回らないんですよね。現像してみなきゃ写ったか否かも分からないのだから、毎回かっちり、ミスしないように撮らなければいけない。ミスをしたら、もう一回フィルムを入れ直して、最初からやり直さなければならぬわけです。今はデジタル時代だから、何遍やったって構わない。ポンとボタン一つ押して失敗や不要部分は消せばいいのだから気軽なもの。当時は、絶対にこの一瞬を逃してはならぬ、という必死の時代ですから、ニュースも大変だろうが、私たちドラマ制作部の方は、専属カメラマンが居なかった時代だし、ロケのたびに報道

へカメラとカメラマンとを借り出すのを頼みに行かねばならなかった。撮影が終わっても次がある。撮って来たフィルムを現像して、それを巧みに編集しなければならない。これもカメラマンに頼むか、だめなら自分でフィルムを切ったり貼ったりせねばならないのです。私など興味津々だったから、撮影も編集も自分でやったものです。やってみると分かるけど、とても面白いのです。思うように場面が構成できるし、テンポだって刻めるし、表情だって変えられることを知ってしまうと、あとは全部を自分でやりたくなるような分野です。

さて、島の港でのロケ場面。心配した東京放送から演出グループの俊英が応援に来ていました。応援と言うものの、実状はロケーション指導でした。助かりましたし、私たちRCCグループは、誰一人として彼から教えを受けなかった者が居なかったほど有難い助っ人でした。港での漁船でのロケでは、カメラ位置まで助言でお世話になったものです。その代わりに、私たちの放送局はローカルですから、中央の大きい放送局のように、やれスクリプターとかタイムキーパーとかという豪勢な裏方は誰一人おりません。ディレクターが自分でタイムキープをし、自分でスクリプターとして、この場面はこういうポーズ、こういう衣装で終わったら、次の場面はこういう格好でいく、などと自分で全部メモする。それはディレクターの責任であり、それがローカル局の宿命というものです。東京放送でもNHKでも、カメラの周りには、ストップウォッチを持って1シーンごとに全部タイムを計り、シーンナンバー何番はカット何秒でしたとか、シーンナンバー何番は、どういう格好で終わったという記録を作って残しておき、次のカットとのつなぎも全部、記録で分かるようになっているなど、スクリプターというのが居るわけです。そういう人がディレクターを囲んでごろごろ居て、テレビ映画であろうと、劇場中継であろうと、すべてキッチリ行くのです。ローカルにはそんなフンダンに人間はいません。全部、自分でやらなければならない。だから、自分でタイトルを書いて放送に使ったと、笑い話になっていますが、そんな草創期の時代そのままに、私たちは最後の最後まで、タイムキーパーもスクリプターもいないままでテレビドラマを作り続けました。

つまり、要領は悪いが、場面ごとの先撮りなどはせず、そんなこと出来る態勢もないのだから、台本の通りに撮影して行く、地方特色の「順序良く台本通り」撮影法で通しましたね、仕方ないから。

だから毎回、絶対にピシッと決まった演技をしないとNG、駄目ということになるわけで、何遍フィルムを無駄にしたことか、今なお悔いて治まらない心境です。秋吉台でも、フィルムのロケをしましたね。あのときは既にカラーの時代になっていましたが、きちっと三脚を据え、パンと言ってカメラをずっと左右に振り巡らせる。始めがどのポイントで、終わりがどこで、何秒間かけてカメラを回して、というスピードまで全部キッチリ決めておいて、それで初めてシャッターを押して撮影が終わる。シャッターを押した瞬間に勝負は終わるという時代。私たちは、物事は一瞬で決まるという時代しか経験していませんから、一瞬一瞬を大切にします。いまのデジタル時代は、撮影技術が非常に疎かになってしまい、呑気に映像を撮っているなという気がしますね。私たちは、スタジオが出来た、VTRが来たという喜びと同時に、待ってましたとばかり、スタジオでテレビドラマも作り始めました。中継番組も公会堂でやっていますから、一本一本がナマ中継だった時代の感覚が残っている。それですべてをキッチリやるという習性が身に付いているので、今の若い人たちとは、だいぶ身構えが違うのだらうと思います。

最終的にはスタジオ内に島の民家のセットを組み、フィルムシーンとを組み合わせながらの収録となりました。これまた島でのロケ以上の専門スタッフと、大道具に始まる作りものと衣装や化粧、小道具、履物や被り物、室内装飾や島と海との遠景などなど、本格的なテレビドラマ収録の修羅場が始まったのでした。大物女優にも必要なら注文を出します、これを「ダメ出し」と称します。普通の会議室での本読みに始まり、持ち役が決まっているのだから、読み合わせ中に演技指導的なダメ出しも加わり、次第にドラマの演技と芝居の盛り上がり気になるようになった時期に、立ち稽古へと移ります。スタジオセットの図面が出来ているから、それを見ながら、自分の立ち位置とか動く範囲とか理解を進め、かたや衣装や履物、手に持つもの、場面での必要な品々など周辺情報が

整い、実物も手に入る時期が来たら、いざ、スタジオで稽古、という段階に入ります。その間を仕切りながら指導も加えるのが演出担当のディレクター（私）の仕事です。つまり、ドラマの進行状況全般を見渡ししながら、出演者の演技が間違った方向に進んでいないかなどチェックします。OKとなったら、いよいよスタジオにセットを組んで、そこで実際の家の中だとか、台所とかを動きながら立ち稽古を始めるのです。これを「ドライリハ」と称します。カメラ抜きなので、「ドライ」と言います。この段階での主役は、フロアディレクター諸君です。舞台で言えば、舞台監督の役割を果たすスタッフです。数人で役柄を分け持って、スタジオ内の演技者やカメラマン、場合によってはライトマンや、小道具だとか化粧系の女性たちとの緊密な連携プレイが要求されるからです。本番になったら、もう遅い。最終的にはカメラを入れて本番並みの稽古に入ります。これは「カメリハ」と略称していますが、最も緊張し、最も大事で最終的な修正を加えるチャンスでもあり、全スタッフが最も集中する時期です。およそ3回ほど繰り返した、と臆に記憶しています。

カメラは4台、使いました。スタジオ用は3台だけど、中継車から1台降ろして参加させ、都合4台のカメラで演技者の動きを追いました。スタジオ用カメラは滑らかに移動し昇降の可能な「ペDESTアルドリー」という台車に載って自在に動けます。ところが中継車から降ろしてきたカメラには、屋外用を考慮した通常の車付き三脚しかない。折あしく、と言いたいほどの場面だったのだけど、老人が囲炉裏端のような居間で、なにかしきりに文句をつけている場面で、中景画面のまま画面中央に老人を据えたまま、そのカメラは老人の周囲を静かに上手へと回り込んで行く、という動きをせねばならなくなったのです。そのカメラが、あの、中継車から持ち出した三脚で動くしかない不運のカメラでした。小柄の関邦久カメラマンが、三脚の3本の足に付いている車を一定の右方向に揃えたまま、全身で抱え込むように支えながら、ゆっくりと右方向へと横歩きを始めたとき私は、調整室に居て、ズラリ並ぶ画面に届いて来る関カメラマンからの映像が、ガタついたりヨコ振れしたりせず、滑らかに右移動を始めて、やがて



120. カメラリハを終えて

静止するまで息を止めて見詰め続けておりました。上出来だったとはお世辞にも言えませんが、生まれて初めての全国向けレギュラー番組のドラマを、RCCという地方局の幼いままのスタッフが総力を挙げて挑戦した、ミカンの島を描いたテレビドラマ「みかん」は、放送の3日前に収録を終え完成しました。昭和39年（1964年）8月29日（木）、21：00～21：30、RCCラジオ中国テレビジョンから全国24局のJNN系列局へと放送されました。

	*	*	*
出演	能勢未亡人	南	美江
	息子の太郎	山田	幸男
	舅の新次	室積	薫
	姑もん	津島	道子
	辻木その	野中	悦子
	川辺るい	稗田	敦子
	娘みな子	高山	光代
	山崎孝平	岩崎	徹
	花岡先生	矢野	政子
	村の男女	劇団RCC	
	村の子どもたち	RCC児童劇団	
作		田中	澄江
音楽		山崎	登
演奏		RCC	サロンオーケストラ
方言		多地	映一
詩		サトウハチロー	
朗読		赤木	靖恵
テーマ音楽		斎藤	一郎
タイトル絵		鈴木	信太郎

演出	新井俊一郎
	小畑 和子
演出補	佐々木嘉治
	出雲 敏弘
	原田 敦子
	才木 幹夫
撮影F16	小田 千秋
美術	延藤 蹕蔵
照明	篠本 豊
衣装	東京衣装大阪支社
化粧	植木 早苗
進行	垣内 稔
効果	上床 直人
SW	玉貫 琢也
CC	藤井 正毅
C1	福永 能方
C2	藤原 薫
C3	田原 定之
C4	関 邦久
AUD	青山 晃
VTR	寺田 一郎
制作	ラジオ中国テレビジョン

* * *

出演はRCC児童劇団など、みなみな地元広島の人たちの力で成し遂げた成果だったと誇りに思っています。後日、脚本を書いて下さった田中澄江先生から、「番組は見ましたよ。よく頑張ってくださいましたね、皆さん、ご苦労様でした」とのメッセージが届けられました。

テレビ時代を過ごしていくうちに、報道との間で距離が出来ていました。私たちテレビ制作部にはフィルムカメラマンが居ないんです。だから、必要な都度、報道部からカメラマンを借りてロケに行かねばならなかった。スタジオもVTRも揃い、テレビもラジオも環境が整ったと思われた時期から、不思議なことに社内での様々な細かいロスが生じて、あちこちがトラブって来る、というのが次の時代です。

テレビドラマを狙え

○新井 そのころ、「もっと楽しい原爆ものはないのか」と発言した上司と喧嘩した時期でした。そういう状況の中で、私は楽しい原爆ものなんて

ありようがないと思いますが、無言の抵抗を示しました。上司の言うことを一切、気にしなくなりました。

やがて私は、「あいつは、いつも席におらん」と言われる管理職になって行きます。管理職というのは現場の仕事をしなくなる人物です。しっかり仕事をやっていた連中が仕事をしなくなると、直ちに現場は困ります。その代わりを誰がやるのだと、こうなるんです。必ず人手不足。誰か増員しろとなって来る。そんなこと分かっていますから、自分でやりましたよ。管理職の仕事と、それまでやっていた仕事を全部自分でやる。それが私の姿勢。

肩書が偉くなったからといって、デスクに座って大きな顔をしてハンコを押すだけになったらオシマイだ。現場上がりだし、管理職なんかになりたいと思ったこともない。会社が勝手に肩書きを付けて、副部長になったら組合を脱退せよ、などという組合対策の昇進など、会社が一方的に言うだけで知ったことじゃない。いう訳で部長になった私は、マイウェイを突っ走って行きました。

あと、いろいろな番組を作りましたが、やがてテレビドラマを作るようになって来るのは、スタジオが出来て「テレビホール」なる、何でも広場が開放されてからです。うち、テレビドラマを総計10本作りましたが、その3分の2は原爆ものです。最初の第一号は、日下次郎作の「ある町のある出来事」。30分の試作番組でしたが、地方での選挙騒動を軽いタッチで描いた秀作となりました。私を中心に、演出スタッフ全員が寄ってたかって作り上げました。劇団員もカメラマンも衣装も化粧も効果も照明も、みな、まるっきり初めて。真剣そのものでしたが、内心ではみな面白がっている様子。よし、いける、と私は心を決めました。

2作目が、藤本義一さん。当時は大阪ローカルで各方面での活躍で有名でした。後に有名作家になるのですが、この時はまだほとんど無名の時代で、私のご自宅まで訪ねて行き、頼み込んでヒロシマらしい本を書いて貰いました。書いて貰った脚本は、原爆の日特番「地表」です。被爆家庭に暮らす青年の生き方を通して、現代のヒロシマを見つめなおしたいとの意欲作。主演に露口茂を起用し、京都での劇団活動が長い大先輩の毛利菊枝



121. テレビドラマ「地表」の一場面

さんを招き、地元劇団員で脇を固めました。この2本の演出を演出補だった佐々木嘉治君に委ね、成功したことで彼も自信をつけた作品です。

3作目は、多地映一さんの書下ろしで「さがす」。私が直接タッチしたドラマですが、児童劇団の可愛い少女が主人公となり、その子を探し求める老人を岩崎徹さんが演じて好評を得ました。

原爆で我が子を失ったお爺ちゃんが、絶対にあの子は生きてると信じたまま、あの子が居るのでは、と思われる全国の子ども施設を探し回ります。当然ながら広島の子ども施設を探し回りにいくという場面もフィルムロケで交えました。

RCCのすぐ脇の広島城のお堀端に当時、まだそういう施設がありました。そこにロケーションに入ったのですが、そこで一人の少女を見つけるという設定になっている。しかし実は違うらしいのですが、そのお爺ちゃんには「絶対、ウチの娘だ」というふうにはしか見えない。お爺ちゃんは、遂に探し当てたと思う。しかし、客観的に言うならば、それは妄想～とは言いたくないけども、お爺ちゃんの願いが極まったために、それらしい出会いが生まれてしまったのではないかと、というような設定なのです。ちょっと複雑な設定ですが、ドラマでは、子どもを見つけたということになっている。でも、それは…?と思わせながら番組は

終わるのです。これはスタジオとフィルムロケとで作った、ドキュメンタリー的なテレビドラマでした。

この「さがす」というドラマが、私が作った中では最も心に訴えて来るものが強かったと自分では思っていますし、このお爺ちゃん役を演じた岩崎徹さん、劇団RCCのリーダーですが、岩崎さんも、あの作品は自分の思い出に残る作品の一つだと後々まで評して下さいました。

4作目が「夢女」。別項のとおりです。

5作目が、高橋玄洋さんの「駅裏」。広島出身の著名作家ですが、この方に頼んで作ったのが「駅裏」という原爆ドラマ。原爆の後の駅裏の安宿や闇市場などを舞台とした人間ドラマ。

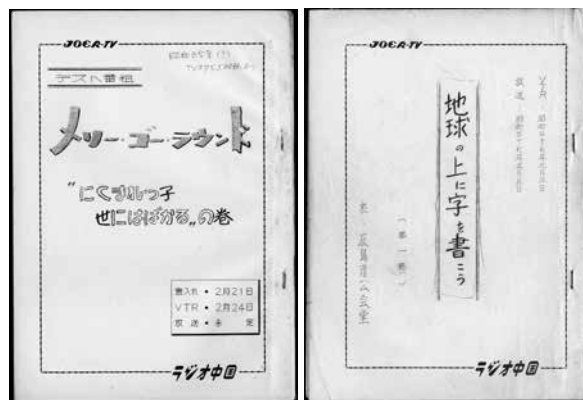
6作目は、島木竜さんの「のぞき穴」。不思議で怖いドラマでした。原爆ものなのですが、如何にも由緒ありげな黒塗りの板塀が、とある町はずれの林の中を延々と続いているのです。噂が立つのです。あの黒塀の方に近づくのではないぞ、と。禁止されると、破って見たくなるのが人間の心理。遂に板塀に近づくと、中ほどに奇妙な穴が開いている。覗き込みます。見えたのは、あの8月6日のヒロシマの惨状だったのです。

7作目は、多地映一さん作、「シンジは言わぬ」。警察に突き出されても少年シンジは、決して口を開こうとしなかった。何故なのか。殺されそうになったと、13歳の我が子を突き出したのは実の母。現代なら珍しくもない、実の我が子を虐待する母と子を描いた問題作で、事実を解き明かし問題を提起する先生を演ずる岩崎徹さん、実の子を虐待する母の妻みを演じたNHK劇団からの客演、矢野政子さん、最後に「お母さん」と叫んで、母の胸へ飛び込んだ児童劇団の世良秀隆君の演技が感動を呼びました。演出は私でした。

8作目は、全国放送の「お母さん」シリーズで、これも前述のとおり苦闘の作品でした。

実はテレビ実験放送中に、結構、私たちはステージ上やスタジオから、ドラマがかった番組を試作品でありながら堂々とサービス放送していたのです。例のラジオの「メリーゴーラウンド」ステージ版というヤツ。

ナンバーを打つなら9作目のドラマとして紹介しましょう。演出は何れも私です。テレビテスト



122. テスト版台本

番組と台本に書き込まれた「メリーゴーラウンド、ドラマ版」。スタジオ収録が昭和35年2月21日。

放送日は未定と記入してあるものの放送されたことは事実です、その月日は調査未了。

* * *

タイトル「憎まれっ子、世にはばかるの巻」
コント、岩崎徹、上田修、田賀小夜子、室積薫ほか劇団RCCによる、大人の演ずる中学校の乱雑教室で湧き起こるニヤリ・コント場面集。歌、佐々木民江、ヤングベガーズ、チェリーシスターズ、森みゆき。バレエ。葉室バレエ団。振り付け、葉室潔。演奏、RCCサロンオーケストラ。演出、佐々木嘉治。

* * *

10作目としてカウントするのは、公会堂からの録画による舞台劇の実況中継風テレビドラマです。

収録：昭和37年5月3日

放送：同年 5月5日

作： 玉木しゅんぺい（上田修）

題名： 地球の上に字を書こう

演出： 新井俊一郎、佐々木嘉治

出演： 劇団RCCと児童劇団の総出演

バレエ： 葉室潔バレエ団

舞台装置：延藤蹕蔵

照明： 篠本照明研究所

* * *

庭付きの瀟洒な家庭の庭でお母さんが洗濯機を回している傍に、少女がまとわりついて質問を連発します。

「ねえ、お母さん、あの人たち、どうして雨も降らないのに傘さしているの」

「分かり切ってるじゃないの、そんなこと。日に焼けて色が黒くならないためよ」

少女は思わず、自分のほほに手を当てて空を見上げます。そこへ日傘を差した若者たちが踊りながら出て来ます。歌と音楽が流れます。

「地球の上に字を書こう

青い空から しょっぱい涙がこぼれてきたら
微笑みの傘をさっと開いて

地球の上に字を書こう…」

* * *

何億年と言う地球、何万年と言う人間の歴史、空から降って来た石に刻まれた不思議な記号。狩猟する石器時代の、先に登場していた少女と母、無限の宇宙と地球の歴史に印を刻み、そこから文字を産み出した人間たち家族の歴史ヒトコマ。夢とロマンと現実とを、歌と現代バレエが彩る、心温まる舞台劇を児童劇団のチビッコ俳優たちが頑張って大人の芝居を盛り立てた実験ドラマでした。

RCCは民間放送です。ということは商売が優先です。つまり、儲けになるか否かが最優先です。ディレクターで入社した私ですが、民間の一般的な会社であるRCCは、ディレクター一本槍で仕事をさせるなんていうことは許さぬ会社でした。RCCという会社の方針は、「オールラウンドプレイヤーを育てる」という方針。しかし私は頭から猛反対していました。我々のRCCという組織は、クリエイティブな放送番組を産み出し放送するための、社会的存在意義のある特殊な免許事業会社である。そんな業態の会社に、総務もやれる、経理もやれる、営業もやれる、人事もやれる、編成もやれる、ラジオやテレビや報道の現場もやれるオールラウンドな能力を持った人材なんて、全能の神でない限り出来るはずがない。もの造りは、もの造りに専念すべきである。さもなくばプロは生まれないと主張しておりました。

とたんに直接的な反応が、私自身に跳ね返って来ました。のちには経理部長までやったわけですが、そういう次第で遂にRCCには、私を含めて、本物のプロは生まれなかった、生まれて来られなかったと、私は今でも思っています。だから、現場一本槍で行かせるべきだと主張し通しました。

結局のところRCCで実際に現場一本やりを通し得たのは、私とコンビを組んでいた小畑和子さんだけだったと思います。彼女はテレビ制作部と報道部を行ったり来たりしながら、最後は報道の副部長で終わったと記憶します。私より三つか四つ先輩です。惜しくも先年、93歳で没しました。

○石田 いろいろと作られた番組のうち、3分の2が原爆ものとか戦争ものだ、と仰ったのですが。

○新井 ええ、自社制作番組で、大まかに言えば、ですね。

○石田 テーマを選ぶときにいろいろと選択があると思いますが、原爆とか戦争を選ばれたのは、新井さんご自身の中に何か思いがあったんですか。

○新井 私はヒロシマを見ています。ヒロシマを知っています。直接に体験しました。稀有な恐怖の体験でした。

RCCの中は圧倒的に広島人が多いけど、そんなに被爆者は居ませんでした。原爆の問題を取り上げて番組化している人たちは居ましたが、正直なところ私が入社したころのヒロシマ番組は、ラジオだけだけど、さほど多くなく、真剣味も「ピカドンクイズ」なんて番組名があるくらい、さほどは、と言う程度でしたね。

式典中継は報道が初年度から実施しておりましたが。制作部門で目の色を変えて向き合っていたのは、原爆で両親を亡くした小畑和子さんぐらいでした。今から考えれば、私も片隅で加わっていた程度だったと思います。小畑さんから、かなり素材を貰ったこともあるけど、私たち二人は、自分の立ち位置を知っていたし、真正面から片仮名のヒロシマを知っているから、ラジオ時代、既に原爆と平和を考える方向に目を向けていました。

折角ローカルで番組を作るのなら、娯楽番組のみならず、広島らしいものを作らなくてはならないと思い定めていました。現実的には、そう簡単には行きませんでしたけど。ルーチンワークの方へと、毎日がのめり込んでいた時期ですから。報道セクションも録音構成などで原爆と戦争を取り上げていました。自社制作の全部が全部ではないから、3分の1と表現したのだけれども。

○石田 3分の1ですね。

○新井 ローカル番組だけでは、3分の2までは行きませんね。



123. ラジオドラマの本読み風景

○石田 こういう原爆ものというのは、だいたい新聞などでは8月が多いんですが、時期はいつごろを狙ってされたんですか。

○新井 R C Cとしても8月6日は特別な日です。通常番組だけではなく、平和式典の生中継をやると同時に、ラジオでも原爆特番というのは報道を中心にやっていました。

制作部門でも原爆の日特別番組というので、録音構成と言う手法でのドキュメンタリー番組を作っていました。音楽好きの田頭和憲さんなどは、音楽高校の講堂を借り切って、壮大なヒロシマ鎮魂曲を録音して放送するなどの活動をしていました。私も応援して録音に立ち会ったことがあります。先輩を追いかけて私も、担当の児童番組の範囲で似島少年の家などを素材に、被爆孤児のモノローグを軸にしたドキュメンタリードラマ中心に、様々な手法を創作して参加していたものです。

録音構成番組にも挑戦し被爆者を取材して、特別番組を放送したことも何度かありました。

児童番組の担当を外れて「テアトル広島」という本格的な放送劇を演出する立場になってからは、広島を主体的に取り上げる方向として、原爆と民話を素材と考えるようになりました。私はもちろんヒロシマを知っている。しかし自分が被爆者とは、あまり思っていませんでした。入市被爆者というのは被爆者には相当しない、と思い込んでいました。だから私は、「証言」なんて出来ない、その資格がないと思い込んでいました。だから一切、自分から原爆のことを話したり、話題にしたり、いわんや公的に被爆体験を語るなど、全く考

えたこともありませんでした。自分にはヒロシマを語る資格がない、とっていたのです。全く怪我ヒトツしておりません。火傷も負って居ません。ヒロシマの惨状も、私が入市した時刻から見て、凄まじい状況は暁部隊などの緊急救助隊により、大部分が大急ぎで片付けられてしまっていたと思われま。だから凄まじい惨状をほとんど見ていません。それに家族の誰も亡くしていないし、親戚も広島には誰も居ないから身内の被害もゼロ。益々私には、ヒロシマを語る資格が無いと信ずるようになっていました。

「ある勇気の記録」

○新井 1966年、昭和41年10月から、中国新聞社原作の「ある勇気の記録」がNETテレビによってテレビ映画化され、地元局であるR C Cも全面協力して放送されることになりました。戦後間もない時期にヒロシマで発生した暴力団の抗争事件を、身を挺して取材報道した地元新聞社の活動ぶりを描いた作品です。中国新聞社からの許諾は戴いたものの、新聞からの立会いは必要かどうかとか、地元ロケの場合などの警護や、予想される暴力団からの嫌がらせ対策など、広島県警としても全面的に協力せねばならない事態だ、など実は裏面では大騒ぎになっていたのです。初回分は山本薩夫監督が予定されており、地元局R C Cとしては所属する劇団員を総動員してのエキストラ出演が必要でした。役柄のほとんどが大物ヤクザとか被害者の市民たちですから、出るのを嫌がりましたねえ、劇団の人たちは。暴力団員の役で出演するのだから、知っている人々から妙な眼で見られるとか、見物に来ているに違いないホンモノヤクザから何をされるか分からず怖い、と言う訳です。ホント怖かった。

こんなことに慣れているから、また、お前が世話しろと命じられ、私が地元担当のプロデューサーとしてロケの日程調整やらエキストラの手配などの全般を頼むぞ、となったのです。おかげでテレビ画面のスタッフ欄に麗々しく名前が載ってしまい、関東在住の親戚から「シュンちゃん、また危ない仕事させられて、大丈夫か」と懸念の声が寄せられたものです。

予想通り、番組の人気は抜群でした。おまけに

第1回作品が山本薩夫監督だったこともあり、芸術祭に出品して奨励賞を受賞し、共同製作社なんだからというのでRCCもトロフィーを受けました。社内の何処かに飾ってあるでしょう。

呉共済病院でのロケの際は、ロビーの観衆のなかから本物のヤクザが怒声のヤジを飛ばし、現場警戒の県警の刑事が飛び出す、と言う緊迫した場面も目撃しました。これまた大変な1年間でした。

カラー放送初期の苦心談

○**新井** RCCがカラー放送を始めたのは昭和41年3月20日です。ただしこれは、ネット受けカラー番組だけのカラー放送開始であり、同年秋に、カラー映画の放送を可能にするビデコンカラーカメラを設置して、カラー化への備えを整えています。そして昭和42年10月1日に、「瀬戸内海」シリーズの「観光編」で最初のカラー番組を自社制作し放送しています。

○**石田** ちょうどこの時、新井さんは入院しておられたころなんですか。

○**新井** いえ、もう事務系に移っておりまして、番組審議会事務局長なんていう役割を仰せつかっておりました。

テレビとラジオと組合役員の3役を全力疾走し過ぎて体調を崩し、ちょっと休めというので閑職に移っていた間に、前にも少し触れたことのある事件～資料室に納めていた永久保存の歴史的資料のすべてを失ってしまったのですが、この間に、記念番組「瀬戸内海」シリーズのスタッフに加わり、特別制作班の事務局長兼ディレクターを命ず、との辞令を貰って、一部、現役復帰という形になったのです。昭和42年、1967年4月のことです。

開局15周年記念として特別番組「瀬戸内海」シリーズ全53編。つまり30分の特別番組を、毎週1回で1年間つづけるということです。そのために特別番組制作チームを構成したんですが、その中に私も引っ張り込まれて事務局長、という立場ですべての事務を担当しろと命じられました。同時に「地域編」と銘打ったのですが、まず最初にスタートさせるのは、瀬戸内海に浮かぶ島のなかから目立った島を13島えらび、順番に一つずつ取材して回るという、島々を取材する第一部門「地域編」の主任ディレクターを命じられました。かく

て、13本の「地域編」という島巡り担当をしながら、事務局長として全53本の台所も担当することになったのです。

この「瀬戸内海」シリーズは民間放送の番組コンクールに出品したのですが、予想どおりというか、予想に反してというか、遂に賞を取ることが出来なかったんです。そのことが社内では、かえって問題になったのですが、これだけ全力を挙げて1年間継続するという大規模番組ですから、絶対に賞を取れると思っていたんですけどね。

○**石田** それはがっくりですね。

○**新井** 他局からも類似の企画が提出されていた模様だし、理由は判然としませんが、何かがあったのでしょうか。当時の民間放送の番組コンクールというのは、先ず所属する地域での一次審査が行われ、地域で入賞した作品が次に中央審査へ回される、という仕組みになっています。ここで言う地域とは、中国四国地域を指します。

審査員の人選ですが、中央審査では、中央の著名な作家や演出家など数名が、民放連と称する全国組織の役員によって選ばれます。さて地域での第一次審査員は当時、当該地域の民間放送各局から一名ずつが選任され、その過半数の得票で入賞作品が選ばれるという信じられぬ仕組みになって居ました。まさか現在は改善されているでしょうが、こういう当時の審査の仕組みも、こうした問題を引き起こす遠因だったのではないかと考えられます。

さてさて、「瀬戸内海」シリーズの中でカラーフィルムを使った「観光編」13本が、RCCのカ



124. 「瀬戸内の祭り」エンドタイトル

ラー作品第1号です。私は「地域編」担当なので瀬戸内の727とも3,000以上とも言われる島々を巡りましたが、その日本の地中海と評されるほど美しい島々と瀬戸内の景色を、実質上の総集編として特に「観光編」と名付け、13本シリーズで瀬戸内の島々をカラーのネガフィルムで撮影し、「瀬戸内の祭り」などの「カラー観光編」13本を取材・制作し放送しました。

しかし、この時期は未だ自社でカラー現像などは出来ないため、取材したカラー・ネガフィルムをすべて京都太秦の東洋現像所に送り、ネガを現像してポジに焼いて貰い、返って来たポジフィルムで編集作業を完了させたくて再度、東洋現像所へ送って完成品のカラープリントに焼いて貰い、それで、ようやく放送が出せる状態になるという次第で、大変な手間と手数をかけて放送したものです。その過程で、番組名や出演者名などのタイトルを焼き込むという処理も現像所にお願ひしました。音声も、フィルムに光学的に焼き込むなど通常のオプティカル処理の方法もあるのですが、私たち放送屋は違った手法を取っておりました。例の電磁的音声録音と呼ばれる、フィルムの端の磁性帯にラジオの録音テープと同じ手法で録音する方法です。

むかし活動写真と呼ばれていた映画とは、釈迦に説法ですが、1秒間に24駒という速さで断続的に映像の記録されたフィルムの駒を進めることにより、人間の目が感じる残像現象を巧みに利用して、いかにも画像が本当に動いているように感じさせるという手法であり、これが活動写真と呼ばれた映画の原理です。

その、コマ送りの主役を担うパーフォレーションなる孔の反対側の、電磁帯という鉄粉を塗り付けた部分へラジオの音声録音と同じように音声を録音するのです。オプチと呼ぶ光学的録音方法に習って、略してマグネと呼ぶ磁力的録音方法を使いました。現在では、どんな方式を採用しているのでしょうか。気になるところです。

RCCは1968年、昭和43年8月3日、早くもカラーフィルム自動現像装置を設置して、カラー現像と色彩調整の担当者による苦心の研究と調整の結果、評判の色彩効果を上げることに成功し、1970年、昭和45年5月には、自社制作番組の全面

カラー化を達成しています。

テレビ放送を開始するに当たって、いち早く映画業界から専門家を導入した各社に比べ、RCCは県教委の視聴覚専門家を招いただけでスタートしました。つまりは専門家抜きでのテレビスタートという大冒険をやったのけた勇者だ、と皮肉る人々も多いのです。事実、私たちはラジオ人間でありながらテレビ業界へと転身させられた組ですが、新世界を前にして開眼したからだとか、いや、新たにテレビ開局用に大量採用した若者たちに映画通が多かったのだろう、などと言われています。

どちらにしても私たち現場人間は、否応なしに映像の世界へ叩き込まれて対応せざるを得なかったし、カラー化も全く同じで、頼るべき先輩や専門家も居ないまま。現場を任された自分たちだけで勉強し自己啓発して行ったという、まことに信じがたい映像世界への転身ぶりを示した事実は誇り得る実績だと信じております。

だが、RCCという会社としてのテレビ対応策は、カラー対応策は、と問うならば、幾つもの疑問譜が付くのではないかと私は考えます。

カラーはRGBといって、R (red)、G (green)、B (blue) の3色がカラーフィルムの色彩を決めています。フィルム現像できちんと3色を出すというのは、白黒と違い極めて難しいのです。完全な真っ白とか、完全な真っ黒という色をカラーフィルムのテストで作り出すのですが、完全な真っ白が出来ない。つまり、基本色彩のRGBが巧く調合されていないと言う事になる訳です。片寄っているとピンクになったり、真っ黒のつもりでグレーが入っていたりする。

フィルム現像の専門家と誇れる人物が、報道部に一人居ります。現像液の調合を含む困難なフィルム現像という専門職を、白黒時代からカラー時代まで自分一人、単独で勉強して成し遂げたのが住友籌雄君です。

カラーというのは、必ずネガフィルムを撮って、そのネガフィルムからポジフィルムを焼き付けるという2段階の作業があります。だからカラーのネガフィルムの現像から、ポジフィルムに焼き付ける作業までを正確にやらなくてはならない。

その次に、カラーフィルム番組をテレビで放送するためには、先ずテレビ映画・カラーフィルム

番組やカラーでの字幕など、すべてのカラー素材をテレシネ室という、カラー映画などのカラー放送素材をカラー映像化して放送に出すための映写室に持ち込み、そこでカラーフィルムなどを映写機のようなテレビ用のビデオカメラにかける訳です。このときもテレシネ室のカラー用ビデオカメラが、RGBを見事に識別できるよう調整されていなければならない。

菅泰正君という長身瘦躯の技術者がテレシネ室での必死の挑戦に成功したのですが、何故か彼は若くしてRCCを去って行きました。私も彼とは、テレシネ室に入り浸って、取材して来た「観光編～瀬戸内の祭り」などでのカラーフィルムの色出しのことで熱中し話し込んだものでした。菅さんは、満州国の皇帝となり清國最後の皇帝でもあった愛新覚羅溥儀や、その親族たちについて不思議な知識を身に付けた人物でした。辞めてしまった人ですが、こうしたチーフたちが中心になってRCCのカラー化が成し遂げられた、と言えます。その苦労と努力の一端を、私も期せずして共に経験しておりました。

○石田 現像が難しいんですか、それとも撮るときが難しいんですか。

○新井 どちらも極めて難しい。カメラで撮るときから、つまり初めから難しいのです、カラー作品を作り出すには。先ず小さな、露出計という測定器が必需品です。カラーフィルムにはASA(当時)という感光度100とか200とかを示す数値があります。それを目安にして、注がれている光の強さというか、光線の度合いを露出計で測って、足りなければ反射板を使ってでも光の量を足してカメラの目盛りを決めるのです。露出とシャッタースピードを、ですね。

言葉で言えば簡単なことですが、太陽光線にも強さ弱さがあります。一瞬の雲の走りだって影響します。良く「抜けがいい」と言いますが、冬場で湿度が低く、光線の具合が良ければ、遠くの山の稜線までがクッキリ、線を引いたように鮮やかに空の青さを切り抜いて見えます。カラー撮影に絶好のチャンスですよ。滅多にありません、日本では。海外に出ると、しょっちゅう、絶好のチャンスに巡り合えます。湿度の関係でしょうね。

テレビの場合は、決まっています。1秒24コマ

だから、シャッタースピードは1/50なんです。1/50だったら絞りはどうするかと、この絞りを決める。これは露出計に頼れば、光がどのくらい入って来るかによって決まる。それをピタッと合わさなくてはいけない。これがまず苦労です。少し陰に入ったら、もう色が落ちる。そうすると、追加して光を当てなくてはならない。普通の人工の光を当てながら、ナマで太陽の光が当たったりすると、すぐに色が濁る。人工の光を当てるためには、カラー用の照明器を持って行って当てる。そうでなかったら太陽の光を、例のレフという銀紙を張ったもので太陽光を反射させて当てる。レフレクターですね。

光の強さの単位があったな。ルクス(lux)ね。光の強さ、光量も測定して、露出計も使って、テレビなら1/50のシャッタースピードですから、ほかのすべての条件が揃ってれば抜群の映像が撮れる、とお思いでしょう。どっこい、そうは行かないのが、この世界です。

何時だったかなあ、RCCの番組制作を下請けしている関係会社を訪れたとき、新人のカメラマンが入社していた。なかなかセンスも良いし、カメラ扱いも上手いから、そろそろ実戦に出そうと思うんだ、という話を聞きました。そしてそこで、その彼が撮って来たという、近くの幼稚園での収録映像を見せて貰うことになったのです。呆れましたねえ。

カメラ扱いも上手いし、センスが良いと上司たちが口を揃えていた彼の撮った映像を説明すると、走り回る幼児を追い掛け回すカメラ、あっちへ行ったり、こっちへ来たり、挙句の果てには「雑巾がけパーン」をやったのけたのです。こりゃダメだ、と私は言いました。それを聞いた皆さんは、不服そうでした。私は、その事にも呆れ果てました。つまり、そこにいた関係者の誰もが、カメラを知らない連中だったということに、です。

この話、理解できますか。なぜ私が二度も呆れ果てたのか、お分かりですか。今ごろのテレビカメラと言うヤツは、誰でもシャッターボタンを押せば絵は撮れます。絞りも焦点も全自動ですから。本当の問題は、シャッターを押す前に決まっていたということです。何を如何なる方法で何時、どのように撮影すべきかを彼は全く考える



125. 大型タンカー進水式撮影風景（因島）

ことなく、目の前を走り回る園児に彼は、完全に振り回されていました。どの子を、どの方角から、どこまで続けて撮るか。その子の、どこが目についたのか彼は全く気にして居りませんでした。

どの子でも良かったのです、撮っている彼にとっての園児たちは。だから慌ててカメラが幼児を追いかけ、つい左右に往復してしまったのです。こういう性格の人物には、如何に優秀なカメラを渡しても無駄でしょう。カメラマン失格です。ここが映像の怖いところなのです。

蛇足ながら、その手の未熟なカメラマン続出への対応策だったのか、スクーピックと言う名の便利で簡単なF16カメラが登場して数台、RCCも導入して結構使ったものです。私も「瀬戸内海」シリーズ取材で使いましたね。このカメラは焦点（距離）さえ決めてシッターを押せば、露出（絞り）は自動で決めてくれると言う、アマチュア用の優れモノでした。因島での進水式取材では私もカメラマンの一員として、シャンパンが割れる瞬間を撮りましたから、まあまあ役には立ったと言えるでしょうが、間もなく表舞台から消えて行きました。

カラーフィルムを持って帰ったら、現像係が正確にきちんと、赤は赤、緑は緑、青は青になるように現像液を調合し、液温も現像時間も決めて取り掛かるでしょう。もちろん実験しながらやるわけです。そして実験の結果、こうすればきちんと行くという見通しが出て、その実験成果通りのデータで、現像主任である住友君が現像装置をスタートするのです。ネガ現像が終了したら、住友

主任は今度はポジプリントに取り掛かり、その段階で編集作業を終えてから、改めて編集済みのポジフィルムから、今度はポジ・ポジの反転現像で直接に放送用の全編ポジで完成フィルムをプリントアウトするという訳です。複雑に思えますが、ご理解できましたか。

自動のカラー現像装置では、先ずネガからポジへと現像プリントするのですが、そこでもまた同じように、露出のオーバーなど無かったか否か、現像液での処理が理論通りに行われたかなどをチェックした上で、最終段階のポジプリントに入る、という苦勞と注意力の塊のような作業が繰り返されているのです。

同じような苦勞が、また次の段階であるテレシネ室でも繰り返されます。テレシネにカラーフィルムを持ち込んだ段階で、その部屋の色彩主任の菅君が、テレビ用の映写機の感度の具合を見計らい、色彩ごとに映写カメラの感度を微妙に調整したうえで、放送に出す準備を終える。こういう何段階にも猛烈な関門があって、それをクリアして、やっと初めて、赤は赤、白は白の色が出せると決まる。

○石田 白黒より何倍も手間がかかるんですね。

○新井 それはもう、手間どころではないモーレツさでしたね。カラーで放送するためには、テレビでの色彩調整の、それこそ、いろはの「い」から勉強し、関連機器を調整して初めて色が出せる訳です。まず勉強しなければならぬ。カラーフィルムを使って撮る方は、使い方さえ知っていれば撮影できるけど、撮影済みフィルムを受け取って現像からプリントまで処理する方は大変だ。自動装置だから装置にかければ出来るようなものだけど、条件が合うように化学的な薬品調合から何からすべてを、キッチリ調整しなければならない訳です。映画ロケ隊のお天気待ちの心境が、良く分かりますねえ。

○石田 そのセーフティーに収まる瞬間ですか。

○新井 綺麗な色を出すためには、太陽がぴかっと光ってなければいけないとか。ニュースの映画ではないけど、その絶対的な瞬間が来るまでは辛抱強く、待たなくてはいけない。列車だったら、何時何分何秒にここを通過する瞬間を待たなくてはならないのと同じように、待たなければいけない

い。綺麗な肌の色が出るようにね。人の肌の色が一番出にくいそうですからね。

○石田 やはり最初の頃は撮影の失敗もあったんですか。

○新井 失敗だらけ。何遍も失敗して山のように屑フィルムが出ましたよ。山のように屑フィルムが出来たうえで、やっと最後に30分もののフィルムが出来上がったんだけど、カラーのネガフィルムとポジフィルムが山のように積もるたびに怒られるわけです、無駄金を使いやがってと。

○石田 お金がかかりますもんね。

○新井 「これは高い」といって。だからカラー撮影に入ってから、みな、冗談で言うんですよ、「やっぱ色の道は、金もかかるし難しいもんだな」と言ってね（笑）。

○一同 ははは（笑）。

○新井 そういう状況のまま私たちが「瀬戸内海」取材班は、カラーに突入しました。フィルムの時代からテレビとビデオ、ENG（Electronic News Gathering）という言い方をするのですが、ビデオの時代に移って来るわけです。そのビデオの時代に移る時に、もう私は現場からはサヨナラしていますので、ちょうど境目の時期でしたね。その後は、カラー技術も、カメラ取材と編集も、中継も、加工も、すべてがデジタル化のお陰で最高の技術レベルを達成できるように一変しておりました。悔しかったなあ、残念無念と歯を食いしばって悔しがったものです。その何でも可能になった時代が始まった時、もう私は現場から足を洗っておいりましたから。

○伊東 映像フィルムに音を載せられるようになったのは、いつぐらいなんですか。

○新井 RCCの場合ですか。遅かったですねえ。東京や大阪、京都など映画業界が発達している地域では、大昔から光学録音方式を使って可能でした。ローカルでは、すべてを京都などの専門会社へ発注せねば出来ませんでしたから。あの当時は16ミリフィルムを使っていました。普通、映画は35ミリですが、その半分ですよ。パーフォレーション（perforation）といってコマ送りする孔が片一方にしか付いていない訳です。

だから、映写機にかけると、よく引っかけて空回りして、事故や失敗が多いのですが、16ミリと

いうのは、そういう面でも苦労があります。その16ミリフィルムのパーフォレーションの孔が開いている反対側に鉄の粉を塗りつけて、そこに音を録音するという方法が生まれるのです。磁気録音と言います。これはサウンド・オン・フィルム（S O F : sound on film）と言う。フィルムに音を載せる。普通の映画は光学的な方式、つまり音響をギザギザの波形映像に変えてフィルム画面の端に写し込むことで映画の音は記録され再生されております。

テレビの場合は、フィルムの端に磁気を帯びた鉄の粉を塗りつけておいて、その鉄粉に磁力で音を載せるという方法で録音したんです。だから、フィルムからフィルムにダビングしようと思ったら、普通の映画用のフィルムを使ったのでは駄目なんです。そんなことでも初手から苦勞しました。

○石田 では新井さんは、テレビに移ったころから、そのサウンド・オン・フィルムをずっと使われていたんですか。白黒の頃から。

○新井 いえいえ、出来ませんでした、RCCには当時、そんな技術も高価なカメラも装置も、持ち合わせておりません。だから私の最初のドキュメンタリー番組の音声は、普通のラジオのテープを使って音声を録音しました。呑気な時代で、15分程度の番組ならば、S O Fにせずとも、ラジオのテープに音を入れておいて、「せーの」でフィルムと音声テープとを同時スタートさせれば大丈夫、音声は映像とシンクロするよ、というのです。

実は洋画など正規のフィルム番組での日本語吹き替え放送で、ちょうど、いま私が言ったような考えで、フィルムと音声録音テープとの同時スタート方式を取って放送していたのです。だから、似たようなものだから大丈夫だろう、という安易な考えでラジオテープを使おうと決めたのです。洋画の日本語吹き替え放送での日本語の音声テープと言うのは、そっくりフィルムと同じ16mm幅で駒送り用の孔、つまりパーフォレーションも空いており、なおかつ、そのテープ自体、磁気録音用の鉄粉が全面に塗布してある特殊テープです。スタートするときは機械的に映写機と同じ方式で、双方とも全く同じ速度で全く同じようにヒトコマずつ進めて行く映写方式の装置を使い、フィルムと特殊録音テープとが同時にスタートするシ

ネコーダーという装置を使っていました。

ところが、私のやったラジオテープを同時スタートで使うという方法は不安定だし、絵と音がピッタリ合わなかったら途中で何とかしろ、と技術側に注文しました。新兵器のはずの日本語吹き替え装置でも、映像の唇の動きと日本語とが合わなくなって、係が慌てて調整しておりましたからなおさらです。技術的には、ラジオ音声を早回しさせる方法として回転する主ローラーに少しずつ紙を差し込んだら回転が早まります。手先の器用さと感覚頼りだけの幼稚な策だけど、逆に絵より音が先走ったらどうするか、指でテープを押さえて瞬停させるか、などと異論百出の状態。「百の議論より実行だ」と乱暴な意見が通り、フィルムと音声テープとを「せーの」で一斉にスタートさせて実際に放送を終えました。幸いにも成功したのです。そんなことで帳尻合わせのような成功をさせていたから、事後における番組素材の完全保存に失敗してしまった。そんな幼稚な時代だったにも関わらず大企画に挑戦したのだから、失敗も成功も、イッパイやってのけましたねえ。

放送素材の永久保存について全く無知だった当時の資料室は、冷暖房の設備など全く考えることもせず、普通の倉庫内に本棚を並べ、放送資料類を、ぎっしりと揃えて並べたり山積みしたりして保存しておりました。レコード類の管理の片手間、と言う程度の姿勢だったと思われます。

やがて歳月が経ち、貴重な保存フィルムやテープ類を倉庫から取り出したとき、一同が見たのは、永年の熱気でフニャフニャに縮み歪んでしまった素材の山でした。当然、私のフィルム・ドキュメンタリー番組第1号は、映像はネガとポジの双方とも保存状態良好だったけど、例の音声テープは歪み縮んで使い物にならない音声となり果てておりました。だから以降の作品は、必ずタイトルも焼き付け、音声も必ずSOF化するよう義務付けられたはずです。実際に守られているのでしょうかねえ。

カラー観光編13本

○新井 映像と音声の保存に苦勞した「瀬戸内海」シリーズ52本の作品は、歴史的価値保存の意義からしてすべて、フィルム内に音声はもちろん、タ



126. 家船の取材風景（豊島）

イトル、出演者名などのクレジット、図形、年月日など必要事項はすべて、東洋現像所へ発注し光学的に焼き込むよう、あらかじめ担当者に厳命しておりました。ところが、それでも一部、守られておりませんでした。倉庫の中に素材だけが放り込まれ残っている作品が多く、すべての事務を取り仕切っていた私は、既に自分が手を出す余地も時間もなくなっており、ただ呆れて嘆くよりほかありませんでした。今なお残念無念の思いでいっばいだし、無責任体制が当時から蔓延していたのかと嘆くばかりです。

* * *

開局25周年記念「瀬戸内海」52本シリーズ

- ◆「地域編」1967年4月～6月放送
 - 因島 小豆島 豊島
 - 高根島 淡路島 大三島
 - 江田島 男木島 四阪島
 - 屋代島 倉橋島 野忽那島
 - 宮島
- ◆「歴史編」1967年7月7日放送
 - 夜明け 王朝のおもかげ
 - 瀬戸内水軍 内海の分割 近代
- ◆「文化編」1967年8～9月放送
 - 鉄～そのふるさと 鉄～その流れ
 - 船～浦の夜明け 船～帆船のころ
 - 船～瀬戸内の落差
 - 酒～古りにし人の
 - 酒～いまもその香は 建築物
- ◆「カラー観光編」1967年10～12月放送
 - 橋 島の春
 - 文学のふるさと尾道
 - 平家物語の旅 ヒロシマ

カルスト詩情～秋吉台 家島の港
湯の町 瀬戸内の主峰
瀬戸内の神々
瀬戸内スカイライン 小島の四季
島かげを行く
瀬戸内の祭り

◆「開発編」1968年1～3月放送

瀬戸内開発の課題（座談会）
開発の起点・呉～戦争遺産の継承～
造られた工業地帯～水島
バラと工業都市～福山

* * *

共同制作「見たい、知りたい」シリーズの思い出

○新井 自社制作する番組には、全国で共同制作してネットに乗せて放送するという手法で作ることもありました。「見たい、知りたい」シリーズとかね。

何をやったかという、例えば秋芳洞に行って洞内を撮影して、天井からポツーン、ポツーンと水が落ちる音を録音テープに取っておいて、ナレーションを入れながら水音を聞かせるとか。自衛隊にも女性部隊があると聞いて、福山に女性自衛隊があるんです。自衛隊の看護学校を取材に行ったり。ご婦人方の賑やかな鍋蓋楽団を収録したり、日本一高給取りの女性ボートレーサーを訪ねたりなど、結構忙しかったなあ。

なかでもとりわけ力を入れたのが、瀬野機関区の活躍ぶりです。山陽本線の瀬野駅から八本松までの区間は、本線では全国でここだけという急勾配なのです。この区間を走る上り列車はすべて、



127. 女性ボートレーサーの取材風景
(昭和36年)

後押し蒸気機関車が後ろから押さなければ急勾配を登り切れない。

電化されていない時代ですから、あそこには電信柱が1本もない時代です。歴史的な記録映像になるはずだから撮っておこうと提案したのが、私のほかに、社内随一の国鉄通だった増崎畠一さんがいました。制作畑の全員が関わって作り上げました。監修は専門家の増崎さん、脚本は梶山季之の文学仲間だった下川訓之さん、映像監修は田頭和憲さん、撮影は萩原啓志君ほか数名、演出は私、という総がかり体制でした。これはきつと最後の歴史的な記録フィルムになると確信しつつ、可成りの危険を冒しながらの作品を作り上げ、今も厳然として保存されております。「あと押し四十年」～瀬野機関区の記録、勾配25/1000。自分で言うのも変ですが、秀作でしたね。【詳細は次項参照。】

昭和34年のテレビがスタートして間もなくのころ、スタジオVTRも無いころ、昭和36～37年になるまでの2年ぐらいいかな、昭和36年の10月にスタジオが出来て待望の大型VTRが入るのだけど、それまでの間は全部テレビ中継車か、白黒16mmフィルムで撮影する映像でなければテレビ番組は作れなかった時代ですね。

その時代は私と小畑女史と制作課員は2人しか居なかったけれど、他にも好きな人間が居てね。秋吉台の「秋芳洞」がこよなく好きな人物が居た。のちに撮影課長になったけど、「おい、手伝え」と言って(笑)。彼と私との2人で作ったのです。「秋芳洞の秋」だったかな。田頭和憲さんです。

それから先述の福山の婦人自衛隊は、自衛隊の衛生看護学校です。フィルム記録自体が残念ながら残っていません。婦人自衛官というのは結構偉い人が多いのです、昔で言う中尉、大尉、少佐ぐらゐの婦人将校が既に居ましたからね。そこへ我々男性撮影班が入って行ったものだから、えらい気にされてね。ご婦人天下の世界だから、いろいろな規則があった。福山の婦人自衛官は、撮影しているスタッフのスナップ写真だけが、何故か何枚か残っています。カメラは大橋茂捷君だったな。

そのほかにも「見たい知りたいシリーズ」というのをやっていて、朝丘雪路さんがナレーションを全部引き受けていて、「雪路、女の地図」とい

うタイトルで放送するようになったと思う。そのなかで例の「鍋ぶた楽団」というのを取材しましたね。たしか五日市の婦人会で、台所の鍋ぶたを使って曲を演奏するというのが得意な婦人会があって、それを私が取材に行きました。ドッテン、ガッチャン、バツタンとね。メロディーは鍵盤付きの笛で演奏するのですが、ほかのパーカッションというのかな、打楽器部門は本当に鍋蓋を叩くし、まな板もガッチャン、ガッチャン。大きな桶をすりこ木か何かでドンドン叩くとか、ユニークなので、それを撮って持っていくと、「朝丘雪路にナレーションをさせましょう」というので全国放送になりましたね。楽団の世話人は、私の関わっていた広島ジュニアオーケストラの指導員、国清博司先生でした。

スタジオが無い時代に、ラジオのスタジオもテレビ中継用のスタジオに化けさせた思い出があるな。ラジオスタジオへ照明などを運び込み、仕込んで照明を当てるのです。応接セットなどは社内から漁って運び込み、カーテンを外して張り巡らせたり、植木はホールにある鉢植えを運び込むとか、全部ありあわせだから美術の制作費はゼロ。照明も器具を借りる料金だけで済むから、仕込むのは藤原薫君たちが自分で仕込んでしまう。照明の当て方などの基礎は、学生演劇時代の体験がものを言います。正面から基本的な照明を当てておいて、後ろ側からバックライト。髪の毛を少し光らせて、サイドからキーポイントの照明を入れると生きて来るとか。前から横から上から後ろから、という照明の当て方には基本があるようです。

前からのフラットな照明だけだと、人間の顔はノッペラボウに映りますから、立体的に見せるためには横から光を当てて鼻筋の影を作るとか、おでこを光らせないためにも真上から明かりを当てて、テレビの画面では髪の毛の後ろ側が光っているように見えるくらいにする、とか。習わぬ経を読む、みたいだけど、そういう照明技術まで覚えてしまいましたね。

中継車だけの頃は、自前で全部をやり遂げました。それで、「アイツは何でも出来る」、「なんでもやってしまう」なんて噂が立つようなことになってしまったのですが、私だって何でも出来る訳じゃない。何とかしなければならぬ、何とか

してくれ、と頼まれれば頼まれた本人は何とかしなければならぬ、と考えるじゃないですか。

そこからは何を、どう考えて、何をやるかが問題だという訳です。学生時代の舞台経験、壁新聞での読み易い文字書き経験、多く見てきた舞台での芝居、バレエ、オペラ、歌舞伎の見聞記憶も生きたと感じていますが、何にしても私は難関に突き当たったとしても何とかして逃れたという実体験が、今度は私を便利屋だと見せてしまったでしょう。

なにせ会社は「オールラウンドプレイヤーを育てる」などと主張する会社です。特殊な放送免許のもとで成り立っている放送局が、絶対的なプロを育てる必要があることなど問題外だったのでしょうから、事の成り行きは止むを得ぬ次第です。しかし、そこで生きて行った職員たちの必死の努力を、会社側が如何ほど理解していたか、残念ながら大いなる疑問です。専門家を育てる意義を今こそ理解せねばRCCは、単なる放送電波発射会社に陥り、優れた作品を創作する放送局らしい使命を失ってしまう危険性に気づいて欲しいと願います。

優れた仕事はすべて外注作品だった、社内には誰も放送の専門家が居なくなっていた、なんて嘘のようなホントの話にならぬことを願います。そして私みたいな便利屋を大量生産するような姿勢を考え直して欲しいものです。便利屋になんか、なるものじゃない。ただ、こき使われるだけです。

○石田 しかし、定年後にまたいろいろなお話が来るのは、その便利屋だったからではないんですか(笑)。

○新井 便利屋は、何処まで行っても唯の便利屋です。私の定年後、それが生かされていると言えればそうかも知れませんが。現役の頃、ずいぶん役に立ったことは間違いないでしょうが、その代わり、何かを始めたいときには、あいつにチョットやらせてテストしろ、なんていうことになる懸念も感じて面白くないですね。

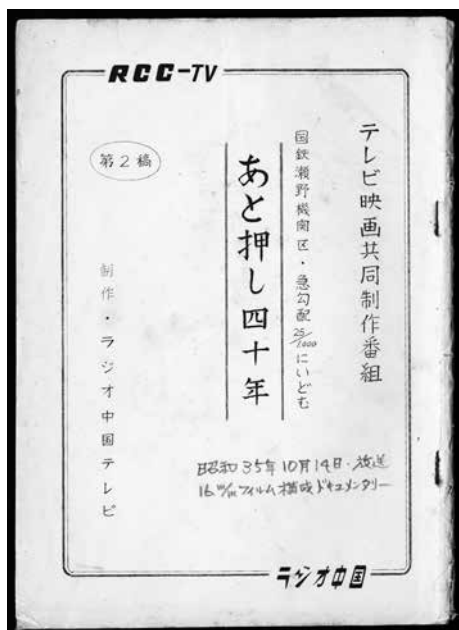
先駆者だ、なんておだてられて結局、軌道を敷く先導車だけが私の役目だった。何とかやっていたから、今の軌道(レール)が敷けたと言われていたようですがねえ。出来て居なかったら、いまごろは何と言われているでしょうかねえ。それ

を思うと慄然とします。

だから立派な賞なんか、あまり頂いたことはありません。児童合唱団のコーラス番組で金賞のグランプリを貰ったのと、民放祭での「芸北（一）」の優秀賞と、「ドキュメント8.6」でジャーナリスト賞を貰ったぐらいかな。あまり賞は戴いていないけど、あちこちへの基本ルールだけは築き上げましたね、振り返ってみるに。

瀬野・八本松間の蒸気機関車を撮影

○新井 全線電化されるまでの瀬野駅は、乗降客には分からなかったでしょうが、普通の駅とは違う巨大な機関区という特別区域が駅裏に広がっていました。そこには何本も線路が引き込まれており、その線路脇には、高い給水塔やら石炭積み込み用の装置などがズラリと立ち並び、何台もの蒸気機関車が蒸気と煙を吐きながら調整やら検査を受けているのです。別名デゴニ、D52型機関車というのが最強の牽引力を誇っており、疾走する轟音もまた猛烈な優れものでした。そんな豪もの機関車群を整備し、上り線をやって来る列車は、すべて瀬野駅で停車して後押し用の機関車を最後尾に取り付け、前と後ろが呼吸を合わせて発車して行くさまは勇壮そのものです。そんな機関区を抱く駅は珍しかったはずで、山陽線が全線電化して電車が走るようになるまでの話です。



128. 「あと押し40年」瀬野機関区の記録
(昭和35年)

「後押し機関車」って名前を知っていますか。正確には「補助機関車」と言うんですね。その補助機関車を縮めて通常は「補機」と呼ぶのです。普通の列車は補機1台で押すんですが、特急列車が走りますね。「つばめ」というのがありました。あれは後ろに2台の補助機関車をつないで、補機2台でグイグイと勢いよくスピードを保って押して行くんです。そうしないと八本松駅まで一気に登れないほど瀬野と八本松の間は急勾配で、日本中の本線の中で、あれぐらい急勾配の所はありません。この急勾配を「1,000分の25」と表現します。1,000メートル走って25メートル上がる。瀬野駅から1,000メートル走って行って25メートル標高が上がって、八本松の駅についたところが標高500メートル。そういう急勾配は、列車を後ろから押さなければ上がれない。だから補助機関車が後から押して行くんです。

その押して行く機関車を取材した時に「お願いします」と言ったら、敗戦後に西条まで汽車通学した話になり、「お前さんは、もしや…」となって即決しました。「私はよく知っていますよ。通学で機関室にいつも乗り込んで機関士や助手の人の仕事を見ていましたからね」と言う、「おう、ほうか」という調子で話が合いましたね。

その時に機関車の先頭が、こんなに激しく横揺れするなんて初めて知りました。カメラマンと一緒に補機の運転室に乗り込んで撮影していましたが、あらかじめ機関車の胴体に前から後ろに向けて頑丈なロープを張っておいたんです。実は何とかして機関車の先頭部分に座り込んで、フルスピードで走りながら押している前の列車との連結器を、自動装置でピンを抜いて連結を外し、そのまま走り去って行く特急「つばめ」号の後ろ姿を撮影したい、と狙っていたのです。

だから機関士の居る運転席から外へ出て、そのロープをつたいながら疾走する機関車の胴体をつたい、後押ししながら走っている補助機関車の先頭部までつたって行ったのです。揺れる運転室から出て、カメラを担いで、カメラマンと二人で、猛烈な熱気を発散している機関車のボイラーの胴体に沿って張られたロープをつたい、そろり、そろりと前へ進み、猛烈な横揺れのなか、機材を抱えたまま何とか機関車の先頭部に辿り着きまし

た。心細げに立って揺れている旗竿みたいなポールに、身体を括り付けて座り込んだのはいいが今度は動けない。機関車先頭部の猛烈な30cmもの横揺れで振り落とされそうで危ないのなんの、カメラを構えるのさえ必死の思いです。ピントを合わせ、絞りを調整する～そんなこと、出来っこない。

カメラもニュース取材用3本レンズのDR型。手でネジを巻かないと動かない。それも僅か40秒そこそこ。こうなったら、揺れまくり振り回される機関車先頭部で、私と萩原カメラマンの二人で手分けしてカメラを操作することにしました。カメラを構えて連結器と特急「つばめ」号を狙うのは勿論カメラマンの役目。萩原君はシャッターを押し、ピントを合わせる。もちろん事前にネジをイッパイに巻いておく。私は彼にしがみつくようにしてカメラに手を伸ばし、カメラの3本のレンズのうち相手を狙っているレンズの胴体目盛りのうち、露出調整の絞りの目盛りを回して光量を変える役目。ことは同時に起こるのだから、カメラマンとの呼吸を合わせて、「せ～の」で一斉にやらねばダメ。難しいのなんのって、揺れまくり振り落されそうな中での微妙な操作です。

トンネルを続け様にくぐって、4番目の長いトンネルを抜けたら、もう目の前は八本松駅に向かう緩やかな左カーブ。「来たぞ」という緊張と興奮。轟々たる機関車の疾走音と排気音のなか、萩原カメラマンが僅かに身体を起こした。「よしッ」と言う姿勢。カメラを目の下にある太い連結器に向けて構えた。手元は暗いから絞りは開き気味。汽笛が鳴った。合図だ。カメラマンが身を乗り出した。トタン、ガチャーンと連結器の外れる音と共に、眼前の特急列車の車体が、スーッと離れ始め、視界がパーッと一挙に明るくなった。

「いまだっ」と、伸ばした手指に力を籠めて私が露出の目盛りを絞り込む。真下を狙っていたカメラ自体が水平に振り上げられ、遠ざかって行く特急「つばめ」の最後部車体が、明るく輝きながらカーブを曲がって行き、スピードを落とさぬまま視界から消えて行きました。

相変わらず揺れまくる機関車の上で萩原君とガッチリ握手しました。二人が乗り込んだ後押しだけの役目を果し終えた補助機関車がスピードを



129. D52機関車の先頭部にて

落して行くなか、いつまでも私たちは危なっかしく、手だけを握り合っていました。

広島为国鉄瀬野機関区だけが持つ秘密兵器は「自動連結器」と言って、全速力で疾走する特急列車を後押しする補助機関車は、同じスピードで後押しをしながら機関士席に設置されている取っ手をガイと引くだけで、自動的に特急と後押し機関車とを連結している装置のピンが抜け、連結器が外れ、スピードを落とすことなく特急が走り去って行けるのです。

その代わり後押しの補助機関車は、後押しを始めるためには、先ず広島駅まで特急列車を迎えに行かなければならないのが欠点かな。

特急列車以外は皆、瀬野駅で停車し補助機関車を連結してから、やおら上り線を走り始めます。そしてみな、八本松駅で再び停車して補助機関車を外し、それから改めて上り線を走り去って行くのです。これみな、1,000分の25の急勾配がもたらした課題です。もちろん現在は、強力な電車が難なく瀬野駅も八本松駅も走り抜けておりますゆえ、ご心配なく。

この操作を「自連解除」と呼びます。自動連結器解除ですね。ガタンと取手を引っ張ったら自動的にピンがポンと撥ね上がって、走りながら連結器が外れるのだから、押されていた列車は、そのまま走って行けば良い。それは特急列車だけです。貨物列車などは全部八本松駅で止まって、人の手で連結を外すから面倒だけど問題はない。特急列車だけが、ノンストップで走りながら自動連結器で補助機関車を切り離し、そのまま特急列車は西条方面へ、東京方面へと走って行くわけですよ。そのために開発した自動連結解除装置。それを撮

影して番組で放送したら、ものすごく評判になりました。

今、テレビ局仲間では、瀬野と西条の間に電信柱が立っていない蒸気機関車の映像は、この私の作品ぐらしか残っていないようです。まあ、そのために撮ったんですから当たり前かな。その直後にすぐ電信柱が立って、電気が通って電化します。そして東京オリンピックになるわけですよ。

多元生中継テレビSHOW「ワイドサタデー」

○新井 1971年、昭和46年9月10日、事務系から再び番組現場の最先端、テレビ制作部に副部長として復帰しました。およそ5年ぶりに現場に戻って、勇躍……というより長らく、あれもこれもと心に描いていた「やりたい番組」企画の実現へと夢が溢れてくるような瞬間でした。

テレビ制作部員は、いつの間にか顔触れも変わり雰囲気も違ってしまっていました。副部長とは管理職に非ず、プレイング・マネージャーなり」と公言し、否応なく乗しかかってきた部員ディレクター諸君の勤務や制作予算の管理などはそこそこに始末し、周囲や上司からの陰口や悪口、「管理職のクセにアイツは、いつも席に居ない」などは無視して、さっそく直接に番組を担当すべく乗り出した最初の番組が、この「ワイドサタデー」でした。

当時としては勇気と経費の要る、特異なネット番組でした。キーステーションはABC朝日放送であり、西日本の民放6局が共同制作局としてネットに参加していました。放送業界では有名な「腸捻転」を既に解消し、我がRCCが所属するTBS系列としての大阪での局は、従来のABC朝日放送からMBS毎日放送に代わっていました。つまり朝日放送とネットを組むのは、TBS系列としては異常でありネット協定違反でもある、という不思議な地方局同士の自社制作ネット番組だったのです。同系列局としてはRSK山陽放送（岡山）、OBS大分放送、RKB毎日放送（福岡）、RMB宮崎放送。そして他系列はRNB南海放送（松山）、ABC朝日放送（大阪）でした。

しかも番組のキャッチフレーズは、「毎回、ネット各局の現地から完全多元生中継で放送するという、時代先取りのワイド地域情報番組」でした。

今でこそ全国各地からの生中継番組は、お天気カメラの普及と放送機材の軽量・高品質デジタル化などもあって、至極当然の番組形態ですが、昭和40年代の民放テレビ界では、ニュース以外で巨大なテレビ中継車を出動させるなど、地方民放局としては様々な意味で系列を越える大変な事業でした。その制約を乗り越えての「多元生中継テレビワイドショー」誕生は、私の現場復帰一年前のことだったとかで、スタート期の手探り状況は既に終わっており、スタイルもノウハウも定まり成長期に入っている番組だったことは、私の現場復帰最初の担当としては至極幸運でした。

朝日放送の担当プロデューサーグループに、かつて労働組合役員時代に交流があり、当時から何となくウマが合っていた田端泰雄氏を発見して、ヨッシャと互いに強く握手を交わしたものです。

その田端氏を通じて知り合うこととなった吉田幹夫、辰巳禎男、三上泰生の各氏とは、すぐに多年の知己のごとく理解し合う仲間となりました。

南海放送は瀬戸内海の対岸にあり、同局誕生期にRCCが何かと応援したことや、私が組合役員として何度も訪問していたことや、近隣局としての友好関係を保ってきたラジオ時代からの番組交流を通じての知己も多く、番組制作者同士の交流も頻繁だったことから、系列は違っていても互いに良きネット関係にありました。

併せて司会者の佐々木信也氏とは、初対面の前にすでにキー局担当者の田端氏から「不思議なご縁のある方ですよ」と耳打ちされており、こわごと大阪に赴き、朝日放送での各局担当者全員による企画会議で対面したときは、驚くというよりは気恥ずかしいような不思議な心地に襲われたも



130. 司会の佐々木信也氏と私

のです。佐々木氏も同じ耳打ちをされていたらしく、互いに顔を合せたトタン、握手も忘れての大爆笑になってしまいました。集まっていた各局の担当者も、全員が一緒になっての爆笑の渦となりました。彼と私は、なんと、瓜二つ兄弟のごとく似ていたのです。

後年、「ワイドサタデー同窓会」の席で何十年ぶりかの再会を果たしたときは、二人並んで壇上に立ち、互いに顔を見合わせ互いに相手を指差し、「兄さん、お元気ですか?」と挨拶を交わし、再度の満場大爆笑を招いてしまったものです。

この番組担当となってすぐ、同年11月にはテレビ制作部長に昇進してしまいました。大いに弱ったものです。

これでは、如何に「我こそは、プレイング・マネージャーなり」と強弁しても、部長ともなれば管理業務を疎かにする訳には行かない。番組担当を降りろ、とあからさまな圧力もかかって来ましたが、私には番組担当から降りる気は全くありませんでした。中継車は、カラーカメラ3台を搭載した1台と、自家発電機とカラーVTRを搭載した1台との2台でワンセットを組む態勢で、中継制作技術スタッフも1クルーしかいないという心細い状態です。

片やテレビ制作部として僅か数人の小世帯で、こんな大規模な生中継番組の他にも、レギュラーや単発の自社制作番組に加えて、全国ネットの持ち回り制作番組は意外に多いのです。となれば、「部長でござい、管理職でござい」と番組制作スタッフから外れては、テレビ制作部としての舞いが舞えないのは自明の理。「エイヤ、ままよ」と無理を承知で、陰口承知でディレクター業を継続兼務する決断を自らに下しました。これが後年また、自分に崇って来ることになるとは全く予想もせず、相変わらずの完璧主義で突き進んで行ったのでした。

その「ワイドサタデー」から、幾つかの記憶に残る作品を挙げてみましょう。

第61回「海は冷たかったか」～戦艦陸奥～

昭和46年12月4日(出)

広島県江田島の陸奥解体現場から

○新井 番組キーステーションとしてのABC朝



131. 「海は冷たかったか」台本
(昭和46年)

日放送のスタジオを経由して、西日本各地（毎回ほぼ2カ所）の現場からの生中継番組を、各ネット局あてに放送するという形態が通常でした。従って、ほとんど全てを広島からの画面・音声で構成するような場合でも、キーステーションである朝日放送のスタジオには、広島に向けて出かけた司会者やスタッフ以外の全員が揃い、必要な関連部分を大阪のスタジオから制作し付加して放送する形式を取っていました。

▽大阪キー局スタジオの全員が涙

この「海は冷たかったか」に大阪のスタジオで参加した、西川きよし・末広真樹子の両司会者と出演者や朝日放送の制作担当者、海軍関係の解説者、福井静夫氏たちは、番組ナマ放送中にも係わらず広島から送られてくる番組に見入りながら、そのほとんど全員が傍聴と涙を流したと、放送終了直後に朝日放送スタジオのスタッフから広島現場の私に連絡が入りました。

ネットで共同制作に加わっていたキー局のスタッフ・出演者までもが涙した……とは、担当ディレクターにとって望外の誉め言葉です。今も忘れることができませんし、前述の番組同窓会の場でも異口同音に各氏から、次々に当時のこの思い出が語られたのは嬉しい限りでありました。

▽スリーミックス

ドラマの制作経験者である私にとっては、困難でもなく驚きの手法でも何でもなかったのですが、放送終了後に朝日放送のスタッフから、「あのシーンは、スリーミックス手法を使ったのですか？」と、驚きの様子で尋ねられたのです。

「戦艦陸奥」と運命を共にした副長が書き残したという、生まれてくるはずの我が子に宛てた手紙を未亡人が読む場面で、緩やかで大きな波の底から陸奥の雄姿・艦長の遺影・読む夫人の涙・スクラップと火花・引き揚げられた遺品などが、次々に重なり合って浮き上がり、消え去ってゆき、背景に「海ゆかば」の男声合唱が静かに流れる……という、映像も音声も、互いに互いを重ね合わせる複雑な手法を使いました。

まさにこれは、業界専門用語で言う「スリーミックス」であり、文字どおり三つの映像を同時に重ね合わせる手法であり、テレビドラマなどでは普通に使われているテクニックなのです。しかしこれが、当時、わずか3台しかカメラを搭載していなかったカラーテレビ中継車を使っての、現場生中継ドキュメント専門のスタッフにとっては技術的に極めて複雑、かつ容易ではなく、また珍しくもあったものと思われます。このことも、見る者に深い感動を呼び起こした要因のひとつだったのだらうと思います。

* * *

出演 三好 近江（「陸奥」遺族会会長・副艦長夫人）
深田 鉄次（深田サルベージ社長）
大野 靖子（ ♪ 副会長）
河井 雅美（ ♪ 課長）
吉村ナミ子（遺族会員）
田中 英雄（陸奥引揚促進期成会）
桑原 トラ（ ♪ ）
新村吉五郎（山口県浮島漁業組合）
米本 勘市（ ♪ ）
福井 静夫（元海軍造船官）
綾部 義雄（「陸奥」生存者）
柏村 武昭アナウンサー（RCC）
下中志津子アナウンサー（ABC）
芝田 五郎（ ♪ ）
藤田 郁吾（ ♪ ）

広沢 明（ヘリコプター）

司会 佐々木信也（RCC）
末広真樹子（ABC）
西川きよし（ABC）
技術 青山 晃
調整 西本克之・藤井正毅
映像 福永能方・荒井 忠・古本 泊
音声 三好洋昭・栗原 昭
中継 上竹嘉和・川野義明
照明 篠本 豊
構成 壇上 茂
音楽 南 保雄
演出 新井俊一郎

* * *

▽現地取材に全力投球

レギュラー構成者の一人、壇上茂氏は広島出身者でした。それもあって広島RCC局の私とは、早い時期から「仲間」意識が芽生えていて、なんとなく心通ずるものがありました。壇上氏は既に、大阪の芸能界では押しも押されぬ著名な劇作家であり、松竹新喜劇「梅田花月」での上演作品が次々に好評を博しているという超多忙な人物でしたが、朝日放送側からのたつての依頼で、もう一人の丹波元氏と二人で番組付き構成作家となっていました。その壇上氏が、戦争開始の12月放送の企画として広島のRCCから提案した、「戦艦陸奥、謎の爆沈を追う」の構成作家と決まったとき、「よし、これで出来た」と私は内心、快哉を叫んだものです。

戦争さなかに、広島湾の柱島沖で爆発轟沈した戦艦「陸奥」の事故には、その直後から謎が付き纏っていました。当時、小学校3年生だった私の級友に海軍将校の息子がいましたが、彼がある日、「広島湾で戦艦陸奥が沈没したらしい。それも単なる事故じゃないらしい」と耳打ちしてきたのを、今なお鮮明に記憶しているのです。戦後になって事故原因は弾薬庫の爆発と判明しましたが、制裁を受けて狂気に陥っていた水兵が放火したのだとか、共産主義にかぶれた者のテロだとか奇妙な噂が飛びかい、謎はいよいよ深まるばかりでした。「真相はコウだ」式の出版も相次ぎ、まさに今に至るも諸説紛々の状況にありました。

この企画を提案するに当たって私は既に、「爆発の瞬間、立ち昇った煙の色が弾薬の爆発としては奇妙だった」「広島湾内にある島の波打ち際には、無数の水兵の死体が流れ着いて悲惨な状況だった」などの証言も得ていました。作家が壇上氏と決まって私は、事件関係者の証言と生存者や遺族の無念の思いを軸に番組の方向を決めたいと考え、まず、構成者である壇上氏を、舞台劇の上演作品執筆中であるにも係らず無理やり現地に引っ張り出し、徹底的な現場調査と関係者の面接取材に着手したものです。

壇上氏の調査ぶりも徹底していました。現地で陸奥の船体引き揚げ作業をしている深田サルベージの社長が、火薬の専門家であり、陸奥爆沈の当時に爆煙を見て異常さに気付き、のちに海軍の事故調査委員会で証言した人物と知って、ぜひ直接に面会し証言を得たいと言ってきたのです。

また、広島湾内の島に流れ着いた遺体を引き揚げた漁師たちにも会って遺体の状況を聞き出すほか、事故を目撃した人物を捜し出して証言も得たい、とのことでした。となると番組構成に必要な事前調査地は、広島湾内の沈没場所である柱島・遺体が多数漂着した大島（屋代島）・呉市にあるサルベージ会社・引き揚げた陸奥の巨大な砲身などを解体している江田島海岸と、広島湾内をぐるりと一巡せねばならないこととなります。しかも超多忙のうえ上演脚本執筆中で初日も間近とて、壇上氏の広島での取材日程は僅か一日だけ、と決まっていた。

さあ大変。厳しい日程の制約からして、いかに取材地を効率よく早く移動するかが、まず問題となりました。陸上なら何とかなるものが、なにせ事件現場が海上であり、取材地の多くが湾内の島か沿岸地帯ばかりです。思いついたのが、モーターボートでした。いまでこそ誰もが容易に使うことの出来る乗り物ですが、昭和46年という発展途上期のことです。ガソリンを海に撒き散らしながら走るような高速艇なんて、そんな簡単に手に入ったり借りたり出来るようなシロモノじゃない。広島湾周辺に僅かに生まれつつあったマリナーズに、それこそ電話を掛けまくったのです。その挙げ句、やっとヤマハボートの一つに辿り着いたときは、さすがに全身の力が抜け落ちるような思

いでした。

猛烈に寒い烈風に吹き飛ばされそうになりながら、凍えそうな体を両足で力一杯に踏ん張ってのクッションで支えながら、高速のため空中高く弾む船体から振り落とされないよう船の手摺りにしがみつくながら精一杯でした。取材を終えて屋代島から広島市の宇品港へのモーターボート航路は、いまでも凄まじい恐怖感と共に、ありありと甦ってくるのです。ボートのチャーター料が幾らだったか、営業と経理からどれほど叱られたか……のちに経理部長を命じられたとき、懸命に思い出し探し出そうと試みたのですが無駄でした。

▽哀しき解体現場、カメラをどう配置すべきか

中継現場となったのが、海中から引き揚げられた戦艦陸奥の巨大な主砲や、アーマーと呼ばれた分厚い鉄板の砲塔など、山のように積み上げられた戦艦の無残な残骸を解体している江田島の北海岸にある作業場でした。

累々と無造作に重なる、往年の名戦艦名残の鉄クズ。赤茶けた鉄の色彩と、容赦なく吹き荒ぶ冬の海風。寄せる荒く寒々とした波音……テレビの絵として見る人の眼を牽くような雰囲気あるモノは皆無でした。ここから、強者どもの消えた夢と悲しみを描き出し伝えなければ、と考えると、番組企画を提案したものの、いかにすべきか頭を抱えるばかりでした。

舞台美術の方式に「構成舞台」というのがあります。リアルな現実性を否定し、抽象的な感覚と印象性を強調するやり方で、鉄パイプやサイコロ状の物体を組み立てて、ある世界を生み出すという舞台美術の手法です。陸奥の解体現場を下見しながら私は、そこに構成舞台を思い描いておりました。となれば後は、登場人物や大道具を舞台各所に配置するがごとく、この冷酷な現場にテレビカメラと司会者や、生き証人などの出演者を配置しようと考えました。

テレビカメラは、まだまだ重たくて簡単には位置を移動できないような時代でした。いったん、その場所に配置したら、もうカメラには根が生えるのです。指定席に座った観客の如くカメラは、その場所から前を見ることしか出来ないのです。現場中継の場合のカメラ位置は、その番組の成否

を決定するものでした。

中継現場となった解体工場は、すぐ近くに海が広がり、足元には波が打ち寄せていました。はるか遠くには、瀬戸内の島と本州の山並みが続いていました。そこここには当然のことながら、悲劇の戦艦「陸奥」の残骸が転がっています。ガイと、いまも空を睨む主砲の黒い砲口。その長い長い砲身。砲塔そのままの形を今も留めている、巨大なビルほどもあるような鉄塊。明らかにスクリューと分かる、これも巨大な風車状の物体。鉄クズのあちこちで飛び散っている解体作業の火花。崩れ落ちる鉄板の轟音。かたや静かに聞こえてくる瀬戸内の波音。遠く行く船の汽笛などなど。これはまさしく、テレビ的な構成舞台ではないか。

それらを生かすべく、3台のカメラ位置を決めました。司会者、5人の遺族、3人の生存者、解体作業の技術者3人と2人の証言者、爆沈の目撃者と遺体を収容した地元の漁師たち、「海ゆかば」を歌う男声合唱団などを、番組の舞台装置でもある鉄クズと波打ち際の隙間に配置しました。カメラは、それらを程よく狙えて、しかも効率よく多くの主役を画面に収められる地点に据えました。それら全体が、一種の構成画面を創り出すことになっていました。しかもそれでいて変化に富み、同時にまた多様な画面を形づくるのが可能なように工夫していたのです。

▽生み出したテレビ画面のいくつか

手元に当時の、演出用テレビ台本が一冊だけ残っています。そこには、4Bエンピツの殴り書きで、カメラ番号と画面構図の指定、スイッチング手法などが書き込まれております。実は残念ながら、放送当時の番組を録画したVTRテープは残っていません。いや、RCCには……と言い直しましょう。もしかすると、キー局であった朝日放送には残っているかもしれませんが、まだ確認したことはありません。たぶん望みはないと思うので、ここは台本の記録に基づいて、特に印象的だったと記憶する場面を言葉によって再現してみましょう。(円内の番号は「カメラ番号」)

①番組開始トップのタイトルシーンは、まず「砲口のクローズアップ」が画面一杯に映り、続い

てカメラはゆっくりとズームアウトして、「ぐいと空に伸びた主砲の砲身全体」を見せ、そこにタイトル「ワイドサタデー」の文字が浮き上がって来る。

②ゆっくり画面が入れ替わって「スクラップの山」を見せ、そのままカメラは静かに「スクラップの山」を上方に向けて舐めるように見せて動き、「積み重なった鉄クズの山」になり、「共同制作の各局名」がスーパーインポーズされる。

①その間にカメラは、「鉄クズの彼方に見える海」を見せて、

③続いて「打ち寄せる波」となり、

②「砲身の根元のクローズアップ」から急速にズームアウトすると、「火花と共に切断されている砲身」が見える。

①「切断作業の全景」

②「火花のクローズアップ」

③「艦体スクラップ断片のクローズアップ」

①「解体作業場クレーンの彼方を過ぎて行く船、全景」

▽番組本編のトップ挨拶部分

①「巨大なクレーンから画面は拡大して、解体現場に並ぶ男声コーラスグループ」

③画面ゆっくり「これも巨大なスクリューの全景」に入れ替わり、そのまま更に画面がズームアウトすると、司会の佐々木信也氏が立っている。佐々木信也「今日は、佐々木信也です。広島合唱同好会の皆さんに歌っていただいていますこの歌は、《太平洋行進曲》。なつかしい曲ですね。場所も広島県、元海軍兵学校のあった江田島です。そして、ぼくの足元やあちこちに散らばっております赤サビた鉄クズ。これが、かつて日本海軍が世界に誇った、戦艦陸奥の変わり果てた姿です」

「広島・江田島、陸奥解体現場から生中継(RCC)」の文字がスーパーされる。

①「解体現場の付近の様子を見せて」

佐々木「このスクラップといっしょに艦と運命をともにした英霊の遺体が数体あがったことは皆さん、すでに御存じと思いますが、今尚、数百もの英霊が冷たい海底に眠っております」

③「現場に立つ佐々木信也のBS」からズームア

ウトして「佐々木こみの現場全景」へ。

佐々木「毎週土曜日にお送りしていますワイドサタデー。今週は、その瀬戸内海で謎の爆沈をした戦艦陸奥の全てを皆さんに御覧いただき、12月8日、第二次世界大戦開戦記念日を前に、いま一度、戦争という怖ろしい怪物の毒牙の跡を振り返り、平和への祈りを一層高めていただきたいと思います……（後略）」

▽遺族へのインタビューと手紙の紹介

③「巨大な砲塔前に立つ艦長・副艦長夫人、その後には3人の遺族」

②「左横から遺族にインタビューする佐々木信也」

③「インタビューされる遺族一人(氏名がスーパーされる)」

①「砲塔」(質疑応答が続き)

③「艦体スクラップ」

②「引き揚げられた遺品と佐々木信也」

③「インタビューに答える遺族」

①「佐々木信也と大野副艦長夫人」

佐々木信也「その、お腹の赤ちゃんにまで書いて来られたという時の手紙、お持ちですか？もし良ければ、読んで聞かせていただけませんか？」

②「大野夫人が手紙を読み始める」ゆっくりカメラは近寄り「大野夫人の顔、大写真」。大野夫人「夫の副艦長から届いた遺書の手紙を読む」男声合唱「海ゆかば」コーラス始まり続く

③ゆっくり画面から「海の波が浮き上がってきて」

①その波間から「在りし日の陸奥の雄姿」が浮き上がって淡く消えて行き

②それに重なって淡い「凄まじく散る火花」にピントが合い、これも淡く消えて行き

③その中から浮き上がった「涙をこらえる遺族の表情」が一人ずつ横に流れ

①その姿に「輝く海の光」が浮きあがり、それに更に「静かな海の波」が重なり

②そこに「数点の遺品」がオーバーラップして重なり、「波」も輝いて消えて行く。

▽陸奥引き揚げニュース映像などで構成

現場からの中継とともに、陸奥引き揚げのニュース映像のほか、江田島の元海軍兵学校と陸

奥沈没現場上空からのヘリコプター映像レポート、深田サルベージによる引き揚げ苦心談と海中作業の取材報告や、模型を利用した陸奥沈没の謎を探る証言、遺体漂着現場の状況レポートと村人たちによる目撃証言、解体现場での生存者による当時の事故状況報告などのほか、大阪のスタジオから海軍の元造船専門家による事故の解説などを加えて構成され、番組の全編が戦艦陸奥に絞って構成されておりました。

大阪のABC朝日放送のスタジオと、RCC中国放送の陸奥解体现場からの生中継を中心に、二元生中継形式で放送されました。

▽重量15トンのテレビ中継車を海上輸送

中継には実は大問題がありました。まだ江田島と本土との間には、一本も橋が架かっていない時代のことです。いかにして、1台の自重が15トンもある2台一組のカラーテレビ中継車を、解体现場のある江田島まで運ぶか、でありました。かつて白黒テレビ時代に、安芸の宮島へは海上自衛隊の上陸用舟艇で、因島へは民間フェリーで中継車と電源車の2台を上陸させた経験はありましたが、カラーテレビの中継車に比べれば極めて小型でありました。

さて今度は巨大で重いうえに、もし失敗して海中に沈めてしまうようなことになるならば、その損失は見当もつかないほどの巨額となり、私の責任は果てしなく重大であります。制作技術担当の副部長だった青山晃氏(附属高校の後輩)は困惑し、迷いに迷ったと言います。中継車搬送を担当する車両課の責任者と共に彼は、呉から江田島の小用までのフェリー航路を、何回も往復し実地検分したうえでようやく決断したとのこと。

次の問題は、フェリーに乗せる時の中継車の乗り込み方でした。重さ15トン・長さ15メートル近い車体がフェリーに前輪を乗せたトタン、その重量のため船体がグイッと沈む。中継車の車体は前輪がフェリーに、後輪が岸壁に残っているわけですから、車体の底が岸壁に衝突して破損するか、さもなくば傾いたフェリーの船体に沿って滑り落ちて海中に転落、という重大事故につながる危険性が極めて高いのです。ここはベテラン運転手のテクニックが決め手となりました。

これまで2回の経験から、特殊車両担当の車両課主任・米本祐氏は、前輪がフェリーに懸かって船体が沈み始めた瞬間、その沈下速度を追い掛けるほどの勢いで一気に中継車を乗船させる、という、かなり勇気と高度な運転技術が必要な方法に自信を得ていました。それには事前に、重量のある一般車両をフェリーの乗船甲板先端部に乗せておき、中継車の前輪がフェリーに乗った瞬間、フェリーの後部が沈下すると同時に船の先端部が反動で跳ね上がるのを押さえ込むという、まさに頭脳的と言える安全策を考案したのです。

呉港から江田島の小用港までの往路、その逆の帰路ともに、2台の巨大なカラーテレビ中継車の搬送作戦は大成功でした。番組もお陰で大成功裡に放送を終了し、大きな感動を残すことが出来たのです。当時の私は満40歳を過ぎたばかり。まさに働き盛り、怖いもの知らずの年齢でした。

第57回「おゝ神様」～出雲大社から～

昭和46年11月6日（土）

○新井 その一ヵ月前、中国地方の瀬戸内海沿岸部にあるRCC中国放送としては、越境中継という、技術的に危険を伴い、ご当地局に対しては誠に礼を失するという行動に出ました。秋の結婚シーズンを迎え、RSK山陽放送が四国の金刀比羅宮から、RCC中国放送が山陰の出雲大社から、「おお神様」というタイトルで二元生中継の企画が決まっていたのです。

この企画を提出するにあたり、民間放送には県域放送という一定の枠があるため慎重に検討した挙げ句、これは「現地取材」であり「県域放送」の概念には該当しないと結論は出ていたものの、なにせ御当地は同じ放送系列のBSS山陰放送のエリアであり、そこへ同じ系列局であるRCCが乗り込むとは、理屈はともあれ礼を失しルール違反といえる行為です。という事情からRCCとしては事前にBSSに対して、きちんとご挨拶をしておくこととなりました。反応は早く、意外にも誠に好意的な諒承のご返事をいただきました。

中継当日になって、「ああ、そうか」と納得したのですが、現地のBSS山陰放送としても他所から来たRCCが出雲大社という難所から技術的に、どうやって中継電波を飛ばすのか検分しよう

と考えていたらしく、BSS技術スタッフらしき数人の人影が当日、現場で見かけられたことから推測は間違っていなかったと思います。

特に付言しておくのですが、当時は衛星中継などという、高度で簡易で画期的なテレビ中継技術なるものは開発されておらず、テレビ中継放送といえば、現地の高い山の上にテレビ用の中継器材を運び上げ、マイクロ波という電波を彼方に見える中継基地まで飛ばして受信して貰い、そこから更に目的地であるテレビ本社まで電波を届ける、という、まことに古めかしくも確実な人海戦術によるテレビ中継技術でしか可能ではなかった時代です。そういう時代の挿話（神話？）であることを先ず強調しておかねば理解していただけないほどの苦心談です。

▽初めてRCC中継車が中国山地を横断

テレビ中継車は特殊車両です。運転するには特殊免許が必要であり、運転台に乗り込めば、まさに地上から3メートル近く高い位置にあるように感じます。中継車はカラーカメラ3台を搭載しており、放送に際しては、車内には映像・音声関係の技術者数名と演出担当者2名ほどなど、総計5～6名のスタッフで満員状態です。もちろん積載しているカラーカメラはすべて車外に出して使うのですけれど、車内には映像・音声のコントロール器材と中継用装置などの放送機器がぎっしり詰まっており、それに番組音声と連絡用の音声や、機器の発する結構大きな騒音が混じり合って、巨大な車体内部の居住性は誠に劣悪なのです。かたや、テレビ中継車とコンビを組む電源VTR車も、同様に大型器材で満杯状態のうえに、積載した器材はいずれも巨大で、しかも激しく騒音を発生するものばかり。これも居住性は劣悪。

中継車の移動時には、技術責任者のほか演出者など数人のスタッフが乗り込みます。その目的は、人員運搬というより事故対策・緊急事態への即応態勢確保のため、というべきでしょう。なにしろテレビ中継車2台セットで、購入価格は実に十数億円！我がカラー中継車と電源VTR車は、昭和46年3月の購入時に、大阪での万国博覧会中継に一役かったうえで広島に到着したのですが、それ以来初めて県外に出ることとなったという文字通

りの初出動。しかも他県へ乗り出すとあって、技術的事故発生時のとっさの対応には大きな不安が付きまとう訳です。演出・技術・車両の3者混成チームは極度の緊張と、一種の冒険に踏み出すゆえのトキメキとを抱え、中継・電源の巨大特殊車両2台のほか、人員と機材用にチャーターした小型バス1台に分乗し出雲中継班一行は3台の車列を組んで勇躍、広島本社を出発したのです。

責任者である私は、技術担当副部長の青山晃氏と並んで、先頭を走るテレビ中継車の運転台脇に席を占めました。すぐうしろに電源VTR車。その後には小型バスが続くという、「ワイサタ出雲大社中継部隊」はモノモノしい車列を組んで、一路、出雲市へとスピードを上げたものです。

現代のような立派な高速道があるわけじゃなし。旧来の山道を懸命に走って途中の赤名峠で休憩。宍道湖畔の玉造温泉でも小休止を繰り返しながら走り続け、ようやく出雲大社に着いたのは中継2日前の夕方でした。

神社参道脇の旅館に宿泊し、翌日まるまる一日を、出雲大社から大阪ABC朝日放送までの、電電公社（現、NTT）のマイクロルートを利用するテレビ電波の中継電送路探し、という番組の成否を決める大仕事に充てる計画でした。

▽マイクロルートを探せ！

技術的な事前調査では、出雲大社現場の相当に高い位置からマイクロウエーブ中継電波を放射し、出雲市内の電電公社中継タワーを狙い、そこを中継点にして今度は松江市内の同じ中継タワーを狙って電波を飛ばす、という2段中継方式を取れば、何とか高品質のテレビ中継電波を大阪まで送ることが可能だ、と踏んではいたものの、さて現実に出雲大社に到着してみたら、その何とも言えぬ広壮さに驚愕するとともに、境内に生い茂る巨大で広域を占める松林の群れに困惑を隠せませんでした。というのは、私たちは境内にイントレと呼んでいる鉄パイプのヤグラを何段も高く組んで、その上から電電公社のタワーに向けて中継電波を飛ばすつもりでいました。ところが、境内一面に生い茂る背の高い巨大な松林群のため、予定したイントレ鉄ヤグラの高さでは駄目だ、と分かったのです。

ではイントレを組む位置を動かして、出雲市内のNTTタワーが見通せる場所を探せばいい、となったのですが、それでも矢張りイントレを実際に組み立てて見て、その頂上から望遠鏡で目的物を探さなければダメだ、となりました。例えばイントレ4段、およそ高さ8メートルを組み立てるには相当の技術が要ります。四方にロープを強く張って頑丈に固定しないと、タワー頂上が少し揺れただけでも、鋭く狭い送出射角を特色とする中継用電波は、狙う先方の小さな一点には正確に命中しない。その難題のテストを、さて何回繰り返したことでしょう。ようやく、社殿からかなり離れた松林の外れで、思い切り高く組み上げたイントレ頂上によじ登った一人から、「見えた！」の聲が上がったときは、私を含めた全員が、一斉に歓声を上げたものです。まさにこれで、番組成功に向けての第一歩が踏み出した瞬間だったからです。

イントレ・タワーの頂上は、高くそびえる松林の上を僅かに抜け出し、心細いような小さなお碗型の送信機が据え付けられていた。その先、出雲市内の受信点タワーにも、我がRC技術スタッフの一人が受信機と送信機を持ってよじ登り、根気よく出雲大社からの電波を待ち構えていたのです。彼からの嬉しそうでいて疲れ切ったような無線の声もキャッチされ、また一段と大きな歓声が上がりました。付け加えるならば、更にその先、松江市内の同じような場所にも別のスタッフが居て、全く同じように出雲市を経て出雲大社から遥々届いた電波をキャッチし、松江市の周囲にそびえる山頂に建つ電電公社マイクロルート基地のラインに割り込ませて大阪へ送るという作業を黙々とこなしていたことなど、一般の視聴者はご存じなく、全く誰も想像すらしていなかったことでしょう。

その状況を見つめる別の眼があることを、私たちは感じ取っていました。遠慮がちに立つ数人の姿は、地元BS山陰放送のスタッフだと分かりました。それに気づいた双方は、その場で時ならぬ交歓風景を繰り広げることになりました。専門のテレビ技術者同士だけが理解できる、テレビ中継用の新ルート開発の瞬間を共に喜びあう姿でした。CSサテライトを利用したテレビ中継が実

現するようになるなど、まだ全く予測すらできなかった古代の出来事です。

▽似たもの同士のご対面

司会は、レギュラー陣の中から佐々木信也氏が担当となり、早い時期に、朝日放送のスタッフから私へ電話がかかって来ていました。「信也氏の奥様が、出雲大社は初めてなので同行したいと言って来た。前日の午後、二人は出雲空港に着くのでよろしく」……この電話にはもうヒトコト、「奥様は、貴殿と会うことを極めて楽しみにしておられる模様なり、乞うご期待」。

出雲大社前の旅館に宿泊した中継部隊一行から離れ、前日の夕刻、私はタクシーを飛ばして出雲空港へ向かいました。広大な出雲平野から一直線に続く道路の終着点、海ぎわに作られた空港は自衛隊と共用であり、施設や建物も小振りで簡素なものでした。椅子が数脚並んだだけの到着ロビーで待つことしばし、彼方の上空に爆音と同時に小さな機影が現れました。典型的なローカル航空路で良く見かける中型機が静かに着陸し、ゆっくり地上滑走して空港ビル(?)に近寄って来ました。佐々木氏と共に司会を担当する柏村武昭アナ(RCC)と私は、空港エプロンまで出て、到着した飛行機のドアが開くのを待ちました。

小型機の扉はあっさり開き、短いステップから佐々木信也氏がまず降りてきました。

「やあ」と、私たちが彼に手を振って歓迎の挨拶を送ったとき、同じように手を振り返した彼がフイと機内を振り向き、続いてそこに、一同が到着を期待していた佐々木夫人が現れました。彼女はステップに気を取られたらしく、眼を足元に落としたまま滑走路に降り立ち、おもむろに視線を私たちの方に上げた瞬間、プーッとばかりに空港エプロンの真ん中で、彼女は吹き出してしまったのです。

しばらくの間、佐々木夫人の笑いは止まりませんでした。笑い転げていて、どうしても笑いが込み上げて来るんだから仕方ないよ、という風情でした。つられて思わず、私も柏村アナも笑い出したものです。

気づけば、当の佐々木信也氏も笑い転げておりました。ご夫妻は、飛行機から降りたばかりの地

点で、お二人揃って笑い転げており、私と柏村アナは、そこから少し離れた空港ビルの入り口付近で、やはり笑い続けておりました。

到着したばかりの佐々木夫妻は、そのまま笑いが続き、一向に空港まで辿りつけないと言う、奇妙な状況に陥ってしまったのです。それほどに、事前に朝日放送のスタッフから聞かされていたご対面儀式は、予想を超える爆笑を伴う大騒動となったものです。

▽神域に立ち入ったテレビ

神話の時代から出雲の国は、神秘的で雄大な物語性に富んだ地方でした。主人公は先ず素戔嗚尊(すさのおのみこと)。そして続く主役は、大国主命(おおくにぬしのみこと)です。有名な八岐大蛇(やまたのおろち)伝説から出雲の国は、素戔嗚尊ゆかりの大君が支配する八雲立つ国であり、そこへ、あたかも侵略者の如く、「あの良き国を、我ら天照大神(あまてらすおおみかみ)の末裔たちが治めるべきであるからして、あの国を支配する神に代わって我ら天孫族が譲り受けよう」という、有名な国譲り神話が産まれた訳です。まるで敗戦後の米国GHQによる日本占領政策そっくりではありませんか。

敗者となった出雲の大国主命は、出雲の国を天孫族に譲った代償として築かれた出雲大社に隠れ住んだ、という伝説が残ります。その出雲大社なる古代の神社は、出雲風土記などに伝わる一説によれば、太い杉柱3本を金輪締めで一本の大柱とし、全体で9本の太く長い柱の列柱の頂上に「田」の文字の如き4つの神域を持つ本殿が乗る巨大建築として完成しました。その高さは実に32丈、約96メートルの超高層建築であり、参詣する人々の眼を奪い驚かせ、「八雲立つ」と詠われるほど高いので、雲のため神社の屋根にある千木が見えないほどだった、と伝えられています。

そんな広大な建築物が、平安時代や鎌倉時代の古代に存在したはずがない、単なる神社の威容を誇る伝説だ、と長いあいだ言われておりました。現在の神殿も結構大きい方ですが、それでも45メートルほどだとか。東大寺の大仏殿なみ、ですかね。

私たち中継班一行は、現代にしても巨大で神々

しい神域に、禰宜さんの厚意で内陣まで入れて貰い、それぞれ、忌衣という特別な羽織型の衣裳で身を清めたうえ、本殿に極く近い場所までカメラを運び込み、出雲大社の空にそびえる神殿を大杉の枝越しに見上げる、というショットを全国に届けることができました。禰宜さんの解説も、前述したような神話から神殿の秘話までを含む、日本歴史のロマンを描き語って下さいました。

拝殿では、全国に伝わる縁結びの説話どおり、何組かのカップルが流れ作業のよう、と表現しては失礼かもしれませんが、次々に神前結婚式を挙げ、新婚の雰囲気横溢。まさに番組の狙い通りの情景が繰り上げられておりました。

サーロー・節子氏との出会い

○新井 初期の時代から最盛期にかけて、私はラジオで様々な番組を作り出していました。人気番組では「柏村武昭のサテライト No.1」とか「奥様ワイド」という番組は、スタジオだけでなく公開で各地を持ち回りにして、ステージに上げて、目の前で奥さん方に語り掛けるような公開生中継方式で好評を博していました。ほかにも「日曜子ども音楽会」など、子どもたちの音楽発表会みたいな番組で好評でした。例の「メリーゴーラウンド」公開ラジオショーも長寿番組化しつつありました。という事で、頃合い良しとなったのでしょ



132. アトランタ WBS 局前の研修団
(昭和50年)

う、アメリカへ研修出張に行く民放局のグループに参加しろとの初の海外出張命令が出て、10局ほどの民間放送局からの参加者と共に昭和50年秋、各局合同でチームを組み、アメリカ・アラスカ・カナダ研修団として海外に行きました。

私は、ノーマン・コーウィン (Norman Corwin) というアメリカの作家の作品、以前にお話しした芋虫カーリー、それから「Sorry, Wrong Number」を聴いていたので、その有名なアメリカのラジオ作家が、今、何をしているか、もし亡くなっているのなら、その後をどのように継いでいるのか調べたいと思って行きました。ラジオ部長で、ラジオドラマの演出担当ですからね。それでアメリカに行き、世界で最初にラジオ放送を始めたというピッツバーグの放送局も訪ねてみました。世界最初のラジオ局第1号、ピッツバーグの KDKA 局。そこに行って質問したんです。「私は有名なノーマン・コーウィンの作品に接して感動した。あの人は今、どうしていますか」と聞くと、その局の人は誰も知りませんでした。役員も一般社員も、つまりノーマン・コーウィンなどの作家は既に過去の人になっていました。がっかりしましたね。それと同時に、ラジオドラマなんていうのは、もうアメリカでは役に立たない番組だということになっていた。つまり、ほとんどがニュースワイド、ワイドニュース、ラジオ何とかという情報番組と音楽番組が中心の放送番組構成になっていた。どこの局に行っても、コンテンプラリーとか、ヘリコプターで交通情報を流すとか、ああいうことを自慢げに話してくれます。コマーシャルは全部カセットに入っていて自動的に流れますよ、なんていうことを威張って言うわけです。つまりラジオは同じでも、時代はすっかり変わっておりました。

ついでにというので、私はラジオの代わりにテレビのスタジオも見て来ました。そうしたら、広島の我々のスタジオとあまり変わらないなという気がしました。わが R C C スタジオと、あまり大差ないなと思うようなスタジオでした。「何人でやっているの？」と質問します。

ラジオですが、「一つの放送局で、せいぜい15人ぐらい」。ほとんどが FM 局で、AM 局というのはありません。アメリカには中波のラジオ局と

いうのはないんです。極超短波のFM局。そして、「この町にラジオ局は幾つあるんですか」と聞くと、「えーと、45かな、50かな」と言うわけです。50局そこらもあるようなFM局ですから、全部、日本で言うならば、うちは歌謡曲専門局ですとか、ラジオ浪花節専門局ですというふうに専門化されている。そういうアメリカシステムのラジオ形態でした。ですから、一番普通のラジオ局というのは、どんどん好きな曲を募って流します。その間に、交通情報を入れ、ニュースを入れ、コマーシャルを流し、生活の知恵みたいなスポットを入れてというのを、一人のアナウンサーがだいたい4時間から6時間担当していて、3～4人で24時間を交代する。それにはミキサーが1人、アシスタントが1人付く。つまり3人で一つの番組が出来て、それを3交代ですれば3×3=9人で済むわけです。4交代なら3×4=12人で済んでしまう。あとは機械を保守する人が1人か2人いればいいでしょうね。

だからFM局の人数は10人か20人ぐらい、局数は40局か50局。テレビ局はというと、やはり一つの地方に4つか5つから10以下でしたが、そんな状態のアメリカを回りました。

その旅の途中に、実は出来事が一つあったんです。RCCは食品まつりというのをしょっちゅう開催しているんですが、世界中から色々な名物食品と、それにまつわる物品を広島に持ち込んで来て、広島城とか県立産業会館（広島県立広島産業会館）で展示するのです。その年も、ちょうどカナダを中心に食品まつりをやる企画で準備を進めていました。それで私は、社長から直々に命令を受けました。研修出張の途中ではあるが、カナダのトロントに行って、カナダCFTOという放送局と姉妹縁組を結びたいと手紙を書くから、広島RCCからの使者として訪問し、この手紙を向こうの社長に渡し、挨拶をして頼み込んでくれと。それを無理やり引き受けさせられました。

海外旅行は初めてですから英会話なんて出来っこありませんが、行けという命令だから仕方がない。団体旅行そのものが途中で行程を変更してカナダのトロントへ行く、という訳には行きませんから、私だけがグループから抜けて一人でカナダへ行かなければならない。これはデビエーターと

いって、ニューヨークで本隊と別れて一人、カナダ航空機に乗り込み、ニューヨークのラガーディア空港だったかな、そこからトロントまで飛び立ちました。

飛び立つについては、飛行機のチケットそのほかは随行してくれている通訳さんが手配してくれました。タクシーも呼んでくれて、タクシーの運転手に「ラガーディア空港まで行ってくれ」と言ったんでしょ、運転手は頷いて乗せてくれました。タクシーに乗る時にグループ一行全員が集まって来て、パチパチパチと私の写真を撮りまくったのです。理由は後から分かるんですけど。

それで私は空港まで行って飛行機に乗り込みます。全部手配できているから無事にトロントに着きました。着いたはいいけど、それからが大問題です。たった一人で空港に降りました。荷物は肩から提げたカバン一つだけ。ポケットには例の手紙が入っています。一人だけ降りて行って税関を通過したとき、捕まりました。黒人の税関係員でしたね。腰にピストルを付けていて、2人いました。「ちょっとこっちに来い」と私1人だけが別室に連れて行かれました。その別室は、結構、税関のカウンターから遠い所にあっただけど、連れ込まれて小一時間、もっとかな、尋問を受けました。

「何日まで滞在か」。「おまえのパスポートはグループ旅行ということになってニューヨークから来ているが、なぜ一人旅になったのか」。「荷物はたったそれだけか」。「金はいったい幾ら持っているんだ」。「年はいくつだ」。「日本人に間違いないか」。「目的は何か」と、こういうわけです。もちろん英語ですから、こちらも一生懸命に単語を並べて答えました。



133. トロントでのサーロー・節子さん

その最後の「目的は何か」というところで、私はポケットに手紙を持っているのを思い出して、「姉妹縁組をしようということで、この放送局に行こうと思っているんだ」と手紙を渡したら、その係官さん、バリバリと手紙をめちゃくちゃに破いて、中身を引きずり出して読んで、あと言ったことが、たった一言、「出口はあそこだ」と。

腹が立ちましたよね。「出口はあそこだ」と言うんだから。追い出されたような感じです。

出て行った所で待っていたのが、例の有名なサーロー・節子さん。事前に連絡をして、現地の放送局との交渉のコーディネイト役をお願いしてありました。こちらは英語が頼りないからというのでね。彼女いわく、「何時間も何時間も待たされて、何か起こったかと思いましたよ」と。それで説明したら、彼女は大笑い。「新井さん、あなたは絶対間違いのない、日本の赤軍派と間違われたんだ」と言われました。

それで放送局に行きます。向こうのバイスプレジデント、副社長に会って、ご挨拶をして、例の手紙を差し出したらバリバリに破れている。その説明はサーロー・節子さんがしてくれたんでしょう。その副社長さんも大爆笑。英語で「おまえさんはレッドアーマーに間違われたに違いない」と言われました。

そういう一幕があって、その後がまた一つ問題です。サーロー・節子さんの家まで行って、ご主人に会ったり、いろいろ懇談の機会があったのですが、トロントでの用事が済んだのだから、これからカナダのモントリオール空港まで、今度は自分一人で切符を買って飛ばないといけないわけです。

切符を買いにトロント空港まで行きました。そこまではサーロー・節子さんが付いていてくれましたが、そこでバイバイとなって帰ってしまう。しようがないからカウンターに行って、たった一人だけ座席が空いているかどうかと聞いて、たどたどしい英語が伝わったんでしょう。チケットを寄こして何ドルだと言うからお金を払って、チケットを持って、ゲートの番号もよくよく確認してからゲートを潜り、飛行機はこれでいいんだろうと思って座席に座りました。時間通りに飛び立ちました。

途端に、どんどん不安がこみ上げて来ました。間違いなく、モントリオール空港行きの便に乗ったんだろうな。誤って、別の行き先に乗ってしまったのではなかろうかという不安がこみ上げて来た。しかし、乗り込んでいて「この飛行機、どこに行くんですか」と聞くのは恥ずかしいから、「この飛行機、モントリオールに何時に着くんですか」と聞いた。すると時間を教えてくれたので安心したという、凄まじい恐怖の時間がありましたね。

それでモントリオール空港に着きました。そうしたら、ドゥツとばかり仲間が迎えに来ている。「おまえ、本当に無事に帰って来るとは誰も思っていなかったぞ。だから最後のチャンスだと思って写真を撮ったんだが、よくぞ帰って来られたなあ」。そういう一騒動があったのが、昭和50年。

そして、帰ってきたらカープ初優勝騒ぎです。ニューヨークで優勝が決まったので、国際電話を掛けました。あの当時、国際電話は交換手にいちいち、海外の電話で日本のナンバーはこれというのと言わないといけないんですね。「overseas call, please」とやるわけです。それで何とかRCCにつながって、私直属の高榎汪副部長を呼び出して、事前に準備をしていたとおおり、これこれ、こういう手はずになっているからラジオカーをこう出して、間違いなく特別番組を出してくれよな、と頼んでおいて、OKという返事を貰い、安心して研修を済ませ日本に帰って来た訳です。

日本に帰ってから聞きました。ラジオカーをすべて出動させたが、全部、屋根がぼっこんぼっこんに潰された。何故かと聞くと、「夢中になったお客さんが屋根に飛び上がって、車の屋根の上で『万歳、万歳』とジャンプするんです」と。新聞ネタになった、というのを後から聞いて、笑う訳に行かず、笑っては悪いような大騒ぎのなかで、なんとか無事に中継を終えたけど、えらい騒ぎだった、と聞きました。実は、私の方もえらい騒ぎがあったのだぞ、なんていう話をしたものです。

スポンサー、視聴者との関係

○石田 さきほど、柏村武昭さんの番組を立ち上げたと仰っていましたよね。

○新井 第一期、第二期、第三期とありますが、どのことを言うのかな。第一期は私の担当ではあ

りませんでした。あれは完全な娯楽番組ですがね。

○石田 柏村さんが世間的に知名度を得た番組だと聞いているのですが、柏村さんを抜擢したのは新井さんになるんですか。

○新井 「サテライト No.1」のことを指すのなら、私が2度目にラジオ制作へ戻ったときのことで、既に番組はスタートしており、早々と人気もNo.1になっていましたね。

元アナウンサーだけど、希望してラジオ制作部に異動して来た平本幸君が、柏村アナを起用して、あの形式のラジオ公開番組を開発し大当たりを出していました。第一産業とタイアップして本店内に専用の公開スタジオを設置し、ワンサと若者たちが集合して大騒ぎになっていました。だから私が柏村君を抜擢して当てたのではなく、彼の特異なキャラクターとセンスが平本君によって見出されて起用され、一気に花開いたと言うことでしょう。

私は少し遅れて、それを懸命に後押しする役割に徹していました。私はラジオ制作部長として、業界用語で言うならばプロデューサーと言う立場で、番組と人員と予算と提供主とを繋ぐ役割を担って、全体をコントロールしていたという事です。

そのあとテレビで「レジャープレゼント」というスタジオ公開形式の柏村番組をスタートさせましたが、市内中央とRCC本社との間を結ぶシャトルバス、という発想を欠いていたため長続きしませんでした。

○石田 そうなんですね。では、現場からは少し距離があったんですね。

○新井 はい、RCC本社のテレビスタジオでの公開番組ですから、広島市の中心部からは遠い、という意味で現場とは時間も距離も差がありました。ラジオ制作部長時代は、部長である私が直接に手を下している、いわゆる持ち番組と言うのはありませんでした。

人気番組になった「奥様ワイド」にしても、「ビバテレホン」も、みな指揮・監督の立場ですね。だから指示はするけれど、実際に番組を担当することは、ラジオ制作部長時代の私にはありません。

ただし、新番組のスタートとなると別です。私は企画の最初から関わって、内容から司会者から

スタッフ構成まで、スタジオセットから勿論、予算から一緒に議論して、最後は私の権限と責任でスタートを決めるのです。それが部長と言う立場で、プロデューサーと呼ぶ業務です。当然ながらアフターケアとか、企画の再検討なども指示し実行します。予算の使用状況なども、常に監視しています。

テレビ時代になると、プレイング・マネージャーを主張して、例えば「ワイドサタデー」みたいに、部長でありながら自分で制作を担当する番組を持っていましたが、ラジオとテレビでは、やはりスタッフもスタイルも規模も違いますからね。

○石田 なるほど。いろいろな番組を作っておられるのですが。

○新井 自分で作ったのも多いです。特にドラマとなると、ラジオでもテレビでも自分から手を下しましたね。

○石田 「女性サロン」で、レナウンからずいぶん注文がついたという話がありました。

○新井 あれはテレビ番組です。

○石田 広告代理店の電通とか、あるいはそういったスポンサーの方と、ほかに何かやりとりがあったご記憶はありますか。結構いろいろな番組を作っておられて、いろいろな体験をされていると思うんですが、そのへんはあまり気にせずにされていたんですか。スポンサーのほうとか、広告代理店から番組内容に注文が入ったりはしないんですか。

○新井 最も気になる分野です。そのあたりは巧みな仕組みが社内であって、社内の組織が相互に盾と鎗に分かれて守備範囲と攻撃権限があり、互いに守り合うようになっています。

制作と言う組織を外側から支えているのは、スポンサーを相手とする営業とか業務と言う部門です。スポンサーから直接にクレームを受けないよう守っているのです。逆に、営業と制作がチームワークを組んで、一緒にスポンサーを獲得するようなケースで新番組企画の推進、なんていう場合があります。私の経験から言えば、「日曜こども音楽会」というテレビ番組が、それでした。

もう昔話になっていて初期の事情を知る人も少ないけど、企画者は私ですが、最初から番組を担当した才木幹夫君も記憶していました。RCC営

業の達人で玉井長五郎さんなるユニークな人物が、広島電通との共同作戦を展開して、先ずは「広島証券」を口説き落としてスタートさせた新番組が「日曜こども音楽会」でした。一部、既に話しましたが、初期の話し合いでは、子ども中心で音楽会を開こうという企画なんだから、独唱や合唱はもちろん、日舞やダンスもOKで行こうや、などの意見も出たけど、順位を決めるコンクールじゃなくてテレビでの発表の場を提供するという趣旨の番組で行こう、との基本線を打ち立てて、やはり音楽会らしい子どもたちの番組、という方向でスタートしたものです。出演する子どもたちの音楽性を評価し、それを讃えながらも更なる研鑽を勧めるためにも、音楽専門家で優しく話しかけて褒めることから始めるよう先生方にも協力して戴こうと、当時有名人だった教育委員会の梶山逸夫先生や、児童合唱団の指揮者の寺西敏雄先生、増本嘉子先生など多くの先生方にもご出演を願ったものです。

司会者も子供たちが懐くようなキャラクターの持ち主として、劇団の上田修お兄ちゃんを起用し、介添えと時間進行を気にする役として増田礼子アナの二人コンビを決めました。ピアノ伴奏者は神吉由紀子さんが巧みで優しく、好評でしたねえ。スタジオ番組でスタートしたけど、間もなく積極的に外に出て、県内各地を公開放送形式で巡回する、地元政策としては異色で重点的公開番組へと発展して行きます。

その頃からだったかな、今やもう事情は判然としませんが、提供主が、広島相互銀行（当時・現もみじ銀行）に変わり、司会者も井尾義信アナウンサーと劇団の中野玲子さんとのコンビが出来上がったはず。このあたりからは井尾アナの記憶に頼るのですが、「子ども音楽会」という発想は、スタジオを飛び出せる外出可能で公開放送を原則とするようなテレビの子ども番組にしたい、というRCC側の企画と、各地域に支店を持つスポンサー企業との意向がマッチした、巧みな制作プランと営業プランの共同企画が成功したケースで、長寿番組へと発展するのです。

○石田 代理店は博報堂ですか。

○新井 いや、広島電通だったと思うのですが、そのあたりの事情で判然としない部分がありま

す。最初の提供主の広島証券から、途中で広島相互銀行に変わりますね。RCC本社営業の玉井さんと、スポンサーの広相広報担当から後に広島市議員になった土井哲男さんとの直接関係プレーだったのじゃなかったかな。電通は高沢祝爽（のち広島支局長）さんなどが担当で、最終的には、提供主の広島相互銀行の広報意図とも合致して、番組は長寿番組へと育って行きました。県内各地に支店を多く持つ広相としても、地方回りが可能で、それがまた地元で評判を呼ぶ番組スタイルが好まれたと言えるでしょう。

「褒めて育てる」との番組基本線もマッチしたのかな。広相としても番組収録後に出演者との記念写真をサービスしながら、チャッカリ定期預金の口座を獲得するなど、敵もさるものでありました。

のちスポンサーは天満屋に変わり、タイトルも「仲良し子ども音楽会」に変わるなど、いくらかの変遷をたどったと記憶します。

このスタイルだったら、各地方に持って出て公開録画が出来ます。その効果は大きいと踏みました。だから、三次でも呉でも、何かのお祭りとか文化会館が出来上がったという場合も公開録画が可能。何かないかといって適当なチャンスを見て出動が可能。そうすると、広相としても各所に支店がある訳だから出ていける。「広相、日曜こども音楽会」と銘打っての公開録画番組が生まれます。長寿番組への機運は、スタート時から既に内包されていた番組だったと言えるでしょう。

○石田 それはラジオですか、テレビですか。

○新井 最初はラジオから話が始まっていて、「朝の童謡」という長寿番組に成長しました。次にテ



134. 「朝の童謡」公開録音風景

レディで話が始まって、公開放送形式のテレビ「子ども音楽会」という基本形を作り出しました。もともとテレビ的な内容の番組ですからね。ラジオでも似たようなケースがありました。

テレビ芸能番組の「源平芸能合戦」という公開生放送を制作課が担当していましたが、この「源平芸能合戦」でも同じように、腕自慢・のど自慢というのが結構多く現れるのです、学校にも地域にもね。そういう人たちと同様に、子どもたちも発表の場を欲しがっているんだ、ということが各学校を訪ねていたら分かる。だから、その場を提供しようということで、「子ども音楽会」は企画書の中に「発表の場を提供する」という項目が一つ入りました。

歌い終わった子供たちに、「上手に歌えましたね」と褒めてあげることから始まるのです。それから、「あそこを、こう歌ったら、もっと良かったかも」という塩梅で一種の指導をして戴く。講評をして貰って、そして「次の方、どうぞ」となるわけです。そういうスタイルが、あの番組の基本的方針であり、長寿番組となった根幹だと思います。5年以上だったかなあ、ローカルでの長寿番組として記録が残りました。長続きしましたね。

○石田 なるほど。やはりそういうふうに分が作った番組が後に継がれていくというのは、一種誇りですよ。

○新井 なにより嬉しいことですね。ラジオでは私の「メリーゴーラウンド」もそうでしたね。立体コント、というキャッチフレーズを付けたけど、あの立体コント方式のラジオ漫才は、結構のちの時代まで続けて貰えました。テレビ番組として進出できたことも自慢のタネです。

テレビだと「日曜子ども音楽会」がそれですね。とりわけ「テレビホール」と銘打った毎週一回の「テレビの自由広場」30分番組が生まれたことは、私たちテレビ制作陣にとって実験劇場として、何より効果的で有難かったですね。どんな企画でも、プールされた予算の枠内ならば自由に取上げて宜しいと言うテレビ広場は嬉しかったです。こんな番組が地方局に存在したこと自体、考えれば凄い事です。何でもやっていたのだから、後々まで続きました。この枠があったからこそ、初心者揃

いの我々なのに、何とテレビドラマにまで挑戦することが出来た。初体験だし分からぬことばかりだったけど、辛くて苦しかったけど、我々にとっては素晴らしい勉強となり、凄い経験を蓄積することが出来たと誇らしくさえ思っています。

○石田 地方局の場合は、視聴率とかは気にされるんですか。

○新井 常に気にしています。しかし、ゴールデンタイムとか、「8時だよ」みたいな全国的な人気番組などに比べれば、残念ながら内容も視聴率も比較にならないレベル、という事になるでしょう。新聞で言うならば「地方版」かな、格付けは。

地方として懸命に努力していますが、それは分かるが、まあこの程度だろう、とか目安を付けて視聴して下さいね。

でも社内の営業部あたりからは、常に厳しい注文が下されて来ます。これって、つまりはスポンサーからの意向である、という訳で、評判の良い悪いで大いに違ってきます。仕方ありません、私たちは所詮、民間放送なんです。NHKからはズバリ、「商業放送さん」と皮肉を込めて呼ばれます。彼らは、自分たちこそ「民間放送です」と主張していますから妙な気分です。スポンサーは神様である、という言い方は、確かに民放の現実を言い当てて妙です。

事実、オリンピックでさえ、スポンサーの意向ですべてが左右されているのですから。開催日だって日本の場合、真夏の8月6日前後でしょう。本当ならとんでもない、と拒否されるべき開会日なのに。

さて現実に戻って、「子ども音楽会」の場合を例にとりあげてみますが、視聴率も結構ソコソコのポイントを取ってはいますが、民放業界での最高視聴率、というものを取ったことはありません。5%から10%あれば十分。スポンサーである広相さんも納得して下さっています。ローカルであるからこそ、かもしませんが私は、視聴率の一寸した上下に振り回されることを好みません。理屈を捏ねるようですが、これって統計学で言う誤差の範囲もいいところだからです。誤差の範囲を大きく超えるような変動まで無視するつもりはありませんが。業界では現在、視聴率以外に頼れる絶対的な指標が見当たらないから止むを得ず利用し

ているに過ぎない。

個人視聴率と言う数字が少しずつ幅を効かせて来たようですが、デジタル時代まったただ中です。真に正しい放送効果を測定するような、何らかの新しい指標が出現しないものでしょうか。それが無いがため、すべての業界人が所帯と個人の視聴率調査データに頼らざるを得ないでいるのが現状だと思います。無視することは出来ませんが、尊重するのではなく、頼り切るのは危険だと私は考えております。むしろ議論が継続している「視聴質のデータ」、ないし「質の評価データ」を調査取得する方法を是非とも、模索し実用化して欲しいものと思っています。

○石田 では、リスナーとか視聴者の反応で、思い出に残っていることは何かありますか。

○新井 テレビのスタジオが出来たばかりの頃、老人会やら町村の何かのグループの人たちがスタジオへ見学に見えるんですよ。その老人会の人たち、町内会の人たち20～30人がいらしたとき、ラジオは「奥様ワイド」などを、こんな風にして作ります、テレビ番組は、何人もの関係者がスタジオや中継車から、野球中継などをこうやって作り、各地にある送信所からご家庭へ向けて放送しているのですよ、と詳しくご説明いたしました。

そうしたら、ご一行の帰り際に、一人のおばあちゃんが出て来て、「まあまあ驚いた。私じゃテレビを見るときにゃあ、これからは正座して見ることに致します」と仰ったのです。

感激しましたねえ、私は、そのおばあちゃんの両手を握って、「有難うございます、有難うございます」と何度も繰り返してお礼を言いました。



135. RCC テレビホール
(昭和40年頃)

私たちの隠れた苦勞の一端を分かってくくださったのですねえ。嬉しくて涙が出そうになりましたね。初めてテレビの裏側を見てびっくりした、などの反応は多かったけど、これには心底、嬉しさが込み上げてきました。忘れられないエピソードです。

○石田 何か番組を放映して視聴者の方から手紙が来ることも普通にあるのではないんですか。そういうのはあまり覚えがないんですか。

○新井 ドキュメンタリードラマ「広島事件録」を放送し始めたトタン、投書が次々に舞い込んで来ましたね。吉舎町で発生した「金平糖事件」など、子供のころにお爺ちゃんから聞いて怖かった思い出があった、とか、「平和公園事件」では、近くを偶然に通りがかった人が多かったらしく、話を聞いたとか現場を見たとかの投書に驚かされた記憶があります。

テレビドラマを作り始めたときは、「さがす」に出演した少女とお爺ちゃんの演技が、見ていて可哀そうで涙が出た、と言う葉書が届いていました。

番組にはモニター制度というのがあって、あらかじめ人選した人に指定した番組を視聴して貰い意見を寄せて戴くと言う制度があります。そのモニターさんから届くレポートは印刷物になって現場まで回って来るようになっています。一種のご意見番制度ですね。なかなか厳しい批判が多かったとの記憶の方が多いですね。もちろん、褒められたことも多かったけど。

○石田 逆にネガティブな反応で抗議とかはなかったですか。

○新井 抗議は、報道部長の時代に多く受けましたね。選挙演説をニュースで出すとき、公職選挙法に公平の原則というのがあります。イコールタイム・ルールと言って。あの候補は画面に何秒間出たが、この候補は何秒しか出なかった、とか。この種の抗議は選挙期間中、しょっちゅうでした。不公平だ、あちらの候補ばかり出している、などとね。明らかな政治的な圧力です。

右翼からもありました。原爆報道などを放送した後に「ばかやろう」「気を付けろ」。それから、「玄関前に行って街宣車でバンバンやっただと」という調子の抗議が来るのです。右翼というのは、しつこいほどにね。

○石田 では、電話だけで済んだんですね。街宣車は実際には来なかったんですか。

○新井 私が知っている限り、電話だけの抗議で済みました。実際には街宣車は来ませんでした。がしかし、いつ来るかも分からない。何をやられるか分からないので不安で仕方がない。というので一時期、RCCの側面外窓に全部、回転式のシャッターを取り付けて防衛態勢を取ったことがありました。そういう態勢を取ったことはあるけど過剰防衛でしたね。

○石田 広島特有の問題で言うと、昭和50年代ぐらいから部落解放同盟がいろいろと抗議をされていますが。

○新井 私は解放同盟から直接、抗議を受けたことは一回もありません。報道に対してはあったかもしれないんですが。大学紛争の時はあったようです。

○石田 どちらからあったんですか。

○新井 左翼と右翼と両方から。扱いが不公平とか、学生たちに味方するのかとか。

○石田 それは何の番組を作った時にそういったことが。

○新井 私が抗議を受けたものではありませんが、ニュースですよ。現場からの実況中継も含めて、報道のニュースに対するクレームです。局の報道姿勢というのかな。NHKに対してもあったらしいけど、「お前たちは、どっちの側に立って報道しとるんや」という調子の脅しは随分あったようです。私は直接の担当ではなかったけど、そういう話は聞きましたね。

○石田 そうなんですね、分かりました。

○新井 制作番組に対するクレームは、ほとんどありません。むしろ地元を紹介する「ふるさと発見」13回シリーズとか、テレビ映画共同制作番組シリーズ参加の、山陽本線電化前の状況を記録に残すべく企画した、「あと押し40年～国鉄瀬野機関区・勾配25/1000に挑む」F16構成番組とか、山陽本線の全線電化記念で山口放送にもネットした「山陽線物語り」とか、昭和42年代になってRCC開局15周年企画の年間52本シリーズの「瀬戸内海」とか、地元から歓迎され喜ばれ記録的な資料価値まで生んだ番組へのメッセージが、ホント、感謝状まで戴いたり、各地から山ほど届いて嬉

しかったものです。

「ふるさと発見」シリーズの第一回「芸北(一)」は民間放送での番組コンクールで奨励賞を受賞し、地元の芸北町に報告したら、我がことのように喜んで下さいました。雪深い芸北で神棚を祀り、その前に村人たちが集まって、もうもうたる湯気の中でウサギの餅つき式の杵で餅をつくの。神々しくも民族色豊かだし、人々の表情も白黒フィルムのなかで輝くが如く笑顔も明るいのです。そんな取材中の情景が沸き上がるようで嬉しさが込み上げてきたのが忘れられません。13本シリーズ全体が同様な構成で、最終回13回目の題名は「広島市」でした。

随分フィルム時代とビデオ時代に、地元対象の取材構成番組を作りましたが、モノクロ時代の絵には、えも言われぬ、一種独特の味わいが漂っていて好きです。ああいうものを作ったり、中継車を持って行って神楽を中継したりすると、地元から必ずお礼の手紙や、時にはお米がドサリと届くとか、中継に行った現場での夜は、トトレレの新米の炊き立てご飯が山盛り届くとか、地元の人々とスタッフとの心からの触れ合いが、堪らない喜びです。地元との反応なら語り尽くせぬほどです。

その代わりに、困ってしまった反応も山ほどあります。現地に中継車で乗り入れて、まことに素朴な自然がいっぱいの風景を中継しようとの気構えで乗り込んで行ったら、一夜のうちに村人たちによって、辺り一面、綺麗に草が刈り取られ、切り株だらけだった田圃も清掃されてしまっていたり、村祭りの雰囲気撮ろうと思ったら、村人全員が一張羅の晴れ着を着こんで現れたり、みんな着飾って化粧をして雑草も刈って辺り一面が金ピカになっているわけ(笑)。こちらの狙いと、地元の人々の思いとの思いもかけぬ段差。参ったと降参するしかありませんでしたねえ。

○石田 それは昭和何年代ぐらいの話なんですか。

○新井 テレビ放送が始まって間もなくの頃だから、昭和34年の春から、ほぼ2年ほどの期間でした。中継車が入って県内各地を巡っていた時期ですが、特にカラー中継車が入って来てから、その傾向が濃厚になったように感じます。

第8章 管理職への異動～定年退職

報道部長に就任

○新井 アメリカ、カナダの海外出張から帰ってきた翌年、昭和51年、「お前さん、8月から報道部長だ」。予想もしない人事発令でした。

少し話し始めていたところでしたが、発令前に凄まじい裏技地震が起こっていて、その挙句の発令だったのです。その前触れとなった出来事から、ことの真相を打ち明けることにしましょう。1975年、昭和50年の暮れから翌年春にかけてのこと。まさしく、いま初めて打ち明ける裏話です。

「こんど報道では、夕方にテレビの新しいワイドニュース番組をスタートさせる。『RCCニュース6』だ。ついてはお前さんに、そのメインキャスターを頼みたい」

ある日、枢要な報道セクションの幹部二人から、こんな打診がありました。しかし私は即座に、この申し出を断りました。「およそ、テレビのニュースキャスターなど、我が任に非ず」とね。

それからというもの、毎日のように、新番組のニュースキャスターを引き受けるよう、初めは優しく大人しい説得でしたが、私が、ガンとして断り続けるのに業を煮やしたのか、説得方法が次第にエスカレートし始め、ありとあらゆる手練手管の圧力が彼らから降り掛かって来ました。

しかし断固として私が断り続けたので、報道幹部は私を諦めたのか、ある日突然、猛烈だった説得攻勢がハタと止み、新番組のキャスターは東京の報道部から佐伯享副部長を呼び戻してスタート、と決まりました。かくて何事もなかったかの如く新年度から、予定通り新番組はスタートしました。

一件落着と、私を始め誰もが、そう信じておりました。

そこへ突然、バレーボールの時間差攻撃みたいに降って来たのが、私の報道部長への異動人事でした。しかも、「報道部長は、メインキャスターが海外取材などで不在中は、キャスターの代行を命ずる」という、絶対条件付きでの報道部長への異動発令です。さすがに、「なにい」と歯噛みしましたねえ。

そもそも何故、キャスターの話がラジオ制作部

長だった私に来たのかというと、思い当たる出来事がありました。

ある時期、私は調査部に副部長として籍を置いたことがあります。調査部とは、世論調査や、消費動向とか商品の売れ筋などを調査してCMに反映させたりする部門でした。私が転属になったとき、ちょうど総選挙が行われており、世論調査が行われていました。候補者の得票予想とか、投票行動とかを大学と共同で調査して、その結果を報道が選挙報道に反映させることになっていました。私は着任したばかりの新米調査部員でしたが、その番組に出演して調査結果をナマで報告してくれないか、との依頼が飛び込んで来たのです。

その調査自体は既に終わっていたので、経緯なんか全く知りません。調査結果の報告だけは聞いたけど、およそ調査など経験ゼロです。ただ私は幸いなことに、大学時代に統計学の講座だけは受講していました。仕方がないから、統計学の古い教科書を引っ張り出して、その教科書を基にして調査結果を分析して報告しようと考えた時に、ヒトヒネリ工夫したのです。

難し気な統計の一覧表を作ってテレビ画面で見せるだけでは面白くないし理解し難いだろうから、四角なサイコロを作って、その四面に統計表を美術担当に面白そうに描いて貰い、スタジオの中で私自身がサイコロをクルクル回転させて、次から次へ現れる統計表を見せながら解説する、という方法を採用したのです。

たいていなら原稿を書いて解説者が読むものなのですが、私は要点だけメモを書いておいて、あとは画面を見ながら適当にしゃべるしかないと考えたのです。なにせ素人調査官なのだから、内容は統計学の教科書にお任せして、あとはクソ度胸で誤魔化すしかありませんよね。それが当たったらしく、「あいつ、なかなかやるぜ」ということになったのでしょう。それが裏目に出たという訳です。

「RCCニュース6」のような、ローカルのニュースワイド番組のキャスターは、全国的な流れとして当時、局のアナウンサーではなく、報道記者を起用するケースが多いという傾向がありました。なぜしゃべる専門家のアナウンサーでは駄目なのか、私には理解できませんが、アナウンサー

にはない報道記者としての経験と視点。そして政治経済を含めた社会的な取材経験やら記者感覚などに期待しての起用なのでしょう。私は、そう見ておりました。

主題を戻します。実はニュースキャスターとは、先ず私には向いていない分野です。だから断りました。よろず何でも出来る万能人間を育てる、とRCCは主張していますが、そんな器用で融通無碍な人間は先ず居ないでしょう。育てる、と言っても一体、どうやって誰が育てるのでしょうか。人には向き不向きがあって当然です。私は関東育ちだから言葉で困ったことはなかったけど、もともと私は人見知りするタイプです。人前でしゃべるとか、人前で何かをするなどダメな人間なのです。逆療法だ、と考え、それを押し隠して、敢えて人前に入るような仕事に就けば、少しは引っ込み思案の性格が変わるのでは、というので、芝居や放送の世界に挑戦して来た私です。

いわんや報道の世界なんて、テレビの事件記者じゃないけど、他人様を押しつけてでも前に出ようとするなんて、タイプとして私には向いていない。器用でもなければ才能がある訳でもありません。そして何よりも報道経験が全くない。

それゆえに私は、演出の仕事を通して知ったのです。しゃべるといふことは、とてつもなく難しいと。私には妙なしゃべり癖があって、歯並びの悪さから来るのでしょうか、明瞭闊達なしゃべり方が出来ないという、自分で自分の欠点を良く知っております。だから私には向いていないと、お断りしたのです。どこまで私のことを調べたのか知りませんが、世間の記者キャスターの流れに乗ったように、門外漢の私に矛先が向いて来ましたが、とんでもない見込み違いです。だから何度も断りました。

しかし敵もさるもの～と言って良いか悪いか分かりませんが、新番組「RCCニュース6」のキャスター就任について、猛烈な説得攻勢にさらされることになった挙句、ある日、私は報道セクションの主要幹部2人に両側から取り囲まれ、密かに役員応接室に連れ込まれました。そこで二人から、ときに柔軟に、ときに脅迫を交え、強引な説得攻勢を受けました。次の日も、更に次の日も。さてさて何回、あの狭い応接室に呼び込まれての膝詰

め談判が続いたことでしょうか。最初から一貫して私の回答はノウでした。

私は、これまで番組演出の仕事をして来ました。ドラマほか多様な番組を作りました。その過程で多くの出演者に様々なお願いをして来ました。ときには失礼ながら業界用語で言う、「ダメ出し」に似たお願いも多かったはずです。その私がキャスターになったら、今度は逆に、他人様から常に監視され「ダメ出し」を受けるといふ、まさに引っ込みの付かない立場に追い込まれる訳です。

報道経験はゼロです。記者クラブなんて行ったことも見たことも無いし、そこで取材したことも当然ゼロ。政財界有名人の誰一人として知らないし、取材したことも皆無。事件事故の取材、事件事故の報道記事を書いたことなど何れも皆無。事件現場に立ったことも無い。もちろん報道部での勤務経験もゼロ。つまり私は、全く報道経験のないズブの素人です。社内的には当然ながら見聞きしてはいたけど、そんな程度じゃ部長として何の役にも立たない。番組の演出経験者としても、そんな人物をテレビ画面に出して、偉そうに報道キャスター様でござい、と視聴者へ語り掛けて貰えますか。とんでもない事です。私には出来ませんし、そんな資格も能力もありません。従ってキャスター就任はお断りします、と拒絶しました。

ところが相手は引き下がらず、粘った挙句に言ったのです。

「貴君の好きなスタッフを、貴君の好きなだけ集めて宜しい。予算も貴君が望むだけ与える。すべて貴君の好きなようにして宜しい。これでどうか」

驚きました。「人事も予算も、報道の俺の自由になるのだから、俺の言う事を聞け」と言っている訳です。驚き呆れました。社内に「泣く子と報道には勝てない」という名言が罷り通っていました。私は、その確かな現実には直面したのです。

当然ながら、おぞましい誘いに応ずることなく、交渉は決裂して終わりました。

そして新年度を迎えた昭和51年（1978年）3月29日、ローカルワイド番組「RCCニュース6」は、先に話した通り、懸案のキャスターには東京支社から佐伯享報道副部長が呼び戻されて着任し、番組はつつがなくスタートしていました。



136. テレビ選挙速報番組
(報道部長時代、昭和51年)

そこへ8月、私に「報道部長を命ずる」との人事異動発令が降って来たのです。人事発令には、如何に私が強気で張り合っても勝てません。拒絶したら、彼らのことだから直ちに会社からとして、絶対的な圧力が降りかかって来るだけでしょう。懸命の反抗も、とうとう此処まででした。僅かな友人たちも、私へ同じような助言をくれました。

遂に、ド素人だが初めて報道部長としての登壇だと腹を決めて着任しました。業務引継ぎ会議も引継ぎ文書もなく、報道部の内状など全く知らされないまま着任しました。

JNN (Japan News Network) と言う東京放送系列の報道協定下での報道活動が求められて居る、との報道状況くらいは理解しておりました。他系列との激烈な競争下にあり、それだけに頻繁なJNNデスク会議などが開催され、系列各局の報道能力をフル活用しての取材報道活動が求められていることも知っておりました。

JNN報道部長会議、デスク会議などが頻繁に開催されており、組織内には数社だけによる幹事社会議などもあるらしく、系列内の各社間にも微妙な競争意識があり、これは難しい世界だな、と感じたものですが、止む無し、マイペースでやるしかあるまいと心を決めました。

報道局長も新しく、毎日新聞出身で詩人記者として知られた河村盛明さんが就任しました。河村新報道局長と共に出席した新体制最初の報道デスク会議で、私は報道部長として発言しました。

「私は広島原爆の生き残り被爆者だ。広島人ではなく旅の人だけど、戦前から広島に住む入市被

爆者だ。我が社は広島に生まれた初の民放として原爆報道を続けて来たが、被爆者の苦しみを訴え、その救済を訴え、被爆者の存在を世界へ訴えて来た。だが時代は変わって来た。核兵器は世界に拡散し始めた。私たち広島の放送局として、いまや広島でも長崎でもなく、人類と地球を核の脅威から救うべくキャンペーンを張るべき時だ。その責任を自覚し、世界へと訴える努力を挙げよう。人類と地球の危機だ。ヒトゴト感覚を払拭しよう。それが我々の責任だ」

沈黙のみが支配していました。全く反応ナシ。残念というより、私は絶望していました。主要なデスクの誰一人として発言する者なく、誰一人として発言を終えた私に目を向ける者なく、初めてのデスク会議の場は、奇妙に冷やかな雰囲気です。静まり返っておりました。

キャスター代行業も、サブの武藤まき子アナに支えられながら、デスクから上がって来た放送原稿すべてに手を入れながら、何とかしゃべり続けました。

新局長と共にRCC初の「お天気カメラ～スカイアイ号」も設置しました。

原爆特別番組「ドキュメント8・6」も完成させました。

ルーチンの報道番組も、守備範囲であるスポーツも、広島カープとの交渉も、解説者との面談も何とか為し遂げました。

常日頃から襲って来る組合からの人員と機材の充足要求に対しては、「自由に、人も金も欲しいがままに…」と聞いた往時の誇らしげな口調とは裏腹に、厳しさを増すばかりの報道予算でした。



137. ニュースキャスターを務める私
(昭和51年)

そこへ、キャンプ取材中のカメラマンが急死するという事故が発生したり、就任直後に東京へ出張し、何処かのホールを借り切ってテレビカメラを入れ、広島出身の政界人に単独インタビューする任務が突発したり、ネットワーク事務局とのライン対応でデスクと揉めて見たり、気象協会や道路交通情報センターなど公共情報を提供する機関から、公共情報を有料で購入することが納得できぬ私がクレームを付けたり値切ったり、組合との難癖付け合う交渉で苛立ったりと、苦難続きの報道部時代でありました。

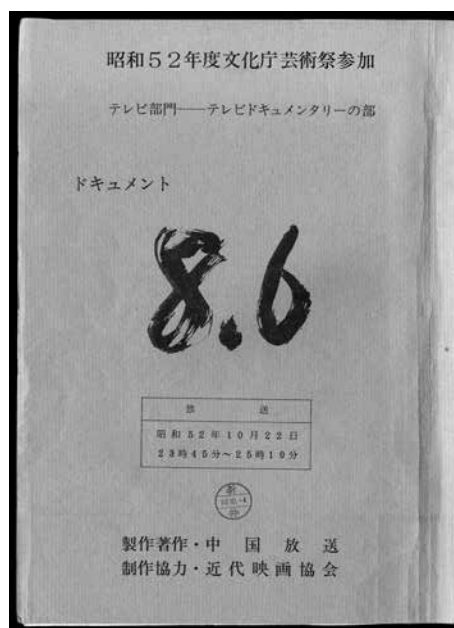
昭和52年4月21日、折から家内が右乳ガンの手術を受けて広大病院に入院し、毎日のように病室を訪ねておりました。右の乳房を全部摘出しました。手術の技術は昔ながらにお粗末な時代。手術痕は漫画で描かれているように派手派手しく、可哀そうでした。家庭もそんな状態ですし、私自身も疲れ果てておりました。家内を見舞うべく大病院へ向かうたびに看護婦さんや患者さんが私を見つけて、「あらっ、ニュースに出ている人だ」と、病室の窓や出入り口などで騒がれるのが、やたら気恥ずかしかったものです。

3年後、私は遂に報道をギブアップした直後、今度はラジオ業務部へ移りましたが、それこそ全く水が合わず一年でクビ。そして経理へと移り変わって行くのです。

新藤兼人監督との共同企画～「ドキュメント8・6」～

○新井 新藤兼人監督がテレビ・ドキュメンタリー映画として「ドキュメント8・6」という作品を、被爆33年目の昭和52年の8月、原爆特別番組として完成させました。この作品は、私が報道部長を命じられる以前から既に企画が立てられ、一部は既に着手されておりました。制作方法もRCC報道部と新藤兼人監督を中心とする近代映画協会との、実質上の共同制作として完成させるとの契約が締結されておりました。私は、その後を引き継いで、作品を完成させる責任を負うことになったものです。以下に新任報道部長として、当時の「社報RCC」に書いた私の報告記事を引用します。

新藤兼人監督による冒頭の言葉が、作品のすべてを語り尽くしています。



138. 「ドキュメント8・6」台本

* * *

8月6日は必ずくる。人の生きるかぎり、未来永劫この日が消えることはあるまい。

この川の底には、あの日、恨みをのんで死んだ人の骨がうずまっている。この地の底を掘り返せば、そこには無数の骨があるのだ。原爆を落とされたものは沈黙しているけれども、それは声を忘れたわけではない。

人間に最初に原爆を落としたものは誰だ。落としたものは誰だ。

【新藤兼人 ドキュメント「8・6」】

* * *

昭和52年、あの日から33回目の8月6日を迎えました。被爆33回忌です。ラジオ中国として広島に誕生したRCCも、はや開局25周年にあたります。テレビ放送を始めてからでも18年目。ヒロシマに初めて産まれた民放として、開局以来、音と映像で執拗なまでに追いつけた原爆報道の蓄積は、重ねられた長い歳月とともに、まさしく「歴史的なヒロシマの記録」として貴重な証言の山を築いています。被爆33回忌を迎えた今年こそRCCの、これら膨大な記録を中心に「原爆報道の総集編」と言うべき作品を製作、放送すべきだ……。

広島に生まれ、昭和27年の「原爆の子」以来、深く原水爆にかかわってきた新藤兼人監督との間で「ドキュメント8・6」の企画が確定したのは、昭和50年の春のことでした。

昭和51年の8月6日、平和記念式典の会場は、あの日と同じ暑い夏の熱気が溢れていました。三木総理（当時）はじめ政界要人に続いて慰霊碑に花束を捧げる被爆者の列に向けられたカメラの放列の中に、独特の鋭いまなざしを注ぐ新藤監督の姿があります。式典会場のほか、原爆病院、原爆養護ホーム、燈籠流しなど、新藤監督と近代映画協会のスタッフに加えて、RCCカメラマンなどによる「ドキュメント8・6制作チーム」の取材がスタートしたのです。

RCCの保存する膨大な量の記録フィルムを抜き出す作業も、その日から始動していました。白黒テレビ時代からのものも含め、全ての資料ファイルはそれまでに完成しており、その一卷一卷を新藤氏はすべて試写することを要求。その中から抜き出すべきカットを決定するわけです。近代映画協会とRCCスタッフによる「制作チーム」の作業は、新しく撮影したフィルムの現像、編集に加えて、過去の記録フィルム全巻の試写と再プリント。そして抜き出した必要な部分のディユープネガ作成作業に追いまわられることになりました。

あっという間に夏は過ぎ、秋が訪れました。フィルムの準備作業に並行して全編の構成と、広島ロケの計画が討議され続け、全体構想の大綱が決定されたときは冬になっていました。そのときには、抜き出された記録フィルム類の山が、編集室を埋め尽そうとしていました。

年が明け昭和52年、被爆33年目が訪れます。春には広島ロケが予定されています。それまでに少なくとも、抜き出し済みの記録フィルム mountain を選別し、ある程度の分類・編集を完了せねば、広島ロケの方向とフィルム量が決定できない。広島(RCC)と東京(近代映画協会)間の連絡が再び激しくなり、4月にアメリカ取材を両者合同チームで実施する方針が決まっていた。この6人の取材チームによる執念の映像とレポートが、この番組の中心部とラストを構成することになったのです。

3月19日、原爆投下機B29「エノラゲイ」の機長だったポール・チベッツ氏に、RCCから取材依頼の国際電話を入れ、いとも簡単に「OK、なんでも話す、待っている」との回答を得ました。アメリカ取材はRCC2名、新藤監督以下4名、

合計6名の合同取材班での実施と決まり、渡航手続きも一切完了して、先発のRCCチームは日本を出発しました。

4月2日、突然、緊急事態が発生。報道部長の私を指名して、一本の電話がかかってきたのです。流暢な日本語で、「こちらはアメリカ大使館の書記官である。貴社からの出国書類によれば、我が国の英雄であるポール・チベッツ氏に原爆投下の責任を追及する目的で面会を要求し、彼のテレビ取材を目的として渡米したいとか。米国の国務省は、彼との面会・取材は迷惑であり許容できないので取材を中止して貰いたい、と言っている。即刻、アメリカへの取材渡航を中止されたい」。

○石田 さすがアメリカですね。

○新井 即答しました。当然「ノウ」です。とんでもない、既に取材班の先発隊は、アメリカに向かって羽田空港を飛び立ち入国しているし、本隊も間もなく、5月5日には、既に入国して多くの項目を取材中の先発隊と合流すべく渡米の予定です。それに、英雄を取材されるのは米国として迷惑だから中止せよ、とは何たる言いがかりか。私をはじめ、報道部内は猛烈な怒りで燃え上がりました。

先発取材班からのニュースによれば、在米被爆者検診が正式に決定したほか、以前にも実施されて問題化していた原爆投下ショーが、3月31日の電話確認で判明した通り、4月3日、アメリカはルイジアナ州のラファイエットで再び開催されるらしい。取材OKと快諾していたチベッツ氏が、急に、取材班に対して話は出来ないと言っているらしいが、この辺りが遠因かも、と類推した次第です。先発の取材班、渡辺茂美、岡田吉蔵のコンビ2人は、本社からの緊急指令により、取材中のルイジアナからチベッツ本人に電話を入れ、岡田君の岩国米軍基地仕込みのGI英会話の威力で、インタビューは別としても、取材チームと会う、との約束を確認しました。

こうした激しい電話連絡が海を越え山を越え、広島・東京・アメリカ間を飛び交ったのです。結論はすぐに出ました。渡辺情報に基づき、本隊の新藤監督チームも、とにかく予定どおり出発し、先発隊と合流のうへアメリカでの取材は決行する、と！

新藤監督以下の近代映画協会の取材チームもアメリカに出国し、先発していた渡辺茂美君たちと、4月5日、現地で無事に合流して両チームの同一行動が開始されました。

4月14日、合同取材チームはアメリカ、コロロンバス市に到着しました。一行は休む間もなくホテルからチベッツ本人に電話を入れ、到着を知らせるとともに、会見するとの約束を確認すべく根気良い交渉の結果、翌日の15日、午前10時から30分間の会見を再度確約させたのです。

ところが、その夜のこと。公安の警察官が二人、突然、一行の宿泊しているホテルに現れました。チベッツ本人から連絡があったのだが、インタビューを受けた場合、取材チームからお礼に謝品を手渡す、とのことだが、その「謝品」なる物は何か、その中身を確認するよう依頼されたのだと言うのです。チベッツ氏は、爆弾か毒薬が出てくる、とでも恐れ危ぶんだのでしょうか。警官は、謝品とは単なる日本名物の記念品だと確認したのち、「騒がせて済まなかった」と苦笑いを残して、深夜のホテルから立ち去って行きました。

4月15日の朝、チベッツ事務所から電話があり、「会見は10分だけにしてくれ、ホテルに出向く」と、またも予定変更を通告してきました。そして10時、確かに本人がホテルに現れました。

ロビーで、立ったままの5分間でした。彼は何かに怯えたが如く、終始、「すまない」を繰り返すばかりで、写真も録音も拒否しました。その彼の周囲には4人の屈強な男たちが、彼を囲むように立ちはだかっています。「取材はOK。何でも話すよ」との、当初の約束を守る姿勢は、全く消え去っていました。

彼が去った直後、アメリカNBC系列の「チャンネル4」という民間テレビ局の取材を受けました。驚くほどの美女リポーター女史。私たち、日本からはるばるやって来た取材チームは、彼女からの質問攻めにあいました。Ch4局のカメラマン氏も、執拗に、インタビューに応じる私たちを狙ってカメラを回していました。

夕方6時の放送で、絶世の美女リポーターはテレビで語りました。

「原爆投下再現ショーが政治問題となり、ようやくその余波も収まったところだから再び波風を

起こしたくない、との考えです。国務省の諒解があれば面接に応じるつもりだったのでしょうが、国務省としては、この問題に巻き込まれないようにとの意見なので会えない、とインタビュー拒否の理由をチベッツ氏は述べています」

この番組を新藤チームは、そっくりカメラに収めていました。

こののち取材班はワシントンへ飛びました。国務省筋には会えませんでした。もとの原子力委員会であるエネルギー研究開発庁の、衛生局長ジェームズ・リーバーマン氏に会うことができました。彼は放影研のアメリカ側責任者です。彼はインタビューに答えて、在米被爆者の健康相談業務は、二回目以降も続ける意向を明らかにしました。

ワシントンでは、昭和50年、ヒロシマを訪れてチベッツの原爆投下ショーを詫びた上院議員のマイク・グラベル氏にも会いました。彼には取材班から、核廃絶についてカーター大統領（当時）に、ヒロシマのマスコミとしてインタビューを申し込む文書を託しました。しかし返事は、まだ届いていません。

この、チベッツ取材時の状況は、チーフだった渡辺茂美君が「社報RCC」に掲載したリポートを参考にさせて貰ったことを付言しておきます。

アメリカ取材から帰国した取材班は、休む暇もなく広島ロケを、およそ半月にわたって実施したのち直ちにテニアン島取材に向かい、取材がすべて終わったのは5月中旬になっていました。

それからの一か月間。新藤監督と近代映画協会のスタッフを中心とした編集・録音作業が連続し、のべ8時間にも及ぶフィルムとの闘いが最終段階に入ったとき、さすがの新藤監督も「疲れたよ」と深い吐息をついたそうです。

すべてが完了し、現像所へ完成プリントを発注したのは6月末。脚本・監督・インタビューという三役を努めた新藤監督が見せた、初めての素颜でした。

6月30日、初号が完成し、スタッフ全員による試写会が東京で開かれました。「原爆の子」「第五福竜丸」に続く新藤監督の原爆三部作完成の日でした。そして新藤氏にとって初めてのテレビ・ドキュメンタリー映画完成の日でもありました。

テレビ放送は、8月6日の中国放送を手始めに、東京放送はじめ全国19の民間放送局で順次、放送されました。

それから少しして、また1本、私に電話が掛かって来ました。「こちらは日本ジャーナリスト協会です。このたび新藤監督とRCCとの共同制作で完成された『ドキュメント8・6』に対して、ジャーナリスト賞を贈呈したいと考えておりますが、受け取って戴けますでしょうか」。どうやら賞を受けたあとで、何やら迷惑を被った向きがあるので事前に確認を、とのお伺い電話のようでした。

○石田 そうなんですか。

○新井 つまり日本ジャーナリスト賞というのは、左翼的と思われるのかな。そういう心配があったので、わざわざ念を押して聞いてきたんです。私は即座に、「喜んでお受けします」とお答え致しました。後日、東京での授賞式には新藤監督のほか、RCC側からは東京支社の誰かが出席したと聞きました。ほかに芸術祭賞としては、奨励賞を受賞しております。

映画「原爆の子」

○新井 もうひとつ、新藤監督と言えば、私は特に映画「原爆の子」とは浅からぬご縁をいただいております。時代が逆行するけど、この話題に触れさせてください。

広島大学の「演劇研究会」のことは様々なエピソードと共にお話ししましたが、その学生演劇はなやかなりし時代、映画のエキストラ応援に行かないか、との誘いがかかったのです。面白そうだなと、お芝居仲間数人と出掛けて行った先が、いまの平和公園一带。瓦礫の残る原子砂漠そのままの風景。バラックの小屋が建てられており、そこで映画の撮影が行われていました。かすかに残る記憶では、荒れ果てた情景の中で土煙を立てて、うす汚れた少年が必死に走っている場面でした。映画は「原爆の子」。監督は新藤兼人さんでした。

出演しました。もちろんエキストラとして、です。鉄骨製の萬代橋から夏の真っ盛り、ドボンと禪姿の少年たちの一群が川に飛び込んで行く傍らを、先生役の乙羽信子さんが通り過ぎて行く場面。助監督氏から私に声がかかったのです。

学生服姿で控えていた私へ、「氷」の小旗をな

びかせ、自転車の荷台にアイスクーキの小箱を積んで売り歩く、麦わら帽姿のアイスクャンデー屋として橋の上に立っている、というのです。衣裳などは撮影隊が用意するから、すぐ着替えろ、と忙しい指示でした。生まれて初めて映画のエキストラ出演のチャンス到来の瞬間でした。ただ立っているだけなら難しいことなんかなかろう、と私は気楽なものでした。

撮影が始まりました。橋の真ん中あたりに私は、自転車を止めて、小旗を吹く風になびかせて立っていました。と、その立っている私の真ん前を、すぐ横を、なんとも美しい乙羽さんが日傘を差しながら通って行くではありませんか。カメラは彼女が動くままに追いかけています。つまり、そのカメラ映像の中で私は、乙羽さんの通り過ぎる真横で写り込んでしまうはずなのです。

それに気づいてからは、急に上がってしまいました。どんな演技をすれば良いか、なんて考え始めてしまったからです。通過する主役の向こう側に見える点景人物のアイスクャンデー屋に、なんの演技など要るものか、などと考えているとき、またまた声がかかったのです。

「そのアイスクャンデー屋、乙羽さんの方ばかり見るんじゃない」

○一同 ははは（笑）。

○新井 叱られました。なんと新藤監督ご本人からでした。大監督からの初のダメ出しを受けるなんて、物凄く名誉な瞬間でした。でも心中では、例えアイスクャンデー屋でも、眼の前を絶世の美人がパラソル差して通ったら、当然ながら無視できないだろうに、と少しムッとしておりました。

私たち学生グループは、橋の上だけでなく広島港、つまり宇品港でも島通いの連絡船の船員に化けました。これは大勢の仲間と一緒に出演なので、本当のところ気楽で、カッコ良く、船員帽を頭に乘せた船乗り姿を演じようと競い合い、ロープを引っ張って楽しかった、と記憶しています。

撮影隊が泊まり込んだ宿屋のお嬢さんが、何と後年、我が級友夫人となって私の前に現れたときは仰天しましたがねえ。

合宿していた殿山泰司さん。船員に扮しても存在感がありましたねえ。それと滝沢修さんが演ずる被爆老人。広島城裏の廃墟を利用して作った被

爆廢屋での少年との演技。夜間撮影だったけど、覗きに行きましたが凄かったです。間近で名優の名演技を次々に、この目で見る事が出来ました。学友たち多数も、通行人や被爆者に扮して画面に姿を留めました。

なかには被爆の地獄絵を描いたドーム内での撮影で、周囲にテントを張り巡らせて目隠して撮影した場面～被爆した群衆の中で、ひととき丰满な乳房を血の筋が一本、スーッと流れ落ちるクローズアップ。あのシーンは、我が劇研学友の思い切った演技披露だったのだろうと記憶しています。

今の原爆資料館（広島平和記念資料館）の前が、まだほとんど瓦礫ゴロゴロの荒地で、資料館の例のピロティ建築も建ったばかりで、前の空き地は原子砂漠と呼ばれた砂だらけの広場。そこで、お母さんが病気だということで少年が疾走して家へ向かう。そんな場面で、街の人々ということで撮影に立ち会いました。そんな話を新藤さんにしたら、少しだけ覚えていらっしゃいました。「色々な人たちに応援して貰いましたからね」と。（「原爆の子」の記念誌を出して）その他大勢の出演だから自分の名前は載っていないけど。そういう学生時代に始まった深いご縁が、新藤監督との間にありました。

○石田 これはエキストラとして出演された後に、すぐ貰ったものなんですか。映画出演に協力した後に記念品で貰ったんですか。

○新井 ロケ終了後に、協力した皆さんへ「ありがとう」というのでお礼にくださったアルバムで

す。だから、ギャラを貰った記憶はない。これを貰って「有難う」で終わったと思います。

新藤監督とは更なるご縁があって、RCCを定年退職したあとも私は、「新藤監督を囲む記念会」やら、お亡くなりになったあとも「新藤監督を偲ぶ会」などに招かれて出席しました。例の米国取材チームのチーフだった渡辺茂美君は新藤先生と気が合ったと見えて、ずっとお世話を続けていましたからね。囲む会へお招きした時などは、渡辺君が先生の車椅子を押していたな。

○石田 この記念アルバムは、お宝鑑定団に出したら（笑）。

○新井 私の「お宝」だ（笑）。（「原爆の子」の記念誌を見ながら）なにしろ、この写真にあるように、あのころは原爆ドーム内に立ち入っても良かったのだから。

この場面のスナップには、残念ながら私は写っていないね（笑）。子どもたちの禪姿なんて、今の人が見たらびっくりするだろうな。

○石田 そうですね。

○新井 この人たちの中に、つい先日、亡くなったばかりの被爆者が一人います。松原美代子さん。このロケにも参加していたな。女学院の教会でのシーンにもね。

○石田 新藤さんとは、先ず「原爆の子」に参加してご縁が生まれて、その後「ドキュメント86」に至るまで、どういう経緯があったんですか。「ドキュメント86」でお願いする時に、いきなりお願いしたんですか。

○新井 いや、それは私の着任前に企画が決まっていた、前報道部長が新藤さんの所へお願いに行ったはずです。RCCとしては新藤監督の近代映画協会に制作協力を依頼した、という形です。私は新しく報道部長に着任後、赤坂の近代映画協会に何回か打ち合わせに出張しましたが、最初の基本交渉は前任者の豊島彰報道部長です。

あの台本の冒頭に、「原爆を落としたのは誰か」というのが、新藤さんの言葉として出て来ます。既にご紹介しましたが、これこそ新藤監督の訴えたい主題です。つまり新藤さんの態度は、原爆を最初に落とした責任を、未来永劫、いつまでも追及し続けて止まぬ、との叫びです。

ここまでが私のテレビ時代でした。



139. 「原爆の子」完成記念アルバム
（昭和27年）

経理部長への異動

○新井 報道着任から3年目にして、私は報道部長として適任に非ず、自らギブアップした、という形で報道部を去り、そのあと経理部長に異動しました。報道部着任時と類似の状況で、全く簿記・会計の原理も分からない素人が、ポンと突然、経理部長として経理部のトップに就いたのだから、経理部全員が戸惑ったと思います。

当の私に至っては、全くの別会社へ異動を命じられたが如く、呆然自失のほかありませんでした。経理部長の上には経理局長として山脇義明さんという、温厚にして人物高潔な方が座って居られました。実は、この方は、かつての日本体操チームの床や鉄棒の名選手で、奥さんもまた卓球の名選手だったとか。偶然ながら素敵な上司に恵まれた、とは思いましたが、なにせ私自身が全くの素人。

だから正直言って私は、山脇さんから実地に教育を受けたことにより経理の現場を生き抜くことが出来た、と今なお恩義を感じております。

部下の全員が、複雑で煩雑な経理現場の実務経験者としてベテランの専門家揃い。私の直属の部下である副部長の小河宏隆君に至っては、毎日の精算から決算業務まで、全ての経理実務を手際よく取り仕切ってくれておりました。そこへ、複式簿記のなんたるや、すら知らないという驚くべき経理部長が着任したのだから、これはRCC経理部としても一大事だったと思います。

ひとり相談できる先輩が居りました。既に役員となっていた、前経理局長の寺本典夫さん（36回）という超ベテラン経理マン氏。それまでも、先輩・後輩だから互いにズケズケ言い合ってきた間柄でした。

制作現場には予算制があり、番組ごとの決算が必要です。そこへ寺本経理局長から、「直接費三つ折り伝票」と言う、全く新しい決算伝票制度を導入して来たのです。番組経費には人件費や設備費などの間接的経費と、出張費や謝礼金などの直接的経費とが混在しています。

経理としては現今、如何なる直接費が如何様に使用されており、その直接費総計では如何ほどの規模となっているかを把握したいので実施する新伝票制度だ、と言う。「馬鹿言うな、こんな、現場にだけ余分な負担を要求するような伝票制度

を、独断で決定実施するとは承知できない。直ちに撤回せよ」と大喧嘩したばかりだったのです。

その喧嘩相手の寺本氏へ、今般、経理部長を命じられたが全くの素人だ、どうしたら良いか、率直に尋ねました。

驚くべき答えが返ってきたのです。

「お前さんの番組企画書と精算書の早さと正確さが、以前から社内で評判になっていた。お前さんは政経学部経済専攻だったはず。簿記会計の知識などは、経済学の基礎知識を持つお前さんなら、勉強すればすぐさま身に付く。発令を応諾せよ」。すぐさまYMC Aの夜学に入学し、簿記・会計の講座を毎夜、退社後に受講して身に付けました。

なぜ私を経理に当てたのかと改めて質問したとき、答えが二つ返って来たのです。一つは、今の「お前さんは政経学部経済学科の出身だったな」。

もう一つの答えは、「番組を作るには必ず企画書を書き、予算を計上して、終わったら直ちに精算書を書いて収支決算を確認し、番組が赤字になったか黒字になったかを判定する。お前さんは一回も赤字を出したことがない。だからお前さんを経理に回す」と言うのです。

制作現場はだらしない、報道もだらしない。にもかかわらず新井だけは、やることなすこと、びたっとやる。予算書もびつり出すが、決算書も予算書の見込みどおりにこなして赤字を出したことが一回もない。それが社内でも有名になっていたらしく、「お前、経理に行け」となったらしい。

当の本人は電話番号を見るのも嫌なほど数字が嫌いでしたが、業務命令だというので毎晩、夜学で学びました。ベテラン経理マンに劣らぬ経理部長を目指して、ね。

夜学には2年間通い、経理には6年おりました。2年目ぐらいからはベテランの経理部員たちと対等にモノが言えるようになりましたし、複式簿記で決算書を整えることもできるようになりました。

株式会社としては、必ず有価証券報告書などの報告書を国税局に提出する義務があるのです。この1年間、どのような営業活動を行って来たかという決算報告書のようなものですが、それは完璧でなくてはならない。そして、会社としての営業・経理見通しまで書かなくてはならないのです。



140. 防犯シャッター付き窓際席の私
(経理部長時代、昭和57年)

それに至るまで必ず年に何回か、抜き打ちで広島国税局から直接に監査が入るのです。実査に来るのです。向こうからは、たいてい2人か3人の超ベテランが来ます。対応するこちら側も超ベテランが対応をしなければならない。税務上の難しいポイントを突いて来る訳ですから、完璧な質問に対しては、それを上回るほどに完璧な答えを出さなければ、また完璧な証拠を見せなければ監査は通らない。

ということは、最終的な決算報告書も書かなければならない、ということで、最終的には、なんとか、そこまでのレベルに達することができました。2年目ぐらいからは丁々発止で、専門の国税局調査官と税務用語を駆使しながら、対等に調査に応じることができるようになり、我ながら驚いたことがありました。民放他社の経理担当者との交流勉強会に出席して、「RCCさんは有資格者を抱えているのですか」との質問をうけるまでになっておりました。でも今は、全く必要ないので全部忘れていますが(笑)。

よく聞くと各民放局も全部そうらしいのですが、経理部には有資格者と言って、税理士・会計士という国家資格を持った人が必ず1人か2人居るのだそうです。驚きましたねえ。

「あなたの局には有資格者が居ますか」と問われたら、RCCは居ない。ゼロだと答えねばならないのです。山脇経理局長ですら資格は持って居ない。にもかかわらず経理部員たちは、名だたる国税局調査官と対等に渡り合って国税局を説得するまでの能力を持って居る訳です。

だから私は、現業の部員たちを凌ぐ位の経理能

力を持たねばならない。これはもう、広島弁で言うところの「必死もんとん」でした。

会社としても、専門の税理士2人と契約していて、きっちり定期的な監査を受けています。これも同じように実査と言って、受け取った領収書を束ねたものをすべて監査室まで持って行き、ぜんぶを端から端まで見て貰ったうえで、疑問点があればチェックして貰う訳です。それもやはり、最終的には部長が調査に対応しなくてはならない。つまりそういう意味では結構、経理部長というのは忙しいのだ、ということも分かりましたし、これもまた全国的な組織があって、民間放送の中四国地方の税務経理部長会議とか、民間放送連盟の経理部長会議などがあり、年に一回ずつ集まらなくてはいけないとか、出て行かなくてはならない訳です。その会議で出て来るのは、私の最も嫌いな専門用語ばかりです。数字の話ばかりです。私は実は、そういうのが大嫌いでしたが、仕方がない、分からないながら出席しておりました。

経理部門出身者には守秘義務があるので、大まかな話しか出来ませんが、一回だけRCCは赤字になりかけたことがあります。山脇経理局長と相談して何とか赤字にはならなかったけれども、ギリギリいっぱい、決算を終えたことがありましたね。それ以外は割に楽な決算を過ごしていました。つまりRCCとしてのもうけは、そこそこ、あったということです。そして、はっきり申し上げますが、裏金など、全く存在しておりません。

私が経理部長の辞令を受けた途端、銀行や証券会社から何人もの担当者たちが、手に手に土産袋を下げて私の席へ挨拶に来ました。お土産は全部、お断りして持ち帰って貰いました。ということは、それまでの人は、きっと貰っていたのだろうと思っただけですがね(笑)。

○石田 それは、やはり営業に来られるんですか、株を買ってくれとか。

○新井 向こうは何らか魂胆があるから土産と称して何かを持って来るんです。RCCも結構、資産運用として各社の株式とかを所持しております。決算報告書とか財務諸表に書いてあります。それを如何に運用するか、などということも、また別に起こって来る訳ですよ。そういう点で彼らには旨味があるんでしょうが、新任部長が席につ



141. RCC 新館タワー夜景

いたトタン、ワットばかりに銀行と証券会社が挨拶に来るといふ事態は異様です。だから経理に6年間いましたが、社内に向けては相当に文句をつけたし、文句も言われましたが、外に向かつては恥ずべきこと皆無だったと自己満足しております。

そして会社の利益という点でも、まずまずの利益を上げることが出来ました。つまり、経費節約という意味で、経費と資本は正に紙一重なんですよね。これを経費として落とすか、資産計上するかという判断も難しい。大きな機械を買い込むでしょう。この機械は損金として落とせるか、ないしは減価償却の対象となる資産の中に入るのかを判断するにはヒトツの手引きがあるんですが、その境目はものすごく難しい。

こんなことは、実地の経験で身に付けるしかない。実は私が経理部長のときに、いまRCC本社別館の屋上に高い鉄塔が立っていますが、あの鉄塔と別館を建築するという大仕事が舞い込んで来たのです。一定以上の高さの鉄塔を建てる時には、赤白の色を如何様に塗らなくてはならないか、航空法の問題はないか、とか様々な問題が付きまとうのです。税務上の問題も山積している。それらすべてをいちいち判断するのに苦労しましたね。あの苦労は今でも忘れません。そんな苦労も、やってみて初めて、こういう世界もあるんだと知りましたね。

もう使わなくなった、尾道の向島にある支局の建物を売却したことがあるし、社宅の評価替えなどもあります。それも、いちいち出張して行きま

した。支社にもそれぞれ経理部門の担当者が居るのだから、そこで何とか処理できないものかと思っただけが多々ありました。その支社の経理部門を監査するのが、これまた本社経理部長の仕事でもあるわけです。だから東京にも大阪にも、その監査と言う目的で出張しました。私と局長と交代で行くのですが、結構忙しかったと記憶しています。着任して3年目くらいからだったかな、下素人経理部長が何とか無事に決算も整え、株主総会用の決算書も、国税局へ提出する有価証券報告書も、部員たちの応援を得ながらですが、大きなミスなく作成し提出することが出来るようになっていました。6年間、なんとか苦闘をやり遂げ経理局次長で役職定年を迎えました。

この経理部在任中に初めて右腎臓ガンを患い、昭和59年、1984年12月24日のクリスマスイブに、広島記念病院で摘出手術を受けました。経理で強いストレスに曝されたためだと、先輩の寺本典夫さんが嘆き、ガンを発見してくれた級友であり同病院の内科部長だった中村玄医師は、「早期発見で良かった」と言ってくれました。思えば、これが私とガンとの、6回にわたる壮絶な戦いの始まりだった訳です。被爆時に放射線を浴びたせいだ、などと、全く当時は考えても居りませんでした。

【病歴の詳細は、第11章参照】

定年退職後の仕事

○新井 そこで、昭和62年11月に役職定年ということになりました。役職定年は公務員の世界にもありますが、肩書きが外れる、身分だけは残るといふもの。肩書きが外れて経理部長ではなくなるけれども、部長待遇みたいな参事とか補佐とか主事とかという名前が付くなど、そんな具合で当時、私は既に経理局次長になっていましたから、局次長待遇ということで現場から外れます。そのとき、会社から直に声が掛かってきました。報道に戻って論説委員をやらないかとね。

○石田 よほど報道に気に入られていたんですね。新井さんは報道を嫌っていますが、向こうは新井さんが欲しかったんですね。

○新井 そう、当時の社長は私を買って下さっていたのでしょね。役職定年の時期の社長は金井宏一郎さんといって、RCC生え抜きの報道マン

だった人物です。彼は中国新聞の金井利博記者のご子息ですが、私と彼とは結びつきが長く、私が経理部長、彼が監査役だったという時代があるのです。二人そろって、RCCの関係会社3社の監査役も長く務めていたからでしょう。だから金井社長から直接に声が掛かって来て、「報道の解説委員として残ってくれませんか」と言われました。しかし私は、「折角の有難いお言葉だけれど、お断りします。もう、これ以上の宮仕えはこりごりだ」と答えました(笑)。「これからは、自分の好きな道を行かせてください」と失礼ながら、せっかく声をかけてくれた金井社長には、我儘を通してしまいました。

私は本筋としては放送屋だけれども、学生演劇時代からRCC放送劇団員時代などを通して、お芝居を経験したことによって、私の中身は物凄くきたえられたと思っています。勉強させて貰ったと思っています。舞台劇を演出したことがあるけれど、やはり自分は本質的には放送人間だな、と思い定めております。

どれほど努力しても、舞台感覚そのものが違うのです。完璧な舞台演出は無理でした。ところが劇団の岩崎徹さんの方は明らかに、お芝居の世界での名優であり名演出家でした。元文学座員の岩崎徹さんの指導を受けながら私が舞台演出をやったのは、合わせて3本ぐらい、ありますけれどね。



142. 「夜の来訪者」公演チラシ
(昭和44年)

一番大きな作品は「夜の来訪者」という、アメリカの作品を翻案した飯沢匡の作品です。東野英治郎の俳優座が上演したのが有名で、私も舞台を見ております。

それから「わが町 (Our Town)」。これも翻訳劇ですが舞台装置は一切なし。椅子とテーブルだけが二つ、舞台の上下に置いてあって、2軒の家を象徴する。あとは全部、これがあるつもり、あれもあるつもり、ビールも飲むつもり、ご飯も食べるつもりという、つもりで演ずるというお芝居(笑)。これも何回か上演しましたね。学生時代に、自分も出演したことのある作品です。

それから「友達」という安部公房の現代風演劇も上演しました。木下順二の「夕鶴」も上演しました。

そういうことで、RCC現役の時代から劇団のお手伝いをさせて貰っていたので、現役を引いた後は、もう、そちらの方へのめり込んだと同時に、私は会社を辞めたあとも、やりたいこと、好きなことがいっぱいあったのです。お芝居を見ることも好きだけど、音楽も、バレエも、オペラもみんな好きだし、ジャズもクラシックも好きなのです。

私の娘たち、孫たちは全員、なんらかの音楽をやっております。自分が出来なかったから長女にはバイオリンを習わせました。孫たちは3人ともヤマハの音楽コースを出たので、ピアノとエレクトーンが上手です。

次女の真由美は、コーラスの伴奏が出来るくらいのピアノ演奏の腕を持っていましたし、附属高校の管弦楽班ではオーボエを吹いていました。彼女が本気になったのはコンピュータでした。だか



143. 家族記念写真
(昭和59年1月1日)

ら大学は、広島大学の理学部数学科。私の最も苦手とする数学が、彼女の最も得意で好きな分野でした。夭折して本当に残念です。

私は自己流の目茶苦茶流なのですが、まともに演奏できるのは、古代人の分野であるハーモニカだな。単音ハーモニカが好きです。クロマチックは苦手だけど。ここにも何本か納めてありますが、西部劇風の単音ハーモニカの演奏が得意技ですね。異色ですが本調子の「音戸の舟歌」も歌います。

登山と言うと大袈裟ですが、私は軽い山登りも好きで、広島市周辺の山はほとんど若い時代に登っています。国内でも海外でも、区別なく旅行が好きです。一人旅も苦になりません。列車でもバスでも、走っている最中に居眠りなんて一切出来ない。キョロキョロ常に窓から景色を見まわしています。グループで旅しているときなどは、絶対に居眠りをしないので珍しがられますね、私は。そういう意味で、色々なことに興味を持つことが出来ました。だから定年退職後、「私は何もやることがない」と悩む人の居ることが不思議でしたね。

テレビ・ラジオの制作部門、報道、そして経理6年で現役を引く役職定年となり、やがて60歳定年を迎えます。そのときに、誕生したばかりの広島市内のケーブルテレビ局CCVから声が掛かって来たんです。



144. RCC を去る
(平成3年)

○石田 KAMONケーブルですね。

○新井 いえ、東広島市のKAMONケーブルテレビではなくて、中国新聞の社屋最上階にあるCCV（中国ケーブルビジョン、現在は統合されて「広島ケーブルビジョン」）です。このCCVというケーブルテレビは中国新聞が設立したもので、ちょうど初めて広島で、ケーブルテレビとしてスタートしようという時期でした。

○石田 出来たばかりですね。

○新井 出来たばかりのチョイ前、というか、これから正式に設立しようという時期です。それでRCCから、定年後のテレビの人材を引き抜きにかかったのです。既にお話した私との名コンビだった田中通俊君を引き抜いて、このCCV局の技術方面のトップに据えていました。おまけにCCV局の専務を務めていたのが、附属の大先輩の下村利昭(39回)さん。中国新聞では文化部長までやった人。この人も私を知っている訳だし、田中通俊さんも居る訳だし、「お前、現職を引いたのなら、新しいメディアであるCATVを手伝え」と言うことで、一人じゃ寂しかりうからドラマ演出仲間の田頭和憲さんと一緒に来い、となったのです。

彼は、同じラジオ時代のコンビで音楽が好き、エレキ機械いじりが好き、バイオリンも弾く、と言う多趣味人間です。かくて田頭さんと私とで、CCVへ応援に行くことに決まりました。そのとき、もう一人は技術の人間も、と言うので、田中通俊君が頼み込んで引っ張ったのが、南極越冬隊の第2回か第3回のときに、犬のタロ・ジロを残して帰り、その次のグループが生存していたタロ・ジロを発見するのですが、南極から「タロ・ジロが生存」との朗報を世界へ打電したのが、南極へ到着したばかりの海上保安庁の通信士、今はRCC技術部の上竹嘉和さん、その人でした。

技術の上竹さんと、新井、田頭の3人で応援に駆け付けて、既に田中通俊さんがエンジニアの中心として放送設備を全部整えて待っているから、放送局としての体裁は下村専務がCATVとして新人ディレクターを養成することになるので、その応援も頼むぞ、ということで中国ケーブルビジョンに行った訳です。私は平成4年の1月13日、CCV中国ケーブルビジョンのディレクターに就

任しました。平成6年3月まで勤めましたが、それより前に、実はある学校から声が掛かって来ていました。

○石田 修道大学ですか。

○新井 いえ、その前、未だ現役中だった1988年、昭和63年10月1日に、広島情報専門学校から「映像番組製作技法」、「ステージ演出論」2講座の非常勤講師として来てくれないかと声が掛かって来ていました。現役中なので年休を取り、毎週決まって情報専門学校まで通っておりました。

まだ元気があった頃なので東雲本町3丁目の自宅から自転車で、学校のある福島町まで広島市横断のサイクリングを決め込んで走ったものです。

60歳定年で会社を辞めるのが1991年、平成3年11月18日です。1931年生まれですから1991年11月18日の満60歳の誕生日が定年日でした。あの当時は、誕生日が定年日だった時代です。

満60歳で定年となり社友となりますが、その直前の1991年4月1日、広島修道大学から非常勤講師として「マスコミ論」を担当して欲しいとの依頼が来たのです。これは中国新聞の文化部長から頼まれた仕事でしたが引き受けました。つづいて1994年からは、広島大学から比治山大学に転任していらした岩合一男先生に頼まれ、同大学の「マスメディア論」担当の非常勤講師となり、両大学ともガン手術で大騒動になった2001年まで務めました。

ですから定年間近になって、情報専門学校、修道大学、比治山大学などから続けざまに非常勤講師への就任を依頼された訳です。しかも定年を過ぎた直後、これまたすぐにCCV中国ケーブルビジョンからも頼まれるという次第で、あちこちから頼まれ仕事が舞い込んで来るといって慌ただしい定年でした。

第9章 アカシア会（広島大学附属中・高等学校同窓会）とのかかわり

アカシア会の歩みと長谷川乙彦主事の教育理念

○新井 アカシア会とは、現在の附属の同窓会組織です。しかし誕生当時は同窓会ではなくて校友会と名乗っていた模様です。明治38（1905）年が我が母校創立の年ですが、大正7（1918）年9月1日に校友会総会を開催したとき、その総会の決議により会の名称を「アカシア会」に改称したと記録されています。これがアカシア会の発足日で、大正7年9月1日です。

発足当時のアカシア会の会長には、初代校長である長谷川乙彦主事が就任しています。なぜアカシアの名が選ばれたのかというと、学校の校庭にアカシアの樹がずらっと植わっていたことが名前に由来すると言われていています。この年がアカシア会という名称のスタート。同時に在校生・学校側と卒業生を含めた合同チームのような組織が出来上がっています。後に同窓会だけの組織に変わって行くのですが、それは昭和に入ってから、ということのようです。

昭和11年10月ごろ、東京にアカシア会が生まれます。第1回生から第10回生までの127名が会員だったという記録が残っていますが、彼ら全員の生まれた時代が大正でした。従って、東京での大正生まれだけをメンバーとした、「大正アカシア会」という組織が生まれました。これが現在に至るところの同窓会である「アカシア会」が呱呱の声を上げた時の実態だったようです。やがてこれが、全国へと広がって行き、メンバーも昭和生ま

れが加わって、現在のような全国的な同窓会組織「アカシア会」へと移り変わって行った、と言われていています。

そのため今でも東京のアカシア会は、「俺たちの方が本流である」との意識が強く、周年事業を計画するたびに東京の意向に大きく左右される傾向があります。「広島で勝手に決めてはならん。東京の俺たちの意向をキッチリ反映させよ」「広島が勝手に決めるなら俺たちは関知しない、君たちだけで勝手にやりなさい」という調子で、東京と地元の広島のどちらが本部なのか本流なのか、みたいな組織論争が結構あったようです。私も事務局を預かる立場になってから、何度か東京へ話し合いに行った覚えがあります。

アカシア会とは、各地に存在するアカシア会組織の連合体であり、東京と広島は地域的特性からして基幹組織であるから、この連合組織を巧みに運営すべき責任がある、と私は考えています。そういう推移でアカシア会が同窓会独自の組織として名実共に誕生したのは、昭和11年ごろと見てよいでしょう。「東京の大正アカシア会」という奇妙な名前ではありましたが。

昭和13年には、広島にもアカシア会が誕生します。次々各地にアカシア会が生まれ、やがて各地のアカシア会が統合され、それが附属のアカシア会という名前の同窓会だ、と認識され、次第に姿を変えて行って現在に至ります。

初代会長は学校長でもある長谷川乙彦先生ですが、後に当然のことながら附属の卒業生、1回生から会長が生まれて来るわけです。因みに少し逸脱しますが、校長である長谷川乙彦先生は、広島



145. 長谷川初代主事の胸像を再建
(平成17年)



146. 威厳のある附属中学校の校門
(戦前)

高等師範学校の学校長である北条時敬先生からの特命起用により、明治38年2月23日、郷里の愛知県立第一師範学校から広島高等師範学校教授に任ぜられ、4月1日に広島高等師範学校附属中学校主事に任命されました。長谷川乙彦主事は、東京高等師範学校の研究科を卒業後、学習院大学教授などを経て郷里の愛知県に戻っていたところを呼び出されて広島に赴任、という経緯での着任でした。

長谷川主事を附属中学校へ招聘した広島高等師範学校の北条時敬校長が、着任直後、イギリスなどに留学され、有名なイトン校からイトンスピリットと呼ばれる全人教育の精神と実践教育法などを広島に持ち帰り、股肱の部下であった長谷川主事を通じて附属中学校に植え付けたことが思わぬ成果を招いたと、今更ながら敬意を表したいと思います。つまり、のちの戦争の時代と原爆出現に際して、生徒を食糧増産のため農村へ出動させるとか、残留生徒たちも大学農園での園芸農耕に従事させていたことなど、遠い後世において、自然と直に接する「農業・園芸」などの教科も取り入れ、全人教育を専らとする教育方針を海外から持ち帰り母校へ植え付けた北条時敬・長谷川乙彦先生など、歴代の多くの先生方に感謝を捧げたいと思うのです。

学問をするのは当然であるが、人間としての誠実さと、品格・品位を保ち、人間として必要な知識を全て身に付け、端正にして質素を旨とせよ。これが全人教育。創立記念式典の場で長谷川主事から示された4か条の生徒訓条。学科としては、修身、国漢、英語、歴史、地理、数学のほか博物、物理及び化学、法制、経済、そして更に図画手工、唱歌、体操に加えて園芸などがあげられ、明治期と大正期を通して唱歌と図工などを実際に課したのは他に例を見ない全人教育としての特殊性があったと思われます。この時期に農業が園芸として正規の科目に取り入れられたのではないかと考えます。この、農業が我が校の正課に取り入れられたことが、私たち41期会生徒が全滅を免れて原爆から生き残る誘因になったと、私たち41期会生は今に至るも感謝の念を捧げているところです。

戦後のアカシア会

○新井 アカシア会の活動は戦争中は途絶えていました。しかし、戦争が終わると同時にアカシア会が再び復活へと向かいます。昭和21年6月に、アカシア会の中に母校復興後援会という組織が出来ます。

当時はPTAのことを「父兄団」と呼んでいました。父兄団の団長は加藤悦蔵さんで、前述のとおり、ご子息の科学学級4年生の加藤恭三さんは被爆死を遂げるのですが、「自分の子どもは亡くなったけど、附属の生徒たちは可愛い。自分の息子のようなものだ。しかし、西条や原村のあたりを流浪の民の如く彷徨った挙句、西条の吉土実小学校には寒い中を貨物列車の屋根に乗ったりして通学している。可哀そうだし危険でもある。何としても広島に帰してやりたい」ということで大変な尽力をされ、遂に昭和22年1月15日、広島に仮校舎が完成しました。それが1階建てから2階建てへ、第2棟から第3棟へと次々に完成して行きます。その中心人物だったのが、在校生だった我が子を原爆で失ったままの父兄団長・加藤悦蔵さん、その人だったのです。

昭和21年6月にアカシア会が設置した「母校復興後援会」の会長は1回生の里見真造さんでした。そして父兄団を率いる加藤悦蔵さんと共に、母校の復興に乗り出して行くわけです。22年1月に広島に復帰して復帰式が行われたことは既にお話ししましたが、そこにも里見会長、加藤団長ほか関係者全員の姿がありました。

次に昭和25年、戦後初の東京アカシア会が5月14日に新宿で開催され、1回生の宮本鬼外さんが東京アカシア会の会長に就任すると共に、このとき戦後初めて、ザラ紙による会報『アカシア』（通称『アカシア会報』）が発行され、同時に会員名簿も活版印刷で発行されています。

昭和26年（1951年）6月17日、この日、広島市の白龍苑で戦後初めてのアカシア会総会が開かれました。そこで会則の改訂もあり、併せて1回生の里見真造さんが会長に留任されます。「改めて会長に留任」という記録が残っています。

昭和28年4月、「広島でアカシア会が再建されて開催」との記録と共に、2回生の新沢憲造さんがアカシア会の会長に就任され、同時に焼け野原

となっていた校庭にアカシアの樹木50本を植えたという記録が残っております。それとともに同年12月20日、初めて女性会員が加わったアカシア会員名簿が発行され、アカシア会が戦後ようやく軌道に乗って動き始めます。

昭和30年11月3日、母校創立50周年記念式典が、寒空のなか母校の校庭で挙行されています。アカシア会と旧教官の会と学校との3者共同主催で『創立50年史』が発行され、「附属中学校発祥の地」の記念碑も建立されました。

月例アカシア懇談会

○新井 私たちは昭和26年3月に附属高校を卒業し、その後は昭和30年に大学を卒業して社会に乗り出すのですが、その年が1955年に当たりますので11月3日に、創立50周年記念式典を学校の校庭で挙行しております。私は、なぜかこれを見に行ったという記憶があるのです。アカシア会と旧教官と学校とで記念事業会を設置し、創立50周年記念事業誌として記念誌も発行しております。この記念誌を私も持っておりましたが、アカシア事務局に寄贈しました。それで附属小学校の講堂まで行ったと思いますが、11月の結構寒い時に、男女生徒がずらっと並んで式典を開いていたのが、なんとなく記憶に残っております。

昭和36年3月に、附属中学校、附属高等学校、共に現在ある皆実町、翠町の旧制広島高等学校の跡地に移転して現在に至るというわけで、東千田町は母校の旧跡地となり、現在は附属中学校が存在していた場所は売却され、高層マンション2棟が空へとそびえており、周囲は旧文理大を含めて「東千田公園」となっております。

昭和42年4月17日、「第1回アカシア月例懇談会」が発足します。会場は平和記念館のグリル。これに私も参加した記憶があります。以降、毎月17日に定例的に開こうということになりました。私は現役バリバリの時期でしたから定例的に参加するのは難しかったのですが、会場は平和記念館のグリルとし、毎月17日午後6時からアカシア会OBの方々が集まってテーブルスピーチもあり、大先輩に交じっての参加で知った方にも出会える楽しい集いでした。大先輩からの巧みなスピーチは現在、卓話と呼ばれていますが、定刻、定時に、

同じ会場に集うことを原則にしていました。同時にまた、会の申し合わせとして政治と商売・営業に関わることは一切係わらないという基本方針が、そこで確立されております。

会長は8回生の村田可朗さん、「ベクロウさん」というニックネームでした。副会長が、広島市助役だった15回生の坂田修一さんと16回生の竹林清一さん、幹事長が17回生の原幸夫さん。この方は有名な源田実氏の従弟になる方で、酒造会社を営んでおられました。常任幹事には24回生の藤居平一さんがドッシリ就任されており、この方が実は初代の被団協の事務局長であり被爆者援護法制定の立役者だったという事実を、私は後年になってから知ることになります。そのころから実は、戦後アカシア会の再建から充実発展への道が築かれ始めていたのです。そんな錚錚たるメンバーが揃っているなんて知らぬままの私は、級友たちと共に繁々と月例会へと通い始めておりました。

その時の幹事の一員だった36回生の川妻二郎さん、42回生の松林孝昭さんが月例アカシア懇談会の事務局役を直接担っていました。このお二人は、上学年が36回の川妻さん、下学年が42回の松林さん、間に6年間の差がある。この6年間の差がある上の学年と下の学年とがコンビを組んで、毎月開くことになった「アカシア月例懇談会」という月例会の当番幹事を1年間務める、という自然発生的でいて極めて有効なルールが確立され、現在に至るも続いているのです。第1回は、1967年4月17日に開催されました。

昭和46年3月末、母校の構内に「アカシア会館」が落成します。総工費706万円をアカシア会が募金して学校へ寄付します。附属中学校・高等学校は国立学校ですから、所有地も国の土地であり、そこに何かを建築する、設置する場合は必ず国家に寄付するというシステムになっています。そのためにアカシア会館も、いったん国家に寄付され、国家から「使って宜しい」と母校とアカシア会に許可が下りるという形式で建設されています。

この国家への寄付というシステムは後日、私たち41回生が幾つもの記念碑を構内に建立するのですが、そのたびに同じように、私たちの基金で私たちが建立し、学校側の許可を得て位置を決めて貰い、その場に建立したあと、正式に学校を経由

して文部省に寄付手続きを行い、「寄付を受けた」という請け書を文部省から貰う。それで初めて「宜しい」ということになるという手続きを、私も直に経験したことがあります。そういう先例が、このときから始まって居るのですね。

昭和49年（1974年）3月17日に『会報アカシア』創刊号が発刊されております。この創刊号以降ずっと私は、会報を1巻も欠かさず保存しておりましたが、先だって一揃いそっくり事務局に寄贈いたしました。私が持っていたら、いつか必ず芥になってしまいますので、それでは勿体ないので早々と寄贈しました。従ってアカシア会には、本部として保存していたはずの一揃いと、このたび寄贈した私からの一揃いと、たぶん二揃いが存在することになっているでしょう。

アカシア会への参加、藤居平一氏との出会い

○石田 アカシア会の常任幹事としてのお仕事について教えてください。

○新井 アカシア会には、最初からといって宜しいぐらいの時期から41期会のメンバーが関わっています。特に私と高田勇、松島義雪、井上公宏、この事務局4人組は最初のころ、昭和40年頃からです。そのほかに学年代表として浜田逸郎君が、長い間、41期会を代表してアカシア会の常任幹事を務めてくれました。

既にお話ししたと思いますが、戦後間もなくのころ、1967年、昭和42年、アカシア会そのものが、まだ事務局もなく、平和記念館の瀟洒なグリルで毎月1回、4月17日に先輩方が集まって定例の懇談会を開いていると聞きつけ、大先輩と会えるのか、というので参加し始めたのが私たちのアカシア会へ関わる最初の動きでした。時期は正確には覚えていませんが、まずは高田君が聞きつけて来て、誘われて一緒に行ったのが最初です。平和記念館の東端2階にあって、窓が広くて見通しの良いグリルでした。先輩の話をお聞いているうちに、自然と「アカシア会なるものは」という、附属中学校の同窓会の存在を知り、その歩みや歴史を聞き知った、ということですね。そのころ月例会で出会った顔見知りと言え、すでに会の世話役を担っていたので、42回の松林孝昭君、43回の坂木敬佳、増田尚雄、後藤吟子、松本なつ子さ

んたちと、36回の川妻二郎さんでした。

会の席で見知った先輩で思い出すのは、23回の今堀誠二さん、中村法先生、久保良敏先生。28回の熊田重邦先生、西村敏蔵市会議員、松江澄市会議員。31回の工藤大太郎、加藤誠蔵、千葉諭吉さん。33回の畦地達郎、長沼博、松坂義考さん、34回は熊平肇さん。35回は多山寿夫、前田耕資、望月寛さん。36回は川妻二郎、仁井谷彰さん。37回は大谷正、熊田重克さん。38回は平尾博司、日野健三、村上五郎、宮川裕行さん。39回は木村淳邦さん。40回は大村良行、小山二郎、煙埼悦治郎、古川浩司さん、などが挙げられます。

広島高等師範学校附属中学校の同窓会である「アカシア会」については、母校が発行した『創立80年史』に始まる幾多の記念誌に詳しく記述が残されておりますが、このとき私は、「アカシア会」という組織は、戦争中の昔からあったのだ、ということを知りました。しかし、それはまだ学校と同じ組織の中にあるみたいな格好で、独立した同窓会組織とは異なる存在だったことや、当初は学校側が運営の中心だったらしいことも聞かされて驚いたものです。それから明治、大正、昭和の初期という時代に生まれた人たちによって、明治アカシア会、大正アカシア会、昭和アカシア会が誕生し、やがて東京アカシア会というように、限定された年代、限定された地域で開かれていたものが、地元の広島でもやろうや、ということで広島でアカシア会を開くことになったのが戦後だった、ということなどを知りました。

戦後のアカシア会復興と発展の中心になったのが、藤居平一さんという24回の大先輩です。藤居さんは被団協（日本原水爆被害者団体協議会）の初代事務局長であり、東京で国会に乗り込んで行って被爆者救援を求めての法律制定、今の被爆者援護法を制定することに力を尽くした人物で、早稲田と附属双方の同窓会を支えることに情熱を捧げた大先輩だと聞きました。1974年だったかな、ちょっとした経緯があって藤居さん、その人に出会って、「附属の創立70周年を記念する事業をやるから、式典の演出を手伝え」と直接命令を受け、アカシア会の常任幹事に強引に引きずり込まれことから、私のアカシア会の関わりが始まりました。常任幹事の一人に追加の形で選任されて見渡した



147. 山チョウさん
(山本満夫氏、平成2年)

ら、会長から副会長、幹事長、多数の常任幹事などに先輩方が名前を連ねており、私と同じくらいの学年代表は42回の松林考昭君ほか若干の若手メンバーくらい。

創立70周年というのは1975年です。記念行事について少し逸話があります。藤居平一さんの附属時代の同級生に、蹴球の名選手だった山本満夫(27回)という新聞記者が居ました。共同通信社の出身です。のちにRCCの社長になりますが、当時はRCCの編成局長から昇進して常務になった時期でした。いっぽう私もRCC入社からほぼ20年で、テレビ、ラジオの番組制作が担当でした。

ある日突然、役員室の秘書から私に電話が入ったのです。山本常務がお呼びですから常務室へどうぞ、というわけ。何事ぞ、と思いながら山本さんの部屋に入りました。すると山本常務は、部屋の中央に立ったまま私を見て、ニヤニヤ笑っているのです。おや、奇妙な雰囲気だぞ、と思いました。

「これは業務命令である。これからすぐアカシア会の事務局に行って藤居平一という怪物に会い給え。彼は私の同級生だ。これから君は、アカシア会の業務で藤居君の指揮下に入るのだ」

何事ぞ、と勿論すぐに事情説明を聞きました。

「やられたナ、山チョウさんの作戦に」と思わず私も苦笑いしました。アカシア会事務局というのは、母校の創立60周年のとき附属の校内に完成した、ピロティ形式2階建ての立派な建物でした。

行くのは初めてでしたが、附属構内の奥まった校庭に面した場所に建つ独立棟で、らせん階段を馳せ登り、意外に広い室内に駆け込みました。見



148. 式典で挨拶する藤居平一氏
(昭和50年)

渡すと、数人の事務局員が立ち働いており電話のベルも賑やか。慌ただしい様子です。

幹部らしい何人かのなかに、藤居平一さんが居ました。紹介を受けるまでもなく一瞥で分かりました。容貌魁偉、よく響く声、ガッチリ鍛えられた体躯、頭一つ抜け出た背格好、マラソンのザトベック選手 (Emil Zátopek) よろしく機関車の如くスタッフを牽引する男だと感じ取りました。

目ざとく私を認めた藤居さんからの第一声、

「おう来たか、新井君だな。RCC部隊を引率して、70周年記念式典と祝宴の総合演出を頼む。会場は講堂と体育館。予算は僅かしかない。何とか成功させたいので、たのむ」

70周年記念行事の詳細は別に述べるチャンスがあると思うので、このとき始まった藤居さんとの大論争の概要だけ語りましょう。「何とかしろ」との名言は、RCCの山本満夫さんの慣用語でした。同じ言葉が藤居さんの口から出たので、ははあ、山本さんと詳しい事前協議をしたなと思いました。

私も答えました。「何とかせい、で命令されるのは大嫌いだけど、何とかせえと言われて何とも出来なかったら私の恥です。しかし途中で言うことを聞かないこともあり得ます。いいですか」「おお、構わん。喧嘩はなんぼでもやるから来い」「分かりました。じゃあ喧嘩を前提でやります」これが、私とアカシア会との正式な関わりの最初。

○石田 RCCが業務委託を受けたわけではないんですね。お金がないということなので。
○新井 そうです、まるっきり違います。山本常務は冗談めかして、私にアカシア会の事業へ協力

せよと、あらかじめ藤居さんと策略を巡らせた上で、先輩風を吹かせて珍無類の業務命令を出したのです。金が無いのに、アカシア会がRCCに業務委託など出来るはずが無い。みんな分かったうえでの先輩・後輩風を吹かせてのお芝居で、結局は私たちRCC内アカシア会員が、母校と同窓会への奉仕活動としてボランティア活動せよ、という上司でもある大先輩からの命令です。考えればアカシア会はずるいよね。RCCの中にアカシア会のメンバーが大勢いることを知っていて、これは藤居・山本の同級生コンビの策略ですよ。しかも私が番組制作担当の時期なので、それを狙って話を持って来たのです。

RCCは昭和34年のテレビ開局、ラジオは昭和28年の開局だから、社内にはアカシア会のメンバーは初めから何人も居ました。山本満夫常務もそうですが、篠田技術局長、寺本監査役など大勢のアカシア会員は居たんですが、制作畑は私が第1号です。番組を作るという立場の人間はね。

企画演出が私、会場の音声などの技術面が級友の藤原薫君と43回の青山晃君、それに元アナウンサーで当時はスポーツ課の44回、川本浩二君。現役アナウンサーで47回の兒玉信子さん。この5人が、のちに「RCC部隊」とアカシア会から絶賛された企画演出担当グループです。

ところが、折角だから記録映画を作ろうということになったのだけど、社内にはアカシア会員にはカメラマンが居ない。そこで私と長年コンビを組んで来た、国泰寺高校出身の萩原啓志カメラマンに頼み込んでOKを貰った。ただし、フィルム関係の実費だけは、アカシア会から支払って貰いま

した。萩原君ご本人は無報酬で良いと申し出たので、恐縮しながらも、結局は彼のご厚意を受けました。

1975年4月が70周年だから、その1年前に担当を命じられた訳です。山本常務からの業務命令というのは、もちろん冗談です。アカシア会もRCCに業務委託したのではなく、そんな資金があるはずも無い。RCC内のアカシア会員の完全なボランティア。萩原カメラマンまでボランティアということで関わったから、式典と祝宴が可能になったのです。ここで重要なヒトコト追加です。祝宴の料理や飲み物と配膳など宴会部分は完全な下請けで、賀茂鶴酒造の社長、43回の石井泰行さんにオール一任で、最低限のアカシア価格でシェフを務めて貰いました。祝宴会場となった体育館の飾り付けやセレモニーの演出と進行は、これまたRCC部隊の担当でしたが、最低限のアカシア価格で会場を飾り付けながら大成功を収めました。

私と来たら、現業のRCCの仕事をしながらですから、走り廻りましたね。当時、私はラジオとテレビの両方を兼務していたんです。ラジオの番組もやる、テレビの番組もやる、それからもう一つ、組合の仕事もやっていました。三つの仕事をやっていて、三つともケチをつけられるのは絶対に嫌だから、誰からも後ろ指を差されることのないよう完璧に仕事をやってのけながら、アカシア会の仕事もやり遂げなければならないというので、だいぶ苦勞しましたねえ。でもまあ、アカシア会の70周年記念事業も含めて当時、私は全ての仕事をキッチリやり遂げました。これが私の最初に関わったアカシア会での役割です。



149. 経理畑の寺本典夫氏
(昭和62年)

70周年記念行事を企画・運営

○新井 では、RCCチームが成し遂げた70周年記念行事の式典と祝宴の企画・演出に話を移しましょう。

式典の会場は講堂です。もとは旧制広高の講堂だった附属の歴史ある講堂に、在校生と卒業生全員を入れて式典をやるというのです。とてもではないが老朽化しているうえ全員は入り切れません。でも本部からの指令は「やれ」。

「中2階の床になってる天井が抜けます」

「文句言わずに、やれ」



150. 満員の式典会場
(昭和50年)

これは藤居平一さんの口癖です。「駄目でもい
いから、やれ」「やれなくても構わん、やれ」

無茶苦茶だ。「ようし、じゃあ、やって見せて
やるわい」と、最後はケンカ腰でしたねえ。

中2階の前列には現役の合唱団の生徒たちを座
らせ、その後にPTAのお父さんとお母さんを座
らせ、背後に少しばかりOB合唱団を立たせまし
た。つまり2階は割合に少人数に制限しました。

下の階の前半分には在校生、後ろ半分は卒業生、
残りは周囲と背後で立見席だ、と割り切りまし
て、2階への階段が付いているのですが、そのエリア
と1階の両脇と後部。2階の後部は立ってしか見
られません。1階客席の周辺と背後は、必然的に
総立見席。座る隙間は有りませんから、そこで立
たまま見て下さい、ということになりました。

問題は、学校と同窓会の共同主催にありました。
これまで、どんなことをやっていたんだろう、60
周年はどうだったのか、ということ聞き出した
のですが、何のことはない学校の記念行事に同窓
会が割り込んでいるだけなんです。今度は同窓会
が主体になって開催する、学校は共催としてやる
と決めたのだから、ガラッと流れを変えて貫って
構わない、というのが学校側の姿勢らしい。「じゃ
あ、変えましょう」と決めました。

何を変えたのかと言うと、これまでは学校側の
行事だから永年勤続表彰とか、大会などで獲得し
た優秀賞などの表彰とか、そんなイベントがズラ
リ並んでいたのです。それに加えて永年勤続の先
生方からのスピーチ、新任退任教官の紹介、表彰
の解説、あちこちからの祝辞などなど、つまり学
校側独自の行事がズラリ並んでいる。それにOB

が加わるのだから、会場の場所も時間も取れなく
なるのは理の当然。それを変えよう。

企画の中心人物は、学校側が副校長、アカシア
会側が藤居平一さん。先ず、この二人を説得せね
ばならない。私は最初に、学校としての式典行事
を中止か変形しないかと提案しました。永年勤続
表彰にしろ、何とか表彰にしろ、実施するならす
べて卒業生であるアカシア会の会長からお渡しし
て「有難うございます」と御礼を申し上げてはい
けませんか、という視点から説得しました。とこ
ろがなんと、あっさり学校側が納得したのです。
藤居平一さんも「まあ、ええかのう」と内諾。

次に、たいてい長々と祝辞があります。ゆった
り登場し、巻き紙を開く。祝辞が終わって紙を巻
き戻して深かぶかと一礼ののち、またも悠然と壇
上から下りて自席に戻る。その繰り返し。流れ
を考えただけでイライラ。これが最も時間を喰う
のです。私は「長々とした祝辞は全部、止めよう」
と宣言しました。学校側は首をかしげ、藤居平一
さんは「駄目だ」の一言。「これが駄目なら、式
典演出なんて全部ダメです」と私。沈黙が続き、
誰からも声ナシ。ここから私たちは、チョットし
た作戦に移りました。

我々RCCチームで密かに相談していたのは、
焦点となる来賓には巻き紙を読むような長い祝辞
を止めて戴き、到着されたら直ちに会場客席内の
貴賓席にご着席を願うのです。実はRCC部隊に
は、附属出身のアナウンサーが男女二人いました。
この二人が式典開始とともに客席に入り、マイク
を手に会場内の誰彼にインタビューをするので
す。「ひとこと、どうぞ」、「ご感想は如何？」など、
インタビュー形式で、大事な来賓や大先輩たちへ



151. 客席インタビュー方式で

マイクを向けるのです。

この方針変更を提案するや否や、藤居平一さんの態度がガラッと一変。

「おお、それはええ。全員参加の趣旨にピッタリじゃ。先輩から後輩への言葉も聞けるし、ナマの言葉が参加者から聞ける。それで行こう」

一発でOKが出ました。おかげで長々とした祝辞が全部、吹っ飛びました。会場内の客席で、感想か祝辞を戴いた方に、「有難うございます」と礼を言って、さっさと次の人にマイクを回せばいいんですから。これで、まず70周年の記念式典は時間内に収められる目途がつかしました。

次は、2階に陣取る男女高校生による混声の校歌斉唱ですが、そこに1階から男ばかりのOB合唱団の蛮声加わって大合唱になる。すると、たいていのOB会員は涙が込み上げて来る。大感謝のうちに式典が終わる。そして感動を胸に一斉に大群衆が体育館に流れる、という趣向です。

体育館に移ると、賀茂鶴酒造の社長であり、西条観光協会の会長でもある43回の石井泰行さんをシェフとする祝宴部隊が、既に用意万端、整えて皆さんを待ち構えています。

祝宴会場は母校体育館。石井さんはお酒屋さんですし、東京支社長も長かったし、かつての東京アカシア会長としても知られている豪の者。喋ること騒ぐこと、飲むこと宴会を仕切るなどお手の物です。祝宴の料理から、配膳から、乾杯から、祝いの菰樽の鏡割りなど、祝宴のすべてを石井さんにお任せ、それが大成功のもとでした。

祝宴会場内の設営は様々な方法がある。それは金さえ出せば豪華絢爛となるものの、そんなことを全国から参集した会員たちは求めて居ない。そんな会場に金屏風が在るか無いかなど、そんなこと誰も気にして集まったのではない。私はテレビ屋ですから、ステージ装飾の業者は幾つも知っている。だから、「予算は少ないけど、見事な装飾で頼む」とのヒトコトで済む。輝く白さで見栄えが良くて長い長いジョーゼットの布を会場に持ち込み、天井の中央から四方八方へ幕のように張り巡らせ吊り下げ、アメリカン・フラッグという賑やかな半円形の旗を体育館の2階テラス一面に張り巡らせる。たったそれだけ。あと余分な飾りは一切なし。「記念祝宴」という横長看板だけが正



152. 体育館が祝宴会場に

面天井から吊るされ、その下に広い演壇があり、誰かがステージへ登場すれば祝宴は始まるのです。

簡素でいて美しく、煌びやかでいて祝宴会場らしい雰囲気イッパイの会場へ、次々に講堂から会員が流れ込んで来ました。記念祝宴の始まりです。

軽やかな音楽が会場に流れます。47回の兒玉ユミさんが奏でるエレクトーンの名曲集です。臨機応変で応援歌や校歌の伴奏もOKとの待機姿勢の兒玉ユミさんは、とうとう祝宴終了まで乾杯のビール一杯と、取り皿一枚の料理だけの祝宴だったという悲話。みんなで一緒に語って飲んで歌えばいい。あとは食うものの予算だけ考えれば済むという、簡易祝宴方式を編み出したのが石井泰行シェフであり、実際に、それをやってのけました。

500人以上が、体育館内の祝宴会場に集まったという記録が残っています。創立70周年記念行事が、私の手掛けた最初の記念祝宴と式典でした。演出技法も実施プランも、そのとき初めて編み出した私の苦肉の策でした。そのやり方が成功を取めたとは、正直なところ驚きでした。式典会場は狭くて古い被爆建物の講堂、祝宴は母校の体育館。16mmフィルムで記録映画も作りましたので、次の80周年では、その映画を上映出来ました。そのフィルムも今は事務局に納めてありますが、これもDVD化しなければ、経年変化で危ういのではと心配しております。

80周年、85周年記念行事も担当

○新井 それからのち、私は80周年記念事業も引き受けます。70周年と同じように、母校の講堂と体育館で開催しました。ほぼ同じ条件の会場ですが、ステージ上の演壇を上手と下手の二カ所に

分けました。下手が学校側、上手がアカシア会側として演壇を狭いながらも二つ備え、何かのときは、すぐ近くで学校側とアカシア会側が別々に発言すること可能、という方式です。

ステージ奥の飾りは一切なしとして、舞台背景に附属中学校と附属高校の巨大な校章を二つ吊り下げ、ほかには頭上に80周年という巨大な吊り看板だけ。狭い会場なのだから、それだけで済ましたのです。ただ、ステージの前縁には、鮮やかな生花を横一列にズラリと並べ、格好だけは見ごとで豪華に飾り付けました。

そういうことで、記念式典の内容は前回70周年とほぼ同じ。ただし幾つか新機軸を出しました。

「思い出授業」～元気でご健在の恩師の先生方をお招きして、かつての思い出の教室、といっても旧制広島高等学校の校舎は建て直されて、新しく附属の校舎になっていますから、そこを千田町時代の思い出の教室ということにして貰って、昔ながらに名物授業をして頂こう。そこに、かつての生徒たちが、いまや恩師と見分けもつかぬほどに老いたけど元気な姿で、ずらり並んで授業を受けるといふ企画をやってのけ、教室が四つも五つも必要になるほどの大盛況でした。涙と爆笑が引き続いて湧き起こり、新聞にも写真と記事が出ましたね。

同時に、廊下には懐かしい「旧制附属中学校時代の写真」を引き伸ばして展示しました。式典や祝宴から移動する途中の廊下で写真展、という狙いです。これが「写真で見る附属の80年史展」と言うことになりましたね。それもこれも、話題になって新聞ネタになりました。結構いい話題になったので、お招きした恩師の先生方も、生徒だっ



153. 「思い出の授業」を再現

たお爺ちゃんたちも、本当に涙を流して喜んで下さいました。なお、お婆ちゃんは居りません。

そして同じように今回も記念祝宴に移るわけですから、会場は盛り上がったこと盛り上がったこと。銘酒「アカシア」の樽酒の鏡割りも盛大に行われ、掛け声もろとも樽を割ったトタン、お酒の雨が降り掛かって大騒ぎ。乾杯も、「アカシア」の焼き印が入った特製の合マス。およそ800人を数えた超満員の参加者は大満足だったらしく、私たち演出スタッフにも温かい声を掛けて戴き、舞台裏を支えた者として大感激を味わいました。

そのスタッフの全員は、「会費を払ったのに、祝宴会場ではビールをコップに1杯飲んだだけだった」などと愚痴をこぼしていましたね。世話係の私たちRCC部隊も、ビールを1口か2口かは飲んだかも知れませんが、誰一人としてお腹には何も入っていないまま、式典も祝宴も終わってしまったという悔しさだけが残っています。

いつ決まったことなのか知りませんが、75とか85など、5年刻みの記念行事というのは全部学校側の主催でやっていました。つまり65周年、75周年、85周年は学校主催で式典をやっていました。85周年は、当然、学校側がやるんだろうと思っていたら、なぜか学校側から突然私に電話がかかって来て、「新井さん、85周年記念式典の演出を引き受けてくれませんか。学校側にも附属出身の教官がいるから、その先生とチームを組んで、生徒主宰、生徒主演の体制で、平和公園のフェニックスホールで開催したいと思うんです」とね。それで初めて母校の講堂から外に出て、フェニックスホールを使っの式典が私の演出で実現すること



154. フェニックスホールでの式典演出を
(平成2年)

になるのです。

メインは、宇宙研（東京大学宇宙航空研究所）的川泰宣教授（50回）。ロケット工学の大家。この方が凄い見事なスライドを持ち込んで来て、フェニックスホールにある巨大なマルチスクリーンに次から次へと上映しながら、宇宙の話をして未来を語るという企画が軸になっているのです。

もう一つ、フェニックスホールですからステージが広い。附属には生徒たちによる管弦楽班という名物が存在します。全国的にも相当に有名な存在です。このオーケストラと附属の合唱班、OBにもアカシアコーラスという合唱団がありますから、この合同合唱チームをステージに上げる。そこで式典をやろうではないか。これらの基本線を固めた学校側の中心スタッフは、66回の井川泉先生と、太鼓矢晋・中本薩雄両副校長であり、協議の結果、式典演出テーマを「音と光と映像で母校史を語りつつ、悠久の未来像を描こう」と決めました。総合演出と進行台本は私が担当し、舞台進行というか舞台監督は私と井川先生とが共同で担当と決め、舞台装置、照明などは会場専任のスタッフチームに発注することになりました。

かくて舞台上はすべて、オーケストラと合同合唱団で占領されてしまうので、祝辞を戴いたり、開会の辞を述べたり、永年勤続の先生へ表彰状をお渡しするなど、どうなるんだ、となったわけです。それで新しい基本線を決めました。大事な場面では、舞台中央に1本だけスタンドマイクを立てるから、そのマイクを使って貰う。だが、それ以外は誰も舞台上に登場させない。これが新方針です。

さて次に、会場の両側周囲をぐるっと囲んで並んでいる2階のベランダ席に、貴賓席を設けよう。学校長をはじめとして広島大学の原田康夫学長も来賓として出席されるので、名士は全員、舞台に向かって右側（上手）の2階貴賓席に着席して戴き、そこに予めマイクを仕込んで置いて、ご来賓からの祝辞はすべて2階の貴賓席から述べて戴こう。原田学長は歌で有名な方だから、2階貴賓席から祝辞を戴いたあとは舞台中央に登場して戴き、そこで朗々とイタリア民謡を歌って戴こう。

主演の生徒たちは、舞台（左側）下手に円卓を設け、その席で司会者とナレーターの役割を担っ

て貰おう。

前は写真は廊下に並べて写真展としたけれども、今度はスライドにしてスクリーンに投影して附属の85年史を見せよう。その方法としては、現在のようなパワーポイント方式など望むべくもない時代ゆえ、スライド投影の専門家に依頼して、強力な投影機2台を持ち込み、その2台を同時に使用することで、投射した文字や母校史を描いた映像が煌めいたり、溶明・溶暗、重なり合うなどの特殊効果を存分に発揮させよう。

85年の母校史を映し出す画面には、生徒によるナレーションを付けて物語化しよう。その語りの背景には、音楽の先生から提案があった、ヴィヴァルディ（Antonio Lucio Vivaldi）の「四季」を流そう。これで大筋が決まりました。

原稿は私が書くけど、それを読むのは生徒たち。司会も生徒たち。それらしく書かなければ、附属の高校生たちが読みにくいだろう。

照明は篠本照明、舞台装置は中国ステージに頼みました。これまた同じようにジョーゼットを使って、80周年の式典の祝宴会場では単なる幕でしたが、その幕を今度は舞台の背景として、絞り緞帳のように連続して並べ、吊り下げて照明を当てると恰好良く見えるんですね。それに加えて附中・附高のマークも、同じように巨大な切り文字にして吊り下げ、「85周年式典」の看板は舞台の前面額縁上部に取り付けければ、舞台の見栄えを邪魔しないで済むだろう。

もう一つ、印象的な開会の切っ掛けを演出する手法として、2階の客席最前列に備えた巨大な和太鼓を打ち鳴らしてオープニングにしたい。

暗黒の会場で、照明操作によって無数の星が煌めくなか、突如として客席2階から和太鼓が打ち鳴らされ会場いっぱい轟いたら、「おう、始まるぞ」という迫力がアピール出来る。

それに応えて、舞台上からもドラムス独奏で呼応して貰おう。天井からも赤白の無数の風船を瀧のように降らせたい。式典が始まったトタン、舞台の巨大なスクリーンに迫力溢れる映像が投射され、音響と映像とナレーションが、華やかな風船の瀧で包み込まれた会場に流れる、というのはどうだろう。やって見ようじゃないか、ということでエイヤとばかり実現させ結構話題になりました。

これが、その後の附属と学校で共催して実施される記念式典の定番構成となりました。母校主宰、生徒出演で、アカシア会が協賛するという形式で初めて開催されたのが「85周年記念行事」です。

暗転し暗闇となったフェニックスホール会場の天空に、突如、色彩の渦が巻き始め、誰しもが「さあ、始まる」と感じた瞬間、暗黒の会場2階から突如、和太鼓の演奏が湧き起こり、スポット照明で太鼓を叩く少年の姿が浮き上がると、続いて今度は暗黒のステージから、和太鼓に呼応するが如くドラムソロが轟き始め、その姿も明るく注がれた照明の輪の中に浮き上がり、和太鼓とドラムの即興演奏が一瞬繰り広げられ盛り上がり過ぎてピタリ、止まります。

鮮やかなスポットライトが舞台中空に、「附中、附高」の校章を両脇に従えた、「85」の巨大文字に注がれて、校章と巨大切り文字とが、光の輪の中に浮き上がります。

そこへ高校生の声が場内いっばいに流れます、「おめでとう85歳、我らが母校！」～こうして創立85周年記念式典が始まったのです。平成2年4月17日でした。

ちなみに祝宴も、同じ会場の地下で開催されました。正規の祝宴会場は即座に満席となるはずだから、地下の各会場を結ぶロビー広場をも幾つかの円卓を設け祝宴会場として活用させて戴いたのです。もちろん最初から許可を取っておりましたがね。

アカシア会から母校への記念品は、舞台中央のマイクの前で、30回生の新延輝雄画伯の油彩画の目録が、竹林清三会長から岩合一男学校長に贈呈されました。

付け加えて裏話をヒトツ。私と井川先生とが当日の本番中、舞台の下手（向かって左の舞台奥）に立って舞台監督という、行事のスムーズな進行を司る役目を担っておりました。イベントというものは準備段階では、演出者も出演者も舞台美術の係も照明の係も、全員が頭を突き合わせて打ち合わせが出来ます。出来る、というより事前の打ち合わせは絶対に必要です。キッカケという用語があります。太鼓を叩きはじめるキッカケ、それに呼応してドラムスが演奏し始めるキッカケ、アナウンスが始まるキッカケ、緞帳を上げるキッカ



155. 初の校外開催で式典を

ケ、スクリーンを下ろすキッカケ。みなみな、舞台上で何事かが始まったり、終わったり。始まるまでに終わっておかねばならない事柄の瞬間と合図です。それを関係者全員が納得していない限り、舞台上でのイベントはスムーズに進行できません。

舞台監督の仕事は、イベントが始まってしまうと手が出せない分野をコントロールする役割を担いました。私は当日の舞台稽古のとき、あらかじめ緞帳の昇降時間を計測しました。画像を投影するために天井から降りて来るスクリーンも、降り始めて停止するまでの時間と、上がって行って止まる時間も計測しておりました。とりわけ母校の85年史を語るべき映像を投影するスクリーンの上がり下がり時間は克明に計っておきました。舞台の上はオーケストラと合唱団で満員。しかも雑壇という段差の上に終始、大勢の出演者が座っており、彼らの頭の上にスクリーンが降りて来て、あわや誰かの頭に衝突せんばかりの位置で停止するのです。イベントが始まってしまったら途中で待ってくれとか、急げとか言っても如何ともし難い状況にあるはず。つまり本番が始まってしまったら、おいそれと途中で事態に対応することは至難の業です。大勢のお客さんの前で舞台に出て行ってスクリーンを引っ張ったり、頭におつかりそうになった人を席替えして貰ったりなど絶対に出来ないし、そんなことやってはならないのは自明の理です。だから事前にすべての事態を想定して準備し、連絡しておくことが必要なのです。それが演出と舞台監督の責任です。

私は的川先生の宇宙映像と母校の85年史を映像で語るという主題を尊重すべく、映像が投影される巨大スクリーンの上げ下げに全神経を注ぎまし

た。つまり、「間髪を入れず」という言葉を舞台上で実践しました。

会場がゆっくり溶暗し始めてナレーションが始まります。または的川先生が話し始めます。そして舞台上のスクリーンに映像が投影されるときに、キッチリ舞台奥のスクリーンが天井から降りて来てピタリ止まったとき、間髪を入れず映像がスクリーンに投影されるよう、事前にスクリーンを下ろすための作動ボタンを早めに押していたのです。

事前に計測して置いた時間どおりの時間をかけてスクリーンは降りて来て、ピタリ、定位置で停止しました。終了時も同じです。母校史を語り終えて映像も消えて行った瞬間、ゆっくりスクリーンが上がり始め、次のナレーションが始まって次の場面が始まったときには、舞台上の邪魔なスクリーンは天井に巻き上げられてしまい、オーケストラもコーラスも指揮者の指揮棒一閃、演奏が始まる、という具合に、舞台上のイベントは、「ちょっと待って下さい」など間の抜けた待ち時間など無く、まるで水が流れるが如く、スムーズに進行して行ったのです。

共に舞台上で進行を見守っていた学校側の井川先生も、私の舞台上での動きと、スクリーンや緞帳の上がり下がり、演奏の開始とナレーションの開始など、少しずつ早めに本人へ合図を送ったり、少しずつ早めに作動ボタンを押していたことを、「アフタクトの呼吸」と呼んでいる裏技を私が使っていたことなど、全く気付かなかっただろうと思います。誰も気づかぬように、舞台上のイベントをスムーズに進行させることが最も大事なのです。誰かに気づかれるようでは、一人前の舞台監督は務まりませんから。

90周年行事での募金集め

○新井 90周年記念事業に移ります。この時は、事業のすべてを私が完璧に統括する、「事務局長」の立場で関わりました。アカシア常任幹事会からの委任でした。

なぜ全ての事業を統括～となったのかと言うと、このとき初めて学校側から、校舎の建築資金として寄付金を贈呈して戴きたいと、正式な申し入れがあったことに始まります。寄付金というの



156. 当時の事務局スタッフ
(平成7年)

は、だいたい同窓会側から学校へ「贈呈します」と申し入れるものなのに、今回は学校から端的に「寄付して欲しい」と申し入れて来たのです。

最初の言い分は、「玄関付きの校舎を建築したい」でした。ところが学校側が建築したいという校舎の仕様が、次から次へコロコロ変わるので。最後は「生徒用のコンピューター教室を建てたい」でした。そして最終的には、「コンピューター自体を購入する基金を戴きたい」となります。

正直なところ同窓会の中で揉めました。戴く側が「欲しいから呉れ」と要求して来るとは何事か。いやしくも附属は国立学校だろう、国立学校なら国家予算で運営するのが当然で、それが順当だ。それを同窓会に泣きつくとは何事かと、高齢、中核の老会員たちから猛烈な反対が吹き出しました。

寄付金額は5,000万円でした。それを如何に巧みに集めるかの全てが、私の肩に乗しかかって来たのです。私は同窓会の幹事長職でもありませんし、役職権限など何ほどの権限も持たない単なる総務担当の常任幹事であり、90周年の記念式典ほかの記念事業を仕切れ、という命令を貰っただけであり、何の肩書きも権限もありません。仕方なく担当範囲が全般だということが分かり易いよう、自分勝手に「事務局長」と名乗っただけです。

事務局長なんて役職は、アカシア会の会則のどこにも存在しません。ただ事務局長と名乗って今度の記念行事の一切を仕切る、募金も仕切る、式典も仕切る、祝宴も仕切る、記念出版も仕切る、それで宜しいかと会長と幹事長に確かめたのです。「それで宜しい」との返事を貰い、それから先は、東京、大阪、名古屋、関西、岡山、九州、

東北の各地にアカシア会が存在しますが、私は各地アカシア会まで出張して行き、記念事業への協力を乞い願う役割から始める、と決めました。

およそ、寄付金を募って学校へ寄付することの是非を、まずは常任幹事会、次いで総会で審議し決定する必要がある。私は個人的には、寄付行為に反対しておりました。学校への寄付など、アカシア会として全く初めての重要議案です。学校からの寄付申し入れ内容と経緯の曖昧さに、私は強い疑義と不快感を抱いておりました。

記念事業として学校は当初、「正式な玄関付きの3階建て総務棟を建設したい」と私に言いました。それが何時の間にか、「コンピューター教育のための教室棟が欲しい」に変わり、更には「コンピューター自体を多数揃えたいので寄付を」と変わったのです。それも事務局長たる私の知らぬ間に、いつの間にか、という不愉快な姿勢のままの寄付要請でした。私は怒り心頭に発し、「寄付なんて中止だ」と常任幹事会で荒れました。

千葉論吉幹事長と小山清先生とが、荒れる私を宥めに掛かりました。私の気性を良く知る周囲の先輩、後輩からも宥められ、コンピューター態勢を確立したばかりのアカシア会事務局から声が掛かって来た挙句、やがて私も怒りを静めざるを得ない時期に至りました。学校側からも、初めて寄付金を戴こうという瀬戸際になって方針がなかなか定まらなかった経緯の説明と正式な陳謝があり、纏まりを欠いていた常任幹事会も、やっと寄付金5,000万円の募金と寄付を承認する結論に至りました。私は東京や関西のオールド会員と同じく寄付には釈然とせぬ処が残りましたが、法人組織となった広島大学の下で苦闘している母校の立場を知るにつけ、コンピューター時代到来という時代認識も加わり、いま寄付金が果たす母校への効果について思いを馳せるようになって居りました。かくて私も、学校への寄付行為に同意しました。

寄付反対の筆頭だった私が遂に折れて、その最も大変な役回りを引き受けることになった訳ですが、それもやはり、私が41期会の一員だったからだと思います。41期会の私たちは、学校に命を救われたという恩義があります。恩義ある学校から頼まれて、正直なところ私自身は嫌とは言えませ

んでした。しかし、大先輩方の主張たる「国立学校だから国家予算でやるべきだ」。これは正論です。でも、それを何と、直前まで反対論者だった私が説得せねばならなくなったのです。真反対の立場になりましたが、必死の思いでやり遂げました。

東京まで行きました。32回の井内慶次郎さんが東京の会長、33回の山口信夫さん、14回の伍堂輝雄さん、32回の田中敬さんなど東京は錚々たる人物揃い。しかし井内慶次郎さん、山口信夫さんは、最初から学校への寄付に反対してはおりませんでした。

最も強硬に反対したのは、49回の山口邦明弁護士という東京アカシア会の事務局長でした。彼は1票の投票価値が地域によって異なるのは違憲だと最高裁へ提訴している著名な弁護士でした。そんな高名な弁護士を相手に論争するなど、考えてもいなかったが避けては通れない道。真正面から論争を挑みました。井内慶次郎さんの事務所まで押しかけて行き、長時間にわたって3人で話し込みました。弁論で勝ち目は無くても、こちらは、「アカシアスピリットで行こう」の一点張り。これは36回の川妻二郎さんが、70周年記念事業完遂を目標に唱え始めたキャッチフレーズです。「アカシア会員たるもの、私心を捨てて学校のため、仲間たちのため、アカシア会のため、損得勘定抜きで動こう。それが私たちアカシア会員の魂である」……ただ、これ一本で議論しました。精神論と言えば精神論で、戦時中に逆戻りしたみたいなの精神論ですが、アカシア・スピリットを重視しようの一点張り、とにかく頭を下げて頼み込みました。会長の井内さんは、すぐにOKを下さいました。しかし立場上、東京アカシア会事務局長の山口弁護士を説き伏せない限りOKとはならない。長時間かかりましたが、井内さんの説得に助けられ最終的には東京アカシア会がOKを下さったので、各地アカシア会も一斉に宜しいとなり、5,000万円という初めてで高額な募金を達成するよう頑張ろうではないか、ということで一致して動くことになったのです。

学校側からも、最後は募金目的の変更と言える表現で、3階建ての建築物は国家予算で建築し、その内部に納めて生徒らが勉学に使用するコン

ピューター類購入費用5,000万円を寄付して戴きたい、との3回目となる募金目的の変更案が示され、それならば、ということで平成5年7月30日、学校への寄付金の募金アカシア会の常任幹事会で正式に承認されたのです。

募金の方法も変更しました。ただ単に募金すると言うのではなくて、A募金、B募金、C募金と種別ごとに募金しました。募金は一人1,000円を一単位として何口でも宜しい。願わくばA募金は学校への寄付金として1万円。B募金は参加会費～これは式典と祝宴への参加費と母校発行の記念誌代として1万5千円、C募金は記念式典参加者に配布するガイドブックへの広告掲載料として任意の金額を宜しく、という募金方法で、すべて銀行振り込みと郵便振り込みに統一しました。

学校への寄付金であるA募金は、税法上の税額控除の資格を得る手続きを取ると決め、アカシア会の経理担当である52回の堀江規維計理士とコンビを組み、二人で法務局と財務局を訪ね歩いて寄付金控除の資格を取りました。従ってA募金に応じた方への領収証が、そのまま税務申告の際に「寄付金控除の証明書」にもなるよう特別な文言を入れた領収ハガキを印刷しました。それでA募金に応じた方には、このハガキ領収書を事務局から返送し、年度末の申告に直ちに使えるようなシステムを構築しました。これ以降、同じシステムが使われているはずだと思います。

この堀江さん登場と時を同じくして、38回の平尾博司さんが中心となり80周年事業の頃からのアカシア会事務局を一新させ、全面的に諸事務を電子化しました。事務局にコンピューターを本格導入し、名簿管理から会報発行時の宛名印刷、募金時の入金管理から会計事務全般のPC化を完成させました。これが90周年記念事業に当たって縦横の活躍を繰り広げてくれました。いや、コンピューター無しでは、巨大な90周年事業など決して出来なかつたでしょう。コンピューターを導入して、先ず会員名簿を整え管理すると同時に、80周年の時から、会計、会費、特別会費、募金会計など全部をコンピューター処理するようにはしていました。それが90周年の時に生きます。もちろん100周年にも生きて来るのですが、80周年の時にコンピューターシステムを導入して、80周年から90周

年にかけて、それを十分に活用しました。

○石田 こちらに頂いているのでは、90周年にコンピューター管理と入れられているんですが。

○新井 コンピューターを導入したのは80周年の時からです。本格的に募金のコンピューター管理を実施したのは90周年事業であり、募金そのものもA・B・Cと3種類に分けて管理した時からです。複雑な3種類募金を種別ごとに集計したり、途中経過まで管理して、将来見通しまでPCで打ち出したので会員から「実績と未来予測まで打ち出しているので、督促されたようで参ったよ」などと言われるほどでした。本格的に使ったのは。

○石田 A・B・Cになったのは90周年の時からですか。

○新井 それまでも、似たような募金の種分けをしたことはありました。記念式典にだけ参加、逆に祝宴だけ参加する、など個別の要望があり、対応した時もありましたが、こうして母校への巨額の寄付金を募りながら独自の祝祭行事もやる、となれば、この手法しか考えられませんでした。A募金・B募金・C募金の3種類分け方式は、90周年記念事業で効果を挙げました。それはコンピューター管理の手法が生かされての成果だったと言えます。功労者は担当技師の平尾博司さんです。

募金を開始したのは前年、平成6年6月1日からです。記念事業実行委員会という臨時組織が設置され、トップは26回の石井寛二会長、その下に総務統括として35回の大森茂夫幹事長ほか、募金財務として33回の長沼博副会長ほか、会員管理として36回の川妻二郎さんほか、支部実行として32回の井内慶次郎東京会長ほか、事業運営として42回の青山晃さんほか、広報記録として43回の増田尚雄さんほか、事務局が私ほかという壮大な組織の実行委員会がスタートして、多面的で壮大な記念事業も同時にスタートしたわけです。

司会者に著名人を獲得しました。64回でフジテレビの人気抜群アナウンサー、頼近美津子さんです。彼女に90周年記念式典の司会者を依頼したいと心に決め、早くから同期生を通じて日程をつかみ、臨時の広島行きを追加させていたのです。その結果、出演料が何とタダ！後日、彼女が急死したとの報を受けたときは絶句しましたねえ。

もう一人も有名スポーツアナ。朝日放送の甲子園高校野球中継で、出身地の広島を密かに応援していると噂されていた黒田昭夫アナウンサー。こちらも人気アナとして通常勤務以外の外部出演などムリ、と断られるのが当たり前。ここは私と黒田君との放送班での宿縁を持ち出しての、脅迫と口説きの二股攻略で成功しましたねえ、即座にOKの快諾。やはり昔仲間の縁は強いと実感。こうして著名人アナウンサー2人の登場で、90周年記念式典の舞台を飾ることが出来たのです。当日は、舞台端から見上げていて涙が滲みました。

90周年記念式典の年、平成7年は1月17日の阪神大震災で幕を開けました。予想もしなかった規模の大災害でした。六甲山を貫く新幹線のトンネル入り口の高架が落下し、陸の大動脈は不通となりました。記念行事の開催が危ぶまれ、議論を尽くしましたが人知の及ぶところに非ず。結果的には新幹線が開通して問題は消えましたが、出鼻を挫かれたが如き思いにとらわれ焦り、かつ困惑したものです。強行実施と心決めておりました。

寄付金の募金も参加申し込みも順調でした。日が経つに連れ震災の影響は薄れ、開催を危ぶむ声も薄れて行きました。よし、行こう、と決意を新たにしました。被災した近畿アカシア会には見舞金を贈呈致しました。

会則では、当期のアカシア会役員は全員が任期切れでしたが、常任幹事会で90周年記念事業が完了するまで全員任期延長と決定し、即座に役員全員が留任となりました。次々に発行される会報『アカシア』で、90周年事業の予告特集記事が各号とも満載でした。学年幹事会など基本組織が頻繁に招集され、席上、コンピューターによって打ち出された募金と参加申込者数などの一覧表が配布されました。学年ごとの現時点での実績と、前回の80周年事業の際のデータが並んで比較されており、営業マン対象の販売促進じゃないけど、そっくり同じだな、と幾人もが気づきました。あらゆる考えられる手が打たれ実行されて行き、そして遂に、その日が来ます。

平成7年4月15日、平和記念公園のフェニックスホールです。朝早くから会場周辺が賑わっており、緑のスカーフを身に付けた女性群が現れます。参加者をお迎えする受付係の女性会員の姿です。

参加者に手渡すアカシア会シンボルマーク入りの紙袋には、ガイドブック、記念誌、名札などが間違いなく詰め込まれているはず。あらかじめ前日に準備完了の物品。開会時間が近づくと続々と会員の皆さんが姿を現し、惹き込まれるようにホールへと流れて行き、たちまち会場が埋まって行くのですが、少し埋まり方に違いがあるようだ。ご正解です、実は事前に現役の生徒には通知しており、客席を十文字に区切ってあり、生徒たちは指定された席に着席しているのです。それ以外のPTAの方々、多くは2階席へと向かいます。

アカシア会員はと言うと、生徒が座る縦横十字の席に囲まれたような空間を、順序良く埋めて行きました。つまり、現役生徒とオールドアカシア会員は、互いに挟まれたが如き配列で着席し始めているわけ。新旧交互に、同じ附属の学友同士が並んでいるのです。一方、ステージには若々しい顔ぶれの「アカシア90オーケストラ」と呼称を変えた附属の管弦楽班に、往年の名バイオリニストたちが混在して、まさに新旧合同の大交響楽団がズラリ並んで着席しています。その後ろのアリーナ席には男女の混声合唱団が、これまたズラリ勢揃い。ここにもオールドアカシア会員が混入していると見え、若々しい顔の間に大人の姿も多いコールアカシア会員が加わった、「アカシア90合唱団」が登場しました。これでステージの上は満員の盛況です。

学校長ほかの要人や来賓は、85周年式典の時と同じく、フェニックスホール中2階の向かって右側の貴賓席に着座をお願いしており、その場面になったらやおら起立し、脇に立ててあるマイクを



157. 90周年記念式典
(平成7年)

使ってご挨拶なり、ご祝辞を戴こうという趣向。これは前回と同じ二番煎じの演出法ですね。

目玉は舞台上の、「アカシア90オーケストラ」による演奏会場面と、後ろに勢揃いしている「アカシア90合唱団」も加わっての「オケ伴による校歌の大合唱」です。ここでは絶対に、客席を埋める大先輩たちの大声が加わって、文字通りの涙ながらの大合唱になること疑いなし。43回の有松洋子さんによるバイオリン演奏、同じく43回の川瀬洋さんによるチェロ演奏、「美しく青きドナウ」のコーラスで若者の心を魅了した附属の合唱班OB、OGたちも加わった交響楽団と合唱団。母校の90周年を記念して、昔の青春時代を取り戻し、いま舞台上に再び勢揃いしたのです。

ホール特有の巨大スクリーンが降りて来ます。未だ、パワーポイントなどという新兵器は現れていない時代。スライドを2台の投影機を使い分けてスクリーンに投影します。特殊な技術を使って2台の投影機を同期させ、スライドを次々に投影するのです。一枚の画像から湧き出すように次の画像が現れる。一つの画像の上に文字が現れ、現れたと思った瞬間、その文字がキラキラと煌めき始めるのです。見る人に感激と驚きを与えます。見ていながら心が躍ります。附属の90年の歴史がスクリーンに映し出され、見事な画像変化をも見せてくれました。

舞台の中央に二人の人物が登場します。向かって左からはアカシア会の石井寛二会長、反対側からは、直前に交代したばかりの附属学校長の羽生義正先生が中央に揃って立ち、石井会長から羽生新校長へ寄付金5,000万円の目録が贈呈されました。満場、割れんばかりの拍手のうちにスルスルとスクリーンが降りて来て、懐かしの母校史の映写が始まるなど、式典は順調に進み、舞台上の交響楽団と合唱団との演奏が続くのです。「悠久の未来へ向かって飛び立とう」との総合テーマが提示され、懐かしの学生歌がオーケストラの演奏にコーラスが乗って、会場いっぱいの大合唱が涙と共に湧き起こり、90周年記念式典の閉幕を迎えたのでした。

ところで、これでお終いではありません。次に大きな大きな楽しみが待っています。ホール直下の祝宴会場では準備万端、賑やかな鏡割りの瞬間

をスタッフ一同、待ち構えております。そこへ現れました。次々に紅潮した表情の会員たちの群れ。あっという間に宴会場は満員御礼の状態に至ります。賑やかさも重なって、必然的に宴会場は人が溢れ返り、入口から外のホワイエや通路にまで人が溢れ出します。なにせ本日の参加者はフェニックスホールで1,500人と、事務局調べの記録が発表されています。これは生徒諸君が含まれている人数ですが、それにしても目を見張るばかりの満席状態。こちらの宴会場も溢れ出し、ロビーそのものが宴会場の延長線と成り果てました。でもご安心のほどを。ロビー空間も宴会場と同じと見なし、既にスタッフは先を読み取って、ホワイエもろとも宴会場へと変身の術を用いておりました。かくて平和公園内のフェニックスホール会場は、この日、私たち附属学校の90周年記念の専用祝祭日となった次第です。

旧校歌か、新校歌か

○石田 では、1回ここで切らせてもらっていいですか。少し細かい質問をさせていただきます。

○新井 100周年の話をしていませんが、アカシア会のほうはいいですか。

○石田 ええ。90周年行事を終えたあと新井さんは、もう事務としては引かれたんですね。

○新井 はい、私は一線から引きましたので、もう話をする資格はないかもしれませんが……。

○石田 いろいろと思いは、たぶんおありなのではないかというふうには。

○新井 100周年記念事業では、41回生が実質的に企画推進活動を進めた末、アカシア会を頼りにしつつ、大先輩方からの長い念願と宿題だった慰霊碑を、やっと建てることができたのは、母校への恩義を生きる基礎と心得て来た私たち41期会の思いを、具体的に表現出来たものです。私がかつてアカシア会の財政問題検討会へ提出し実現した、重要プール資金の「アカシア基金」こそ、財政問題解決の決め手となって行ったのです。

○石田 70周年からアカシア会の企画演出の仕事がずっとされたという話ですが、校歌斉唱はやはり旧校歌を歌われるんですか、それとも新校歌を歌われるんですか。

○新井 あれは昭和23年に新学制が敷かれた時、

女子が入ってきた時に新しい校歌に変わるんです。

○石田 こういった卒業生の集まり、式典などでは、どちらの校歌を歌われるんですか。

○新井 われわれ古い世代は、入学時に教えて貰った旧校歌の「をのこわれら」を歌います。しかし今の同窓会アカシア会では、新しい校歌の「若人われら」を歌います。41期会では「をのこわれら」と歌いますが、卒業時は校歌が「若人われら」になっていましたから、両方を歌いますね。

○石田 では、やはり学校全体の時には新しい校歌を。

○新井 そうです、新しい校歌を歌います。初めのころは、古い大先輩が「俺だけは、古い校歌を歌うのだ」とマイクを奪って壇上で一人、「をのこわれら」と絶唱していたけど、ほかの若い人は全部「若人われら」と歌う。二つと一緒に流れた時代もあります。42回生までが旧制中学の最後の世代になるので、初めのうちはそれをやっていましたが、今ごろはやりません。いまや多勢に無勢ですね。

○石田 こういう切り替えとか、絶対、年配の方で言う方がおられるので、どうされたのかなと思って気になったものですから（笑）。両方だったんですね。

○新井 初めのうち、だいたい30回生の千葉諭吉さんがおられますが、あの方たちがまだ元気で来られていた時代は、両方、併唱というか、古い人はマイクを持って壇上で「をのこわれら」と歌う。若い人はフロアで「若人われら」を歌う。一番は古い「をのこ我等」、二番になると「若人われら」、という歌い分けもやってたなあ。

アカシア会組織の運営

○新井 続けてアカシア会の、歴代の会長名を挙げておきましょう。昭和49年（1974年）5月25日開催の常任幹事会では、会長は8回の村田可朗さんだったことは申しましたね。昭和50年の創立70周年での会長も、村田可朗さんが続投です。

昭和60年（1985年）10月17日のアカシア会総会で、村田可朗さんから会長辞任の意思表示があり、16回の竹林清三さんが、辞任する村田会長の任期の残余期間を会長代行することになります。

○石田 今、49年に村田可朗さんがなられたとお

伺いしましたが。

○新井 いえ、村田可朗さんの会長就任は昭和42年であり、昭和49年は村田会長の時代だったとの意味です。それからのち、村田さんの辞意表明があって、副会長だった16回の竹林清三さんが残余期間を代行して会長代理となります。そして、その代行期間を終えて、昭和61年10月17日の総会で、16回の竹林清三さんが正式に会長に就任します。副会長は33回の長沼博さんと東京の会長である32回の井内慶次郎さん。幹事長が31回の千葉諭吉さんです。このメンバーが80周年を担当することになります。

この総会で会則の一部が改訂され、次年度の名簿から広告を掲載し始めると決め、書棚を購入しています。「アカシア・ライブラリー」でしょう。資料室が設置されており、18回で前の広島市助役だった森弘助治さんが就任しております。『80年史下巻』が完成しています。80周年事業での記念建築だった研修館が、この年の4月17日に落成式が挙行されています。平成2年（1990年）は、85周年記念の年であり、既にお話ししたとおり私に声が掛かり、記念式典などの演出を担当しています。学校長は岩合一男先生、アカシア会の会長は竹林清三さんでした。この年の4月17日が、ちょうど月例懇談会が300回に相当するという年ですが、この年に創立90周年事業の準備会議が設置され、私が引きずり込まれて事務局長を引き受けることになるのです。

平成4年、1992年4月17日に学校側が創立90周年記念事業委員会を設置しまして、記念事業として記念建築、記念出版、記念行事の3本柱を考える、との意向を示しました。アカシア会は7月17日に総会を開催します。アカシア会と母校の緊急事態に備えるべく、530万円のアカシア基金を創設しました。入会金と終身会費の増額を想定して会則を改訂し、名簿管理のため新電算機を導入し、創立90周年記念事業のため準備を開始し、役員改選で会長に26回の石井寛二さんを選任しました。

次に会長が替わるのは、平成8年（1996年）8月1日に石井泰行さん。同じ石井ですが、賀茂鶴会長で43回の石井泰行さんに会長が替わります。会長交代の前に、会長選任小委員会が設置され、そのチーフを長沼副会長が務め、私もメンバーに

入っておりました。その小委員会で私が石井泰行さんの名前を挙げたことが最終的には決定打になったと思いますが、石井泰行さんが次の会長になります。副会長が東京の43回の児玉幸治会長、同じく近畿の43回の米沢啓明会長、そして幹事長は46回の大方幸三さんという若い組織が出来上がって行くのです。

1997年から1998年にかけては、アカシア会の構造的な行政・財政問題を検討する方向へ進んでおります。構造的ということは、アカシア会は会費で運営しておりますが、会費というのは学校を卒業する時にアカシア会の新会員となる規則になっており、その時点で入会金と一生涯の年会費に相当する終身会費を一挙に納めるという制度になっております。これがアカシア会の会費として毎年春に、学校側の手で一挙に徴収されて入金され、その後は基本的には一銭も入って来ない、と言う不思議なシステムになっているんです。年会費というのが有ることは有るのですが、先輩の何人かが年会費を細々と支払っている。それ以外に会費としての収入は無いという、構造的な難問が存在していたのです。

構造改革議論は昔から幾たびも行われていたようですが、決定的に、私が説明したような難しい状況なので議論が進まなかったのです。私が主張しているのは、10年刻みで記念事業が開催され、その時の募金の残余金〜いつも相当額が残りますので、残ったお金は、私が提案した「アカシア基金」として留保することにするべきだと思うのです。残金まで使い果たして赤字を出すようなことなく、残ったお金はアカシア会と学校に危急存亡の危機が訪れた場合のみ支出可能、とするという条件のもとで、「アカシア基金」として全額を留保する。若干の流動資金は残しておいて、これは年毎のアカシア会運営の単年決算が赤字になったとき補填出来る、とするのです。これが随分前からの私の基本的な財政の考え方と提案です。

つまり記念事業で10年ごとに募金する。その残金で次の記念事業までの10年間を賄う、というシステム以外に適当な方法はないと私は確信しています。だから「アカシア基金」というプール金を設け、手を付けず、10年毎に残金を貯めて行く。気が長い話だけど、そういうシステムを構築して

進めたのが80年から90年にかけて事務局を預かった経験に発した財務的実践方法です。

○石田 私のアカシア会のイメージは石井泰行さんの時の印象が強くて、選挙運動でかなり組織的に動いているイメージがあったんですが、そういった活動はどうなんですか。

○新井 問題、無きにしも非ずでしょう。これは藤居平一さんから出た基本方針なんですけど、日本被団協の初代事務局長ただただ進歩派です。だから、式典の時にも日の丸を学校構内に上げてはならんという人で、70周年のとき校長先生と論争の挙げ句、日の丸は上げないことに決まったそうです。

そういう方ですから、あの人が言ったのは、アカシア会は政治からは絶対に一歩も二歩も距離を取り、関わるべからず。政治だけではない。経済、商業にも関わるべからず。宗教にも関わるべからず。この三つを守れとのアカシア会の基本姿勢原則を打ち出したのです。これには必ず立場や意見の違いが存在する。それは組織の維持に問題を生ずる。だから政治・経済・宗教とは絶対に関わってはならん。

そしてもう一つ、アカシア会というのは毎年4月17日が開校記念日であるからして、同じ日に、同じ場所に、同じ時間に集まれ。これを守って継続して月例懇談会を推進せよと、アカシア会の幹事長である藤居平一さんから総務担当常任幹事の川妻二郎さんに指示が出ました。それ以来、アカシア月例懇談会とアカシア会そのものは政治に関わってはならん、ということが進みました。

ところが、35回の栗屋(敏信)さんという人が選挙に出て来た。そのとき、私はアカシア会の中心部に居たので、絶対にノーだと断言したのです。ところが常任幹事会の若手グループから提案が出た。「ノーだということは理解しました。アカシア会としては支援出来ませんし、支援しません。しかし個人として彼を支援する団体に参画すること。アカシア会の集まりに彼が出席しているとき、彼が名前を名乗って挨拶するのは如何ですか」とこう持って来たんです。組織論ですね。

原則は、アカシア会として政治には関わらぬ。つまりアカシア会としては、最高決定機関である常任幹事会で審議・可決したうえでの組織として

の支援は罷りならぬ。それは十分に理解し遵守する。然し個人としての言動まで、藤居原則は制限していないと考える。こういう論拠です。

それで私も腹を決めました。そこまでは黙認しよう。それ以上のことは成すべからず。それが先輩から伝わったアカシア会の伝統であり、守るべきは後輩の義務であるからして、そこまでは私の責任というか立場で黙認ということにしよう。それを今後とも守れ、ということで結果的に制限付きで黙認しました。

しかし、それがまた緩んでしまった。ステージに上がって喋り始めると、挨拶だけでは済まなくなりました。もう私は目をつぶるしかなかった。もう文句は言うまい。しかし言いました。

こういう原則が存在している、ということを経済的に忘れるな、後輩にも伝えろ。自己紹介程度までは黙認するけれども、明らかな選挙演説風なことになったら、私は昔の警察官ではないけど、客席から「弁士中止！」と怒鳴るぞ、とね。

結局、栗屋さんから始まって、今の75回の湯崎英彦広島県知事まで来ましたが、後援会長をアカシア会員が、しかも現会長が引き受けるという習慣が出来てしまいました。アカシア会の先輩に対して私は申し訳ないと思っています。アカシア会としては重い伝統を破ったと思っていますが、個人の立場での仕業、ということで、まるでこれは、靖国神社への玉串奉奠が内閣総理大臣である何某個人の名前で行為だから憲法の政教分離原則に違反しない、との論拠と同じだな、と歯噛みしております。なお現在は、湯崎知事の後援会はアカシア会の会長ではなく、地元経済界の重鎮、加藤義明（44回）さんが会長を務めており、新しく会長に選任された楨本良二（69回）君ではないということで、藤居原則を現在のアカシア会幹部が尊重してくれているものと認めています。

選挙演説とか、講演会でアカシア会という名を出すと、協賛するとか、そういうことは絶対に駄目だ、とだけは断言していますが、伝統工芸展の共催みたいなことまで若い世代のアカシア会がやりました。100周年の時に県立美術館で開かれた伝統工芸展をアカシア会が共催したのです。講演会もアカシア会が主催しました。その経費はどこから出ているんだと私はアカシア会の

若い責任者に対して問い糾したいね。アカシア会として、そこまではみ出したら同窓会としての限度を超えている。事前に誰も私に相談する者は居ませんでした。

会長という立場と肩書は、多分に政治的な役割を期待されてのものだと思います。副会長なり幹事長なり、会長を補佐する役員は存在しますが、それらの全てが、会則に則って会長権限で選任された役員です。従って会長の決定に異義を唱える方法は、最高審議決定機関である常任幹事会に提議し審議して、常任幹事会決定として会長へ回付するしかありません。これまで幸いにして、会長への異議申し立てみたいなトラブルは起こって居ませんが、独断専行みたいな事件は起こりかねません。

大学内の機関として、いつ出来た如何なる機関か私は存じませんが、附属学校の存立・運営に関わる審議機関が設置されており、アカシア会の会長は当該機関の会議に出席の義務があると聞きました。そのような場合、会長が独断で何らかの事柄に関わったり、賛否の意思を表明するなど、有ってはならぬことと存じます。しかし、アカシア会の常任幹事会で、この大学内に設置され会長も出席を求められている会合と機関決定について報告や提議がなされたと聞いた事はありません。

寡聞にして存じませんが、で済むなら結構ですが、翠町の附属が現在、学校運営に困窮を来していると側聞します。もし事実ならば、私たちが拠り所としている母校にとって由々しき一大事です。直ちに常任幹事会で取り上げて審議し、何らかの会としての支援策を打ち出し、直ちに実行に移すべきです。ふるさと納税制度を利用しての母校への寄付などが会報アカシアの記事となっております。そのくらいのことで済む状態なのでしょうか。このことを如何様に話し合うか。アカシア会として、また会長としての態度表明が直ちに為されるべき重要問題だと考えるのですが…。

繰り返しますが、アカシア会には「アカシア基金」という、勝手に手を付けてはならぬ基金が存在します。いまは可成りの金額が積み立てられているはずですが。この基金は往時、私が常任幹事会に諮って設立したものであり、母校とアカシア会とが何等かの危急存亡の状態に陥った際、初めて

取り崩すことが許される基金です。その事実を今、改めて強調しておきたいと思います。今が、その時期ではないか、と。

私はアカシア会長から顧問として残ってくれと頼まれて顧問の名前を残しています。まず最初に石井泰行会長が辞める時に、「後のことを頼むから顧問として残ってくれ」と言われたし、向井（恒雄）会長からも任期を終えるたびに顧問として残ってくれと言われ、委嘱状まで貰いました。でも最近は委嘱状が来なくなりました。もう何年も前から私は、年齢からしても顧問を辞したいと申し出ております。川妻二郎さんが身を引いたとき、私も同時に引こうと思っていたのですが、機を失ってしまった。100周年が終わった段階でも辞するつもりでしたが、それでも辞めさせて貰えなかった。だから会員名簿には、未だ私は、顧問という肩書と名前だけが残っているのではないのかな。

会長の仕事、アカシア会での藤居平一氏

○石田 分かりました。あと、90周年の募金集めの話ですが、普通はやはり会長とか副会長、幹事長のほうが前面に出てお集めをするのが体制としては望ましいのだと思いますが、事務局長として前面に押し出されたのは何か事情があったんですか。そういう東京の交渉といっても、やはり事務局長ではなくて会長とか副会長になると思うのですが。

○新井 それは当然ながら会長、幹事長と言う立場の方々も東京へ出て行きましたよ。しかし東京アカシア会としての募金目標額を幾らに決めるか、など過去の実績が打ち出された電算機からの資料片手での突っ込んだ話し合いなど、会長や副会長に委任するなんて出来ません。任される会長や幹事長だって困るでしょう。私など実務担当の事務局長レベル同士での角突き合わせた交渉が、このようなケースでは最も大切になるのです。偉い人が交渉の前面に出なければならぬのは、交渉が行き詰まって二進も三進も行かなくなって話し合い自体が崩れそうな局面に至ったから、もうこれはトップ同士の政治的解決しか方法がない、というような局面。もしくは逆に、実務レベルでおよそ解決の目途が付いた場合、東京と広島の間

巨頭が顔を揃えて笑顔で握手する、となれば万々歳。というような場面くらいです。

会長は、最初に言うべきことだけはキチンと言っておいて下されば、そのあとは実務者の出番ですよ。このときも実質上、会長同士は合意に至っていたと思います、井内さんの態度で分かりました。問題は実務上、如何ほどの金額とか何%を引き受けるかなど、実務上で問題が残っているから、それを解決せねば解決にはならない。そして最終的には常任幹事で構成された実行委員会の委員全員で決めるのだから、誰かの独裁じゃ駄目です。その合議のとき事務局長たる私が発言し、報告し、会議をリードします。それはおかしい、難しいよ、こうした方が良いと発言が有ったら、そちらを先に討議の場に乘せます。ですから自由に発言して貰うけど、決めるのは委員会だからルールに乗っ取って決めます。みんなが討議して決める時には私がリードします。それが事務局長としての立場だから。

会長が直接に会議を仕切るわけではありません。総会などでは会則により会長が議長となって会議を進行しますが、記念事業実行委員会では、決定権は実行委員長に与えられています。役員会などでは幹事長が議事を仕切るのが当然です。そして幹事長は実務のほとんどを事務局長に委ねているのです。事実上、幹事長の代わりを務めていました。そういうわけで私は、事務局長を名乗りながら幹事長代行のつもりでおりましたから(笑)。

ただ初期アカシア会の原幸夫幹事長と言う方は太っ腹な方で、常に事務局を重視して居て下さった。ポイントを押さえて、それでいて細かく気が付く方で、アカシア会の忘年会などでは、「おい新井君、店へひとつ走りして蔵出しの銘酒を持てるだけ全部、持って来い。すべて会への寄付だ」と、こんな具合でした。それから石井泰行会長。酒屋の亭主だからと自慢し謙遜していましたが、すこぶるつきの座談の名手なんですね。マイクの前でのご挨拶もユーモアがあってなかなかのものでしたが、人脈が物凄いのです。桁外れなんですね、ただ者じゃない。奥田元宋画伯は、娘さんが石井さんのご夫人という関係から親戚にあたる方で、その線から依頼して母校講堂の緞帳いっばいに奥田画伯の「奥入瀬淙々」が描かれております。

母校教官に定宗一宏という先生が居りましたが、石井さんは定宗先生の教え子であり、少年時代はかなりの暴れん坊で何度も定宗先生に助けられたとか。先生は附属を辞したのち国泰寺高校と女学院高校で教鞭をとり、のちは広教委で社会教育課長、次いで美術館長を長く務めた先生です。従って教え子も多岐にわたっており、私も教え子の一人として定宗先生を囲む会を立ち上げようとなったとき、最初に手を挙げて下さったのが石井泰行さんでした。時は昭和60年頃のこと。母校も創立80周年の時期です。手元に残る古い名簿には「一宏会」と会の名が掲げられ、「イッコー会」と呼び習わしておりました。会員は定宗先生から教えを戴いた人物ならずべて歓迎との会則。国泰寺高校、附属高校、女学院高校、ノートルダム清心の卒業生、油彩画家と水彩画家、美術館の職員など多彩な顔触れ約20人。それが私と石井さんを近づけることになった集いでした。

何時、何故だったのか失念しましたが、国泰寺高校卒の朋友、萩原カメラマンと共に京都は祇園の小粋なお店へ通されたことがあり、女将さんと石井さんは常連の顔なじみと言った風情。お陰で祇園の奥までご案内を戴いてしまった記憶があります。石井さんの東京時代も華々しい人脈で結ばれていたらしく、横山大観など多くの有名人が愛した賀茂鶴。この酒以外の酒は飲めぬ、との名言やら、オバマ大統領も愛でたとかで更に有名となりました。その賀茂鶴酒造中興の祖と言える石井さんは、自分で肩に賀茂鶴の大箱を担いで配達したとの武勇伝も残っています。私が石井さんを会長に推薦したのも、これでお分かりになって戴きますか。

○石田 組織によっていろいろとタイプが違うので、その辺は聞いておかないと。この時はこういう人で、この方がやった、この方がしなかったというのは。

○新井 私は、これまでそういう姿勢でやりました。そうしなければ事が進まない。

○石田 では、先ほど村田さんとか竹林さんとか石井泰行さんのお名前が出ましたが、やはり会長の皆さんは実務は事務局長とか幹事長に任せるかたちだったんですね。

○新井 任せるというよりも物事は役員会で決め

るわけです。決まったら、実行するのは事務局長をはじめとする事務局か実行委員。現場というか実務を預かる者が執行するわけです。会長は大所高所から総合的な観点からを見定め、定めた基本線に過たず進行していることを見て居れば良い立場でしょう。細かなことには口も手も出さぬ、と言うタイプがアカシア会長の伝統なのかな。

何事かを行う場合は常に実行委員会と言う実務を担う組織を設置しますから、そこへ選任された委員が責任を持って合議決定して執行します。式典担当、宴会担当、記念出版担当、募金担当など担当部門ごとの組織で合議決定して執行する。それが我がアカシア会の基本的なやり方です。実務担当者が貰った実行予算で、出来る方向へと邁進すれば良いわけです。その方向を決めるのは、委員会というか役員会で合議し決定し執行すれば良いのです。最初と最後は総会で大方針と予算大枠が決まるから、決算も同じように処理して行くこととなります。最後に会長が、総会か委員会の場で公に決定すれば良く、その進行役と言うか司会役を事務局長が務めれば良いのです。

○石田 分かりました。あと、私が聞きたい最後は藤居平一さんですが、一番最初の時にお会いになった話と、あとは90周年の時にお話があったということで、その間、藤居さんは。

○新井 もう体調を崩しておられたらしく、85周年頃から表に出て来られなくなりました。80周年の時は式場の講堂でお会いしましたが、85周年にフェニックスホールへ会場を移した時は、杖をついておられましたね。だから、あのころから、もう実務からは引いておられたと思います。

アカシア会にも、あまり顔を出さなくなっていたようでした。90周年のころ、私たちはご自宅へ、しばしば呼び付けられていましたが。あとは、そういう感じでしたね。

○石田 呼び付けられたというのは、70周年とか80周年の時の話なんですか。

○新井 70周年とか80周年とか、お元気なころは何時とは言わず呼び出され叱られておりました。90周年は特にそうでした。呼び付けられました。私と千葉幹事長は、「90周年事業はアカシア会始まって以来という、5,000万円もの大金の寄付金の募金がある。これで失敗したらアカシア会も

ぶっ潰れる、分かっているだろうな」という懸念からのお叱りを受けました。だから頑張れ、というのでご自宅まで呼びつけられて厳しく叱られました。ご自宅からは出て来られませんでしたね。

○石田 では、もうかなりお体が良くなかったんですね。

○新井 もうその頃は、体調不良だったのでしょ。糖尿病を患っていらっしゃると聞いていましたし。

○石田 確か、藤居さんは90周年の翌年か翌々年ぐらいにお亡くなりになるんですね。

○新井 そうです。翌年です。しかも丁度、母校創立の日、4月17日にお亡くなりになっています。享年80歳、平成8年、1996年ですから90周年記念式典の翌年です。

90周年式典の時は杖をついて、介添えの方が傍に居られて、やっと会場まで辿り着きロビーのソファに埋まったまま式典開始を待っておられたんですね。いや…終わった後だったかな。

気づかずに私が前を通り過ぎようとしたとき声がかかったのです。ドスの効いた、弱々しくも懐かしい声で。やっと出て来られたという状態でした。

目ざとく私を見つけて、「おい、新井君！」と呼び止められました。その前に私は、直立不動の姿勢で立ちました。そうしたら何とも予想外の優しい言葉が、そんな優しい言葉。あの方から優しい言葉を掛けて戴けるとは思いもしませんでした。「よくやった、大成功だ、君のお陰だ、有難う」って。ギュウッと手を握り締めて、離さない……。

○石田 それは、いつも厳しい言葉ばかりかけられたんですか。

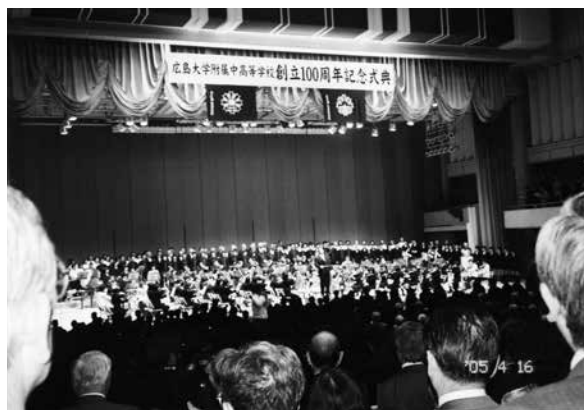
○新井 泣きましたねえ、二人とも。それはもう、「金はないけど、やれ」という調子の方ですからね。「出来なくても、やれ」

それが人が違ったみたいな優しい言葉で、「ようやった」と。「お前のお陰だ、ありがとう」と言って下さったのだから、それは二人とも涙ぼろぼろでしたよ。藤居平一さんという方は、すべて無私

の人物であり、ゆえに強烈なオーラを放つ人物でした。ヒバクシャの救済も、早稲田への愛情も、附属を救おうとの一念も、すべてがヒバクシャのため、早稲田のため、母校である附属のために一身を投げ出していた活動でした。まるで明治の人物でもあるが如き志士であり、良き大正のデモクラシー時代を担って現れた昭和の救い人です。

アカシア会時代にはイッパイ叱られましたが、一徹な人から叱られるというのは、快い激励だと受け止められるのです。なるほど、この人格、この凄まじさで国会に乗り込んだのなら、そんじょそこらの議員では太刀打ちできないでしょう。同じ母校たる早稲田での功績は存じませんが、少なくとも附属では、母校とアカシア会に対する愛情は、よく言う「一身をなげうって」との表現を体した存在であったと思います。このような人物の功績が、現在のヤングアカシアに理解できるか、このような人物の偉業自体を知っているか、伝わっているだろうか。そこが私に言わせると、残念な状態にあると思われてなりません。

被爆証言でも同じことなのですが、昔のこと、本当のこと、実態を先ずは知ることから始めて欲しいのです。知っている人が健在であるならば、知るための努力を尽くすことこそ、現在を担う人物が先ずは最初に為すべきことではないでしょうか。伝統を自慢するのならば、知ることこそが本当の伝統を守り伝える手始めではないでしょうか。



158. 100周年記念式典
(平成17年)

第10章 同期の仲間「アカシア41期会」

私たちの戦争体験

○新井 まず初めは、私が証言を始めるに至るについての経緯です。これまでもお話して来たとおり私は、被爆者であるには違いないが、当日午後入市被爆者であって、昭和20（1945）年8月6日午前8時15分という、人類史上初の原子爆弾の炸裂瞬間の状況を、直接に我が身をもって体験する、ということではなく、炸裂後の午後、何も知らず広島市内へと入り翌日も市内を彷徨い、全く知らぬ間に、相当量の放射線を浴びてしまったということで入市被爆者となりました。そしてそのとき、幼い私が体験したヒロシマが、その後の私に大きな影響を及ぼし続けて来たという事実を語ります。

私たち161人が昭和20年4月4日、広島高等師範学校附属中学校1年生として入学し、やがて8月6日を迎える訳ですが、うちほぼ30人が体調不良や家の事情などで、農村への出動を免除されて広島市内に残っており、そのうち10人が被爆死を遂げる。残り20人ほどが、全身に大火傷したり、建物の下敷きになったりして瀕死の重傷を負いながら、まさしく九死に一生の思いで脱出して生き延びました。しかし全身を焼かれて出席も叶わず学業に追いつけず留年するとか、もう広島では暮らして行けないというので、故郷の各地方へ散って行って姿を消す、という状況でクラスは大きく変動してしまいます。

私たちは自分たちを「アカシア41期会」と呼んでいます。昭和20年4月に入学をした旧制広島高等師範学校附属中学校の第41回生、この161人の運命は、あの日を境にして、グルリと大きく転換してしまったと言えるでしょう。全員が、直接被爆と入市被爆の2組に分かれる訳ですが、直接被爆だけで10人が自宅や学校付近で被爆死しております。うち3～4人が、千田町の母校の近くで家屋の下敷きになり焼け死ぬという運命を辿っていますが、残りの全員は、全身火傷という重傷を負う訳で、なかには3学年ほど下がった者も出る、という大変な負傷者もありました。

つまり161人の学友たちは、そういう状況で被爆死した10人のほかは、20人ほどが全身火傷など

の重傷を負って学校に出て来られなくなりました。ほかにも、家族に相当の被害を受け、数人の原爆孤児を生むなど重大な家庭環境崩壊とも言える被害を受け広島を離れて行きました。附属中学校というのは結構、遠方の県から入学している生徒が多いので、寮生活の生徒たちなどは戦後の混乱のさなか、もう広島では生きて行けないというので故郷に引き揚げてしまう者も続出。クラス構成も不可能なほどに壊滅するなどで大変動が起こります。

私の同級生たち、161人のうち60人以上が、細かな出入りまでカウントすると実に80人近くが、留年したり、他校へ転校したり、退学したり、消息不明となったりして姿を消してしまったのです。80人といえば、ちょうど半数じゃないですか。残った私たちは、この現実直面し大きなショックを受けました。41期会メンバーの入学、被爆の実態、死者と負傷者、転校、退学者などを見ましよう。

* * *

- ・入学時は、1年北組=42人、1年南組=42人、1年東組=42人、1年科学学級=35人。合計161人でした。
- ・級友の被爆死者は10人=栗屋忍、今井啓爾、及川洋一、北村龍郎、楠本惟雄、高田作弥、田村慈朗、二宮芳樹、平本博、増田永造。
- ・当日残留組で直接被爆し負傷した者12人=村上啓介、中沢（植野）克彦、松本卓司、住田敏浩、谷口治達、渡辺克幸、増本昭夫、宮本昇平、好村博文、中村玄、内崎以佐味、藤吉陸夫。



159. 米軍機より撮影したきのこ雲
（昭和20年8月6日、撮影／米軍、
提供／広島平和記念資料館）

- ・途中で帰宅していたため被爆した者8人＝懸川高治、光藤幸和、長崎正人、潮田史郎、奥田哲也、名柄廸、津脇弘徳、渋谷宏。
- ・当日午後、母校への伝令として入市被爆した者5人＝新井俊一郎、笠間弘丈、高田勇、西川亮、西川廉行。
- ・被爆後に急遽帰宅して入市被爆した者3人（多数に登ると思われるが詳細不明）＝岡田渥美、久保田訓章、山崎恭弘。
- ・被爆・敗戦で故郷へ戻った科学学級生徒14人＝稲富彬、今西凱夫、大隅和雄、桐井忠夫、栗田幸次、小島順、佐藤秀生、下平博巳、添田雅喜、谷本一夫、塚部隆、広瀬暢雄、松江達樹、森西正躬。
- ・被爆敗戦のため転校し去った者33人＝小頭光治、島村昭司、平田喜彦、矢田部一三、壺井純、松本陽三、朝倉敏明、岡田渥美、千代田寛、津脇弘徳、森本敏弘、吉富素彦、和田佳郎、大須賀康見、炭本俊章、長田勉、櫻井芳賢、高山健、正本良忠、溝口敏行、牛尾尚文、井上凱敬、奥村正弘、徳永道夫、吉積正隆、橘高康太、兒玉豊崇、本廣五彦、下平博巳、田貝弘、今村宏、中川喜正、中沢克彦。
- ・附属中学校を卒業し他校へ進学した者13人＝大藤剛、久保田一城、岡太誠、新藤実、大沢忍、高木哲昭、藤田源次、牧野恭彦、小川芳彦、坂本泰広、高瀬卓郎、戸井良治、松浦功。
- ・退学した者4人＝越智満、海部季雄、加美川昌幸、森本克明。

* * *

その欠けた人数を埋めるべく、引き揚げ者ほか相当数の新しい仲間が加わって来ました。大規模な学級編成の混乱、附属の学校体制自体の変動をもたらします。それが、その後の私たちに大きな影響を与えています。たった4カ月だったとはいえ、未曾有の体験を共にし、凄まじい合宿生活と崩壊した学業体制とを強いられた期間です。忘れることの出来ない時期を共に過ごした仲間たち。その、簡単には忘れられようのない仲間たちが、残念ながら、次々に姿を消して行ったのです。

しかも、年齢的にいって昭和一桁の7年生まれです。これから成人して大人になり、戦後の広島どころか日本や世界を背負って立つ、という宿命

を背負わされた年代です。世の中に出てからも、あの時代の私たちの慌ただしい別離は、心の中で、ずうーっと尾を引き続けて居りました。歳月を重ねる毎に、ああ、「戦友」とは、こんな気持ちの仲間意識だったのだな、と気づいて行ったのです。

科学学級を除く正規学級の同級生全員が、何人かを除いて昭和20年8月18日（被爆から2週間以内）の朝7時ごろ、学校を挙げての農村動員からの引き揚げとして集団で広島駅に到着し、南側の破壊された駅舎前の広場（爆心地より2キロ以内の地点）に集結。教官からの訓示を受けて解散したことにより「入市被爆者」となった私たち全員は、そこで初めて原爆により破壊し尽くされた我が町の惨状に接したのです。

そして恐らくは、未だ残留していたであろう放射線に、同時に全員が刺し貫かれた瞬間でもあったはずです。しかし、炸裂の瞬間そのものの広島の凄惨な地獄は見えていない、ということからして、ほとんど全員が入市被爆者であるという観念～もっと言えば、自分が被爆者であるという自覚に乏しいまま、折角のその日を終えてしまった、と言わざるを得ないのが残念でなりません。

附属中学校での級友は、原爆で一挙に10人を失いました。私たちは、ほんの4ヶ月前まで共に学び共に遊び、そして互いに志を抱いて小学校（当時、国民学校と呼称）を卒業し、上級学校である幾つもの中学校へと、それぞれ分かれて進学して行きました。そしてたちまち、学徒動員令で勤労作業に駆り出された先で、同じように駆り出されて来た多くの中学校生徒たちと出会います。

その中には、ほんの寸前、小学校時代の学友だった多くの仲間たちが居ました。久しぶりに顔を合わせ、「やあ、元気か、昼飯は何を喰ったんや」など声を掛け合ったものです。その小学校時代の仲間たちは、所属していた中学校の級友たちと共に建物疎開作業に汗を流しておりました。私たち附属組も同じように汗水垂らして、建物を取り壊す作業に熱中しておりました。しかし、そこで運命が分かれてしまったのです。

私たち附属中学校は、軍命令による食料確保と食糧増産のため急遽、7月20日、学校を挙げて東へ20km離れた農村（当時、賀茂郡原村）へと出勤して行きました。そして広島に残った各中学校の

生徒たちは、いつものように建物疎開作業に従事している最中、怖れていたとおり、原爆の直撃を受けてほとんど全滅してしまいました。

全滅した彼ら彼女ら全員は、ほんの4カ月前、生き残ってしまった附属の私たちと同じ小学校の同級生だったのです。こんなことになるなんて、誰が予想できたでしょうか。

なかには「附属に行こうと思ったのだが、軍人志望だったので一中へ進学して死んでしまった」などの嘆きも、聞こえて来ました。生き残ってしまった附属中学校の元1年生たちは、誰言うとなぐ一斉に口にチャック。それからというもの、沈黙の中へと沈み込んで行きました。

被爆者であると言われることすら避けました。今や数少なくなった戦争体験者であり、原爆を知っている被爆者ですが、そうされるには相応しくないと思い込み、自分の立場を自覚していたからこその沈黙です。直接被爆で大火傷を負い、ケロイドを負い、世の中から隠れるように生きている人たちが多くの中で、自分たちは怪我一つしていない。にもかかわらず、「入市」という肩書は付くけれど「被爆者」である、と言われること自体、引け目を感じたのです。負い目、と表現して良いでしょう。

だから、自分が被爆者であるということを取えないし、語らない。自分の体験も語ることがはばかれる。小学校時代の級友たちがほとんど全滅しているだけに、生き残った者の負い目を強く感じて、自ら語ることが出来ないという状態となって、全員口を揃えたが如く、まるで申し合わせたように異口同音、みんな口をチャックで閉めているという状況が、今なお続いているのです。

私も同様です。私は当日、仲間4人と一緒に5人で広島に帰るといふ、これまた運命のいたずらとしか言いようがない危機一髪を体験するわけですが、広島の惨状を、そこから逃げて来る沢山の被爆者の人たちの、まるで地獄図としか言いようのない状況を見てしまった訳です。

それを見ている自分は、身体の何処も怪我をしていない。更に繰り返すならば、私は広島の間人ではない。広島の間人の方に従うならば、「地の間人ではなく、旅の間人」と言われる存在です。つまり地元広島で生まれ育った地の間人ではなく、旅



160. 広島県商工経済会屋上から南方向
(昭和20年10月5日、撮影/林重男、
提供/広島平和記念資料館)

の途中で広島に留まっただけの間人である、と見られているのです。私は広島に親戚も誰も居ません。だから私は親戚の誰一人として原爆で失っていない。

つまり原爆の最も大きな被害を示す指標の如きポイント。家族・親戚の被爆死者や大火傷を負った被災者が、身内のなかに誰一人居ないのです。極めて奇妙な言い方ですが、家族・親戚を含めて誰一人原爆で失っていない私は、大災害のただ中で、とてつもなくいたたまれない、という重圧に苦しんでおりました。

未だ当時は、放射能を浴びたら大変なんだ、なんてことは誰一人として考えてもいません。だからみな、怪我や火傷さえなければ、平気の平左で暮らしているのです。はなから被爆者だ、なんてこと考えても居ませんでした。先ず、そんなこと、誰も全く知りませんでした。原子爆弾だ、などという事実が広まって来たのも遅かった。秩父に逃げ帰っていた私たちにも「70年間は誰も住めない…」などと聞こえて来ましたが、これが広島への帰還をためらった主原因です。

昭和20年が暮れて戦後の新年が明けたとき、中学1年生だった私にも、時代が大きく変わってしまったのだと明瞭に理解できました。それまで信じ込まされていたことがすべて嘘だったと知り、

すべての疑問が一挙に解け、一挙に正解が明らかになったように感じました。目から鱗、友人の高田勇君は、「これこそ、コペルニクスの転回だ」と、一言のもとに世の変動を断じました。「そうなんだ」と私も実感しました。

アメリカ占領軍が「進駐軍」という騙し言葉で一斉に入って来ました。日本軍とは180度以上違くと、日本人は全員が目覚めました。これじゃ負けるはずだ、と全員が納得しました。

たちまち負けたはずの日本人が、勝ったはずのアメリカ相手に、お見事と評せられるほど巧みな立ち回りを見せ始めます。

そこへ突然、朝鮮戦争という大事件が勃発。トントン拍子の復活劇でしたね、日本にとっては、の話です。広島市にも「マッカーサー通り」というお名前の直線道路ができたこと、誰か覚えていますか。紙屋町交差点からお城までの、県庁前の舗装された立派な北向き道路がソレです。彼が朝鮮戦争で原爆使用を主張したため総司令官を首になり、羽田から飛行機で去って行く場面で、多くの日本人が涙を流して見送っていたということも、ご存知ですか。

被爆後すぐに開かれた平和記念式典では、昭和22年だったかな、仮設の会場の舞台には堂々と占領軍のお歴々が足を組んで並び、式典ではご挨拶まで頂戴していたと言う事実もご存知ですか。私は式典に参列していて、こみ上げて来る怒りに燃えておりましたが、主役であるはずの日本人側が、隅っこの方でコソコソと準備を進め、ことの推移が平身低頭で終始するのが、正視できないほど恥ずかしく悔しかったという記憶です。

朝鮮戦争後から、日本は急速に成長し始めます。そして昭和26年9月8日、サンフランシスコ講和条約調印、昭和27年4月28日に講和条約発効で、占領下だった日本が独立国家となりました。

とたんに日本政府のやったことは、占領下に実施されていたアレコレの廃止、中止の続出でした。プレスコードは当然のことながら、放送三法と呼ばれていた放送法、電波法、電波監理委員会設置法のうち3番目の電波管理委員会設置法は、さっさと昭和27年7月31日に廃止されました。理由を考えてみて下さい。委員会と名が付く組織で大きいものは「教育委員会」でしょう。委員会という

組織は、政府の拘束から離れて独立した自由な組織として判断し行動する組織、としてGHQが推進して来たものです。

日本政府が、独立を取り戻した途端に廃止した理由。よほど邪魔だったのでしょうか。それゆえか、民放は以降、郵政省の思うがままに免許が左右され始めます。その中心人物こそ昭和34年当時の郵政大臣、田中角栄、その人です。

教育委員会も大変貌しましたね。政府から自立して、首相や知事からの支配を拒否していたはずの組織が今や、知事や市長の言うままではないですか。委員会の名が泣くでしょうね。骨抜きにされていますから。

何となく外観では独立国家だけど、資源がない国だから貿易で栄え、遂には世界でも有数の貿易立国になった日本です。その状況を築き上げ、引っ張り上げて行った中核世代こそ、私たち戦中・戦後世代でありました。そして、その戦後派時代にも黄昏が訪れ、新しい次の時代へと世の中が再変貌しようとして居ります。21世紀とは、そういう時代なのでしょうか。

時が過ぎ、時代も激変しつつあります。しかし、ヒロシマですら忘れ去られようとしている現在、その凄まじい時代を生きた世代である私たち附属の生き残りグループは、誰言うことなく申し合わせたが如く口にチャックで、自分が被爆者であることを語ることもなく、詳しいハナシも一切しゃべらぬまま年月を重ねて来ておりました。

あのとき、原爆で幼い命を散らした10人の仲間たちについても、既に著名人だった広島市長、粟



161. 広島県農業会広島支所(左)、広島瓦斯本社(右)の崩壊状況

(年月日不明、撮影/川本俊雄、提供/川本祥雄)

屋仙吉の長男で私たちの級友だった忍君の遺体が、自宅で父の遺体と並んで発見されると言う悲劇のほか、次々に悲報が入って来ました。広島高等師範学校教授の及川儀右衛門先生の長男、及川洋一君は、ほかの級友と共に母校校庭で点呼を受けたのち、ほど近い大学農園に向けて農耕隊としての作業に従事すべく2列縦隊で行進中に被爆。たちまち崩れ落ちて来た民家の下敷きとなりました。体の小さかった及川君は全身に覆い被さった瓦礫から脱出できぬまま、燃え広がった業火に焼かれて果てました。遺体は、ご両親直接の検分で判明したようです。学園の南門を出て千田小学校に差し掛かった付近で8月8日ごろ、暁部隊の田村大佐の部下数人が来て、大佐の息子、田村慈朗君を探そうということで、附属の宮岡教官たちも加わって焼け跡を掘り返したら、そこから3人の遺体が出て来たと言います。その1人は及川君と分かりました。ほかの1人は、焼け残ったパンツに「田村慈朗」と名前が付いていたことで身元が判明しました。もう1人も「平本博」と名札があったので身元判明。この場所では3人が被爆死していたのです。

ところが実はもう1人、北村龍郎君が、この場所で被災し重傷を負いながらも脱出。級友の谷口治達君に支えられながら遠く仁保国民学校まで逃れたものの、ほとんど何の手当てもして貰えず明くる7日の朝、谷口君に看取られながら息を引き取っています。だから南門の悲劇と私たちは言うのですが、ここで附属中学校の1年生、私たちの級友は都合4人が被爆死しているのです。

同じように大学農園に向けて行進していたほかの1年生11人も、全員が大火傷を負いながら、なんとか九死に一生を得て生き延びることが出来ました。

そのほかの被爆死した級友の詳細は、遂に分かからず終いと言う残念な結果で終わりました。今井啓爾、楠本惟雄、高田作弥、二宮芳樹、増田永造。うち何人かは兄が附属の先輩だったりして幾分か状況は判明しております。

農耕隊を当日、引率統制していた上級生の濱井隆治（37回）さんは、自身も大火傷を負いましたが、被爆のため多くの下級生を死傷させてしまったことに大きな責任を感じ続けておりました。あ

の日、あの瞬間、誰かが叫んだため2列縦隊の行進は一時、停止したのです。「Bちゃんが飛んで来よるぞ」。その声で行進は止まり、列は崩れ、みなが振り返って空を見上げようとしたので、咄嗟に指揮官だった濱井さんは、「列を乱すな、1年生、前へ進め」と号令をかけた。幼い1年生の列は生真面目に前進を始め、両側に民家の迫る路地へと入って行ったとき、空が炸裂したのです。

「俺が、あんな命令を出したばかりに1年生を殺した」と自分を責め続けていたのです。その償いに、なのでしょうが彼はやがて、ヒロシマを取材し、ドキュメンタリー作品を次々に出版し、著名な作家「織井青吾」氏へと変身しました。そして探し始めたのです。俺の命令のせいで被爆死した1年生たち全員の遺族を探し出し、事の次第を説明して詫びたい、仏前に線香1本でも供えたい、との目的でした。

しかし、思いも半ばで、彼の願いは挫折します。遺族からの拒否に遭遇するようになったのです。折角、ご遺族を探し当てて遠方まで出かけて行っても、「これっきりで、もう来て欲しくない」「お会いしたくありません」。

濱井隆治さん、いえ作家・織井青吾となった先輩から予て事情を聴かされていた私も、ただ啞然とし、言葉を失いました。そしてやがて、「そうだったのか」と考えを改めるようになりました。被爆者として生き残ってしまった私たちも、ご遺族の前に自分の姿を現すことを、ずっと控えて来ていたではありませんか。こうして私たちは、これ以上の遺族探しの旅を諦めました。12歳で逝った、あの日のまま残しておこう、とです。

被爆者に対する差別の問題があります。私たちの仲間では、ほとんどなにも差別とおぼしき扱いを受けた、と語るものは居ません。半身に大きなケロイドを残す仲間たちも、表立って差別経験を語ることは少ないと言うのが実状です。それも広島在住組と、関東などの中央や地方に出て行ったグループとでは矢張り、いささかの違いは存在するようですが、ほとんどの仲間は、昔流の表現で言う、「こと挙げせず」というのが実状です。男女での差は、あり得ると思いますが、それでもなお、世の中一般、巷で囁かれているのが耳に入るようなとき、良い心地のする者は居ないでしょう。

それも含めて、大多数の人々がそうだったように、戦後を生き抜くことに必死で、被爆を語ろうなどという気持ちは起こりませんし、意識的に避けていたこともあって思い出すことも嫌でした。被爆者であると思うだけでも嫌だったし、それを訴えたり意識したりすることもないまま成長。社会に出て荒波をくぐり、やがて定年を迎える時期となり、ようやく過去を振り返るようになりました。

つまり昭和20年という少年期を私たちは精一杯に生き抜いて、被爆・敗戦そして大混乱の戦後をも生き抜いて成長し、復興と発展を支えて現在に至ったと言う次第です。考えてみると、母校というものも、歴代の学籍簿も、重要な歴史的資料類も、原爆ですべてを失っており、我が母校ですら、創立以来の母校史を整えていく上で必要な資料が、見事に何物も残っていないと言う現実には直面しているはずだ、と気づいたのです。

とりわけ、母校史の空白を生んだ昭和20年という年は、まさしく空白の一年間であるはず。そのど真ん中を生きた私たち41回生は、その貴重な生き証人ではないですか。

意識の変化

○新井 定年が50歳という時代の当時、間もなく、その50歳の定年を迎えるという時期になり、節目ごとの同期会で集まりを繰り返しているうちに私たちは、フイっと、自分たちの立ち位置の意味、稀有で貴重な体験を担った世代の一員なのだ、と気づく年代になっていた、というのが正直なところでしょう。

縁あって昭和20年4月、というかけがえのない時期に、附属中学校と言う一種独特な雰囲気擁する学校へ入学出来た連中。そして人類史上、始まって以来と言う原子爆弾と、我が国の歴史上初めてという敗戦・被占領国民という稀有な体験をした世代。そろそろ世の中の第一線から身を引くという時期になって、「そうなんだ、私たちは稀有な世代だったんだ」という思いに至ったのです。

私たちの世代だけが体験した、昭和20年という空白の時間を再構成できるのは我々だけだ。それなら私たち昭和20年入学組の「41期会」が、その空白を少しでも埋めることに寄与しようではない

か、と気づいた結果が、手記とドキュメンタリー構成『昭和二十年の記録』の発行～1984年、昭和59年7月20日、となるのです。

私たちは、全国に2か所しかないうちの西の1か所にある、旧制・広島高等師範学校附属中学校に昭和20年4月4日に入学した、正規学級と科学学級1年生の生徒です。

先述の通り私たちは、被爆と敗戦で学級が崩壊し、転校、退学、留年、残留などでバラバラになってしまいました。崩壊した学級を埋めるため新しい仲間を加え、新制の学校として再発足しました。

学校自体も生誕の地である広島市を離れ、東広島市周辺の地を流浪した時期が長く、元の広島市東千田町に復帰してからも翠町への移転などと変遷を経て現在に至っています。

しかし、附属と言う学校に学んだ多くの生徒たちは、みな卒業してからも同窓生である、との意識を強くして「アカシア会員」としての資格を保有しております。そこで私たち41回生は考えました。稀有な学年として特色を有する私たちは、附属高等学校を卒業した者に付与されるアカシア会員との肩書を私たちの学年では、最初に附属中学校へ一緒に入学したものの、原爆と敗戦と言う特殊な事情で他校へ転校した者や、家庭の都合などがあって退学せざるを得なかった者にも、同じ同窓で学び、生死をも共にした仲間として、同じアカシアの肩書を付与するチャンスを与えて欲しいと提言しました。かねてより類似の主張もあり、会則の中に、正規の会員と準会員の2種類の座席が用意されていたので、級友からの推薦と入会金との手続きを経るならば、正規会員と全く差のない準会員への登録が認められるようになっておりました。

この制度をフル活用して私たちは、新たに「アカシア41期会」と名乗る同期会へと転身しました。つまり、終戦後に集中的に去って行った正規学級と科学学級の旧友を探し出し、同じ原村での農村動員生活や、同じ東城町での学業一図の蚤虱生活を共有する仲間として、「アカシア41期会」の名で遇する組織に切り替えて現在に至っております。その過程で私たちも、原爆の被爆者であるとの連帯意識を強めて行きました。

言うならば、あの時代を、中学1年生という、

かなりの確に物事を理解し判断できる年齢であった我々が体験をしたという事実。仲間内にも直接被爆した者が多数存在する事実。彼らと、入市被爆した大部分の学友との違い。当日入市した5人の存在。他校は原爆でほとんど全滅したのに、その全滅を免れたはずの附属でも、1年生10人の被爆死者を出している事実。

全校で数えれば、附属でも30人の犠牲者を出しているのです。教官では岡本恒治（国語）、瀬群敦（文法国語）、仲頼次（美術）の3教官。附属を卒業したばかりで助手補として採用されていた西村実雄（35回）、小松昭三（36回）、若狭良行（36回）の3教官が見落とされがちです。そして事務職員としては稲積薫、松原緑の2人と、雇員の小笠原菊三、草尾アヤノ、吉岡正一の3人で5人を数えます。これで教職員としては合計11人。

生徒は4年生が加藤恭三、光明幹郎、岡山國彦の3人、3年生が梶原康弘、福原晃司、松本清司、三浦亜沙夫、横山敏治の5人、2年生は永井卓爾の1人、1年生は先述の通りの10人で、生徒の合計は19人。かくて附属での原爆犠牲者は30人を数えます。

「附属は敵前逃亡したから、原爆による犠牲者は居ない」などのいわれなき噂はキッパリ否定して戴くとともに、30人もの尊き犠牲者を出したうえ、明治以来の伝統ある校舎と、貴重な文献資料類を失ったという、附属の実態を是非とも知って戴きたいのです。

原爆のため、母校の昭和20年という1年間の歴史が空白のままである。それを埋めるべき立場に居るのは、我々昭和20年の入学組だということが発端です。

定年50歳を目の前にしたとき、はっと気が付くと、我々もやはり被爆者の一人であるとカウントせねばならなくなっている、もう被爆者の一人として発言せねば、あの空白の昭和20年という時代を埋めることが出来ないじゃないか。被爆者の数は年々減って行きます。必ず毎年減って行く。そして、そのうちに被爆者と呼ばれる人が一人も居なくなる。必ず、その時が来る。そんな時代が近づいて来ているのだから、これはもう、今のうちに我々が、あの時代を語り残すべき責任がある、との自覚に至って出版に踏み切りました。



162. 山野上純夫氏近影

しかし、まだ語るには時期尚早、ということではほとんどの者は口にチャックのままでありました。たぶん私が、仲間の中では最初に語り始めたのではないかと思います。私は誰も家族を失っていない、広島出身ではなく旅の人だから、身寄りや親戚などの誰一人として失っていません。被爆者のなかでも失ったものがなく、幾らかではあるが痛みも軽いという立場が、私に口のチャックを緩めさせたのではないかと考えています。

私の附属での上級生の中に、同じ思いを持つ人が居ます。当時、科学学級の4年生で直接被爆した山野上純夫さんです。現在は京都府八幡市在住で、元毎日新聞の記者です。

あの日は、教室で文理科大学の増本文吉教授の化学の授業を受けている最中に被爆し、級友2人を失ったものの、ほかの全員は倒壊した教室から脱出して九死に一生を得ます。もともと高知の出身であり親族の被害もないことから、語る資格が無いと思っていたら、とか。私も同じです。

私は直接被爆をしていません。入市被爆者ですから、なおのこと山野上さんに比べれば、もっと広島との関わりが浅いわけです。山野上さんすら語る資格はないと思っていたのだから、私も自分から口にしたことはありませんが、そう思っていましたし、語ることは控えておりました。

語ることを控えていたというのは我が仲間の161人、全員そうなのですが、被害の程度には極端な差があり、家族の全てを失い原爆孤児となっ

た者も居ります。一様ではありませんが、取った態度は一様な沈黙でした。仲間の一人は、夜な夜な思い出すから手記に書くのも嫌だと、ずっと手紙すら送ってくれませんでした。だから当然、語ることを避けておりました。

そして『昭和二十年の記録』の発行に至るのですが、そのとき私たちは、初めて文字に書いた記録を残したことになります。

「今こそ、記録を残そう」。言い出しっぺの私は、機会を見つけるごとに仲間たちを口説いて回りました。説得もしました。しかしほとんどの仲間は尻込みをして、思い出すのも嫌なのだから、書いて記録を残すなどご免だ、の一点張りでした。

そのとき、高田勇君が「空白の昭和20年を記録しよう」と乗り出してくれました。こんな経験をした学年は外にない。他校に比べれば、我々は極めて少ない犠牲を負っただけで終わった。少なくとも全校全滅という悲運は免れた。しかし、同級生は10人、全校で言うならば30人も失っているではないか。これだけの被爆犠牲者を出したうえに、自分たちの学び舎すら失ったという事実を記録に残せるのは我々だけである。

こんな体験をしたのは私たちだけです。附属にとっても、昭和20年という年は、学校の歴史の中で消えている。学籍簿も失われた。我々が何とかして、あの歴史の空白を埋めなければならない。空白を埋めるためには、我々の当時の記憶を辿って、残っているのが奇跡みたいな、少しばかりのメモや日記を辿り、何とかして築き上げて行こうではないか、という機運が盛り上がって来たのです。

もちろん、私一人が主張しただけで、こういう大事業が出来るものではありません。この機運に同調してくれた、同じ思いを持つ大勢の仲間が居てくれたからこそ可能になったのです。たいてい言い出しっぺがやるようになるものですから、私や井上公宏君など、実務に長けた者が中心になり、八丁堀に自宅があるというご都合宜しい人物（井上公宏君でした）が、先ずは事務局を引き受けろ、となって事はドンドン運び始めました。

受け付ける体制が整ったら、次はいよいよ、全員に呼び掛けて何らかの手記を求めるか、または日記などの提供を呼び掛け、貴重な一次資料の収

集に取り掛かる段階です。最初に声が挙がったのは昭和46年8月8日、つまり卒業20年目の同期会の場でした。

主たる目的は、信じられないでしょうが、同期の仲間の正確な名簿作りです。卒業して20年も経つというのに、被爆から敗戦時にかけて各クラスに一体誰が居たのか、未だに判然としていなかったということです。

おぼろげな記憶を基に、一斉に名簿作りを始めました。1年北組、南組、東組、科学学級の4組。これの名簿の確定が、初手から困難を極めました。原因は、あの当時、一斉に半分もの仲間たちが姿を消したからです。転校やら帰郷やら退校やら、大混乱のなかで一斉に多くの仲間が消えた。その仲間の記憶を辿れ、という方が無理難題でした。

同月14日には、遠く離れた比婆郡東城町で、初の科学学級同期会も開催されました。続く15日、広島市内の会場には、3組の正規学級と科学学級の合同同期会が開催され、かつての恩師多数もお元気で参加してくださり、恩師と生徒で35人もの大盛会となりました。

昭和50年8月10日、私たちは再び懐かしの原村に集まりました。この年は被爆30年であると同時に我が母校の創立70周年の年でもありました。集まった私たちの手には、出来上がったばかりの同期会名簿がありました。

これが私たちを踏み切らせました。確かに何篇かの手記も集まって来ました。そこで4人の日記が見つかるわけです。当時、学校から日記を書けと命じられて、みんな書かされたことは覚えています。書かされたのは、入学して暫く経ってから「全員、反省日記を書け」という命令が出ました。それまでに、自分から日記を書いていた人は少なかったんですね。少なくとも私みたいに正月から書き始めたというのは、あんまり居なかった。

だいたい早くから書き始めていた連中を4人見つけました。私のほかに、吉本幹彦君、西川亮君、高田勇君。この4人の日記が出て来たというか、当時の日記を残していたので提供して貰い、これを軸にして、昭和20年の私の場合は元日から、ほかのメンバーは4月4日の入学式から、ずっと記録を辿って行き、まず昭和20年1年間の年表を作ることから始めました。そういう形で昭和20年を



163. 教順寺での卒業20周年同窓会風景
(昭和46年8月8日)

記録し始めましたね。

同時に、私たちの学生生活、学徒動員生活、建物疎開作業。それら広島市内での学徒動員令に基づく勤労働員作業から抜け出しての、原村の農村動員生活、その後の附属という母校を失ってからの、原村と西条近辺を流浪の民のように彷徨った1年半の生活。そして昭和22年1月に、やっと千田町に戻ったバラック校舎時代の附属学校的生活。幾つもの生活を重ねて来た訳で、それ等の全てを書き留めようということです。

まだ、それら全てを語る、というまでには至っておりません。学校自治会、生徒自治会が出来たけれども、まだ、それどころではなかった。食えることと生きて行くことと、学校の建物や備品を整備して勉強するということが精いっぱい時代です。とても思いはそこまで至りませんでした。

そこに思いが至るのは、やはり戦後も少し時代を重ねて行く、朝鮮戦争で生活が幾分とも変わって来るという時代にならなければ、目は外に向かなかったのだらうと思います。我々仲間は「それどころじゃないわい」という思いでいっぱいでした。今の人には分からないと思いますが、生きて行くことに必死だった、熱中していた時代。昭和20年8月6日以降、原爆と敗戦という大混乱の中を生き抜くということ、生きるためには食わなければならぬ。これが先ず第一の目標でした。

その次に、勉強したいと思いました。せっかく中学に入ったのに勉強していない、させて貰えない。英語も化学も物理も物象も生物も、みんな一緒に、立派に勉強をしようと思って中学に入って来たのに、4月いっぱいだけ、ちょこちょこっ

勉強のまねごとをさせて貰っただけで、あとは動員生活で消えてしまった。

しかも通年動員という名前のおり、もう、年間通して動員だという。勉強はその合間に、雨が降ったら勉強しろ、空襲警報が止んだら勉強しても宜しい、という程度の勉強ですから勉強になりはしません。英語だって、ABCの書き方だって、なかなか覚えられなかった時代です。それを厳しい戦後の暮らしの中で、これからやろうとなった。

この二つが目標です。生きていくこと。そして学び舎、学校に戻って来たんだから、それこそ勉強だ、何とか勉強を進めて行こう。これでしたね。

それに、教科書とか参考書とかノートとかというのは全部、自分たちで作るしかなかった。文部省から配って貰えたのは、今でも覚えているのは憲法の解説の本だけでした。『新憲法の解説』なんていうのが文部省から、堂々たる印刷物となって配られました。もう、現物は何処かへ行ってしまったのですが、誇りを持って国家が、新憲法制定を生徒たちに伝えて、しっかり学べということで配ってくれた訳です。あの本の印象だけは強かったなあ。新しい憲法が出来た、我々を守ってくれるとね。それに伴って全てのことが変わった、時代が変わった。我々をガラッと変えた。つまり、戦時中の軍国少年が一挙に民主主義少年に変わることが出来たのは、時代そのものが変わったからです。憲法を中心にして、世の中が全部ひっくり返ったのですからね。

その原動力は新憲法ではありますが、NHKの「真相はこうだ」という番組が、ですね、戦時中の嘘っぱちの軍と政府の発表やラジオ放送の内容を、全部ひっくり返して真実を伝えてくれました。あの番組には、本当にショックを受けました。あのラジオで、私たち軍国少年は騙されていたのだ、ということに身に染みて知りました。

私が放送人間になったきっかけは、それだったと思います。なぜならば、戦時中から私はラジオの発表を疑って聴いていました。

「大本営発表、わが勇敢なる特攻隊は、沖縄方面に突入して空母5隻を撃沈、戦艦3隻を撃沈」などと、毎日、勇壮な軍艦マーチに乗せて、我が特攻隊の大戦果をどんどん発表して行くのです。

私は密かに計算し始めていました。特攻隊に

よって沈められたはずの敵空母の数が、どんどん増えて行きます。何十隻、いやもう百隻近くになっている。戦艦だって、どんどん沈めている。巡洋艦も駆逐艦も輸送船も、次から次へと我が特攻隊によって沈められている筈だ。

そうすると、沖縄周辺のアメ리카大艦隊も、そろそろ消えてなくならなければならない。少なくとも敵艦の数が減ってしまっても良い頃です。

ところがアメリカは逆に、どこからか、どしどし空母などを増強して、ますます沖縄周辺はアメリカの空母や戦艦で埋め尽くされているような状態らしい。これは何かおかしい、と思い始めておりました。

それが敗戦後に、「真相はこうだ」という番組が始まってすべてが明らかになったのです。やっぱり全てが嘘で固められていたのだ、騙されていたのだ、と気づいたのです。これが私をラジオというもの、つまり広報というか宣伝というもの、それから真実を伝える、ということについて考え始めたキッカケです。事実と真実とは違いますからね、その両方ともラジオは機能として兼ね備えている。

当時は時期として、民間放送という珍しい民間のラジオ局が誕生したばかりです。民間放送は、国とは縁を切って自由にやっていた。それが産まれたばかりですから、ますますラジオと言うものの特性～速報性と宣伝力、独立色横溢の、イメージ豊かなメディアの優位性を懸命に主張し始める時代です。そんな時代に私たちは、洗脳されていた軍国少年から一挙に民主少年へと、変身したのです。

同時に、大人は信用出来ないということで、大人に対する不信感が強く心に焼き付きました。自分が大人になったら、あんな馬鹿なことはせんぞ、あんな阿呆な人間にはならないぞ、日本をあんなお粗末な国にはせんぞ、と固く誓ったはずですが、顧みるに、その誓いはどうやら果たせなかったと思えるし、今もって悔しい思いを持ち続けております。強烈な大人不信感でしたね。

『昭和二十年の記録』を出版

○新井 こうして入学時の古い仲間を探して消息を把握し、改めて「アカシア41期会」と自称する

新・旧双方の仲間、戦後に新しく加わって仲間も網羅した拡大同期会として再発足した仲間たち、全員の名簿を整えることに成功しました。

途中で昭和59年1月4日に、1年北組主任だった三木温美先生の自宅書斎の机の引き出しから、昭和21年に作成したと見られる1年生全員の出席簿が発見され、既に進行してした我々独自の仲間探しの成果とドンピシャで合致した時には、思わず歓声を上げましたねえ。

その間に、入学したものの直後に建物疎開で自宅が強制立ち退きとなり、止む無く転校して去った米山裕夫君だとか、途中編入したけど事情があり直ちに転出した吉原瑞彦君や片岡延充君ら3人は、41期会名簿には掲載するものの、心ならずも列外1名の扱いとなりました。

発見されたと言うか、奇跡的に保存されていた4人の戦中日記は、貴重な第一次資料として『昭和二十年の記録』を構築しました。4冊の日記で再構成された昭和20年の年表は、毎日の動きが克明に記録されており、見入る全員を惹き付けました。

それらを基に、私が同窓会アカシア会の会報に連載し始めた読み物記事、「全滅を免れた附属中学1年生」は、被災した級友たちの証言も加味し、科学学級と言う戦時特殊学級の存在から、被爆直前に、科学学級生徒を除く全校生徒が軍需施設へ勤労働員されていた事実、低学年生徒の農村動員名目での郊外脱出の合宿出勤、科学学級生徒3年生までの全員が比婆郡東城町へと脱出した劇的な事実を連載しました。

それと同時に、事情により広島に残った残留組



164. 恩師を囲む「昭和20年を記録する会」
(昭和56年10月18日)

が当日、大学農園に向けて行進中に直接被爆し多くの犠牲者を出した南門での悲劇。危険を承知のまま母校内で授業中に被爆し、級友2名を失った科学学級4年生の特異な被爆事情なども物語りました。

そこで語られた学校側の（担任教官方の）行動が、如何にして附属中学校の生徒たちの被爆全滅と言う、必至と思われていた運命を変えたか。誰もが、その点に視点を注ぎ、全滅を免れ得た私たちの運命は、教官方の冷静で沈着な判断と果敢な行動によって支えられていたことを初めて知ったのです。

お元気だった教官方も、快く私たちの企画に賛同して出席して下さいました。昭和56年10月18日に開催された、恩師と生徒合同による、「昭和20年を記録する会」がそれです。会議の内容は簡略な会話方式に記録し直して全編、相当な紙幅を占める座談会記事として、この『昭和二十年の記録』に掲載されました。全員が当時の直接の担当者であり、当事者です。すべての事実と真実とが、かくて一級資料としての価値を秘めて記録されました。

その録音テープも、貴重な第一次資料として保存し管理しております。ご参加いただいた恩師の教官方のご尊名を列記し、改めて深甚なる感謝を捧げたいと思います。

*	*	*
満窪鉄夫	理事（現在の副校長）	
宮岡 力	学徒動員主任（農業）	
田辺綱雄	科学学級担任（物理）	
高田平八郎	同（生物）	
橋岡信一	同（化学）	
藤井堅志	同（数学）	
三木温美	北組担任（数学）	
田中清三郎	南組担任（歴史）	
小谷 等	東組担任（国漢）	
*	*	*

かくて完成した『昭和二十年の記録』は、母校史の『80年史』『90年史』『百年史』で共に重要資料として引用・転載され、記録の重みと共に、人類初と言う稀有な体験を歴史に残す役割を果たしました。各方面からの引用なども多く、その存在の貴重さを改めて物語ってくれております。編集



165. 『昭和二十年の記録』（私家版、昭和59年）表紙

は私を含む世話人多数、事務局は井上公宏君経営の八丁堀「ラウンジ アカシア」、印刷は中国印刷、経費は凡そ60万円と記録されております。

この記録が声を大にして訴えたいことは、ただひとつ。狂気の如き戦いの末に、一億玉砕を叫ぶ軍部の無謀な戦争指導のもと、明らかな敗戦への急坂を転げ落ちる我が国のなかで、広島附属中学校だけが、恐らく我が校ただ一校だけが軍命令に反抗し、正確に時局を見透す英知と冷静な判断力、そして鮮やかな知恵と行動力とで、多数の若い生徒たちを危険な建物疎開作業から救い出し、食糧増産という誰一人反対できぬ目標を掲げ、20キロ離れた農村へと出動～つまり広島から脱出して、1～2年生総員で300人にも及ぶ幼い命を救ったという事実。このことを是非とも、歴史を学ぶすべての人々に問いかけたいのです。

附属だけが被爆全滅を免れたと言うのは、結果のほんの一部に過ぎません。本質を見誤ってはならない。先生方の英断と行動力が多くの中学生を被爆全滅から救えたのは何故か。そのことを是非、考えて欲しいのです。稀有な歴史的事実として学んで欲しいのです。いま当の私たちは、心決めてこの事実と意味することどもを語り伝えようと、命の炎を掻き立て懸命に証言し続けております。

生き残ってしまったアカシア41期会の私たちは、あるとき、小学校時代と中学校時代双方の仲

間多数を失いました。そして私は原爆の熱線に焼かれた彼らから、愛児を失った家族の多くから、必死の思いで「かたき討ち」を頼まれ、涙ながらに約束しました。世にいう「蟻螂之斧」かもしれないが、私たちの肩には、原爆と、それを落とした者への「かたき討ち」という、重い責務が押し掛かっているのです。

仲間の消息調査と謝恩碑

○伊東 同級生のお名前が昭和59年あたりまで分からなかったのですか。

○新井 いえ、昭和59年に出版した『昭和二十年の記録』には、全員の名前が載せてありますから、これと突き合わせていただければフルネームの文字も分かります。

○伊東 あれを調べる時に、ご記憶とかもたどられたという話だったのですが。お名前を全員把握して行って、その後、消息が分からない方を。

○新井 ああ、名簿がつくられた過程ですか。それは石田先生にはお見せしたのですが。

○石田 これのことですか？

○新井 それではなくて、少し厚手の冊子にして発行しているんです。本人の顔写真と自筆のメッセージとをね。

【追補：1991年、平成3年8月10日付けで、附属高校卒業40周年記念出版として、井上公宏君を中心に私が助っ人に入り、両名中心で作成した小冊子が存在します。名簿と近況集の第1号。

『我ら昭和の少年団、一言（ヒトコト）メッセージ、41期会、好い機会に酔い欣快』との遊び心の

サブタイトル付きのタイトルで、顔写真付き、自筆のメッセージによる消息集と住所録入り名簿という構成の、珍しい横長版59ページの小冊子です。このときから、途中で消えて行った旧友にも呼びかけ始めております。かくて卒業以来の再会など、多くの感銘を残した集いだったと井上君によるあとがきが残る「消息集の前身」が見つかっています。同期の諸君はご記憶にあるでしょうが、宮島での泊まり込み型同期会で、久保田訓章君の口利きで国宝館を無料で見学し、平家納経を見ました。直後に猛烈な台風19号が襲来し、巖島神社が破損したニュースで国内が湧きました。】

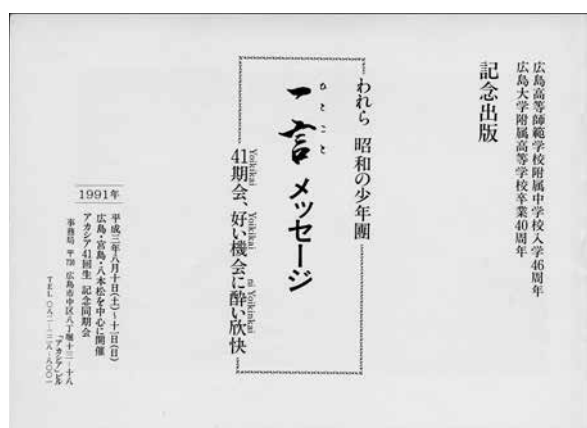
最初は1971年、卒業20周年記念の同窓会をやるやという頃に、名簿を作ろうではないかということになったんです。なぜかという、原爆で死んでいった10人は本当に10人かなと疑問が湧いた。最初は11人だったという話をしましたね。それが本当に10人だったか、どうだったかな、となった。

当時、私たちは11人だと思込んでいたんです。なぜなら、『生死の火』という大学の出版物と友達同士の記憶とを突き合わせて、俺たちの同級生で原爆で死んだのは誰だということを調べ始めていて、最初は記憶を辿って行って11人とカウントしていたんです。

そのほかに途中で消えて行った者たち、少しの期間しか附属に居なかった者もありました。その消えていった者たちも記憶を辿るしかないの、北・南・東と組ごとに記憶のいい者がたいてい一人くらい居るので、「お前の組は誰が途中で居らんようになったかいな」というので書き出させました。そして仮名簿みたいなのを作って、同期会ごとに「いいかな？」と検討会をやって行った。

それで最初に手をつけたのが昭和46年8月8日に開いた卒業20周年の集まりで、これは原村巡りと教順寺での法要を終えて、広島市内の郵便局関係の施設の中特会館に移って先生方4人をお招きして、生徒は29人で記念会を開いたのです。ここ（新井氏作成証言メモ）に「名簿」と入っていますが、ここで名簿を正式に作り始めています。

そのころは40歳前後です。まだ原爆・核兵器反対なんていう気持ちはほとんど誰も持っていません。世の中を生き抜いて行くことに精いっぱい。



166. 『一言メッセージ集』表紙
(平成3年)

卒業20年といったら、世の中では中堅とおだてられて疾走させられ走り回らされている最中ですから、せめて昭和20年という年だけはみんなで整理してみようや、という気持ちになって始めたのが最初です。そういう同窓会毎の記録を私がメモし始めて、この（『昭和二十年の記録』）巻末に載せています。我らが同期会を開くたびに名簿と、それからもう一つ、手記を書いて残そうやと。名簿と手記について発言し提案し始めて、そのうちの手記は結果的に計3編を出しました。

そして手記と同時に、これは「消息・近況メッセージ集」と称して、みんな毎年1年間、どうやって過ごしたか、どうやっているか、というのを何か形にして残さないか、というので、近況報告付きの名簿作成、これも結構早い時期に始めています。

○石田 頂いている資料だと近況メッセージ集というのは平成4（1992）年になっていますが、それでいいんですか。

○新井 はい、そうですね。メッセージはさることながら、手記ということになると、最初のうちは体験を書き残すことに躊躇する人が居ました。あまり被爆のことは言いたくない、という人たちですね。でも少しずつですが、手記と呼べるような文書が寄せられるようになって来て、平成13（2001）年4月には、附属高校卒業50周年記念誌として、ごく薄い小冊子ですが、『わが昭和史』と題する最初の手記集を発行することが出来ました。高田勇君のように両親とお兄さんを亡くしてしまったような人は、「しゃべるのは嫌だ、書くのも嫌だ」となるのは当然ですが、稀有な体験は、やはり書いて残さない記録にならないというので『わが昭和史』として手記を発行し始めたのです。

その手がかりになるのが、名簿ですよ。それを始めたのが昭和47年。それから卒業20年に当たる昭和46年、入学30年に相当する昭和50年と続けて同期会を開き、名簿を作り、そのたびに先生をお招きして先生から話を聞いたりして、巻末の開催記録を少しずつ充実させながら、名簿も充実させて行きます。

そして昭和59年、1984年、先生方の中で一番若い北組担任の三木温美先生が、ご自宅の机の引き

出しを開けたら、ガリ版刷りの全員の出欠記録用の名簿が出て来た。これには戦後の生徒の転入・転出の動きも書き込んであったので、価値が高いと思います。初めて出席簿が出て来たということであり、それが私たちの名簿づくりの基本となり本格的な作業を助けてくれました。最初に確かコピーをお渡ししたと思います。

○石田 ちなみに、先ほどのお話にあったように、41期会の幹事が新井さんと井上さん、高田さん、松島さんの4名と。

○新井 この4人が中心メンバーです。

○石田 それは、卒業20周年の時から4人が中心になって始めようとおっしゃったんですか。どのぐらいから4人が中心になってきたんですか。

○新井 自然発生的に、初期は昭和30年の正月に同期生たちによるマージャン会を開き、その発起人と世話人が高田勇・井上公宏両君ということでスタートしたのが事始めですね。この集いが毎年の恒例行事として参加者も増やしながら長らく続きました。やがて暫くして、マージャン音痴の私でも参加できるような懇談会風の集いに変化してきて私が加わり、次いで松島君が地方勤務から運輸局の広島本庁に戻って来て加わって、そうして、いつの間にか4人が世話人となって居りました。

やがて年齢を重ねるにつれ次第に体調を崩すようになり、先ず井上君が亡くなり、松島君が抜け、私が入院手術を繰り返す、ということになった次第です。最近仲間内でも元気者の松木朝海君が、陰に陽に私たち世話人を支えてくれるようになり、今や実質的に松木君は、新しく世話役の一員に加わって、新井俊一郎、松木朝海、高田勇という3人体制へと世話人も変化しております。

なお41期会には、広島のみならず東京41期会という我らが同期会が東京にも存在し、数人の役員を擁して春秋2回の定例懇親会を開催しています。この暫くはコロナ騒動で中断していますが、岡田豊、永野泰道の両君が世話人で、学士会館での東京41期会には、高田勇君や吉本幹彦君も幾度か参加して賑やかに放談会を開催して来ました。かつては世話人も前野長昭君、谷本禎生君たちが科学学級の実態調査などで活躍してくれていたのですが、惜しくも早く亡くなってしまいました。各地から東京へ全員集合しての、41期会の東京大

会を開催したこともあります。2003年、平成15年でしたが、亡き級友の奥様も参加して下さり、男っ氣ばかりの41期会が突然、煌びやかで賑やかになったものでした。

当時の井上君は八丁堀に自宅を構えており、場所が良かったうえに家業を電気屋さんから喫茶店と画廊経営に変えたので、場所が良くてコピー機と電話があって、お茶も飲めるということで、そこを乗っ取って41期会の事務局にしてしまい、この『昭和二十年の記録』の編纂・出版作業などをやったんです。

場所は八丁堀のど真ん中だけど経営は難しかったらしく、途中で商売替えて麻雀屋になったんですが、とうとう店を畳んでご夫人の実家がある祇園に移ることになりました。その店仕舞いと引越しのとき、41期会事務局の古い資料が残念ながら失われてしまった。三木先生から頂戴した出席簿の原本も消えたとし、先生方の座談会でのスナップ写真も、貴重な資料類が消えました。やがて井上公宏君ご本人も亡くなってしまい、あとは記憶を辿るしかありませんが、あの三木先生宅で発見されたガリ版印刷の出席簿のコピーが残って居り、随分と役に立っております。

これには昭和20年4月入学生の名簿、とメモ書きがありますけど、北・南・東組だけで、科学学級はありません。各学級の末尾に手書きで付け足して名前がある2人は、明らかに後から入って来ている。こういう具合に付け加えられているので、これは結構、後になって使われたものだということが分かって来るんですね。

これで大体の名前が分かって来て、被爆死した旧友は11名だったはずだと思って出席簿の名前を調べたけど、「石橋堅治」という、被爆死したと思っていた11人目の名前は無いじゃないか、となった。よくよく調べましたら、先ほど話した『生死の火』のなかで、高等師範学校の1年生の（原爆死没者）名簿の中に、その石橋（堅治）なる人物の名前が明記されていた。分かった、これが混乱の元だということで、その石橋君1名を41期会として正式に抹消しました。なぜ私たちの名簿に、高師の生徒の石橋堅治なる名前が紛れ込んだのか、これが疑問なのですが、私も大学の『生死の火』による被爆死者名の記録を基本に、41期会の名簿作成を

進めたはずなのに、そこには、石橋堅治の名前は明らかに高等師範の生徒欄にある。附属中学校欄には多くの死没者名が散在するものの、石橋堅治なる名前は無かった。明らかに間違っていました。

広島大学発行の『生死の火』によると、高田作彌君は2年生となっていて、死亡場所が大学南門前となっている。二宮芳樹君も大学南門前となっている。増田永造君も大学南門前となっている。もう一人の同期生、粟屋忍君は名前そのものが無い。大学南門前での犠牲者は1年生だけ4人で、発見された3遺体は、満窪・宮岡両先生とご遺族が確認した及川・田村・平本の3人で、仁保小学校まで逃げて死亡した北村を加えて被爆死者は4人だけのはずです。混乱期とは言え、何故、こんな混同を来したのか不思議です。恐らく私が間違いをしでかしたのだらうと恥じ入る次第ですが、余りにも見え見えで明瞭なのに間違えたとは、我ながら信じられないお粗末さです。

更にお恥ずかしいことに、確認せぬまま「謝恩碑」という石碑の裏面に「11名を失った」と刻んで建立してしまった。その後、間違いに気づき、その数字を訂正して「10人」と直すべく41期会の皆に詫びて報告し、諒承して貰いました。建立した石崎大理石店には、数字の修正作業をして貰いました。このとき初めて41期会の原爆犠牲者は10名だ、という事実が明瞭に確認され、『昭和二十年の記録』にも、その事実と経緯とを書き込みました。

実は私たちの161人以外にも、あやふやな2～3人の幽霊級友が存在することが、この段階で判明しておりました。今もって彼らが、正規の級友だったのか否か不明です。名簿の中に「特殊異動」とメモが付けられた人物が3人います。4月に入学したけど、すぐに居なくなった人物。何故かという、建物疎開で自宅が取り壊されたので、もう広島には居られない、と言って消えたのが、南組の米山（裕夫）君。これは同じ南組だった、記憶力抜群の高田勇君が覚えていました。確か、米山というのが段原方面から来て居たぞと。それから吉原（瑞彦）君は「バンビーノ」なんていうニックネームだけが残ってしまったが、彼も東組に居たはず。片岡（延充）君も科学学級に居たはず。彼らは入学したけどすぐ転校したグループで

す。もちろん出席簿にも載っていません。

こういう名簿上の列外1名が、各学級に存在して居るんです。居ないのは北組だけ。だから計3名をカウントしなければならん、と考えたけど、結局、これは止めておこう、と決めました。後年、米山裕夫君から手紙を貰いました。それまでずっと、我らがメンバーとして通信連絡を送っていたのですが、広島は記憶は僅か何週間、何日間しかないし、広島で何かあったに違いないと思われるのですが、広島は記憶は思い出したくない、と言って来たのです。せっかくの気持ちは有難いが私を仲間として扱ってくれなくて結構です、という内容の手紙が私宛てに届きました。

いまも41期会の名簿上、米山君の名前は残しています。しかし、彼には連絡しないことにしました。名簿には、私たちは彼を今後とも仲間として遇したいという意思表示として、名前を残しております。片岡君も、吉原バンビノ君も、名簿上に名前を残しております。事情は分かった。でも俺たちはお前たちを仲間と思っているよ、という意思表示です。

その意思表示を喜んで、ひとしお嬉しがってくれたのが中澤(旧姓植野)克彦君でした。2013年、平成25年8月、「70年間ずっと俺を仲間だと思って名簿に残してきてくれたとは、嬉しい」と言って、それからは毎年8月6日、私たちが建てた附属の慰霊碑前での式典に高知から飛んで来ます。台風で危うかった時も、事前に福山へ泊まり込むなどして広島まで来てくれました。こうなったら、迎える私たちの方こそ感動です。中澤君は私たちと再会してからというもの、初めてだそうですが、自分自身の、凄まじいと表現せざるを得ないほど



167. 発見した中澤君を囲む「二水会」
(平成25年)

の被爆体験を証言し始めました。それまでは一切、話したことはなかったそうです。彼は半身大火傷で気を失い、気が付いたら戦争が終わっていたという壮絶な体験をしています。彼のお母さんが、大竹に運ばれていた彼を発見しているのです。よくぞ大竹まで探しに行ったものだと思います。たまたま大竹に、高知銀行の支店があって、そこに母方の叔父という人が居て、そういう人たちの世話にもなったらしいのですが、瀕死の重傷を負った彼を大竹まで探しに行きつけて出したとは、凄まじい母親の愛情と執念の塊を見るが思いです。そんな様々な危機を乗り越えて植野君は生き残ったんですが、まだ広島で救ってくれた二人の兵士の名前も分っていない。探したくて何度も広島に来たが分からず仕舞いだとか。だから私たちとの仲間になって、わざわざ高知から来て正月の新年互礼会にも参加してくれました。そのうえ毎月恒例の「二水会」という、広島在住組による放談会にも顔を出してくれるようになりました。毎月の第2水曜日に広銀本店裏の「喫茶さえき」が定例会場なんですが、コロナ騒ぎで現在は小休止となっております。

もう一人、同じような仲間が増えました。2017年、平成29年10月、72年ぶりに、旧東組の潮田史郎君という旧友を発見しました。彼は西宮に健在でした。発見の端緒は、被爆時に一中の3年生だった人で、当日は病欠で自宅に居て助かったが級友のほとんどを喪い、ずっと亡き級友の被災状況と遺族の消息などを探し続け、手記集を次々に出版して来た浜田平太郎さんからの電話でした。



168. 潮田君を囲む新年互礼会
(平成30年1月2日)

愛称「ハマヘイ」さんからの情報は、一中の級友で被爆死した潮田玄一君には弟が居て、附属の1年生だと聞いていた。「最近その弟と連絡がつき住所などが判明した。新井君が旧友探しをしていると聞いていたので、潮田史郎君の連絡先を伝えよう」。即一発でした。ハマヘイさんから聞いた先に電話を入れました。豪快な声音で、「潮田史郎です」と応答が返って来ました。10月19日、とのメモが残っています。私たちの名簿には、明らかに潮田史郎の名前が残っていました。「また一人、見つかった」、と叫びましたね。浜田さんは電話で、いま潮田君の弟は西宮に健在で、結構ガンボな仕事をやっているらしい、とのこと。すぐに電話をしたら一発で「俺だ」、ということで見つけた次第です。大阪大学の造船を卒業し日立造船一筋で生きて来たとか。豪快率直なワケです。「行くぞ」となって彼も広島に飛んで来ました。思えば、すぐその西宮在住で、然も「ノリテツ」の彼は、既に何度も原村を訪ねており、教順寺はもちろんのこと、詳しいのなんのって宮岡先生宅まで足を運んでいたし、広島市内も熟知の様。鉄道ならどれも好きらしく、芸備線も伯備線も山陰線も姫新線も呉線も、「路線の風景が、みな美しいんだ」と歓喜の声を上げながら走り廻っている、という人物。広島に来たからにはタダで帰ってなるものか、という訳で毎月のように広島に飛んで来ます。「よく俺を見つけてくれたな」と喜んでね。彼は造船の第一線で働いていたので、相当な「貴様と俺は」という、叩きあげの現場人間になっていました。技術系なのでしょう。41期会のPCグループで組織しているメーリングシステムにも加入してくれて、いまや賑やかなメル友ぶりを発揮してくれております。

そんな具合で、旧友の消息情報が次々に飛び込んで来るようになって50人ほど見つけ、38人との再会を果たしました。アメリカに居た旧友は、見つけたトタンに飛んで来ましたよ。モリカツ（森本克明）というアダ名の二世なんです、なぜかと言えば、「おい俺、原爆手帳を取りたいんだが、何とかしてくれえや」ということ。もちろん、直ちに全員で協力して手帳は即座に取得でき、嬉しそうに帰って行きました。朝鮮戦争にも従軍し、無事に生きて帰れたとか。彼との再会記念写真も

残っております。

いまや原爆の手記集は各地で発行されていますが、その中に、「俺の弟は広島の附属中学校1年生だった」という記述がありました。これは、ある作家の先生が、その本を見つけて私に連絡して来たのです。その作家の先生というのは附属での私の上級生で大河小学校の出身。乱暴者のナンバーワンみたいな人物だったのですが、その人物が長じてドキュメンタリー作家の織井青吾(本名、濱井隆治39回)になっていて、「おい、お前のクラスに、平田という同級生がおらんか」と問い合わせたのです。私はしょっちゅう41期会の名簿を作っているの、ほとんど全員の名前が頭に入っているの、「平田喜彦ですか」と答えました。「そいつの兄貴らしいのが、横浜の文集に手記を書いている。その文集を送るから読んで本人に連絡せい」ということになった。連絡したら、これもドンピシャ大当たりで、当の本人が広島に、すぐ飛んで来てくれました。それがなんと正月休みなのに元日に広島に来て泊まり込み、明るる正月2日の41期会恒例の「新年互礼会」に出席してくれたのです。お互いに嬉しかったなあ。そのときの写真も残っていますよ。

そんな具合で、消えた50人のうち38人までは直接対面というか、すぐさま広島に来てくれました。いまなお交流が続いているのですが、残念ながら既に半分ぐらい亡くなりました。その後も奥様から手紙を頂戴することも多く、よほど喜んで戴いて居たのだなあ、改めて感激を新たにしております。

○石田 先ほど、お名前が出た石橋さんのお話というのは、たぶん伺っていないと思うのですが。



169. 62年ぶり再会の平田君（元日に）

○新井 そうでしたか。ではきちっとお話し致しましょう。私たち41回生での被爆死者数は11名である、と謝恩の碑を建てた昭和56年までは勿論、この『昭和二十年の記録』を出版する寸前まで、私たちはそう思い込んでいました。

○石田 それは広島大学が出した『生死の火』にそういうふうを書いてあったからそう思われたんですか。

○新井 いいえ。『生死の火』を改めて読み直して分かったんです。高師の1年生の欄に、私たちの級友だと思い込んでいた「石橋堅治」という名前があった。これは間違いだ、どこかで私たち同期の名簿に混入していたんです。だから私たちは、この『昭和二十年の記録』を発行する寸前の昭和59年1月4日に、恩師の三木温美先生の机から発見された出欠点呼用の名簿が手に入ったとき、初めて正式な41回生名簿が確認できたのです。そこにも「石橋堅治」の名が無かったので、彼は被爆死した級友ではなかったと確認し、これは訂正し削除せねばならないということになって、「謝恩碑」に刻んでいた11名の数字を10名に修正するということになりました。

○石田 それが分かったのは、どういう経緯で分かったんですか。

○新井 三木先生宅から発見された私たちの名簿に、石橋堅治の名が無いと分かったからです。それまで私たちは、ずーっと、仲間のうちで被爆死したのは、石橋堅治を含む11名だと思い込んでいました。

新入生だった私たちは、既にお話ししたとおり、入学したトタンに仲間入りしたばかりの級友が何人か居なくなったりしたまま、教室での授業を放棄して学徒動員で作業に出るみたいな、混乱し変動する毎日を送っていた訳です。隣に居たはずの級友が誰だったか、なんて気にする余裕も無く被爆です。もちろん新入生名簿なんて誰も貰っていない。学校側も、名簿を印刷し発行し生徒に配布することも無かったまま農村動員に出動し、疎開し、途中で帰宅してしまう生徒も出るしで、何もかも混乱しているまま原爆です。誰が俺の組に居たか、居なかったか。被爆死した者が大勢出たらしいが、それは誰だ、誰が名前を確認したのか。大混乱のなか、頼るのは先生方の記憶と我々生徒

側の記憶だけでした。

そうして被爆死した級友の名前を聞き出し探し出し、併せてクラスの名簿も整えて行ったのです。上級生に兄貴が居たはずだとか、小学校時代に家が近かったから覚えているとか、様々なルートを辿って名簿が出来て行ったわけです。つまり入学時から被爆、敗戦の混乱さえなければ、私たち同期会名簿が正確か否か、なんて問題で困るなんてことは無かったはずです。そのあたりまで時期を遡らないと明確にならないのが私たちの名簿なんです。

だから、そういった混乱のなかで、いつの間にか41回生の被爆死者として石橋堅治の名が混入していました。出典は『生死の火』からだと思いますが、なぜ高等師範学校の生徒として明記してある名が、附属中学校生徒の中に入って来るような誤記か誤解が起こったのかが分かりません。附属生徒として数えられるようになった時期も不明確です。途中からだけ世話人の一人に加わった私の錯覚か、もしくは思い込みだったのでは、と推理するほかないと私は考えています。このことは、何処かで触れたように記憶しています。

敗戦後ならいざ知らず、それまでは印刷された名簿なんて誰からも配られていません。組ごとに仲間の氏名を思い出して寄せ集めた、仮の名簿とでも言うような感覚ですね。それぞれのクラスで級友の氏名を調査し確認しよう、というのが卒業20周年記念の同期会以来の課題でした。その過程で錯覚が起こったとしか考えられません。被爆直後に、私たちの同期は11人が被爆死した、などというショッキングな話題が出たという覚えもないのです。

1984年、昭和59年1月4日、三木温美先生が、出席簿を発見してくださるまでは、私たちが記憶を唯一の手懸りとして作成した41回生の名簿しかなかった。だから常に再点検していたし、私の手元には、発刊されたときから『生死の火』はずっとあった。それを開いて見たのに、見間違えたのでしょうか。あの中にはちゃんと、石橋さんの名前は高師1年生の部にあるのだから。

(昭和20年の出欠者名簿のコピーを見ながら)これです。これが三木先生のところで見つかった出欠簿だけど、これには石橋という名前がない。

『生死の火』の広島高師の死没者名簿を開いてそれで『生死の火』を見たら、ここに高師の1年生として石橋の名前がある。なぜ、これが紛れ込んだかが分からない。この名前をここで見つけたので、これは違う、ということになったんです。

○石田 本来は附属のほうに入るべき方だったんですか。

○新井 いえいえ、それは違います。だから、なぜ石橋さんの名が附属の方に入って来たのかが分からない。

○石田 ここに石橋さんという名前はないですね。

○新井 ないですね。ないのに、なぜこれが私たちの仲間だというように、私たち全員が思い込んでいたのかが分からないんです。

○石田 『昭和二十年の記録』の時に、この石橋さんの名前を入れてしまったわけなんですか。

○新井 いや、『昭和二十年の記録』には石橋の名前は入れていません。発刊の直前に真実が判明したから載せておりません。しかし「謝恩碑」の方には入ってしまっていたのです

○石田 なるほど。でも、一回つくった石碑を直すというのはなかなか大変でしたね。

○新井 自分の同級生が誰だったかということがずっと分からなかったというのは、ちょっと信じがたいことだけど、事実です。だから、よくそんな話をすると、そんなバカなことがあるかと言われるんですが、思い込みというのは本当に怖いんですね。石碑にまで彫り込んでしまったんだから。石碑に名前を刻まなくてよかったなと言ったんです。人数だけで。

○石田 そうですね。

○新井 どこでどう思い込んだのか、今になっては辿れないけれど。実務担当の私の大失策です。

この『昭和二十年の記録』を出してからというのは、この本を出すに至るまで、5年か3年刻みで卒業何周年、入学何周年の同期会、というのをきちんと開催して来て、そのたびに記録を残して来たことがずいぶん助かっています。この中の最後のページの記録～いろんな同期会の開催記録がずらっと入っています。330ページから最後の370か380ページまであるわけだから、結構そういうことで記録を残していました。

それと同時に、我々の記録を文字で手記として残すとともに、途中からだったけど、8ミリ映像で記録を撮り始めました。そのDVDを確か1枚お渡ししていますよね。どの時期から撮ったかは、それを見たほうが早いんだけどね。

そのVTRデータはHDDに入っているから、ダビングは簡単にできます。

○石田 それは同窓会の様子を撮られたんですか。

○新井 そう、私はカメラが好きなんです。松島義雪君もそうだから、二人で撮影したのを松島君が全部編集して、タイトルも入れて一つのDVDにしました。いま何枚も複製して持っているはずだから、後でゆっくり探します。録音の話はしましたよね。カセットテープが残っていることは。

○石田 附属の教官の座談会ですよね。

○新井 そうです。これはCDにしているから、またいつかの時点でそっくり提供します。

○石田 この「昭和20年を記録する会」というのはテープ起こしはされているんですか。

○新井 テープ起こしはしておりません。その頃は、録音テープの音声を一字一句、すべて文字に起こそうなんて考えませんでした。私がテープを再生しながら、要点筆記という意識するような要領で文章化しました。それを、この『昭和二十年の記録』の中に座談会として、主要な部分を抜粋で記載しています。要約筆記でね。いわゆる文字起こしみたいな、詳細なものではありません。全部ではカセット3本分ですから、意識です。

○石田 この「昭和20年を記録する会」というのは、今の『昭和二十年の記録』を作るために同窓生が開いた座談会になるんですか。

○新井 そうです。わざわざ私たちが当時の恩師の先生方に集まって載いて、同期会とは別の日に開催しました。昭和56年10月18日、ホテルシルクプラザの会議室で、120分カセットテープが2本半。従ってCDが5枚組になったものを2セット作りました。カセットの本編は、いま大事に私が持っています。これもラジカセがあれば聞けるようになっています。最初は経年劣化でテープが粘着して全然駄目だったんです。動かないので乱暴なことをしました。カセットの中央の孔に指を差し込んで、テープを送る方向に合わせて手で強引に廻しました。それで動かしていたら、動いて聞

こえたんです。

○伊東 いや、よくやっていました（笑）。

○新井 機械をいじくるのは子どもの頃から好きでしたし、理屈から言って、廻って行く方へ回せば動くはずですよ、完全にテープが張り付いてしまっていない限りね。乱暴なことをやりましたが。

○石田 こういった本を出すとか集会を開くというと、それなりに費用がかかる話じゃないですか。そういった費用はどこから出されたんですか。

○新井 その都度すべて、41期会の仲間内から基金を募りました。（紙袋から書類一式を出しながら）こういう41期会の預金通帳が作ってあるのです。これが収支の会計ノートです。これが現金、という具合に私が全部処理して管理しています。

○石田 では完全に同窓生の会費で。

○新井 そうです。仲間だけの基金で、どこからも支援金なんて出ませんから、自分たちだけで、自費出版の非売品私家本として発行しています。その方がやり易い。どこからか助成金を貰ったら、申請手続きと報告書だけで大変だから。

それで残念なのは、附属の構内で開催している8月6日の慰霊祭。あれは原爆慰霊祭でありながら広島市の助成金を受けられないんです。何故かというとな附属の慰霊碑には、先輩の遺志に従って今次大戦の戦死者も祀られています。今次大戦における附属出身の戦死者をね。そのことが理由で、原爆死没者だけの慰霊行事ではないから、というクレームが入って駄目になりました。

私は怒っています。戦没者の名前も入ってはいるが、肝心要の被爆者の名前も、きちんと入っているのです。被爆者の名前が無くて戦死者のみなら理解できるが、ちゃんと被爆者の名前があるのに、なぜ被爆者以外の人祀られているからダメとなるのか、理由にならない、と私は主張して怒っています。アカシア会員の中には広島市関係の人間は大勢居るけど、私の理屈は正しいだろうと言うのにダメ。これって、絶対に広島市の理屈はオカシイ。時代が変わってしまったのかなあ。

「謝恩碑」の建立経緯

○新井 『昭和二十年の記録』につづいて、『わが昭和史』3部作も出版したので、これでひとまず



アカシア会 41回生同期会 昭和56年8月16日

170. 「謝恩碑」建立風景

基礎資料が整ったというとき、人で言う還暦に相当する被爆60年目の2005年、平成17年が近づきます。その年は又同時に、母校である附属の創立100周年という特別な年でもあり、格別に忙しい年でしたねえ。

先ず私たち41期会（中心人物は高田勇君）が発起人となって動き出していた附属の慰霊碑建立の機運が、アカシア会で承認され正規の事業として動き始め実現に至るのです。これにはチョットした紆余曲折があったのですが、このことを述べる前に、私たち41期会が母校構内に建立した「謝恩碑」について先ず触れておきたいと思います。

名が示すとおり、広島の中学校、女学校は原爆のため1～2年生はほとんど全滅の運命を辿りますが、ただ一校だけ、私たち附属中学校だけは全滅の非運を免れました。これは一重に、当時の母校教官方の英断と勇気の賜物であることに對する、救われた私たちの感謝の意を表するとともに、原爆により失われた10名の級友の冥福を祈るべく、昭和56年8月16日、母校の構内に謝恩碑を建立させて戴きました。その碑文から。

「太平洋戦争末期、全国の主要都市が焦土と化

しつづつあった昭和20年春に入学した我々広島高等師範学校附属中学校1年生百余名は、8月6日、人類初の原子爆弾により千田町の母校で十名の級友を一瞬にして失った。しかし、他の大多数は被爆の直前に広島市を離れ、科学学級は比婆郡東城町、普通学級は賀茂郡原村へと、それぞれ農村動員挺身隊等の名目で学校を挙げて疎開したため、危うく全滅を免れ得たのである。これは、厳しい戦時体制下でありながら冷静な情勢判断を下した母校と、恩師をはじめ多くの関係者の御尽力の賜に外ならない。爾来幾星霜、原爆のため止むなく多くの友が去って行った一方、その後新たに多数の級友を得て、いま卒業三十年を迎えるに当たり、ここにその経緯の概要を記し母校へ深甚なる謝意を表すると共に、亡き友の冥福を祈り、後代にこの事実の語り継がれんことを願い、之を建立するものである。アカシア会四一回生」

謝恩碑の題字は、当時の学年主任だった小谷尊先生（国漢）の筆によるものですが、同先生は「私たち教官たちも、生徒諸君と同じように共に命を救われたという感謝の念を捧げたいと思っています」と語っています。

謝恩碑建立の発議は、1975年、昭和50年8月10日の入学30周年記念会の席で、手記集発行の件と共に全員の総意として言い出され、昭和56年を目標とする方向で決まりました。世話人の顔ぶれも広島在住組を軸に、自ずと定まって来ます。新井、高田、松島の3人に、やがて帰郷する井上公宏君が加わり4人組となって行きます。反面、松島君の転勤があり、実質3人組となりました。

碑文に明記した通り、私たち1年生は161名、2年生を含めると300名近くなりますが、農村動員挺身隊として広島市郊外に出て行ったがために救われた。我々は母校の英断によって命を救われた。しかし残念ながら1年生で10人、2年生で2人、更に上級生や教職員を含めれば総計30人が原爆で犠牲になっています。その意味からも、母校に対する謝恩と共に、死んで行った仲間たちへの慰霊の想いを重ねた「謝恩碑」を建てよう、と決めたのです。異口同音でしたね。

それからというもの、石を探す組、裏に刻む碑文を考える組、学校側と交渉する組などと分担しました。国立学校となると、校庭へ簡単に石碑を

建てるなど許されません。まずは国との折衝があります。私は折衝組の中心となって実務を背負いました。そういうかたちで準備が始まります。（新井氏作成の謝恩碑建設経緯のメモを手にとりながら）高田勇君が石碑の文案を書き、建立の具体的な計画を進めました。

後に西条の町議会議長を務める黒川通信君と、京免計（きょうめん・はかる）君の二人が、向原の山の奥に入って見事な自然石を見つけ、これは安く手に入るぞというので交渉してくれたし、その過程で石碑の建立は井野庭石園と決まり、費用は据え付け工事も含めて総額73万円。これは41期会全員による募金で賄う事として着工しました。

学校側とは、副校長の堀芳夫先生と私で段取りを決めました。国立学校としては、学校内に記念碑などを建てる場合、まず建立の許可を受け、建立後は、これを国に寄付する手続きを取り、寄付の許可が下りたのち、国から学校側に差し下ろすので、以後の維持管理は学校側が責任を持って、というシステムなのだそうです。

手続きは猛烈に煩雑。しかも寄付して貰う立場のはずの国は、寄付することを差し許すという態度。つまりは「貰ってやる、有難く思え」というようなものです。驚き呆れましたが、これが国立学校の現実なのですね。

さて先ずは、学校側とで建立する場所を話し合っただけで決めようとなり、何人かで学校に集まり相談しました。この辺のことは『昭和二十年の記録』の中の、最後の同期会の活動報告の項目に書きましたが、案外とんとん拍子に事が進み、1981年、昭和56年8月16日、午後4時すぎ、母校構内北西部の緑地帯内で「謝恩碑」の除幕式が神道形式で執り行われました。

除幕式の神事を執り行うのは、級友の東照宮の久保田訓章宮司。介添えの巫女はご息女。原村巡りから参列者一行が会場に到着した時には、キッチリと四隅に笹竹と注連縄で結界が完成しており、大きな白布が碑を覆っていました。

衣冠束帯の神官姿の久保田宮司が、私たち全員の想いを読み込んだ祝詞を厳かに読み上げ、田辺綱雄先生と井上公宏君とで除幕。一斉にカメラのシャッターが切られ拍手が沸き起こり、祭事は最高潮に達しました。当日の様子は明るく17日、中

国新聞の紙面を大きく飾って居りました。

母校に慰霊碑を建立

○新井 この経験が、私たち41期会が中心になって慰霊碑を建てよう、と言い出すキッカケになるのですが、学校側に打診したところ正門付近はどうか、などと好ましい反応を戴きました。そこで正規のルートに乗せて「母校内への慰霊碑建立」計画を推進すべく平成15年に、被爆時の在校生有志で発起人会を組織し、以下のような「建立趣意書」をアカシア会へ提起しました。

「広島高等師範学校附属中学校、原爆死没者および戦没者慰霊碑建立の趣意書～母校創立100周年の平成17年に際して戦争（原爆を含む）に依り、あたら前途有為の人生を奪われたアカシア会員に対し、深甚なる弔意を籠めて慰霊碑を建立すべきであると考え。因みに、広島市内で此の類の慰霊碑がないのは我が母校のみであろう。20年前の創立80周年の際にも、戦後アカシア会“中興の祖”である24回生の藤居平一氏がこの旨を提起されたが、当時としては『創立八十年史発行事業』達成の陰に隠されてしまった。以来、記念事業に携わった者の胸中に、このことが消えることなく残っており、今回が最後の機会としてぜひ慰霊碑の建立を実現いたしたいものとする。なお、この案件は寄付金に依らずアカシア基金からの拠出が望ましい。平成15年5月、慰霊碑建立事業発起人代表、山口巖（40回）、高田勇（41回）」

次いで、この趣意のもと、発起人会から建立のための実行委員会へと発展的改組を行い、平成16年3月17日付けで、具体的な建立計画を取りまとめ、被爆時の現役1年生から4年生までの在校生から代表者を選任して、新たに「被爆時在校生の会」を設置し、慰霊碑建立の具体的な計画立案と推進に当たることを決定しました。

4年生からは平尾博司氏、3年生からは木村淳邦氏、2年生からは山口巖氏、1年生からは高田勇、浜田逸郎および新井俊一郎がメンバーとなり、新井が主として事務を預かると決めました。

初期アカシア会中興の祖であり、日本被団協の初代事務局長であった藤居平一さんが常日頃主唱しておられたテーマ、「諸先輩への鎮魂の譜を記録し残したい。とりわけ原爆に至るまで幾多の戦

いによって若き命と未来を絶たれた、多くの戦没諸先輩の存在を改めて想起して欲しい。その時代を経て築かれたアカシア・スピリットを受け継ぎ、母校とアカシア会発展への功績を記録し、それらを象徴する何らかの標を残して欲しい」との歴代アカシア会役員たちの願いを重く受け止めて建議した慰霊碑建立の計画です。

究極の非人道的兵器たる原子爆弾を実体験して「戦争」の何たるかを知り、その「修羅」の中から現在に至る国の礎を築き上げた諸先輩をも併せ合祀したいというのが、私たちの建立する慰霊碑の趣意です。こうした慰霊碑の意義を十分に理解して戴けると私たちが期待した方こそ、アカシア会の会長として組織を牽引しておられる石井泰行さん、その人でした。ややもすれば、「原爆では附属は無事だったのだろう」程度の理解で終わるか、さなくとも、戦いを知らぬ若い役員から慰霊碑無用論も出たと聞きました。しかし石井会長の決断は変わらず、母校創立百周年記念事業の一環として「原爆死没者及び戦没者慰霊碑」を母校正門脇の緑地帯にアカシア会が建立する、と正式に決定したのです。学校側も即座に対応してくださいました。

私たち41期会としては、早くから100周年を見越して考えておりました。母校の構内に謝恩碑を建立したという経験を持つ私たちは、歴代、アカシア会の常任幹事という役員を引き受け、その活動を内部から支えて来ました。内部組織の月例当番幹事も6学年下の47回の後輩たちと共に引き受け、運営ぶりでは見劣りせぬ成果を挙げたと自負しています。北・南・東の僅か3組しか居ない同期生たちながら、5組を擁するヤング会員と比較しても劣ることなき募金実績と活動ぶりを誇っています。それだけ私たち41回生は、戦時下で生死を共にした仲間たちとしての結束と、イノチ救われた母校への恩義を決して疎かにせぬという、典型的アカシア精神の持ち主たちばかりです。

そのなかで私は、同期の浜田逸郎君と共に1980年、昭和50年から41期会の代表としてアカシア会の常任幹事を務めておりました。41期会の事務局長を自任しながら、本部アカシア会の役員も務めるといふ二足の草鞋ですね。別に負担と感ずることもなく、当然の役割と心得ての役員就任でした。



171. 推進役の高田勇君と私と慰霊碑

幹事長だった大先輩の藤居平一（24回）さんは、初代の被団協（原水爆被害者団体協議会）事務局長として被爆者のため国会請願活動などで援護法や医療法を実現させた功労者ですが、戦後のアカシア会を復興・復活させた幹事長としても獅子奮迅の勢いでアカシア会を牽引しており、常日頃、何とかして果たしたい夢がある、と口にしておられました。それがこの「アカシア物語」というか、アカシア会の基礎を築き上げ、我が国を世界に通用する近代国家へと発展させた礎でもある、戦没諸先輩の足跡を顕彰するシルシを残したいという願いでありました。

近代日本の誕生期とも呼ばれる1905年に創設された我が母校に学び、志半ばで戦陣に散った諸先輩の事績を記録に残したいとの望みでありました。母校の創立100周年を記念する事業の一環として建立する慰霊碑こそ、藤居元幹事長ほかの大先輩から委ねられた私たち後輩役員のお役目であろうと思うのです。

原爆という未曾有の地獄絵で終わった昭和という戦争の時代の悲劇を、我らが慰霊碑は朝な夕な、登下校する現役の附属生徒たちへ語り掛け、訴え続けてくれることでしょう。

原爆死没者としては、当時の広島市長、粟屋仙吉氏の長男で、附属中学校1年生だった粟屋忍君など10人の私たち41期会の同期生たちのほか、2年生が1人、3年生が5人、4年生が3人と、生徒は合計19人が犠牲となりました。教官の被爆死者は、日直だった岡本恒治教官など6人。職員の被爆死者は事務雇いの松原緑さんなど5人。かくて教職員としては11人が犠牲となっており、附属

での原爆犠牲者は総数30人に達しております。

その一方、戦没アカシア会員は、上海事変勃発と同時に、戦死者第一号と呼ばれた附属中学1回生だった山口巖部隊長など122人。片や戦没教職員は、昭和20年7月1日の呉空襲で戦死した配属将校の寺田陸軍大尉など3人。かくて戦没者の合計は125人に上ります。

私たち慰霊碑建立に携わった者たちは、その一人一人をアカシア会事務局の電算機に納まっていた会員名簿データから抽出してチェックし、それをまた、残されている古いアカシア会員名簿と突き合わせて確認しました。更に不明や不確かな事例は、同期の生存者への電話聞き取り調査や往復ハガキでの問い合わせで確認を進めましたが、その実査作業のほとんどを、私と事務局のご婦人メンバーとで連日の探索・検索で取得したデータの調査に没頭したものです。歳月を経てからの確認作業は困難を極めました。しかし正確さは最優先事項です。お名前の文字確認でも困惑したケースがありました。どんなワードプロセッサでも見つからないお名前の文字がありました。固有名詞ですから仕方ありません。ここへ例示するのも困難なほど、個性的な文字を使ったお名前があるものなのですね。

建立作業と同時進行で最後の最後まで調査を続けましたが、完全無欠という段階に至るのは無理でした。止む無く分かっている範囲で留め、追加や修正のためのスペースを碑面に確保する、ということで折り合うしかありませんでした。実際に、建立後2年ほどは修正と若干の追加作業が発生しましたが、いずれも無事に対処することが出来たので、実務担当として安堵しております。

学校側も、「分かった」と即応して下さいました。同窓会であるアカシア会が建立するという事なら、学校側も全面的に協力するとして、かつて謝恩碑を建てたのと同じような寄付手続きも順調に進みました。

前述の通り建立場所は、学校側の提案により、毎日生徒たちが登下校する正門脇の緑地帯とし、慰霊碑の向きも学校の正門の方向を向いて建てる、と決まります。建立後、国への寄付手続きを終え学校へ下付されて以降は、維持管理などを学校が引き受けると合意しました。かくて建てるこ

とに決まります。建設業者もアカシア会員である岩崎大理石と決定し、その岩崎側からは、使用する石材は平和公園内の慰霊碑を建立した時の残石を使おう、との提案があり、学校側もアカシア会側も、喜ばしいことだと即座に承諾。あとは具体的な慰霊碑の形や、刻入する合祀者の氏名に卒業回数を付記するか否か、など具体的作業へと移行しました。形状は奇を衒うことなく、平凡ながら幾分の裾広がり、正面長四角の台形型大理石製で、裏面に建立趣意書と合祀者名を刻み、正面は正式名称を横書き篆書体で刻むことで全体像が整いました。

裏面の冒頭には、建立の趣旨として端的に、「母校の創立百周年にあたり、戦争とりわけ原子爆弾に依ってあたら前途有為の人生を奪われた諸霊に対し深甚なる弔意を捧げ碑を建立する」と刻みました。その後合祀者の氏名が一定の基準に従い、まず原爆死没者97人。次いで戦没者120人の氏名が刻まれて碑裏面は埋め尽くされました。

平成17（2005）年4月16日、附属中学校の創立100周年記念日は4月17日なのですが、その前日の16日（土）に開催された記念行事のなかで、慰霊碑の除幕式と慰霊式典とが挙行されました。しかし公式には、創立記念日である4月17日建立として記録する事と致しました。

建立したのは附属の同窓会であるアカシア会ですが、実質は慰霊碑建立委員会という呼称で、当時の1年生から4年生までの「被爆時在校生の会」が主体となつての慰霊碑建立事業でした。更に言えば、実質は新井と高田の二人でした。建立趣意



172. 初の原爆忌慰霊式典で挨拶するアカシア会石井泰行会長

（平成17年8月6日）

書も碑面の文章も業者との交渉も全部、私と高田勇君とで書き上げ整えました。

第1回慰霊式典を開催

○新井 平成17年8月6日、母校に初めて建立した「原爆犠牲者および戦没者慰霊碑」の前で、第1回の慰霊祭を開きました。同年4月に除幕式を行ったばかりの慰霊碑を前に、附属中学校として初の原爆忌式典でした。その全てを取り仕切ったのは、41期会の私と高田勇君の二人でした。被爆後60年目にして初めて附属構内に慰霊碑を建立したのも、私たち二人が中心でした。

そうであるなら、8月6日の原爆忌の式典も当然、私たち二人が責任を持って取り仕切るのが自然の流れというものでしょう。公式には「被爆時在校生の会」が主宰して執行したのですが、この会の名称を決めたのが私なら、メンバーを選んだのは高田勇君です。言い出しっぺは高田、実務者は新井、というのが、この41期会二人組の特色かな。けっこう私もいろんなこと言い出して実現して来ましたが、高田と新井は名コンビと言われています。なにせ小学校時代からだから、足掛け80年の付き合いとなると、実の兄弟を超えるのかもしれないね。もちろん、その後ろにはアカシア会事務局の歴代レディ方のバックアップあってこそその成果です。感謝・感謝の事務局様、であります。

学校側も副校長の隠善富士夫先生に始まり、歴代の副校長先生が引き継ぎ、現在は日浦美智代先生が原爆忌式典の担当となっているわけです。実務上は西原利典（73回）先生はじめ、多くのアカシア教員の先生方から格別の御尽力を戴いて今日があります。これまた紙上を借りて御礼を申し上げる次第です。

既に引退されましたが隠善副校長は、実は私たち41期会のヤンチャ坊主たちが賀茂郡原村でお世話になっていたとき、多くの仲間が進んで押しかけた評判の高い農家「隠善さん」の御一族だったので。私たちみんなで原村に「感謝の碑」を建立した除幕式の時は、全く私たちは気付かなかったのですが隠善先生、現場の教順寺の庫裏に来ていらしたとか。ご縁の深い、原爆忌の式典などで特にお世話になった先生です。再びの感謝！

閑話休題、附属での原爆忌式典の流れを、少しばかり簡潔に説明しましょう。すべての基本台本は私が書いて、私自身が機材を操作しながら司会と進行をやっていました、初期の3年間ですね。

慰霊碑のある緑地帯を含めた正門脇の校庭に、慰霊碑を正面にして参列者用の椅子およそ30脚を並べ、正門前に受け付け台を置き、参列者から御芳名を署名して載いて式次第一覧表を渡します。その係は41期会の長老と事務局のご婦人方。

中学校1年生120人は、遺族や来賓などの周囲を取り囲んで集合する形で参加します。初期はテントなしの炎天下でした。

- ・午前9時、開式の宣言と会の趣旨流れを説明
- ・アカシア会会長の式辞と追悼の言葉
- ・黙とう
- ・校歌斉唱（CDを利用して旧制時代の校歌）
- ・遺族代表の献花と献水（慰霊碑前へ係が介添え）
- ・アカシア会会長の献花と献水
- ・学校代表の献花と献水
- ・被爆時在校生の会代表の献花と献水
- ・生徒代表の献花と献水
- ・参列者全員による流れ献花と献水
- ・閉式の辞（のち講堂での被爆証言の会へ誘導）

式典には初期から毎回、現役の中学校1年生約120人全員が参列しており、慰霊碑には全員が献花し献水もして貰っています。のちには学年組ごとの指名献花となったり、千羽鶴の奉呈が始まったり変化が生じて行きます。

それへの対応を感じ始めたころから、ヤングアカシア会員が世話役となって参加するようになりました。それまでは、建立の実務者である私たち41期会と事務局と学校とで、すべてに対応して居りました。冷房完備の講堂が休憩所でした。

現役の1年生というのは附属への新入生です。附属という学校へ入ったからには、母校の歴史から知って欲しい。とりわけ校門の脇に立つ慰霊碑とは何物か、戦争と原爆と母校と広島の関係すべて知っておいて欲しいのです。

彼らは新しい校歌しか知らない。昔は「をのこわれら いつとせ」という歌詞でしたが、現在は「若人我ら」に変わっています。原爆忌では旧制時代の校歌を歌います。そのために「コールアカシア」という附属OBの合唱団が作ったCDを会

場に流して、その歌声に合わせて、旧制の校歌を歌って貰うのです。

献花は遺族代表から始めて戴きます。第一回的时候は日支事変勃発の時期、上海上陸作戦で戦死した1回生の山口巖部隊長の奥様と、被爆死した37回生の横山靖さんの奥様、お二人に参列して戴き、慰霊碑に花束を捧げて戴きました。その介添え役は、アカシア会事務局のご婦人方でした。

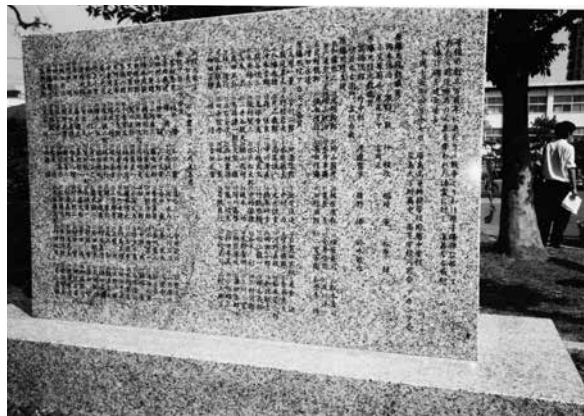
それを統括して世話するのが、私たち41期会の老人たちだったのですが、先に申しました通り、途中から、月例アカシア会の当番幹事学年の若いOB・OGたちが応援に入ってくれるようになって現在に至った訳です。その式典を終えたのち、脇にある母校の被爆講堂という冷暖房完備の環境で、新入生である中学1年生たちと式典参列者を対象に、大先輩の被爆者からの被爆体験を聞く会を開催して来たのです。コロナ騒ぎで途絶えておりますが、何とか先輩の被爆者が健在中に、この伝統を引き継いで戴きたいと願っています。

○石田 若い役員理解が得られなかったということですが、当然ながら新井さんよりも学年が下の常任幹事なんですね。

○新井 そうです。

○石田 上の方々はこういった考えだったのでしょうか。

○新井 私たちが最高学年ですから、常任幹事会に上級生は居ません。当時「被爆時在校生の会」という組織を設置した折には上級生の4年生も居ましたが、この組織自体が慰霊碑建立のための任意団体ですから、当時の4年生、3年生、2年生も所属して居ました。しかし「在校生の会」は、



173. 慰霊碑の裏面に刻まれた戦没者

アカシア会の組織である常任幹事会とは別個のものであり、アカシア会として慰霊碑建立を正式に決定した段階で発展的解消、となりました。

その当時からアカシア会の役員には、私たち41期会より上級学年は誰一人居りませんでした。だから41回の我々が、何時も、何処でも最長老です。アカシア会が管理している「アカシア基金」も、若い役員たちは、なぜ慰霊碑建立に使えるのか、という理由や根拠を知らないから、とかくの疑問が出るのです。

母校とアカシア会に異常事態や緊急事態、または重要事態が発生した折、それに対処可能な積み立て基金を開設しよう、と90周年事業を終えた時期に提案して実現させたのは私です。

この基金は安易に手を付けてはならぬ。母校かアカシア会にとって、「今こそ必要」と判断できた時にだけ取り崩すことが許される重要基金である、と合意して開設しました。その資金は、周年事業などの終了時に発生する残金を積み立てた基金です。現在も3千万円程度が積み立ててあるはず。そういう過去の歴史を知らぬヤングの時代に至って、昔の議事録を読み直せ、と言っても無理でしょう。語り部じゃないけど、これも正確に語り継がないと組織と言うものは自ずと疲弊します。組織の維持とは、こういうことでしょうか。戦争の時代だった20世紀で、多くの先輩が死んで行ったなどということも理解できていない。かつては男子学校だった、ということすら分かっていない。「41期会の人は何故いつも男性しか出席しないのですか」と会合の席で本気で質問され絶句したこともある。日露戦争の時に出来た学校だということも知らない人が大半です。

○石田 そういうレベルなんですか。

○新井 それが現実なんです。附属ともあろうものが、ですがね。

○石田 分かりました。こちらの慰霊碑は原爆死没者だけの慰霊碑ではなくて、戦死者も入れている慰霊碑なんですよ。

○新井 はい、そうです。

○石田 戦死者を入れるというのは、どのあたりからお話があったんですか。

○新井 少し前にもお話ししたと思うのですが、被団協の初代事務局長だった24回生の藤居平一さ

んの、かねてからの主張です。つまり明治以後、日本は近代国家の仲間入りをした。1905年、明治38年に我が校が生まれて、同じように卒業生が明治以降の日本の発展に寄与して行った。そして戦争の時代になった。その戦争に附属の卒業生も積極果敢に参加して行って、日本という国を守ったし、発展に寄与・貢献して来た。善い悪いの問題ではありません。

明治維新で生まれたばかりの、若い日本という国を守って、そして現在に至っているんだ。その附属の先輩たちの命を懸けた働きを考えるべきだ。侵略戦争だったか否かの問題じゃない。諸先輩は純な気持ちで国の為にと戦って、未来のある命を国に捧げた、ということを考えよ、との主張です。

現代の、特攻隊に対する賛辞と同じです。純真な気持ちで戦って、国のために散っていったんだと。これに対する感謝の念は、如何なる時代であっても失ってはならぬ。それが我々アカシア会員の信念であると、ずっと言って来られたことを私たちが受け継いだ、と思っています。

○石田 それは藤居さんが折に触れて仰っていたのですか。

○新井 はい、しきりに、折あるごとに言っていました。出来れば「アカシア物語」として、母校史と共に多くのアカシア会員のイノチの物語として出版物にして欲しいのだが、と仰っていましたが、生前には遂に実現できませんでした。その理由としては、適当な書き手が見つからない、と仰っていました。29回の阿川弘之さんあたりをお願いする方法もあったと思うのですがねえ。

○石田 では、藤居さんのそういった思いとか、生の声が残っているものが今はないんですね。

○新井 生の声ですか、それは残っていないでしょう。これまでの10年ごとの創立記念行事で、フィルムやビデオで記録を撮りましたから藤居さんの声が残っている可能性はありますが…さて、「アカシア物語」の発行計画の件ではねえ。

○石田 被団協の関係では何人かの方がインタビューをされていて、藤居さんのいろいろな思いは残っているのですが、アカシア会に関する事で、そういった記録を見たことがなかったの。

○新井 附属と早稲田の同窓会への想い入れは絶

大でしたけど、被団協もと事務局長の発言としては…ということですか。80周年でも90周年でも、アカシア会主催の事業に熱中していらして、私や、幹事長だった31回生の千葉論吉さんは、何度も自宅に呼びつけられて喝を入れられました。そんなとき、よくこの「アカシア物語」の話が出るのです。愚痴のように、「ナントカならんかのう」という感じで。

一度、千葉さんと相談して常任幹事の全員にも藤居さんの想いを聞かせよう、ということでラジカセを持ち込んで、藤居さん、千葉さん、それに私の3人による記念事業鼎談会を録音したことがありました。

あのときのカセットテープは、事務局に残っているだろうか。けっこう長く藤居さんがしゃべったという記憶ですが、事務局に残っていればと思うけど、ずいぶん昔の出来事だし、残っていたら私も聞いてみたいと思います。でも無理だろうな。事務局のキャビネットのなかを別の用件で探し回ったことがあるけど、数本のカセットテープは残っていたが、……。

○石田 分かりました。

故新久和俊君の令兄からの電話

○新井 平成17(2005)年、被爆から60年目の夏のことだったと思います。私の被爆体験の中でも触れていると思うのですが、小学校と一緒に卒業して広島県立第一中学校へ進学し、あの日の夜、私の目の前で死んで行ったと言って良い最後を迎えた新久和俊君という生徒がいます。親友です。

自宅は我が家から100メートルぐらいの西霞町で、小学校への通学路の途中。いつも下級生の児童を引率しての集団登校の途中で合流していた友人でした。その新久君のお兄さんから電話がかかって来ました。

初めは、お兄さんとは分からずに対応していましたが、ご自分から名乗って下さったのでハッと気づきました。「君たちの同級生で新久和俊という子がいて、一中に行って被爆死した」と。そこで初めて「俺は、その和俊の兄貴だ」と名のったんです。「えっ」と思いました。

新久君というのは前に言ったかな。お兄さんも昭和の生まれなので、昭和の「昭」と「和」を、

それぞれ兄と弟で受け継いで、兄が昭俊、弟が和俊と名づけられておりました。年齢は3～4歳違いくらいと思われませんが、その兄と弟で合わせて「昭和」となるような名前を持つご兄弟でした。

お兄さんが言いました。「君たち、東雲附属国民学校から附属中学校に進んだ者だけが生き残って、うちの弟のように、一中に進学したものが被爆死したということが悔しくて堪らなかった。なぜ附属中学校に行った者だけが生き残ったのだと、ずっと附属に行って生き残った君たちを恨んでいた……」。言葉もなく私は聞き入っていました。

「ところが、偶然、君たちが発行した『昭和二十年の記録』を手に入れて、それを全部読んだ……初めて知ったよ、君たちが生き残った訳を。生き残ってしまったという君たちが、あれからというもの、どれほど苦しんでいたのか、どれほど辛い日々を過ごしていたのかを、初めて知った。済まなかった、私は何も知らず、ただ生き残った君たちを恨み続けて来た。済まなかった、どうか許してくれ」

受話器から聞こえて来る新久昭俊さんの声は、いつしか涙声になっていました。その受話器を握り締めたまま私も、滂沱と涙が溢れ、しばらくは声が出ませんでした。

やっと絞り出した声で私は言いました。

「お詫びせねばならないのは、生き残った私たちの方です。どうしても弔問に何うことが出来ませんでした。申し訳ありませんでした。こうして、お許しを戴いて感謝いたします。何よりも有り難いお言葉に、長く背負い続けていた重い荷を下ろせたような心地です。せめて後日、御仏壇へ花を供えさせて戴きたいと存じます、お許しをお願いします」～それだけ言うのが精一杯でした。

実は新久和俊君の妹、公子さんは比治山の原医研に勤務して居られ、御主人は地元作家の小久保均さんです。小久保さんとは、仕事の関係で私は個人的にも旧知の間柄でありました。そんなことから小久保さんが『昭和二十年の記録』を何処からか入手され、それが公子夫人から実兄の新久昭俊さんへ手渡されたと考えられます。

それが「初めて読んだ。生き残ってしまった君たちも苦しんでいたのだね、知らなかった。君たちを恨んでいたことを詫げる、済まなかった、許

してくれ」との電話に結びついたのでしょう。

先方のお兄さんも泣いていらしたし、受けた私も涙が溢れ、泣きながらの電話でした。許すどころじゃない。許されるどころか、これは許す・許さぬの問題ではない。共に原爆の犠牲者であって、たまたま運命という計り知れぬものが介在したばかりに、生き残ったか、生き残らなかったかが決まってしまった。

実は私は、その逆の立場になるところだったのです。本当は、私自身が一中に行こうと思っていたんです。それを担任の先生が「附中に行け」と指導して下さったばかりに私は助かった。そうでなかったら私は新久君と一緒に、あそこの慰霊碑に名前が載っていたはずだ、そういう運命だった、としか言いようがない。

結果、やはり私は彼の自宅を叩く勇気がなく、高田勇君と連名のキューピット便で、後日、ご自宅の霊前に生花をお供えさせて戴きました。

この、新久昭俊さんから戴いた「許す」とのヒトコトが、私の背中を押しました。「許された」と思ったのです。

何故ならば、生き残ってしまった我々は、死んで行った仲間たちの親兄弟に合わせる顔が無かったことは事実です。のちになって新久君のお母さんと妹の公子さんに私は、実際に何度か出会っています。特にお母さんには、私が社会人になった直後、本通り入口でばったり出会いました。そのときお母さんは、じっと、立ち竦んでいる私の顔を見詰めたまま、ポロっと涙を零されました。もう何も言わなくてもお気持ちは分かります。私も立ち竦んだまま、涙がドツと溢れ出たまま、そのあと、どうやったのか全く記憶に残っていないのですが、その場から立ち去っておりました。

聞けば41期会の仲間たちは、微妙な違いはあるものの、みんな同じような経験をしているのです。一様に一種の負い目を感じながら後半生を生きて来たわけです。

冒頭にお話しした山野上純夫さんは、ご自分の著作のなかで詩人の梶山雅子さんの詩集を何回も取り上げていらっしゃる。その詩集に、普通ならば避けるであろう情景～生き残ってしまった自分が、被爆して亡くなった級友の母に出会った場面を詠んだ詩があるのです。

「全滅の／クラスと聞いておりました／怒りを秘むる／亡友の母の瞳（め）」

「あなたは生きていたのですか／どうしても行くと／あの子は逝ったのです」

この二つの詩を読むことにより、山野上さんから私がかねがね、親のやりきれなさを、その心を初めて表に出して詠んだ詩集である、と聞いておりました。そうして初めてこの二篇の詩に出会ったとき、ズキンと私の胸に突き刺さるように重い、あの場面が蘇って来たのです。亡き新久君のお母さんでした。いきなり本通りで出会ったときの、お母さんの姿、表情、そして涙。その場から、どうやって我が姿を消したのか全く覚えていない自分のうろたえよう。梶山雅子さんの二篇の詩が、あのときの私の心を、まるで我がことであるが如く、鋭く抉り出しておりました。

私を含むアカシア41期会の生き残り中学1年生たちと、県女の1年生であった梶山雅子さんとは、全く同じ負い目を抱いたまま生きて来ていたことを知ったのでした。その後、何度か梶山さんとはお目にかかり語り合う機会がありました。互いに話し始めると、留まる場所を知らず、いつまでも話が途切れないのが辛かったと、かつての日を思い出しています。

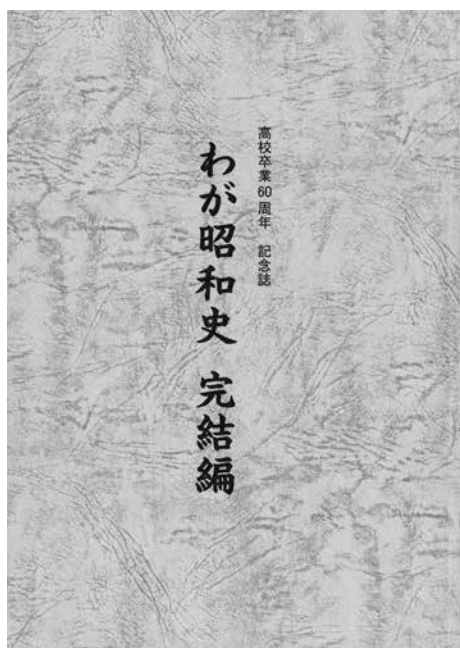
同期生同士の交流

○新井 さて、アカシア41期会について、次に話を進めていきましょう。いまお手元に出してお見せしていますが、毎年1回発行している級友消息の「近況メッセージ集」です。これは年末に往復はがきを出し、返信用のハガキ一枚に近況メッセージを書いて返送せよ、というもので、返って来た原稿を私がPCに打ち込んで、小冊子に印刷して全員に配布する、という41期会の年一回発行の情報誌です。科学学級の前野長昭君にワードで基本形を作って貰い、スタートしました。A4版ヨコ書き、校章マーク付のヒナガタを基に文書を作成して、公民館に用紙持参で持ち込んで簡易印刷機で印刷するのです。公民館が市民のため常設した簡単な孔版式輪転印刷機で安価に印刷し、新聞紙方式で製本して41期会の全員に配っています。これが年一回、毎年末の全員への共通の連絡網の一つです。

の思い出を3篇目に纏めました。最後の「恩師の思い出」篇は、特別篇として、我らが恩師一人一人についての、生徒各人の人物評というか、評伝ふうに思い出を列記しようというので、これを最終篇として発行しました。

このように「わたしと戦争」というサブタイトルは、実はずっと初回から続けています。具体的に戦争体験があるのは私たち41回生が最後であり、ホント、かなり酷い目に遭ったことを、私たちは決して忘れておりません。これを伝えて行かなければならない、ということも忘れておりません。ただし、伝えるということについては各人それぞれに思いや事情が異なるのですから、全員が一斉に証言者になったり語り部になったりということは難しいと良く分かっていますので、東京と関西と広島のカ所、数人ずつ分かれて自主的に証言を語っています。数人でと言ったけれども、複数は東京と関西地区だけで、広島は残念ながら私1人です。これに高知が最近、加わっております。

（『わが昭和史・完結編』を開きながら）東京は増本文吉教授の息子で、自分も構内で直接被爆して脱出。全身に火傷を負って1学年留年した増本昭夫君。それに、神奈川の被爆者団体の理事をやっていた吉野俊雄君。残念ながら平成24年に吉野君は亡くなりました。



177. 『わが昭和史 完結編』表紙

関西では、岡田渥美君という京都大学の名誉教授。彼は松本市の出身で、私も実は父の関係で松本高校と縁があるんだけど、松本市のグループとタイアップして「原爆をなくそう運動」というのに関わっておりまして、講演活動を活発にやっております。彼は原爆で、ずいぶん多くの家族を亡くしており多くを語らぬ人物ですが、令和2(2020)年7月15日に出版した著書『人間にとって「教養」とは』という318ページに及ぶ大著で珍しく彼は、広島での体験を赤裸々に打ち明け、これが自分の生涯を律する根幹だったと述べています。哲学者でもある岡田君は、毎年の我々の「近況メッセージ集」にも、哲学者であり文学者であり被爆者でもある自身の心境を、独特の文体で述べて仲間たちの眼を惹いています。そして本人も今、原爆のせいだと思われるのですが視力と聴力が急速に衰え、生活にも支障をきたす状態にあります。それでも頑張ってくれています。いま、神戸市で健在です。

もうひとり山崎恭弘君。本川小学校の出身。天文学者。京都大学を出たのち、天文台での業績で結構有名な人物ですが、彼も原爆緑内障と思われる視力低下で、いまほとんど目が見えなくなっております。ご夫人が附属中学校出身の後輩で、彼の目の代わりとなって手を引いて、兵庫県の川西市在住ですが、周辺学校からの依頼を受けたりして、不自由な身体でありながら、証言活動を積極的に行っています。本川小学校の出身だから、原爆の犠牲となった多くの級友たちの足跡を辿るライフワークに取り組んでいることも知られています。NHKの「被爆者からの手紙」に何度も登場して居ます。素晴らしく詩的なエッセイが心に響きます。

そして高知の旧姓・中澤克彦君、現姓、植野克彦君です。彼は高知で唯一人、「新井君の後を付いて走るんだ」と言って、まるで私の分身みたいに積極的な証言活動で、献身奔走しております。京都大学の物理学研究所には反核運動で有名な三人の助教授がいますよね。「熊取六人衆」。植野君は熊取まで呼ばれて行って原爆体験を講話しています。今中哲二(59回)さんという、原子力サイクロン運転のメンバーでありながら反核運動の中心人物で、広島の子の出身という人物とも会っ

て、いろいろ話をしたそうです。また彼は高知出身ということから、同じく高知を故郷とする附属の先輩、山野上純夫さんという京都在住の元毎日新聞記者とも交流があり懇意にしています。いま彼は非常に活発に活動をしている41期会の新メンバーで、高知で経営する陶器店の関係で日中友好協会の高知県の副会長でもあり、中国への渡航歴が多い有力な経済人であり活動仲間です。

我が41期会のメンバーは、大部分が入市被爆者であるため、脳溢血や血液障害、ガンなどの疾患により、2020年末現在で、124人の仲間が亡くなっております。消息不明を含め生存者は約75人となっておりますが、うち元気で健在と言えるのは40人足らずかな。

ずっと拾って行って、いま誰が生きているかなというと、伝令で帰った5人の中で生きているのは高田と新井の2人だけ。それから神社組、つまり東組が10人健在。北組が9人、南組が12人生きている。たまたま広島に自己都合で帰っていた9人のうち5人が生き残っている。合わせると38人。パーセンテージを見ると、161人の新入生のうち、現在ただいま健在な者が約24%、という状況です。8月6日当日、これほど複雑な動きをしていたということが最近、やっと分かって来たので、当日の行動記録から拾い出した数字です。

この生き残っている人、今は38人に減りましたが、当時は相当の人数だったということが、毎年発行している消息集の中で知られます。つまり消息集は元気な者から言葉が返って来ている。元気だけどメッセージは返って来ていないのが相当数ある。死んでいった者は死亡者欄に名前がある。この三段階で、毎年、人数が確認できます。

相当早い時期からのものが文書館に納入してありますので、これで毎年の動きが分かると思うのですが、感覚的にいって、被爆から10年目ぐらいまで41期生の仲間が、気になるほど多く亡くなっているのです。特にガンが多かった。ほかにも脳梗塞、心筋梗塞、脳腫瘍などで亡くなった人が多い。私たちの中では、これは被爆の影響ではなからうか、という噂が立っていました。正確に死亡者の死因別のパーセンテージは調べていないけれど、消息集の中の物故者名簿に、それぞれの死没年月日も記録していますから、それをチェックし

て行くと、いつごろまでに何人死んでいったかが分かる。これで計算すると、年ごとの被爆死者の人数とパーセンテージが算出できると思います。が、まだ私はやっておりません。でも、そんな感じを受けておりました。

それで現在は、という事になるのですが、161人が入学しましたが、卒業時の名簿では卒業生138人となっております。終戦後に60人ぐらいが転入して来ますので、トータルでは41期会の人数が増えています。その中で現在健在なのが38人です。つまり連絡が取れていて、連絡をすると反応があるというのが38人ということですので、かなり人数は減っている状況ですが、残っている中でも、よく聞くと実は入院中だとか、いま病気で動けなくなっているとか、奥さまが危ないので傍についていなければいけないとか、そういう状況で不自由な人が約半分おります。実際には20人足らずが、私と同じように41期生の中で活動している人数だろう、というのが現状だと思われま

す。
○石田 確認ですが、今は定期的な集まりはしてなくて、二水会という毎月第2水曜日に広島で集まっている会と、秋と。

○新井 新型コロナウイルスの蔓延が始まるまでは、毎月第2水曜日に「喫茶さえき」で、最初のうちは10人以上、最近では7、8人ずつが集まっていました。しかし、コロナ騒ぎが始まる寸前、2020年の2月12日以降、現在は「月例二水会」は集まりを中止しています。コロナが落ち着けば再開します。

定期的な周年事業の同期会というのは、プリンスホテルでやった最後の高校卒業60周年、2011年で完了しております。出来ないことはないけれども、広島まで来ることが難しいという事情があるし、東京に行くのも難しいという事情で、2011年をもって最終回とする、ということで周年行事は完了しました。だから残った41期会の事業は、毎年発行して来た「近況メッセージ集」だけです。これでお互いに消息を確かめ合い、これを使って連絡し合う。または41期会のメーリングシステム(m l 41)で連絡し合うということで仲間たちのあいだが繋がっております。

m l 41ですが、結構、賑やかなメール交換が繰り返され、毎日のようにどんどん連絡や意見など

が入って来ています。特にコロナに対する苦情、行政へのクレーム、日本政府のお粗末さに向けての厳しい言葉などがしきりに発言されています。いわんや地球の裏側にまで自衛隊が出て行って銃を撃つことが出来るようになった、なんてことで仲間の放談ネット会議での発言は怒り狂っております。このままじゃ他国の戦争に引きずり込まれる。とんでもない事です。戦力を保持せずとなっている我が国の、誰が見ても見事な戦力と見なされる自衛隊が、他国の救援に駆け付けて銃を発射することも出来るなんて、これではまさしく「戦争が出来る」ということです。何という憲法違反を容認する安保法制を勝手に決めたのだ。41期会のメーリングシステムでの発言は、私たちの正直な爆発寸前の感情を生々しく怒りを以て公表しております。ただし残念ながら、「未来を託すべき若い者に、碌な者が居らんから駄目だ」という悲観的意見も多いのです。仕方がないのかなあ。かといって私たちにはもう、自ら出て行って行動するほどの元気は残っていないし。というところが実情です。

○石田 途中で話の腰を折ってしまってすみません。

○新井 いえ、これが老いて来た附属中学41期会の老翁たちの愚痴と放談です。毎年末に発行し続けている令和3（2021）年「近況メッセージ集」新年号という名の41期会名簿で集計すると、現存しているはずの者が74人、物故者が124人、合計198人が、私たちアカシア41期会の会員だと確認できます。ただし若干の消息不明者も現存者としてカウントしてありますから、健在な者の人数は、もっと少ないと思われます。

この41期会最高の愛読書であった「近況メッセージ集」も、2022年、令和4年1月を以て最終号となる見込みです。ただ一人の編集・発行人たる私が、もはや力尽き刀折れ矢尽きて店仕舞いせざるを得ない、と考えているからです。

最後の「原村詣で企画」

○新井 年は押し迫りましたが、令和2（2020）年は被爆から75年目。命救われし我らも揃って米寿。今を逃せば次は無い、とばかり有志から寄せられた軍資金を懐に、世話人の有志2人が7月20



「感謝の碑」建立式 2000年7月20日 於教順寺



178. 教順寺に建立した「感謝の碑」
(平成12年)

日、75年前と同日同時刻の午前9時29分。広島駅発で八本松駅へと向かい、先ずは南組と北組が合宿した教順寺に戸島行蔵（43回）元住職を訪ね、お寺への感謝を込めた御経志と、41期会が境内へ建立させて貰った「感謝の碑」を維持管理して下さるお寺への御香料とを奉納。ひとしきり歓談のときを過ごしました。

午後からは、東組が風雨を避けながら過ごした真光神社にご寄進を奉呈し、ごく近くにお住まいの宮岡力先生のご息女・邦子さんを訪ねて共に先生の墓参を果たし、41期会としての芳志を献じたのち、西条経由で帰って来ました。有志代表の高田勇、松木朝海の両君からは、75年前より増して猛烈な暑さの一日だった、との述懐がありました。

我ら41期会一同の心を表すとの意で、ここに「感謝の碑」の記事を引用します。会報『アカシア』平成12年8月号掲載の記事です。

* * *

「感謝の碑」を建立（転載）

◆その日も暑かった（平成12年7月20日）

被爆全滅の運命が目前に迫っていたとも知らず、押し寄せる蚤の大群やシッコつき麦入り芋飯を呪うこととなる中学1年生たちは、教官引率のもと動員命令により賀茂郡原村（当時）に移住した。55年前の7月20日も、今年と同じく耐えがたい程の猛暑だった。そ

の同じ日、いまや古希を間近に白髪・老翁の姿に変じた往年の1年生たちが、合宿地の寺院境内に集まった。41回生である。

◆「感謝の碑」を！

敗戦直前、空爆で全国の都市は壊滅状態。想像を絶する食料危機で全国民が飢え死に寸前という時期に、食い盛りの中学生集団を受け容れる余裕などないはずだ。にも係わらず原村の人々は、我々百人余を引き受けて下さった。農作業の手伝い……との名目で。それは原爆のわずか17日前という、運命を分ける母校の決断であった。

私たちが被爆全滅を免れ得たのは原村の人々のおかげに他ならない。せめて石碑に経緯を記し、この想いを永遠に捧げたい。これが「感謝の碑」建立の趣旨である。

◆除幕は4人の手で

平和公園の原爆慰霊碑の残石を利用し、先

月末に石碑は完成した。被爆・終戦と共に離散した旧友達も資金調達に加わり総勢90名のほる仲間の協力で、去る7月20日、除幕式を迎えることができたのである。当時、合宿生活を送った原村（現・東広島市八本松町原）の教順寺に関係者40人がバスで参集。正午から地元CATV局の取材を受けながらの「感謝の碑」除幕式。

紅白の紐を引くのは恩師・小谷等先生（92歳）、住職・戸島行蔵師（43回）、当地出身で移住に尽力された故宮岡力先生の鶴枝夫人、そして生徒代表の吉本幹彦君の4人。

式を見守る人々の中にはかつての担任・故田中清三郎先生のヲサ子夫人と当地で誕生したご長男、三木温美先生、檀家総代の黒川久氏。特別参加の亡き級友の夫人お三方の姿があった。

* * *

第11章 被爆体験証言活動の開始、続発するガン

被爆体験証言活動の開始

○新井 2005年、平成17年の9月21日でした。仁保小学校に通っている私の孫～5年3組の小野彩夏（あやか）と申しますが、友達2人を連れてビデオカメラを持ち込んで来て、「おじいちゃんは被爆者だよ。おじいちゃんの被爆体験は何度も聞いているけど、友達にも聞かせたいからビデオに向かって話してよ」と頼まれたのです。おやおや、我が孫ながら仲々やるわい、と感心しながら引き受けて、私としては初めて公に、ビデオカメラに向かって話しました。

孫たちは録画したビデオのカセットを持って帰って、夏休みの自由研究として、孫の彩夏と、その仲間、自分のクラスみんなで、そのビデオを見て平和学習をやったのだそうです。これが他のクラスにも回って行って、どのクラスでも同じように平和学習としてビデオを見たそうです。

その後、10月29日。私の卒業学校である広島大学の附属東雲小学校から連絡が入ったのです。県師の附属小学校（広島県立師範学校附属小学校）は、このとき創立130周年だったんですね。高等師範学校とは30年ほど違うのですが、県師附小としては、創立130周年記念の催しとして、昭和20年に卒業した先輩のお話を聞く会の講師として来て貰えませんかという、正式な校長先生からの招待状が届きました。即答で応諾して出席しました。

学校の2階だったか3階だったかに応接室～作法室があるんですが、そこで6年生全員を相手に被爆体験を話しました。PTAのお母さん方も結

構何人も来ていらしたようですし、ついでにというので、私の長女の純子もビデオカメラ片手にやって来て、私の話す様子をビデオに収めたようです。

それから11月8日。この年は物凄く行事がビッシリ詰まっていたのですが、小学校の卒業60年ぶりの修学旅行を実現させました。と言うのは、私はいわゆる県師の附小を卒業したのですが、空襲警報下の卒業式だったので、警報発令で卒業式はお流れ。卒業証書も教室で担任の先生から手渡され、警報発令だからというので、そのままスッ飛んで自宅へ帰りました。もちろん、祝賀会なんてのも最初から予定すらし。修学旅行も、これ又全く気配すらし無いのだから、中止どころかはじめっから予定ナシ。ナイナイ尽くし時代の卒業でした。

だから話が出たのです。恩師の早瀬完一先生が、平成17年当時、満89歳で壮健でいらっしゃるとの情報をキャッチ。おい、修学旅行に行けるぞ、とね。生き残りの県師附小組で京都へ行こう、と原案即決。如何ですかと早瀬先生へ声を掛けたら、即答でOKとのご返事。かくて、卒業60年目にして初めて教え子生徒7人が集まり、恩師をお招きしての京都への2泊3日の修学旅行が実現しました。お招きしたはずの恩師のかくしゃくたる足取りに驚きながら、京都御所を拝観したり、金閣寺を見物したり、先斗町を歩いたり出来ました。ただの修学旅行で終わらせませんでした。

京都で仏壇店を営む級友からの特別な紹介で、有名な臨済宗の高台寺にて、被爆死級友たちの追悼法要を営むことが出来たのです。それを地元京都にある宗教専門紙『中外日報』が、写真入り囲



179. 附属東雲小学校での証言風景



180. 卒業60年目の修学旅行

み記事で報じてくれました。

○石田 そんな情報を、よく新聞社が把握して取材できましたね。

○新井 出発前は、『中国新聞』が写真付きで記事にしてくれていました。法要については、地元の宗教新聞の『中外日報』が取材に来て、写真を撮って記事にしてくれたうえに、写真のネガまで頂戴しました。これでやっと卒業記念の修学旅行が出来たと言って、みんなホッと肩の荷が下りたような心地でした。その2～3年後に、早瀬先生がお亡くなりになりました。「修学旅行と法要を、やっておいて良かったね」とみんなで言い合ったものです。

ただ、一つ心残り。なんで奥様をご一緒にお連れしなかったかと言うことです。

○石田 早瀬先生のですか。

○新井 そうです。遠慮なさったんです。強引にお連れすれば良かったと、みんなの後悔しました。泊まったホテルで自分のお部屋に入られたあと、ちょっと用事があって私がコンコンとノックしてお部屋に入ったら、携帯電話で奥様と話をしていたら。ああっと思いましたね。申し訳ないことをしたと思って、本当に奥様をご一緒にご招待すべきだったと、このことだけが唯一の心残りです。

これが私たちの被爆60年目の2005年。この年、初めて公に子どもたちを前にして我が実体験を話しました。そして明るく2006年4月20日に、前年に出していた自分史を少し改訂して、簡単な略年史みたいな形態の『私の生きた昭和』という小冊子を作りました。

そして8月4日、広島大学附属中学校からお招きを受け、平和学習の一環として新入生の中学1年生120人に、「ヒロシマ原爆と母校史」と題して、我が被爆体験と母校の被害、マンハッタン計画による原爆開発史、そして私たち41期会生徒の、危機一髪の広島脱出記を語りました。

これが母校において、我々が原爆秘話を公表した、初めての機会だったと思います。同時に私にとっても、公式にヒロシマを語り始めるキッカケになった講演会だったと思っています。

我が同期の仲間たちで父母を失い兄弟を亡くした友は多いのですが、それだけの重い体験を重ね

た彼らは、未だ固く唇を結んだままでした。しかし私は家族の誰も失っていません。いわば背に負うたものの重さが違っていったという事情が、私に我が被爆体験を語り始めさせる余地を生んだ、ということでしょうか。

被爆時に旧制の附属中学1年生だった私が、あれから60余年を経て同じ附属中学校へ入学して来た新1年生に対して、同じ1年生であった私と41期会の仲間たちが、母校の英断と勇気によって危機一髪、被爆全滅の運命を免れたという秘話。そして私が何故、当日入市の被爆者となって今ここに立ち、地獄だったヒロシマを語る事が出来るのかを説明すること自体が、そのまま、我が被爆体験とヒロシマを語る証言・講話となっております。

こうしてご遺族からのお許しも得て被爆60年を迎えたころから、母校で後輩へ向けてヒロシマを語った経験を基礎に、いつしか私は、被爆体験を証言する活動へと歩み始めることになるのです。キッカケの幾つかをご説明しましたが、これという最大の切り札はありません。多くの契機が私の背中を押し、あたりを見回せば、私たちは既に老境に達しておりました。ケロイドや皮膚の引き摺りなど、一見して被爆者と分かる人々の姿も何時しか見えなくなっていました。「生き残ってしまった」と思っていた私たちも、いつしか「残されてしまった」立場へと変わったことを認識せざるを得ない時期に至って居りました。

このあたりの心境が私を誘引したのでしょうか。母校での証言を聞いてくれた120人の可愛い後輩たちへの思いを込めて、私は『朝日新聞』に初めて投書をしました。私はこれまで新聞投書なんてしたことがありません。見出しは担当記者がつけたのでしょうか。「阿鼻叫喚の中、妹励ました姉」というタイトルで、2006年9月5日の『朝日新聞』関西版に掲載され、後日また東京版にも出ました。

母校の附属中学校の平和授業で広島を語りました。私の被爆体験として、東大橋から広島市に入ったとき、そこで幼いお姉ちゃんと妹の二人が、風船のように膨れ上がった顔のまま、しっかと手をつないで、「しっかりね」とお姉ちゃんが妹へ呼びかけた声を残して、立ち尽くす私の傍を通り過ぎて消えて行った。もう何もしてあげることも出

来ず、ただ見送るしかなかったという内容を私は投稿したんです。この場面を、私は母校の附属中学校で新生生の1年生たちに話したのです。誰一人として身動きする者もなく、じい〜っと120人が私に眼を注いでいた。その力強い眼差しから私は、歴史は繰り返すという言葉があるけれども、この子たちがきちんと聞いてくれる限り、歴史は繰り返すことはないだろう。きちんと歴史を学んでくれる時代が来ることを望む、といった内容のことを書いたんです。

それが『朝日新聞』東京版にも出て、東京の青梅市立第二小学校の先生の目にとまったのです。そして、先生から東京の朝日新聞社の本社に電話があって、広島に電話が転送されて来て、「教材に使いたいのでご本人の許可が欲しい」ということで応諾しました。そうしたら、東京都青梅市立第二小学校6年2組の子どもたちから私へ、たくさんの感想文が届きました。ここにあります。

(感想文を手に取り)「私がこの文(投書)を読んで最初に思ったことは、戦争で幸せになる人は居ないということでした。原爆で風船のように膨れ上がった顔という文がありました。なぜ顔が膨れ上がってしまったのですか。妹に『しっかりね』と言っていた時、姉自身は顔は痛そうではなかったのですか。お父さんかお母さんがいなかったのは、原爆で死んでしまったからいなかったのですか。もしそうだったら、とても悲しい思いを、その妹とお姉さんはしたんだと思います。本田」。

「新井さんへ。新井さんは燃え盛る町から逃れようとする無数の人々の中にいた時は、どんな気持ちで逃げていたのかを知りたいです。風船のように膨れ上がった顔を見た時は、どんな気持ちでしたか。教えてください。もし僕が、その燃え盛る町から逃れようとする無数の人々の中にいたら、逃れられているか分かりません。でも、何も考えずに逃げることだけを覚えていたから新井さんはすごいなと思っています。西山」

(青梅市立第二小学校の児童の集合写真を出しながら)こういうのが青梅からドサッと来たので、私はビデオレターという格好で、いつか孫に語ったのと同じように、子どもたちに対するお礼と感想の返事をビデオカセットに収録して学校へ送りました。デジタルビデオはカセットテープ時代の

初期で合計62分になったけど、そのまま発送しました。小学校の授業は1コマ45分くらいですか。ビデオが長いので1コマに収まらず、授業の2コマに亘って見たと担任の岡田星子先生から返事が届きました。しかも、他の学級からも見せろ、というので、ほかのすべての学級にも見せたとのことでした。そして、また手紙が来たんです。

「私は新井さんからのビデオレターを見て、正直な気持ち、今、戦争がなくて本当によかったと思いました。教科書なんかではない新井さんのそのままの気持ちが聞いてよかったです。自分の親友を失う悲しみは半端でないと思います。私だったら、そんな悲しいことばかりの日々だったら死にたいと思うかもしれません。でも新井さんは、その地獄のような日を必死で乗り越えたんですね。そして今、生きている新井さんがいるんですね。それはとてもすごいことだと思います。頑張った結果だと思います。ビデオレターを有難うございました。では、いつまでもお元気で。伊藤」

こういう手紙が来て、それからというもの青梅市立第二小学校と担任の岡田星子先生とは、ずっと文通をするようになりました。写真も届きました。これは6年生だった時期の出来事です。彼ら彼女らも、やがて卒業してそれぞれの中学に進学しました。その間も私は岡田先生やお仲間の先生方と交流を続けておりました。そのご縁で、府中市の中学校や、大阪の寝屋川市の和光中学校とか、名古屋や福生市にも多くの知友の先生が生まれて居りました。

そんなとき岡田先生が突然、広島に来たのです。日教組の教研集会とかで、私と学級との交流を主題とした研究発表をなさるとのことでした。会合には行けませんでした。が市内で合流し、友人の先生とも一緒でしたが、縮景園などの名所と共に附属高校へもご案内して41期会の謝恩碑も見て戴きました。被爆建物の講堂にも入って貰い、喜んで戴きました。そんなことで連絡を取り合っている内に、当時の6年2組の児童たちが成長して中学2年生になったとき、もと学級委員だった本田さんからの情報で、当地の中学校2年生の学級委員長の半数が何と、旧6年2組の出身者だと判明し、このことを新井さんへ連絡して欲しいと岡田先生へ依頼したことから話は急展開。当時の児童

みんなで岡田先生を囲み青梅の小学校へ集まろう、との機運が盛り上がったとの連絡が入り、即座に私は上京を決意しました。2009年、平成21年1月25日が、その日でした。

私は青梅市まで行きました。いまや中学2年生になっている旧6年2組のメンバー15人が、青梅の小学校前で待っていてくれました。あれから3年を経ても、これだけの生徒が元の小学校に集まってくれたのです。

学校のお世話で全員が校長室に集まり、そこで私は再びヒロシマを詳しく語り聞かせました。そうしたら集まった子供の一人が声を上げたのです。「とうとう本物に会えた」と。

その言葉に私は、大きな感動を覚えました。待っていてくれたのです。当時から「本物のヒバクシャ」に会いたかったのです。「本物に会って、本物から直接、ヒロシマを語って聞かせて欲しかった」のです。同時に、いささかショックでもありました。ビデオレターでも、本人と同じくらい、身近に感じて貰えたかと自惚れていたことを恥じました。

録画や録音と本物とでは、まるっきり実感が違うのです。明らかな限界を知りました。本物が来て、本物が直に語ってくれた。これこそが重要なポイントだったのです。私たち被爆者が、自分の語り口で、直接に語って聞いて戴いてこそ初めて十分な理解を得ることが出来るのだ、との自信を得ました。まことに大きな訪問の成果でした。

現在こそ少し途絶えています。あれ以降も岡田星子先生を通じて生徒たち、多くの先生たちとの交流が続きました。あの日は、集いを終えたあと、「本物の被爆者に会えた」と言ってくれた感動を胸に抱きながら、岡田星子先生と話し込みながら、近くの昭和記念公園や旧陸軍立川飛行場跡、横田基地、青梅街道などを案内して戴きました。

後日、岡田先生から当日の写真のほか、記念アルバムに作り直された資料集を送って戴き、いまでも大事に持っております。

後日談も生まれました。広島市での教研集会で岡田星子先生が報告した私と児童たちとの交流記録が、会場の聴衆の方々に影響を及ぼしたと見え、後日、宇品公民館を拠点に活動していた「ヒロシマ青空の会」から電話が入り、連続して公刊して

いる『遺言「ノーモアヒロシマ」～未来のために残したい記憶』第5集に証言を残して貰いたいと申し出がありました。即座に応諾しました。2008年8月6日付けで発行された同文集に「無念の思いを伝えたい」と題して、私の証言が掲載されました。

2010年、平成22年4月8日。秋葉忠利市長の時代に、財団法人広島平和文化センターのリーパー（Steven Lloyd Leeper）理事長から、正式に被爆体験証言者としての委嘱状を交付されました。それから公式に証言を開始して、2021年1月末現在で343回、延べ人員3万6,162人という小学生・中学生・高校生の子どもたち、それに大学生や一般人も含まれていますが、大多数が小中高の児童・生徒を対象に証言して参りました。

遠くは北海道の北見市、新潟県の池田市、岩手県の盛岡市まで出張し、平均2泊3日の日程で、各2会場ほどでの証言を聞く会の講師として出席しました。どこへ出かけても、教育長や市長との表敬訪問が組み込まれており、重要人物扱いをして戴いたという心地がしております。高齢となって居りましたが当時は、さほど大変な旅をしたとの思いも無く、どこでも活発な質問が出て、張り合いのある証言会になったと感じています。

しかし残念ながら2020年初頭から、世界的なCOVID-19の蔓延急拡大のため修学旅行の中止、平和記念資料館の閉館などの憂慮すべき事態が発生し、証言がままならぬ状態に陥っています。事態収束の兆しも無く、案じられてなりません。

記憶に残る逸話があります。2011年、平成23年



181. 証言時のスナップ
(平成29年8月18日)

3月8日、岡山県高梁市の川上中学校の修学旅行団に、平和記念資料館の会議室で証言した折のこと。話が終わったあと、生徒代表として中学1年生の加藤君が出て来て、お礼の挨拶をしようとしたのです。

そうしたら急に涙が溢れ出して声にならない。そのまま沈黙が1分間以上。そしてやっと、「想像以上の惨状を初めて知りました。心に刻んで、次の時代に背負って歩いていくと誓います。子どもではない一人前の兵士だ、という教育を受けた時代のことがよく分かりました」と挨拶してくれました。心から絞り出した謝辞としてのスピーチでした。彼の言葉を待つ間、私の心も同じように湧き立っておりました。

ほかにも小学校で、とうとう声にならない謝辞を述べた児童代表が何人か居ました。予め書いて来た原稿を読み上げるよりも、詰まろうが、言い間違えようが、自分の言葉で、自分の思いを語ってくれる感謝の言葉にこそ私たち証言者は、より強い感動を覚えて聞き入るものです。

このことを、京都にある『中外日報』の社説を執筆していた山野上純夫さん～元の毎日新聞記者に話したら、『中外日報』の社説で何回かに分けて取り上げてくださいました。

広島のアという証言者の証言を聞いた子どもたちが何人か、お礼の言葉を言う時に、言葉にならず絶句した。Aさんは、その子の肩を抱いて、「怖かったんだね、御免ね」と慰めの言葉を投げ掛けたそうです、というような記事になっておりました。

私の証言活動は2006年、平成18年の青梅市の(市立第二)小学校との深い関わりをスタート台にして、正式には2010年、平成22年4月8日、公的機関である財団法人、広島平和文化センターからの委嘱による被爆体験証言者として始まりました。途中、体調を崩して1年間休むとか、手術を受けて暫く中断するなどの不具合はありましたが、なんとか体調を整えながら、体調不良を乗り越えながら、やっと2021年を迎えられたところですが、途端にコロナ騒動に巻き込まれた次第です。

私の被爆体験の証言ですが、最初に申しましたとおり、自分には被爆者として語る資格はないと思っていました。山野上純夫さんも同じように話

していらっしゃると思いますが、お会いして話し合っ、本当に同じ気持ちだなと二人で語り合ったものです。しかし、ふと辺りを見回すと、歳月が経ってしまったためか、被爆者と呼ばれる人たちの数が急激に減っている。亡き新久君の実兄からの電話のように、私たち生き残ってしまった者に対して注がれていた痛いほど冷ややかな目が、いつしか和らいでいるように見えるじゃないですか。

歳月の経過とともに、被爆者の絶対数の減少が影響しているのでしょうか。生き残ってしまった私たちの立場が、少しずつ理解して戴けるようになったのでしょうか。新久昭俊さんから戴いた「恨んでいた、済まなかった」の言葉が示すように、理解を戴けたとの感覚と共に、なにか背中を押されるような感覚も覚え始めておりました。もう、話しても良い。許されたとの思いが強くなっておりました。

次女の急逝

○新井 突然の悲報でした。1988年、昭和63年11月17日、午後8時30分ごろ、信号無視の暴走車に撥ねられて次女、真由美(22歳)を喪いました。まさか、まさかと何度、繰り返し自問し続けたことか。同時刻ごろ、警察から自宅に掛かって来た電話によって知らされました。家から遠くない歯科医でのバイトを終えて自転車で帰宅の途に就いた真由美は、国道2号線の信号青を確認して上下6車線ある横断歩道を渡ろうとしたところ突然、中央車線だけ空いていた下り車線にマイカーが突っ込んで来て、20メートル近く撥ね飛ばされ、ほとんど即死の状況だったとのこと。皮肉にも、翌日の11月18日は私の誕生日でありました。

遺体に取り縋っていた妻の恭子が、「まだ、温かいじゃないの」と泣きながら抱き締めている姿が、いつになっても心に突き刺さっております。

あの子は、思えば不思議な才能を備え持った子でした。小学校は附属東雲小学校でしたし、高校は翠町の附属高等学校でした。大学も広島大学でした。その何れの入学試験も一発で合格でした。普通車の免許試験も、たった一回で合格でした。5月のNECへの入社試験も一発合格内定でした。

音楽が好きで、中学校時代はコーラスのピアノ伴奏を、高校時代は管弦楽班に所属してフルート



182. 白神社の前で長女純子と次女真由美
(昭和43年1月1日)

やオーボエを巧みに演奏していました。とりわけ附属高校に入学してからは、登場したばかりのコンピュータに夢中になり、機械語とやらでプログラムを組み、附属名物の体育祭マスゲームの隊形を打ち出して見事なフォーメーションを描き出し大成功を収めていました。

その頃から数学の世界にはまり込み、広島大学では旧文理科大学の被爆建物である理学部数学科へ進み、電話番号すら苦手だった私とは真逆に、高等数学の世界へと飛び込んで行きました。そんな時期、私の蔵書の影響からか、SF同好会の広島大会事務局長を一手に引き受け、楽しそうに会場の大学構内を奔走して居りました。

人懐っこい性格から友人にも恵まれ、町内の集會場で執り行った葬儀・告別式では、のちに学長となった広島大学理学部の田中隆莊学部長をはじめ多数の学友たちで会場が溢れ、「21歳の若い女性の葬儀で300人を超える参列者とは…」と葬儀社を驚かせたほど。

その夜の冷たく煌めく夜空の星は、永遠と無限が共存する宇宙と会話する数学の世界を、私にも垣間見せてくれたと思えてなりません。UFOには何度も出会ったと言っていたし、超越した才能を燃焼させて駆け抜けた真由美の短い人生。突然、最愛の次女を奪われた理不尽さへの怒りと哀しみは、被爆者と認識し得なかった私を一瞬のうちに



183. 新築した自宅前での家族記念写真
(昭和59年)

変えていました。年賀欠礼の挨拶状の言葉は、このヒトコトで終えました。「哀しみ極まりて泪涸る」

既に小野賢一郎君と結婚し、郊外の祇園町に新居を構えていた長女の純子を無理矢理、東雲本町に呼び戻しました。真由美の没後50日祭の折、母ツル子が85歳で急逝しました。1992年、88歳の米寿を春に家族全員で祝った父・嘉之作も、その秋に逝きました。

その間、純子には長男の真太郎と次男の佑太郎が誕生し、小野家も4人家族になって居りました。そして1994年、平成6年9月、2階建ての新居が完成。ほぼ同時に誕生した彩夏を含めた純子の家族5人が、新居の2階に合流してくれたのです。

我が被爆体験を語り始めるに当たり、思いもかけぬ出来事であった次女の事故が、どれほどの重みと痛みとを自らに課すことになったのか。今もって証言を続け乍ら思わず絶句するなど、それまでとは違う私になってしまった事だけは、間違いなく確かだと思っております。

被爆体験証言と核兵器・原子力

○新井 私の証言は、必ず立ったままで語ります。夏場であろうと冬場であろうと、全身汗びっしょりになります。それぐらい懸命に語る。そうでないと語れないんです。原稿は書いてはいます。これが私の原稿です。これでも原稿なのか、と言われてそうですが、単なる箇条書きのメモです。これを見ながら自分で話すのですが、ほとんど目線を落すことなく、子どもたちの目を見てフリーでしゃべってしまいます。だから途中で脱線します。そのときだけ慌てて、自分のメモを見直します。

原稿は、小学校用、中学校用、高等学校用と何種類にも分けて作っていますが、会場で子どもの顔を見てから話し方を決めます。小学校向けでは、最初に素朴なクイズを出すのです。「1945年8月、私は13歳の中学1年生でした。では今、私は何歳でしょう」と言うと、小学校ならば必ず、ハイハイと手が上がります。中学校以上になるとダメです。中学生にも同じように質問するんですが、「ほら、手が上がらない。これは愚問でありました」と質問をおさめます。でも、これが大事なのです。

「1945年に13歳だった新井俊一郎という軍国少年……それが連想できるかね。いま此処にいる私です。よく映画でタイムスリップってあるじゃないか。今から君たちと一緒にタイムスリップして、現在の新井俊一郎老人と共に、実際にあった1945年の日本の、広島、新井俊一郎少年が居た時代にタイムスリップしよう。

戦争の時代の広島に、そこに実際に君が居たら、どう思うか。それをこれから実体験しよう、考えてみよう。いいかな？」

そして前置きです。

「最初に断っておくが、今日は地獄の話をするぞ、ホントのことだぞ、覚悟して聞くんぞ」

中学校以上の高校生までは、これで始めるんです。最初に、言うなれば予告して、脅かしておきます。小学生相手では、それはしません。

私は、結構、思う存分のハナシを中高生にはしています。つまり、原爆と原発は同じ根っここのものだということ。原子力という言葉がついているように、原子を使っている。何故ならば、広島に原爆を落とした時に、アメリカの大統領だったトルーマン（Harry S. Truman）氏が、これは原爆だということを説明するため、全世界に向けてラジオ放送をやった。その中に一言だけ、物理学的用語を使って説明した部分がある。凄い表現です。「我々アメリカは、宇宙根源の力を使って、日本の一つの町を壊滅させた」と言った。

宇宙根源の力とは何か。宇宙は、言うならば原子の力で動いている。有名なアインシュタイン博士（Albert Einstein）の方程式「 $E = MC^2$ 」を思い出してください。この原子力を使って、アメリカは核兵器というものを作った。それを広島に落としたということを誇らしげに世界に向かって

宣言したのです。

だから、アメリカ人に向かって私は警句を使うのです。「お前さんたちは、原子力というパンドラの箱を開けてしまった」。パンドラの箱というのは、開いた以上、蓋は二度と閉まらない。箱から飛び出して行った悪いものはすべて、もう再び箱に帰っては来ない。でも、たった一つ箱に残っていたものがあつた。それは「希望」だということです。その残った希望でさえ、原子力という途方もない化け物の前では縮こまっている。アメリカ人に、その責任をどう取るか、と質問したら、誰も沈黙したままで、遂に答えは返って来なかった。この質問に対して君たちはどう思うかねと、そこまで突っ込んで話をします。原発と原子力についてもです。

広島市当局としては、そういうことまで話すな、と伝承者には指導しているとか。だから市当局に言うんです。伝承者の教育が始まった時、これは広島市平和推進課が中心になって進めた事業ですが、担当の西田満課長補佐が最初に私に「協力して貰えませんか」と言って来たとき、どういうことをやるのかと質問したら、「被爆体験を伝えて貰うための伝承者を養成する」と答えた。では、どのように養成したらいいか決まっているかと聞くと、「決まっていません」と言ったのです。「これからです」とね。

「では、任せてくれるか。私の思うようにやってよろしいか」と聞くと、「どうぞ自由にやってください。思いのたけを語って下さい。語って貰いたいのは被爆体験の事実と、被爆した新井さんの思いとを語って戴きたい。これが狙いなんです」と言った。「分かった。その二つを、じゃあ自由にやらせてもらうけど宜しいか」、「OKです」と、その場で諒承を取りました。

ですから、私の伝承者は15名ほど居ますが、市当局からイチャモンが付いたら、こういう言質を取ってあるんだということを言え、と指示してあります。「私は新井さんの伝承をしているんだ、伝承している以上、新井さんの被爆体験の実相、事実はこうだった。その事実をどう受け止めたかという新井さんの気持ちまで語っている。その語り方をどうやるか、どのように伝承していったらいいかについて、新井さんは全部、広島市から一



184. 被爆体験の証言風景
(平成26年6月14日)

任されている、全権委任されている。ならば、何を語ろうと我々の自由である。我々の責任において、一切、妙なことを語るつもりはないけれども、言いたいことは言わせて貰う」というように突っ張れと私の伝承者には指示してあります。

現に広島市は、何人かの伝承者には、原発問題などに関してらしいけど、ここまで言ってもいいが、ここから先は言うな、と指導しているそうです。とんでもないことです。被爆者の想いがそこへ至るならば、伝承者たるもの語るべきです。私は初めから宣言しています。

同時にもう一つ、私はどこの団体にも所属していません。所属することを止めています。何故ならば、「いかなる問題」というのが分かりますか。最初、被団協の世界規模の組織が潰れました。ヒロシマが引き裂かれた瞬間でした。世界の原爆への反対運動が統一して広島で開かれた時に分裂をしました。その分裂した原因は、核実験は如何なる国がやっても反対すべきか、ソ連圏がやったら、あれは平和のための実験だから許す、と言って宜しいのかと問題化し、それで分裂したわけです。

ばか者が、と言いたかったですね。ソ連圏であろうとアメリカ圏であろうと、核実験など絶対に反対すべきなのが被爆者の立場ではないか。これが原子力というもの、原子爆弾、核兵器というものを地球上から無くするための第一歩ではないか。

それが左右に分裂したということから始まり、私はそういう状態にある、ないしは、それから尾を引くような組織は一切ご免被るとして、以降、どの組織にも加わることを止めました。聞こえの

良い事を言い募るような組織は信用しません。ですから私は、一匹狼と言うと生意気そうですが、唯我独尊じゃないが、孤独に立ち上がっています。

広島平和記念資料館（国立広島原爆死没者追悼平和祈念館）には、証言を始める1年前ぐらいに撮って貰った被爆体験証言ビデオを納めさせて貰っています。我が家の居間で撮って戴き、編集された作品がビデオとして保存され公開されていますが、撮影時において、ビデオの編集前の原本を欲しいと言って貰っております。その後の2010年4月、証言者として委嘱されました。

証言者になった理由は、歳月を積み重ね、ご遺族の方々からも、お許しを戴けたと思えたこと。今は亡き級友の分まで生きさせて戴けたことに、改めて感謝を捧げながら、これからは、私たち入市被爆者であろうと被爆体験を語らねば、ヒロシマの悲劇を語れる人が居なくなる、という冷厳なる現実には直面したからです。

我が身に何も傷を負う事の無かった私たち入市被爆者であっても、明らかに人道に反するヒロシマの地獄を見てしまった者の責任として、語る義務がある、語らなければならないと思うのです。そうしなければ、広島と長崎で起こったことは、すべてが無かったことになってしまう。そういう時間との切迫した競争が目の前に迫っているからこそ、私は手術を目前にしながらも、こうやって懸命に語っているのです。

今日も話をするのに、こうして背広にネクタイ姿をしています。私は平和記念資料館のステージで話す時も、必ずネクタイ姿で話すことに決めています。それは、盛装をしているわけでも何もなく、だらしなく、またお粗末で失礼に当たるような姿ではないよう、常に心掛けている制服のつもりです。被爆者と呼ばれる人々は、何という哀れな人々であることよ、などと指差されたくないからです。人々から憐れみを持って見られ、情けない存在であるかのごとく見られたくない。私たち被爆者も、あなた方と同じく堂々と生きているのです。

いまやSNSというネットを使っての強力発信が可能な時代になって来ました。これからは、ネットの時代だと思えます。そうなれば、英語さえ出来れば誰だって世界へ向けて一斉に発信出来るん

です。私は残念ながら旅行英語ぐらいしか出来ませんから、とてもじゃない、ダメですが、一遍だけフランスの放送局から取材されたことがあります。一生懸命に被爆体験を語ったら、フランス人から注文されました。「もっと短くしゃべって下さい」

日本人通訳氏が、ほとんど彼らに私のスピーチを通訳していないことに気づいていました。「ばかもの」と言ったんです。「短く端的にしゃべれるような内容だったら、こうしてわざわざ証言なんかしません」とね。「そんな、どこかの珍しい出来事か、ちょっとした事故でも話すようなヒロシマじゃない」と言って、そのまま突っぱねて、マイペースでしゃべり通しました。

後日、フランスから番組のDVDを送って来ました。でも私のDVD再生機では見られませんでした。日米のテレビシステムはNTSC方式と言って、カラーと白黒の両立方式ですが、欧州での主流はPAL方式と、フランスが開発したSECAM方式があります。他方式のDVDでは、見ることが出来ませんでした。この取材は、広島市立大学の先生からのご紹介で、取材時もお一緒でしたから、あの先生の手元にも届いていると思います。その先生はご覧になっているのでしょうか。

そういうことで、2011年はオーストラリアのテレビ局、2012年はアメリカの女性ジャーナリストから取材を受けました。このときにレベッカ・ソルニット女史に問いかけたのが「パンドラの箱」論争でした。予想通り、返事は戴けませんでした。

外国から取材を受けるときも私は、とことんしゃべることになっています。戦争をするのに「戦争法規がある」ということを知らない人が多いのには驚きました。毒ガス兵器を使ってはならないと第1次世界大戦の後に決まったこと。最近ではクラスター爆弾と言う、親子爆弾が小さな子ども爆弾を山ほどバラ撒いて、多くの子どもたちが知らずに踏んで被害にあった。そういう残虐で非道な爆弾も禁止しよう、ということになっています。そういう約束が世界中で決まっていると説明した。

すると、「そんな約束があるんですか。ではなぜ、原子爆弾を使ってはならないと約束をしないんですか」と質問を受けました。私も「そのとおりです」と答えるしかありませんでした。

まずハーグの交戦条約やら、毒ガス兵器や化学兵器など、世界の残虐な兵器を禁止する条約に当然、核兵器は最優先で取り上げられるべきです。

従って、そういう意味では、2021年に「核兵器禁止条約」が発効して核兵器ゼロへの第一歩がスタートしましたが、毒ガス並みに核兵器を条約で禁止された兵器とするのは事実上困難でしょう。

禁止条約が発効したのだから、核兵器は禁止された訳ですが、現実には、そうは簡単に行かない。掛け声だけでは実効ゼロ。すべてがこれからです。

「唯一の被爆国」と常日ごろ格好よく主張している日本は、最優先で批准すべき条約だと思うのだけど、ダメ国家です。せめてオブザーバーで良いから、先ずは参加することから始めよ、と言いたいところです。

それを初めて明瞭に主張したのは、長崎の田上富久市長でした。広島の松井市長は、ムニャムニャと何か言って口を濁してしまいました。2021年に入って、広島の松井一實市長も、長崎の市長に倣って少し表現が変わって来て、長崎市長ペースに近づいたけど、所詮、松井広島市長は厚労省出身の元官僚でしかない人物ですね。

思い出すに、広島市長に当選した途端に松井一實氏が何を言ったか、です。広島市民は覚えているはずですが、とんでもない発言をした。たちまちマスコミに叩かれて引っ込めましたが、物事は言ってしまったら取り消せない。聞いてショックを受けた側は、決して忘れませんから。

「被爆者はぜいたくでワガママだ。あれも欲しい、これも欲しい。あれもやってくれ、これもやってくれと要求ばかりして来る。もういいかげんにして貰いたいものだ」

広島市長になった途端の発言です。ご記憶に残っているでしょうか。こんな人物が広島市長として頭の上に存在していて宜しいのか。こんな発言をした人物が、続けて広島市長に居座っていて良いのか。私は不思議で仕方がないのです。従って彼の「平和宣言」は、いつも中途半端です。目の前に安倍晋三が椅子に座っているのですよ。ズバリ言って、反応を確かめる絶好のチャンスではないですか。なのに、広島市長は何も言わない。

長崎市長は、核兵器禁止条約の批准が進んでい



185. 爆心地付近から北西を望む

(昭和20年10月、撮影 / 米国戦略爆撃調査団、
所蔵 / 米国国立公文書館)

る時も、目の前に安倍晋三がいるから、直接話法でズバツと言いました。「唯一の被爆国である日本国としては、即刻批准すべきである」と言っていた。一方、広島市長の方は何となく、ムニャムニャと言いつれを言っていましたね。

秋葉忠利市長だったらスパツと言ったでしょう。私は平和文化センター会長の秋葉忠利さんから被爆証言者として任命され、同センター理事長のリーパーさんから委嘱状を受け取りました。あの路線が、ずっと続いていて欲しかった。

今の松井一實氏を私は、広島市長として認めておりません。不適任だと思っています。しかしただ、あと誰が広島市長をやるべきか、困ってしまいますね。私の大先輩である浜井信三市長は尊敬しております。あれだけの地獄の町・広島を、ここまで立て直すべく、批判を受けながらも、個人的で強烈な長期建設路線を敷いた。しかも100メートル道路にしても、慰霊碑にしても、原爆ドームにしても、大変な反対の中で浜井さんは最終的には全部、押しつけて実行したんです。そのためか途中で一回、落選したけど、今になって良かったと言われていて、浜井さんは彼岸から「そら、俺の言ったとおりだったろう」と言っていると思いますけどね。

浜井信三さんは旭町の住民で、私は出汐町でしたから、すぐ近くで良くお姿を見かけておりましたが、直接お話をするというチャンスはありませんでした。ただ、浜井さんの助役だった坂田さんが、暫くのあいだアカシア会の事務局長を務めて

いらしたことがあり、その関係で浜井先輩のことは色々聞いておりました。

私の姿勢は何処の組織とも関わらず、是々非々ではありますが、原子力発電所は少しでも早くゼロにすべきだと思っています。絶対安全とは言えないシロモノを、なぜ世界中で使っているのか大問題です。核廃棄物、福島での事故の後処理、廃炉の残骸、貯蔵されている燃料棒などの高放射性物質の処理がすべて未定。とんでもない話です。

人が直接に触れたら即死だそうです。そのことを誰でも知っているはずですが、それをどう処理すれば良いのかを誰も、どの国も知らないまま稼働させているという不思議な現実。どうするつもりなのですか？

北欧のノルウェーかアイスランドの地下に、1,000メートル以上の深いトンネルを掘って高濃度廃棄物を収納する、という方法が提案されています。その地盤が何万年もの未来で安定していると誰が保証できるのですか。

地球の、激しく活動し揺れ動いているマントルの上に危うくのっかっている陸地に、私たち人類はのっかって生きています。その地面の下は、猛烈な灼熱の溶岩の塊です。その上に危なっかしくのっかっている大陸に我々人間が生きているんだということを、世界の誰もが知っているはずなのに、そこへ深い穴を掘って、半減期何万年というような核廃棄物を埋めるのだそうです。

少しでも触れたら、たちまち人間は即死するというような強烈な放射能を帯びたもの。何十万トンもの高濃度放射性物質の廃棄物を、永久に安全に埋没して処理することが出来ると思っている人間の奇妙さ、不思議さ。今もって、実現させた国は何処にもない。

日本でも核廃棄物をどうしようかというので、六ヶ所村に貯めたまま、今ストップしています。再処理など出来ない、ということになってしまった。出来ないということが分かっているのに、いま、核兵器6,000発分ものウランが日本に溜まっている、とのこと。こんなことは世界中が知っているわけです。日本人だけが知らないんじゃないのかな。こんな危なっかしいことをやっていて大丈夫なのか、と言いたいですよね。

なによりも、結論が出ていないということが一

番問題です。つまり廃棄物を処理できないことが分かっている不完全なシステムの原子力発電所を、依然として全部では五十何基も持っている島国日本、地震国日本だというのに、とんでもない話だと思っています。

アメリカでスリーマイル島事故が起きました。あれは、たまたま運よくメルトダウンせず固まって落ちたから良かったけど、日本は1号機、2号機、3号機とも全部が最悪のメルトダウンをして、溶融した核燃料がほとんど全部、隔壁を抜けて下まで落ちてしまった。現在は、果たしてどうなっているかすら、皆目見当が付いていないと言う、考えられないほど危険な状態にあります。

ソ連のチェルノブイリ。その他にも各地で多くの事故が起っています。日本でも原子力研究所の臨界事故で2人、死亡していますよね。これだけ物凄い危険なものだと分かっているはずなのに、なぜ国は、更に原子力発電を推進しようとするのか、基幹電力・基幹燃料の一つとして期待していると発言し続けているのか理解不能です。お粗末としか言いようのない政府の判断と基本姿勢です。

京都大学の有名な原子炉実験所に「熊取6人衆」でしたね、原子力発電に反対の姿勢を鮮明にした研究者グループが居ましたね。代表者みたいな存在の今中哲二さんがアカシア（59回）会員だったので、とりわけ身近に感じておりました。みなそれぞれ助教授クラスで定年を迎えたそうですが、真摯な研究者たる彼らの現場からの意見を、なぜ原子力村の連中は、まっとうな意見として聞こうとしないのか。そういう問題も私は、はっきりと取り上げて発言させて貰っています。

子どもたちからも質問が来ます。福島のこととは子どもたちもよく知っていますからね。だから答えるんです。ああいう、分かっているやる人のことを「おばかさん」と言うんです、とね。

「間違えた。ごめんなさい」で済むようなことじゃないのです。どうやったらいいか、たった一つだけ答えを知っています、と言うのです。「何ですか」と子どもが聞いてくるので、「廃棄物をロケットに乗せて、全部、宇宙のどこかに打ち上げて捨てるんだな」と私は言っています。

これを実行したら物凄い経費でしょうね。しか

し、物凄い経費であろうと何であろうと、それしか方法がないじゃないですか。海の底に投げるのか、捨てるのか。とんでもない。地面の底に埋めるのか。これも、とんでもない。あと残ったのは、無限の宇宙に放り出すしか方法はありません。

ひょっとしたら、宇宙はどこかでつながっていて、元に戻って来るかも知れないという理論もあります。打ち上げたものが、いつか戻って来るということになったらどうしようかと思いますが、これは物理学者に研究してもらいしかない。しかし、いま考えられるのは宇宙をゴミ捨て場にするしか方法がない。お金持ちの国に、「誰かおやりになりませんか」と聞きたいですね。そのようなことを、私は証言の中でも平気で言っております。

核兵器で怖いのは、爆発力も怖いですし熱線も怖いのです。そして問題は放射線ですよ。

私たち被爆者は「放射能」という言葉の方をよく使いますが、放射線、アクティビティー。これは、いったん人間が浴びたら、もう二度と消せません。

毒ガスというのは、吸っても解毒剤を飲んだら何とか助かる可能性はあります。しかし、放射線は浴びると解熱剤はない、消す方法はないんです。浴びたら浴びっぱなし。

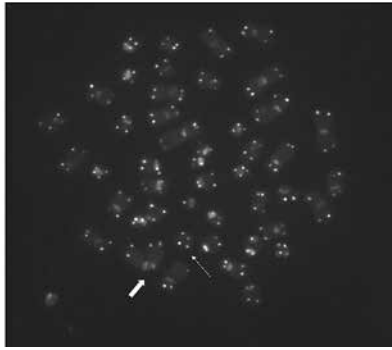
軽く浴びたから良いだろう、と思って何回も浴びると、軽く浴びたつもりがどんどんたまって行きます。問題は、その累積です。数学で言う積分。どれぐらいの時間、何回浴びていたか。つまり生涯にわたってどれぐらい浴びていたかという、浴びた放射線量の累計が問題になるんです。

私が浴びた放射線量とガン

○新井 私は放射線とガンの研究者、鎌田七男先生から、はっきり言われました。「あなたは入市被爆者だけれども、直接被爆者として換算すると、爆心地から1,400メートル地点で直接被爆したのと同じぐらいの放射線量を浴びている、という数字が出た」と聞きました。

何故ならば、私の現在の染色体を分析すると、その染色体のヒトデミたいな格好をしている部分、手があって足があるような部分が放射線によって千切れている。手と足が千切れて首も千切れている。

二動原体染色体異常
(dicentric chromosome)
(太い矢印)と断片
(fragment)(細い矢印)
赤色:動原体部領域、緑
色:テロメア領域



186. 私の染色体転座画像
(鎌田七男先生提供)

しかし、染色体は自己復元の能力といって、イモリみたいに自分の千切れた部分を持って来て、また元のように自分でくっ付けるといふ特技を持っているので、復元して元に戻ろうとするのです。ところが、元に戻そうとしたとき、間違っただけで他の部分をくっ付けてしまう、または、くっ付け損なって2本をくっ付けたり、くっ付かなかったりの異常が起こる。これを「転座」と言うのだそうです。染色体の転座～「新井さんには染色体の転座が相当ある」とのこと。

この転座を調べていくと、通常の病院でCT検査を受けたり、レントゲン写真を撮ったりで放射線を浴びている訳だけど、その被曝線量のデータを全部差し引いて計算して、直接被曝で1,400メートル地点で受けた放射線量に近い放射線を浴びている。それが0.6シーベルトだ、と仰いました。0.6シーベルトというのは、600ミリシーベルトということです。一人の人が年間に浴びる通常の放射線量は、1ミリシーベルトだそうです。

これは、つい先年、2019年12月に、鎌田七男先生から戴いた私の被曝線量のデータです。

○石田 鎌田先生の資料は、前にこちらに頂きましたね。

○新井 はい。一人の人間が一年間、普通の自然放射線を浴びる線量が1ミリシーベルトと聞いていますので、600ミリシーベルトというのは、その600倍。

鎌田先生は、2019年5月25日。先生を中心にした被爆者の医学的講習会の席では、「入市被爆者の新井さんの被曝線量は、1シーベルト、つまり1,000ミリシーベルトと思える。これは仮の数値だが」と仰って下さっています。それで後日、「私

の被曝線量は、600ミリシーベルトから1,000ミリシーベルトの間、と考えて宜しいですか」と尋ねると、「それで宜しい」と仰って下さいました。

つまり、普通の人が一年間で1ミリシーベルトを受けているところを、私は一瞬のうちに600倍から千倍の放射線を浴びた。従って私は、これまでのところガンが4回発症していますが、このガンは全て鎌田先生が言うところの「放射線を原因とした重複ガン」ないしは「多発性ガン」と言っただけで間違いないと診断して下さいました。

「運が良かった」は禁句

○新井 確かに子どもの時からずっと、私は祖母からも「この子はイノチ強い子だね」と言われ続けて来ました。何遍も何遍も、生と死の狭間を行き来するみたいな刹那を潜り抜けて生き延びて来ました。原爆でも生き延びました。その日の朝、広島に着いて広島駅で被爆するような列車に乗るはずだったのを、寝坊したため1列車遅らせようということに決めて生き延びた。被曝した状況も、千田町までで留まっていた爆心地までは行かなかったから、きっと良かったのでしょうか。

しかし私は、「原爆で助かって運が良かったね」とは言われたくないんです。それでは、死んで行った6,300人も学徒たちは全員、「あなた方は運が悪かったね」と、こう言われてしまう運命だったとでもいうのですか。若くして非業の死を遂げた6,300人は皆、運が悪かった、で済まされるのですか。生き残って良かったと言われたくないのが、私たち生き残りの気持ちです。核兵器というものは、「運が悪かったね」で6,300人も死を納得してしまうような、そんな程度のものではない。そう思っています。

私は、だから「運よく助かった」とか、「あなたは運が良かった」と言われるのが最も嫌いです。被爆者の間でも、「私は運よく助かりました」と言う人は少ないはず。我が仲間たちでも同じように、「私は運よく助かって生きております」という言葉はほとんど使っておりません。「全滅を免れることが出来ました」と表現するのがヤツト。でも、「その代わりに、沢山の人が死んで行きました」と話します。まさしく身代わりとなって死んで行った仲間たちに代わって私は、彼らの悔

しさを訴えて行きたいと思っています。

アメリカのオバマ大統領（当時）は過日、初めて広島を訪れました。被爆者代表は「被爆者としてアメリカ大統領の広島訪問を許す」と言いました。だが、多くの被爆者は、この言葉には納得していないと思います。許すことは出来ません。アメリカという国が意図的に広島を選んで、究極の悪魔の兵器たる原爆を意図的に投下したという非人道的行為は、絶対に許すわけにはいきませんから。

アメリカ人を憎むというつもりでは全くありません。「戦争では、日本人を憎んだのではない」と言っているアメリカ人と同じように、我々もアメリカ人を憎んでいるつもりはありません。原爆を落とせと命令したアメリカという国と、その命令を下したトルーマン大統領の責任と、原爆という悪魔の兵器をマンハッタン計画で開発することを決定したルーズベルト大統領と、それに携わった多くの人たち。言ってしまうと、アインシュタイン博士がルーズベルト大統領へ原爆開発を進言する書簡を提出した中心人物ですが、アインシュタイン博士ほかの科学者たち、ドイツからアメリカへと逃れて来た多くの科学者たち、そしてマンハッタン計画に参画した多くの人たち全てに責任があると思っています。そういう意味で、私は絶対に許すことは出来ないし、「許す」という言葉は使いたくありません。

「ノーモア・ヒロシマ」と言うと、必ず「リメンバー・パールハーバー」と返って来ます。

とんでもない、お門違いだと思います。パールハーバーで、いったい何人のアメリカ市民が、日本兵によって殺されたと言うのですか。騙し討ちは認めますが、騙し討ちであろうと宣戦布告付きであろうと、真珠湾で起こった出来事は間違いなく戦闘です。戦争では、戦闘員ではない市民の殺戮は罪に問われます。だから日本の真珠湾攻撃を非難するなら、私は問い返します。パールハーバーでは、いったい何人のアメリカ市民が、日本兵によって殺されましたか。

アメリカ側の記録によれば48 Civilians。更に問いかけます。この48人のアメリカ市民は、間違いなく日本兵によって殺戮されたという証拠がありますか。

日米双方の記録によれば、真珠湾を攻撃した日本機のうち1機が、誤ってホノルル市内に爆弾1発を投下した以外、日本機の全てが真珠湾内の艦船などを集中攻撃しています。

それに対してアメリカ側も猛烈な対空射撃を以て反撃しました。そこで更に問いかけます。死亡した48人のアメリカ市民の死亡場所は何処だったのか調査したはずですが、その記録ではどうなっていますか。死亡場所と死因は何ですか。

私からお答えしましょう。残念ながら48人のほとんどが、真珠湾周辺の住宅地で死亡しており、その死亡原因のほとんどが、中空で炸裂したか着弾して炸裂したか、何れにしても対空砲火として発射された弾丸の炸裂による死亡であると認められているはずです。

真珠湾で日本軍は、記録によれば合計2,340人のアメリカ軍兵士を殺害しています。しかし、これを以て日本軍は、非難されるべき罪を犯したと言えるのでしょうか。

日本軍は、確かに真珠湾を奇襲攻撃しました。同じように広島も、アメリカ空軍によって奇襲攻撃されたのです。騙し討ちされているのです。お分かりになりますか。大編隊による騙し討ちではなかったけど、たった1機か2機のB29爆撃機が飛来して、頭上を数回ぐるぐる旋回して消えて行くという、なんとも奇妙な飛来慣習を見せつけて広島人を騙したのです。

B29少数機が飛んで来るのは大丈夫だ、と広島市民に信じさせていたのです。だから広島の人たちは呑気に構えていた。「警戒警報も解除になったし、1機や2機だけなら大丈夫、大丈夫」と思い込まされてきました。そこにエノラゲイ号など3機が忍び込んだのです。

多くの人が機影を見ていましたが、気にも留めませんでした。その頭上で原爆が炸裂したのです。私たち広島人も騙し討ちにあったのです。まさしく広島も米軍からの奇襲攻撃を受けたのです。分かりますか、この事実が。

パールハーバーが卑怯な騙し討ちだと言うのなら、広島も、明らかな騙し討ちです。しかも無辜の市民の犠牲がケタ違いに大きい。誰も、あんな少数機にやられるとは思わず、普段通り、朝の仕事に取り掛かったところに原爆が炸裂した。巨大

な犠牲者が出たはずです。まったく無防備な市民の頭上に、機影を見つけていた市民の誰もが予想だにしていなかった、悪魔の爆弾を市民の頭上に落したのだから。卑怯じゃありませんか。とんでもないことになるはずです。

東京裁判で問題となったように、平和に対する罪だとか、人道に反する罪だとか、侵略戦争を始めた罪などという罪があるのですか。そんなことを言い出したら、アメリカがヒロシマで犯した罪こそ最大の、そして最悪の罪と断ずるべきです。

考えてみて下さい。極東国際軍事裁判の法廷で日本は、戦争犯罪人として裁かれ、有罪として断罪されました。平和に対する罪、人道に反する罪などで裁かれたのです。

しかし私は、あの東京裁判は無効であると思っています。何故ならば、アメリカが広島で行った行為、長崎で行った行為こそ、先ず東京裁判で最初に非人道的行為として糾弾されるべきだったからです。それが糾弾されることなく、ただ日本軍部の行為だけが裁かれたなど、とんでもない無法な裁判だと思っています。

私は被爆体験の証言の中で、歴史の事実を全部ぶちまけて語っています。そうしなければ、後々に間違った教育が行われてしまう。歴史は、間違った行為をした歴史を素直に学ぶことによって、正しい、新しい世界が生まれるんです。歴史は繰り返すという格言があります。つまり歴史から正しく学ばなければ歴史を学んだことにはならない、ということ肝に銘じて欲しい。これを一生懸命、私は今、子どもたちに語りかけ続けているのです。

子どもたちは一生懸命に聞いてくれています。途中で席を立て「先生、おシッコ」などと言う子は一人も居ません。350回近く証言していますが、会場を出て行った子は一人も居ないのです。私自身が驚いています。ウロウロ歩き回る子も一人も居ません。

居眠りする子は居ましたね、客席の真ん前で堂々と。「お見事」と褒めてあげたいと思っていますが、そういう子は居ても、ウロウロしたり、トイレに行ったり、オシャベリしたり、騒いだりというのは、誰一人いません。小学校の子どもでもそうなんです。これには私の方が頭の下がる思いであります。私は、そういう意味で、子どもた

ちがシッカリ聞いてくれていると信じています。

それから、何人もの引率の先生が私に言ってくれました。「新井さんは、学校で教員の経験があまりなのですか」と。そんなに話が上手とは思いませんが、子どもの身になって、子どもが分かりやすいように、小学校の子どもも、中学・高校生も、そして一般の大人も分かり易いようにと、相手次第で私は話し方を分けて話をしているつもりです。

日本政府、安倍内閣とは全く意見が違うかもしれませんが、これは私の意見です。被爆者としての意見です。絶対に、もう二度と次があってはならないから、それを一生懸命に訴えているんです。つまり核兵器というものは人間を滅ぼす、人類を滅ぼす、地球を滅ぼすということを知って欲しい。そのために私は、一生懸命に証言活動をしております。

「老体にむち打って」と本人が言っては可笑しいかも知れませんが、まさしく私は老体にむち打ってでもやらなければならないと思って話しております。これが、私の話をする根本の気持ちだし、それが、私の話をする基本姿勢です。ぜひぜひ、広島と長崎がこういう目に遭った、こういう地獄を絶対に地球上で繰り返して欲しくないという思いを、どうか多くの人々に、そして後世にまで語り継いで戴けるよう、入市被爆ではありますが、被爆者の一人としてご尽力をお願い致します。まだまだ語り尽くせぬ思いが残りますが、お聞き戴いて有難う存じます。このあたりで一応、終わりにしたいと存じます。

○石田 少しご質問をさせてもらっていいですか。

○新井 はい。

○石田 2006年に『朝日新聞』に投書されましたね。それは、なぜされたんですか。どこからか働き掛けがあったんですか。

○新井 どこからも誘いはありません。私が自分で勝手に、投書しよう、と考えたのです。それまで私は、新聞へ投書なんてしたことはありません。初めてのことです。世のなか、おかしい、と思ったからです。

○石田 この時にですか。

○新井 はい。安倍内閣、それから日本の自民党内閣、おかしいと思ったからです。その次に投書

（『朝日新聞』「声」欄2007年1月6日掲載）したのは、同じ2007年に「何かおかしい」というタイトルで「殺さない誇り、捨て去る予感」…つまり、日本は戦争放棄しました。憲法で、そう宣言しました。そして60年間かな、戦争をしていないし、誰も殺していないし、殺されもしていない。

にもかかわらず、安保関連法案を内閣で勝手に決めましたよね。地球の裏側まで、アメリカか何処かの国を応援に行つて、実力を行使して宜しい、ということになりましたね。

「敗戦から61年間、国として戦うことなく、誰も殺すこともなく、誇らしき歳月だったはずである。そして今、わが国は、どうやらそれを誇りとは考えない国になりつつあると感じざるを得ない」というのが2007年の2回目の投書です。

私が最初に投書したのは2006年です。同じ考えのもとに書いています。

「神がかり的な精神論で国民を戦いに駆り立て、武力という絶対の権力で多くの生命を虫けらのように奪い、国民を悲惨な戦禍の犠牲にした、その歴史をあっさりと忘れ去ったかのような現代である」ということですね。

「生きたまま業火に焼き殺された地獄の広島を私は決して忘れない。恐るべき放射能は今に至るも私たち被爆者を殺し続けているのだ。去年、私は4回目のガン手術を受けた。一昨年、政府は有事に備えてまとめた国民投票に関する基本方針、核攻撃を受けた時の対応策とやらの中に、手袋や帽子、雨合羽を身に着けることが挙げられていて、私たち被爆者は仰天した。唯一の被爆国と自称している国が、全く被爆の実態すら知らないと分かったからだ。核保有論議の必要性について何度も発言した政治家もいる。やはり歴史は繰り返されるのか」と。

最初の投書では「歴史は繰り返されないであろう」と書いたんだけど、二度目では否定している。書いたのは、そういう意味です。そういう、世の中のきな臭さを感じたから私は書いたんです。

○石田 分かりました。あと、2010年から広島市の被爆体験の証言を開始されていますが、これは広島市のほうから。

○新井 いえいえ、私のほうから。

○石田 自分のほうから手を挙げるものなんです

か。

○新井 それは知りませんが、何故かという、もうしゃべらないと、しゃべる時期が終わってしまうと思ったからです。私は、何処の団体にも所属していないし、何処かの団体や機関から声が掛かって来たわけでもありません。自分からです。

何処か他の団体から声が掛かってしゃべっている人たちは、みんな「語り部」と自称して語っています。しかし、私は「語り部」という冠言葉に、物凄く抵抗感を持っていました。

被爆体験証言者を「語り部」と呼んでは、まったく認識が違いますよね。歴史を語っていた稗田阿礼という人は、先祖代々言い伝えられて来た言葉を語るのが役目の「語り部」の人だったので。ところが被爆者は、自分が体験したことを自分で語っているわけであって、それは「証言者」であるということです。「語り部」では絶対にあり得ない。そんなことに拘るな、と言われそうですが、用語の解釈や理解が違っているならば、正確に理解して貰えるよう、きっちり、違うと言わざるを得ない、と思うからです。

そんなとき広島市が、市の広報誌によって、自分自身の被爆体験を公に語る被爆者を募集している、と知りました。世界最初の被爆都市である広島市として、被爆証言がどれほど大切か、ということは私も良く分かっているつもりです。

広島市に修学旅行で来る子どもたちが、平和公園を歩き回りながら、一生懸命に被爆体験を証言してくれそうな人を探している、ということも知っていました。その広島市として為すべきことの一片でも私はお役目を担いたいと思って、証言のビデオにも応募しましたし、この証言者募集にも応募したのです。

これまで縷々述べて来ました通り、私には生かされて今があるという観念、と言うか、想いがあるので自ら語り伝えたいと名乗りを上げました。誕生時の経緯から原爆を生き延びたことまで、「お前には、お役目あり」ということで生かされているように思えてならないからです。

最初るとき、平和記念資料館の館長からテストを受けました。証言者になるとして、どういう内容を語るのか原稿に書いて提出せよ、というのです。私は、先ほどらい申し上げているように、原

稿は書きません。原稿を読むことをしないからです。ただ数字などのデータは、きちんとメモして、間違っただけを言わないようにするし、話の大まかな流れを箇条書きのメモにする程度の準備はします。けれども原稿に書くつもりはない。

つまり、自分の言葉で自分の体験を語るのが自分の役目だと思っていますから、原稿を読むなんてことはしない。私はそういう姿勢だ、と言ったら館長は「それで宜しい」と仰った。ああ、この方は分かっている、と思いましたがね。たしか前田耕一郎さんでした。

よし、とばかりマイペースでしゃべったら、立ち会っていた啓発課の女性職員2～3人が、幾つか質問を投げて来たのです。すると館長が割り込んで、「新井さんには、そういう質問をする必要はない。任しておけば宜しい」と、即座に合格だと認定して下さいました。あ、この方は私のタイプが理解できるジェントルマンだ、と感服しました。

どうやら私の語り口は、他の人たちとは違うみたいですね。皆さんは原稿を書いて、その原稿を一生懸命に読むらしい。もしくは暗記している内容を、調子をつけて読み上げるらしい。ですから、その原稿が間違っていないかを啓発課の職員が一生懸命チェックするらしいのです。私はそのチェックを一切受けていないわけです。そこでチェックしようとした職員に対して、館長がブレーキをかけた。つまり、私は信頼して貰えたと思いましたが。おかげでそれ以降も、私は自己流というか、被爆体験と我が想いをマイペースで語り続けている訳です。

それが2010年の春で、4月8日に平和文化センターの理事長室で、リーパーさんから委嘱状を戴いて正式に証言者になりました。そのとき理事長室でリーパーさんへ「アメリカ人であるあなたが当センター理事長に就任して、ヒロシマから世界へ平和を訴えているとは被爆者として感激に堪えません」と御礼を申し上げたら、リーパーさんが言ったのです。「あなたは被団協か何かの役員ですか」と。いえいえと否定して答えました。「ただの一人の、普通の被爆者です」とね。

いささか彼の反応の仕方が、私の腑に落ちなかったのですが、私の言い方が、組織に属する人たちだけが使う語法だったのでしょかねえ。

ちょっと気に入っていませんでした。

そのせいかどうか、合格したのに何故か12月ごろまで、私には声が掛かって来ませんでした。他の証言者の方は次々に証言していらしたのに、いつまでも私はダンマリが続きました。

○石田 一番最初に証言に立たれた時は覚えておられないですか。どこの学校で、どうしたかというの。

○新井 いや、記録は全部残していますが…。

○石田 記憶のほうです。

○新井 あまり強く記憶に残っていません。なぜならば、その前に私は、知人である韓国人被爆者の会の豊永恵三郎さんから、修学旅行生への証言を頼まれるようになって居ましてね。その線で、最初に子供たちへ証言したのは2010年6月9日。最初だから明瞭に覚えています。大阪の天美北小学校6年3組の20人でした。広島では有名な世羅別館の和室で児童に囲まれてね。まるで一対一会話するみたいに、顔を見詰めながら証言を聞いて貰いました。たしか5～6人の被爆者で部屋ごとに分かれて、手分けしての証言だったので、話す私の方も興味津々でした。

実は、その直前に、これも有名になった富恵洋二郎さんの「パブ・スワローテイル」からお招きがあって、酒場の二階サロンで話したことも思い出深い証言でした。このとき富恵さんから謝礼が差し出されたのですが、この人から戴くつもりはないと丁重にお断りいたしました。豊永さんからは9月も10月も11月もと、次々にお招きが来たのですが、何故か平和記念資料館からはナシの磔。

やっと連絡が入ったのは、12月1日の茨木の中学生たち31人でした。あらかじめ作って準備していたパワーポイントを使ったので記憶に残っています。だいたい私は、最初に被爆体験を話したのは、附属の東雲小学校だと思っていますのでね。

○石田 なるほど。

○新井 外部に向けての公的な証言は、附属の東雲小学校と広島大学の附中・附高が最初ですから。

では、重なる部分もありそうですが、本格的に伝承者養成事業の話題に行きましようか。

○石田 続けて、よろしくお願ひします。

被爆体験伝承者養成事業へ協力

○新井 広島市では、被爆都市としてやらなければならない事業の大きな柱として、2012年から被爆体験伝承者を養成するという事業を始めました。窓口は、広島市市民局国際平和推進部平和推進課。そんな凄い名称の組織があるなんて知らなかったけど、我々は「平和推進課」と短く呼んでいました。そこが事業推進のセンターで、そこから様々な企画や一般への告示などが出ておりました。

日時は失念したけど最初は、私がメモリアルホールでの証言を終わってステージから引き揚げようとしたときに、平和推進課の課長補佐である西田満さんから、「証言が終わりましたが、今ちょっとお話しできますか」という声が掛かってきたのです。その場で、広島市として、こういう計画があると趣旨と概要を説明なさったあと、「最初に声を掛けるお一人なんだけど、新井さん、この事業に協力して戴けませんでしょうか」ということだったので、即座に承諾しました。

つまり被爆者は、何時か必ず消えて居なくなる時が来る。そのためにも、被爆者本人から被爆の事実・体験と実相と、被爆者がどの様に被爆体験を受け取り実感し、その後の人生をどう生きて来たのか。被爆者としてどのように思ったのか、どのように感じたのか、という被爆者の心までを含めて、聴き取ったことを伝えて行く、文字どおり、言うならば「語り部としての役割を担う人たち」を養成したいということでした。かねて私も抱いていた懸念を払拭する広島市としての企画です。遅きに失する寸前、と応諾したのです。

3年間で養成して一本立ちにして、被爆者証言者と同じように体験伝承者として証言する人材を養成して行きたいという。3年は長すぎると言ったんだけど、これから毎年、1期生、2期生というように進めて行きたい、どうですか協力して貰えますかと来たので、即座にお受けしました。

即座にお受けした理由は簡単・明瞭です。絶対に実施すべきだ、必要だ、と思ったからです。それが可能だ、ということも私は信じていたからです。

私が受け持ったのは、第1期生と第2期生です。私以外にも、証言者の中から20人ぐらいの人が同

じように声を掛けられていて、同じように何人かの証言者たちが何人かの研修生を受け持って、如何にも大学のゼミナールのように、証言者がチューターとなって、受け持った生徒（研修生）たちを指導して行く、というコースを辿るようになるのでした。

ただ、最初は全体的に纏まってスタートしました。応募者の採否と、基礎コースの受講ですね。証言者は全員で20人ぐらい。応募者は何百人も居ましたが、その全員を平和記念資料館の大ホールに集めて、証言者も全員が一人ずつ順番に自分の被爆体験を語りました。そのとき私は、証言者各人の証言のやり方を初めて聞き知ったのですが、驚きましたねえ。全員が原稿をほとんど見ることなくフリーで語っていましたが、なかには独特の節をつけて唸るように語る人、講談調の人、浪曲調の人、嘆き節、嘆き節、淡々と語る平坦調、大学教授のような講義調など様々でした。

それを伝承者候補者（研修生）が聞く。聞いた上で研修生側は、どの証言者の下に付こうか、と考える訳です。つまり自分のお師匠さんを選べということですね。これをマッチングと呼んでいました。それらのシステムを、担当の西田満さんが考え出して実施したのでしょう。

1日では出来ないから何回かに分けて分けて、そういうことで、証言者全員が自分の体験を90分ぐらいずつしゃべったのです。それを全部の被爆体験伝承者研修生が聞いて、複数人数でも構わないので、何人かの証言者を自分のお師匠さんとして選ぶ。つまり、研修生1人が何人かの被爆体験証言者の下に付いて、その教室に参加することが許される。つまり2人か3人の師匠に付くことがOKだ、となっていました。

初め私は、それを知らなくて1対1だろうと思っていたら、1人の伝承者研修生が2人か3人の被爆者師匠を選ぶこともOKだったことを後から知りました。そういうことで選ばれマッチングして、幾組かの伝承グループが組み合わせられ誕生する、ということになります。

具体的な2段階目は、いま言うところのマッチングの具体的な実現作業でした。まず証言者が日程を決め、その日に平和記念資料館の会議室に、その証言者を師匠にと希望する伝承者研修生たち

何人かに集まって貰い、平和推進課の担当者が、それで良いかを個別に確認します。人数が多すぎても困るし、少なすぎても困るわけですから、適当な15～16人程度の人数に収まるように調整する目的もありましたが、そういうことも含めて、「顔合わせ」という表現をしていましたが、かくて具体的な研修生グループが誕生しました。そんなことも全部一覧表になって、ちょうどメールという便利なツールが爆発的に使われ始めた時期でもあり、すべてがメールで連絡がつき、記録も残るし便利なものだ実感しました。私は、それ以来ずっと多用しましたね。

やがて各グループの人数が決まります。最初、私は1期生が14人決まりました。しかし、全員がそのまま最後まで行くとは限りません。途中で脱落しますが、まずは14人が決まり、その14人を対象にして、まず何を如何に語り継ぐべきか、ということの議論と勉強から入りました。その勉強内容も多方面で内容も様々。

まずは私という証言者と、ヒロシマとしての被爆の実相です。これが実は大変でした。被爆者によって被爆の実相と言えども単純じゃない。極めて多様で複雑で、巨視的な観察ではなく、個人の単眼的視野と体験の集積である。いわんやヒロシマと言う全体の被爆実相なんて、被爆者個人に分かるはずもない物凄さです。盲者が象をなでて、象と言う巨大な生き物を描写するという格言があります。あの当時、私たち被爆者は、象をなでて広島全体の被爆状況を描写して居りましたね。明らかな勘違いを犯しています。そこを如何に補うかが問題その1でした。

被爆体験の実相をキッチリ手記に書き、被爆体験の手記として記録して貰う。それと同時に、その瞬間、瞬間でどう思ったか感じたか、と言うように、師匠たる被爆者の人柄と人物像をすべて知るため、その人の半生を聞き出して調べるのです。私の場合、赤子として生まれた時から、ずっと前半生を調べるみたいな作業もやりました。それを知らないで、その人をしっかり理解できたとは言えないから、という理由でしょう。詳細な人物調査ですね。

その次に、被爆した時に様々な行動を取ったはず。その被爆時の行動を辿れるだけ辿って正

確な行動パターンを再確認します。その伝承者研修生と師匠とで、あの日の、あの時の足取りと一緒に辿ってみよう、行動してみよう、というフィールドワークをやる手法もあります。

そして行動詳細が固まって来たら、ではこれを、自分なら如何様に語り伝えて行ったら良いか、ということ45分程度の原稿にまとめて発表する。あと15分は質疑応答の時間にするので、それで原稿用紙を渡すから、それに収まるようキチンと書けと原稿作成作業が命じられました。伝承のレジュメとして、小学校向けというのが基準でした。小学生・中学生向けが中心でしたからね。

(伝承者原稿構想レジュメを読み上げながら)「被爆表現の構成」～時間配分を考えながら、まずイントロがあって、この概要が凄いな。「戦前の日本の歴史」「8月6日の被爆状況」「8月7日の被爆状況」「戦後の状況」「平和とは」という5つの項目について、まず時間配分を考えながら原稿を書け、となっています。

3番目。キーポイントとして何が大事かということ、伝えるのは何かということ。伝えたいこと。それから、被爆体験の実相とは何か、被爆体験以外の実相とは何かということ聞き取れ。世界との関係も考えよ。戦争責任もキーポイントだ。

質疑応答についてですが、ノーモア・ヒロシマ対リメンバー・パールハーバーという質問の場合、どう答えるかも考えておけ。原爆投下の必然性はどうか。どうだったのかを議論構成せよ。アジア各地への戦争責任についても、どう答えるか考えておけ。核兵器廃絶の運動についての君の考えはどうか。原子力の平和利用についての考えはどうか。原子力発電所についてどう思うか。スリーマイル島事故についてはどうか。同時に、チェルノブイリ原発事故についてはどうか。福島第1発電所の原発事故についてはどうか。核廃棄物の再利用についてはどう思うか。核廃棄物の処理(世界的な視点から)をどう考えるか。

大本営発表に見られる情報の独占(プロパガンダ)についての見解はどうか。ABC C(原爆傷害調査委員会)についてはどう考えるか。被爆者援護法について。復興(広島平和都市建設法)についてはどうか。被爆者の救済と補償、被爆者手帳についてどう思うか。福島に見られる救済と補

償はどうか。無差別攻撃（なぜ国際法違反にならないのか）。第1次世界大戦で毒ガスは国際法違反であったという事実。

次に4番目、足りなかったこと。1「福島原発事故」、2「原子力の力」、3「核兵器の現実」、4「放射能と放射線について」、5「歴史は繰り返す」、6「これは遺言だ」、7「ノーモア・ヒロシマ、リメンバー・パールハーバーの理論的武装」、8「『あれしきの被爆で何を騒ぐのか』」と言ってはならない、われは被爆者」。こういう歌があるのだが、誰かが歌ったんでしょ。これについての意見でしょうね。それから5番目、福島原発について。これは飛ばしましょう。

○石田 このレジュメは、新井さんが作られたんですか。

○新井 いいえ、これは全部、広島市から来ました。

○石田 内容が網羅的すごいですね。

○新井 それから、「伝承原稿構想レジュメ」。小学生向け、中学生向け、キーポイント、同じようですね。これは先ほど言ったのとほとんど一緒に、「戦前の日本の歴史」「8月6日の被爆状況」「8月7日の被爆状況」「戦後の状況」「平和とは」というのが、だいたい要になっていますね。あとは、伝えたいこと、体験の実相、実相以外のこと、世界との関係、戦争責任、アジアとの関係などなどですね。今とほとんど一緒です。

そして、核兵器廃絶を訴えていくには被爆者の思いを発信し続けることが重要であると。自分のことのように語れる人を養成したいというのが市の姿勢だと、わざわざアンダーラインを引いて書いてあります。被爆の実態や世界情勢、思いが伝わりやすい話し方などを学ぶ。この「思いが伝わりやすい話し方などを学ぶ」にも線が引いてありますね。

つまりこのように、広島市側から最初にいろいろなことについての注文が付いています。この注文に従って自分の原稿を書けということになるわけです。

○石田 自分の原稿というのは新井さんの原稿なんですか。

○新井 違います。

○石田 原稿を書くのは、伝承希望者の方が、そ

のレジュメに沿って書くんですか。

○新井 レジュメに従って、伝承者候補生が原稿を書いて市に提出するのです。市に出した原稿が私たちにも回って来ます。回って来たら、私たち証言者も原稿に意見があれば付言して、我々がまたクレームを付けるんだけど、そのクレームを付ける前に私たちは私たちとして、こういうことを新井俊一郎としては伝承して欲しい、という要望を先に明示しました。広島市とは別に、これは私の方から書いて伝承者候補生へ与えました。

（新井氏作成のレジュメを出しながら）最初に書いたのが、これです。「伝承者の養成」ですね。これは2014年に書いています。

私、新井は普通の被爆者です。普通の証言者です。学者でも研究者でもなく、組織活動家でもない。しかし懸命にヒロシマを証言している。いつか被爆者は消える。その危機感の下に証言しているんだ、ということをお先ず知って欲しいと話しました。「語らなければ、無かったことになってしまう」。これが表題です。ハッと気付いたら、老いてしまい、被爆者も減少していた。激減していた。今こそ語らねば、世の中可笑しい今こそ、と思ったからです。母校と孫からの要請で、被爆60周年ごろに私は語り始めていることなどから話し始めたのです。証言者はリレーの第1走者である。語り部～稗田阿礼と『古事記』伝承者こそ語り部である。歴史に学ぶ。正しく学び、正しく語り継ぎ。先祖から語り継がれた伝承、それこそが歴史というものだと語りました。

4番目、伝承者はリレーの第2走者です。志を同じくする仲間。心強い伝承者の登場を先ず喜ぶと、歓迎と同感の意を表明しました。そして、先ずは実相を調べなさい。被爆者から体験を聴き出し、地獄を知りなさい。そして次の世代へリレーしなさいと伝えました。

5番目、被爆者の思い（心の被爆）、これこそが伝えて欲しいことなんだ。火傷を負った被爆者に水を与えなかった、救えなかった、我一人生き残ってしまったという重い心の痛み、体と心の双方の被爆、それを伝えなさいと願いました。これは『毎日新聞』の記事にあります。私が取材されたものです。

6番目、生き残ってしまった負い目を背負う被

爆者。語ることが出来ず、思い出したくない。伝染するなどの差別で口を閉ざした被爆者。語る資格が無いと思いついてる彼らの実態を知りなさい。

7番目、時代背景を知りなさい。GHQ（占領軍司令部）のプレスコードで、広島・長崎が秘匿された事実を知りなさい。

8番目、無知、知らないことが差別を招く。本当に恐ろしい原子力と放射能の実態を知って欲しい。

9番目、地球と人類の未来のために、広島は原子力危機の始まりなのだ、という重い事実を知りなさい。広島で、時代が変わったということを知りなさい。

10番目、伝承話法。伝承話法というのは、民俗伝承の語り部と酷似していると思いついて欲しい。あなた方、被爆体験を聞いた最後の世代の責任である。「群盲象をなでる」という、今は使用禁止となった格言がある。体験を集積し、全体像を知りなさい。感動を自分の言葉で語りなさい。

最後は、私の一言だけ追加します。「語り伝えなければ、地球と人類は危機を迎え消え去るだろう」と。これが私の伝承者養成講座での最初の言葉でした。

つぎ、「語り伝えて欲しいこと」。同じく2013年。絶対に嫌だという気持ちを、それに共感して下さる方に、ぜひ、語り継いで欲しい。証言者（被爆者）が受けた衝撃、驚き、恐怖、怒り、悲しみ、苛立ち…そのままを伝えて欲しい。証言者の話を聞いたあなたが受けた衝撃、驚き、恐怖、怒り、悲しみ、悔しさ、苛立ちなどの思いも、ぜひ、率直に語って欲しい。心に響いたままを訴えて欲しい。表現者が懸命に語るその心（心情）、そのものを、先ず伝えて欲しいのです。真剣さ、懸命さ、切迫感、必死の思い、ぜひ伝えたいという志、それらが絶対に必要不可欠なのです。

そのつぎ。借り物ではなく、自分の言葉で語って欲しい。メモや原稿を読むのではなく、なんとかして話して欲しい、しゃべって欲しいのです。

そのつぎ。伝承者に応募したあなたの志～その初心を忘れてはならない。常に新鮮な心で、常に感受性豊かに語り伝えて欲しい。伝承者は証言者の単なる代弁者ではありません。多数の証言者の寄せ集めモザイクでもない。伝承者そのものです。

伝承者としての独立性を持って欲しい。独立して自分自身で考えろ、ということです。

語り伝えたいという、あなたを駆り立てたもの、動機、モチーフがあるはず。それは幾つもあるはず。それをもう一遍思い出して欲しい。何も無くして伝承者に応募したはずはないでしょう。語り伝えるということは、相手に分かって貰わないと意味がない。それが基本です。分かって貰うためには、分かり易い言葉と表現で話さないと駄目です。つまり、話し言葉が必要であって、書き言葉ではないのです。演説でもないし、最低限、聴き取り易い話し方が必要だし、発音、発声、話し方の基礎を是非、マスターして欲しいと思います。

話術とは、お芝居を演ずるのではなく、聞く人の心を捉えて放さない話し方の術、なんです。話には「起承転結」の流れ（構成）が必要です。「序破急」とも言われる話し方があります。これは、自分で組み立てる必要がありますね。

話をする場合は、先ず結論から先に話し始めましょう。説明や理由を付けるのは、話し終わってからで十分です。「そもそも」から始まるような話し方では聞いて貰えません。だが、話の筋書きを忘れないようにしてください。途中から脱線ばかりで先に進まない話ほど、聞き手に迷惑をかける話し方はありません。原稿か台本かメモを作って、そっと手元に置いておくのです。単なる備忘録扱いです。

伝承者は、最終的に最難関が控えています。あなたの話を聞きたいと言う人々へ、あなた自身が話さなくてはならない、という最大の関門です。当然ながら「話し言葉」で分かり易く、それでいて話すべき内容を漏らすことなく巧みに話す、という大仕事が残っている訳です。

だから私は、越権行為と思えるほど、言葉の一字一句、句読点に至るまで注文を付けたのです。しゃべることは実は難しい。人前に出るだけでアガルし、口がモツレルし、言葉も出なくなるのが大部分の人間心理です。当然そうなるものです。それを抑え抑えして、自分なりに思うだけしゃべれるようになるには、先ず十分な準備を完了し、十分に自信を持ってしゃべる事。次に、場数を踏んで慣れることが大切です。慣れに陥って失敗す

る人も出て来るので、用心してください。

これは話術です。伝承者に必要な「伝承話法」と言う話術を身に付けてください。教えてくれる人は誰も居ません。自分で築き上げるしかない伝承話法。我がグループでは、私が作った「話術テキスト」を配布しました。伝承者となった人は、必ず最終的には、誰かに向けてしゃべらなければならない。となると、その訓練なしには出番が来ないでしょう。この、しゃべる術を身につけてからが本番です。

作家の先生方は、「箱書き」という手法を取る人が多いそうです。ここからちょっと専門的になるのですが、言いたいことをまず、幾つかの小箱の中に整理するのです。言いたいこととは、話のテーマと申します。話したい主題は、事前に明確に整理し、決定したうえで話を始めましょう。大小幾つものテーマが組み立てられ、構成されて、大きな主題が出来上がり、その中身が順序よく並べられてあれば素敵です。四角い箱を積み重ね、それへ順序良く話したいことを書き込んで、上から並べて眺めるのです。すると、話したいことと順序が一目瞭然で分かり易くなるのです。箱の中に多くの升目を作って、それぞれに話したいことを書き込んだみたいなので「箱書き」と称します。

言いたいこと、テーマとは、必ず動詞を含みます。「何々について」というのは単なる表札であって、テーマではありません。「好きだ」「嫌いだ」「行きたくない」「食べたいほど可愛い」、などと、動詞がないとテーマにならない、ということです。これは物事の基本だと私は思います。手紙を書いたり小説を書くときも同じです。

放送の世界では、聴かせる見せる対象は中学生、というのを基本にしています。理解度と人格形成の成熟度から、そう設定しています。これは放送の世界での定番です。

「歴史は繰り返す」「機械は故障する」「人間は間違いを犯す」「無知ほど恐ろしいものはない」などの格言を大事にしましょう。

「宇宙の原理たる原子力は人類の手に負えない」と、「パンドラの箱を開けた米国の責任」～これを私は、いつも主張しております。

広島原爆の出現は、地球と人類の滅亡を招く時代の引き金になった。1945年の8月6日が、その

日だと私は主張しています。猛毒を消す毒消し薬はあるけど、放射能に効く解毒剤はありません。原子爆弾も原子力発電も、共に原子力を利用し、同時に危険な放射能も生み出し続けると承知しておいてください。大本営発表も、GHQのプレスコードも、情報隠しと言う根っこは同じと理解して下さい。権力の隠蔽体質とパニック防止論の欺瞞を暴いて欲しいということも大事です。

ノーモア・ヒロシマ対リメンバー・パールハーバーに対する明確な理論武装が必要だ。これは私が何時も言っている主張です。市民対象の戦争など、決してあってはならない。戦争にもルールがある。戦争法規によれば、非武装の市民は、絶対に傷付けてはならないのです。その違いです。

アメリカ戦略空軍の指揮官であり将軍だったルメイ（Curtis Emerson LeMay）が日本攻撃で始めた無差別爆撃。日本が上海事件で始めた無差別爆撃。この2件の無差別戦法により、戦場だけで闘われていた戦争が、遂に世界中を戦場に変えました。相手が武装している戦闘員か非武装の市民か、など遂に問題外となりました。自動化が極まった現代では、無人ロボット機からのミサイル攻撃など、戦争自体、無人のまま戦闘が行われるなど、人道問題として論議を必要とする事態を招いた感があります。そんな事態の口火を切ったのが、無差別爆撃と核兵器の登場でしょう。これが、原爆を使って以来、世界が変わった根本的な原点です。

ノーモア・ヒロシマとリメンバー・パールハーバーは、理論の根底が先ず違うということです。核兵器が人類の平和安寧に資するか否か、ということは一目瞭然です。ナチス以来、ホロコーストどころか人類絶滅の理論が出現した訳です。核抑止論などという暴論が世界で罷り通るようになったのは、無差別爆撃という非人道的思想が白人社会の根底にあるからではありませんか。人種差別と共にね。

被爆体験の伝承者となる人々は、本物の被爆者自身から、直接に被爆体験と被爆の実相を聞いた最後の世代であることを強く認識すべきです。ただ、「群盲象をなでる」で終わってはならない。被爆の全体像を見出す努力が必要です。核兵器の非人道性、究極の悪魔の兵器、地球と人類の絶滅、国際法違反、人類への挑戦、平和への罪などとい

う幾多の論理で積み重ねて追及すべきです。

核抑止論を主張し推進するならば、全世界の国が核武装するという結末が終着点でしょう。「使えない兵器」であるならば、テロだけが使用可能ならば、存在自体が否定されるべきだと言えます。

「使えない兵器」というのは、アメリカのパウエル元国防長官の言葉です。世界のトップレベルの首脳は、核兵器の酷過ぎる実相を知っているから絶対使おうと思わないであろう。使わないと思うのならば、必要のない兵器である。従って、核兵器は必要がない。つまり、核兵器はなくすべきであるという理論を、アメリカの国防長官であった人物が堂々と公言しているのです。その理論が「使えない兵器」理論です。

ライオンはシマウマを喰う。しかし、ライオン同士は喰い合わない。それが自然界の摂理だ、という論があります。人類は自然界の摂理から外れた存在である。人類同士が喰い合っていることは、食物としては喰わないかも知れないが、殺戮という意味では殺し合っており、喰い合っているに等しい。

原爆は落ちたのではなく、落とされたものなのだ。被爆者は死んだのではない、殺されたのだ。原爆も戦争も残酷だから子どもには見せたくない、と言うが、残酷でない戦争や原爆があるのなら見てみたいものだ。どこか可笑しい。

修学旅行生の感想。広島で一番印象に残ったものは「被爆者の蠟人形」だった、という事実を想起して欲しい。いまは残酷だから、という理由で被爆展示から消えてしまったが、修学旅行生から返ってくる言葉の中で一番多かったのは、あの蠟人形。あれが一番印象に残っている、というのが今に続く答えですからねえ。

これが私の、被爆者と伝承者の方々に提起した問題の集積です。言って欲しい発言の草稿です。

それに従って私は、これだけの、対応する私見原稿を書きました。(伝承者養成研修の受け持ち受講生が提出した原稿などを取り出しながら)全部、当時の資料で、伝承者の養成事業がスタートしてから、私の下に集まった伝承者研修生が書いて提出して来た1次原稿、2次原稿、3次原稿、最終原稿。そして、それらへの私からの返信メールを、すべて個人別に揃えて保存しています。

メールで着信した原稿を、そっくりプリントアウトして読みました。修正原稿も印刷して保存してあります。プリンターのインクの消費量が莫大なものだ、ということに驚きました(笑)。

これが私の伝承活動です。証言活動とは、また別のものですね。

○石田 すごい量ですね。これを全部ご覧になって、それでコメントを付けるんですか。

○新井 いま「ご覧になって」という表現をされましたが、私は「ご覧になって」、という言葉に抵抗感があるんです。

○石田 と言いますと。

○新井 一覽しただけでなく、じっくり「読み込んで」、届いた原稿の句読点まで、すべてチェックしました。つまり、教える側として、そこまでやってはならない。教えられた方が考え、稽古を重ねて編み出すべきなのです。しかし私は、一番やってはならないことをやってしまった。境界線を踏み越えました。やらざるを得なかったからです。

つまり、伝承者が書いて来た原稿を、逐一全部、文章から句読点の添削まで、やってしまったのです。初めのうちは、添削までやるつもりは無かった。全部、伝承者諸氏に、自分なりに書き直して貰うつもりだったのです。しかし最終的には、待ち切れなくなって自分で書き直してしまった。「ここは、こういう意味だから、別の表現を考えなさい」と指導すべきでした。それを私が自分で書き直したという事は、「ここは、こう書くものだ」と、答えを教えてしまったと同じです。教師の禁じ手です。お芝居で言う「口写し」と言って、歌舞伎の世界で現在も続く、先代の口真似から入る、伝統芸の稽古法と同じです。誰かを教える場合の、一番やってはならない教え方をやってしまった。多忙から来た私の苛立ちと焦りが原因です。

伝承者自身に考えて貰い、何度か表現法を繰り返して修正するとか、再度のチェックを求めるとかの方法を取るべきでした。その代償が、私の異常な疲弊と疲労でした。一時期は正直なところ、ダウン寸前でした。体が変調をきたしていたのも、それを加速しておりました。私の失敗ですが、なんとか、伝承者としての最終的段階の、認定作業を前進させるには貢献できたと自負しております。

伝承者の一人ずつから10,000文字程度 of 原稿を貰います。原稿を貰ったら、それに対する意見を書いて本人に渡すのです。それに対して、また本人から原稿が来ます。次は、何頁目の何行目の何という言葉、何行目の句読点はと、いちいち一言ずつ直して行ったのです。出来上がったら、それを平和推進課に送って、またそれを本人に送り、返って来たものは平和推進課から私へと送り込んで来る。またそれに私が修正意見を書いて推進課に送り、またそれを……もう嫌になります。全部を私が書き直して直接に本人へ送り返した方が、よほど早い。こんなこと、やっていたのだから、本当にたまらなかった。私はこれでダウンした。

○石田 「たまらない」というのは肉体的にたまらないんですか、精神的にですか。

○新井 両方とも。肉体的にも、精神的にも。

○石田 精神というのは、やはり思いが十分に伝わらないことのもどかしさなんですか。

○新井 まるで試験勉強と、その答案の校閲とを、自分自身で、次から次へ毎日毎晩やらされているみたいな感じでした。自分で試験勉強をして、試験の答案を書いて、提出して、返されて来るのを随分待たされて、届いたら又それを直して、送って、次が届いて、また試験の答案を送って、待たされて。私の言ったことが、そのまま無反応で返って来ることもあるし、推進課が中間に入っているから原稿のやり取りが遅れるし、なかに発達障害に近い方も居て、その人からの反応を気にしているのに平和推進課は平気で見逃すし、困惑せざるを得ない状況も混在していました。

原稿も、推進課と本人と私の三つ巴で回っているから、それはもう混乱する。被爆の実相だって、日本と世界の関係がどうだと言ったって、それらを漏れなく語っては45分の制約を守れない。では外しても良いかとお上に尋ねるとダメだと返って来る。詳細に語るには紙幅が足りない事は分かっている。では、どうすれば良いのか分からないという伝承者も出て来る。しかし正解は無い。表現を評価するのも個人差があります。それらの間を問題が往復していて、いつ終わるのか分からない迷路に陥る。平和推進課と啓発課の、どこからかOKが出るまでは終わらない、無限の作業みたいでした。

○石田 3年間、ずっとこれが延々と続くんですか。

○新井 いや、ほとんどが3年間の最後の1年間に集中するのです。私は1期生と2期生の、二組だけを担当させて貰いました。3期生以降は、このままでは自分が持たないと感じたからお断りしました。だから原稿の集中は、二か年間にわたって発生しました。最初の2年間は集中的な勉強、勉強、勉強。研修会、研修会、研修会の連続でした。

私のテレビ時代のビデオを見たり、私をNHKが取材したビデオも結構あるので、そういう映像などを見たり、南京攻略のニュース映画を見たり、日本の明治維新はどうだったかとか。今でもそういう勉強会をやっていますが、勉強会のためにはパワーポイントの映像を作らなければならない。そういう様々な作業が付き物ですから、私物の、山ほどある各種資料を印刷して研修生に配布するのも大仕事です。大量の複写印刷までは、平和推進課でやってくれましたがね。それで私は、四六時中追い回され、ほかは何も出来なかったという苦闘ぶりでしたねえ。

○石田 市は原稿をチェックしないんですか。出された原稿を。

○新井 いや、本人は原稿を先ず、いったん平和推進課に提出してチェックを受けるのです。事実関係に間違いは無いかなど、市の平和推進課で基本的なチェックを受けます。それを経て、OKとなった原稿がメール添付で平和推進課から私の手元に来て、それからが私と原稿との戦いになる。私の原稿チェックが終わったら、それを平和推進課に戻し、平和推進課が本人に、私からの私見文書を添付して原稿を送るのです。それから本人によって原稿に私からの注文を加味した第二次修正原稿の作成となり、完成したら再度、平和推進課を経て私の手元に届く、と言う廻りくどい手順を経て、原稿の修正が整って行くのです。

基本的に、本人と私が原稿を直接に取り交わすことはありません。だから時間が余分に必要になるのですが、平和推進課としても内容に責任を負うことになるのだから、丸ごと私へ下請け、一括一任、みたいな仕事ぶりは出来ない立場だったのでしょうか。だけど私は、平和推進課が実際に原稿の何処を如何にチェックしたのかは、全く痕跡が

ないので分からない。だから、平和推進課で削除されたものが、私の段階で復活したケースがあるかも知れません。でも詳細に毎回全部をチェックする訳じゃないから、互いに知らないまま、なんてこともあり得ます。どちらにしても、必ず平和推進課がチェックしたものが私の手元に届く、というシステムでした。

○石田 これは、証言者の方は、すごい負担がそれぞれ掛かっておられるんですね。

○新井 他の証言者の方々が、どんな具合に対応していらしたのか知りませんが、私たち証言者に比べて伝承者の方々は、全員が完全に無報酬です。交通費にしても、証言者は証言し指導する折には交通費が支給されるけど、伝承者の場合は全くの無報酬の手弁当で、交通費も無かったはずです。私たちの伝承グループでは、「せめて一緒にお茶でも飲もうよ」と言って、みんなでコーヒーを飲んだことが何度かありましたがね。

だいたい届いた資料をプリントアウトする場合、プリンターのプリント料（インク代）が凄く高価でしょう。伝承者も同じ条件ですよ。紙とプリント代は自前だ、となる。そんなこと、平和推進課は知らないのでしょうかね。実費を出そう、などと言うのを聞いた事がない。だから、平気で一覧表を送って来て、これを見なさい、という訳です。私など老眼だからPC画面では見えない。だから毎回プリントアウトします。いちいち、こうやって打ち出すのですが、前に言った通り、ほんとインク代が高価です。だから振り回されましたねえ。試験勉強をやっているみたいで、私も知らないことが多いのだから。



187. 自主研修会後の記念写真
(国際会議場のレストランにて)

○石田 ただ、新井さん自身は、手応えは感じておられるんですか。

○新井 他のグループは知りませんが、少なくとも伝承者の私のグループだけは、チューター役を担って苦勞をした甲斐のある面々です。素晴らしい個性的なメンバーが揃っており、既に遠く県外にまで派遣されて伝承講話をこなしている人も多いという、素晴らしいグループです。リーダーは保護司後見人の宮本憲久氏。サブは本覚寺住職の渡部公友氏。惜しくも早くにガンで亡くなってしまったメンバーの浅田晏司氏と中田和雄氏のお二人を先に紹介しておきまして、続く現メンバーでは、被団協の役員を長く務める大中伸一氏。伊方原発の差し止め訴訟の発起人役員の伊藤正雄氏。PTSD研究所の高田直久氏。三原市から熱心に通って学ぶけど発達障害のため書いたり話したりするのが苦手なN君。女性では芦屋市在住で読売新聞社の校閲を担当しながら阪神地区で活動中の山本美弥子さん。広島市の観光ボランティアの畑利子さん。最若年だったが6年を経て結婚し母となり主婦となり多忙となった元ドーム脇での燈籠流しのリーダー保田麻友さん。元中学校教師の妹尾眞利子さん。伝承者ではなく下支えの担当を希望する田坂乙与美さん。元教師でNGO活動家の沖吉幸子さん。老いたる母を介護し看取った堀眞希さん。朗読ボランティアで元劇団員の吉田知世さん。以上合計16人が、私の伝承者グループに属するメンバーです。

うち、正規に伝承者の認定を受けた者は14人、死没者2人を除く12人が、現在、新井グループとして広島と阪神地区に於いて活動中です。せっかく認定を受けながら途中で亡くなった二人が、なかなか優秀な人物だっただけに惜まれてなりません。残ったメンバーでも、ほかのグループに見ない「裏方専従者」の存在など、優れて特異な性格を帯びたグループだ、と評価できるのではないのでしょうか。もともとの素地があったと思いますが、3年間で鍛え上げられた成果を表すグループだと私は誇らしく思っています。

○石田 この作業を通じて、手応えは感じられたんですか。

○新井 大いなる手ごたえを感じ取っております。たしかに全員が話し手として、アナウンサー

みたいに優秀だ、とは言い切れませんが、証言者である私の想いを重点に、ヒロシマを聞き知った者として、優れて見事な伝承者だと断言できます。

例えば宮本憲久さん。グループのリーダーで、御年70歳を超えてガンも患っていらっしゃるのですが、率先して県外へ派遣されての出張講話をなさるのに、見事なアニメ作品を凌ぐようなパワーポイント映像を創作して持参上映され、伝承講話も宮本さん特有のポエム話法で、散文詩のような言葉の群れを紡いでの伝承話法で聴衆を魅了しています。保田さんも山本さんも、正式認定を受ける前から、早くも外部からの要請を受けて、自分なりの伝承講話を始めていらっしゃいました。手応え、と言うならば、グループのメンバーから返って来る報告が、すべて先方からの感謝と感激の御礼の反応ばかり。チューター役だった私にとっても、これほど嬉しいことは無いですね。

困ったことと言えば、先ほどお話しした、身体的な問題があって書いたり話したりが苦手だけど、ぜひとも伝承の仕事に関わりたいので指導して欲しい、と申し出た子です。自分では原稿を書けないので、お父さんに書いて貰ったと言って原稿を提出して来たのです。対応に困りましたねえ、私は。ところが責任部署である平和推進課の担当者は、それでもOKだ、と言うのです。これには困惑しました。「それで良いのか」と再び確認したけど、平和推進課は「良い」と言うのです。何を考えているのか。将来この子は、自分で伝承原稿を書いて、外部の一般の人に向けて話すことになるんだよ。それが出来ないと本人が言っているのに、伝承者として認定するつもりかと大論争になりました。

それでもやっぱりOKだと言うのです。お父さんに書いて貰ったにしても、原稿を書いて来たことは間違いなのだから、と平和推進課は言う。呆れましたね。私は絶対に反対だと突っぱねました。そんなことしたら、将来、困るのは、伝承者に認定されてしまった本人だ。「私には出来ません」と言って本人は、その場から逃げ出すしかない。あとに残された啓発課か平和推進課の責任者は、いったい如何に対応するつもりか、と言いました。イエスかノーかハッキリさせろ、と言った。まずは伝承者研修生に採用するか否か、判断しな

さいと、何度も言いましたが、この件は放置されたまま、当局側は人事異動で担当者が次々に代わってしまい、最後の女性の課長に至っては、遂に何にも言って来なくなってしまった。

私だけが、カンカンになって怒っていたけど、ナシの磔。その子は今でも私に手紙をくれて、「身体を大事にしてください、無理せずに頑張ってください。私に返事をせねばなどと心配しないで下さい」と逆に私を心配し、宥めてくれているのです。可哀そうだと思わないのでしょうかね、広島市平和推進課の人たちは。私は彼を密かに、私の伝承者グループの列外一名として遇しております。

先に紹介した女性。「私は伝承者にはならない。伝承者の人を応援する」と主張して、実際に今も支援を続けてくれる田坂乙与美さんというご夫人が居ます。ご主人がIT企業か何かのお仕事らしく、パソコンとか、データバンクとか、アーカイブなどに詳しくてお手伝いする、と言うので有難く仲間に入って貰っています。

かくて我が新井グループでは、仲間全員でML(メーリングリスト)システムを組み上げました。次いでWebシステムに挑戦し、宮本さんが資格を取得したことでZoom会議を立ち上げ、最初は平和記念資料館の会議室で自己研修会をスタートさせましたが、コロナ騒ぎで方向転換し、現在は内部での第二次研修会をWeb会議システムで開催し続けております。これには外部からもNY在住の近代画家、蔦谷楽さんや、東大名誉教授の佐藤一子さんなど著名人も参加して下さいます。

これも先に言ったと思いますが、伝承者養成期間が3年となっていました。私は、3年というのは長すぎると主張しましたが、誰も一顧だにせず、無視されて来ました。今に至って、ようやく養成期間が2年に短縮されたとか。そして現在に至っています。

年明けて2021年、令和3年です。私は間もなく90歳になります。今から新人を養成するのに、2年でも長すぎる。1年間の促成栽培を要請します。なぜ3年になったか、と言うと、広島市の予算の関係らしい。なぜ予算を取るのに3年かかるのか、と思うのだけど、きっと、一回一回の予算を少なくするという意だったんでしょうね。しかし、3

年は長すぎる。3年もかけてるうちに、被爆者である私たちの方が年を取るぞ、と言ったのです。養成事業が始まったのが2012年です。早くも10年近く経ってしまった。3年経てば、それだけ年を取る。

3年の最後の1年間ともなれば、1期生の諸君とは完全に仲間意識になって居りました。(受講生名簿と懇親会の写真を出して)これが1期生と、2期生も加わった「新井グループ」です。こういう集まりも、しょっちゅう開くようになっていきます。これは、その第1回の懇親会です。年に1回程度かな、私の誕生日に集まって下さるのです。私には教師の経験がなく、恩師と教え子の関係を羨ましく感じていました。こういう集まりは、クラス会での生徒と先生に似ていますよね。嬉しくも有り難い集いです。ただ私が次第に歯を痛めるようになり老いて参りました。食事会ではご迷惑を掛けるので申し訳ない次第です。

この前も米寿の誕生会を開いて下さったのです。そして、戴きましたよ、記念のトロフィーです。出窓の真ん中に飾ってあります。エジプトのオペリスクみたいな、高さ20cmほどのガラスの角柱を立ててあるでしょう。グループ代表の宮本憲久さんが、ご自分でデザインして作らせた特別



188. グループから送られた記念品

仕様の米寿記念と刻まれたガラスのタワーです。88歳の記念として、皆さんからのお気持ちだとのこと。独特な印はキノコ雲をイメージしたとか。こちらからは、米寿の祝いと刻み込んだ特製の万年筆を全員に贈りました。最近、また万年筆が使われ始めたらしいですね。

既に1期生のほとんどが、正規の伝承者に認定されて活動中です。

こちらが2期生で、グループリーダーだった山本耕三さんはスーパーの店長だったのですが、急に転勤ということになり、「残念だ、残念だ」と言いながら他地区へ行ってしまい、身を引きました。そのあとは渡部公友さんがリーダーを引き受けて戴きました。現在は1期生も2期生も合体したので、宮本さんと共に、サブリーダー役を担って戴いています。

全体のリーダーは宮本憲久さん。NHK学園の卒業生で広島のNHK学園OB会の会長。それから保護司で、後見人の資格も持っていて、家庭裁判所の仕事で活動中です。年齢は70歳を超えたばかり。ただ、この人も肝臓ガンを患っていて手術を繰り返しています。副リーダーの渡部公友さんも脳腫瘍。若かった伝承者1期生も、みんな、そういう年齢になって来ているのが現状です。

グループの中で、というより伝承者全体の中で最も若いのは、当時20代だった保田麻友さんです。その意味で当時、マスコミ取材に追いかけて大変でした。因みに、私と同じ附属の出身で93回生です。

みな、伝承者を目指して研修を受けてハードな勉強を続け、その過程で被爆者から直に話を聞くのです。被爆2世も居るし、なかには被爆3世も居ます。きっちり勉強して、実相や被爆者の想いをシッカリ知って伝えて行きたい、という気持ちで応募して来ている人たちばかりです。だから、成長の度合いも凄いですね。

正式に伝承者に認定された人たちは、国立祈念館（国立広島原爆死没者追悼平和祈念館）のお世話で現在、どんどん県外へ出張して伝承講話を行っています。我がグループで、一番よく出ているのは、リーダーの宮本さんかな。そのたびに、詳しい報告書を頂戴して感謝しております。私にも彼らの活動状況が分かりますのでね。

平和記念資料館の中にも、伝承者が順番に毎日、定時に講話を実施している部屋があります。来館者は、自由に伝承講話を聴くことが出来る、というシステムが出来上がっている訳です。私も時々聞きに行きますが、私たちが聞きに行くと部屋に坐っていると伝承者は話しにくいかなと懸念しましたが、いえいえ、大丈夫で皆さん、堂々たるものです。頑張ってくれていますが、ほとんどが無報酬なのです。県外に派遣されたときだけ、往復旅費と宿泊費は国費で支払われています。あとはみんな無報酬。いわゆるギャラというものはなく、徹底したボランティア活動です。この先の不安要因は、この点でしょうね。なにもかも無報酬では、永続性に懸念が生じかねない。この先への伝承者制度が内蔵する課題でしょう。国と広島市の姿勢が問われる課題です。是非、早期に検討を加えるべきであり、現状維持で良し、とするのでは困ります。証言者や伝承者の使命感に頼ったままでは、未来が見えて来ませんから。

私たち証言者はギャランティーはないけど、交通費を含めた謝礼金は戴いています。証言1回につき6,000円です。先般、ちょっと増額して6,200円になったのかな。けっこう大きい額ですね。

○石田 県内で6,000円ですか。

○新井 市内中心部で6,200円です。中心部以外か宮島などの周辺部は10,200円。中心部でも午後5時から8時の間なら10,200円、中心部以外か周辺部で夜間の場合は15,300円という内規があります。この金額は、基本的には聴講団体から証言者へ直接に手渡されます。市外遠方に出る場合は別途、交通実費が支給されます。

私の経験では、熊野町に近い矢野中学校に招かれたときは、学校から往復とも送迎車を提供してくれました。高齢者としては有難かったですね。北海道へ出張講話をしたときは、先方の北見市教育委員会から私へ全ての連絡がメールで入り、交通機関の手配は私が自分でやり、宿泊と食事の手配はすべて北見市側が担当。謝礼も北見市から戴きました。到着したら北見市教育長との公式会見としての表敬訪問まで設定しており、恐縮したものです。係も男女お二人が、2泊3日間、公用車と共に、べったり私に付いて下さいました。もちろん事後に、報告書を書いて啓発課に提出しまし



189. 新井グループ第二次自主研修会風景

た。単独行です。

それとは逆に盛岡市に出張した時は、啓発課から主事が付いて来ており、現地で広島市主催の原爆展示会が開催されました。その一環行事として、私の証言会が開催されたのです。このときは私が自分のビデオカメラを持ち込んで証言会のすべてを自撮りして持ち帰り、伝承者との勉強会で上映して全員で見ました。教材として、ですね。しかし伝承者には、県外派遣の場合を除いて、全く交通費を含めて謝礼金はない。そう聞いています。

(勉強会の配付資料を出して) こういうのを全部、伝承者側がパソコンで作ってくれるんです。この第二次研修資料を使って、いま私たちのグループでは自主的に勉強会をやっています。これは「教育勅語」について勉強した時のレジュメですね。こういうパワーポイント映像の作成も全部、私の頼んだ通りに作ってくれました。私自身も作りますが下手なので、こうして手作り資料を準備して、仲間内にはメーリングシステムを使って一斉配布しながら、伝承能力維持のため、向上のため、自主的に勉強会を実施しています。平和記念資料館も協力してくれて、第二会議室など、空いている限りは使わせて貰いました。ところが、コロナ蔓延騒動で現在は、すべて中止。あとはWeb会議システムを使つての証言とか勉強会ですね。

初めのうちは自分たちで会場を探そうというので、副リーダーの渡部公友さんのお寺、本覚寺の、備品完備の凄い研修室を借り切って勉強を続けていたけれど、渡部公友さんが、お父さんの後を継いで住職に就任されました。住職ともなれば超多忙。しかもご自分で長く「子ども食堂」の世話を続けているし、本川小学校記念館のボランティア

ガイドもなさっている。という訳で、ご本人の体調もあって暫くご遠慮、という状況に至りました。

その後も勉強会は、喫茶店で開いたり、我が家に集まったり、国際会議場地下のレストランで開催したりしていましたが、費用は全部、自分たちで持ち出しです。1期生の皆さんは既に長期間の活動を続けていますので、慣れていきますから、自己啓発としての勉強会を計画した結果、私が作ったパワーポイント資料を使って勉強会を始めよう、としたトタンにCOVID-19、コロナ騒動が勃発し、完全ストップしました。

これがコロナの直前に予定していた勉強会の資料です。パワーポイント映像で、伝承者の宮本さんからのご教示を戴きながら作りました。2020年2月21日と日付を入れているけど、こういう内容で始めようと計画していたものです。

○石田 そうですね。

○新井 これを使って、平和記念資料館の第2会議室で勉強会をやりようと思った途端、コロナ騒ぎになりストップになってしまって、そのまま。あとはもう電話・メールでの連絡だけですが、Zoomで出来ないか相談しています。

いまは8期生まで居るはずです。現在、伝承者は全部で何人なのか、と尋ねたら150人だそうです。

○石田 新井さんは1期生、2期生で止まっているんですか。

○新井 私は、3期生以降の講習は辞退しました。つまり、私としては猛烈な苦勞をしたので、もうこれ以上はご免だといって逃げました、卑怯にも。

○石田 ただ、その3期生より前の方と、いまだにずっと勉強会を繰り返してやっているんですか。

○新井 そうです、私のグループだけらしいけど、自主的な勉強会です。いまは8期生が研修中だと思いますが、証言者の中で、8期生までずっと指導しているという方もいらっしゃるのでは、と思います。それが誰かは知らないけれど。でも私は、2期生まで受け持って、ちょうど3期生の研修が始まる時に体調を崩して休んだので、それもあって、3期生から以後は失礼する、と宣言したのです。本当に大変でした。一つの学校を経営しているみたいでしたからねえ(笑)。ほんと、そんな感じ。

○石田 この原稿の量が物語っていますよね。

○新井 1期生と2期生と、それぞれ別冊ファイ

ルにして関係資料を保存しています。あとは、この原稿ですね。これは、なんとしても捨てられない。捨てた資料も多いのだけど、これだけはねえ。そんなことで、気力も体力も能力も、みんな使い果ててしまった。

私は、やたら肺炎を起こす癖があるんです。それと大腸を切っているんで、なにかあると腸閉塞を起こすんです。この二つの持病で、しょっちゅう市民病院や県病院に駆け込む。2019年なんて、夏に3回、続け様に肺炎を発症して入院しました。入院しなくとも、近くの内科医院で毎朝、点滴を打って症状を抑えながら証言したこともある。だから去年の8月6日は、県病院で迎えました。

3回入院というのは説明を要するな。最初、肺炎を起こして市民病院に入院したんです。直後に平松病院に転院して、それで退院したんですが、その明るる日に、また高熱が出て県病院に入ったのです。そういうことで、2回連続で肺炎を起こし、それから少し間を置いて、またもや県病院のお世話になって。去年の夏は3回、続け様に肺炎を起こしました。今年もまた、つい、ひと月ほど前に肺炎をやったばかりです。

○石田 そうですね。

○新井 ということで肺炎が持病、腸閉塞が持病。そして今度はまた、新しい副腎腫瘍という病魔に襲われているのです。近く、広島大学泌尿器科の主治医、井上省吾先生の執刀で手術、という方針が決まったまま宙ぶらりんで、今は待たされています。ガンかどうかは分かっていない。

鎌田七男先生の見解では、ガンの可能性があるとのこと。普通の副腎腫瘍で、あんなに急速に肥大する腫瘍というのは聞いたことがない、と言うんですね。こんな急激な肥大状況を見れば、異常であるからしてガンの可能性がある。

副腎ガンの可能性は、データによれば100万分の2人だそうですから、物凄く稀である、と言える。単なる副腎腫瘍の肥大、ということであるかも知れないが、お腹を開けて見なければ分からないんだそうです。これが私の目前に控えている状態です。

伝承者の現況は、ちょうど今は修学旅行の団体も来なければ、先方からの呼び掛けも来ないということらしく、今すべてが中だるみ、休止状態で

す。証言者の方も同じです。

今朝、啓発課に電話を入れたのですが、平和記念資料館自体が、閉館中でスタンバイ態勢と言うか、何も決まっていない段階なので、決まったら新井さんの方に連絡します、ということで、すべてがストップしているというのが現状のようです。

150人という伝承者たちが、所属している部署は、平和記念資料館の啓発課です。管轄としては、広島市平和推進課が伝承者を募集し、平和推進課と啓発課の職員と、講師となった私たち被爆体験証言者との3者が中心になって彼らを伝承者として養成し、更には私たち3人が伝承者認定の試験に立ち会って採否を決定するのです。

試験とは、伝承者が書いた原稿を基に、私たち3人を一般聴衆に見立てて伝承講話を実演するのです。つまり聴衆を前にしてスピーチをする訳であり、「話す」という教育を全く受けていない日本人にとって、極めて高い障壁が立ち塞がっていることを覚悟せねばならない場面です。

審査する私たち、果たして合否を判定するだけの資格と能力があるのでしょうか。この大問題を投げかけたのは、現在のところ、私だけです。そして、この難題への回答、もしくは解決策が提示された、という事を聞かないまま現在に至っている。これを放置することは、伝承者養成事業の推進にとって由々しき事態である、と私は警告しておきたいのです。

この最終試験に合格した人が、被爆体験伝承者として認定され、委嘱状を受領して一人前の伝承者としての活動を開始することが出来る訳です。現況について、私は詳しく知りません。

ここで第二の問題を提起します。伝承者として認定し、活動を始めた人たちを、認定したあと如何に遇するのか、という問題です。証言者としては、教え子である伝承者候補生が認定を受けて独立してからは、制度上、全くの没交渉となります。それで宜しいのでしょうか。国として、また広島市として、それで宜しいとお考えなのですか。互いに連絡し合う義務もない。そう、仰るのですか。如何でしょう、問題点が2点。そのまま放置されていると私は考えます。

生徒が、私の手元からは離れてしまったという状態。まさしく大学で言うゼミナールが閉講した

あとの、チューターと生徒の間柄みたいです。

○石田 そうですね。

○新井 私は、ゼミをしょっちゅうサボっていたので生意気なこと、言えないけど。そういう状況にあるということが懸念材料です。

入院騒ぎからガンへ

○新井 癖になったのか2020年、令和2年の春先に又も肺炎を発症し、県病院に入院して回復していたのですが、今度は7月5日、広島大学病院へ入院してしまいました。但し肺炎ではなく、しばらく前からの疾患だった左副腎の腫瘍が転移ガンと判明したため手術を受けることになったのです。これは私にとって5回目のガンでした。

手術は7月6日でした。そのため、母校での慰霊追悼の集いが、果たして如何なる結果となったのか分からず終いでした。原爆忌を入院した病室で迎えるのは2度目です。

副腎ガンは内視鏡下で手術するとなったのですが、現実には困難を極めた模様です。これまで私はガンと腹膜炎のため腹部を5回、開腹方式で手術しております。そのため私は横隔膜より下の腹腔内が、過去の手術による癒着でガチガチになっているので、今回は患部である副腎の位置が腹の上部にあることから癒着は少ないと考えられるため、腹腔鏡下での手術は可能と踏んだのです。

狙いは外れた模様でした。術後に腹部の手術痕を調べたら5か所も孔を開けた痕跡がありました。通常は3か所で終わるはず。泌尿器科の井上省吾主治医からの説明によれば、手術時に副腎のガンを腹腔鏡で探すうちに、隣接する膵臓が突然、大きく裂けたのだとか。ドッとばかりの思わぬ大出血となり、慌てて止血措置が取られたけど、結局は1,500ccもの出血で、800ccほど輸血したのだそうです。そのため肝臓が急激なダメージを受け、緊急治療が必要になったとか。

それでも何とか副腎ガンは切除したが、裂けた膵臓のダメージが大きく、膵液が流れ出て止まらない状態が続いたのだそうです。膵液というのは強烈な消化力を持って居て、自分で自分を消化してしまうほどだとか。とにかく何とかするには、流れ出る膵液を体外に排出すべく体内にドレーンという管を入れ、膵液の流れが収まるまで患部に

傷をつけないよう静かにドレーンで腓液を排出して自然治癒を待つしかない「自然療法」を実施すると決まりました。要は、もう打つ手がない、という事でしょう。

そのドレーン・チューブの太さを、腓液の滲み出る量との兼ね合いで太いものから次第に細くして行こうとの計画で、しきりに医師団4人はX線やCTを撮影して診療に集中してくれました。

なにせ副腎ガンの切除術を実施中に、誤ってなのか加齢による組織の劣化なのか原因は分からないけど、少なくとも全く予期していなかった腓臓を損傷するという医療事故の発生です。4人の医師団には、それへの責任感が横溢していたように思われます。

実は、しきりに術後に撮影していたCTの画像から医師団は、全く別途の現象も発見しておりました。しかし全くその気配すら見せず、退院前の最終カンファレンスの際に、初めて発見した新規の現象を打ち明けてくれました。僅かに残っている私の左腎臓上部に転移ガンが発見されていたのです。これは私にとって6度目のガン宣告でした。

最初のガンは1984年、昭和59年12月24日に手術しました。広島記念病院の内科部長だった級友の中村玄君によって発見され、CT検査で右腎臓ガンと確認されました。私は経理部長に着任し苦闘していた最中でした。即座に入院・手術と決まり、私は会社へ取って返して自席を整理しておいて、すぐさま病院へと直行したのを記憶します。初めての全身麻酔での右腎臓全摘手術でした。

術後の痛み止め脊椎麻酔のため、まざまざと幻影が現れ、病室の壁を左から右へとゆっくり、画家ピカソの描いた横向きの顔が流れ続けたのが忘れられません。咳き込んだ挙句に激痛を發した傷口を押さえつけるため一人の看護婦さんが、その若々しい全身を私の身体の上に乗し掛け、身体の真上から、汗まみれになりながら痛む腹部の傷口を押さえ付けてくれました。なんと有難く、申し訳ないほどの献身ぶりに感激したことも忘れられません。53歳でした。

2回目は2002年、平成20年1月7日に手術した左腎臓ガンの部分切除術でした。前年の秋、70歳を超えたので、それまで悩んでいた排尿障害～前立腺肥大症を完治させようと考え、広島大学病院

の泌尿器科に入院していたのですが、術前のCT検査後に主治医の井上勝巳（71回）先生が飛んで来ましてね、「先輩、呑気に前立腺を弄っている場合じゃありません、残っている左腎臓にガンが見つかりました」。これには参りました。既に片方を失っている腎臓を摘出する訳には行きません。

止む無く、自己血輸血も予め準備しておいて、左腎臓下部に出来ているガンを部分的に切除する、という誠に難しい手術に踏み切ったのです。腎臓とは体内の毒素、尿素を血液から濾過して排尿する器官です。つまり、それだけ全身の血管が集中的に集まっている臓器です。それにメスを入れるのだから猛烈に出血する訳です。だから予め自分の血液を大量に抜いてためて置いて、手術中の出血に併せて輸血するのです。自己血だから問題は起こらないという訳です。

年末となったので新年が明けて最初の日に手術と決め、後輩と分かっていた主治医の井上勝巳先生と泌尿器科の薄井教授とで、見事な腕前を披露して戴き、私は又も、一命を取り止めました。「新井先輩、これで誕生日が2回、増えましたね」とは、井上勝巳先生から私への名言です。

ところが、そのときも、これでスッキリ終わりです、という訳に行きませんでした。術後のCT検査で、何と今度は上行結腸ガンが見つかったのです。やれやれと心底、がっかりしました。検査するたびごとのガン発見じゃないですか。しかも今回は、同じ年に続け様で、3回目のガンです。

手術は当時の広大病院第二外科、現在の消化器外科で9月18日に行われました。主治医は香山茂平医師と、相棒は上司にあたるらしい生粋の広島弁がお見事な老先生でした。このときの上行結腸ガン手術で医師団は失敗を犯します。なのに私に対して弁明も詫びることもなく、ただ術後にすぐ、食物が胃から小腸へと流れるのが難しくて、どうしても十二指腸を通らない、とだけの説明で終わりでした。何故なのか、何事が起こったのかなど全く詳しい説明なし。呆れましたねえ。

こちらは患者、相手は主治医。患者から主治医には文句付けたら治療して貰えない。黙って医師の言うなりにするしかない、という状態に陥りました。誤って手術中に十二指腸を傷つけたのだらうという事は、素人の私でも見当がつかしました。

レントゲンで撮って見ている、飲み込んだバリウムが、どうしても十二指腸を通り抜けないのです。何度やっても、何日経っても、です。

病室内のテレビでは毎日、おいしそうな料理や名物料理のオンパレード。見ていながら食べたり飲んだり出来ないというのは、患者にとって残酷というか拷問に近い感覚ですね。全くの絶食でした。ひたすら真っ赤な色の袋が目立つ、大きな高栄養の点滴だけで過ごすこと約3ヶ月。年末が近づいて来た頃、業を煮やした私から「再手術を…」と願い出ました。主治医の香山先生も、「そうだねえ」と頭を抱え込んでいました。

それで遂に「じゃあ、再手術の準備をしましょうか」となったころ、突然、レントゲン検査で飲んだバリウムが、思いもかけず、スルスルと十二指腸を通り抜けて小腸へと流れ込むのが見えたのです。嘘か、眼がおかしいのかと疑いました。ほんの昨日まではダメだった十二指腸を、試しに飲んだバリウムの塊が細く長くなってスルスルと通り抜けて行くじゃありませんか。

奇跡が起こった、と真剣にそう思いました。間もなく師走という時期に至っておりました。最後まで医師団からは何事が起こっていたのか、説明も詫言も全くないまま退院しました。「助かったから良かったのだ」と思う事にしました。

まさか、もうないだろうと、流石の私も気になりながらの術後の定期検査に臨みました。大丈夫でした、安心しました。それと同時に、無期延期となっていた前立腺肥大症の手術を考えました。大腸ガンから4年後の平成18年、2006年のことです。74歳となり老化が進むと共にオシッコの出が極めて悪くなっておりました。自己導尿という裏技も、可成り巧みになっていた時期です。今度こそ切って取って、安心してトイレに行けるようになりたいと願いました。大学病院の泌尿器科へ行きました。井上勝巳先生は転出していて、既に姿はなく、たしか主治医は長谷川先生と仰ったと思います。

PSA7というデータが記憶に残っています。「だいぶ前立腺が腫れているから、PSAも7程度あっても可笑しくない、手術しましょう」と言って戴き、ガンは大丈夫だろうとの前提で、通常の前立腺肥大症の手術に臨むことになりました。臍下から真っすぐの開腹手術で行いましたから、私

にとっては4回目の全身麻酔での手術でした。そして又もやガンが宣告されてしまったのです。4回目です。「切除した前立腺の組織を検査したところ、組織内からガン細胞が発見された」という事でしたから、前立腺肥大症の手術だから全摘ではなく、肥大した部分だけを切除しており、前立腺の外周組織は残してあるので、その部分にガンが存在する可能性は否定できない。かくてまた前立腺ガンの経過観察を要する、となりました。これで私のガンは4回目となりました。

特別被爆者に認定

○新井 ここまで来ると私も気になり始めたのです。原爆の放射線の影響で、かくも私は何回ものガンに侵されているのではなかろうか、という事です。

あの日、私は全く放射能も原爆という事も知らぬまま、放射線に充たされた広島市内を彷徨ったのだから、その間に広島市内に残されていた残留放射線や二次放射線に侵されたのではないか、という事でした。

それを裏付ける現実的な方法がありました。原爆医療法に基づく特別被爆者の認定を申請することです。そうすれば政府が定めた基準に則り、科学者の検討を受けたのち、認定か非認定かの決定が出る。つまり私のガン発症が、原爆放射線の影響で発生したものか否かが判定される訳です。大学病院の泌尿器科の医師と相談して、私は平成20年、2008年の夏ごろ、前立腺ガンを原因疾患として、思い切って特別被爆者の認定を申請しました。

このとき主治医は交代していて、現在お世話になっている井上省吾先生になっていました。巷間言われている噂では、特別被爆者の認定というのは極めて難しく、例え申請してもホンの数%の人しか認定されぬし、認定されるまでには長い期間がかかる、とのことでした。私と同じ行動を辿った高田勇君も未申請と聞いており、ダメもとを覚悟の申請でした。

ところが年が明けて2009年、平成21年2月3日付けの大型封筒が届き、開けて見ると何と、舛添要一厚生労働大臣の大型印章が押された、特別被爆者としての特別手当の認定書が入っていたのです。驚きましたと同時に、入市被爆者である私の

疾患が一も二もなく認定されたということは、私のガンが、よほど明瞭かつ重篤なガン疾患だということなのか、との疑念まで湧き起こって来たものです。認定書の本文は広島大学病院に届けたとの添え書きもありました。主治医にも確認しましたが、間違いなく認定書は届いているとのこと。しかし病状が重篤という事ではなく、今後ともPSA検査などを継続し、医師による経過観察と治療を受け続けていることが条件だ、とのことでした。一応、ホッとしましたが不安と疑念が湧き起こって来るのを抑えられませんでした。

ふとした機会があり、原爆による放射線の被爆とガン発症に関する権威者、鎌田七男先生の講演を聞いた後、直に先生へ声を掛け、私の入市被爆の状況と特別被爆者として予想より早く認定が下りたことをお話ししたところ先生は、入市被爆者が認定されたこと自体が珍しいと仰り、しかも数カ月で認定が下りたことも極めて珍しい、とのこと驚いておられました。

のちに私は鎌田先生と昵懇の間柄になるのですが、このときは聴衆の一人から稀有な事態を聞かされた、というような表情の鎌田七男先生でした。

そして2020年、令和2年7月6日。先述のとおり、今回の左副腎転移ガンの手術。そして術後のCT検査で、6番目のガンに相当する、残されていた左腎臓に転移ガンを発見、という思わぬ出来事へと進展する訳です。

これほど何度もガンに襲われて何故、その都度なんとか回復してしまうのか、と我が41期会の面々から不思議がられております。本人の私がイチバン不思議だと思っているのですから、ほかの皆さんが不思議がり、なかには不死鳥だ、などと評価してくれる者もいるほどで困惑しております。不死鳥だなどと言われては、私の寿命が尽きたとき説明に困るじゃありませんか。

被爆体験伝承者の皆さんとも話し合うのですが、私の誕生日が五つも六つもあるなんて笑ってしまうよね、と冗談にしていますけど、先にも申しました通り、私自身が不思議に思っている事として、天命だなどと言うと大袈裟だし自慢たらしくて嫌なのですが、何か私には感じるものがあります。

「生かされている」と良く申します。なにか、それに近い感覚があることは事実です。これから

先は、なにか不可思議な世界に迷い込んでしまいましたが、幼いころ親戚の多くの人から「この子はイノチ強い子だよ」と言われていた、気持ちも身体もひ弱な子どもだった私。小学校時代になっても人見知りかひどく、朝礼でも脳貧血で卒倒するような少年で、級友から「風の又三郎だ」などと冷やかされていました。

夏場で全員が沸き立つ程に元気澁刺の時期、楽々園での水泳訓練でも白シャツを着て、集合写真の最後列で写真に納まっているというのが私でした。それほどに、ひ弱い児童だった私が軍国少年と成れたのは、附属中学校での戦時下鍛錬のお陰だったと思います。そうして原子爆弾に出会い、運命が定めたが如く危機一髪の生死の境をすり抜けての生還を果たしたのです。

「この子は育たない」と言われながらも生き延びたと同じく、長じても、運命に導かれたが如く生き残ってしまう私。なにごとか、生かされて居るのではなからうか、という感覚を抱くようになって来ています。その主題は私にとって、あの日を語り伝え、語り継ぐことじゃなからうか、と実感し始めているのです。

この特別認定も5年毎に再認定の申請を必要としていますが、コロナ騒ぎで延期になって今年の春、特別被爆者への認定から10年経過したことによる失権、という思いがけない通知が届いたことから、再認定の申請書を提出しました。しかし今のところまだ、認定した旨の通知が来ておりません。聞けば年々、この再認定も審査が厳しくなる傾向にあり、再認定拒否という事例が激増中とのこと。早く被爆者はこの世から消えて欲しいという、政府の下心が見え見えの昨今です。私のケースは新しい腎ガン発生で、原因疾患が増加したと思っているのですが、果たして如何なる認定結果となるのやら、興味と不安で一杯です。

【注記：令和3年11月5日、腎細胞ガンを認定疾病とする特別被爆者に認定されました。】

追補：インタビュー後の病歴

ここで話題となった私の「左副腎ガン」と、付随して判明した、私にとっては6番目のガン疾患に相当する新規腎臓ガンについて、補足して追記します。

2020年、令和2年4月13日、広島大学病院内分秘科に検査入院。長らく懸案だった左副腎の腫瘍を、負荷試験などで内分泌科に入院して精密検査し、晩発性左副腎転移ガンと判定され、年齢的にも最後の手術として踏み切ることを決めました。

同年7月5日、広島大学病院泌尿器科に入院し、翌日の6日、5回目のガン手術を実施しました。主治医は井上省吾、林哲太郎両主任が執刀。内視鏡下で3か所を穿孔し、左副腎の先端部に位置するピーナツ状のガン腫瘍切除を狙ったところ、誤って隣接する膵臓に裂傷を負わせて1.2リットルの大出血を起こしたため、緊急に800ccを輸血。止血処置を施して腹中にドレーンを設置し、膵臓裂傷からの出血を排出し、溢れ出る膵液を早急に排除する処置を施しました。再手術は考えられず、もう他に打つ手はなく、自然治癒を待つという治療方針でした。かなりの長時間後に覚醒して概況を知ったものの、林、井上両医師からの説明を聞くまでもなく如何ともし難く、少しずつ排出液が減少し膵臓機能に異変が起らず食欲が増すことを願って待ちの姿勢に入りました。結果的に、それから74日間の長逗留治療となり、2020年9月17日に退院しました。

かくてまた昨年につき、原爆忌は病室内で迎える夏でした。同じフロアに県立一中生き残りの兒玉光雄さんも入院して来ており、偶然にリハビリ室で出会って、「せっかくお互いに生き残ったのだから、もう少しは頑張ろうや」と励まし合ったことが忘れられません。やや彼は認知症が始まって居たと見え、マスクをかけていたこともあって、ジーンと私を見詰めたのち、「おう、君か」と理解できた表情で手を握り返して来ました。握り合った手を揺すりながら「な、まだまだ頑張ろうぜ」と声を掛けると、彼も「うん、うん」と頷いて握った手に力を籠めて来ました。私自身も、「もう少しは、もう少しは」と、兒玉光雄君と共に、思いを新たにしました場面でした。

先に述べたとおり大問題が、もう一つあったのです。2020年7月に判明しました。それを退院間際の9月16日に知らされた瞬間は、頭をガンとぶん殴られたような衝撃でした。

手術直後のCT検査で、又もや私の体内に、6番目のガンが発見されておりました。僅かに残さ

れていた左腎臓の頂部に、昔の腎ガンからの晩発性転移ガンが発症していたのです、恐らく、治療と回復に影響を及ぼすだろうから、と、私の退院前日まで伏せられておりました。やっと退院できると喜んでいた私にとって、これは残酷な一撃でありました。

もはや全身麻酔での手術など不可能な高齢老人です。今回の手術が私としてはラストチャンスとして踏み切ったのです。更にもう一回、老体に鞭打つての手術など考えられません。打つべき手の見当たらない悪性腫瘍が、又もや、入市被爆者である私に襲い掛かって来ました。

「生き残っている限りは、何処までも何時までも追いかけるぞ、心休まる時など与えて堪るか、じわじわギリギリと刻むようにガンで殺してやる、6回目どころか何回でも覚悟せい、原爆に遭った人間を只の一人も生き残らせて堪るか」

そう、原爆放射線から宣告されているようにしか、私には思えません。理不尽と言うに尽きます。それが私の、生き残った被爆者の運命だとも言うたいのでしょうか、絶対に許せません。

本当のヒロシマを知って欲しい。本当のナガサキを知って欲しい、そして本当のフクシマも知って欲しいのです。

知らなければ無かったことになってしまう。知ることが出来るのに、知ろうとしない、知る努力をしないのは、私に言わせれば許されない罪です。先ず、知る努力から始めてください。先ず、知ることが基本だからです。

私のみならず、私の伝承者グループも、私と全く同じ姿勢で伝承活動に臨んでくれています。頼もしくも嬉しい仲間の後継者グループです。

鎌田七男先生から入院直前にメールで戴いた、激励の名言、「ヒッサーロ、負けて堪るか！」

退院後も肺炎を連続して発症しました。

2020年11月21日の早朝、激しい悪寒から始まり高熱39度5分。即刻、県病院に緊急搬送されて入院。28日までの短期入院で済みましたが息苦しく、体力はガタ落ちでした。

それで済んだかと思ったのに年末の12月30日に再び悪寒が襲い、今度は激しい嘔吐で応接間のフロアを汚す始末。近くの古川内科医院に駆け込んで、通院しながらの点滴で年末年始を乗り切ろう

となり、とうとう2021年1月3日まで点滴して、ようやく炎症反応が治まりました。

ところが今度は妻の恭子が倒れます。2021年2月14日、次女の墓参に出たとき崩れ落ちるように倒れたのです。妻には前歴がありました。数年前、今回と全く同じように崩れ落ちるが如き倒れ方をしてからと言うもの、痴呆の症状が出て足取りが乱れ、膝の力が抜けて立てず、歩けずの急変となり、緊急にCTを撮ったところ硬膜下出血と判明。直ちに県病院脳外科で頭蓋に孔を穿って血液を吸い出したところ、一挙に快癒して驚いたという実績があり、今回の症状が酷似していたのです。

古川医院の医師に懸命に訴えたけど取り合って貰えず、逆にコロナを疑われて本人と私たち家族全員も隔離され、緊急PCR検査が行われました。その間に不思議にも本人の症状がケロリ一挙に快癒し、よろめきながらも立って動けるようになったのです。しかし病院側のコロナ疑念は続き、やっと夕刻になって陰性と判明しました。しかしなお医師は、盛んに本人への点滴を勧めるので問い糾したところ、「奥様は肺炎です」との診断。耳を疑いました。

硬膜下出血を疑って受診したのだと再確認したところ、「気になるなら、MRIを撮って貰いましょうか」となり、やっと頭部撮影に辿り着きました。結果は異常なし。キツネにつままれたような感じでした。まあ本人が、ヨロヨロしながらも立って動けたので肺炎治療で終わったのですが、突然快癒したという事は逆に、また突然、不調に陥る危険性は無いのかと医師に何度も確かめたのに無反応。奇妙な大騒動を、病み上がりのまま私が支えながらの大慌てでした。

ところが今度は3月10日、またも私が急に悪寒発生。例の古川医院で通院しながら朝夕2回の点滴開始となり、炎症反応CRPは13。連日、通院して朝と夕方方の2回、抗生物質の点滴を続け、14日に終了しました。

4月6日、またまた悪寒と嘔吐。古川医院で朝夕2回の通院点滴治療の開始。12日に終了。不安でなりません。

県病院の呼吸器科主治医に尋ねました。「誤嚥性肺炎を事前に防御する方法は？」

回答は意外にも、「打つ手はない」との冷酷さ。

「意識せずとも人は、睡眠中に唾液が気管支へ流れ込んで肺炎発症の原因を惹起している。だから口の中を努めて清潔に保ち、身体其自然な抵抗力である免疫力を正常に維持するよう努力するしか方法はない」、とのことでした。

追補：入院中のNHKネット炎上騒動

○新井 戦時中の昭和20年元旦から大晦日まで、私は日記をつけておりました。それを「軍国少年、シュンちゃんのヒロシマ日記」として、2009年、平成21年11月18日に私家本として刊行していました。

その日記をNHK広島局が、2020年春から「1945ひろしまタイムライン」というテレビ番組とSNSとの連動企画の素材として取り上げ、若い世代に少しでもヒロシマを認識させようとの企画意図から、若い高校生5人が私の戦時下の日記を自分流の解釈で書き直してSNSに投稿する、という完全な著作権法違反の行為をなしたうえ、8月になって敗戦直後の混乱期を描写してのSNS投稿で、如何にも原本である私の日記に書かれて居るが如く偽日記を作文し、しかもそれが朝鮮人への差別的で刺激的な描写であったがため一挙にSNSが炎上してしまったのです。

企画のスタート前、「新井さんの日記を原作とし、創作した日記をSNSに投稿する」との、担当者からの企画意図の説明がありました。とんでもないと、即座に私は拒否しました。番組責任者は、「分かりました。NHKの責任で対処します」と回答し、それを文書に残しました。私は、日記が改変されたり偽作されたりせぬならば許諾する、NHK側も著者である私の意向を尊重することに責任を負う、と約束したのです。

そして春3月から番組とSNS投稿が開始されました。ところがNHKは最初から私の日記を勝手に改作し、なんとも劇的な連続日記の作品として公開し始めたのです。

番組もSNSも4月にスタートしましたが、同じ問答が、幾たびも繰り返されるだけ。こちらは病人です。入院、手術が迫っていました。まるで根競べみたいな異常な状態が続きました。そして私が7月初めに手術のため入院し、8月、遂にSNS炎上事件へと発展したのです。

8月20日、SNSへの投稿で「敗戦後に朝鮮人

が列車への乗降で乱暴狼藉を働いた」旨の偽日記をNHKが公表。原本には全く存在しない記述が偽作されて公表され、それが問題発言としてネット上で炎上し、収拾がつかなくなったのです。

そのため、元本である日記を書いた私本人の思想信条までが問題化されて糾弾されるに至って、『朝日新聞』なども一斉にNHKの姿勢を迫及し始め、手術し入院中の私にも大混乱を招くに至ったのです。

臍臓を痛めて緊急治療中にも関わらず、遠慮会釈ないNHKとマスコミから、病室に持ち込んだ私の「ガラケー」に、TPO無視で電話とショートメールが飛び込んで来るのです。それも毎日、毎晩のように続きました。ベッドに横たわる私に、SNSの動向など全く分かる筈もなく、NHKに電話で抗議を申し入れました。担当上司はひたすら詫げるばかりで、起こった事件の原因と責任について告白することはありませんでした。

企画の当初から私は、被爆時と玉音放送時と大晦日とを如何に表現するつもりかと、問い質しておりましたが、全く回答はないままでした。

問題の当日になると、早朝から時間の進行に従って偽日記の描写もドラマチックに展開し始めるなど、当然ながら日記原本とは全く異なった創作作品になっておりました。そのことについて迫及した私の文書に対してNHK上司からは、弁解どころか、全く回答がないまま年末を越え、企画自体も終了しました。

遂には東京で、NHKの会長が記者会見で責任を認め、全面的に陳謝する場面も報道されるなど、全国版の事件へと展開しておりました。

それがすべて、私のガン手術と予後の治療で入院継続中の出来事であったため、入院中の患者である私にも取材が押し寄せたり、当事者であるNHK広島局の幹部から善処方の相談が、電話で病室の私へ幾たびも寄せられたり、ガン治療で安静を保つどころか私は、夜もおちおち病室で眠って居られぬほどの迷惑を味合わされました。これ、ひとえにNHK広島局の失態です。

番組スタッフの高校生たちが書いたと言い張る私の偽日記が、NHKの管理監督者の手をすり抜けてSNSに投稿されてしまった事実を指摘しても、懸命に言を左右して逃げまくるNHK広島局

の担当責任者の不誠実な態度には、私は怒りを乗り越えて呆れ果てるばかりでした。「NHKよ、お前もか」と叱りつけてやりたい気持ちです。

私とて、かつては放送界に居た人間です。これが、如何なる状況かなど即座に判断できます。如何なる方法で、如何様にすれば解決が着くかも即座に明言できます。NHK当局者に、幾たび私の見解を携帯電話から伝えたことでしょうか。幾たびメールで叱責したことでしょうか。返事は何時も、「良く分かりました、仰るとおりです。責任はNHKにあるのですからNHKが責任を持って対応します」という立派な返事だけでした。

しかし、ことが立派に収まったとは決して言えない収拾策をNHKは取りましたね。NHK広島局からSNSへの投稿をすべて削除し、都合のよい部分だけ自らのホームページへと移動させ、それでオシマイとしたのです。事件（敢えて事件と言います）の原因と詳細な経緯と内容。それに責任の所在と対応措置。その何れもが果たされて居ないままである、と申し上げます。一片の広報担当からの陳謝の声明だけで終わりにしたNHK広島局。

私には、新年のご挨拶を兼ねたような担当責任者からの私信が届きました。表面的なお詫びの言葉がズラリ、並んでおりました。2021年のお正月のことです。

それだけで、あとは全く何事も無かったかのようなNHK広島局の番組が、毎日毎晩、当たり前のように放送されています。これだけ全国版の事件となった番組企画です。責任者の処分なんて、あったのでしょうか。果たして、このままで良いのでしょうか。残念ながら、かつての品位と実績を誇るNHKは、どうやら消えてしまったらしいと実感した事件です。

2021年、令和3年2月24日、広島大学病院での定期CT検査で私の腎臓ガンは、ほんの僅かの増大だけだから合格としておこう、との診断を戴きました。次回の検査は6月末日の予定です。3カ月ばかり命が先延ばしされた気分です。ゆっくり余生を楽しむなど、私には許されない贅沢のようです。突き当たり、砕け散りながらも、ヒッサー口と叫びながら疾走せねばならないのが、私のお役目なのでしょう。

第12章 証言を残す思い、証言を託す思い

証言を残す思い

○新井 今日是最終回というつもりで話をさせてください。2020年5月29日になりました。私は「証言」と表現させて貰っていますが、文書館からのご要望に応じてお話をするという姿勢で証言しております。

つまり私は、ほかの諸先輩方のように、何らかの成果を挙げた研究者とか著名人でもなく、学術的業績を持つ学者でもありません。ただの一人の、当日入市の被爆者です。直接被曝した方々のような鮮烈な瞬間も、地獄の業火に焼かれる惨状も知らない入市被爆者として、その体験を軸に据えて語ることでご容赦を願っております。

ただ、1945年8月6日という日に、広島市内の中学校・女学校が被爆に依り、ほぼ全滅してしまったにも関わらず、私が所属していた学校、旧制の広島高等師範学校附属中学校ただ一校が、軍命令に従うことなく1年生と2年生が全員、学校を挙げて郊外へ農村動員として出動したがため全滅を免れました。しかも紙一重という寸前で、学校側の英断と勇気と行動が生徒たちを救った、という稀有な状況における稀有な事例となったことは、言うなれば、知られざる事実だと思われれます。本日は、それらを締め括る最終回として語り終えたいと思います。

私は、昭和20年春に附属中学校へ入学した161名の1年生の代弁者として語ると共に、原爆で死んでいった級友10人と、数えきれぬほどの被爆死者として逝った小学校時代の級友たちの身代わりのように生き残ってしまった立場の、元中学1年生です。その想いを伝え残したいがため長々と話をさせて戴きました。

これまで多角的に、様々な場面について話して参りましたが、語り終えるに際して、幾つか解説を加えておきたいこと、こぼれてしまった挿話などを補足させて戴きます。

私がヒロシマ被爆に遭遇した8月6日当日については詳しく語り、手記にも多くを書き残しました。だが語り残した当時の場面、どう思ったかについてなど一言、お話しさせてください。

思いもかけない出来事で、広島市が爆撃をされ

たということは分かったけれども、こういう被爆状態は初めてだということ。併せてまた、これまで広島という町は本格的な爆撃を受けたことがない。つまり爆弾、焼夷弾による通常の空襲と爆撃について未経験だったため、いったい何事が起こったか理解不能な状態のまま、核被爆という稀有な体験をしてしまった。これが原子爆弾であるなど当然分かりませんでした。唯事ではない爆撃の受け方だということ、そして凄まじい被害状況だということは即座に理解できました。

そして、次第に分かって行くのは、小学校時代の同級生たち。つまり附属以外の中学校、一中や二中、市中、修道、女学院、県女、市女に進学した同級生たちほとんど全員が駄目らしいぞ、という恐ろしい情報が耳に入って来始めます。広島市内の中学校、女学校の低学年は全滅らしい、という状況が分かって来た。初めのうちは茫然自失ですが、だんだん広島市全体が一挙に壊滅したという、信じられぬ事態が明瞭になって来るにつれて、これは尋常じゃないぞ、と気づき始めたことは事実です。警報もなく、不意打ちだったという事でもですね。

そして戦争が終わります。というよりも戦争に負けて、初めて敗戦国という冷酷な現実を身に沁みて知ります。それと同時に日本の軍部と政府が、これまで、どれほど嘘をついて国民を騙し続けて来たか。我々軍国少年が如何に小学校時代から、国家によって洗脳され続けて来たかという事実初めて気づきます。

「日本は神国であるゆえ負けるはずがない」と喧伝していたながら、このような無様な負け方をした。しかも広島が物凄い地獄となった原因は、全て国民を騙し続けていた日本政府と軍部の責任だし、幼い子どもならいざ知らず、一人前の大人まで揃って騙されていたことに端を発するなど、全く信じられぬ現実です。アメリカを相手に戦争した結果が、こういう結末をもたらしたのだと気づいたのです。

騙されていたと気づかされたたん、すべての状況が、目から鱗でした。私たち少年にとっても、明瞭に理解出来ました。これが我々「軍国少年」が敗戦後、一挙に反転して「民主化少年」へと変身できた原動力です。言うところの、コペルニク

ス的転回をやったのけました。『国民にはホントのこと何も知らせるな。国の言う通りに従わせていけば良い』～「知らしむべからず、依らしむべし」～国民をバカにした有名な格言です。この格言そのままが我が国で実行されていた、と知った国民が怒ったのは当然でしょう。

ただ当座、戦争が終わった直後、敗戦後は、ひたすら国民は食べることに必死でした。現代のような飽食の時代の皆さんには理解不能かも知れませんが、生きることに必死にならなければ、ホントに生きて行けない時代だったのです。生きること喰うこと、それ以外に頭を傾ける余裕は誰にも有りませんでした。食べること、生きることに必死だった。そして帰るべき所、つまり母校も失っておりまして。

私の場合、たまたま自宅は焼け残りしましたが、ほかの仲間たちは、自宅が焼けて帰るべき家を失ったという者が随分おります。家族、親戚も失っています。そういう状況ですから、ほかのことにかまける余裕など無いということで、被爆はしたものの原爆がどうの、核兵器がどうだとか、世界の平和だの、言ったり考えたりする余裕すらない、生きることに必死の時代でした。

今から考えれば、それがやや落ち着いて来たと思えるのが、朝鮮戦争が始まった昭和25～26年ごろから30年にかけてです。つまり我々が中学・高校を卒業して、大学も出て世の中に飛び出した昭和30年までの間。日本全国に広がっていた広大な焼け跡に、ばらばらとバラックが建ちはじめ、唯一賑わっていた闇市が、最初の仮小屋から屋台みたいな店舗が並び始める「復興期」に入りました。私自身も通学、通勤で自転車を走らせた町々の風景～今でも時に夢に現れる景色ですが、焼け野原に点々と立ち並び始めたバラック店舗。その店頭には並ぶ美味しそうな菓子などの食べ物。少しずつ、その種類と量が増え始めたのを横目で見ながら、闇市を抜けて自転車を走らせたものです。

これから日本の大変革、つまり復興の進行が始まる。その時期に、ちょうど私たちが成人して社会人となり、国の行方を引っ張っていく中核に躍り出る、という時期になるわけです。

それまでの間、1947年、昭和22年の8月6日。私は何故か初めて、平和公園の一角「慈仙寺の鼻」

と呼ばれた地区に建てられた平和塔とステージで開かれた広島平和記念式典を見に行きました。

犠牲者を追悼するといった気持ちより、なにかしら好奇心に駆られての行動とってよく、附属中学校の3年生でした。突貫工事で完成したばかりと思える会場に着き、意外な光景に吃驚仰天します。白ペンキで塗り上げられた式典会場のステージに、まさか来ているはずがないと思っていた米英軍将校数人の姿を発見したからです。しかも彼らは舞台の上で、大きく足を組んで椅子に座り、貴賓席とも思える場所に傲然と着座しておりました。更に驚く出来事が続きました。「平和祭」と称された会場は、何やらお祭り気分なのです。慰霊の黙祷や合唱もあったのですが、盆踊り会場に来たみたいな違和感のなか、主催者挨拶らしい場面に来てから背の高い米軍将校が一人、舞中央のマイクの前に進み出て、手に持つペーパーを堂々と読み上げたのです。

わざと分かり易い英文だったのでしょいか、私にも理解できました。なんとそれは、GHQのマッカーサー総司令官からのメッセージでした。臆面もなく、2年前の原爆投下が世界に警告を与えるであろう、というような、核兵器の威力を誇示するが如き内容だったのです。まさかという事態の展開に、中学3年生の私は驚くとともに、呆れ果ててしまったと記憶します。

もうひとつは、昭和天皇の広島市訪問です。これまた私は、今度こそ本物の興味津々の好奇心で、実物の天皇を見に行きました。同年12月7日です。原爆ドームの近く、護国神社の跡へ即席で作ったお立ち台に立つコート姿の天皇を遠望しました。例のポーズで、手に持った帽子を振る天皇が居ました。大群衆が集まって居り、押すな押すなの大騒ぎ。その最中に私は、誰かから大声で怒鳴られ、叱られました。

「こらっ、そこの学生、帽子を取れっ」

思わず反射的に、私は頭の帽子を脱ぎました。今でも、同じように叱られるのでしょうか。

私が実際に被爆体験を語るようになった理由なり原因については、幾つか既にお話をしておりますが、一言で言ってしまうと、自分は被爆者と呼ばれてはいるものの、当日入市の被爆者であり、本人、どこも怪我もしていなければ家族も失って

おりません。だから私には、被爆体験を語る資格などないと思っておりました。

そして周辺には、一目見ただけで分かる直接被爆をした被爆者が、しっかり、あの時の地獄のヒロシマを語れる人が沢山おられました。私たちのように、残留放射線を浴びたなどと気にすることも無かった入市被爆者など、何事もなく生き残ってしまった者たちは、あたかもみんなで申し合わせしたが如く口にチャックで、自分がなぜ生き残ってしまったかも含めて、あの日のことを語るということもなく過ごして来たのが事実です。

それが、長じてと言いますか、年を取って来ました。当時は50歳定年の時期ですから、定年を目前にするような年代になって、やっと我々も被爆者の一員なんだという自覚が芽生え始めます。つまり直接被爆者のなかでも大変な目に遭っていた、一番ひどい目に遭っていた世代の方々が少なくなり始めていました。そして私たち入市被爆者が、そろそろ被爆者の中でも結構な年齢～50歳代に差し掛かって来ていた。世を牽引する中軸の年代に差し掛かって来ていた。そして周りから改めて、「お前さんたちも被爆者なんだぞ」という声が掛かって来るようになって居ました。それが語り始めるための、「引き金を引く」という言葉が適切かどうかとは思いますが、そういう状況になり始めたということだと思います。

そして、被爆から20年、30年、40年と経って、仏教、神道で言うならば50年というのが大きな節目らしいのですが、そういう30年目、40年目、50年目という節目ごとに、私たちも仲間同士で集まっておりました。集まるということは、同時に被爆何年目ということに重なりますから、集まるたびに私たちは、片仮名の「ヒロシマ」を語るという役目を担わされて今が在るのではないかと考えます。無念の思いを持ったまま死んでいった小学校時代の旧友たち。そして附属の仲間と死んでいった10人の同級生たちのことを思い出すと共に、いまこそ彼らの思いを代弁して語るべき時期ではないかという気持ちが、10年刻みで集まっていた同窓会、同級会、同期会のたびに自ずと高まっていたのは事実です。

もう一つ、大きく私たちを突き動かしたのは世の中の動きです。だんだん我が国に不穏な動きと

言うのかな、私たちにとってみれば由々しき出来事と思われる異変が次々に発生しています。

警察予備隊だったものが、いつの間にか保安隊となって銃を持って行進し始め、やがて自衛隊となる。「特車」という呼び名でいたタンクが、いつの間にか堂々と「戦車」と正規の名前に戻って出現する。いつの間にか昔の海軍兵学校のスタイルのままに、短いベストに短剣を吊った海軍将校が歩いている。ヒサシの無い帽子に錨のマークが付き後頭部にヒラヒラが2枚、という水兵さんも闊歩している。日本海軍も、日本陸軍も、それに日本空軍まで、いつの間にか姿を現して活動し始めている、という現実突き当たります。そして、それを推進して行く日本政府に突き当たる。

憲法なんか変えなくっても、安保法制とやらを閣議決定すると、憲法の解釈が自在に変えられるのですってねえ、驚いた。

かくして我が国の軍隊は、じゃなくて我が国の自衛隊は、地球の裏側にまで何処かの国の軍隊を救出すべく駆け付けることも可能になったとか。

ついでに、現に必要であって他に方法がなければ発砲しても宜しいらしい。これでは戦後75年、誰も殺さず殺されなかった自衛隊が、どうやら今後は、殺し殺される戦場での軍事組織へと変質してしまった模様ですね。

世の中おかしくなって来た、と思い始めています。だんだん、我々が軍国少年だった、あの時代と同じで、何でも出来る普通の国、戦争も出来る普通の軍隊になって行くのではないか、そういう雰囲気、昔を知る私たちは気が付きます。そして黙ってはおられないじゃないか、という切迫した気持ちが湧いて来るのです。

それが激しくなるのは、やはり戦後50年、60年という節目が大きなポイントだった、と思います。それが私たちを益々駆り立てて、『昭和二十年の記録』という冊子を作らせ、空白だった昭和20年を記録する活動を生みました。今の日本が、昔の日本に次第に戻ろうとしているのではないか、という危惧の念を持ち始めて、そのことを改めて口に始める時代になって来た、というのが私たちの気持ちの流れであり、それが私を41期会仲間の右代表みたいな形で語らせる、大きなキッカケになって来たことは紛れもない事実です。

他にも、さまざまな理由があります。たった一つや二つの理由だけではありません。そういうことで私は仲間を代表して、率先して広島地区で語り始めました。ほかにも東京・横浜など関東地区で吉野俊雄君（故人）や増本昭夫君、京阪神地区の山崎恭弘君、四国は高知の植野克彦君など、戦争を語り、ヒロシマを語り、そして平和を訴えるという活動を続けております。ただ皆が高齢化しており、自由に動ける者が激減中で悩んでいます。

なぜ新井さんは戦争の物語を語るようになったのか、平和を語るようになったのかという質問が良く来ますが、自分の見たあの日の状況が本当に地獄だったと思っているからです。でも何度も繰り返しますが、私は地獄を見てしまったものの、大切な家族を失った人たちに比べれば、まだまだモノが言い易い環境にありました。誰一人として身内の者を失っていなかったし、それらが容易に私の口を開かせた要因だったのではないかと、と思っています。

たしかに私は、原爆では誰一人、身内を亡くすという哀しみには遭遇しませんでした。後年大切な人を突然失うという悲痛な出来事には遭遇しました。1988年11月17日です。翌日が私の誕生日、という皮肉な巡り合わせでした。広島大学理学部を卒業する間際で、就職も大手のNECに内定していた22歳の次女・真由美が、信号無視で交差点に突っ込んで来た暴走車に撥ねられ、20メートル以上飛ばされて亡くなりました。

冷たい夜空に無数の星が輝いて見えた、決して忘れられない夜でした。次女の真由美も附属の卒業生の75回。湯崎広島県知事とは同期生で、娘は理学部の数学科を出て、コンピュータのシステムエンジニアを目指しておりました。無念極まりない事故でした。それだけに、ヒロシマを語る時に私は、つい、事故の瞬間の娘の無念さを思い起こしてしまうのです。それが私をして今、夢中になって原爆被災者の無念さを語らせている、大きな動機だと考えています。

私の手元には、山のように資料が残してあります。被爆体験伝承者を指導しているとき、自身の証言活動を洗いなおす作業も並行させました。勉強し直すためです。

同時に私は伝承者養成事業の講師として、何を

伝承者に学んで貰うべきかを書き上げました。被爆者の実体験、これを「実相」という言葉で表しますが、実際にどういう被爆の状況であったかという実相を語ると同時に、その被爆者が、原爆のただ中に放り込まれたその瞬間に何を感じ、どう思って、どう叫んだか、泣いたか、怒ったか、茫然自失となったか、その気持ちを素直に被爆者本人から聞き出すということは、もう諸君の世代にしか出来ないことなんだぞ、と強調することになっています。つまり、被爆者が背負った「心の被爆」を語り継ぐべきラストチャンスなんだ、ということ、良く良く肝に銘じて被爆者の言葉を聞きなさい、と伝承者研修生に説くことにしています。

事実その通りだからです。それと同時に、被爆者が語る、その時の態度、様子、眼差し、力点の置き方、それらの全てを体得しなさい、と説きます。

「それが可能なのは、あなた方の世代だけだ」と強調します。もう次の世代では、それが出来ないのだとね。次の世代には、あなた方が被爆者から聞いたまを正確に伝えて行くことが大切になるんだから、今のうちに、しっかり聴き取って自分のものにしなさい、というのが伝承者への私の最初の言葉であり、今もなお変わっておりません。従って被爆の実相と同時に、被爆者の思いを、そのまま伝えて行くということを懸命にやり遂げなさい、というのが伝承者への願いです。

様々なことを伝承者に伝えました。色々な形で一覧表にして配りましたが、その中で一番強調したのは、我々は戦後何十年間、1発も弾を撃つことなく、1発も弾を撃たれることなく、誰一人殺すこともなく、誰一人殺されることなく過ごして来られた。それは何故かと言うならば、わが国には自衛隊という組織はあるものの、自衛隊は自らを守る「Self-Defense Forces」組織だということで、海外には出て行かないという大原則があります。核保有の三原則とか自衛隊の三原則とか色々ありますが、そういうことで、我が国を守ることに徹していたはずだ。

従って戦争は絶対にしない。してはならないと決まっている。これは憲法第9条に定められているのだ。とまあ、そういう基本線をすべて語って、これが我々の今の平和をもたらし、呉れる基本な

のだ、と教育しました。

他の国を見なさい。1945年8月15日、日本は戦争に負けて戦争が終わったが、他の国では戦争は終わっていない。ずっとあれから後も、色々な形で戦争が起こって続いている。

大規模戦争で言えば、アメリカの下では朝鮮戦争だ、次はベトナム戦争だ、次は中東での大戦争だ、と常に戦争が起こっている現状を知っているか。そこに暮らす子どもたちは、生まれた時から戦争の最中にある子どもたちだ。但し日本の君たちは、生まれた時から戦争のない、そういう平和な国なんだということを、まず理解することから始めなさいと話して聞かせました。

そしてもう一つ強調したのは、昔の歴史だと思っただけ日本の戦争中の出来事を考えてはならない。昔話ではない。ついこのあいだ75年前に終わったことかも知れないが、実は現在に至るも続いており、だから今、日本は平和でいられるんだ。つまり、日本が歩んできた歴史・歩みを、そのまま日本が反省をし、その反省の下で成り立った歴史を生かして今があるんだ、ということを肝に銘じなさいと語り聞かせて参りました。

憲法が一番おしまいの条項に、「日本の公務員はこの憲法を遵守すべきである。尊重し、守るべきである」と明記してあります。その日本国の政権政党は、この憲法を変えようと主張している。このことをどう思うか。憲法では、総理大臣をはじめ国会議員も、三権の長も、全てがこの憲法を守るべきである。憲法を「尊重し擁護する義務を負う」と書いてあるにも関わらず、政治の中心に居る人たちは、「俺は憲法を変えるんだ、これが党の使命である」という主張を公言している。それで宜しいのか、きっちり考えなさい。そして実態を知りなさい。それらを知ることが、君たちにとって一番大切なんだと話し聞かせています。

日本が太平洋戦争に踏み切って、大変な負け方をしたということは、日本が自分の国の力、国力を知らず、相手のアメリカの国力を知らず、相手の心の本当のところを知らず、何も知らないまま、無手勝流で無鉄砲に「窮鼠猫を囓む」で戦争を始めてしまったからであって、「知ること」の大事さを私は強調しております。これが大前提であり、これを語りかけることから私はスタートしていま

す。そして、今の私に至っている訳です。

私が所属しているのは平和記念資料館という名称ですが、実は公益財団法人広島平和文化センターから委嘱を受けて、被爆体験証言者となりました。今から十数年前、2010年4月のことです。

私は原稿を一切書かない主義です。自分の書いた原稿を読むなんていうことも致しません。私は常に、語るということに徹します。それも、ほとんど大部分は、原爆を自分がどう感じたか、どう見て取ったか、それをどう伝えたいか、私の話を後世にどう役立てて欲しいか、ということを中心に語ります。それに片仮名の「ヒロシマ」と象徴的な呼び方で表す、地獄のような被爆体験をナマで語るという方式で語り続けております。

その方式で、伝承者の皆さんには「ミニ新井になるなよ」と念押ししながら、いま新井が、どういう思いで原爆を語ろうとしているか、どういう思いであなた方伝承者に伝えようと思っているか、その本当のところを私から盗みとりなさいと要求しています。

微に入り細に入り言葉にして解説したものを、言葉にして解説した話を聞いただけでは自分の身になるものではありません。だから、全ての私を調べて、調べ尽くして、私の言動を全部見て戴いて、私という人間を知った上で新井の被爆体験を伝承して欲しい、と注文しました。

いまや総計150人の伝承者の方々が被爆体験証言者と共に、それぞれ被爆体験証言と伝承講話とを同時進行で行っています。

特に伝承者の方々は、広島県外に派遣されて伝承講話をするという方式で、国家予算を使っている活動を実施中です。派遣先の経費負担はゼロとなるわけで、この方式での県外へ派遣されての伝承講話活動は、受け入れ側から大きく好評を戴いていると聞いております。このように現在、被爆体験の伝承講話は、現実に活発な活動を展開しているとのこと、頼もしい限りです。いまや伝承活動が中軸となっているようで、証言者中心から伝承者の時代に入った、と言えるでしょう。

消えた旧友たち、中澤克彦君との劇的な再会

○新井 もう少し、付け加えて申し上げたいことがあります。附属中学校1年生で直接被爆した旧

友が何人も居ります。附属中学校は原爆に遭わなかったとか、あの学校は無事だったなどと言われていますが、学校全体では30人が被爆死しており、明治時代からの学校校舎も全壊、焼失しました。

そのほか多数の怪我人が出ていますが、その詳細が把握されないまま消息不明となったクラスメートが多いのです。私たち41期会としては10人の犠牲者を出し、15人以上が負傷を負いました。被爆、敗戦と続いた混乱に加えて帰るべき母校をも失った私たちは、学年全体が分解・散乱という運命を辿ります。かくて予想を超える仲間が同期会名簿から消えて行ったのです。その人数たるや、調査によれば入学人員161名の半ばを超える84人。その大半を私たちは探し出し、同期会に復帰して貰いました。仲間たちからは今日に至るまで、幾多の手記や思いを書き残して貰っております。

かくも数奇な運命を辿って集い直した私たちは、広島高師附属中学校の第41回卒業生になる訳ですが、転校して他県の中学や高校を卒業した仲間も復帰し加わって貰っている関係から、同期の会を「アカシア41期生」と自称しております。

その「41期会」はこれまでに、母校構内に二基、命救われた原村に一基、併せて三基の石碑（いしぶみ）を建立しました。最初の一基は、私たち1年生全員の命を救ってくれた学校の英断と勇気への感謝の意を込めて、併せて被爆死した10人の御霊を弔う意味を込めて、「謝恩」という碑を建立しました。1981年、昭和56年8月16日でした。

次に、私たち喰い盛りの軍国少年の大集団を迎え入れ、被爆全滅の運命から救ってくれた賀茂郡の原村の人たちに対する「感謝」の意を表すべく二基目の石碑を建てました。これは私たちが合宿生活を送った原村の教順寺の境内に建てさせて戴



190. 建立した「慰霊碑」と私
(平成25年)

きました。2000年、平成12年7月20日です。

三基目は、私たち41期会というよりも、旧制の広島高師附属中学校の卒業生全体の志として、今次大戦と原爆の犠牲になった諸先輩への追悼の想いととも、かくも尊い犠牲の上に現在が在ることを表した慰霊碑を、母校正門横に建立しました。私たち41期会が中軸となって組織した被爆時在校生集団から、同窓会であるアカシア会へ要望した慰霊碑建立の計画が承認されました。こうして2005年、平成17年4月17日、母校の創立百周年記念日にアカシア会が記念事業の一環として建立したものです。

最後に建立した慰霊碑を含めて私たち41期会は、この三つの碑（いしぶみ）を建てました。その努力は仲間たちが、様々な形で支援・支持してくれました。と言うよりも仲間たちみんなが一緒になって、この三つの碑（いしぶみ）を建てたのです。母校構内には石碑のみならず記念樹として「つばき」の成木も植樹しましたが、母校も快く受け入れてくれました。私たちは、そこへ至る間に、稀有な体験を経た41期会の仲間たちから、彼らの貴重な経験を『わが昭和史』と題する手記として提供して戴いております。

だが、手記を頂戴できなかった仲間たちが居ます。つまり広島大学附属高等学校を卒業できなかった昔の仲間～附属から他の学校に転校せざるを得なかった被爆当時の1年生たちを、私たちは仲間だという信念で捜し続けました。そして次々に探し出しました。卑俗な言葉ではありますが「戦友」として、「同じ釜の飯を食った仲間たち」、「生死を共にした仲間たち」として、彼らの消息をずっと辿って捜し続けたのです。無下に放置しておく



191. 高校卒業50周年記念植樹と41期会の記念写真
(平成13年4月14日)

気になれないし、41期会の名簿には必ず、途中で消えて行った仲間たちの名前を記録し残しておりました。

いくら敗戦後の大混乱期とは言え学校側にも、途中で消えて行った旧友たちの転校日時と転校先ぐらいの記録は残っていましたので、それを手掛かりに一生懸命に辿って行きました。161人だった新入生のうち、退学や渡米などを除き、途中で姿を消した者が60人ぐらいです。うち10人が被爆死で、残り50人のうち10人ほどが附属か他校での留年生。そして残った40人ほどが、家族の出身地である高知とか福岡とか大阪へと散って行ったのち、現地の中学校に編入し成人して行った往時の「戦友」たち、という事になる訳です。そこに辿り着くのにも、かなりの苦労が必要でした。

母校に残るわずかな転校記録メモ、記憶力抜群の仲間から聞き出す兄弟やら親戚の手掛かり、古い校舎の教室で隣同士に並んで座った記憶の名前、ニックネーム、出身小学校を示す記章か名札、なんでも手掛かりになるものをまずは探し出し、そこから先は全国の電話帳です。

不思議なことに、ふとしたことから手掛かりが掴めることが多いのです。東京で発行された被爆手記集を読んでいて、そのなかに、「広島市の附属中学校で1年生だった弟が…」なんていう部分に突き当たったら、それはもう躍り上がらんばかりの気持ちになりますね。

平田喜彦君などが典型例ですが、彼は東京の手記集から発見されました。本人も仰天したらしく、正月元日に広島まで飛んで来てくれましたよ。よほど嬉しかったですねえ。消息は簡単に掴めな



192. 悲劇の南門跡に立つ植野(旧姓中澤)克彦君

かった者もありますし、簡単に掴めた者もいますが、敗戦後に消えて行った仲間の半分以上を見つけました。いま手元の記録に残っている発見再会者は、実に38名に上ります。

そのなかで、まことに劇的で幸運な再会、という人が何人か居ます。

うち一人、高知在住の旧姓中澤克彦君。彼は農村動員残留組で広島に残っていて、8月6日当日、附属中学校の校庭で朝の点呼を受けたのち、近くにある学校農園に向かって農耕隊として出動すべく、大学南門を出て2列縦隊で行進をしていた最中に原爆が炸裂します。直接被爆です。千田小学校の近くの曲がり角で被爆し、崩れ落ちた周辺の建物により、一瞬のうちに生き埋めになる、大火傷をする。しかし何とか脱出します。

その場で附属の1年生4人が被爆死するのですが、上級生を含めて15人ほどが脱出します。その脱出した中の一人が中澤君なんですが、誰一人、彼のことを記憶していなかった。ご本人も脱出したものの重傷のため昏倒し、気が付いたら日本は戦争に負けており、場所は大竹市だったという状態。だから被爆直後から行方不明のままでした。その間、何と68年。

2013年、平成25年8月6日、広島平和記念式典に高知市から遺族代表として植野克彦さんが初めて式典に参列しました。そのことが毎日新聞に大きな記事として報じられました。同じく産経新聞には広島市が進めている被爆体験伝承者の養成活動が報じられ、講師として養成活動に従事する私が、往時の附属中学校1年生だったとの紹介記事が掲載されました。この両紙の記事が、中澤君と私とを結びつける要因となったのです。

大阪在住の中澤君のご息子が産経新聞記事を読み、「当時の広島高師附属中学校1年生」という解説記事に眼が止まりました。かねて父から聞いていた事実～原爆被災時に父が通っていた学校名と、同期生らしい1年生の名前が記事に出ているじゃありませんか。即座に電話で父に知らせました。初めて中澤君は、記憶には残ってないが、往時の同期生と思しき人物の氏名を知ったのです。その足で中澤君は広島市に着きます。出迎えた知人にこの話を伝えるとともに、附属の同窓生に新井なる人物が居ないか尋ねます。尋ねられた知人

が即答します。「私も附属の出身であり、新井さんは附属同窓会の重鎮で、良く知っています」。ドンピシャでした。あとは本人同士のコンタクトが残るのみ。と言うことで先ず、尋ねられた知人氏が責任感からでしょう、私へ確認電話を入れて来たのです。そこで一寸した混乱が発生します。

「アカシアの後輩ですが新井さん、被爆時に附属の1年生だった植野克彦さんが高知から来て、明日の慰霊祭に参列されます。新井さんに連絡したいそうです。ご存知でしょうか」

「ええっ」と驚き困惑しました。附属の1年生で植野克彦～思い出せないのです。ウエノ……41期会にウエノ姓は居ません。しかし名前の克彦には、微かに引っ掛かる記憶がある。反問しました。

「ウエノ、という名前の級友は居ません。しかし、カツヒコという名前には微かな記憶があります。もし彼が中澤克彦君であるならば、確かに私たちの同期生です。植野さんの旧姓は中澤ではないか、確かめて貰えませんか」

又もや、ドンピシャでした。仲立ちをしてくれた後輩から、その後に電話回答。

「その通りです。婿養子に入って植野姓になった、旧姓が中澤～中澤克彦さんでした」

植野克彦君、旧姓で呼べば中澤克彦君は、当時、裁判官だったお父さんと、お兄さんと妹さんを原爆で亡くし、お母さんの故郷、高知市へ帰郷していました。直接被爆者であり、原爆犠牲者の遺族でもありました。その資格で初めて2013年8月、広島の平和記念式典に招待され参列したのです。高知から遺族代表として式典に参列することになった、ということが大きく『毎日新聞』で報道されました。その記事を私たちも見ておりました。しかし、植野克彦という名前は誰一人気にも留めていませんでした。

式典が終わってあくる8月7日、所用のため即日、高知に帰っていた中澤君から私へ、待望の電話が掛かって来ました。夜の10時頃です。私が受話器を取りました。

「もしもし」と、彼が言いました。

「新井さんですか」

「はい、新井です」

「植野克彦です」～私は「え？」と言うわけ。

彼は「あ、そうか」という感じで「中澤克彦で

す」と、改めて旧姓を名乗りました。

「初めまして」～と言いかけた私、「じゃあないよね、お久しぶりと言うべきだよ。長かったよなあ、68年ぶりだものなあ」と言い直して笑い合ったのが、中澤君～現在の植野克彦君との最初の会話でした。これが彼の、我々の同期会である「アカシア41期会」の仲間となるキッカケでありました。

彼は、とても喜んでくれました。つまり自分は、附属では既に忘れ去られていた、と思いつ込んでいたのです。広島では、口に出せぬほど酷い目に遭っていたので、広島のことを思いかえすこともなく、広島に行こうとも思っていなかったけれど、このたび、たまたま遺族代表として高知県から選ばれて広島へ行ったがため、附属中学校の仲間と連絡が取れたし、改めて仲間に加えて貰えた、と喜んでくれたのです。何よりも嬉しい再会でした。

そして彼から、ドサッと被爆した8月6日のこと、それから後の生還の記など幾つかの手記と、彼が高知で過ごして来た活動記録、いま現在の状況などの分厚い資料が、これまた分厚いレターパックに詰め込まれて届いたのです。詳しい、奇跡的とも言える被爆体験記も含めて、です。

今度は私から、例の『昭和二十年の記録』と一緒に、広島側の我々がどういうふうにな簿を作り、そのなかに、中澤克彦の名前がどういうふうに残されていたかを知らせました。皆さんにも配布している「近況メッセージ集」も同封して送りました。それらの名簿欄にキッチリ、「中澤克彦」と名前が記載してあり、当初は「消息不明」になっていたはず。現在の41期会名簿には、「植野（旧姓、中澤）克彦」と明記されております。

これらの膨大な資料を送ると、双方から一斉に電話が掛かる。「貰ったぞ」。先方からも「届いたぞ」と来る訳。「俺のこと、覚えていてくれたのか」が彼の第一声ですね。「覚えてくれていたどころか、ずっと俺を捜してくれていたんだって？」

「済まなかった。俺が中澤から植野にかわったということも、どこにも連絡しなかった。附属中学校にも連絡しなかった」

戦後のどさくさで、学校同士の転校という手續自体もキチンとされないまま広島を離れ、高知の学校でも厳しい審査もなく、すんなり受け入れて

くれたから、そのままになってしまった、という経緯がすべて分かり、中澤君、いや植野克彦君は同年11月13日、高知から広島へ文字通りすっ飛んで来ました。私たち41期会は毎月、「二水会」という月例の同期会を開いています。そこに高知から飛び込んで来たのです。

(新聞記事のコピーを出して) 68年ぶりの昔の仲間との再会でした。そのきっかけを作り、感動の再会を特報したのが、この『毎日新聞』の記事ですね。見出しです。「80歳男性、級友は生きていた」「被爆68年、奇跡の再会」「初の証人、手帳申請へ」。写真の二人は中澤君自身と、共にあの瞬間、生き埋めになりながら誰かと一緒に奇跡の脱出を果たしたと記憶していた旧友の中村玄医師です。これが中澤克彦君ですね。こちらが中村玄君で、互いの火傷跡を見せ合っていますが、共に農耕隊として行進中に被爆。倒壊した民家の下敷きになりながら、命からがら抜け出して助かった、言わば「戦友」たちです。

こののち毎年8月6日は、母校で開催される「原爆被爆者慰霊追悼の集い」に高知から馳せつけ、生き残りの私たち41期会の一人として参列してくれます。台風が襲ったときも来てくれました。毎年、彼は必ず姿を見せてくれます。そして式典後の同期の集いにも参加して、嬉しそうな安堵した表情で帰って行くのです。現役の附属中学校1年生への証言講話の会で講師も引き受けて、自身の辛い体験も後輩たちに語り伝えてくれました。現在は高知での数少ない被爆者の一人として、積極的に証言活動を続けております。互いに現在は、



193. 母校で被爆体験を証言する中澤君
(平成23年8月6日)

70年近い間隔を置いて再会を果たした、同期の親友となって被爆の証言などに励んでおります。

以下は、再会直後の2013年8月31日付けで植野克彦君から送られてきた手紙です。

* * *

光陰似箭！ モーレツに暑い夏は、モーレツに忙しい夏になりました。(株) 青花社植野の決算月が6月、申告期限が8月末日、最終は税理士事務所へ頼むのですが、資料は当方が作らねばなりません。ギリギリに持ち込み、期限には間に合い、ホッと一息ついた処です。私の所属するライオンズクラブから、今回の慰霊祭参加についてクラブの会報に原稿を頼まれました。ご存知ないかも知れませんが、ライオンズクラブはクラブ内で政治、宗教にまつはる話題はタブーです。今回のレポートで政治、宗教に触れないなんて、さび抜きのトロを食すようなものだ～と編集委員に悪態をつきながらものにした原稿が以下の通りです。

◆築こう平和の礎 植野(旧姓中澤) 克彦

～68年目の原爆死没者慰霊祭に参加して～

第一章 プロローグ

私の祖父は明治の自由民権運動家。衆議院議員も務めた中澤楠弥太と言います。明治30年代、清国からの留学生の面倒を見ていたそうです。現在、私が中国と関わりを持つのも、何かの縁かも知れません。父の好英は司法官吏で、中四国を転々としておりました。四男三女それぞれ産地が異なっています。1945年8月当時、私は父・長姉・長兄・次兄と広島市大手町八丁目に居住していました。母は幼い次女・三女・四男を連れて山間の町、西城に疎開していたのです。

6日午前8時15分、閃光が走り、当日朝早く郡部へ動員出動していた次兄は難を逃れましたが、残る4名は被爆。私以外は今なお行方不明です。

爆心から1.5km地点で背後から熱線を浴びた私は、幸運にも倒壊家屋の下から脱出。仲間数名で宇品港方面へ逃れ、倒壊だけは免れた病院へ辿りついたのです。

そして夕刻、家を心配して市内に帰る仲間を

追い、私も病院を出たのですが追いつかず、間もなく路上に行き倒れとなりましたが幸運にも負傷者収容に当たっていた兵士二人に見つけれ兵舎に収容されました。

その夜半昏睡状態に陥った私が覚醒したのは、なんと県境の大竹町、戦争は終わっていました。見も知らずの方々の善意で生き残ったのです。

第二章 復興そして繁栄

1945年暮れ、父母の故郷へ移り住みましたが、父方の財産農地は不在地主の線引きで全て買い上げられました。戦後のインフレで土地代金は、またたくまに費消。止む無く母は幼い弟妹を連れ、住み込みで働ける先を求め兵庫県の或る工場の寮母となり、私は次兄と二人、母方の叔父の世話になり高校を卒業。それぞれ地元で職を得たのです。兄は県庁、私は四国銀行です。共に伴侶を得、共に健康で現在に至る幸運を感謝しています。

私の札幌人生（銀行員生活）は14年間で終符。妻の実家の陶器商を継ぐことになりました。時はバブルの勃興期、1982年には、中学校の同期生の誘いで高知ライオンズクラブに入会。1990年には憧れの中国景徳鎮（磁器発祥の地）を訪れました。そのとき知己を得た陶芸家諸氏とは今も変わらず交遊しております。

1998年、高知中央LC25周年記念式典の大会会長の折には、中国蘭協会会長の陳心啓先生を招待することも出来ました。陳心啓先生が主導編纂した植物図鑑全八冊（昭和天皇にも献上）を牧野植物園に贈呈するためでした。全国津々浦々、経済界は活況を呈していました。ヒロシマ〜決して愉快とは言えぬ、その思い出は封印され、引き出す糸口はありませんでした。

第三章 ヒロシマへの回帰

転機は徐々に訪れました。バブル崩壊がもたらした後遺症がやっと小休止状態になった昨年6月、数年間休眠状態にあった広島県日中友好協会が復活。その祝賀会に（高知県日中友好協会の）会長代理で出席、新しい知人を得ました。高校の同期生、広島大学名誉教授（広島市在住）

から「たまには出掛けて来いよ」と言われました。

トラウマからの解放の兆しはありましたが、決定づけたのは8月、福山市在住の知人の講演会に出席して知った主催団体の青年達の活動でした。戦争を知らない若者が23年間に涉り平和集会を続けて来たことを知ったのです。

第四章 朋あり遠方より来たる亦楽しからずや

毎年8月6日の慰霊祭には全国都道府県から遺族代表が1名、招待されることになっています。68年経過した今、自らも被爆体験を持つ遺族は数少なくなり（広島県内に限ればまだ多数）事前公表の慣行の中で数社から取材を受けました。新聞報道の力を実感したことです。

原爆関連の報道が増える8月4日付け、産経新聞に広島高等師範学校附属中学校1年生、新井俊一郎氏云々の記事がありました。

まさしく同期生のはず。申し訳ないことに記憶はありません。全県下から集まる旧制中学の1年生、満足な授業もなかった戦時中の数カ月だったので無理からぬこと、容認の程。

8月5日正午、広島のパスターミナルに到着した私を、先述の団体職員二人が出迎えてくれました。昼食を共にするなか、くだんの新聞記事を示したところ、即座に一人が言いました。

「知っています。母校の大先輩、同窓会の世話人のお一人です。すぐに連絡を取りましょう」

彼は広島大学附属高等学校74回生。私どもは前身の広島高等師範学校附属中学（のちに高校も）の41回生になるようです。

式典終了後、高知で所用のためトンボ返りした私のもとに新井君の電話番号の知らせが入り、8月8日夜10時、電話を入れました。

「やあ、新井です。初めまして……じゃないよな……お久しぶり……長いよなあ……」

68年かけて辿り着いた旧友との会話でした。

メール駄目、PC駄目の化石人間の私に8月26日現在、4度の封書が届きました。取り敢えず手元の同窓会資料とのことですが、その膨大な量、空白の68年、かなり埋められるはずですが、委縮した頭にスンナリという訳にはいかず、苦闘の最中、嬉しく楽しい苦勞です。幸い、娘

が窓口を開いてくれており、続々、直接連絡が入ります。返事は手紙で、ポスト。

第五章 エピローグ

難関と言われた広島高師附中の入試をすり抜けた要領の良さ、今回の原稿終章は、直近の旧友からのメールを借用、ありがとう諸君！
〔高知ライオンズクラブ〕会誌への特別寄稿文

* * *

こうして私たち41期会は、何人もの旧友を捜し出しました。その41期会の「尋ね人探し」運動の経緯と成果とを同窓会の会報『アカシア』に書いて、更なる旧友発見に期待していました。

結果的に今まで38人の仲間を見つけたのですが、うち二人はアメリカに居りました。日系2世だったのですが、アメリカに帰っていることは知っていました。うち一人の森本克明君がアメリカに帰るといふとき、原子砂漠に建てたバラック校舎の前で、英語の田辺昌美先生を囲んで記念写真を撮って送り出したのです。だからアメリカに居ることは分かっていたけど、元気かなと気になっていたところ、下級生から情報が入り、ヒョんな調子で消息が分かったのです。彼は森本克明君という日系2世ですが、なんとアメリカに帰った

昭和23年ごろですが、徴兵されて朝鮮戦争に従軍し、運よく生き残ったのだとか。そういう凄い体験をしていたんですね。

航空郵便で連絡が入り、「原爆手帳を取りたい」というので日本へ飛んで来ました。その経験談も語ってくれました。彼が見つかったのには様々な経緯があるんです。彼にも兄弟がいて、彼の友人にも兄弟が多くて、附属の先輩後輩にも知人が居て、そこからの微かな噂を辿って行って彼に突き当たったのです。手帳は比較的スムーズに取得できました。まだ本人が広島に来なければならなかった時代です。

もう一人の日系2世は徳永道夫君ですが、手掛かりが掴めた時には、ガンのためアメリカで亡くなっていました。

それから次は、先述の平田喜彦君。東京の被爆者団体の機関紙の中にお兄さんが手記を書いていたんです。「俺の弟は附属中学の1年生だったが、危機一髪で助かったのだ」と書いている。その記事を見つけた先輩のドキュメンタリー作家「織井青吾」氏（本名、濱井隆治、39回）は、旭町や大河の時代から私を良く知る上級生だったため、即座に電話をくれました。「おい、新井。お前らの同級生らしいのを見つけたぞ。その兄貴が東京で被爆者団体の機関紙に手記を出している。平田と言う男が兄貴だから聞いてみる」。先述の通り、まさしくドンピシャでした。

（会報『アカシア』全国版485号の記事を示しながら）アメリカの森本克明君はこれですね。「K・モリモト」としています。

こちらは中澤君（植野君）が広島に来てくれた時に広島在住組で大歓迎した集まりの写真。先ほどの新聞写真で、火傷の傷を見せ合っていた場面ですね。

それから、これは平田喜彦君。彼は広島での新年互例会に東京からすっ飛んで来てくれたんです。正月元日に広島市に来て、2日の新年互例会に参加してくれた。集合写真が残っています。小さくて良く見えないけど、細長い紙に、「60年ぶりの再会、歓迎、平田喜彦君」と書いてあります。記念に残してあります。

2017年、平成29年10月2日、かねて旧知の「一中卒業生」の浜田平太郎さんから電話が入り、「あ

被爆68年目の再会 41期会

◆昨年の8月6日
原爆から68年目の夜、41期会の事務局を預かる私（新井俊一郎）の電話がけたまま止まった。
「授業の74回生です。事情があって人を探しています。もしや、被爆時に中学1年生だった41期生は、ウエノカサヒコという方が居られますか？」
「ウエノカサヒコ…その姓の時期は居ないが、老前のカサヒコには覚えがある。その人物は、今なお消息不明のままになっている中澤克彦君では？」
「更に調べて、もうレポート。『そのウエノ氏は、もし不明だが中澤ではないか調べて欲しい。業者に調べて名前がわかった可能性がある。』」
◆ドン・ピシャ！
ほどなくして再び僕が呼ばれてきた回答電話は、ドン・ピシャ、私の複製どおりだった。
「中澤が中澤である植野克彦君は68年前、東千田町の住友ビルで被爆し、半身に大火傷を負ったものの九死に一生を得て高知に隠れ続けた。しかも今回、高知県からの遺族代表として初めて広島市の平和祈念式典に参列していた。」
附守1年生だった中澤君は、父と兄など家族3人を原爆に奪われていたのだ。
◆新聞記事がきっかけ
毎年のことながら8月6日近づくと、新聞各紙はこぞって原爆特集記事掲載する。原爆生き残りの私は、かねてより自身の被爆体験を語り、その伝承者を

集約する事業を支援して勉強会などを開いていた。それをサンライズ新聞が特集記事として掲載。そこには「かつて、附属中学校1年生だった新井俊一郎氏は…」と記されていた。
その記事が、広島へ向かおうとしていた植野の目に留まった。
「最初に記憶は無いが、同じ附属中学校1年生の被爆者～この新井なる人物を思い出せば、68年前に別れた仲間たちと接触できるかも知れない。」
それが、原爆の日の夜、突然私に掛かってきた電話の理由だった。
◆写真入りの記事が
「写込み」の遺族代表の被爆者として初めて広島式典に参列したという事実が、彼の筆写入りで8月7日朝、大きな特集記事となって毎日新聞の紙面を占めた。その記事が、今では私の眼を奪うことになったのである。
◆68年ぶりの再会
7日の深夜、まだ私の電話機が鳴り響いた。中澤君だった。
「やあ、初まして～じゃやないよな、68年ぶりの電話だよな。」
一気呵成、という言葉そのままの会話だった。次いで、被爆から68年という互いの空白を埋める膨大な資料が瀬戸内海を越えて行き来したあけく、11月13日、彼ら41期会の集いの前に中澤君の姿があった。
中澤君からの「本日もって、41期会に仲間入りしたい」との挨拶に対して、田辺に一声。
「いや、68年前から、ずーっと君はワ

被爆68年目に発見～平田喜彦君
（森本克明君）
平成19年
シラの仲間じゃ！」
◆新年互例会にも
高知経済界の重鎮でもある中澤君は、多忙な年末年始を乗り越えて正月2日にも広島を訪れ、41期生組例の新年互例会に参加。これらの出来事は、毎日・朝日新聞の紙面に報じられた。
◆これまでも60年を超えて
被爆60年を迎える頃から、原爆・被爆で去って行った旧友との再会が次々に実現していた。
平成19年の元旦、被爆体験記を手掛かりに、被爆から62年を経て東京在住の平田喜彦君と語り合うことが出来た。その前回は、アメリカのJack・K・モリモト君と約60年ぶりに連絡が取れ、親友の証言により原爆手帳を手に入れることが出来た。
◆今年も？
近づく69期目の原爆の日、更に詳しく、41期生の消息不明者を発見できないものだろうか。

新井俊一郎（41回）



194. 「被爆68年目の再会」
（会報『アカシア』掲載、平成25年）

なた方附属の41回生で、現在、西宮在住の潮田史郎君を知っている。被爆死した潮田玄一君が私と同期の一中3年生で、史郎君は彼の実弟だ。

潮田君のことは、父親同士が旧制「広高」の教授で自宅も近かったことから、神戸在住の岡田渥美君から概要は聞いていましたが、生死も詳細は一切不明のままでした。

さっそく41期会の資料一式を郵送し、同期会への御誘いを同封し、メールアドレスも知らせたところ一挙にメル友となりました。嬉しかったので、翌年の正月2日は、広島での新年互例会に参加してくれました。以後は月例会の「二水会」にも、しばしば飛び込んでくれる仲間となりました。ところが直後、彼を発見したキッカケの浜田平太郎さんが急死。もし間に合わなかったらと無常を痛感させられたものでした。

こうした41期会の旧友尋ね人探しを、幾度となく私は同窓会機関誌の会報『アカシア』へ寄稿しております。自慢話じゃないのです。80歳を超えても私たち41期会世代は、互いを戦友と思っている間柄だ、ということを知って欲しいからです。

附属と言う国立学校はエリート学校じゃなく、戦時中から自由の精神を内包し、独自の判断と行動を容認する独特な校風を伝統とした学校でした。だからこそ、人類初の核被爆と言う稀有で悲惨な出来事をも生き抜いた生徒たちに、軍国主義思想から出た用語としてではなく、共に苦難の戦時下を生き抜いた「戦友」という、独特の仲間意識が生まれて居たという事実を知って欲しいのです。これこそが、真の意味での附属のアカシア魂だ、「アカシア・スピリッツ」だと私たち41期会は信じております。

巷間に、附属は原爆では被害が無かった、との噂と共に、敵前逃亡した、との誹謗中傷が流布されておりました。

後輩たちも皆さん全部が、附属は被爆なんかしていない、と思っていたらしいですね。それどころか、附属は昔から男女共学だった、と自慢する人も居た、とか。

とんでもない、中学校と女学校は戦時中、みな男女別学だったということ、知っていますか。そういう、知られていない戦時下の状況を、こうやって改めて詳しく語り明かしているのです。まず、

本当のことを知って下さい。知る努力をしてください。それが最低限の基本であり基礎なのです。

仲間捜しは今も続いています。残念ながら10人近くが、いまもって消息不明です。敗戦直後のNHKにあった「尋ね人の時間」という番組が、当時、ダントツの人気番組でした。

国民の多くが必死の思いで、この番組を流すラジオにすがりついていました。いま私たち41期会が必死の思いで旧友を探し続けているのと、何かしら通ずるものがあるように感じられてなりません。

附属での原爆忌の式典は、簡素ながら一定の流れを保って執り行われています。式典で歌われる校歌が、旧制時代の校歌だ、ということで分かって戴けるでしょう。

祀られている先輩たち全員が、同じように旧制時代の卒業生と在校生たちだ、という事も同じ理由からです。そうです、附属と言う学校も全国の学校もすべて、1945年8月15日で区切りをつけ、敗戦後はすべて新しい制度の学校として生まれ変わっているのです。物凄く大きな変革です。

その変革の基本が、私たちの母校で執り行われる原爆忌の式典では、明瞭に受け継いで開催されており、式次第も同じ理由から一定のルールのもとに定められています。それを定めたのは私たち41期会と、当時の上級生たちの代表による「慰霊碑建立委員会」です。これは「被爆時在校生の会」が発展的に解散して登場した組織です。その間の実務はすべて41期会が担務しており、「慰霊碑」はアカシア会が建立すると決まっていたのは、実務の全てを私たち41期会の事務担当者がマル受けしておりました。

証言活動への反響

○新井 私の被爆体験の証言講話については、いろんな反応が来ています。青梅小学校のお話はしたと思いますが、実は青梅小学校とは深いつながりがその後もあります。せんだってのお話の中では触れなかった部分に、今回は少し触れさせてください。

最初は、私が『朝日新聞』に投書した記事を社会科の授業で使いたい、ということから始まりました。2006年のことです。2006年11月8日の新聞

の投書を青梅市立第二小学校6年2組の担任の岡田星子先生が目にしてしまいました。もう定年を間近に控えた少しご年配の先生ですが、その先生から朝日新聞の東京本社経由で大阪本社に連絡があり、投書を書いた新井の承認を取りなさい、ということだったので即座にOKを出して、それをそのまま授業に使ったということですね。

11月14日に岡田先生から第一信が来ました。児童からの質問文と返事が欲しいということ。それから若干の感想文ですね。この一部はお見せしたと思います。直ちに岡田先生宛てに例のビデオレターを送ります。記録では62分と書いてある。42分だと思い込んでいた。では、受け取ったほうも困りますよね。送ったビデオレターは11月17日に青梅市の小学校に着きました。一緒に資料もたくさん送りました。そして11月23日に青梅小学校で原爆と平和教育の公開授業を実施して、その場でビデオレターも公開したそうです。

そして12月1日、青梅から手紙が来ます。頂いたビデオ1時間ものを全員で見た。6年2組のみならず、ほかの6年生にも全部見て貰った。それから、そのビデオの一部を、東京の教研集会の「平和と連帯の分科会」にもリポートとして提出した、という報告が届きました。この岡田星子先生は、熱心な教研集会のメンバーだったようです。

12月8日は、実は私が広島市の被爆体験証言ビデオに応募して作品が完成した日ですが、その月の12日に青梅小学校宛てに、『昭和二十年の記録』の1冊とともに、子どもたちに手紙を出しました。すると12月29日にたくさんの手紙が届いたんです。それにも私は肉筆で返事を書きました。岡田先生からの報告の中には、その手紙を持って教室に入っていったら、子どもたちが目ざとく、手紙を見つけて、最前列の子どもが、「あ、シュンちゃんからの手紙だ」と叫んだというぐらいに待ち構えていたらしい。そして、間もなく卒業します。その卒業記念の写真も撮ったので、それも送りますというかたちで、それからいろんなものの交換が始まります。

(送られてきた手紙の入ったフォルダと封筒を出して)これは岡田星子先生が作ってくれたんです。これが、この時に送ってくれた卒業写真。卒業写真を貰いました。そして手紙も来ました。いっ

ぱい感想文やら何かがあります。これはみんなそうなんです。今や私の宝箱です。

岡田先生には、他にも先生方の仲間がいました。その先生方の仲間にも広まって行って、調布市立第五中学校の箱崎作次先生という方からも、被爆者のビデオがあるそうですねと、ぜひ見たいというのでお貸しして見てもらった。そこから、たくさん来ます。それから、井畑晴美先生とか2、3人の先生方がお仲間らしいのですが、その先生方からも同じような要望が来るので、どんどん広がっていきます。そのうちに、広島で教研集会があるから集まろう、ということになるんです。

あくる年の2007年、まず3月に、「新井さん、この卒業していく子どもたちに何かメッセージください」と言われて私は短文を書いて送りました。全員に見て貰うようにね。それを子どもたちは見て、卒業したようです。3月28日に先生から、メッセージを伝えたと連絡が来て、子どもたちが卒業文集を書いたらしいのですが、あちこちに新井さんの名前が出てくる卒業文集が出来たよ、という手紙が来ます。

それから2007年には、附属で開校102周年の記念講演をしました。その後、4月に岡田先生は学校を替わります。青梅市は青梅市ですが、第二小学校から吹上小学校に替わる。その離任式に、この卒業した子どもたちが全部集まって、中学校の制服で駆け付けて来て、第二小学校を去って行く岡田先生を見送ったという感動的な出来事があったのだそうです。

次に8月18日、広島で研究発表会、教研集会がありました。岡田先生がお仲間と一緒に広島に来ます。広島のどこで集会があったのか知りませんが、私のことを、ビデオもろともで発表したのだそうです。私も、このとき初めて岡田先生と出会いました。他の何人かの先生方と一緒に縮景園の中を歩いて、附属中学校まで案内しました。被爆建物である母校の講堂へも案内して、そこにはアカシア会の石井泰行会長からの寄贈で、石井さんの義父でもある奥田元宋画伯の「溪流」をモチーフにした豪華な緞帳が備わっているのですが、その緞帳も見ても貰いましたし、私たちが建立した謝恩碑も見て戴き、附属と41期会の被爆史などを語り合い、互いの親交を深めることが叶いました。

この広島での教研集会で公表された私のことが伝わって、「ヒロシマ青空の会」という被爆証言集を発行し続けていた会が私に関心を抱き、新井という人物が、語り口調の話し言葉で証言を続けているらしいので、この人から証言を聞き出そうということになったのだそうです。活動の本拠である宇品公民館から私に電話が入り、あなたの話を聞いたので録音を取り、それを出版したいというのです。（『遺言ノーモア・ヒロシマ第5集』を示しながら）かくて、これが実現します。つまり、これが実現するに当たっては、青梅小学校との交流があって初めて出来ることです。回り回っての出来事ですね。この本には何人かの人証言が掲載されていますが、おしまいの方に私の名前があります。この第5集が、このグループの活動の最後らしいですね。

そのとき、「青空の会」の代表者から聞いたのですが、この「ノー・モア・ヒロシマ」遺言集を持って幾つかの学校に配って歩いたのだそうですが、「要らない」と拒絶する学校があったそうです。そのことを岡田星子先生に話したら、岡田先生たちも怒っていましたが、それが現実らしいですね。

それから次は、2012年の出来事です。学校から私に手紙が届いたのです。横浜市の中川西中学校。ここは毎年、500人規模で広島に大集団で修学旅行に来るんです。いつも毎回、何故か証言者に私が指名されるんです。しかも500人の生徒は毎年リーガロイヤルホテルに泊まって、大宴会場で一斉に夕食を摂る。

そこへ私が自前のPCとプロジェクターを持ち込んで、スクリーンにパワーポイント映像を投影しながら、夕食を終えたばかりの500人を相手にヒロシマを証言しておりました。

そのなかに、中村勇登君という少年が居たのです。私は証言の中で、今日は私の被爆体験と同時に、広島が二度とあってはならないということ、世界に核兵器なんてものがあつたら人類の平和は永久に来ないということ、核兵器というものは人間には使いこなせるようなものではないんだ、と言いつけさせたあと、必ずヒトコト付け加えます。「私の話を君たちは、今、聞いたところだ。聞いた以上は、聞いた責任があるぞ」、とね。

「私は君たちに話をすると同時に、君たちから



人物風土記

題字は 林文子 横浜市長

●「よこはま子ども国際平和スピーチコンテスト」で市長賞を受賞した

中村 勇登さん
中川西中学校3年 14歳

「よこはま子ども国際平和スピーチコンテスト」で市長賞を受賞した。その後、スピーチの役割を考えた。スピーチの題材として、修学旅行で広島へ行く、被爆を体験した人の話を通して、戦争の悲惨さと「伝える責任」と「伝える責任があるぞ」という言葉を、それを生かす英語力を海外へ伝えること、夢を語ってくれた。

スピーチの題材として、修学旅行で広島へ行く、被爆を体験した人の話を通して、戦争の悲惨さと「伝える責任」と「伝える責任があるぞ」という言葉を、それを生かす英語力を海外へ伝えること、夢を語ってくれた。

スピーチの題材として、修学旅行で広島へ行く、被爆を体験した人の話を通して、戦争の悲惨さと「伝える責任」と「伝える責任があるぞ」という言葉を、それを生かす英語力を海外へ伝えること、夢を語ってくれた。

よこはま子ども国際平和スピーチコンテスト
中川西の中村君が市長賞に
スピーチの題材として、修学旅行で広島へ行く、被爆を体験した人の話を通して、戦争の悲惨さと「伝える責任」と「伝える責任があるぞ」という言葉を、それを生かす英語力を海外へ伝えること、夢を語ってくれた。

195. 「伝える責任」で横浜市長賞を獲得した少年
（『タウンニュース都筑版』平成24年8月23日号）

ご家族の人に、友達に、そして次の世代に伝わって行くことを期待して話をしているんだ。だから、君たちには聞いた責任がある」と強調したんです。

それを重く受け止めて中村勇登君は、横浜市の作文コンクールに「伝える責任」を主題にして応募しました。それが横浜市長賞を獲得したんです。

市長賞を取り、ご褒美なのでしょうが、のちに本人は国連に派遣されたそうです。中村君の希望としては、「自分は広島でこの話を聞いたから、将来、日本人として国連のような国際機関に出て行き、世界の平和に向かって努力をする一員になりたい」と発言したことが、担任の先生からの手紙に書いてあったのです。これには、私の方が感激しましたね。（担当教員からの手紙と新聞記事の写しを示しながら）これは地元の市民雑誌に載った写真付きの記事らしいのですが、引率の先生から早速こういう手紙とともに、記事のコピー

までが送られて来たので、私はこれを大事に保存しております。

青梅小学校と横浜市との、この二件が私にとっては最高に嬉しい反応です。

これまで、山のように感想文や記念品などが届いています。(大きな紙袋を取り出して) 実は、ここにも一袋あります。これも感想文です。また後でご披露しますが、皆さんの足元に三つの紙袋がありますよね。全部で、あの2倍か3倍ぐらいになります。

私は平和記念資料館に相談したのです。大事な感想文集ですからねえ。そうしたら有難いことに、平和記念資料館の資料室で受け入れて下さるというのです。私たち証言者が修学旅行の子どもたちから受け取った貴重な感想文は、証言者が読んだあと全て、平和記念資料館の資料室に寄託すれば、関連資料として永久保存をしてくださるというのです。喜んだ私が早速、ドサッと大量に感想文を寄託したら後日、キチンと目録が出来て、何処の学校で、証言者の誰が何時、何処で、どういう話をした時の感想文だ、という明細まで記録して、いつでも検索できるようにして保存しますと報告が届いたのです。驚き、且つ喜びで胸が一杯になりました。何よりも有難い対応を戴きました。修学旅行の学校も、どうか安心して子供たちの感想文をお届け戴きたいと思います。

現在はコロナ騒動でストップしていますが(紙袋1つとファイル1冊を示して)今は、この2冊しかありません。これは後でゆっくりお話をしますが、少し因縁があるのです。青梅小学校のお話は、これでおしまいにします。こういう経緯が存在し今でも続いております。私たち被爆体験証言者にとって何よりも嬉しいことです。

級友、杳木明君のこと

○新井 (昭和19年3月、5年生時代のスナップ写真を出して)私がお話したいのは、これ、教生の先生が撮った、私たちの最後のスナップ写真です。

マジックペンで囲んであるのが、原爆で死んでいった級友。卒業記念写真などと言う立派なものは貰えませんでした。全員ではない、なぜか「全員集まれーえ」と言っただけなのに、これだけし

か集まらなかった。ここに来ていないのが何人も居ますが、文字どおり、玄関前でのスナップ写真が私たちの実質上の卒業写真になりました。

私たちの名簿を差し上げたと思いますが、男子組・女子組ともに、ずっと名簿には「被爆死、被爆死」という言葉が並びます。

その中でも、これからは少し具体的な話をします。杳木明君と新久和俊君と正木義虎君という、3人の被爆死したクラスメートの話をさせてください。たぶん今回の最後のお話になると思います。

(感想文集を出して)これは、安芸郡府中町の中学校の生徒たちからの感想文集です。各学校、みな似たような体裁ですが、基本の原稿用紙があって、その用紙に感想なり質問なり書き込むようになっているんですね。中には、ダイレクトにハガキをくれた子もいます。

担任の先生に、杳木里栄さんという先生がいます。実は杳木里栄先生は、私の小学校時代の同級生で被爆して行方不明となった杳木明君の姪に当たる方です。その上に里栄先生は、これまで何回も新聞紙上で、叔父である杳木明君について語っていらっしゃるんです。(新聞記事のコピーを出して)これは『中国新聞』ですが、2回にわたって、有名な御幸橋での被爆直後の写真で背中を見せる少年は、明らかに自分の叔父である杳木明に違いないと主張していらっしゃるのです。

まだお母様のご健在の折、この、松重美人さん撮影の被爆直後の御幸橋の写真が発表されます。サンフランシスコ講和条約が締結された直後に、GHQのプレスコードが消滅し、『アサヒグラフ』



196. 県師附属国民学校の級友との、最後の記念写真 (昭和19年)



197. 8月6日当日の御幸橋の写真に写る杳木君
(撮影/松重美人、所有/中国新聞社、
所蔵/日本写真保存センター)

が初めて広島を生々しい写真集を出して世界中に衝撃が走ります。

そのとき、この写真も初めて一般公開され、それをお母さんが見ます。とたんに「あっ、うちの明だ」と声を上げたとか。私たち附属での同級生たち全員も瞬間、「杳木だ」と分かりました。耳が少し両側に突き出していて、頭がムスビ型。どう見ても杳木君に違いない。市立中学校の1年生で東練兵場での農耕作業で出会い、「おーい、元気か。腹減ったのう。何食うたんや」という調子の会話をした級友の一人が、杳木明君です。

凛々しい制服姿の写真は、ご遺族が大事に保管しておられたものです。ところがYouTubeに、ある日、この写真が載ったらしいんです。私の伝承者の宮本リーダーが見つくて、メール添付で送って来ました。この折に初めて私は、杳木里栄さんに出会って詳しい話を聞きました。

(杳木明の肖像、日誌の表紙、石仏の3つ写真を示して) 彼は可愛い坊やだったそうです。彼は杳として行方不明になってしまった。自宅も焼けてしまったのですが、不思議にも焼け跡にポツンと一個、まるで石仏のような、高熱に溶けた物体が残されていたのだそうです。お母さんはずっと、「これは明が仏になって家に帰って来たんだ」と、家の仏壇に大事に供奉祀っていたそうです。いま、それは、姪の理栄さんが受け継いで守り続けているとか。附属東雲国民学校を出て、広島市立中学校1年生で被爆。そのまま75年を経た今なお行方

不明のまま。お母さんや姪御さんが認めるように、被爆直後の御幸橋での実写写真に、僅かに後ろ姿を留めたまま消えた少年、杳木明君。

姪の里栄さんは、叔父である明君の被爆の時の消息を、誰か知らないかというので懸命に尋ね歩いているそうですが、今もって分からないまま。私たち、かつての同級生も何とか探し出したいと願うけれど、特徴ある後ろ姿を歴史的な写真に残したまま消えました。せっかく杳木明君と言う少年が生きていたという存在証明を、少なくとも何物かに、何処かに記し残したいと願いつつ、です。

これはお母さんの肉筆かな。「石仏となりて、わが家に帰る」。昭和43年か。これは、石仏なるものの写真への添え書きでしょうね。

彼は日記を書いていた。それも残っています。先ほど最初に、日記のページがあったと思います。それも全部コピーして、私は里栄さんから貰いました。実は、杳木里栄さんという方は、平和運動の活動家でいらっしゃるのです。こうして活動家としての働き的一方では、叔父に当たる杳木明君の消息を辿りたい。辿れるものなら辿りたいという活動をずっと続けていて、中学校の先生になったと言う人物です。

先日、私に被爆体験の証言を、安芸府中の中学校でお願い出来ませんか、との直接連絡があって、喜んでお引き受けしたら、これだけ沢山の感想文が届いたのです。もちろん彼の遺影は、私たち同期会の手で既に国立祈念館へ登録しておりました。ウサギを抱いた全員の集合写真を使って、同級生からの提供なら受け入れる、とのことなので納めてあります。この立派な制服の写真でないのが申し訳ないけど、可愛い方の写真を提供しました。

感想文が届くと、私は必ず要点をメモ書きして、それから平和記念資料館の資料室に納入するのです。何時の証言だったか、いつ届いたか、いつ返事を出したか、会場は何処だったか、などを記載してから納入します。何時でも誰でも検索可能なようにね。それから、必ず私は学校宛てに礼状を出します。ハガキで申し訳ないのですけど。

証言を始めた初期は、子どもの人数が少なかったもので、一人一人にハガキを書いて出していました。今はもう、多人数になったし、年も取って

しまったし、学校宛てのハガキ礼状一枚だけで、お許しを願っています。

(慶應義塾湘南藤沢中等部の封筒を出して) こういう具合に感想文が届きます。証言をした日、感想文が届いた日、それに対して礼状を出した時、そのほかのメモを書いて、届いた時の封筒のまま、平和記念資料館の資料室に提出するのです。それをすべて資料として管理され、検索可能な状態にして保存・管理して戴いている。そこまでやって戴けると、被爆証言をする私たちとしても、なんとも有難い事です。証言者は多分、みな、そう思っていると思います。このシステムの存在は、私の附属の先輩であり証言者の先輩でもある中西巖さんから教えて戴いたことです。

級友、新久和俊君のこと

○**新井** 新久和俊君のことに進みましょう。新久君は、既にお話し致しましたとおり、私が出汐町、彼が西霞町。直線距離で約100メートルほどの近くに家があるということ。揃って附属東雲国民学校への登下校のリーダー格にあったことなどが親友関係となった理由です。

彼は県立第一中学校へ進学します。新久家としては、予定通りのコースだった模様です。一中では、原爆で亡くなった生徒たちの父兄、ご遺族による手記を、何度か出版しております。その世話人の中の一人、浜田平太郎さん～当時、一中の3年生で被爆して生き残った方ですが、一中の同窓会を仕切っていて、この際もう一度改めて、『星は見ている』ほかの手記集には載らなかった人を中心に、思い出の手記などを集めて出版しようということに踏み切り、それを準備していらっしゃいました。

その方が私に電話をかけてきて、新久和俊君は、『星は見ている』を含めて様々な手記集に詳しい状況などが書かれていないので、彼と君は同級生だということは君の証言から知っているの、彼の被爆状況から自宅での場面など、何か一筆書いてくれないか、という依頼があったのです。

では、というので早速書いて、浜田平太郎さん宛てに提出しました。ところが、その「ハマヘイ」さんが、突然に心不全でお亡くなりになってしまったのです。かくて出版が駄目になり、日の目

を見なかった原稿だけが残りました。

その原稿に私は、被爆直後の状況と共に、後日、偶然にお母さんと本通りで出会って、立ち尽くして、互いに顔を見合わせたまま、ポロッと涙をこぼされたお母さんを見て、私がどうやって姿を消したか覚えてない、というくだりも書いて提出しました。そして、お兄さんとの電話のことも書きました。それを今、じっと大切に持っております。

そういう話も含めて、かつて附属東雲小学校で講演したことがあります。(写真を示しながら)これがその時で、2005年10月29日、学校から正式な要請文が来ました。授業参観ではないけれども、6年生を対象にして、昭和20年に卒業して被爆した先輩から体験談などを聞く会、という催しを開催したいので、卒業生の被爆者として、新井さんに来てお話をして戴きたいという要請です。

実は、教頭の神田和正先生が私の次女の担任だったこともあり、かねてから良く知っていたので、すぐにお引き受けして、ついでに、こういう資料を作って6年生全員に配ったんです。お手製で作りました。まだパソコンが行き渡っていない時代ですから、全部手づくりで、切り貼りをして、(当日の配付資料を示しながら)こういう資料を作って両面印刷ですね。ここに書いたように、昭和20年3月に卒業したけど直後に被爆した。そして、たくさんのクラスメートを失った。県師の附小でも戦争中だったから、こういうふうには、卒業はしたけれども原爆で犠牲になった人たちが多いいんだよ、というので、昔の色々な写真を入れて、みんなに配りました。(当日の配付資料に掲載した写真を示しながら)これは私の家族ですが、これが私の皆実町時代の唯一の写真です。まだ男女共学だから小学校2年生の時の春の運動会のスナップですね。どこかこの辺に私が居るはずですよ。この時にも、新久君のことや、正木君のことも6年生のみんなに、一生懸命にお話をさせて貰いました。

そのなかでも一番大事だったのは、今日お話しする証言の山場になると思うのですが、正木義虎君のことに話を持っていきたいと思っています。

級友、正木義虎君のこと

○**新井** 附属から一中に進学したのは5人います

が、その中で私が一番仲良しだったと言って良いのが正木義虎君です。彼は、弟さんの手記によると、東京師範学校の附属にいたということから、広島師範学校の附属には簡単に転校できるということで、広島に疎開するつもりで昭和19年の秋に移って来たのだそうです。それが我が家の近くだったのです。

なぜ広島かというと、お父さんもお祖父さんも広島出身。しかも、お祖父さんは一中出身。それぞれ海軍の高級将校でした。そういうことで広島に移って来たのですが、あのころは、東京弁の子が広島に移って来ると、言葉遣いが違うのでからかわれたものです。私も初めごろはからかわれました。東京弁の子は正木君以外にも2、3人いましたが、特に正木君は優しく大人しい性格でした。私もどちらかという大人しい性格だし、言葉使いが一緒だとツーカーの関係になるので、すぐ仲良しになったと同時に、家が近かったんです。私は出汐町の700番地で、彼も同じ出汐町の五百何番地だったかな。路地でいうと2、3本西側に彼の家がある。その間に担任の早瀬先生が住んでいる借家がある。そして次の路地角に我が家がある。こうして3人が、近くに並んで住んでいました。

その正木義虎君の家の真ん前を宇品線の線路が走っていて、そこに上大河という駅があり、その駅の向こう側が陸軍被服支廠。少し離れた東側には陸軍兵器支廠もありました。近くの陸軍被服支廠の中には、兵器支廠と同じように、宇品線の線路が引き込まれていました。軍需物資を宇品線まで持ち出して広島港まで運ぶために引き込み線が付いているんですが、その引き込み線が交差している上大河駅の真ん前が正木義虎君の家。だから彼の家は、建物疎開で早い時期に壊されてしまうのです。

街の真ん中に、東西を貫く100メートル幅の大きな空き地を作ろうと言う建物疎開計画は、正式には昭和20年（1945年）の7月ごろから始まったのですが、建物疎開自体は実は早い時期から始まっており、昭和20年に入った5月頃に、私たちは建物疎開の作業に出動した、という記述が日記に残っているのです、その年の春から始まっていた。

正木君の家も、被服廠と言う軍事施設の真ん前にある家だから、早くから狙われていたのではし



198. 正木義虎君一家の集合写真
(昭和20年正月、正木孝虎氏提供)

う。彼が一中への入学が決まったころだから、3月には自宅が取り壊しに遭ったのです。

正木君も、兄弟揃って自宅が壊されるのを立って見ていました。私も見に行きました。物凄い勢いで、日記にあるように兵隊さんや町の人たちが何処からかやって来て、ノコギリで柱をギコギコと切って、ロープを引っかけて大勢が掛け声もろとも引き倒すという具合で、アッという間に正木家は破壊されてしまったのです。だから正木家の一族は追い出された訳です、問答無用で。

東京から広島市の出汐町へ、そして今度は大竹市の隣、本宅のある玖波町へ引っ越すことになった正木家は、多くの家財や蔵書を止む無く処分したそうです。

しかし読書好きの義虎君は、廃棄と決まった蔵書を一冊ずつ丹念に調べ、自分の手元に残したい本を選び出しました。一冊や二冊じゃありません。その量たるや、なんと木箱に5箱も6箱もあったとか。それをみな、広島に検事長として赴任して来たばかりの正木亮叔父様の官舎へ運び入れ、個室として貰った自分の書齋にキチンと図書館のように並べて、嬉しそうに読みふけていたそうです。

そのとき私は、義虎君から一冊の古い日記帳を貰いました。ご家族の誰かが使い残していらしたのでしょう、1930年版のライオン当用日記帳でしたが、ノートが手に入らない時代です。「これで日記の続きを書きなさい」との義虎君の優しい心遣いからの贈り物だったのでしょう。そのまま、私の「昭和20年を記録する日記帳」として原爆を記録し続け、その古い当用日記帳は、仲良しだっ

た正木義虎君の遺品として今も私の手元に大事に保存されております。私の宝物です。

『星は見ている』に、お父上の正木生虎元海軍大佐が書いていらっしゃるように、正木家の一族は玖波の本家に引き揚げることになりましたが、義虎君本人は、入学したばかりの一中へ通学するため広島市に残り、たまたま広島控訴院の検事長として赴任して来た叔父の正木亮さんの官舎に寄留することになりました。

その官舎は上柳町26番地で、幟町中学校の真ん前。現在の市長公舎と同じ位置にあり、当時としては豪邸でありました。

お父上は海軍大佐で皇族附武官として東京に勤務しており、敗戦必至を思わせる風雲急な状況下、皇居内での無線通信本部を担い、多忙な毎日を送って居られました。筆まめな親子だった模様で、沢山の交換文書が残されています。しかも敗戦間際であり、故郷の広島には疎開として戻って来たのですが、此処もどうやら危ないというので、家族は再び実家のある玖波町へ疎開。しかし長男の義虎君だけは県立第一中学校への通学のため、広島市に残ったのです。

正木義虎君は、寄留先の検事長公舎から一中に通学していましたが、被爆直前の一中では、ご承知のことと思いますが、偶数学級・奇数学級で日課が分かれており、当日は義虎君たち偶数学級が学校に残って建物疎開作業へ出動する順番を待つて自習していました。作業までの待ち時間は勉強して過ごし、交代の順番が来ると奇数学級が戻って来て、代わって今度は偶数学級が作業現場に出て行って建物疎開作業に従事する、という勤務体制でした。

第16学級の兒玉光雄君と第14学級の正木義虎君は、互いに組は違うけれど共に偶数学級だったため、ひと教室あいだを置いて兒玉君と正木君はそれぞれの教室で、自習をしながら次の作業出動を待ちました。その頭上600メートルで原爆が炸裂したのです。直下から850メートルの至近距離の被爆でした。

義虎君自身の被爆状況も、兒玉君とほとんど同じだったようです。直上からの強烈な爆圧で押し潰された教室のなかで、兒玉君も正木君も、屋根と棟木のバラバラに砕けた太い木材に挟まれ、破

壊された校舎の破片に押しつぶされ、暗闇のなか、ペシャンコになったのだそうです。

義虎君が被爆直後の状況を語り残しています。意識が戻ったら暗黒の世界。闇雲に思いっきり火事場の馬鹿力で、げんこつを握って天井を突き破ったらガラガラッと屋根瓦が落ちて行って、ヒョイと外に首が出せたのだそうです。

そこから無理矢理に身体を捻って、ずるずると這い出すことが出来ました。急に吐き気がして嘔吐し、半身を抜け出したまま一息ついて気づいたら、すぐ近くまで既に火災が迫っていた。慌てて思い切り半身を乗り出して脱出し、定められていた通り比治山方面へと逃げたそうです。

暗闇と砂ぼこりで比治山の方向が見定められず、暫く迷ったとか。多くの死体と重傷者と火災に遭遇し遮られながら山に辿り着き、いったん、深く掘られていた防空壕に逃れて再び嘔吐します。悪臭や散乱する遺体のためか気分が優れぬまま、比治山の洞窟の中で眠ってしまった模様です。

明るる7日、勢いの弱まった火災を避けながら義虎君は叔父様の官舎焼跡に辿り着き、叔父様の無事と共に従姉の被爆死を知り、実家の玖波へと向かったのです。

焼けた広島町の町から、動き始めた下り列車で西へと向かったのでしょうか。何処をどう辿ったのか詳しくは不明ですが、7日の午後8時ごろ、玖波町の自宅に帰り着いて、広島まで探しに行こうと思いつめていた母上様ほかの家族と再会。「良かったね」と喜び合ったのです。警察で貰ったという下駄を履いて、カランコロンと音を立てながら帰って来たとか。背中の一寸ほどの切り傷以外には、怪我ヒトツない元気な姿だったそうです。

そのあたりのことは、お母さんが克明な手記を残していらっしゃいます。その写しを、私は実弟の孝虎さんから頂戴して大切に保存しています。ここにあります。ご紹介したいと思います。

ほとんど怪我ヒトツなく元気で生還した義虎君も、暫くは近くの祖母宅へ「元気で戻った」と報告に出かける程だったのに、月半ばかり高熱と脱毛、内出血での斑点、嘔吐などの亜急性原爆症を発症して8月29日、午前8時20分、家族に看取られながら亡くなりました。

父の生虎さんは8月14日夜は皇居での当直勤務

についており、その夜の反乱軍による宮城占拠を逸早く外部に無線通報するなどの活躍を経て、敗戦処理に忙殺され、亡き我が子の遺骨への対面も9月21日となってしまいました。

被爆後の死没者の大多数が、正木義虎君と同じように、亜急性原爆症で次々に亡くなって行き、遂にヒロシマは14万人という犠牲者を出したのです。そのほとんどが幼児から老人までの一般市民。

お父上の正木生虎さんが、『星は見ている』の中に長編の手記を残していらっしゃいます。心打たれる名文ですが、御一族は海軍一家です。祖父の正木義太（よしまさ）海軍中将は、日露戦争では青年将校として有名な「旅順港閉塞作戦」に従軍した将軍。父の生虎（いくとら）海軍大佐は、「坂の上の雲」で日露戦争を描いた司馬遼太郎に日本海軍を伝授した博識の名文家。（連載第17回「司馬遼太郎からの手紙『街道をゆく』の友人たちへ」『週刊朝日』平成11年8月6日のコピーを出して）

お子さんたちに、義虎、孝虎、成虎（しげとら）と命名し「タイガーネイビー」と呼ばれるほどの海軍一家だったので、長男の義虎君には当然ながら海軍への道に進んで欲しかったのでしょう。そのことを悔やんだ父上様の一文も残されており、それを讀んだ私たち義虎君の元級友一同は、言葉も出ませんでした。

附属小学校で担任だった早瀬先生は、何故、これほどまで義虎君の運命とご父君の思いに心を寄せていらっしゃるのかは、たぶん私が一番よく理解できる立場にあるのだらうと思っています。

と言うのは、私と義虎君とは、早瀬先生からの示唆により、全く逆の運命を辿ったからです。詳細は既にお話したと思いますが、実は義虎君も初めは、私と同じ附属中学校への進学を薦められていたのです。担任の早瀬先生が「義虎君は附属向きだよ」ということで、そちらを薦めていらしたけれど、お父さんの生虎大佐が、この時はまだ大佐ではなかったでしょうけれども、正木家は代々海軍軍人の一族である。名前にも全員に「虎」の文字が入っている。そのことを海軍中将であった祖父がこよなく誇りとしていた。3番目の男子にも和虎の命名を予定していたけど、女子誕生となったので止む無く和子と命名したほどの入れ込みようだった。それゆえ「タイガーネイビー」と

呼ばれるほどの海軍一家だったから、祖父も一中のOBだということもあり、やはりこの子は附属よりも一中に行かせよう、となったのです。質実剛健など海軍に向いているというので一中に進学させた。かくて義虎君は、一中に進学したがため被爆死してしまった。

お父さんの生虎さんは、進学先を一中と附属の両校のうちから一中を選んだこと、また早瀬先生が附属を勧めていらしたことを忘れることはありませんでした。忘れるどころか、それをずっと重荷として背負っている旨、『星は見ている』の中で明らかにしていらっしゃる。そのことをまた、疎開児童の家庭訪問のため広島に戻っていて被爆し、半身に大火傷を負って文字通り九死に一生を得た早瀬先生も、よくご存知でありました。

早瀬先生が、『星は見ている』の記事から現住所を探り当て、正木生虎さん宛てに出した親書が残されていました。ご出身地の甲立小学校の校長だと文中に読み取れ、消印も昭和48年8月4日と読み取れるので、長く気にかかりつつも機を得ずしてのことと手紙にあります。（手紙のコピーを示しながら）達筆ですよ。

これを実弟の孝虎さんが、ずっと大事に保存しており、このほど実物が見つかったのだと、さっそく私にコピーを送って下さったものです。なぜならば早瀬先生はお父上に慰めの言葉をかけていらっしゃるからです。

「暑中お見舞い申し上げます。また原爆の日がやって来ました。義虎君が原爆で亡くなったということは知って居りましたが、ご両親の住所が分からないので心ならずも本日まで失礼しておりました。『星は見ている』の本が機縁で国泰寺高校に問い合わせたところ、皆さんの住所がわかり、早速、筆をとりました。私も当日被爆し九死に一生を得た一人です。同級生のなか附属中学へ入学した者は元気でやっております。広島市在住の者が数名居りますので時に出会うことがあります。立派な社会人として活躍しております。私は31年から10年間、県庁（教育委員会）に勤めておりました。その頃は、よく上京しておりました。もっと早く消息が分かればお会いできたかもしれないのにと残念です。（後略）」

こういうお手紙を読ませて頂くと、つい、涙が

出て来るのです。亡き子の小学校時代の恩師と父兄との、いつまでも通い合う心の便りではありませんか。

この生虎お父さんと義虎君のことを、私は私の伝承者グループに事細かく話しました。運命というものは、こういうことをやってのけると、ね。

私と正木義虎君とは、まるっきり逆の運命を辿った。私は一中進学を志望していたにもかかわらず、担任の先生から「お前は附中に行け」という示唆があり、父も同意して私は附中に行ったがため生き残ってしまった。

義虎君は逆に、附中に行こうと勧められていたのに、やはり海軍一家であるということから一中に行くことを決めて被爆死した。まるっきり運命は逆に裁いたのです。こういう運命の違いが原爆の広島で起こった。それを象徴するかのように、県師の附小と、高師の附中と、県立一中との間で、私たちのような出来事が起こっていたんです。

だから軽々しく、「運が良くて生き残った」とか、「運が悪かったのだ」などと言って欲しくない、という事を私は伝承者の諸君に強調しています。

生きるか死ぬかの問題が、運命によって分別されるのですか。運命の成り行きと言うけれど、これだけ重い運命が押し掛かっていると、「運命」などという言葉を使うのが恐ろしい。私たちにとって「運が良かった、運が悪かった」という言葉は禁句です。ヒロシマと原爆を知る私たちにとって、これは使えない、使ってはならないコトバです。

(手記のコピーを示して) 義虎君のお母さんが書いた義虎君の最期の場面の手記です。これは書き写したものです。当時、お母さんはザラ紙に鉛筆で書いていらしたそうですが、それを、まずお父さんの生虎さんが筆をとって「義虎の思い出」という母の手記を書き写し始めた。ところが、何故か途中で止まってしまった。

それを続けて弟の孝虎さんが同じように、筆で書き写して行ったものだと、ご本人から聞いています。そのお母さんの筆跡という記録の写しで、8月6日の描写部分だけ載せております。見事に美しく、流れるような筆跡でした。

その、母・正木巴子さんの手記の最初の部分。昭和20年8月6日から部分的にですが、ご紹介し

ましょう。(以下、「義虎の思い出」のコピーを出して、読み上げながら) この写しも、私の伝承者グループ全員に孝虎さんのお許しを得て配布し、広島原爆と母と子の愛と死とを、熟読して読み取るよう指示いたしました。

「思い出。昭和21年3月29日。於玖波町、母とも子記」～母上様は「巴子」と書くんですが、ご本人は平仮名で「とも子」と書いています。

昭和20年8月6日。お母さんの手記です。

* * *

この朝は、いかにも夏らしい、澄み切った雲一つない青空が、午後の暑さを思わせるに充分なお天気でした。3人の子どもを学校に送り出した後、2階で私は米袋の繕いをしておりました。

すると、突然ピカッと鋭く目の前が光りました。驚いて、ひょっと窓から町の橋のほうを見渡すと、ちょうど隣町の大竹に在る潜水学校のトラックが荷物を満載して橋の上を走っていましたので、私は、あの光はきっとトラックに大きなガラスか何か金属が積んであって、それが強い太陽の光を反射して、あんなに物凄く光ったのだらうと思い、また、ご近所の方も騒がないので、いよいよ安心して、また米袋の繕いをしようと思って座りました。

途端に、今度は物凄い大きな音がして、近所へ爆弾が落ちたように思いました。驚いて防空壕へ入ろうと思いましたが、3人の子どもが学校に行っているのに、自分だけ防空壕に入っても意味がないと思い、子どもを学校へ迎えに行こう。それにしても、あの大きな音以来一向に何事もないので、どうしたのだらうなどと考えたりしていましたが、3人の子どもも学校から走って帰って来ました。

* * *

○新井 3人の子ども、というのは孝虎さんと和子さんと成虎さん、この3人のお子さんですね。義虎君ではありません。

* * *

安心して4人で壕へ入りました。それでも一向に何のことも起こらないので壕から出て、平常と同じように子どもの洋服などを

縫っていましたが、夕方近くなって、ようやく広島に空襲があり、しかもだいぶ酷いらしいとのこと。この玖波町から今朝、広島へ勤労奉仕で行った人々の中、誰彼は大火傷をして、今やっとならぬ船で帰って来たことなどを人づてに聞き、これは大変だと思い、広島には義虎がお世話になっている亮叔父様ご一家もあり、そのほか2、3の親戚もあるのに、誰にもお怪我がないようにご無事に逃げたかどうかと大変心配になり出しました。

とにかく義虎等に、早速、玖波へ疎開してくるよう申し伝えましようと思ひ、私はすぐ、正木叔父さまの所のお嬢さん宛てに、広島もだいぶ危なくなってきたようですから、皆さまで玖波へいらっしゃい、という意味の手紙を書いて、義虎の一中でのお友達で、この玖波から通学している岡田さんというお友達をお願いをして、明日、学校で義虎に渡して貰おうと思つて、そのお友達の家へ伺いましたが、その途中の家々から、今朝、勤労奉仕に出た人や広島へお勤めの方が学生さんたちの帰りを心配そうに待ちかねて、戸口から出たり入ったり、心配そうに話し合ったり、中には泣いている人もあったり、また担架を作つて駅へ迎えに行く人もあり、この小さな田舎町を人々は行ったり来たり、大変な騒ぎになっていました。

* * *

○新井 ここで途中を省略します。お母さんは玖波の駅まで迎えに行くけれども義虎君は帰って来ない。一中も二中も全滅で燃えているとの情報が入る。どこかの家では、その一中のお兄さんが帰って来ないと騒いでいる。玖波から船を出して広島へ探しに行ったと聞き、居ても立っても居られず、夜になると、10里先の広島の方角が真っ赤になって恐ろしい勢いで燃えているのが見えた。玖波の町からも良く見えたとの記述があつて、手記が続きます。

* * *

8月7日、此の日も昨日と同じように夏らしいお天気でした。さっそく昨夜うかがつた義虎のお友達のお宅へ御様子を聞きに参りました処、広島市は全市全滅で一中も完全に燃

え尽きて居り、校庭の隅には一年生らしい子供が3人倒れていて、足に火がついて燃えていたので驚いて抱き起こし、胸の名札を見ただけれど夕方で字も読めなかつたし名前を聞いても返事も無かつた。あちこち探してみたけれど何しろ一面に燃えていてどうすることも出来なかつた、とのお話には私は益々心配になり、本当に居ても立っても居られない気持ちでした。早朝から今日も捜索隊のトラックが次々と国道を広島に向かって走って行きます。私も義虎を迎えに広島へ行きたいのは山々ですが、汽車も通っていないし10里の道を往復は出来る自信は無いし、殊に広島へは普通の人は入れて貰えないという事を聞いて急に心細くなって、ますます義虎のことが案じられてきましたので、明日(8日)はどうでも広島へ助けに行こうと決心しました。一日中用のお弁当を持って、義虎のためには一升瓶に水を入れて、トマトも持って、またきつと衰弱しているだろうから背負つて帰るだけの紐も用意して早朝から出掛けよう。どんなにか義虎が喜んでくれるであろうと決心が出来てからは幾らか気も落ち着きましたが、今日一日は心配で、心配で、苦しくて随分長い一日のように思われました。

そして忘れもしません、ちょうど夜の8時ごろ。突然、私の、この落ち着きかけた心を破るような大声で、階下の親戚の金岡さんの奥さまが、『義虎ちゃんが帰つて来ましたよ。まあ、お怪我もなさらないで』と狂喜したように叫ばれましたので、私は飛んで行って、義虎の姿を薄暗い中に眺め、その平生と変わらない様子に、無事だったのだと直感した時は、もう嬉しくて嬉しくて、『まあ、よっちゃん、よく生きて帰つて来れたね』と言つたきり、義虎にすがつて泣き込んでしまいました。昨日からの大心配が、いま急に安心と喜びに変わったのです。この嬉しさは、もう、とてもとても書き表すことも出来ません。義虎は校舎が潰れて下敷きになり、身体は全身が砂に埋まつたそうですが、金剛力で上に突きあげる事を幾度か繰り返していたら、やっとならぬ上が見えるようになったら目前の焔を見て、

必死の力で掻き分けて出て、お墓のなかを夢中で逃げて、比治山の防空壕に入ったそうです。4時ころまで気分が悪くて倒れ少し寝ていた夕方、官舎に帰ったのだそうですが、お友達は沢山、死なれたそうです。頭まで埋まってどうにも出来ないお友達は、苦しい中に『憎い米英をやっつけろ、天皇陛下万歳』と幾度も叫んで死んだ子も、『お母ちゃん』と呼んで泣きながら死んだ子もあり、義虎の話の聞くとほんとうに可哀そうでなりません。こうして暗くなってから義虎は一人で元気に帰って参りました。

* * *

○新井 その後は、無事を知らせるため近くに住む祖母を訪ねたり、水泳をしたり、ブドウを食べたり、お友達と遊んだり、九死に一生を得たという様子で暫くは元気な実家での暮らしが続きます。ところが途中から筆致が変わります。義虎君の体調変化が始まると同時に、手記を筆写する人が、お父さんから孝虎さんに代わるんです。

* * *

8月9日～8月13日まで。この5日間も、やはり食欲がなく、起きると頭がくらくらすると言っておりました。それながら、寝たり起きたりして、お床の中で本ばかり読んでおりました。しかし、それも退屈すると、弟や妹を相手にして、トランプや百人一首、時には将棋をしたりして遊ぶこともありました。(中略)

8月15日、ご詔勅の時には、時間が来ると、ちゃんと起きて制服を着けて、ラジオの前に皆と一緒に座って拝聴しましたが、その時など顔色が青白く、唇も紅色がうせていると私は感じました。

8月19日、朝。東京の主人から小包が届きました。中には主人の今までの日記と、私や子どもたちに宛てた手紙があり、それが文意から察して遺書と感じられるので、皆で今度は東京の主人のことを心配し始めました。

* * *

○新井 実は敗戦の詔勅が発せられる直前、14日の深夜、東京の近衛師団の一部が反乱を起こし、武装兵たちが宮城を一時占拠しました。そのとき

正木生虎海軍大佐は、宮城警備司令部の一員として海軍の無線通信部隊を統括する立場にあり、侵入して来た反乱部隊に気づき、反乱軍の武装部隊に囲まれたなかで密かに、お得意の無線通信を利用して外部の師団司令部に、『反乱軍侵入。宮城が占拠されるという緊急事態発生。近衛師団の出動を乞う』という緊急連絡を発するのです。

これが反乱軍の宮城占拠の第1報として有名になり、この緊急報により程なく14日の朝までには反乱は鎮圧されます。ご本人は後日、俺の唯一の功績かな、と苦笑しながら語ったと伝えられています。そういう敗戦に伴う軍務を処理しており、ご本人は自決する決意でいたそうです。その情報です。

* * *

8月21日。今朝もやはり8度以上の熱で心配しました。このころから頭髮が抜け始めました。それは毛根が全く無くなって、まるでブラシか何かの毛のようで触るとぼろぼろと抜けてくるのに、義虎は『ちょっとも痛くない』と申しますので、禿頭病にでもかかったのではないかしらと心配しまして医者に聞きましたら、空襲に遭った者は皆抜けるけど心配ないと申されますので、禿頭病でないことが分かり、ほっといたしました。

8月22日。朝から40度という高熱。菌茎から出血が始まりました。食欲はますますなくなり、ただ『果物が食べたい、食べたい』と申しますけど、果物は何一つ手に入らず、とうとう亡くなるまで食べさせてやる事が出来なくて、可哀そうでした。それに高熱でも氷も手に入らず、ただ幸いなことに、この家の井戸水が大変冷たいので、たびたび水を取り替えて頭を冷やしてやりました。

8月24日。今日は玖波町で今度の原子爆弾で亡くなられた方々の町葬、葬儀の日でした。義虎の従姉のお姉さんに当たる正木検事長のお嬢さんも学校代表で祀られることになり、叔父さまがお嬢さんのご遺骨を持って玖波に来られ、隣家、隣のお寺でお経をあげていただかれました。私は寝ている義虎に、『お姉ちゃんも、たびたびうちに来られたけど、あれからひと月も経たないのにお骨になって、

お隣のお寺に祀られるようになろうとは思われなかったでしょう。可哀そうにね』と申しましたら、義虎は寝たきりの姿勢で、手すり越しに見えるお寺の屋根を熱っぽい、うるんだ目で見ながら、『僕だって、お母さま、あのお寺に入るかもしれないよ』と言って、かすかに笑ったようでしたが、私はその時、ひやりとして、とても寂しく思いました。

8月26日。朝の冷たいうちなら少しは熱も下がっているかと思って、眠っている義虎に、そっと体温計を挟んでみると、どうぞ少しでも下りて熱が下がってくれますようにと祈るような気持ちで10分間待って、そっと取り出してみますと、水銀は依然として40度まで昇っております。23日に初めて40度に上って以来、夜も昼も40度に上ったまま、下りないのです。がっかりした気持ちで義虎の顔を見て、心淋しうございました。口中からの出血は益々激しくなり、頭と身体に紫の斑点が出来ているのを見て吃驚しました。午後6時頃、口から血の塊のようなものを吐き始め、目覚めると咽喉が痛くて苦しいと申します。だんだん痩せて目が二重瞼の大きな澄んだ瞳になり、鼻も高くなり唇の色は次第に褪せて居りました。

(中略)

8月28日、私が横になってうとうとして居ますと、横で眠っていた義虎は額の手拭いをいきなり取り除けて上半身を起こして私の顔を目近く覗き込み、大きく二重瞼になった眼で『お母様!』と呼びます。『此処に居ますよ』と言って起きると安心したように義虎は横になります。私が横になって重い心で考え込んで、つい泣きかけると、同じような動作で私を覗き込み、『お母さま』と呼びます。また私は脱脂綿を指に巻いて、塩水に浸して、口の中をくるくる拭いてやり、冷たい手拭いで、もうこの時には髪の毛は抜けてしまって、きれいになっている坊主頭を拭いてやり、『さっぱりしたでしょう』とほほ笑みますと、やはり義虎もかすかに笑っていましたが、薄暗い電灯の光に浮かび出されておりました。あとになって思えば、私と共に寝られるのも、

この夜限りだったのです。

ちょうど夜中の2時ごろでした。義虎は『孝ちゃん』と、はっきり呼びました。『おや』と思っていると、また『孝ちゃん』と弟を呼びます。その声は平生、孝虎を呼ぶときとそっくりの、あの懐かしい声なのです。きっと孝虎と遊んでいる夢でも見ているのだらうと、私はやや微笑ましい気持ちでした。しばらくすると『成(しげ)ちゃん』と呼んで、『成ちゃん、駄目じゃないか』と言ったようでしたが、はっきりしません。また、義虎はうわ言で『僕、本門寺のお祖父様のところへ行ったよ』と言っているのを聞き、私はひやりとして思わず、『よっちゃん』と眠っている義虎を呼びましたら、『えっ?』と言って、何も知らないような顔をして、こちらを向きました。私が『いま、どんな夢を見てたの?』と聞きましたら、『お祖父様のところに行ったの』と、真面目な顔で言いました。あの世とこの世を魂が行き来していたのでしょうか。それとも義虎を初孫だと言って、とても可愛がってくださったお祖父様が心配して、途中まで迎えに来てくださったのでしょうか。私はどうしようかと一人で泣いておりました。静かな夜中。考えられるのは東京の主人のことばかりでした。

(中略)

8月29日、義虎の寝ている部屋は2階の8帖の間で、東側には大きな桜の木越しに海が眺められ、義虎は、この部屋の床の間の前に休んでおりました。次の部屋から、朝起きた孝虎が入って来て枕元に座りました。義虎はじーっと孝虎を見ておりましたから私が『これ、誰だか分かる?』と聞きましたら、すぐ『孝ちゃん』と答え、次に『お母さまの顔、わかりますか』と重ねて尋ねますと、『はっきりわかりますよ。なぜ?』と、私が同じようなことを聞くので不思議だというような顔付きでした。これで私は幾らか心が軽くなり、まだまだこんなによく分かっているんだから大丈夫だと思い、手元の病床日記に『29日朝、意識明瞭』と記入し、ほっとしました。

間もなく孝虎が入ってきた1尺ばかり開い

ている襖の方を指して、義虎は『僕、あそこから行くよ』と、うわ言を言いました。目をつぶったまま指差したあの様子は、悲しく、懐かしく、今もはっきり臉に焼き付けられて居ります。目覚めてから、『義っちゃん、どこへ行こうと思ったの?』と聞きましたら、『知りません』と申しました。

朝早くお医者さまの往診があり、熱は39度5分。手や足は冷たく、脈も大変弱っていましたが、意識だけははっきりしていました。

義虎は、違い棚にあった赤玉ブドウ酒を見て、『ブドウ酒ちょうだい』と幾らか小さな声で申しましたので、母がブドウ酒を薄めてくれました。私がガラスの吸い飲みに入れて飲ませてやりました。『そうそう、ブドウ酒でも飲んで元気を出しましょうね』と言いながら、母と入れ替わりに階下に降りました。ついでに顔を洗おうかなと思いながら、何か義虎の傍に居てやりたいような気がして階段を上りかけると、上から母が『義っちゃんが呼んでいますよ』と申しましたので、急いで上がり、義虎の手を握ってやりました。温かみが僅かに残った手を握って、私は本当に心寂しく感じました。

違い棚の上に祖父の写真が飾ってあります。私はそれを指して、『あれは、どなたのお写真か分かりますか』と申しましたら、『お祖父さま』と申しますので、まだよく分かっていると思い、嬉しくなり、義太お祖父さんは、義っちゃんが生まれる前から『男なら良いが』と言って、とても楽しみにしてくださったのよ。義っちゃんが男だったから、ご自分で義虎と付けてくださって、『初孫だ、初孫だ』と言って、よく抱っこしてくださったわと、静かに話してやりました。とても喜んで聞いていました。

義虎は、いつまでもじっと私の顔を見ております。私は心細い自分の気持ちを引き立てるように、にっこり笑って、『義っちゃん、お母さま、分かる?』と申しましたら、心なしか義虎もかすかに笑って、『はい』と小さな声で申しました。もう一度、手をしっかりと握り締めようとした時、義虎は急に力強く体

を弓のように反ってしまいました。私は吃驚して抱きかかえて、『義っちゃん、義っちゃん』と大声で呼びましたが、それきり義虎は再び目を開こうとはしませんでした。私は悲しくて、取り返しのつかないことをしてしまったような気持ちで、義虎の手を合掌させて安らかな姿勢に直し、静かに永遠の眠りにつかされました。時に、午前8時20分でした。

* * *

○新井 こんな長い手記を、巴子お母様が書き残しておられます。2010年8月11日、初めて孝虎さんから写しを送って載せて一読したとき、暫くのあいだ、言葉が出ませんでした。涙も出ず、筆写された一文字一文字を食い入るように睨みつけながら、手記を書いた母である巴子夫人、これを筆写し始めた父である生虎さん、次いで筆写し続けた実弟の孝虎さん、それぞれの方々の心の痛みを噛みしめておりました。これは全編コピーして、私の被爆体験伝承者である全員に配り、「これを熟読せよ」と指示して読んで貰っております。

義虎君は私に、出汐町時代の自宅建物が強制疎開で壊される前、いろいろな物を残してくれました。それが全部、彼の遺品になりました。その遺品の中の一つが私の日記帳です。ちょうど農村動員挺身隊として原村に出動する7月20日のところから、正木義虎君から頂いた古い当用日記帳に書き留めております。巻末の方には、正木家の私的なメモが書き残されたままの日記帳が私の手元に残り、貴重な1945年を記録した日記帳となり、被爆死した正木義虎君の遺品となっております。

証言に託す思い

○新井 戦争、そして原爆というものは、こういう「運命」という言葉一つで片付けられるような軽々しい出来事じゃない、と認識して戴きたい。

「他人事」だと思っているから誰もが無関心になるし、自分には関係ないよと思っているから危機感など失って行くし、そんなこと起こるはずが無いよ、と思っているから「昔の話」で終わってしまうし、諸国での紛争も遠い外国での「他所事」だと思ってしまうから自国での変化に気づかないし、歴史を無視し関心を失った人たちが世の中を動かすようになるから、「歴史が繰り返される」事態に陥

るのです。

すっかり日本人は、危機意識を失いましたね。世界とか人類とか言う、広い視野での視点を失っていますね。

これが有名な、「平和ボケ」現象なのでしょうか。どうか日本の周辺を見回して考えてください。北朝鮮は明白に「米軍基地がある日本は標的だ」とミサイル発射を警告しています。中国も尖閣諸島や台湾海峡で威力の示威行動に出ています。ロシアは世界の核兵器の半分を持ち、堂々と他国領土を実力で自国に併合して更に兵力を強化しています。現在の核兵器は広島型の数十倍の威力を持つそうです。しかも現在は水素爆弾が主流だとか。

水素爆弾の威力を知っていますか。旧ソ連で実験された「ツアーリボンバ」と称する水爆は、なんと広島型原爆の数千倍の威力だとか。ビキニ実験で有名な米国の水爆も、予想をはるかに超えた威力だったため、無事だと思えた周辺海域の日本漁船が被曝し船員が死亡した事実も知っていますか。

つまり、平和(?)だと思い込んでいる日本も、世界の一員です。これだけ危なっかしい世界状況のなかで毎日を過ごしている、という危険性を考えてみたことなど無いのでしょうか。

呑気で居られますか。「人間は過ちを犯しやすい。機械は誤動作を起こす危険性がある」。何度も何度も繰り返しますが、この格言を肝に銘じて欲しいのです。

もっとも危険でありながら、誰もが「あり得ない」と言い放つ偶発核戦争。うっかりミスで始まったら地球も人類も破滅です。生き残れる生物など有り得ません。核戦争には勝者は存在しません。誰が如何にして生き残れるとお思いか。例え生き残った者が居ても、何時間、何日、何カ月、はたして生き延びられることでしょうか。

「歴史は繰り返す」との名言も、です。

1945年と言えば遠い昔のこと。歴史教科書にも小さく載っているだけになったら、ヒロシマ・ナガサキなんて誰も知らなくなってしまうのかなあ。

米国のトルーマン大統領が「これは宇宙の原理を利用した新兵器だ」と自慢してから世界が変わってしまったことなど誰も知らないのかなあ。

私は何時も、「知らなかった」と言うあなたには、

「知らなかったという責任があるのですよ」、と申し上げることにしています。

現代では、調べようと思えば何でもすぐに分かる時代です。知らなければ、知ろうとする努力をすれば良いのです。その努力を怠った責任があなたには在ると私は申しあげます。

ヒロシマでは14万人もの人が原爆によって殺されました。正木義虎君もその一人ですが、同じようにヒロシマでは、6,300人もの中学生、女学生が殺されています。みな正木義虎君と同じような哀しみの中で死んで行ったのです。

それぞれに同じような哀しみが14万人分、あったのです。14万人には14万の未来があったのです。幼いこども達6,300人にも。それぞれ輝かしい未来と素晴らしい人生が待ち受けていたはずです。

一人一人に名前があるように、一人一人に在ったはずの人生が、究極の地獄の兵器によって幼くして奪われてしまったのだという事実を考えてください。私はこのことを、「絶対に嫌だ」という短い言葉で、喚くように子どもたちへ語りかけています。普通よく使われているような、標語みたいな通用語は使いません。生きた言葉しか使わないよう心掛けています。そして、「ヒロシマは地獄だった」と冒頭に言い置いて、「今日は地獄の話をするぞ」と前置きをしてから話を始めることにしています。

ちゃんと会場を埋めている子供たちの眼を見詰めて、その眼に向かって話しかけるのです。一人ずつ順番に、会場の隅から隅へと、ね。

そして、もう一言付け加えます。「これは被爆者本人から、君たちは初めてで、そして最後の、被爆者本人から自分の体験した話を聞くことが出来た子供だよ。被爆者本人から体験談が聞けた最後の世代だぞ」と。

「君たちは、被爆者本人から初めて、ヒロシマがどんな地獄だったのか、どんなに沢山の人たちが殺されたか」。そう、私は「死んでしまった」とは言わないのです。必ず「原爆で殺された」と言います。「どれほど沢山の人たちが無残に殺されてしまったか、という残酷な事実を知って欲しい」と語りかけるのです。

いま皆さんは私から証言を聞いたね。聞いた以上は、聞いたという責任が生まれたのだから、皆

さんは大きくなったら、この言葉を、どうか思い出して欲しい。

広島でお爺ちゃんが、凄い勢いで喋っていたな、あんな話を聞いた覚えがあるな、ということは何処かで思い出して欲しい。立派な大人になってから、その思い出した言葉を、これから先、あなたたちが日本という国を運営して行くとき、何処かで必ず役立てて欲しい、と喚いております。

そしてもう一言、例の有名な格言を持ち出します。「歴史は繰り返す」。そして、もう一つ、それを言い換えるならば「歴史に学ぶ」と。

いま皆さんは、1945年に終わってしまった歴史を学んでいるのだと思うが、あれは歴史として終わってしまったのではなくて、あるとき広島の新井俊一郎という私の体の中で、マザマザと今でも蠢めいているんだ。私が歴史の生き証人として、いま皆さんに話をしているんだよ。こういうふうには、原爆は何年たっても終わっていない。その証拠が皆さんの前にいる私なんだよ、というふうにいつも言って、私自身を生き証人として皆さんの前に晒しております。勇気を持って晒しております。私こそ、文字どおりの生き証人だから、と思って語っているのです。

今回のオーラル・ヒストリーの対象に選ばれたということは、私にとっては身に余る栄誉なので、私自身は「証言」と称しておりますが、他の素晴らしい証言者の方たちとは違って、市井の何でもない入市被爆者の一人として語って参りました。

ただ、広島高師附属中学校の1年生という161人が辿った運命、生き残った者、死んでいった者、それぞれが様々な運命を辿ります。その運命が、日本の、広島、そして世界中の人類にまで影響するものなのだ、ということをお話しておきたいと思ったからなのです。

なぜならば、1945年の8月6日が、それまでの世界の歴史と、それから後の世界の歴史とをガラリと180度変えてしまった、という事実を認識して欲しいのです。つまり、今は原子力時代となりました。原子力時代に事が起こったら、地球も人類も滅びるといふ時代になったという冷厳なる現実を知って欲しいのです。

昔は最前線と銃後と言う、戦場からは遠く離れ

た安全な場所に住む自宅が存在していました。戦争はどこか彼方で起こっている、と言う程度の認識でした。事実、私たちは銃後と表現するのですが、自分の田舎でのんびりと暮らしながら戦争を眺めていることが出来た。

ところが、これからの戦争は、いま住んでいる、我々の生きているこの場所そのものが、全て戦場になります。戦場は英語で「Battlefield」と言います。そこでは誰でもが殺されます。しかし不思議なことに、戦争にも守るべきルールがあるんですね。日米ともに、このルールを守ると誓って国際法を批准しているはずですよ。

ところが、これが大問題なのです。このルールの最大目的は、非戦闘員を害してはならない、という一般市民を守るルールです。日米ともに守っていると云えるのでしょうか。答えは否です。

核兵器というものは戦争をさせないための抑止力と称して、オレは核兵器を持っているから攻めて来んじゃないぞ、と相手を脅す力があると云われています。

でも私は考えます。核兵器を持って居ると脅されたら、脅かされた側だって「俺だって核兵器を持ってやるわい」となり、究極のところ世界中が核兵器を持つことになります。私はいつも言い返すんです。核抑止力を主張するなら全世界が核兵器を持つような時代を招いてしまうぞ、その呼び水になっているんだぞ、そんな抑止力なんぞ危険極まる脅迫だ、逆効果だよね。

その証拠に、身近の北朝鮮があります。中国だってそうです。アジアのあの大陸を共産主義中国にしたくなかったという気持ちが、かつてのアメリカにはあったということが公になっています。中国本土は共産主義中国になりました。北朝鮮は堂々と核兵器を開発しています。ほかにも幾つか、堂々とではないけど、密やかに核兵器を開発している国がある。そういう状態の中で、核兵器は抑止力であるということをお願いしている強大国が幾つかありますが、とんでもないことだと思います。核兵器は国際的に禁止すべき兵器です。毒ガス同様、核兵器は国際法上で禁止されるべきだと思います。

私は、原子力と核兵器なるものは、人間が持つ資格はないと思っています。トルーマン大統領が

使った言葉どおり、宇宙の根源の力を使ったものが核兵器です。宇宙の根源の力である原子力を使って人類が何をしてかしたのか、そんな神をも超える尊大で危険なことを人間に許してはならないし、出来るはずもない。「パンドラの箱を開けたのは誰か」と私は、いつまでも米国を問い詰め続けたいと思って、こうやって証言を続けております。

繰り返しになりますが、ランチャー上で核弾頭を搭載してスタンバイしているミサイルも、それを操作する軍の兵士も、機械は故障し、人間はミスを犯す存在なのです。絶対に安全だと言い切れますか。

核兵器も、同じ原子力を利用している原子力発電所も、危険な事故が多発しています。「アンダーコントロール」などと宣言した日本の首相は、世界でも稀で見事な「嘘つき」総理です。恥を知れと言いたい。

このフクシマ事故で原発も危険だと断定されたのかと思いきや、世界的気象異常に対処するため生き返らせようとの動き再発とか。何をかいわんや、です。

「歴史は繰り返す」の再現かと思われる解釈改憲の成立で、日本は普通の国になった模様ですね。せっかく存在する自衛隊です。地球の反対側にまで出動して、他国の軍隊を救出する戦闘も可能となったのですかね。敗戦後ずっと誰も殺さず、殺されなかった我が国も、遂に普通の国に戻り、自衛隊も普通の軍隊・戦力として衣替えしたのですかねえ。論外です。黙っていたら、更に恐るべき事態に陥る危険性が大と覚えてなりません。

いまこそ全国民で声を上げましょう。守るべきは国民と、その国民を守って来た憲法です。国民に向かって守れと命ずるような憲法は有り得ません。何を勘違いしているのかと問い詰めたいところです。黙って祈っているだけで平和は来ません。声を上げるべきです。

そういう意味で、私を選んで戴いたことへの感謝の気持ちと、これまで語って来た私の思いとが、何らかのお役に立つならば望外の幸せとの望みを掻き立てて、かくも長時間の駄弁を弄してしまいました。この気持ちを汲み取って戴きたいと願います。後世のためにとまって語り終えました。あ

りがとうございます。終わります。

○石田 ありがとうございます。

○新井 ああ、疲れました(笑)。最後に涙が出るんじゃないかと思っていたんですが、いつも正木義虎君の話になると駄目なんです。彼と私とは、思えば全く逆の運命を辿ったように思えてなりません。無二の親友だったのに。

○石田 そうですね。

○新井 済みませんでした。この早瀬完一先生の手記「劫火のあと」も、あの当時の先生方の置かれた立場というものと、(早瀬)先生ご本人の被爆実態も描いていますので是非とも役立ててください。もうご本人が亡くなってしまっていて残念ですが、先生からじっくり話を聞きながら、これは例の修学旅行の時に戴いた手記ですから。

○石田 正木さんのご遺族と文通されていたというのは、やはり戦後も教え子のことを気に掛けておられたんですね。

○新井 そうなんです。いつまでも文通を交わすぐらい、正木義虎君は気になって仕方がない教え子だったんでしょうね。お父上の正木生虎さんも、ずっと心に重荷を抱いたまま亡くなられたと聞いています。実弟の孝虎さんと毎年のように、一中の慰霊祭の日に私は出会っていますから。

さあ、今年、私が出会える状態にあるかどうか問題なんだけど。出会える状態になっていればと願っていますけどね。出会って語るのが、私の一番の…昔話をするようになると老人だそうですが(笑)。まさしく年を取りました。

○石田 一中のあの慰霊祭は、何年ぐらい前から通われているんですか。

○新井 孝虎さんは現役を引かれた後、1970年代の初めから、亡き兄と両親への思いを込めて一中の慰霊祭に参列し始めたそうです。

私が孝虎さんと連絡を取り合ったのは、2005年、平成17年8月に国立原爆死没者追悼平和祈念館への被爆死者の遺影登録が始まったと聞き、同級生から提供されたクラスの集合写真から本人分の映像を抜き出して登録することも可能と聞き、未登録者と既登録者とを調べて正木義虎君が未登録と判明したため、かねて担任の早瀬先生から聞いていた住所に問い合わせ、実弟の孝虎さんから家族の集合写真と本人の写真とを複写のうえ送って戴

いたことに始まります。ときに2006年3月18日でした。

それからは、孝虎さんが慰霊祭参列で広島を訪れた2010年7月25日、帰京前の短時間、ランチタイムを共にしながら懐旧談に耽ったことから私たちの交流が始まり、先ず級友の高田勇君が加わり、そこへ義虎君と同じように偶数学級だったため生還できた兒玉光雄君も加わって、時ならぬ生き残り組4人会談となって行ったのです。その頃になると私と高田君も一中の慰霊祭に参列し、義虎君など小学校時代の級友5人の名前を慰霊碑面に探して撫でるなど、共通の慰霊祭へと変化しておりました。

しかし、ここ2年は私の健康不安から会談が途切れ、兒玉君が死去。今年こそはと思ったら私が7月に手術で入院してしまってオジャン。広島駅前の「ホテル・グランヴィア」の展望ラウンジが定例の会談場ですが、なんとか次年度は、と希望を繋げております。孝虎さんからは毎年、是非会いたいとお招きを戴いておりますので、なんとか次はと、体調を整えて待ち構えている私です。

○石田 今年は本当にコロナで慰霊祭がないかもしれないですね。

○新井 そして私は、8月6日には附属に行きます。附属での慰霊式典には、どなたも来ません。私たちだけです。兒玉光雄君も来てくれたことはありませんでした。彼も私と同じように腎臓ガンだし、加えて血液のガンも患っているし。最初は「俺は切るのを止めた」と言っていたけれども、広大の外来診療棟のロビーで出会った時には「切ることに決めたよ」と言っていました。奥さまもご一緒でね。同時に私も「切ることに決めたよ」と言ったものです。「じゃあ、二人ともOPですな」と言ってね。あのときに、鎌田七男先生から戴いた言葉を兒玉君に伝えればよかったなと思ったんです。例の「ヒッサー口」というのをね。

鎌田先生が私の手術のことを聞いたとき、私に「ヒッサー口」という名言をくださったんです。鹿児島弁で「頑張れや」とか、「負けてたまるか」という意味だそうで、鎌田先生が鹿児島の出身なんですって。私にメールをくださったとき、これまで誰にも話したことがないのだけど、私は引き揚げ者であり、そこで本当に他人には言えない程

の酷い状態を抜け出し生き抜いて日本に帰って来たことと仰った。引き上げの時に何度も、この鹿児島での「ヒッサー口」という言葉を口の中で繰り返して頑張って生き抜いたそうです。鎌田先生は、「だから新井さんも兒玉さんも、ヒッサー口、だよ」と言って励まして下さいました。有難い激励の呪文です。

今、いろんな人から励まされていますので、何とか手術も頑張りたいと思っています。でも主治医の先生が言いました。「こんど頑張るのは、私の方ですからね」と言ってね（笑）。まさしくそうで、「ここまでは頑張ってきた。ここから先は、先生、頼みますよ」と言いました。

では、終わって休みましょう。ご質問は何かありますか。

○石田 私から質問することは特にありません。ありがとうございました。

【追記：このあと2020年7月6日、私は広島大学病院で晩発性転移ガンが発生した左副腎の手術を受けます。一部、ご報告いたしました。直後のCT検査で私の左腎臓頂上部に、腎ガンからの転移ガンが見つかります。術中に傷つけ大出血した膵臓の治療中に、兒玉光雄さんが私と同じ病棟に入院して来ました。

その間に私がNHK広島局に提供した戦時中の日記が、勝手にNHKにより改作・改変・創作されてSNSに投稿され、朝鮮人侮辱表現でネット炎上事件を惹起して大問題となり、NHK会長が謝罪するまでの事態となって私自身も巻き込まれ迷惑を被りました。

のち私は9月16日に退院したものの体調の不安定が続きます。しかし伝承者の私のグループで第二次自主勉強会を続けようとなり、PCを使っているZoom会議システムで私が講座を持ち、PP画像も使って5回にわたる勉強会を成し遂げました。2021年6月、私の伝承者グループ有志が自主的に、2007年制作の古いアナログ方式の私の証言ビデオを、新しくデジタル方式で更新しYouTubeにも公開してくれました。満90歳を迎えようとする私にとって新しく出来あがった証言ビデオは、文字どおり、ラストメッセージとなりました。2022年2月3日記】

あとがき

日常の中の被ばくシリーズ第4集として、新井俊一郎氏のオーラル・ヒストリーを刊行させていただきます。本シリーズは、「世界が学ぶべき単線的な復興ではなく、忘却のなかで再生産される悲惨さでもない、被ばくとともに日常を過ごした人間の記録」を残すことを目的として開始されました（第1集「はじめに」参照）。マスコミ等で取り上げられる被爆体験は、報道の性質上、どうしても世間の耳目を集めやすい悲惨な体験に偏りがちです。しかし被爆体験が一律でないのと同じように、被爆者の人生も一律ではありません。このため被爆体験のもつ意味は、被爆時の体験だけではなく、前後の人生についてもあわせてご証言をいただくことによって、初めて本当の姿が明らかになると考えています。そこで本シリーズでは、証言者の生い立ちから現在にいたるあゆみを記録してきました。

さて、新井様と広島大学文書館の関係は、新井様のご尊父新井嘉之作氏の資料をご寄贈いただいたことに始まります。この時点で私は新井様と面識はなかったのですが、新井様の半生記『軍国少年シュンちゃんのヒロシマ日記 昭和20年1945年』（私家版、平成21年）を目にして、機会があればお話を伺いたいと思っていました。そうしたところ4年前に新井様よりアカシア41期会の資料を寄贈したいというお申し出があり、私が担当となったため初めてお目にかかる機会を得ました。いろいろとお話をするなかで、この機にぜひインタビューをしたいとお伝えしたところ、ご快諾いただきました。

こうして始まったインタビュー自体は円滑に進んだのですが、その後、新井様がガンや肺炎で入院を繰り返されるとともに、新型コロナウイルスの感染拡大で直接の面会を自粛せざるを得ない状況が発生し、本書の編集および校正が大幅に遅れることになりました。こうした幾多の困難を乗り越えて、ようやく新井様のオーラル・ヒストリーを発行することが出来ました。

また、私事ながら、新井様へのインタビューを行っている時、ちょうど私の長男が中学1年生でした。ご証言を聞きながら、戦時中の父親や母親の気持ちを思うと、居たたまれない思いになることが一度ならずありました。本オーラル・ヒストリーが多くの方にとって核兵器による無差別攻撃の悲惨さ、あるいは戦争の不条理さを改めて考えていただく一助となれば、編集担当者としては幸いです。

末筆ながらご証言をいただいた新井様、一緒にインタビューをした広島大学文書館の伊東様、録音の文字起こしを担当されたふみ工房様、原稿の編集に協力してくださったスタッフの坂田様、戈様他にこの場を借りて改めてお礼を申し上げます。

令和4年3月

石田 雅春

広島大学文書館オーラル・ヒストリー事業
「日常のなかの被爆」プロジェクト 第4集

新井俊一郎オーラル・ヒストリー

ヒロシマで被爆全滅を免れた 中学校1年生だった私は 当日入市被爆者です

令和4(2022)年3月30日 初版発行
令和4(2022)年8月30日 初版改訂版発行

著者 新井俊一郎
編集 石田 雅春・伊東かおり
発行 広島大学文書館・75年史編纂室
〒739-8524 東広島市鏡山1-1-1
TEL 082-424-6050 FAX 082-424-6049
印刷 株式会社ニシキプリント

(禁無断転載)

